蒼炎の狩人

サブタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼炎の狩人

【Ｎコード】
Ｎ１３１１Ｗ

【作者名】
サブタス

【あらすじ】
青い空、翠嵐とした山や青く茂った大地がどこまでも続く世界。その雄大な大地には点々と飛び石のように集落が密集し人々は自然と共存するような形とまでは行かないが、豊かで平和で幸せな生活を営んでいた。そんな人々の生活を支えているのが、この雄大な大地に存在する密林や沼地砂漠等の奥深くに生息している飛竜種や牙獣種等を己の鍛えた技や力で狩りその種のさまざまな素材を得る事を仕事としている人々である。彼らの事を人々はモンスターハンター通称ハンターと呼ぶ。彼らのおかげで、つつましながらも人々が

生活していけると言っても過言ではない・・もともとこの狩猟は人々が生活の糧に行われてきたがいつしか、彼らの間に、金銭目的で狩猟を行うもの、地位や名声のために狩猟を行うものが増えていった。そうしたいたずらに狩猟を行うことによって自然の生態系が崩れないよう統括するためにハンター達はハンターズギルドというものを立ち上げ今ではその危機は逃れている。人々の豊かな暮らし、巨万の富、支配の野望、気球船とともに、さまざまな思いを空に交錯させて・・・これはそんな世界のお話である。

感想待ってます（；；）

1節　モンスターハンター（前書き）

この作品はモンスターハンターフロンティアをベースにしたストーリーです。文章はチラシの裏に描いたような稚拙な文章です。作者のモンスターハンターでの勝手な世界解釈や名称づけも含まれますのでそういったのが苦手、嫌という人は読まない方がいいです。

1節　モンスターハンター

多くの人々がハンターとしての生活を営んでいるハンター都市メゼポルタ。このメゼポルタでは今日も多くのハンター達が狩りを行っている。その中の一人でギルドナイトとしての地位を持ちながら気軽に狩猟生活を営んでいる男がいた。

「ふあああ～今日は何のモンスターを狩ろうかな～」

彼の名はジュノ、このメゼポルタで有数の凄腕ハンターの一人である。数多のモンスターを狩り続けこの都市を襲撃してくる古龍を一人で退けてきた豪傑の一人である。

「お！今日はリオレイアが狩猟取引価格が高いな、よし今日はこれを狩猟して一杯やるか！そうと決まれば募集案件はないかな～・・・」

「また自由区で適当に狩猟をおこなっているの？ジュノ？」

「うしろから声はかけるなってギルマスからは注意を受けなかった～？ユニスちゃん？」

注意を受けた女性はあいも変わらず話しかけてくる。

「さっきギルドナイトのブロードが言ってた、たまにはギルド本部に顔を出せと」

彼女はこのメゼポルタの看板受付嬢一人のユニス、このメゼポルタの中で一番人気のある総合クエスト受付嬢だ。しかしそっけない性格なためか口数は少ない、しかしハンターの中の誰かが言っていた

「そのミステリアスな感じがイイ！！ユニスちゃんカワイイ！！」

と、確かに顔は美人だそれは認める。

「俺には俺の狩猟スタイルがあるんだよ～。」

彼女から発せられた言葉を適当に返し男はクエストボードをじっと見つめていた。

しかし広場に張られているクエスト票はみな高難易度のクエストや新しく狩猟対象になったばかりの新種モンスターばかりでリオレイア等のスタンダードなクエは一枚も貼られていなかった。

「やっぱり自由区じゃ無いか～よーし入門区に行ってみるか」

メゼポルタには大きく分けて三つの狩猟区に分かれている一つはまだ駆け出しのハンター達が集う入門区、そしてもう一つが様々なクエスト内容を自由に扱う自由区、そしてハンターがモンスターの素材集めに利用されているのが求人区だ。最近では己の知名度や技術を上げるために利用するハンターも多い。

「んーやっぱ入門区は初々しくていいね～駆け出し時代を思い出すな～」

「ニャニャ！！また来たのかジュノ！！」

「やあ、教官見習いネコ今日も愛くるしいなあ～おい」

そういうとジュノは教官見習い猫の頭をなでた。

「ニャニャ！！ルーキー達の前で頭を撫でるのはやめるニャ！！教官としての威厳が無くなるニャ！！」

「その愛くるしい姿を呪うが良い。ワシャワシャ・・・」「ニャー！！ゴロゴロ・・・」

「あの～・・・」

教官見習いネコの頭を撫でていると背後から声がした。

「はい？」

背後を振り返りその声の人物を確認するとそこには子供のような体躯をしたショートカットの小さなハンターがもじもじと立っていた。

「なんだ。トイレか？公衆トイレなら東のキャラバン広場に行く道の横にあるからそこでするとよい少々にお・・」

「違います・・・その・・・」

「（見た目からしてルーキーだな。防具はバトルシリーズだし武器はサンドフォールか・・まあハチミツくれって言うに違いない。そう言ったら丁重にお断りしよう。）」

「一緒に・・・を狩るの手伝ってくれませんか？」

「え？ごめんもう一回言ってもらえる？最近耳が遠くてね～」

いかんいかん考え事してて肝心な部分を聞きそびれた、まあきっとドスランポスだろう。。

「一緒にリオレイアを狩るの手伝ってくれませんか・・・」

「え！？リオレイア？一緒に狩るのは別に構わないけど君ハンターランクは足りてるの？あれって確かハンターランク８から参加できるはずだけど・・・」

ハンターランク通称ＨＲと言うのはこのメゼポルタでの知名度のようなものでＨＲ１～３１までは下位ハンターＨＲ３１～９９までは上位ハンターＨＲ１００～９９９からは凄腕ハンターとして一応位置づけられている。これは一時期ルーキーのハンターが金銭目的の

ために自分の実力に到底及ばないモンスターを狩りに行く者が続出したためメゼポルタのギルドが設立した独自の制度だ。ギルドの方針としてはまずはＨＲ相応の狩猟をしてもらって経験を積んでもらい上位、凄腕になってもらおうというのがギルドの考えだ。しかし最近ではギルドの仲介を受けずに非公式でクエスト依頼を提供している組織が存在しているらしく、ギルドナイトも手を焼いているのが現状だ。

「坊っちゃんの装備、バトル装備だよね？ってことはまだＨＲ８にも至ってないんじゃない？研修時代に教官に教わらなかった？まずは経験を積んでそして強敵に挑めと。過信や慢心は死に繋がるのがこの世界なんだよ。」

「・・・ＨＲはちゃんと８です・・・でも私ＨＲ１１の友人がレイアによって再起不能にさせられて・・それに私男じゃなくて女です・・・」

「・・・それは気の毒だったね。ごめん色々言いすぎて悪かったよ・・・」

「（私怨か・・・まあそれはこの業界では良くある事だよな・・・だけどまさか女の子だったとはちょっと声高いかな～とは思ってはいたが。）」

最近ではこの子の用に女性でもハンターになる事が多い。その原因の一つとしては狩猟防具のファッショナブル化があるこのファッショナブル化は当時一部のハンターの間で物議をかもしたが現在は沈静化状態にある。

「だったら野良で募集してその友人の敵のリオレイアをボコボコにしてくればいいじゃない。」

「・・・前に野良で募集して友達の敵打ちに行ったら、参加してた男の人に変なことされた・・・だからそれ以来野良の募集はやって

ない・・・」
「あ～・・・そりゃあ災難だったね。そういう事が起こったらちゃんとギルドに報告しなよ。」
「（そういえばブロードが言ってたな。最近狩猟中や狩猟後に暴漢まがいの事をが起きてるからそういうのを発見したら即取り締まれよって。あれは本当だったのか。）」
「でも俺も男なんだけど、どうして俺に声かけたの？もしかしたら君の事襲っちゃうかも知んないのにさ？」
「ネコ・・・」
「ん？」
「教官見習いネコの事すごく可愛がってたから・・・きっとイイ人だと思ったから・・・」
「（なるほど動物好きに悪い奴はいないって考えか。でもアイルーって動物なのか？どっちかって言ったらモンスターじゃないこれ？）」
「うーん、そういうことなら一緒に行ってあげても良いけどただし条件がある。俺はあくまで君のサポートって形で参加するからレイアを狩猟する際での命令や作戦は君が立てる事！これが条件！！できる？」
「（私怨によって間違った方向に信念が曲がって違法な行為に手を染めてしまうのも一応ギルドナイトに席を置いている身としても困るしね。）」
「・・・わかった。やってみる・・・」
「よし！決まりだ！！ちょうど今日はレイアの狩猟取引価格が結構高いんだ～だからお得なんだよ～。」
「（ルーキーと狩るとなると武器は上位位の武器でいいかな。。。しかもサポートだからウーン・・・）」
「あっ！そうだ自己紹介がまだだったね。俺の名前はジュノ。君は？」
「ユーノ・・・」

「ユーノちゃんか！よろしくね」

そう言いながら握手を交わし二人は大衆酒場ギルドに足を運んでいくのだった。

「ゴロゴロ・・・ハッ！！いかん！いかんニャ！！教官に怒られるニャ！ビシッとせニャ！！」

「なあみたかよ今、教官見習いネコがゴロゴロ言ってたぜ。あいつもなんだかんだ偉そーな事言ってやっぱネコなんだな。」

「フフwそうね～ちょっと可愛いかもw」

「そこ！何だ！何が知りたくて何を教えてほしいニャ！」

「いえなんにもありませ～ん♪」

「はあ・・・またなめられたニャ・・・」

1節　モンスターハンター（後書き）

改行の上手い使い方がわかりません（＾＾；
こんな感じで書いていきたいと思いますのでよろしくお願いします。
更新速度は最初のうちなので適当に調節してきます。

2節　大空を駆ける気球船（前書き）

今夏は家の中に出る黒い害虫が全国的に大量発生らしいですね。

2節　大空を駆ける気球船

大衆酒場、ここはいつも様々なハンター達が酒を飲んだり食事を行っている。今日狩猟したモンスターの話題で仲間と食事をとっている者もいれば落胆した表情で酒をちびちび飲んで仲間に愚痴を垂れている者様々だ。また一般人や商人達の出入りも多いなぜならここで狩猟クエストの依頼をギルドに申請しにくるからだ、依頼の内容は商隊の護衛やら個人的なモンスターへの私怨、また意外な事にハンター自身が他のハンターに依頼を申請することもある。

「おい！ジュノ！！今日も腕ずもうで賭けしようぜ！！今日こそは俺が勝つ！！」

「ハッハ―！！また有り金すっからかんになってかあちゃんに尻叩かれたいのか～？」

「ジュノさん、ちょっとラージャンの尻尾取りに行くのを手伝ってくれませんか？」

「わるいね～今日は先約があるんだ～また今度な～。」

いつもの用に何気ない声かけを適当に返して行くとふとユーノがポツリ声をだした。

「羨ましい・・・」

「ハハッ、どこら辺がだい？」

「狩友達が沢山いるところ・・・私友達いないから・・・」

「一度、一緒に狩りをした仲間はみんな友達みたいなもんさ、そうした中で良い狩り友達を作っていくと良い。それにユーノちゃんはもう友達がいないって事はないんじゃない？これから俺と狩猟しにいくんだからさ。」

そういうと彼女の足取りが止まった。

「（へんなこと言ったかな?ウーン・・・）」

「ありがとう・・・」

「おいジュノ!!今日は女連れ込んで酒飲みかい?しかもそんな年はの行かなそうな女引っかけて。フヒヒｗｗ」

「ちがーう!!狩りの手伝いしに行くんだよ!!狩りの!!」

「ドゥフフｗｗそーかい、そーかい。ドゥフフｗｗｗ」

「たく・・・モラルの低い奴だなもう・・・ごめん、なんて言ったんだい?聞き取れなかった。」

「・・・なんでも・・・ない・・・」

「そうか。まあクエストカウンターへ行こう!」

「はぁーい!元気かいジュノさん!!今日もお酒飲みに来たの?ちなみにお酒の酌はしないからね!!」

「わかってるよ、ヒルデちゃん・・・今日は酒を飲みに来たんじゃないんだ。」

彼女の名はヒルデ、彼女もユニスと同じくギルドの人気看板受付嬢だユニスと同じく総合クエストの受付を行っている。ユニスと違うところは元気が溢れているというところか。

「今日はこの子のクエストのサポートをしに来たんだよ。ほら挨拶、挨拶。」

「・・・こんにちは」

ともじもじしながらユーノは挨拶をした。この子はやはり内気な性

格のようだ。その性格から考えて俺に声をかけることはユーノに取って結構勇気のいる行動だったのであろう。

「はぁーい！新人ハンターさん今日はどんなクエストを受けるのかな？今日も元気にバンバン紹介するよ。さぁ！どれにする？」

「えっと・・・この前失敗したリオレイアのクエストをまた受けたい・・」

「え！？ちょっと周りが賑やかで聞き取れなかったよ！ごめんもう一回い・・・」

「最近オルドワ密林の新人クエで戦死者がでて失敗したリオレイアのクエストを受けたいんだそうだ。」

「ああ・・・あの事件は残念だったね・・・そっか君あの時同伴してた子の・・・そんなに仇を討ちたいならクエスト依頼を出してみたらどうかな？君一人であのクエに行かすことはギルドの受付嬢としてできないよ。」

「大丈夫今回は俺がついていく、それなら受けさせてくれるだろ？」

「そっか！それなら安心だね！！オッケ～リオレイアだね。ちょっと待ってて今すぐ狩猟履歴をみてくるから！」

狩猟場では己の気迫とモンスターの気迫同士をぶつけ合うものでもある。それに負けた者はその気迫に押され喰われる弱肉強食の世界であると・・・今回のユーノの友達はきっとレイアの気迫に押されて破れてしまったのだろう。

「ごめんなさい・・・個人的な問題に巻き込んでしまって・・・」

「いや謝んなくても良いよ。それにユーノちゃんを一人で行かすわけには行かないからね～。」

「（それにしても）」

改めてユーノの顔を見るとユーノは薬莢によるススのせいで顔が若

干薄汚れてはいるが整った顔立ちしている。それに他の女性ハンターよりも身長は小さめで愛くるしい、良い男に当たれば守ってあげたくなるタイプだが悪い奴に当たると食べてしまいたくなるタイプだ。

「なに?ジュノ・・・?」

視線に気づいたのかユーノがさっきよりやや大きめな声で話しかけてくる。

「えっ!?ああなんか顔にススがついてるな~と」

そう言われるとユーノは耳を赤くしながら防具の袖でゴシゴシと顔を吹き始めた。

「これで・・・どう・・・?」

「バッチリ取れてるよ!!これで綺麗な顔がさらに綺麗になったね!!!!」

そう言うとユーノはバトルキャップを深くかぶった。どうやら照れているらしい、(まずい何かに覚醒しそうだ・・・)

「おまたせー!ってあれどうしたの二人とも?なんだかぎこちない雰囲気じゃない?」

「いんやーそんなことはないぞー。んで目的地はっと・・・やっぱ密林か」

「うん!今は温暖期だし繁殖期に比べたら比較的凶暴じゃないはずだよ。」

「んじゃあ仇打ちしに行くとしますか~ユーノちゃん?」

「よろしく・・お願いします。」

「よーし、じゃあ気球船の手続きするから気球船ドックに移動してよ！」

そう言いつつ小走りでヒルデは酒場の業務員入口奥へと駆けて行った。

「さて、俺たちもドックに移動しよう。船長どやされるのは勘弁だしね」

ユーノは首をコクっと縦に振りジュノの後ろをついて行った。

気球船内　操舵室

「やっぱり気球船を運転するネコはかわいいな～フフーン♪　ナデナデ」

「くすぐったいからやめてほしいですニャ・・・船長！助けてニャー」

「ジュノさんそろそろ運転に差し支えますからそこらへんでやめてください。他にも船内にはアイルーはたくさんいますから、運転しているアイルーだけは勘弁してください。」

「もうすこしだけ・・ナデナデ」ニャーン！ゴロゴロ

「本部に連絡しますよ？」

「わーたよ、そう本気にしないでよ、ダルカン船長。」

「わかれば良いのです。わかれば」

ダルカン船長。このメゼポルタの気球船技師の一人で多くのハンター達を様々な狩猟場に送り届けてきたベテランの気球船技師であり俺のアイルーアタックを止められる数少ない人々の内の一人でもある。。。

「あと小一時間で目的地のオルドワ密林に到着します。ジュノさん上陸の準備の方をお願いします。」
「はい、はーい。しっかしやっぱ早いね～気球船は陸路をつかって何日も竜車に揺られてた頃とは大違いだよ。」
「これもギルドによる古代文明の技術の解析のおかげです。」

メゼポルタに所属する多くのハンター達は主にこの気球船を利用して狩猟場へと行く。
数年前までは竜車に乗って何日もかけて目的の狩猟場へと行っていたが各遺跡に眠る古代文明の関連の書物や物発見、解析していくうちに古代文明の技術の再現化が発展し今に至るという訳だ。しかしまだまだ解析されていない古代文明の技術も沢山あるしこの技術は一般の人々にはあまり緩和されてはいないので辺境の村へ行く場合は竜車や徒歩で行くしかないのが現状だ。理由の一つとしては空路がまだ未開拓ということと空路を行く際に飛竜種や古龍種に船が落とされる危険性があるからだ。もちろん陸路を行く場合もその危険性を伴うのも同じである。

「こうやってどんどん便利になって終いにはボタン一つで飯が出てくる世界になるのかね～」
そう独り言をつぶやくとジュノはハンター控室へと向かった。

気球船内　ハンター控室
控室に入るとユーノは船内の微弱な揺れの中入念にサンドフォールの整備を行っていた。通常ハンターの武器の整備は武器工房の親方とそのお弟子さん達が入念に整備を行ってくれている。しかも料金は頂かないという高サービス。そして無料の割にはあまりにも丁寧な整備のせいか、多くのハンター達はろくに武器の点検も行わず狩

猟場へと赴くのが大半である。つまりは親方達の武器整備は絶大な信頼受けているのである。しかし親方達も人の子なので武器の整備不良が出ることも極めて稀に起こる。その整備不良がもし狩猟中に起こったらハンターにとって死活問題となる。そういった時の怒りの矛先は武器工房へダイレクトに伝わるので、そのプレッシャーの影響もあってか丁寧な整備を心がけているのだろう、まあハンター養成学校で配られる各武器の教科書や武器関連の雑誌にも整備はなるべく自分で行おうと教えられてはいるが・・・

「偉いね～ちゃんと到着前に自分で整備するなんて。正にハンターの鏡だね。」

「この前に買った武器の専門書にハンターは自分で整備ができて一人前って載ってたから・・・」

気づくと俺は彼女の頭を撫でていた。なんだかこの子は小柄な体格のせいかアイルーに通じる可愛さがある。　神様・・どうやら俺の中で何かが覚醒したようです。。。

「俺も見習って到着まで武器の整備をしておくか～。あっそれで作戦とかはちゃんと考えた？」そう彼女に聞くと彼女懐からメモ用紙を持ち出し絵に描いて今回のレイア狩猟作戦の説明を始めた。

「・・・まずジュノは近接だから前衛の役割をしてもらう・・・ジュノの双剣でレイアのヘイトを稼いでもらいながら私常にレイアの死角に入りつつ麻痺系統の状態異常弾を撃ち込む・・・そしてレイアの行動が鈍ったら通常弾をレイアの弱点部位に打ち込む・・・後はその繰り返しで行こうと思う・・・」

「（驚いた、この子まだルーキーなのにしっかり狩猟用語を理解してるし、作戦もここまでしっかりと立てることができるなんて・・・この子見た目によらず、できる子なのかも知れない・・・）」

「ジュノ・・・？なにか作戦おかしかった・・・？」
「いや！すごいしっかりした作戦だったから関心してたんだよ。すごいな君は～ルーキーだとはとても思えないよ！いつも作戦の立案をしてたのかい？」
「いや・・・今回が初めて・・・」
「ほんとに！？そりゃあすごいぞ。君には作戦立案の素質があるのかもね～。」

そう言いつつ頭を撫でてやるとユーノはまたバトルキャップを深く被り照れ隠しを始めた。

（神様俺は今日すごい逸材を発見したのかもしれません・・・いろんな意味で。）

そんなことを考えていると気球船の微弱な揺れが収まった、どうやら目的地のオルドワ密林についたようである。揺れの収まりと同時にドアがノックされ控室のドアが開かれ船員アイルーが部屋に入ってきた。

「ジュノさん、ユーノさん。本船は目的地のオルドワ密林に到着いたしましたので上陸の方お願いいたしますニャ。」

「はい・・・」
「りょうか～い。」

今回の狩猟ではどんな事が起こるのか、どんな発見があるのか、そんなことを考えつつ気分の高揚を抑えつつ僕達はオルドワ密林へと上陸した。

2節　大空を駆ける気球船（後書き）

モンハンのモンスターの名前の由来って言うのを調べてみるといろいろと面白いことがわかりますよ。

3節　密林を駆ける陸戦女王（前書き）

間違えて前書きの部分に本文を投下してしまったｏｒｚ

3節　密林を駆ける陸戦女王

オルドワ密林へ上陸すると船に乗り合わせていたギルドの専属アイルーがベースキャンプの建設を行っていた。このギルド専属のアイルーたちは救護の役目も担っているためもし狩猟場で負傷したり気絶しても安心してハンターをベースキャンプに運び的確な処置をしてくれるハンターに負けづ劣らずの勇敢な存在である。

「相変わらず働き者だな～その姿がまた可愛いんだよな～ネコは。」

と言いつつジュノもベースキャンプの設営の手伝いにかかった。いくらギルド専属のアイルーとは言えやはりネコはネコやれることには限度があるしやらせっぱなしだと申し訳ない。

「よし。こんなもんで良いだろう。」

ものの十分もしないうちにベースキャンプは完成した。

「ではハンターさん。僕達はここでサボっ・・・ニャー！待機してるので安心して行ってらっしゃいですニャ！！」

「まあ、サボってもいいからピンチの時には必ずきてくれよ。」

「ミャー仕事仕事～ニャ～」

「おっし、マイトレプーギ―も出動させたし、それじゃあ密林の海岸線をそってレイヤがよく現れれる離島の遺跡跡へと行こう。」

「うん・・・わかった。」

「あ、ちょっとまった！狩りに行く前に大事なことを言っておく。」

ジュノはそう言うと海岸線へ向かうユーノに声をかけた。

「死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな。この三つさえ守れればハンター生活どうにかなる。約束してくれるかな？」

ジュノがそう言うとユーノ小さく首を縦に振った。

「よし、じゃあ今度こそ出発だ！」

オルドワ密林　海岸線

海岸線を歩いているとぽつぽつと赤い物体が見えてきた。
「温暖期での海岸線はよくヤオザミが出現する。やつらは普段砂地にでて餌をもくもくと食べているが海岸線を歩いているとハンターを見つめると執拗に攻撃してくる。やつらを倒しつつ離島へと行こう。」
「うん・・・わかった・・・」
そう言いユーノはライトボウガンに弾薬を装填し目の前にいるヤオザミに向けて駆けだした。
『シュー！ギギチ！！』
どうやらヤオザミもユーノの存在に気づいたらしく、威嚇のポーズを取りユーノに向かって駆けだしてきた。
ユーノもそれに気付いたのか一定の距離を取りつつヤオザミに通常弾を撃ち込んでいく。
「（射撃のセンスはまあ普通だな）」
そう感じつつジュノもユーノに奇襲をかけようとしているヤオザミに近づきを双剣でヤオザミの甲殻を刻んでいく。なにがおきたか分からず絶命していくヤオザミ達、気づくと双剣の切れ味が落ちていたので、すかさず砥石で武器を研磨するためにポーチから砥石を取り出し武器を研磨するために腰を落とす。すると突然ユーノの足元付近からから砂埃が舞い始めた。
「（やばい、奇襲しに来るな、しかもユーノは気が付いてない・・・）」
そうヤオザミは地中からの奇襲攻撃も得意とするモンスターなのである。
「ユーノ！！右に回避！！」
「「！！」」
そう彼女に叫んだが既に時遅し、ヤオザミに足元をすくわれ態勢を崩してしまった。
「くっ・・」
そう言いつつユーノは今にも覆いかぶさるように両爪を大きく振り

上げたヤオザミにあわてて標準を合わせボウガンで通常弾の速射を行おうとした次の瞬間。

≪シュ・・・ザシュ！！！！≫

何かが投げられる音と刺さる音が聞こえたと同時にヤオザミはユーノに倒れ込むように絶命した。

「え・・・」

最初は何が起きたかよくわからなかった。しかし落ち着いてよく見るとヤオザミの背中の甲殻に深く双剣の片方が喰い込んでいた。

「いやぁ～間に合ってよかった。危なかったね、ユーノちゃん？」

そう瞬間的に間に合わないと悟ったジュノが研磨の終わった片方の双剣をユーノに襲いかかるヤオザミに投てきしたのである、まるで投げナイフのように。

「・・・・・」

「大丈夫？ユーノ？」

まだ事の整理がついてないのか立ち上がれないユーノに覆いかぶさるヤオザミを退かしユーノに手を指しのべた。

「これくらいでへばってちゃこの先、あやういな～それに危ないと思ったら逃げろとさっき言ったばかりじゃないか。」

「ごめんなさい・・・」

（まずい、また言いすぎたか・・・）

「まあ奇襲だったし仕方ない部分もある。人間だれしも失敗はあるもんだから次頑張ればいいさ。んで立てる？」

「まだちょっと・・・無理かも・・・」

「そうかーじゃあここで休憩でもしよう！肉焼き祭り開始～」

この時ユーノは奇襲のことで腰を抜かしたのもあるがもっと驚いたのはこの男の正確な投てき技術とその狩猟技術だった。

「（凄腕のハンターの中には確かに人間離れしているハンターもいると聞いたけど、まさかここまでなんて・・・いやこの人はその中

でも屈指の人物なのかもしれない・・・だとしたら私はなんて人に声をかけてしまったのだろう・・・）」
「「上手に焼けました！！！！！！！！」」
「「ヒッ！！」」
「ああごめんごめん、急に大声だして、はいこれユーノちゃんの分の焼肉ね。」
「あ・・ありがとう・・・。」
そんな複雑な思いを胸の奥にしまいつつユーノは手渡された焼肉を食べ始めた・・・

オルドワ密林　海岸部中腹
「いやあーいつ来てもこの海岸部中腹の景色はサイコーだね。カニや虫さえいなければの話だけど・・・ねッ！！！」
そう口ずさみながらヤオザミやランゴスタをユーノとともに駆逐していく。
「あの海岸線をたどった先に見えるの小さな離島によくレイアは来るんだよ～ユーノちゃん。」
そう言うとユーノはじっと離島を見据える。
「大丈夫？緊張してるならまず深呼吸だ！」
そう言うとユーノは静かにスーと深呼吸をはじめた。
「大丈夫・・・今度はがんばる・・・。」
「ハッハーその息だ。」
そう言うとユーノの肩をぽんぽんと叩き離島への海岸線をわたる。
すると、突然大きな鳴き声が聞こえ。大きな影が二人の頭上を通り過ぎて行った。
「お！ちょうど離島の別荘に女王様がついたようだ。準備はいいかい、ユーノちゃん？」

「大丈夫・・・今度はジュノとの約束ちゃんと守るね・・・」

「よーし、じゃあしゃれた海の別荘へ殴り込みだ～イェー！！！」
そう言うとジュノはスタスタと駆けていった。
「（大丈夫、今度こそ負けない・・・）」
秘めたる思いを胸にしまいユーノはジュノの後を追いかけるのであった。

オルドワ密林　離島部
　リオレイア、別称雌火竜。飛竜種の代表格の一つで主に地上で生活することから「陸の女王」とも呼ばれている。尻尾に毒を持ち火竜の名の通り火球をはなつ。

「おっいたいた。（しかも下位にしては結構でかいな・・）今は食事中みたいだし絶好の奇襲のチャンス！」
そこに佇んでいたリオレイアはジュノの思ったとおり下位にしては大きく翼爪が両端破壊されていたが、脚も通常見かけるレイアよりも筋肉が引き締まっており正に陸の女王たる風格であった。
「・・・その前に作戦の再確認をしま・・・」
「俺が奴のヘイトを稼ぎつつユーノちゃんが麻痺系統の状態異常弾を撃ち込みつつ奴の行動が鈍ったらユーノちゃんは奴の弱点部位を通常弾を撃ち込むの繰り返し・・・でしょ？」
「そう・・・じゃあ行こ・・・」
そう言うとジュノはレイヤに向かって駆けて行った。すると相手も気づいたのかこちらを向き咆哮を上げる。ジュノはレイアの足に向かって駆けていく、その強靭な脚の自由を奪おうというのが彼の狙いだ。
「（まずはこの強靭な脚を何とかしよう。）」
ザシュ！！ザシュ！！

彼が女王の脚を切り刻んでいる間ユーノは的確に麻痺弾をリオレイアに確実に打ち込んで行く。
レイアも遠方からの攻撃に気付いたのか火球をユーノ向けてはなってくる。しかしユーノはそれを察知し横へ回避をしつつ麻痺弾を撃ち込んで行く。するとレイアの行動が鈍り始めた麻痺状態に入ったのである。
「（確実に死角に入ってレイアに気配を悟られないようにしなくちゃ・・・。）」
そう思いユーノはレイアの後ろに回り込みがら空きになっている弱点部位に通常弾を撃ち込んでいく。
しかし相手もハンターと同じように生命をかけて戦っている。まずは一番脅威ではない存在を悟ったのかユーノに向かって突進をしかける。
「（来る！）」
ユーノも気配を察したのかレイアの突進を回避する。レイアの突進は虚しくもはずれ大地に体を投げ出す状態で転ぶ。
「ハッハー！！これを待ってた！！」

そう言うとジュノは鬼人化状態になりレイアの脚に向けて双剣を恐ろしい速度で繰り返し突き刺しそして回転切りを加える。その姿はまるで舞い踊るように・・・
その光景に見とれつつも着実にユーノは麻痺弾を撃ち込んでいく。
するとレイアの息遣いがどんどん弱くなっているのにユーノは気づいた。
「（おかしい、いくらこの人がすごい人だってわかってもあまりにも弱るのが早すぎる。）」
そうおもってユーノはレイアの様子を少し距離を置き観察するとレイアの脚が紫色にそまっているのがわかった。
「（まさかあの人の双剣には毒が仕込んであるの！？）」

「おっレイアの異変に気づくとは、やるねー。」
そう声が聞こえると辺り一面が白く光った。そうジュノは閃光玉を倒れているレイアに向かって投げたのである。
「この双剣はローゼンツァーンと言ってね、棘竜っていうモンスターの猛毒が刃にしみ込んであるんだ。俺のお気に入りの双剣の一つなんだよ。」
そう前方から声がするとそこには持っている武器の説明を丁寧に行っているジュノが居た。
「（なんて人なんだろう・・・これが凄腕ハンターなの・・？）」
そうユーノは思っているとリオレイアが脚を引きずりながらジュノの近くまで迫ってきている事に気付いたそして最後の抵抗か渾身の力を込めつつ後ずさり始めた。
「（あれは・・・あの時の・・）」
「「ジュノさん！後ろ！！」」
「お？」
ジュノの声がした瞬間にレイアは後方に宙返りし毒を含む尻尾をジュノに向かって叩きつけた。
サマーソルト、そうハンター達から呼ばれている攻撃は当たれば下位ハンターにとって死に直結する。
レイアの咆哮ともに羽音が広がるなかユーノは膝を付き絶望していた。また知り合いを失ってしまったという現実に打ちのめされていた。
「（私・・・また守れなかった・・また一人に・・・やっぱり私は仲間を不幸にする死神なのかもしれない・・・それならここであの飛竜に・・・）」
ボキ！！！ブシャー！！！！
レイアの放ったサマーソルトによって巻き起こった砂煙りの中鈍い音ともに何かが切断される音が聞こえた。

「ヒュー！！今のは危なかった、危うく当たるところだったわ。」
声の主のした方向をみると、そこには砂埃の中今切断された尻尾を手に持ちたたずんでいるジュノの姿があった。
「ごめんごめん、驚かせちゃって。それにいざって時、大きい声ちゃんと出せるのね君ってちょっと安心したよ。」
そう言うと激痛に中咆哮し地面をのたうちまわるレイア傍らジュノは尻尾をユーノに向かって放り投げた。
「休憩するのはまだ早いよ。あっ！あとで剥ぐと良いよそれ。」
そう言うとジュノは双剣をしまいレイアに背を向けユーノの顔を見て話しかけた。
「さて俺の仕事はこれで終わり。後は君の仕事だ。最後のとどめは自分で刺すんだね。」
「・・・ハイ！！」
そう言うとユーノはライトボウガンに弾薬を装填しトリガーに手を掛けてリオレイアに向かって駆けていく。
「（この人がここまでしてくれたんだ、後は自分でやらなきゃ。）」
激痛の中のた打ち回っていたレイアは脚を引きづりつつもユーノに向けて火球を飛ばしてくるしかしユーノはそれ察知し回避をしつつ弱点部位に弾丸を撃ち込み続ける。
「（絶対に、勝たなきゃ・・・）」
すると身の危険をさっしたのかレイアが脚を引きづりながらユーノとは逆方向へと歩き出した。
「（逃がさない・・・！）」
そう心の中でつぶやくとユーノは徹甲榴弾を装填しレイアに向けて撃ち込んだ。着弾と共に徹甲榴弾の炸裂音がオルドワ密林に響き渡り。陸の女王はその身を大地に沈めた。

3節　密林を駆ける陸戦女王（後書き）

登場人物の心の中の声っていうのでしょうか、そういうのを表記するとき
「（ほにゃらら）」って表記してますが伝わっているのでしょうか？ちょっと不安です。

4節　友の死を乗り越えて（前書き）

主にワードで書いているためところどころ変な改行になっているかもしれません。

4節　友の死を乗り越えて

オルドワ密林　ベースキャンプ

「ニャ！！お疲れ様ですニャー！！」
「お～サボってないなー関心関心。」

そう言うとジュノはギルドネコの頭をなでまわしはじめた。ユーノはギルドネコが設置したベットの上にうつむき加減に座っていた

「あ～癒される～・・・やっぱアイルーは良いなぁ～ユーノちゃん知ってる？どこかの村のギルドじゃあアイルーが一緒に狩りに行ってくれるって話なんだよ～。」
「そうなんですか・・・」
「そうなんだよ～メゼポルタでもそれやらないかな～確かにプーギ―もかわいいちゃかわいいけどやっぱアイルーには敵わないよね～」
「そう・・・ですね・・・」

ユーノはさっきよりも覇気のない相槌をうった。

「フーム・・・よし！！」

そう言うとジュノはアイルーを撫でるのをやめユーノの座って居るベットに向かって行った。

「まだ帰りの気球船が来るまで時間もあることだしちょっと散歩しよう！！散歩！！」
そう言うとユーノはゆっくりと顔を上げた。
「この密林にはちょっと詳しくてね～お勧めスポットがあるからそ

こまで散歩しよう！」
「わかりました・・・」

そう言うとユーノはゆっくりと立ち上がりジュノの後ろに付いて行った。

オルドワ密林　丘　最頂部
丘を登りきるとそこには密林に隣接する海が一望できる場所が広がっていた。時刻は夕刻太陽は沈みかけ海はオレンジに染まっている。

「すごい・・・」
「そうでしょ～ここからみる海の景色は最高なんだよ～」

そう言うと二人はその場に座り込んでしばらく地平線を眺めた。

「私・・・友達の仇のあのレイアが憎くて仕方がありませんでした。だから何としてもあのレイアを倒したくて・・・あなたを利用しました。あなたがメゼポルタで有名な事も全部知ってました。私・・・あのレイアを狩れば強くなれるとおもってました。また一歩ハンターとして強くなれると思ってたんです。でもなんだか変なんです。私なんだか強くなった気がしない・・・・」
「どうしたら・・・どうしたら仲間を守れるほどにつよくなれるんですか・・・？私は早く力が欲しいんです。」

「私怨ごときで強くなろうなれるんだった全ハンターがそうしてる。それに焦って強くなったとしてもそれは新の強さじゃない、まがいものの強さだ。」

「・・・・」

「それに君は友達思いの優しく強い女の子だと俺は思ってる。確かに仲間を助けられなかったのは君の力不足かもしれない、でも自分の身も守れない奴が無理をして相手を守ろうとしてもロクなことにならない、身を犠牲にして助けるなんてことは最悪の下賤さ、仲間を助けるなんてことは一人前に自分の身を守れる奴がするもんだ。」
「君はまだこの世界に入ったばかりだ、これからもまた仲間ができ共に今回の用に強大なモンスターを相手にする時が来るかもしれない。その時までに生きのびて仲間の背中を守れるくらいに強くなればいい。焦ることなんてないんだよ」

そう言うとジュノはユーノの肩に手を乗せこう言った

「ゆっくりと強くなればいい。歩くように呼吸するように。」

「・・・はい。私・・・間違ってたんですね・・・」
「ああ、間違ってる。でもその間違いを二度と犯さなきゃ良いだけの話さ、ルーキー。」

「そろそろ気球船が来る時間だ、行こう。アイルーたちが俺たちの事探してるかもしれないし。」
「・・・はい・・・」

夕陽の光がまぶしくてよくわからなかったが彼女は泣いているようだった。それが仲間に対しての謝罪の意味なのかそれとも、自分の間違いに気付いた自分の愚かさに泣いていたのかは俺には知る由もない。

帰りの気球船に乗っている間彼女は一言もしゃべらなかった。でも行きの時比べて何か重しが取れたような顔をしていた。俺は今一人のハンターが強くなった瞬間を見ていたのかもしれない。

メゼポルタ　気球船ドック
「じゃあジュノさん、ユーノさん。お疲れ様でしたニャ！！」

「お～う。お疲れ～」

「お疲れ様でした・・」

「じゃあユーノちゃんお疲れ。悪いおじさんに声かけられない内に早く帰りなよ～。」
そう言うとジュノは気球船ドック出口へと歩き出した。すると後方から声がした。

「あの・・・私強くなります！！いつかあなたの背中を守れるほどずっとずっと強く！！」

「そっか、がんばれよ。早く強くなって酒の一杯でも奢ってくれ。じゃ・・・」

「・・・はい！！ありがとうございました！！あの・・・報酬の素材忘れてますよ？」
「やるよ」
「え・・・」
「何か問題でもある？俺がそうしたいんだ。本来ハンター同士の素材の横流しは禁止されてるが、まあ俺の素性は君も知ってるだろ、もみ消すさ。それでもいやだったらそこら辺で拾ったことにしとけ。君の好きにすればいいさ。」

そう言うと再び歩き出した。

「あの！またあえますか！？」

彼に問いかけると彼は手を上にひらひらさせながら気球船ドックを後にした。

4節　友の死を乗り越えて（後書き）

主人公がチートすぎですね。3節に出てきたローゼンツァーンはモンスターハンターフロンティアに出てくる筆者もお気に入りの武器です。見た目がカッコいいんですよ～

5節　ギルドナイトのお仕事（前書き）

この物語はモンスターハンターフロンティア（※ＭＨＦ）の世界観をベースにした物語なので、ＭＨＦのＮＰＣ達が良く出てきます。ＮＰＣの性格を良く考えて書いてますが、人によってはＮＰＣの印象が崩れちゃうかもしれません。

5節　ギルドナイトのお仕事

メゼポルタ　マイハウス

「うーむ、アルティ山に古龍が出現と女性ハンターを狙った暴漢さわぎ再びか・・・」

新人ハンターユーノとの狩りの後ジュノはまっすぐマイハウスへ帰った。酒場に行くとなんとなく面倒な事が起こる気がしたからである。

「しかし話題が尽きないねえ～こりゃあギルドナイトの連中も大変だわ～。」

そう雑誌を広げてベット上で寝ころんでいると彼のマイハウスに近づく物があった。それは給仕アイルーでさえ気づかないほど気配を消して彼の近くまで迫っていた。

「なんの用だ?トイレ借りに来たなら左奥の扉だよ。」

「ジュノ先輩・・・さすがですね、俺の気配に気づくとはいつ気づいたのですか?」

「酒場にお前が隠れて居る時から気づいていたさ、加齢臭がしたんでね。んでなんの用だい?ブロード?」

そう言うと男は帽子を脱ぎ素顔を露わにした。

「そんなに臭うんですか、俺の加齢臭?まだ３０代なんだが・・・」

「冗談に決まってるでしょ。そんなに真に受けるとこっちもなんか申し訳なくなるからそう言うのはテキトーに流しておくものなんだ

よ。」

「そうか・・・わかりました。」

彼の名前はブロード、ここ数か月前に迎撃拠点を襲った謎の龍をレジェンドラスタと共に撃退しその龍の角をギルドに提供しのちにその龍の生態を解明に尽力を注いだ功績を称えられギルドナイトとなった大剣使いのハンターだ。ＨＲ１００余りでギルドナイトになったばかりなのでまだまだ狩猟としての経験は若いがその度胸と大剣の腕は謎の龍撃退の際に同伴していたレジェンドラスタのお墨つきである。

「それよりも先輩耳にしていると思いますが最近このメゼポルタ内での暴漢騒ぎの件ですが今日もその暴漢騒ぎがあったようです。今度の被害者は一般市民の女性で女性の証言によると犯人は頭にバケツみたいな防具を被っていたらしい証言を元に本ギルドに登録済みのハンターという犯行とみて囮捜査を行うことにしたそうです。」

「バケツって言うとハイメタＵヘルムか?神聖なるバケツ装備に泥塗るたあ、良い度胸してるじゃないか。その暴漢魔、許すまじだな。」

「そうですね。でその囮捜査を俺達が行うことになりました。」

「えっ・・・捜査を行うのは別に良いけどさ、囮はどうするの囮は?おっさんの女装は見るくらいなら。食材屋の店番やってるデブのババアを囮にした方がマシだろう・・・・」

「なぜ、俺が囮役と決まっているのだ・・・大剣で頭割るぞ・・・囮の方は大丈夫です。俺に良い考えがあります。だからすぐ支度してください。」

「ほい。わかりました。いやあできる後輩を持つといいねえこっち

は楽チンだよ。ちょっと待ってて。」フフン～♪

「はあ・・・どうしてこの人はギルドナイトの籍を追われないのだろう。」

メゼポルタ　ラスタ酒場

ラスタ酒場とはハンター同士が自分の分身をほかのハンターの分身と契約しあう酒場である。ラスタは分身本人が不在の時やクエストに参加していない時にギルドから送り出され、狩猟場に同行させるシステムと成っている。この自分の分身を作るという技術は古代文明によって解明された技術によってメゼポルタに登録されているハンター自身の遺伝子情報を取り出しそしてその遺伝子を培養し各ハンターに一人ずつ与えられる。しかしハンター自身を完全にコピーされるわけではなく、必要最低限の狩猟技術程度しかコピーされない、そしてラスタには会話能力全くないが、意思表示くらいの知能は持ち合わせているのが現状だ。何をされても全く声を上げないことを良いことに影ではストレス発散の為にラスタに酷い事をするハンターも中にはいる。もちろん酒場としての機能もしている。

「なるほどラスタを囮にするのか、でも残念だね。ラスタは囮役ができるような知能は持ち合わせてないじゃない？」

「確かに通常のラスタはそんな賢い事は出来ないですね。通常のラスタなら。」

「そうかレジェンドラスタの資格を持つ女性ハンターを囮に使うのか！」

「そのとおり。さすが先輩ですね。」

「いや～ははっ。でも彼女達忙しいんじゃない？ハンターと契約を結んでる子もいるだろうし。」

「その点は大丈夫です。ギルドの要請によって一部のレジェンドラスタをフリーの状態にしてもらっています。」

「えぐい事するな～上も・・まあ人命が掛かっているし仕方ないか～」

レジェンドラスタ、それはギルドによる過酷な試験を達成しえたものにしか与えない称号で多くのハンター達の憧れの的である。その超絶的な狩猟技術は凄腕ハンター達の技量をはるかに上回り多くのハンター達を支えている存在でもある。中にはレジェンドラスタに憧れてハンターになる一般市民も多い。レジェンドラスタの中にはファンクラブまでも持っているレジェンドラスタも存在しておりメゼポルタで発行されている雑誌、週刊狩り通などで自前の特集ページや持っている者やグラビアを飾るレジェンドラスタもいる。

「んで、これが今回のギルドが選出した囮担当候補達か。」

「ウス！なんだか暴漢が出回ってるみたいだね！！そんな不届きな奴は僕が退治してあげるよ！！！砲撃２連発だ！！！しかも拡散でね！！！！！！！！！」

「そうです。この３人です。」

「ねえ！！僕も手伝うよ！！！この日々の狩猟の鍛錬で鍛えてあるこの筋肉で・・・って、こらーっ！ちゃんと話を聞いてくれよ！いや聞いてください！！切実に！！！」

「ねえ、ブロードさんなんか顔付近がすげえ暑苦しいんだけど、ねえ」

「・・・気のせいです」

「なんだよ!!君達冷めてるな・・・もっと熱くなれよ・・・!!!熱い血を煮えた」

ブゥン!!!

目の前にいた熱い物体が遥か後方へ吹き飛ばされた。

「うるせーぞ!タイゾウ!アタイの大剣術で＊＊＊＊行きにしてやろうかッ!あんたはお呼びじゃないのよ!」

「ぶぁい・・・ずいません・・・」

「それで私達にどのようなご用命でしょうか。」

「わざわざ忙しい中集まってくれてすまなかったリア、フラウ、ナターシャ」

今回の囮作戦で囮役を行う彼女達三人は見た目は可憐な女性だが一度狩りとなるとその姿は正に戦場を舞う天使のごとく飛び回りモンスターを駆逐する。そんな彼女達ならもし暴漢による非常事態が起こっても冷静に対処してくれるはずだとそうブロードは思っていた。

「やっほ〜ブロード昨日ぶり〜。」

「やあフラウ。仕事はちゃんとこなしてるかい?」

「もちろんだよ〜ボクの仕事に手抜きなんてないよぅ〜それは一番よくブロードがしってるでしょ〜」

「ははっそれもそうだな。」

しかしブロードはフラウ以外のレジェンドハンターの性格は把握していなかった。

「ではジュノ先輩この三人の中から一人選出してください。」

「えっ俺がやるの!?こういう繊細なお仕事はブロードさんの方が～・・・」

「こういう繊細なお仕事だからこそ経験豊富な先輩の意見を尊重したいんです」

「ヒュー!!持ち上げても何もでないかならな～。う～ん」

そう言うとジュノは思考しはじめた。

「（まずリアは駄目だな、暴漢に遭遇したら検挙するまえに暴漢を＊＊＊＊するのが目に見えてるしな～ナターシャは・・・・）」

「なによ?私の美貌にみとれてるの?まあそうよね私はこの中で一番う」

「（まあ却下だな色々な意味で・・・となると残りはフラウちゃんだけどドジっ子だしブロードと恋仲っぽいからもしものことがあったらブロードがいてもたってもいられなくなるだろうし）」

「・・・つくしく至高のレジェンドラス・・」

「なあ、そう言えばフローラちゃんはなんでこの中にいないんだ?彼女こそ完璧だろうしっかりしてるし。」

「彼女はこのメゼポルタで一番人気のレジェンドラスタで多くのハンターが予約待ちの状態なのでギルドももし彼女の身に何かあったら多くの男性ハンターが一揆を起こす可能性を懸念したらしく要請を断念したそうです。」

「まあ、そうだよな～・・・」

「ちょっと!!!私の話聞いてる!?」

「うるさいな～ちょっと黙っとけ、そんなことばっかしてると立派なレジェンドラスタだったお前の親父さんが泣くぞ。」
「なによ！まったく・・・」
再び思考をはじめる。
「（となるとちょっと心配だけど）」
「フラウちゃん。囮役頼めるかな？」
「大丈夫！ボクに任せてよ！しっかり仕事するよ～」
「ははっ！期待してるよ。」

「嫌な役押し付けてすまないなフラウ・・・」
「大丈夫大丈夫！もしもの時があったらあのときみたいにちゃんと守ってねブロード。」
「ああ・・わかってるさ。」

「なんかあそこらへんほんわかしてるの私の気のせいかしら？」
「いや。気のせいじゃないとおもうね・・・」

こうして囮役は決定された。後はどんな作戦を練ったものか・・・よく吟味しなくてはならないなぜなら今回の事件はハンターの今後の信用問題に関わる大きな事件だ。ギルドナイトに籍を置くものとしてジュノは久しぶりに頭を悩ませるのであった。

「ねえ！君！！ガンランサーだろ！！！僕と同じだね！！！どうだい！！！！一緒に僕と豪快な狩りをして熱くなろうよ！！！！！」

「やっぱ暑苦しいわ・・・この酒場・・・」

5節　ギルドナイトのお仕事（後書き）

オリジナルキャラとＭＨＦのＮＰＣキャラの紹介ももう少し話が進んでからしたいと思います。

6節　適材適所な性格（前書き）

フラウのふわふわした感じを表現するのに苦労しました。文才がほしいです・・・あと絵心も欲しいですね。私はぶりぶりざえもんと星のカービィ位しか上手く書けませんから。

6節　適材適所な性格

メゼポルタ　商業区域　レアン通り

メゼポルタは在住している多くの人間がハンターとして生活を営んでいるが普通の人々も商業等を営みそこに隣接する住民区で生活をしている。この商業区域では主に狩猟以外での生活に必要な店が立ち並んでいてメゼポルタで狩猟生活を行う、ハンターもよく立ち寄ることが多い。因みに一般ハンターが商業区域に立ち入る際はもちろん武器の所持は許されてはいない。ギルドナイトの場合は特例で武器の携帯を許されているといっても狩猟用の武器ではなく通常のレイピアだが。

「あっ、可愛い服が売ってる～ブロード、ボクちょっと見てきていい？」

「フラウ・・・今日は遊びに来たんじゃない捜査のために商業区に来たんだ。そういうのはまた今度にしよう。」

「まあいいじゃないか。ここで今回の囮捜査用の服買ってこうぜ。フラウちゃん行こうぜ～」

「うん♪行こう行こう～」

「あ！！ちょっとー！！まったく・・・」

服屋に入るとさっそくフラウがめぼしい服を見つけたらしく店員に話しかけて試着室に入るところだった。

「しかしこうして見るとそこら辺にいる普通の女の子だよな～レジェンドラスタとは思えない。」

「ホントにそうですね。」

そんな適当な会話をしつつフラウがお気に入りの服を選び終えるのを待っていた。
しかし女性の買い物はなぜこんなにも長いのであろうか。

「いらっしゃいませ!!プレゼント用に何かお探しですか?」
「いや。連れの服選びを待ってるだけだ。」
「おっ、店員さん可愛いね~店しまったらどう?遊びに行かない!?」
「ありがとうございます!!当店ではそういったお誘いはすべて断らせていただいております!」
「あっそう・・・そっちの方の警備も万全ってわけね・・・おいブロード!!俺はちょっと店で人通りの少なそうな通り調べてくっから、お前はそこでフラウちゃんと服選びでもしてろ。」
「待ってください。俺も一緒に人通りの少ない通りの聞き込みに出ます。」
「良いって良いって。最近お前にばっか仕事押し付けてたからなこうやってフラウちゃんと二人で買い物すんの久々だろ。ここでポイント稼いでろ。」
「何のポイントですか何の!?」
「ポイントってそりゃあ、あれだよ。センスあふれる頼れる彼氏ポイントに決まってんだろ。じゃあ服選び終わったら店の外で待機してろよ。これは先輩からの命令だ。じゃあな頑張れよ。」

そう言うとジュノは店の外へと出て行った。

「あ、ちょっと待ってくださいジュノ先輩!!」
「おまたせ~どうブロード似合う?ってあれジュノさんは~?」
「ああ聞き込みに行ってくるって店を出て行ったよ。俺達はここで待機だそうだ。」
「そっか~じゃあもっと色々な服選んじゃおっと♪ねえこれなんか

どうかな～？」
「ああ、いいんじゃないか。」

「さてと・・・聞き込み聞き込みっと。すいませ～ んちょっといいですか～」

（さて、あらかたの聞き込みも済んだし二人の時間もう十分作ってやったことだしそろそろ戻るか～。ブロードのやつ経験値どれくらい稼いだかな～）

ドン
考え事をして歩いていたせいか男性と肩が当たってしまった。

「失礼。」
「おうこちらこそ失礼～」
「（今の男ハイメタUだったな、まあバケツ戦士は沢山いるしな・・・）」

「あっ。ジュノさん遅～い。」
「なに言ってんだ、空気呼んで二人の時間を多く取ってやろうとワザと遅く来てやったんだよ。んで二人で選んだ可愛い服をお兄さんにもみせてくれよ。」
「えへへ～ありがと。これが選んだ服だよ～」

フラウが選んだ服は女性用狩猟防具のヒーラRシリーズをアレンジされて作られた。ゴスロリぽい服だった。

「これ、ブロードに選んでもらったんだよぅ～ふふ～ん♪」
「なるほどお前はこういうのが趣味なんだなブロード。」
「凛々しくて良いと思いまして・・・それで先輩聞き込みの方は」
「ああ、商業区域の東の方に住民たちもあまり通らない通りがあるって聞いて下見してきたが良い感じの通りだった。それとその通りの近くの住民の家の了解も得て俺達が見張るための場所も確保しておいたからさっそく行こうぜ。」
「そうですか。ではさっそく向かいましょう。」
「暴漢退治にレッツゴー♪」
「ちょっと待ったフラウちゃん。君はハンターや住民たちに顔が知られすぎている。だからこれを身につけるんだ。」

そう言うとジュノはフラウに向けてリアンハットをアレンジして作られた白い帽子を手渡した。

「俺からのプレゼントだ。」
「あっ帽子だ～しかも花のコサージュもついてるぅ～ありがとねジュノさん」
そうフラウは言うと両端で結ってあるアクラコサージュを外し帽子をかぶった。
「ねえねえ、似合う似合う～？」
「おう、９０点だな。」
「え～残りの１０点はどこに行ったの～」
「作戦成功したら残りの１０点分やるよ。」
「なるほど～了解、ボクレジェンドラスタの誇りをかけてがんばるね！！」

そう言うと二人を連れて商業地区の東の方へと歩いて行った。

「大丈夫でしょうか。フラウの奴・・・」

「お前が信じなくてどうするよ。彼氏だろ？」
「違いますよきっと、フラウはそんな風には思ってませんよ。それに俺おっさんだし。」
「おい～もっと自信もてよ。ここは大人の男の魅力で女なんて何とかなるもんだって。」
「なんですか？大人の魅力って？」
「それは今度酒場でゆっくり講釈してやるよ。それよりしっかり見てみろよな。俺は狩り通しっかり見てっから。ハイメタU装備してるやつが来たら言えよ。」

そう言うとジュノは寝転がりながらメゼポルタで発刊されている雑誌の一つの週刊狩り通を読み始めた。フラウは相変わらずフニフニしながら通りを巡回すること一時間がたとうとしていたすると。

「！先輩来ました。ハイメタUシリーズの男がこんなにも早く表れるなんて・・・・」
「まあまて、手を出してフラウが助けてを求めたら奴の逃げ場を塞ぐぞ、いいな。」
「はい！」

ハイメタUが現れてから二時間がたとうとしていた。相手は一向にフラウに襲いかからないがある変化があった。

「先輩あいつ時間が立つにつれて装備外して歩いてるんですが・・・・」
「あれはな、ああやって気を高めてるんだよ。よく漫画の昆虫王者オウビートが本気出すと角装！！！って声出して変身するだろ？きっとそれだよ。うん」
「なんですかそれオウビートって防具のことですか？」
「お前、昆虫王者オウビート知らねえの！？今度漫画貸してやっか

ら見とけはまるから。」
そんな事を行っているとついにハイメタUの男は頭装備のみ残してフラウに襲いかかった。
「！！！」
「おとなしくしろ！！！」

口に布を当てられ徐々に身動きが取れなくなるフラウ、布は赤く染まっている点からあの布にはモンスター用の捕獲用麻酔薬がしみ込ませてあるようだ。こうなってはレジェンドラスタといえど一溜まりもない。

「ふん、おとなしくなったか。どれこの女はどんな味かねェ・・・へへ」

「くっフラウっ！！」
「おおい、まてよブロード！！」
「そこまでだ！！！ギルドナイトだお前の犯行はじっくり見させてもらった。これよりお前の身柄を拘束する！！」

そう言うと男は気だるそうにブロードの居る方向へ振り返る。

「けっ！ギルドの犬か来いよ相手してやる」

男ははぎとり用のナイフをチラつかせ威嚇してくる。

「裸同然のお前に何ができる行くぞ！！」

ブロードはレイピアを抜き男に向かって駆けだした。火花を散らす程の激しい剣戟が続く、しばらくすると男は攻撃に体術も組み込んで来た。

徐々に劣勢になっていくブロード。

「（こいつふざけた格好をしてるのになんて強いんだ。凄腕ハンターの中でも上位に位置するもの戦い方じゃないか）」

「おらおら！！！考え事してる暇があるなら、もっと行くぞ！！！」

そう男は言うとブロードに死角に蹴りを放つ

ゴッ！！！

男の蹴りはブロードの頭部にクリーンヒットしブロードは膝をつく。

「クッ・・・くそ・・・俺は大切な人をこの手で守れないのか・・・」

「終わりだな、あばよワンコロ！！！」

そう言うと男はナイフをブロードに向けて振りおろした。

「ああ・・・ごめんよフラウ・・・俺は君を守れなかっ・・・」

薄れゆく意識の中金属と金属が当たる音が聞こえた。

「まだ寝るのには早い時間だぞブロード」

そう声が聞こえると目の前には狩り通を読みながらジュノが立っていた。

「ジュノ・・・さん・・・」

「まったく日々の鍛錬がまだまだ足りねえな、お前は」

「すいません・・・」

「ほら、応急薬だ。それ飲んで、そこで目ん玉見開いてしっかり見てろよ。先輩の勇姿を魅せってやっからよ。」

そう言うとジュノは応急薬をブロードに投げ男と対峙した。

「こいよバケツマン、僕が昆虫王者オウビート直伝の次元断裂インセクトスライサー見せてやっからよ。」

「ふざけたことぬかしやがって!!行くぜ!!!」

向かってくる男に対してジュノは狩り通を頭上へ放り投げ居合ような姿勢をする。

「はぁ〜・・・ふん!!」

キン!!バキョ!!!

ブロードはその瞬間をはっきりと目視できなかったが、これだけは理解することができた。ジュノがとんでもない速度で抜刀したのと同時に相手の防具を割り頭上へ吹き飛ばした事を

「すまんね〜、間違えて次元断裂インセクトスライサーじゃなくて時空穿孔ヘラクレスダークだしちまったわ。まあお前はバケツの神聖さを汚したしな、これが妥当かもな。」

そう言うとジュノは通りの隅に落ちた狩り通左手に取り右手に男をつかみブロードに差し出した。

「ほれ、お前の手柄だ。お前が拘束しろ。」

「え・・・そんなそれはジュノさんの手柄じゃないですか・・」

「いいんだよ俺は、狩り通を読んでいただけだからな。それにそんなボロボロなお前見たらフラウが心配して泣きだすだろ?フラウは俺に任せて早くそいつをギルド連行しろ。それと一応病院にいって

こい。これは先輩命令だ。」
「ジュノさん・・・わかりました。こいつをギルド本部に連行してきますね・・・」
そう言うとブロードは男をつかみ男を連行していった。
「さぁて、眠れるお姫様を抱っこして王子が帰ってくるまでにお城へ向かうかね・・・」
そう言うとジュノはフラウを背中に抱えとある場所に向かった。
メゼポルタ　マイトレハウス
「う・・ん・・ここはブロードのマイ・・・ハウス？」
「（あれ？ボクたしか囮捜査の途中で男につかまって）」
「おー起きたか眠り姫。」
横から声がするとそこにはジュノが座りながら週刊狩り通を読んでいた。
「ボク眠らされたんだね、暴漢に・・・暴漢は・・？ちゃんと捕まったの？ブロードは？」
「暴漢ならちゃんとブロードが捕まえたぞ、あっそれとなかなか良い囮役だったぞ１０点加点で１００点だな。」
「いやあそれにしても眠ってしまって残念だったね、ブロードの大活躍を生で観れなくてさ、まじすごかったぞ「俺のフラウに何しやがる！！」とかいってラージャンみたいに怒ってさ～犯人ボコボコにしてそのあとフラウちゃんをお姫様だっこして、「俺のフラウに触れたことを後悔するがいい」とか言ってさ。いやあ～かっこよかったぜ～それにここまでお姫様だっこしながら連れてきたのも奴だからな。」

「そっか～それは残念。ジュノさんは何してたの？」
「俺？俺は狩り通読んでたわ。」
「あはは、なにそれ？ちゃんと仕事しないとギルドの大長老から怒られちゃうよ。」
「仕事してるさ～暴漢をギルドにちゃんと連行したし、それにほらまさに今フラウちゃんが目覚めるまでちゃんと見守ってたし。」
「ホントなの給仕ネコ？」
「マタタビ１０個やるからちゃんと護衛してるって言えって言われてるニャ！！」
「ほら、やっぱり～」
「ハッハー！！ばれたか～」

「今帰ったぞってフラウなんで居るんだ？しかも先輩まで。」

「お～遅かったじゃないか王子様、待ちくたびれたわ。じゃあ俺帰るから後は頼むわ。」
「ヒソヒソ　下準備しといたから後は適当に話し合わしとけよ。これは命令だ。じゃあな」
「下準備って・・・なんですか先輩！！ちょっと！！」
そう言うとジュノはブロードのマイハウスを足早に後にした。
「まったく・・・」
「ねえねえ聞いたよ、ブロード。大活躍だったんでしょ～しかもボクの事お姫様だっこしてくれるなんてボクちょっとうれしいよ。ありがと」
「え・・・ああ（下準備ってこれか、まったく良い性格してるよ。ありがとう先輩）」

6節　適材適所な性格（後書き）

ギルドナイトセーバーってギルドに逆らったハンターをこの世界から排除するために作られたらしいですよ。モンスターの甲殻を断つ程の切れ味を持つ武器で人を切るなんて怖いですね～。

7節　盗まれし秘宝（前書き）

網戸にツクツクボウシが止まり頑張って鳴いている夏ももうすぐ終わりですね。

7節　盗まれし秘宝

メゼポルタ　ハンターズギルド内部

石畳の廊下を靴を鳴らせながら歩いている者がふたり、一人は身の丈ほどの大剣を背負いピンとした姿勢ただし歩く男、もう一人は鈍く光るリボルバータイプのライトボウガンを背負って気だるそうに歩く男、二人はとある場所へと向かっていた。

「はぁ・・・ここに来るといつも面倒な依頼ばっかくるから、なんか嫌なんだよね。」

「良いじゃないですか。難しい任務を依頼してくるって事はそれだけジュノ先輩の腕が立つって事の裏付けですよ。」

「そうか～でもここに来るたびに、生態調査のために古龍や飛竜の宝玉取ってこいって言われるんだぜ。そんなの古生物書士隊の連中にやらせりゃ良いじゃねえかっていつも思うよ・・・。」

「飛竜や古龍の宝玉って・・・めったに取れない伝説級の代物じゃないですか。たまにデートで忙しいから代わりに仕事やっといてくれって言ってましたけどもしかしてその事と関係が。」

「おっ、勘が鋭いね当たりだよ当たり。なんでも特務事項らしいからこの事は他の誰にも言うなよな。今回はお前もこの特務に関わるしな。」

「えっ・・・なんですかそれ、俺は仕事があるからギルド本部に来いとしか聞いてないですよ。」

「ああ、司令にいい加減一人でこの特務こなすはさみしいから知り合いを連れてってもいいかって聞いたらさこれを快く承諾してくれたんだよね。だからお前も呼ばれたんじゃない?後の二人は誰だかわからんけど。」

「そうですか、大丈夫かな俺・・・いくら凄腕のハンターに位置するとしても、まだまだ経験不足で

すし・・・・」
「大丈夫だってお前には色々と経験を積んで欲しいからな、だから今日はサポートメインのボウガンで来たんだぜ。安心しろって。」
「そう言えば、ジュノさんガンナー系統も使えるんですね。近接メインの方なのかとずっと思ってました。」
「僕は臨機応変に武器を変えるスタンスだからな、それにどんな状況でも多くの人々を助けられるようにって考えてるからさ、様々な武器を使えた方が色々な場面で役に立てるだろ。そうやっていろんな人を助ければ様々な武器の使い方を教えてくれた師匠達も喜ぶだろうし。」
「確かに、そうですね。ジュノさんの師匠達ってどんな方なんですか。」
「ああ、その話はちょっと長くなるから今度話してやるよ。」
「そうですか、じゃあ急ぎましょう。司令を待たすのは失礼ですし。」
そう談笑を交わしつつ二人はギルドの内部を歩いて行った。

ハンターズギルド　司令室前

「やっぱ帰りてえ・・・」
「何言ってるんですか。入りますよ。」
そう言うとブロードはドアをノックし司令室へと入って行った。
「ブロード、ジュノ両名ご用命により参上仕りました、ヨハネス司令官。」
「しました～。」

「フム、二人ともよく来てくれた。」

ヨハネス　G　ウラ―ズ
モンスターの生態、科学技術・古代文明この世界のあらゆる分野の情報に精通し、その類まれな天才的な頭脳を駆使し日夜研究にいそしむ姿を評価され、このメゼポルタのギルドの司令官の座を与えられた人物として知られているその前の経歴は一切不明である。

「ガー！！！グゴォ―！！！」
「なんの音でしょう？」
「またじいさんが上で寝てるんだろ。」

そう言うとジュノは司令室の横にあるソファーに腰をかけた。

「んで、早く言えよ今回の依頼をさ。また特務依頼なんだろ？」
「ジュノ先輩、失礼ですよ。」
「フッ、構わんよブロード君。いつも無理難題を彼に押し付けてきたからね。これ位言われて当然さ。」
「そうですか・・・」
「では、今回の任務を伝える。リオレウスの紅玉を手に入れてきてもらいたい。」
「ほら見ろ、言ったとおりだろ。ん？レウスの紅玉はずいぶん前に取ってきてやったじゃねえか。ボケたかおっさん？」
「いやはや、こちらの手違いでね。何者かによって紅玉が盗まれてしまったのだよ。」
「はあ？盗まれただ？おいおい戸締りはきちんとしろって母ちゃんに習わなかったか？」
「フッ、返す言葉もないよ。報酬は弾むのでもう一度取ってきてもらえないか？」

「まあ、今回はこいつの経験を積ませたいってのもあるから。別に良いけどさ。んで残りの二人は？超可愛い女の子のハンターを選考したんだろうな？」
「そのてんに関しては問題はない、すでに気球船ドックに向かわせてある。もちろんこのメゼポルタで屈指のハンターだ、安心してもらっていい。」
「おっ期待してるからな～。」
「それでは二人ともさっそく気球船ドックへ向かい先に行った二人と合流してくれたまえ。」

「了解しました。」
「りょ～うか～い。」

メゼポルタ　気球船ドック　通路
「さあて、どんなかわい子ちゃんがまってるのかな～今からわくわくだぜ。」
「確かにこのメゼポルタ内屈指のハンターとなるととてもすごい方々何でしょうね。時に先輩そのアイルーどこで拾ってきたんですか？」
「ああ広場で珍しいカッコして歩いてたから捕まえてきた。可愛いだろ。」
「可愛いだろじゃなくて、離してあげた方が・・・・・・」
「そうニャ！！！今すぐ離してほしいニャ！！！はやく遠方から仕入れた積み荷を降ろさないとオカシラに怒られるニャ！！！」
「お頭って・・・お前キエルのとこのネコなの？」
「そうニャ！！キエルのお頭に怒られるニャ！！」
「そうか、それは悪かったなここまで連れてきて。もう行っていいぞ。」
「ミャウミャウ、ウニャー！！！」

「どうしたんですか?めずらしいですね。アイルーを簡単に手放すなんて。それにキエルさんの名前を聞いたとたん顔色変わりましたよね。」

「あの女は怒らすと怖いからな。危険を事前に回避したんだよ。それよりも早く行こう。女の子達を待たすわけには行かないしね。」

「はい!」

そう言うと二人は気球船ドックへ繋がる通路を駆けて行った。

気球船ドック

気球船ドック内に入るとそこには弓を装備しているハンターと双剣を装備しているハンターが談笑をしていた。

「(おっ、この子達が今回同行するハンター・・・か・・・・)」

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

「この美しい私を待たすなんて、良い度胸してるじゃないのジュノ。」

「ブロードにジュノさん。やっほ~。」

「まあ、確かにメゼポルタ屈指のハンターに間違いないですね。」

「なんで、フラウちゃんはいいとして・・・なんでナターシャが居るんだよ・・・・」

「なに!?私がいちゃいけないってわけ?」

「こわいおばさんとは一緒に狩りに行くたくないよぅ。ブロードおじちゃん。」

「おば・・・って失礼ねまだ20代よ!!!それにジュノ、あなた

私と同い年でしょ！！！私が仮におばさんだとしたらあなたはおじさんって事になるわよ！！！オーホホホホ！！！！」

「（なんかよくわからないけどボクはニコニコしてよっと）」

「その笑い声がおばさんくせえんだよなあ・・・・」

「まあまあ。それより早く気球船に乗り込みましょう。ダルカン船長を待たすと怖いですし。」

「そうだな～さっさと乗り込むか～」

そう言うと４人は気球船に足早に乗り込んだ。

7節　盗まれし秘宝（後書き）

ラージャンがなんで電気を吐き出すかみなさん知ってますか?ラージャンはキリンを主食として食べているそうで、そのおかげで電気を吐き出せるんですよ。
古龍種のキリンを食べる牙獣種のラージャンは古龍と位置付けてもいいんじゃないかな～と思ったりしてます。

8節　天空の王者達（前書き）

三国無双を借りパクしていったK君は今元気にしているのでしょうか？

8節　天空の王者達

気球船内　ハンター控室

控室では各自剣の研磨や弾薬の確認と調合分のチェック、そして今回向かう狩猟場の情報が書かれた書類を眺めていた。するとブロードが口を開く。

「今回向かうケレス森丘って・・・・」

「そう、レウスやレイヤがうじゃうじゃいてあまりも危険なため狩猟場として放置された場所だね。まさに飛竜たちにとってのメゼポルタみたいなもんだ。」

「そんな危険な場所にいつも行ってたんですか！？」

「その方が生きてるって感じがするだろ？」

そう言うとジュノは笑みを浮かべながらブロードに向けてほほ笑んだ。

「生き急いでるみたいで馬鹿みたいね貴方？」

そう弓の整備をしながらナターシャは言った。

「あなたを失って悲しむ人の事も少しは考えなさいよ。」

「俺は密度の濃い人生を送りたいんだよ。密度のな。それに・・・・いやなんでもない。」

そう言うとジュノは再びボウガンのメンテナンスを行った。

「まったく・・・・」

その二人の会話を聞いたブロードはフラウの元に向かいフラウに小さな声で話しかけた。

「あの二人の間にはなにかあるのかフラウ？」

「えっとね～ナターシャさんから前に聞いたんだけどね～二人は幼馴染なんだよ～なんでもナターシャさんのお父さんのもとでジュノさんは弓を昔教わったんだって。」
「そうなのか。あの人にそんな過去が・・・・」
「おっし、整備終わりちょっとデッキに出て風に当たってくるわ。」
そう言うとジュノは控室を後にした。

気球船、デッキ
「・・・・・生き急いでるか・・・俺もユーノちゃんと同じまだまだルーキーだな・・・」
そう言うとジュノはしばらく空を眺めていた。すると急に空が暗転し暴風が吹き始めた。
「くっ・・・・この急な天候の変化は奴が近くにいるってことか・・・」
「ジュノさん!!危ないですニャ、メゼポルタの古龍観測所からの便りによるとこの周辺に古龍が周回してるそうですニャ!!」
「ああ、クシャルだなこの急な天候の変化は・・・・」
「気づかれないうちに早くこの区域を脱出しなくちゃな!」
「ハイですニャ!!」
そう言うとジュノはデッキを後にした。

「各総員に次ぐ、本船は今古龍が周回している区域に位置している、よって本船はこれよりバリスタ及び排熱砲での迎撃態勢を取りつつ全速力でこの区域を抜ける、総員準備に取り掛かれ。」

そうダルカン船長が言うとアイルーや乗務員達は忙しく動き出した。

気球船　ハンター控室

「どうやらこの船周辺にクシャがいるらしいぞ。もしかしたらちょっとした射的ができるかもしれないな。」

「そんなのんきなこと言ってる場合!?気球部分にもし攻撃が当たったら船が落ちて私達死ぬかもしれないのよ!?」

ナターシャがそう声を荒らげながらジュノに詰め寄る。

「大丈夫だって、もし近くに現れたらお前の弓でシュパーンと目を射抜いてやれって。」

「あんたね・・・あいつが体周辺に風を練って纏っている事忘れたの?知らないとは言わせないわよ。」

「ハハッ!!そうだった、そうだった。大丈夫この船にはバリスタや排熱砲も付いてる事だし何とか何だろ。」

「まあ、そうだけど・・・。」

そうすると控室に乗務員が入って来た。

「ご報告します、本船は危険区域の脱出に成功いたしました。」

「ほら見ろ、大丈夫だったろ。」

「しかし問題が発生しまして、観測ネコの報告によると古龍がメゼポルタに向けて進路を変更したようです。」

「そうか。まああそこは屈強なハンター達が沢山いるし、まあ大丈夫だろ。でも一応メゼポルタに報告いれとけよ。」

「はい。その点は大丈夫です。すでに伝書鳥をメゼポルタに向けて飛ばしましたので。」

「流石～、んでケレス森丘にはそろそろつくのか?」

「はい後5分ほどで到着いたしますので、皆さん下船の準備の方をお願いします。では」

そう言うと乗務員は控室を後にした。

ケレス森丘　川辺付近

「なかなか出ませんね火竜の紅玉・・・・・」
「まあ伝説級の代物だからな、しかたねえよ。」
「もうボク、しばらくレウスは狩りたくないよぅ・・・・」
「私も・・・」

そう言いつつ皆持ってきた食糧を口に運ぶ。すると川辺に大型のリオレウスが水を飲みに空から現れた。

「あいつかなり大きいな・・・よし決めた。あいつを狩ってあいつからでなかったら帰ろう。そうしよう。」
「前衛はブロードとフラウ、ナターシャは中距離で二人をサポート、俺は遠距離から状態異常弾を撃ち込みつつ、通常弾を撃ち込む。良いな、各自死ぬなよ。以上!!散会!」
そう言い残し各自フォーメーションを組みレウスに向けて駆けだす。

リオレウス　別名　雄火竜
雌であるリオレイヤは主に地上で生活を行うのに対し、雄のリオレウスは空中での活動を主に行うため「空の王者」と呼ばれる。雌と違い背中に棘はなく尻尾に毒は含んでいないが足の鉤爪には猛毒があり空中からの火球攻撃を行う。そして空中からの急降下攻撃は、猛毒と気絶の効果がある。

ジュノは麻痺弾を装填しレウスに向けて撃ち込み最速で麻痺弾を装

填する。

「はあ！！てーい！！！」

フラウによるすさまじい双剣の乱舞脚に位レウスは地面に転がる。
それを待っていたかのようにブロードは大剣に力を込めレウスの尻尾に向けて重い一撃を繰り出す。

「でりゃあ！！」

ゴキン！ブシャアー！！！！！！！！
尻尾を切られレウスは激痛のあまり悲鳴を上げる。怒りのあまりレウスはブロードに向けて火球を放つ。

「おっとあぶない。」

そう言いつつブロードは大剣で自分自身を覆うようにガードをし火球を受け止める。しかしガードを解いた時に目の間に広がっていたのは怒りのあまり猛烈な速度で突進してくるレウスが目の間に迫っていた。

「ブロード危ない！！」

ブロードに向かって駆けだすフラウ。

「（まずい、ガードが間に合わない）」

シュン！！！

≪ゴアウウ！！！！！！≫

悲鳴と共に後ろへ後ずさるレウス、ブロードは何が起きたがわからず硬直している。

「気をぬくんじゃないわよ！次来るわよ早く構えて。」

ナターシャが放った弓矢がレウスの急所にヒットしブロードは事なきを得た。

「すいません。ありがとうございます。（自分もまだまだだな）」

ブロードは大剣をレウスに向けレウスの羽に向け一撃を放つ、痛みのあまりその場を飛び上がり立ち去ろうとするレウス。

「まずい逃げられる！ナターシャさん！！！」

「今撃ち落とすわよ！！ちょっと待ってなさい。」

しかしナターシャの放った弓矢は虚しく当たらず飛び立とうとするレウス。

「ちっ！！（なんてこと私の百発百中の弓が。）」

レウスが上空に飛び立ったその時レウスが上空から落ちてき地面に叩きつけられた

「ヒュー！！何とか間に合ったぜ～。」

レウスが飛び立った後ジュノの上空にいるレウスに向けて狙い撃った麻痺弾がレウスに当たりレウスの動きを封じ空からレウスが落ちてきたのだ。無残に大地へと落ち身動きが取れなくレウス。

「さあって、フィナーレと行こうぜ！！総攻撃だ。」

そう言いレウスの腹に向かって滑りこむジュノ。

「こいつを受けてみな！！」

レウスの腹部に向けて猛烈な勢いで通常弾が射出される。

超速射、一部のボウガンにのみ搭載されたもので弾倉内のすべての弾を残さず打ち切る驚異の連射である。体中の自由を奪われたレウスにとってこれ以上の脅威はない。

全ての弾薬をうち切り瀕死の状態なるレウス。

「今だブロード！お前の大剣で重い一撃をくらわしてやれ！！！！」

「ウオオオオ！！！！」

ザシュ！！！

ブロードは大剣に渾身の力を込めレウスの頭部に向け一撃を放った。

地面に身を投げ出しレウスは絶命した。

「やっぱでねえな…紅玉。」

「ですね・・・・」

はぎとりを終わり石の上で一服するブロードとジュノ。

「私も出なかったわ・・・・」

「となると後はフラウちゃんか・・・・たのむぜ～・・・」

「あっねえねえ紅玉ってこれ～？」

「あのねフラウちゃんそれはレウスの＊＊＊＊だから、早く元の場

所に戻しなさい。後紅玉は名前の通り紅い玉だからね。」
「そっか～・・・あもしかしてこれ～？」
そうフラウは言うと深紅に染まっている玉をジュノに向けて見せた。
「そう！それだよ！！！よくやったフラウちゃん！！！１００点だ！！！」
「えへへ～やったね。」
「あ～よかった。これでこの糞任務も終わりだし帰るとしよう。」
そう言うと気球船が止まっている場所へと向かおうとしたその時であった。辺りが白い光と白い煙に包まれる。
「ワッ―！！離せ～」
「フラウ！！！大丈夫か？ウグッ・・・」
「キャー！！何よこれ！！ちょっとムグッ・・・」
白い煙の中に響き渡る皆の声。
「どうした！！！皆！！！おい！！！ナターシャ！！！何がグッ・・・」
突如頭に激しい鈍痛に襲われる。ジュノは膝を落とし地面に倒れ込んだ目の間にはボウガンを手にした人間が立っている。
「（痛てえ・・・密猟団か・・・まずい・・・意識・・・が）」
「ケケケ、うまくいったぜ。」

「そうだな、おいこいつらをアジトに連れていくぞ！！！」
「了解、へへへ・・・・・・」

8節　天空の王者達（後書き）

レウスの紅玉ってレウスの体内に稀にしか生成されない希少な物って伝えられてて取引価格も高そうに思えますけどＭＨＦの中の実際の取引価格は９７００Ｚ、仮に１ゼニ―を１円と考えて９７００円・・・あんまり希少じゃないのかな～。

9節　縛られし猛者達（前書き）

小学生くらいの時大学生位になったらゲームや漫画フィギュアで遊ぶことなんて全然なくなるんだろうなって思ってました。中学、高校までは徐々に漫画やゲーム等の興味は薄れていったのですが、大学に入って友人にモンハンを進められやり始めてから一気にゲーム熱や漫画熱フィギュア熱ぶり返しエスカレートしております。

9節　縛られし猛者達

ぼやけた世界　???

「（ここは・・・何処だ・・・）」

ぼんやりとした視界のなか、目の間の扉が開き二人の男女が目の間の端末を忙しなく操作する。

「実験体の現状は?」

「現在６８パーセントまでの体の生成に成功、思考能力及び能力は依然８０パーセントフラットの状態です。」

「そうか、今のところ最も安定して成熟している実験体だ、引き続き慎重に操作に当たれ私は主任に報告してくる。」

そう言うと男は部屋の扉を開き別の場所へと移動した。そして女の方が一通り端末の操作を終えると、こっちに近づいてくる。

「もう少しだからね～。もうちょっとこの中で我慢してね。」

「（お前は・・・何だ・・・）」

「お母さん、頑張るからね～よ～し。」

「（母・・さん・・・?）」

また意識が薄れ白い世界へと誘われる。

「（また・・ココか・・・今度は明るい・・・熱い・・・・）」

周りは炎に包まれていた、炎に包まれている場所の中女性は忙しなく何かの準備をしている。

「ごめんね、最後まで面倒見れなくて・・・でも大丈夫。もし新しい世界があるならあなたにはきっと明るい未来が待っているはずよ・・・そしてその世界には姿は違うかもしれないけど私も居るから大丈夫、だからその時までお休み。私の愛しい子よ。」

「（母・・・さん・・・待って・・・・）」

バシャア!!!!

何かを掛けられ完全に意識が覚醒する。今度はあの変な世界ではなく薄暗く汚らしい世界だ、目の間に水の入っていたバケツを持った男が一人と奥の二人が笑いながらこちらの様子をうかがっている。

「やっと目が覚めたかこいつ、居眠りの長い坊っちゃんだぜ。」

そう言うとバケツを持った男がバケツを柄を持ちジュノに向けてバケツを振りかざす。とっさに手で防ごうとしたが縛られているせいで手がほどけない。ジュノの頭に鉄製のバケツが叩きつけられる。

「俺達の狩猟場を勝手に荒らしやがって!!!思い知らせてやる!!」

一切の容赦なく、鉄製のバケツを振りかざす。

「やめろ!!先輩をそれ以上痛めつけるな。それ以上やるなら俺をやれ!!」

「なにお〜こいつめ〜そんなにお望みならやってやるぜ〜。」

そう言うと男はブロードに向かって行く。

「そこまでにしておけ。相変わらず人質を痛めつける悪い癖がなおっていないようだな。」

そういうとバケツを持った男は止まり代わりに奥の二人の男の一人がこちらへと向かってくる。

「お前、俺達の狩猟場で何をしていた?」

「・・・ピクニックに来てたとでも言えば解放してくれるか?」

ドゴッ!!

「グッ!!!」

男に頭を思いっきり蹴られるジュノ、また意識が飛びそうになるが寸でのところで意識が戻される。

「口のきき方には気をつけろ・・・俺は気がみじけえんだ!!言え!!あそこで何をしていた?」

「・・・ギルドの特命によりあそこで調査をしていた。」

「調査の内容は?」

「生態調査だ。」

「そうか。よしこいつらの武器と身ぐるみを奪って牢屋にぶち込んでおけ!」

そう言うと複数の男たちがジュノとブロードの武器をはぎ取り、牢屋へと連れて行こうとする。するとブロードが口を開いた。

「まて!!!一緒にいた女の子達を何処へやった!?」

「へっ、女達なら親分の所さ、なかなかの上玉だったからなきっと今頃可愛がってもらってるんだろうぜ。ヒヒヒッ!!!はやく俺らに回ってこないかな〜」

「くっそー!!!離せ!!!離せー!!!」

密猟団アジト　牢屋

ガシャン！！！と牢屋の扉が乱暴に開けられ二人は牢屋へと放り込まれる。

「おとなしくしてろよ。まちがっても脱走なんてするなよな。まっムリだろうけどな！今日は紅玉も女も手に入っていい日だぜ、ガハハハ！！！」

そう言いつ男達は牢屋の鍵を閉めとジュノとブロードを置きその場を去って行った。手にはツタの葉とクモの巣の糸で調合されたネットの糸がぐるぐる巻きにされており。脚には足かせがされており砲丸がくくり付けられている。

「くそ、早くしないとフラウとナターシャさんが・・・！！！」

「大丈夫かな～・・・」

「えっ。」

「親分の方、ナターシャ怒ると怖いからな～きっとボコボコにされてるんじゃない親分の方。かわいそうに・・・」

「そんな冗談言ってる場合ですか！！くっそ早くこの手枷と足枷をどうにかしないと。畜生解けない・・・・」

「そうだな。お前にとっちゃ未来のお嫁さんがピンチだもんな。それにしてもあのバケツ持った奴、息が臭かったな～歯磨きしてんのかな・・・・。」

ブロードはジュノの言葉に耳もくれず必死に手枷と足枷をどうにかしようと奮闘している。

「駄目だ解けない・・・畜生・・・・・。」

どうやら手枷足枷を外すのを断念したようでブロードはうなだれた。

「くそ・・・フラウ・・・」

「まあまあ気楽に・・・って言ってもそんな状況じゃねえよな。俺達の身もなんだか危なそうだし。」

そう言うとジュノは一通り辺りを見回し、静かに立ち上がった。

「よし。まずはこの牢屋を脱出して全員の武器を回収したのちにナターシャとフラウちゃんを助けに行くぞ。」

「脱出して助けるって・・・手枷も足枷も取れないんですよ!!!こんな状態でどうやって・・・」

「そうすぐあきらめるのが、お前の悪い癖だなぁ～まったく、あの迎撃拠点を襲った謎の龍を退けたあの時の根性はどこへ行ったのやら。」

「それはあのときはフラウが・・・居たから・・・」

「はいはい。嫁さんがいなきゃ何にもできない、旦那さんなのね。わかったわかった。そこで見てろ。今男ってのを魅してやるよ。」

そう言うとジュノは意識を集中し力を溜め始めた。

「ハッ!!!!」

ブチ!!!ガキン!!!

瞬く間にジュノを拘束していた手枷と足枷は粉々になりジュノは足枷についていた鎖に繋がれた砲丸をぐるぐる回しつつブロードに向けて問いかけた。

「ほら、お前も意識を集中させて力こめてやってみ。お前ならできるはずだ。」

そう言うとブロードはしばらくの間困惑したがすっと意識を集中し始めた。

「（先輩にできるなら俺だって・・・・）」

「ふん！！！」

ブチブチ！！！！

「できた！！！ってあれ足枷が・・・」

「ハッハー！！！まあ及第点だな足枷はサービスで俺が外してやるよ。」

そう言うとまたジュノは意識を集中しだし足枷に向けてこぶしを当てると足枷は股を境に二つに割れた。

「ってちょっと！！！先輩、脚はさっきより自由になりましたけどこれじゃあ重くて意味ないじゃないですか！！」

「あれ・・・ちょっと手加減をミスったな・・・・まあいいじゃないか、自分で足枷を破壊できるほどの脚力がなかったってことだ。筋トレかねてその重しつけて頑張れ。」

そうジュノに言われるとブロードはしぶしぶ納得し鉄格子に向かい鉄柵を引き延ばし始めた。

「ふんぬ～！！！はあっ・・・・何だこの鉄柵ただの鉄柵じゃないぞ！！！」

「こりゃあ鉄と何かが練ってあるな。マカライト鉱石かドラグライ

ト鉱石か・・・ちょっとまってここもさっきの要領でぶっ壊すぞ。ほれまずはお前からやってみ。」

そうブロードに言うとブロードはまた意識を集中しだした。

「はっ！！！ふんぬぅぅぅぅぅぅ！！！！！！！！！」

徐々に特注の鉄柵が曲がり始めるが途中で息が切れたのかブロードは尻もちをついた。

「はあ・・はあ・・だめだ頭がクラクラする。」

「よーし、ここまでできればお前にしちゃ十分だな。後はまかせてそこで少し休憩してろ。」

そう言うとジュノは鉄柵に手を掛け力を込める。

「ふん！！！！！」

バキャア！！！！

「よし、この要領で横の鉄柵も・・・・フン！！！！」

ボキャア！！！！

「これで一人分通れるだろう。立てブロード、お姫様達を助けに行くぞ。」

「あっ・・・はい！（この人どんな筋肉してるんだ・・・）」

密猟団のアジト　頭領の部屋

薄暗く汗や煙草と何かの体液が混じった臭いが漂い今すぐにでも換気したいほど臭い部屋にナターシャとフラウは両手を縛られ部屋の中央へと放り投げられていた。ナターシャは放り投げられた瞬間に覚醒したが、フラウは動いていない、まだ覚醒していないようだ。

「ちょっと！ここどこなの！！フラウ起きなさい！！起きろー！！！」

「ん～ママは・・・まだブロード・・・・臭い・・・」

「キーッ！！！起きなさい！！！」

ナターシャは軽くフラウの頭を蹴るとやっとフラウは目を覚ました。

「いた～い・・・はわわわっ！ここは・・・ココは何処だろ？あれ！？ブロードとジュノさんは。」

「やっと目が覚めたのね・・・私たち捕まったのよ。ここが何処だかは私もわからないけど…」

「ここは俺のスイートルームさ。」

「だれ！？」

奥の暗がりの方に屈強な男が一人そしてその左右に男が一人ずつ立っていた。

「誰でもいいじゃねえか。今からお前らは俺と俺の部下達によって凌辱されるんだからよ！！！お前ら！女どもの服を脱がせ！！宴の時間だ。」

そう言うと男達は二人の服を脱がす作業に取り掛かる必死に抵抗するナターシャとフラウ。

「キーッ!!止めなさい、このけだもの共!!!!」
「うわー止めてよ~グス・・・ママぁ」
「うるせえ!!黙れこの腐れ女!!」

そう言うとナターシャの服を脱がそうとしていた男が激情しナターシャの腹に向けて蹴りを入れた。

「がはっ!!!!」
「そんな格好しやがって、ホントは誘ってんじゃねえか?え!?その格好でいろんな男たぶらかしてきたんだろ!?この糞アマが!!あぁ?」

男は執拗にナターシャに蹴りを入れる、徐々にナターシャの意識が薄れて行く。

「けっ!!やっとおとなしくなりやがった。さあて・・・」

男はナターシャのメランスーツのベルトをはずし服を脱がす。男の眼前にたわわに実った二つの胸が姿を現す。

「ヒョッホー!!!良いものもってやがるぜ、この女。お頭!この女の方の準備の方ができました。」
「よし、さあてこれほどの上玉だきっと良い味にちげえねえ。」

お頭と呼ばれた男は下の服を脱ぎ捨てナターシャに近づく。

「たっぷり可愛がってやるぜ。へへへ。」
「・・・たすけて・・・」
「あぁ?」

「・・・誰か・・・助けて・・・・・」
「ぐはは！こんな森の中じゃあ誰も助けになんかこねえよ！」
そいうとお頭と呼ばれている男はナターシャの胸に手をかけようとする。そのとき。
「いるぜっここにひとりな！！」
ピシッ　ズガン！！
轟音の中岩で覆われていた天井に穴があき、部屋一面に一筋の光が現れる。その光の中から男が舞い降りその場に着地した。
「密猟団風情がさんざん俺達ギルドナイトをコケにしてくれたな。覚悟はできてる？」
「馬鹿な、ドラグライトと鉄を混ぜた足枷とカブレライトと鉄を混ぜた鉄柵を破壊しただと、下の連中はどうした！？」
「俺は怒ると怖いんだよ～あと連れのおっさんは俺より怒るともっと怖い。今頃下の階層で君の仲間を皆殺しにしてるんじゃないかな？フフフ」
そう言うとジュノは目の前を見回すと男達に問いかけた。
「君達に選択肢を上げよう一つは足枷手枷をつけて俺達のギルドにおとなしく連行される。君はもちろん下の服を着なきゃだめだよ。そんな汚いものぶら下げながら連行するのこっちも恥ずかしいし。二つ目は無駄に抵抗をしてみる。三つ目は・・・」

「相手は丸腰だ野郎どもめった刺しにしてやれ！！！！」
そう頭と呼ばれる男が言うと二人の男は武器を持ちジュノに襲いかかる。しかし

「二人とも目と耳を塞げ！！！」

メギャア！！ドゴォ！！！

二人の男はジュノの一撃を顔面に食らい壁際まで吹っ飛ばされる。顔はもはやスイカが割れたように真っ赤に染まり原形を留めていない。

「ちょっとやりすぎたか・・・なんか君の手下に頭殴られてから変なんだよね。まあ関係ないか。あっ三つ目はこの二人みたいに顔面ミンチにされ吹き飛ばされるか。まあ俺としては一つ目のおとなしくギルドに連行されるをお勧めするな、もう二人居なくなったし。さあどうする・・・選べよ・・・・・・」

ジュノから禍々しい殺気が漂いだす。瞳はまるで憤怒に我を忘れ獲物を狙う飛竜そのものだった。場の空気が徐々に張り詰める。まるで限界まで膨れ上がった風船の様に緊迫した状態が続く。

「うっ・・・畜生！！！化け物め！！！おとなしくつかまってたまるかよってんだ馬鹿が！！俺の双剣術をくらって細切れになりな！！！！」

そう男は自信を奮い立たせると黒い刃状の双剣を手に取りこちらに駆けだす。

「そうか仕方ないけど第四の選択肢だな・・・・」

そういうとジュノはお頭の双剣での攻撃をいなし男の所持している片方の双剣の柄をつかみ奪った。そして構え男の腹に目掛け双剣の柄を突き出す。その刹那、男は吐しゃ物をまきちらしながら後方の椅子へと吹き飛び壁にぶち当たり気絶した。

「第四は眠ってもらいギルドに連行されるだな。」

辺りが静寂に包まれる。すると当たりに漂う重い空気を纏うジュノに向けて二人が口を開いた。

「ジュノ・・・」
「ジュノさん・・・」

二人が後ろから声を掛ける、ジュノは相変わらず前を向いている。

「あのぅ・・・そのぅ・・・」
「気にするな。これもギルドナイトのお仕事だちょっとやりすぎた感はあるが、それと・・・二人とも早くそのはだけた服を何とかしてくれ恥ずかしくて後ろ向けない。」

そう二人に言うと二人は頬を赤く染め慌てて服装を直す。静かになった部屋内に服と肌が擦れる音が響き渡る。するとナターシャが思い立ったように口を開いた。

「私の胸見てないわよね?いや見たわよね!?服がはだけてる事知ってるんですもの!!」
「横目でぼんやり見えただけだよ!両目で見たわけじゃないから別に問題ないだろ!!」
「いえ!問題あるわ!!この美しい私の胸を見られたことに問題が

あるの！！だいたいあなた昔も・・・」

さっきの緊張感は吹き飛び部屋内に二人の怒号が飛び交う。すると後ろの扉からブロードが全員の武器と道具・素材等が入った袋抱え入って来た。

「フラウ！大丈夫か！？」

「ブロード！！怖かったよぅ～・・・・」

「もう大丈夫だから、大丈夫だから。」

そう言いつつフラウをなだめるブロード、フラウはブロードに抱かれ徐々に落ち着きを取り戻していく。

「うん、落ち着いた。来てくれてありがとうブロード。」

「ああ、皆の武器や紅玉を回収するのと下の階層にいた手下どもを黙らせるのに手間取ってしまって遅くなってしまった。ごめん」

「いいんだよ。ボクを助けに来てくれたことに意味があるんだから。」

「フラウ・・・・それにしてもなんであの二人は言いあってるんだ？」

「えっ・・・えっとね～「私の美しい胸を見たでしょ～」「いや！ぼんやりとしか見てない～！」ってさっきから言い争ってるの。フフ・・・なんか仲イイよね～あのふたりぃ～」

二人の言い争いはまだ続いていたがふとナターシャが静かに話しだした。

「まあ・・・今回は私も助けられた身だしそのくらいのサービスがあっても別に良いか・・・。」

「そうだぞ～俺が居なかったらお前達は今頃あのおやじにあ～んな

事やこ～んな事をされ・・・・」
「ありがと。」
「はい？」
「だから、ありがとうって言ってるの？耳が遠くなりましたか？お・じ・さ・ん？」
「あぁ、おまえのキーキー声で耳が遠くなっちまったようだな。」
「キーキー声ってなによ！キーキーって！？」
「まさにその声だよ。お・ば・さ・ん。」
「キーッ！！！なんですって～許さない尻を弓で射抜いてやる！！」

そうナターシャは言うとブロードが持ってきた自前の武器天狼弓「村雨」を手に取りジュノの尻目掛けて矢を射抜き始めた。

「ああ、そうだな。下の階層の敵を一人ぶっ飛ばしてこの部屋の場所を聞き出したとたん俺に「下の階は任せた」っていって駆けて行ったからな相当思い入れがあるんじゃないか？」
「そうかもね～フフ・・・」
「やめてお尻は止めて！！！変な穴ができちゃう！」

シュ！！！！

「アッー！！！」

飛行船内　デッキ
夕焼けに染まる空を眺めながらジュノは空を眺めて考えにふけっていた。

【実験体Ｊの現状は？】

「（・・・・・・）」

【・・・お休み、私の愛しい子よ。】

「（あの時の夢は妙に現実的だった・・・実験体？それにあの女性は・・・俺には母さんなんていないはず・・・）」

「（駄目だこれ以上思いだせない・・・。まあ変な夢って事にしておこう。それにしても）」

「尻が痛い・・・」

ジュノの尻部分はナターシャに放たれた弓が臀部の片方に突き刺さり怪我を負ったがかろうじて手持ちの回復薬グレートを脱脂綿にしみ込ませテーピングを施してあった。

「穴になって残ったらどうしよう・・・まあいっか別に風呂入る時はタオルで隠せば良いし」

そう楽観視するジュノのもとに慌てて気球船乗務員のアイルーが駆けてきた。

「ハンターさん！！！大変ですニャー！！！！」

「どうした？密猟団の団長が暴れてるのか？それとも君の可愛さが大変なのかなぁ～」

そう言いつつジュノはアイルーを撫でまわした

「止めてくださいですニャ！！今はそんな場合じゃないんですニャ！！メゼポルタがメゼポルニャーン・・・」

「ん！メゼポルタがどうしたって！？」

「ゴロゴロ・・・ハッ！！！メゼポルタがクシャルダオラに襲撃されてるって話ニャ！！！」

「なんだよ、それくらいで慌てるなんて可愛いニャ～君は。それに大丈夫メゼポルタには屈強なハンターが沢山いるからクシャぐらい

そんなにあわてなくても何とかなるだろう。」
「それが・・・討伐に向かったハンターさんやギルドナイトの人達が次々と病院送りにされてるらしいニャ・・・」
「なんだって!!」

そう聞くとアイルーの横を猛スピードで駆け抜けジュノは操舵室に向かった。

気球船　操舵室
「船長!話は聞いたぞ本当か!?」
「うむ、これが届いた伝令だ。」

そう言うとダルカン船長はジュノに伝令を手渡した。伝令の内容にはこう記されていた。

「メゼポルタが複数のクシャルダオラによって襲撃されている、至急戻られたし。なお今回のクシャルダオラの中の一体は通常種とは異なり風と氷を練って非常に危険な攻撃をしてくる個体が確認されている。本ギルドはこれを特異個体と見なし凄腕ハンターランクの者達に狩猟に向かわせてはいるが、状況は芳しくない。狩猟に向かう際には要注意されたし。」

「氷と風・・・か。これは危ないにおいがするな・・・メゼポルタのドックには戻れそうか船長?」
「危険だが、俺はハンターを幾度も狩猟場に送り、そしてメゼポルタに帰してきてやった男だ。ハンターをメゼポルタに送り帰してやることなんて朝飯前よ。」
「・・・そうだな、たのむぜメゼポルタまで俺達を運んでくれよ、船長。」

そう言うとジュノは船長の肩を叩き操舵室を後にした。

「ふっやってやるさ・・・総員！！！本船はこれよりメゼポルタに向けて最大速度で航空する。総員持ち場につき全力で作業にあたれ！！！」

船内に号令が行きわたると気球船は飛竜の如く空を駆けだした。

9節　縛られし猛者達（後書き）

小学生の頃ですが遊戯王と言うゲーム大会が東京ドームで行われてそれに出たことがあったんですが（結果は散々でした）大会限定のカードパックがその時売られてたんですけどあまりの入場者数で販売が中止になりまして、自称名古屋から来た隣のおっさんがカード販売中止になったことに怒り狂って係員の人に殴りかかっていった事を思い出しました。子供ながら大人同士の喧嘩を生で初めて見たのでとっても怖かったですね。

１０節　暗雲立ち込めるメゼポルタ（前書き）

幼稚園の年長から小学校の４年位まで私は恐竜や特撮怪獣物のゴジラやガメラが大好きでした。特に一番好きな怪獣はゴジラシリーズだとビオランテでガメラシリーズだとイリスと言う怪獣ですね。昔は良く金曜ロードショーで怪獣映画をやってましたけど最近は全然やりませんね。悲しいものです。

１０節　暗雲立ち込めるメゼポルタ

メゼポルタ周辺はまるで暗雲の如く空を行きかうガブラスの大群と、空気を圧縮したブレスをまきちらしながらクシャルダオラが飛び交っていた。

「（むう・・・このままでは気球船ドッグに入るのはかなり危険か・・・しかし私にも誇りがある。多くのハンターを無事にメゼポルタに送り届けてきた誇りが）」

「船長。どうしますニャ？この辺り周辺の空は非常に危険ですニャ・・・」

「このまま気球船ドックに向けて前進する・・・・」

「正気ですか船長！！この状況を見てください。このまま前進するのは非常に危険だと言うことは目に見えています！」

「我々の仕事はなんだ？言ってみろ。ロイド乗員。」

「ハンターを狩猟地に無事に送り届ける。ですか・・・？」

「そうだ。我々はハンターを無事狩猟地に送り届けるという重要な役割を担っている。私もこの状況は十分に把握している。しかし私は一人の男と約束してしまった何とかメゼポルタまで飛んでくれと。私は船乗りの男としていや一人の男としてこの約束を何としても果たそうと思っている。」

「わかっている、これは私のわがままだということも。だが諸君に頼みたい事がある私の最初で最後のわがままだ。ハンター達をあのメゼポルタまで送ってやるのを手伝ってほしい。頼む」

操舵室は沈黙に包まれる。

「了解ですニャー！！」

「船長がそこまで言うならやるしかないですね、俺他の乗務員と共にバリスタでの迎撃の準備してきます。」

「諸君・・・ありがとう。これより本船はメゼポルタに向け全速前

進する。なお古龍による襲撃やガブラスによる攻撃が懸念される。乗組員はバリスタや排熱砲での迎撃しつつ前進する各自準備にかかれ！！」

メゼポルタ　気球船ドック

気球船ドックに着くとドック内にもイーオスの群れが侵入していた。

「あっ・・・・見て！こんな所にもモンスターが。」

「気球船ドック内にもいるってことは、かなりモンスターが街に侵攻してきてるってことね・・・・みんな大丈夫かしら。」

「くっそ！！！全部蹴散らしてやる！！！ハァァ！！！」

ドック内にいるイーオスの群れに向けて大剣での横薙ぎを繰り出すブロード、イーオスは横一線に体を分断される。

「私達も行くわよ！！」

「うん、いっくよ～！！！」

ブロードに続き三人もイーオスの討伐に向かう。次々とイーオスがまるで竜巻による風によって倒される家屋の如くなぎ倒されていく。

「はぁ・・・あらかた片付いたか。」

ブロードはふと息を付き剣を床に付きたてる。しかし

「ブロード、上！！」

フラウから発せられた言葉によってブロードは上を向いた。その時

彼の目に映った光景はイーオスがドック上部から奇襲をしかけてきているところだった。

「（くっ・・・ガードが間に合わない・・・！！）」

なすすべなく立ち尽くすブロードだったが次の瞬間ボウガンの発砲音と共にイーオスが吹き飛んだ。ジュノが空中でイーオスを狙撃したのである。

「左右を見渡すのも重要だけど上からの奇襲ってのも考えなよ～ブロード。」

「先輩・・・ありがとうございます。」

「良いってことよ。さて・・・ここにいる奴らの殺気はあらかた消えたな、逃げた奴も数匹いたが・・・・。」

辺りを見渡すジュノ気球船ドック内はイーオス達によって荒らされかなり悲惨な状況であった。

「まったく散らかしっぱなしとは悪い子たちだなまったく。まあいい、まず船員達を避難させた後にギルド本部に向かおう、大長老が指揮を執っているはずだ。」

そう告げると気球船乗務員を警護しつつ3人はギルド本部に向かった。

ギルド本部　大長老の間

「民間区と商業区の隔離と現在迎撃された古龍の数はどうなのじゃ副補佐官？」

「はい、大長老。現在商業区の隔離はすでに完了した模様ですが、住民区の隔離はまだ完了されておらずまだ住民の避難を行っている所です。住民の警護及び避難はレジェンドラスタ及び上位下位のハンター達の指揮によって住民の誘導及び警護が行ってますですじゃ。」

そういうと竜人族の老人は報告書を次々と読みあげていく。

「古龍に関しては大方の数はギルドナイトと凄腕ハンター達の手で討伐することに成功いたしましたが特異個体の古龍の奇襲により凄腕ハンター達の負傷者も多く病院は負傷者で溢れかえっている模様です。」

「ウムゥ・・・・状況は芳しくないか・・・」

大長老が思慮に耽っていると部屋の扉が開かれた。

「久しぶりだなじいさん。」

「おおジュノに皆の者よくぞ無事に戻って来たのう。しかし今は帰還を喜んでいる場合ではないということはお主らもわかっておるな。メゼポルタは今一刻も猶予もない状態じゃ。」

「もちろんわかっているさ、んで俺達はどうすればいいんだ?古龍や雑魚共をひたすらに狩ればいいのか?」

「うむ、現在住民区の方にイーオスやガブラスそして古龍が襲撃している。そなた達から数名住民区の方に向かってもらいたい残りの者は病院の警護に回ってもらうと助かるのう。」

「俺が住民区の方に向かいます。ギルドナイトとして市民を守るのは当然の義務ですから。」

「ボクも住民区の人達を助けに行くよ。あそこにはボクのママやパパも居て心配だもん。」

「私は病院の方に向かうわ、レジェンドラスタ内で最高の美貌を誇る私が負傷した人達を元気づければたちまち傷も癒えるに違いないわ。」
「じゃあ俺はナターシャの制止役で病院の方の護衛に行くかな。」
「うむ、決まったようじゃなでは各自持ち場に向かってくれ。わしはココで引き続き指揮を執る。」
「「「了解」」」
「りょ～うか～い。所でじいさん俺の武器倉庫の方は襲撃を免れているのか？」
「うむ、その点は工房の親方とその弟子達の手によって免れておる。」
「そうか・・・じゃあ病院に向かう前に近接装備に着替えるとするか。よしみんな先に行っててくれ俺は後から追いかける。それと・・・」
「死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな、でしょ？昔よく言ってたわよね、あなた。わかってるわよ、それに美しいこの私がこんな所で散ると思って？」
ナターシャはジュノに向かって笑みを浮かべそして扉の方へと向かった。
「ハッハー！！！わかってるじゃないか。流石はレジェンドラスタだ。」
そう言うと、ジュノも扉の方へと向かい大長老の間を後にしようとしたそのときであった。扉が開かれ息を切らせながらギルドの職員が飛び出してきた。

「大長老!!緊急報告です。住民区に隣接するハンターズスクールの訓練用のモンスターが、古龍の攻撃によって脱走しスクールの生徒を襲っています!」
「何それはまことか!?」
「はい!!現在レジェンドラスタ一名と上位ハンター一名が古龍の迎撃を行っている模様ですが・・・」
報告の最中に押し黙る職員。ジュノは職員に向けて問いかける。
「なにかまずいことがあるのか?」
「はい・・・その攻撃した古龍なのですがどうも報告にあった例の特異個体の様でスクールの施設内を闊歩してるようです。あそこには逃げ遅れた生徒がまだ残っているのですが・・・」
「むう・・・それはまずい状態じゃな、しかし人数的にこれ以上人員を割くわけには・・・」
重くなる空気の中一人が声を上げた。
「・・・っハッハッハー!!!わかった!!!俺がスクールの方に向かうぜ。特異個体の古龍様と戦えるめったにない機会だからな!!」
「ちょっと!病院の方はどうするつもり!?」
「病院の方はお前一人で何とかなるだろう。将来、優秀になるかもしれないハンター達が死ぬのは避けたいしこれ以上無駄に虐殺されちゃあギルドナイトとして、いやこのメゼポルタの住民として黙っちゃおけないしね。もしかしてなにか?天下一品の弓術と美貌を備え持つ最強のナターシャ様は誰かが近くにいないと不安なんですかね?」

「フン！言ってくれるじゃない。いいわ！病院の警護は私一人でやるわ、レジェンドラスタの誇りに賭けて。」

「じゃあ決まりだな、ブロードとフラウは住民区の迎撃の手伝いをナターシャは病院の警護、俺はスクールの生徒の救出だな。よし人割がきまったぞ、じいさん。これでいいか？」

「ウム、だがしかしジュノそちの向かうスクールの方には、例の特異個体が居るのだぞ。大丈夫か？」

「何とかなるって。それに危なくなったら逃げて帰ってくるさ。じゃあ時間が惜しいから俺達は行くぞ。じいさんは残ってるギルドナイトとハンターの指揮をよろしくな。」

そう言うとジュノは工房の武器倉庫の方へと駆けて行った。

メゼポルタ武器工房　武器倉庫内

ジュノの武器倉庫内には様々な武器や防具が陳列されているどれも武器工房の親方達のメンテナンスが行き届いている状態で埃一つかぶっていない。

「（クシャルダオラか・・・ならこの防具の組み合わせでいくか・・・）」

ジュノはガンナー用防具を脱ぎ捨て近接用防具へと着替えを始める。

「（しかし一度にこんな大量に古龍が押し寄せてくるなんて・・・・しかも同一種。なにか嫌な予感がする。）」

近接用防具に着替え終えると今度は武器の選択に入った、武器倉庫内には様々な双剣が壁に立てかけられている。まるで双剣のショールーム一画の様にずらりと並んでいた。

「久々にこいつで行くか～なあ炎妃双【悪女】ちゃん」

そうジュノは言うと双剣を装備し武器倉庫の鍵を閉めハンタースクールに向け駆けて行った。

１０節　暗雲立ち込めるメゼポルタ（後書き）

音楽少年１

あるところに3歳からピアノ教室に通っている男の子が居ました、彼がピアノを習い始めたきっかけは幼稚園の時にとっても仲が良かった友達がピアノを習うからやると言うとってもシンプルな理由でした。彼は音楽が大好きでした。しかし小学校時代は彼自身引っ込み思案な性格の為か音楽の授業が終わってクラスの皆が音楽室から出た後少しピアノに触るくらいでした。何より彼がピアノを弾けることを皆に隠してた理由それはある時楽器店でピアノを弾いていた時に若い男女に「ピアノは女の子が習う習い事なのに弾けるなんてキモチワルイ」と言われショックを受けたせいでした。もしクラスの子にピアノが弾けるという事がばれてしまった場合「男のくせにピアノが弾けるなんてキモチワルイ」とあの時の若い男女と同じことを言われるのではないか、そんな恐怖が彼の中にありました。中学に入り今までの自分を変えようと彼はさまざまな努力をしましたでも引っ込み思案な性格は直らず小学校の時と変わらずじまいでした。ある時合唱コンクールのピアノの伴奏を誰にしようかクラスの皆で話し合いをしていました。彼は伴奏者に立候補しようと手を上げようと思いました。しかしあの時の若い男女に言われた言葉が頭の中で響き手を挙げて立候補できずに下を向き自分の勇気の無さに唇を噛み締めていました。その時でした一人の男の子が彼を合唱の伴奏に推薦してくれました。その子は幼稚園の頃一緒によく遊んでいた子の一人で彼がピアノを習っていること知っている人物の一人でした。

１１節　成長（前書き）

私は小中高と良く女性に間違われることがありました。中学の時宮城県に住むの田舎のおじいちゃんおばあちゃん達と一緒に一泊二日の温泉旅行に行ったのですが、男湯に入ろうとした時、たまたま居合わせていた従業員のおばさんが「お嬢ちゃんそっちは男湯よ女湯はこっちよ。」と肩を掴まれ女湯に案内されかけた事がありました。その時は「僕男です。」とおばちゃんに言い事なきを得ましたが。今思えば惜しい事を・・

11節　成長

住民区はイーオスやガブラスそして人々の死体で溢れかえっていた。そしてその死肉を貪るイーオスとガブラス。広場には死肉を貪る生理的不快音が響き渡る。

「・・・酷いな・・・地獄絵図じゃねえか・・・」

ジュノの存在に気付き襲いかかってくるイーオスとガブラスその目は正に狂気に満ちた眼をしていた。

「弱肉強食か・・・・」

双剣の鬼人化乱舞の前にして細切れになっていくイーオスとガブラス、それでもなお街の角の隅々からジュノを対しての殺気が向けられていた。そうまるで新しい獲物を見つけた獣の様に、ふとイーオスとガブラスが血の匂いに誘われて前方と後方が塞がれていることに事に気づく。

「ハッハー!!!いきなりココで宴ですか～いやあこれ位女の子にもモテたいもんだ。」

「・・・・ここで時間食ってる場合じゃないんだ。どいてもらうよ。」

言葉と同時に全方位のイーオスとガブラスに対して少し殺気をばらまく、近くにいたイーオスとガブラスはジュノのバラいた殺気によって身動きが取れなくなった。自身の死期を本能で悟ったようであった。しかし前方にいたイーオスが恐怖に狩られジュノに向け飛びかかって来た。だがジュノの双剣の攻撃によって首と体が離れ離れ

になる。

「恐怖に狩られ攻撃してくるとは・・・哀れだな。」

仲間のイーオスがやられ散会していくイーオスとガブラス、辺りが静かになるが辺りにまだ気配は残っている。

「（この気配はモンスターじゃないな）」

気配のもとをたどっていくジュノすると次第とその気配は大きくなっていく、どうやら何かに恐れ隠れているようだ。ジュノはモンスターの襲撃によって崩れかけている商店の前で足を止めた。

「おい、隠れてるんだろ?安心してよ。僕はモンスターじゃない人間だ。怖がらずに出ておいで。」

すると店の奥から子供が出てきた。

「怖かったでしょ、でももう大丈夫辺りのモンスターはだいたい倒したから。ここちょっと行ったところに避難所がある、そこまで一緒に行こう。」

「ヒッ!!!」

「（さっきちょっとばらまいた殺気に当てられたか、やっちまったな。）」

「ちょっと怖がらせちゃったかなごめんごめん。でもここにいたらモンスターに見つかって食べられちゃうかもしれないよ。だから僕と一緒に行こう。」

ジュノは子供に向けて手を差し伸べた、子供は恐る恐るジュノの手を取る。

「よっし良い子だ、君の名前は?」

「カイト・・・」
「カイト君かよし、行こう。」

ジュノがカイトの手をつなぎ外に出ようとした。しかしカイトは動こうとしなかった。

「あれ?どうしたの?カイト君?早く行かないと」
「外、怖い・・・・」
「あぁ～そうだよね怖いよね。ウーン・・・」

少しの間上を見上げ考え込むジュノ。すると名案が浮かんだのかカイトの方に振り返った。

「じゃあ、お兄さんがおんぶしてあげるから君は目をつぶって耳を僕の背中に当てて僕の心臓の音を数えてるんだ。それで僕が良いよって行ったら目を開けて。そしたら避難区だから。」
「うん。わかった。」
「よし良い子だ!さあ背中に乗るんだ。」

そう言うとジュノは背中にカイトを乗せ住民区の避難所に向け駆けて行った。

住民区　避難所扉前
避難所までの道のりの最中は何とかモンスターとの遭遇は避けることができ二人は無事に避難所までたどり着くと避難所の入り口には十数名のギルドナイトと上位ハンターが扉を防衛していた。扉の方に向かうとジュノの知り合いのギルドナイトの二人のシンとエビィが居ることに気付いた

「おーい、シン君!!一人逃げ遅れた子が居るからその扉をあけて

くれ～。」
「おっ、ジュノさんじゃないか。いつ戻ってきたんだ？」
「ついさっきだよシン君、いやあ酷いありさまだね。」
「そうだね、こんな一気に古龍が攻めてくるなんて初めてだから。みんな慌てふためいて避難させるのに時間が掛かったよ。それよりその背中の子が逃げ遅れた子？」
「そうそう、よし着いたよ目を開けてごらん。」

そう言うとジュノはカイトを下ろし頭を撫でた。

「よく頑張ったね。君は強くて偉い子だ！！」
「ほんと？昆虫王者オウビートより強い？」
「あぁ、それは昆虫王者オウビートの方が強いな。なんせ様々なモンスターを倒してきたしね。」
辺りに微妙な空気が流れる。
「ジュノさんそこは空気読もうよ・・・それより君、早く扉の中に入って。エビィさんこの子を扉の中へ連れてってやって。」

シン後ろを振り返りそう言うとエビィと呼ばれた女性が前に出てきた。

「うーす。ジュノさん、たまにはギルドに顔出してくださいよ。仕事が沢山あるんですからね」
「ハッハー！！考えとくよ。」

エビィがジュノに向かって注意を言うと辺りにモンスターの大きな咆哮が響き渡った。

「この咆哮、ハンタースクールの方から聞こえてきましたね。」
「そうだね・・・まずい！！早くスクールの方に救助に行かないと。

エビィさんシン君その子の事頼むね。じゃ！！！」

そう言うとハンタースクールの方へとジュノは駆けて行った。

「あっジュノさん！！！まったく忙しない人だ。エビィさん、その子の事頼むよ。」

そうシンに言われるとエビィは男の子の手を取った

「君よくがんばったね～おねえさんと一緒に扉の奥に行こう。きっと君のお母さんやお父さんもいるはずだよ。」

「うん。それよりお兄ちゃん大丈夫かな・・・？」

「あの人なら大丈夫だよ。さあ扉の中に行こう！」

そうカイトに言うとエビィはカイトと共に扉の奥へと入って行った。

ハンタースクール　施設入口

ハンタースクール内は住民区程酷いありさまではなかったがところどころ凍っていたりガンランスの砲撃によって壊された跡があった。

「ここか例の特異個体ちゃんが居る場所は・・・」

ハンタースクールの施設内を歩いているとさっきの大きな咆哮となんだかだれかの掛け声がグランドの方から聞こえてくる。

「もしかして特異個体ちゃんがもう誰かと戦っているのか？行ってみよう。」

ジュノはグラウンドの方へと駆けて行った。

ハンタースクール　グラウンド
グラウンドに出るとそこにはクシャルダオラと一人のガンランサーが攻防を繰り広げていた。

「高まれ！！僕の気合！！！　唸れ僕のガァンラァァァンス！！！！」
ドォン！！！！！

「ウッシャー！！ここまで弱らせれば！！！後は大丈夫だ！！！！でも、気を許しちゃいけないぞ僕！！！最後まで集中！！！」

そう独り言を言うとガンランサーは自身の顔を数回叩きクシャルダオラにむけて砲撃と突きの連続技を繰り出す。あまりの連続攻撃にクシャルダオラは怯み大地に倒れ身悶える。

「ウォッシャ―！！！ついにこの時が来たなっ！僕の強さを見せてあげるよ！」

そうガンランサーは言うとガンランスを前方のクシャルダオラに狙いをつける。

「喰らえ！僕の熱い魂の砲撃を」

ズガァン！！
クシャルダオラはガンランサーの砲撃をくらい動かなくなった。

「ウッシャ―！やっぱりガンランスは頼りになる武器だなぁ！惚れ惚れするよ、まったく！」

そう独り言をぶつぶつ言っている時だった砲撃をくらって動かなくなったクシャルダオラが最後の反撃とばかりガンランサーに向けて

自身の鉤爪を振りかざしてきた。とっさの事だったが何とか盾でガードをするガンランサーしかしガードを解いて盾を目の前から離すとすでにクシャルダオラが空気を圧縮し始め風翔弾を繰り出そうとしていた。

「（まずいこのままだとガードをしても回避しても奴の風翔弾をもろにうけてしまう。）」

ガンランスとはその圧倒的な砲撃能力と鉄壁をほこる正に移動する要塞のような存在だが、どんなに強固な要塞にも弱点があるように、ガンランスにも弱点がある。それは機動力である。ガンランスは機動力を大幅に失う代わりにその圧倒的な砲撃能力と鉄壁を手に入れた存在なのである。

「（まずい、当たるっ！）」

ガンランサーは目をつぶりガードを固めた。しかしクシャルダオラは風翔弾を放ってこず代わりに激痛に耐えかね咆哮を上げていた。

「あんま所構わず、撃ちまくってるとっ！いざって時大変なことになるぞタイゾウ！」

「君は・・・ジュノ君！」

ジュノはクシャルダオラの上に乗りの目に目掛けて双剣を突き刺していた。激痛に身悶えるクシャルダオラ。

「よし、今だ龍撃砲を撃ってやれ！」

タイゾウはガンランスをクシャルダオラに向け狙いを定める。

「よし！褌を引き締めて次こそはちゃんときめるぞ！」

ガンランスの砲身の先が徐々に輝いて行く。

「喰らえ！僕の熱い魂を！」

そう言いタイゾウはクシャルダオラに向けて龍撃砲を放つ。クシャルダオラは龍撃砲を全身に食らい悲鳴をあげて絶命した。

「いやー！助かったよ！ジュノ君！」

「顔近い。唾飛んだ。」

「あっ！ごめんごめん！つい興奮しちゃってさ！」

そう言うとタイゾウはジュノにハンカチを手渡した、ハンカチはほのかに熱かった。

「そうですか。それでハンタースクールをおそった古龍の迎撃にレジェンドラスタと上位ハンターが居るって聞いたが。上位ハンターの方はどこ？見当たらないようだけど。」

「あぁ！それはね！彼女にはスクールの生徒の避難させるのに専念してもらってるからだよ！」

「彼女は優秀だね！ちゃんと慌てているスクールの生徒を落ち着かせながら避難させてたよ！」

「そうか、その上位ハンターは今どこにいるんだ？」

「彼女かい！彼女なら今からスクールの北の棟の生徒を避難させるってさっき報告しに来たけど。」

「そうかわかった。ありがとな。それとさっき倒したクシャルダオラが報告に聞いてた氷と風を纏うクシャルダオラか？」

「いや、さっきのは氷なんて纏ってなかったよ。」

「（となるとまだどこかに潜んでいるのか）」

そう考えていると北の方角からとても大きな咆哮が響き渡った。

「むむ！まだ北の方にまだいるみたいだね！あっ！まずいあの子が危ない！」

「これはだらだら駄弁ってる場合じゃないな・・・タイゾウ！僕はこれから北の棟に行く。タイゾウはココで古龍や雑魚の始末をたのむよ。じゃあな。」

「待って！大丈夫かキミ一人で！？」

「お前より冷めてて冷静だから大丈夫さ。じゃあな頼んだ。」

そう言うとジュノはタイゾウの制止を振り払い北の棟へと駆けだした。

ハンタースクール　北棟部

北棟部の施設内、そこには全身リオハートシリーズに身を包み蒼火竜と桜火竜の上位素材で作られたボウガン、蒼桜の対弩・覇を装備した女性の上位ハンターが生徒の避難の指揮を執っていた。

「押さないで、慎重に進みましょう。皆離れてない？」

そう周りに注意を促すと施設内を小走りで移動する。しかしかなり離れた先に訓練用のモンスター、イャンクックが闊歩していた。

「（まずい、ここで見つかったら生徒達が危険な目にあわせてしまうかも知れない）」

「みんなはるか前方にイャンクックが居るわ、私は奴の様子を見るから皆は物陰に隠れて」

そう小さく言うと女性ハンターはスコープを覗きつつイャンクックの挙動を観察し始めた。

「（このまま気付かれずに去ってほしいけど、ん！あれは！！）」

女性がスコープ越しに見た光景それはスクールの生徒が訓練用の武器、鉄刀を装備しイャンクックに突撃していく姿だった。その太刀筋はまるでがむしゃらでイャンクックの甲殻に斬りかかっていた。その姿は恐怖に狩られ我を忘れているようだった。

「（まずい！）皆はココで待機してて！私はイャンクックに襲われている生徒を助けに行ってくるから。」

そう言うと女性はボウガンに貫通弾を装填し閃光玉を手に持ちイャンクックの元へと駆けていく。なんとか間に合うと女性はイャンクックの目の前目掛けて閃光玉を投げる。辺りは一瞬まるで昼間の様に明るくなった。

「君！大丈夫！？ココは私に任せて早く後ろに隠れて。」

「あっ・・・いいえ俺も戦います！訓練で鍛えた力見せてやる！ウォォォォ！！」

「あっちょっと！！！」

女性の制止も顧みず視界不良を起こしているイャンクックに賭けていく男子生徒。おそらく彼の思考の中では援軍が来たと勘違いしたのであろう。女性は呆れつつも状態異常弾の麻痺弾を装填し、イャンクックに向けて麻痺弾を撃ち込んで的確に撃ち込んで行く。徐々にイャンクックの動きが鈍りついに麻痺状態へと入り彼女はイャンクックに貫通弾を撃ち込んでいく。

「よーし。俺も、喰らえ鬼刃切り！！！」

そう言うと男子生徒はイャンクックにむけて滅茶苦茶に斬りつけるとイャンクックは尻尾を振りまわす。男子生徒は尻尾の攻撃をくらって吹き飛ぶ。

「痛って！！くっそー！まだまだー！！」

男子生徒はイャンクックに向かおうとする。しかしイャンクックは女性ハンターに向けて火球を撒き散らしながら突進している所だった。

「危ない、ハンターさん！！」

そう男子生徒は言うと女性生徒に向けて駆け足で駆けていく。

「（くっそ間に合え！）」

しかし男子生徒の気遣いは無駄に終わることになる。女性ハンターの撃った貫通弾はイャンクックの心臓射抜きイャンクックは絶命した。

「やったー！討伐できたぞ。ありがとうございます。」

そう男子生徒は女性に声をかける。しかし女性の顔は曇ったままであった。

「あの、どうかしましたか？」

≪パシッ！≫

女性は男子生徒の頬を叩いた、その目は涙で潤んでいる。

「君ね・・・どうしてあの時逃げなかったの?逃げない事がかっこいいと思っているの?君イャンクックを目の前にして怖かったはずだよね。危ないと思ったはずだよね。だって太刀筋が滅茶苦茶だったよ。」

「俺・・・そんなことありません!」

女性は静かに男子生徒の足を指差す。

「君・・・足震えてるよ。」

押し黙る男子生徒、しかし女性はなお男子生徒にむけて話を続ける

「君に私の尊敬している人の言葉を教えるね、死ぬな、危なくなったら逃げろ、自分の身も守れない奴が無理をして相手を守ろうとしてもロクなことにならない、身を犠牲にして助けるなんてことは最悪の下賤なんだよ、仲間を助けるなんてことは一人前に自分の身を守れる奴がするものなんだよ。」

「確かに助けてくれようとした事に関しては、お礼を言うよ。ありがとう。でもね君が怪我をしてまでも私を助けてくれても私は全然嬉しくはならない、むしろ悲しくて仕方がないよ。だって私のせいで君がもっと酷い怪我をしたっかもしれないんだもん。」

そう言うと女性は男子生徒肩を触り始めた。

「痛っつ・・・」

「ほらやっぱり、さっきのイャンクックの尻尾で怪我してる服を脱いで見せて薬塗るから。」

「いや・・・ちょっと」
「恥ずかしがってる場合?放っておいたらもっと酷い事になるかもしないから早く上脱いで座って。」

そう言うと男子生徒は服を脱いで地面に座った。そして女性ハンターは男子生徒の傷口に薬を塗り始めた。

「俺・・・どうしたらハンターさんみたいに強くなれるんですか?」
「また私の尊敬する人の言葉を借りるけどね、ゆっくりと強くなればいい。歩くように呼吸するように。」
「歩くように、呼吸するように、ですか。」
「そう、焦って早く強くなってもそれはまがいものの強さでしかないんだよ。これも私の尊敬する人の言葉だけど。」
「そうなんですか・・・わかりました。あのお姉さんのその尊敬する人ってどんな人なんですか?」
「フフ・・・アイルーが大好きで仕方がない人だよ。」
「アイルーが好きなんですか。女性の方なんですか?」
「ううん、男の人。それじゃあ一緒に避難しよっかついてきて。」

そう言うと女性は男子生徒の手を取り生徒達が隠れている所に向かった。
生徒達が隠れている所に行くと無数のランポスの死体が転がっていた。死体は細切れになっている。

「(なにこれ・・・誰がやったのそれに生徒達は。)」
「おねえさんこれは・・・」
「・・・後ろに隠れて!古龍の仕業かもしれない。」

そう言うと女性はボウガンを担ぎ辺りを警戒し始めた。しかしそれは杞憂に終わる。

「よっ！ユーノちゃん！」
「キャ！！ってジュノさん！どうしてここへ」
「いやココに例の特異個体のクシャが居ると聞いたからココに来たのさ、あと人命救助も理由の一つかな？ユーノちゃんは？」
「私は逃げ遅れた生徒を避難させるためにここに来ています。」
「って事は上位ハンターってユーノちゃんの事だったのか！いやあーすっかり強くなっちゃってまあ。」

そう言った雑談をしていると近くで古龍の咆哮が聞こえてきた。

「ん！隠れろ！」

周辺のがれきに身を潜め息を殺す三人。辺の気温が徐々にさがって寒くなっていく。遠くを見つめると冷気と風を練りつつ施設内を闊歩するクシャルダオラが現れた。クシャルダオラは通常青い瞳をしているがこのクシャルダオラは瞳の色は金色であった。

「（あれが特異個体のクシャか、なるほど確かに強そうだ。）」

そうおもっているとクシャがこちらの存在に気付いたのかじっとこちらを眺めていた。まるで獲物の品定めをするかの様に。

「おねえさん・・・」
「大丈夫だから後ろに隠れてて。」

しばらくこちらを眺めるとクシャルダオラは空へ飛びだった、飛びだったとたんに駆けだすジュノ。クシャルダオラの居た場所にいくとクシャルダオラは中空を浮遊していた。

「（まずい！罠だったか）」

とっさに双剣を抜き身構えるジュノ、しばらくの間お互い見つめあうとクシャルダオラはさらに上空へ飛び上がりさらに北へと飛びだって行った。

「あいつ、まさか誘ってるのか？」

「ジュノさん！大丈夫ですか？」

後ろを見るとユーノが駆けてきていた。

「奴は？奴はどこにいったんですか？」

「ああさらに北へと飛んで行ったよ多分大闘技場の方だな。ユーノはこのまま逃げ遅れた生徒の避難を頼む。僕は大闘技場の方へ行く、どうやら奴にデートに誘われちまったみたいだし。」

「でも・・・・一人じゃ危ないで・・」

ユーノの言葉をさえぎるようにジュノはユーノの頭を撫でた。

「今回ばかりは君を連れてくことはできないよ。危ないしね。それにユーノちゃんが居なくなったら逃げ遅れた生徒が危険にさらされる。わかってくれるね。」

「はい・・・わかりました。じゃあこれを受け取ってくださいきっと役に立つはずです。」

そう言うとユーノはジュノに秘薬を手渡した。

「あの・・・ちゃんと戻ってきてくださいね。ジュノさんから教えてもらった約束・・・ちゃんと守ってくださいね」

「わかってるよ、じゃあ行ってくる。ユーノちゃんも気をつけて。」

そう言うとクシャルダオラが待つ大闘技場の方へとジュノは駆けて行った。

１１節　成長（後書き）

音楽少年２

クラスメイトの男の子推薦もあってか彼は合唱コンクールの伴奏者候補になりました。最初はクラスのみんなにキモチワルイと言われるのではないかと不安でした。彼はその不安から逃れようと家に帰ってから毎日必死にピアノの練習をしました。彼を推薦してくれた男の子の顔に泥を塗る事は絶対にしちゃいけない。そう思い毎晩遅くまでピアノの練習をしました。近所迷惑と言われてもなお練習を続けました。そしてついに伴奏者候補から本番に向けての伴奏者を決める日がきました。自身の伴奏と皆の歌声を合わせる・・・いつもは一人で協奏曲を発表会で弾いているので彼は緊張には慣れている方だと思っていましたが。彼にとって今回の伴奏合わせはいつもと違う・・・一人で自分の感性を思うように表現する普通のピアノの発表会とは違い約３０人の歌声を自分の伴奏と合わせて弾くそれ加え指揮者の指揮にも合わせなくてはならない。合唱の伴奏と言うのは飛行機に例えると伴奏は機体、いくら操縦者が素晴らしくても機体が欠陥物だと合唱全体は聞くに堪えれない物になってしまう。彼の中にさまざまな考えが交錯していました。演奏が終わった時もし皆から冷ややかな目を送られてしまったらどうしよう、【最悪、ヘタクソ、期待外れ、キモ】そんな感情が載せられた目線を送られたらもう僕はつぶれてしまう。とうとう彼の演奏の番となりました。彼の心拍数はもう最大でした、ピアノを弾く前椅子に座りましたしかし緊張の為か目を泳がせ音楽室内のさまざまな場所を見ていると当たりがざわつき始めました。「無理だ、僕には無理だもう辞退して楽になろう。」そう思い彼は椅子から立とうとしました。ここで【ゴメーン。やっぱり僕にはムリでーす。】と道化を演じ楽になろうと。

12節　アラウゾル　覚醒（前書き）

数年前から最近の子供の名前がユニークと話題になってますね。
一例ですが天（ソラ）と読むみたいですが、私の中では天（＊ゼオライマー）ですね。
＊冥王計画ゼオライマーと言う作品に出てくるめちゃ強いロボの名です。天のゼオライマーと作品の中では呼称されてます。だからゼオライマー

12節　アラウゾル　覚醒

クシャルダオラ　別名　鋼龍
広範囲に生息する古龍種、金属質の外殻を持ち前肢と後肢の間に巨大な皮膜状の翼を持つ。瞳は青で、口先がやや赤みを帯びる。雨や吹雪とともに出現し、クシャルダオラが居る区域では特に風雨が激しくなるため天候を操る能力があるとされている。体に風の鎧を纏う、この風の鎧は近づくハンターや矢や弾丸をはじき返す効果があると伝えられている。

大闘技場の前に着くとジュノは研石で双剣を研ぎ始めた、これから戦う相手はまだ誰もが戦った事がない特異個体、それ相応の準備をしておかないとこちらが食われてしまうかもしないからだ。アイテムの準備も確認しジュノは立ち上がる。

「さて、あまり待たせるのも悪いしそろそろ行くか。洒落た待ち合わせ場所に」

そう言うとジュノは大闘技場の中へと入って行った。

大闘技場　内部
大闘技場に入るとクシャルダオラが雄々しく立ち尽くしていた。その姿はまるで立派な彫刻の様にも見えた。

「よお、待たせたな。俺が不在の時によくここまでやってくれたねホント困った奴だよ。君は。」

クシャルダオラは依然と雄々しく立ち尽くしこちらを見続けている。まるで人語を理解して話を聞いてるようにも見えた。

「こんだけやられちゃお礼しなきゃな、それじゃあ行くよ。」

そう言うとジュノは双剣を抜くとクシャに向かって駆けていくそれと同時にクシャルダオラが咆哮を放った。

「まずはその角を折らせてもらうぜ。」

そう言うとジュノは角に向けて双剣を突き刺し回転切りを加える、しかしクシャルダオラは前足の鉤爪で攻撃を放ってくる寸での所でよけるジュノ、

「ふぅ・・・あぶないあぶないっ・・・・なっ!!!」

しかしクシャルダオラの放った打撃の周辺から竜巻が巻き起こりジュノの体は空中へと舞い上がる。

「!!!（こいつ通常の個体より風を操ってやがる）」

空中で姿勢をただし何とか頭から落ちる事は免れたがクシャは一気に間合いを詰めジュノに向かって風翔弾を放ってくる。

「うおっ!」

ギリギリの攻防が続き徐々に双剣の切れ味が落ちてくる。

「（まずいなそろそろ研がないと）」

ジュノは閃光弾を投げてクシャルダオラを怯ませようとした、だがクシャルは視界不良を起こしたものの上空へと飛び立ち、辺り周辺

にありったけの風翔弾を放ってきた。

「うそだろ！！！」

必死に逃げるジュノであったが持っていた高速砥石でなんとか双剣の切れ味を回復させる事に成功した。

「ずいぶんとすげえことしてくるじゃあねえか。」

そう言うと再びジュノはクシャルダオラに向かって双剣での連続攻撃を繰り出すその姿はまるでワルツを踊るがごとく、しかしクシャルダオラは怒りで咆哮し強力な風と冷気でジュノの体はまた空中へ投げ出され頭から無残に落下する。意識が吹き飛びそうになるが意識を引き戻し体を確認すると全身が凍傷を起こしており辺りの地面が凍りで覆われていた。

「（これは予想以上にまずいな・・・）」

硬化薬を飲み全身の皮膚を硬化させて再度クシャルダオラに切り掛るしかしクシャルダオラは一瞬にしてジュノの死角に回り込み風翔弾を放ってきた。

「がはっ！！！」

放たれた風翔弾がジュノの体に直撃し体が浮き上がる。そしてまた頭から地面に落下するしかしクシャルダオラは容赦なく中空に浮き上がりジュノに向けて地面を凍らせながら暴風を練って滑空突進を繰り出す。ジュノの体徐々に凍りながら空中へ投げ出された。

「（あばらの骨が何本か逝ったなこりゃ肺に刺さらなかっただけま

しか・・・にしても強いな。）」

意識が朦朧とするなか何とか立ち上がるジュノしかしクシャルダオラは大地を凍てつかせながら風翔波を口から放ちつつこちらへ迫ってきていた。

「（まずい！！）」

とっさに回避行動を取ったがそれも間に合わず空中へ投げ出されるジュノ、そしてクシャルダオラ空中へ投げ出されたジュノ胸目掛けて牙をむき噛みつき地面へと叩きつけた。
ジュノの上半身にはクシャルダオラによって噛みつかれた跡がのこった、ユーノからもらった秘薬を飲みなんとか態勢を立て直すとクシャルに目掛けて乱舞を繰り出すしかし、クシャルダオラはそんな攻撃をものともせずに力をこめて自分の周りに特大の竜巻を繰り出した。ジュノははるか上空へ投げ出され地面に落下し動かなくなった。体が動かずどんどん体内に流れる血が外へ流れ出ている事を感じつつジュノは思った。この傷はもう回復薬を飲んだとしても助かるほどの傷ではないことに。

「（ごめんユーノ・・・君との約束守れそうにないよ）」

勝利の咆哮を上げるクシャルダオラを前にしつつジュノは今までの事を思い出していた。

「（俺が死んだら誰が悲しむだろう、ユーノとブロードとフラウちゃんは泣くだろうな。ナターシャはどうだろ多分泣きはしないけど悲しんではくれるだろう。他の皆はわかんないや、ああなんだか体が寒くなってきた）」

クシャルダオラは最後の一撃をくらわすためジュノ向けて飛びかかって来た。それは第三者から見たらものすごいスピードなのだがいまのジュノにとってはとってもゆっくり飛びかかってくるように見えた。

「（ごめんみんな、先に行くよ・・・・・！・・）」

クシャルダオラがジュノに飛びかかろうとした次の瞬間だった、なんとジュノが起き上がり片手でクシャルダオラの突進を受け止めていたのである。

「・・・・・・・」

≪ゴシャ！！≫

クシャの鼻先が砕け散る音が闘技場に響き渡った。あまりの突然の出来事と鼻先を破壊された痛みで身悶えるクシャルダオラ。クシャルダオラは再びジュノをみると彼は片手に蒼い炎を纏っていた次第にその蒼い炎は槍状になっていく。

「・・・・・」

クシャが瞬きをした次の瞬間クシャの体にジュノが持っていた炎の槍が突き刺さっていた激痛のあまり悲鳴を上げるクシャルダオラ、

「（オカシイコイツハフツウノハンタージャナイ）」

「（ナンダコイツハ）」

そうクシャルダオラがおもっているとジュノは両手に蒼い炎を練り

次第にその炎を剣の形へと変化させる。そしてその刹那その剣でクシャルダオラの二対の羽を一刀両断する。
血しぶきが周り中に吹きあがりクシャルダオラの悲痛な声が響き渡る。
両手の炎の剣を消失させるとジュノのはゆっくりとクシャルダオラに近づく。クシャルダオラの目の前に立つと彼の背中に炎で象られた紋章が浮かび上がり体が徐々に浮いて行く。

「ガアアア

を残すのみだったっていうのにこんな事態になって私も何だか報われないよ。」

「実験体って言うのは止めてください。この子は私の子供です。」

「ハハッそうだったそうだった。じゃあ私は荷物の整理をして帰るよ。君も最後まで仕事がんばって。」

そう言うと扉から数人出ていきこの場所には女性が一人残った。

「（・・・・・）」

「この子は絶対に死なせない。せっかくこの世に生れて来た命だもの、どんな事があっても強く生きさせてあげなきゃ。だって私の子供ですもの。」

「（かあ・・さん）」

メゼポルタ　病院

「っはぁ！！！！」

「ここは・・・・病院・・・？」

辺りを見回すと病室の扉が開かれ、ナターシャ花をもって入って来た。最初ナターシャの顔は曇っていたがジュノが起きているのを確認すると花が咲いたようにぱっと明るくなり問いかけてきた。

「ジュノ！よかった、無事に起きたのね！！」

「あ・・・あぁ、」

驚きを隠せないジュノ、それも仕方ない事である彼の記憶によれば彼はクシャルダオラによって再起不能の重傷を負わされ死線をさまよっていたはずなのだから。

「なぁ、ナターシャ、俺は傷を負ったはずなんだがそれもかなり重症のそれが見当たらないんだけど。」

「はぁ？重傷？古龍に頭でも強く殴られたの？あなた大闘技場入口前で気を失って運び込まれたのよ。」
「えっ・・・・」
「あっジュノさん！よかった無事に目を覚ましたんですね！」

声のした方向をみるとそこにはユーノが立っていた。

「心配したんですよ。大闘技場前で倒れた時はもう心臓止まるかと思いました。」
「ユーノさんだっけ？ありがとうこいつの心配してくれて。ジュノ、彼女が病院まで付き添ってきてくれたのよ。ちゃんとお礼言いなさい。」
「あぁ・・ありがとうユーノちゃん。これで君も一人前のハンターだね俺を守ったんだから。」
「へへっ・・・わたしなんてジュノさんに比べたらまだまだですよ。だってあの特異個体を倒しちゃうくらいですから。」
「えっ、俺あのクシャ倒したの？」
「えっ、ジュノさんが倒したんじゃないんですか？だって私が大闘技場に向かった時クシャの切り取った翼もって立ってましたよ。あの鋼龍の翼を切り取るなんて流石ですね。」
「そう、なの？」
「はい、あっもしかしてあまり集中しすぎて自分のやった事忘れたんじゃないんですか～？それくらいの死闘だったんですね～。」
「確かに死闘だったね。」
「（僕は無意識のうちにクシャを倒したのか？でもあの傷をおって倒せるような相手じゃないし、しかも傷後残ってないし）」
「ん？どうかしたんですか？」
「あっいやなんでもないよ、起きたばっかだからまだ頭がボーとしてるみたいだ。あっそうだあの時の記事とかまだ発刊されてないの？」

「新聞なら私買ってきたわよ、あなたの看病のついでに読もうと思ったから。」
「ちょっと貸してくれ。」
そう言うとナターシャから強引に新聞を奪い取るとジュノは食い入るように新聞をみた。新聞にはこう要約するとこう記載されていた。
「ジュノ氏　お手柄クシャルダオラ特異個体を見事討伐する。大闘技場には無残に焼き焦げ原形を留めていないクシャルダオラと思われる死体がこれが凄腕ハンターの力なのか。ジュノ氏は疲労のため現在病院で療養中」
「（焼き焦げ原形を留めていないクシャの死体だと、俺はあの時火属性の武器なんて担いで行かなかったはず。なんで焼き焦げてるんだ・・・・）」
「ねえ、私も読みたいから新聞返してくれる？」
「おっおう。」
「（まあこれ以上考えても答えは見つからないか、この事は保留にして今は療養に専念するか）」
「ごめん、なんか疲れて眠いから寝るわ。」
「あっそうですか。私はこの後ギルドに呼ばれてるんですけど・・・・」
「良いわよユーノちゃん気にしなくて、こいつの監視は私がしてるから。」
「監視ってお前・・なんか俺悪いことしたみたいだからそういう言い方止めてよ。」
「あら？したじゃない。私を差し置いて特異個体と戦ったんだから。はあ、私の華麗な弓術でその特異個体を射抜いてみたかったわ。」
「フフ・・・じゃあナターシャさんジュノさんの事お願いしますね。」

そう言うとユーノは病室から出ていった。

「・・・・・」

「・・・あなた、ホントに大丈夫?」

「あぁ、大丈夫だよ。オバサン」

「フン!ならいいけど・・それとおばさんって言うなおじさん」

適当な相槌をうちジュノは目を閉じた。このへんな夢から覚めますようにと祈りながら。

12節　アラウゾル　覚醒（後書き）

音楽少年3

彼が椅子から立とうとしたその時でした、周囲のざわつきの中から「ガンバレ～」と声がしました。声の主を探すとそれは自分を推薦してくれた男の子でした。その声を聞いて彼は再び椅子に腰かけ演奏を始めました。もう彼自身の中ではもうどうにでもなれという心境でした。演奏を始め彼は自身の感性を信じ歌の盛り上がるところではクレッシェンドを効かせ壮大に歌の悲しい部分ではピアニッシモを聞かせ悲愴感を表現するように頑張りました。歌が終わり演奏も終わると待っていたのは冷ややかな眼差しではなく歓声でした。【上手い！すげぇ！カッコいい！！】彼はそれを耳にし耳たぶと顔が徐々に赤く火照っていくのを感じそれを隠すためにすぐに伴奏者候補の列へと引っ込みました。すべての伴奏者の演奏が終わりついに誰を伴奏者にするが挙手せいで決めることになりました。彼は別に選ばれなくても良いと思っていました、なぜならクラスの皆から賛美の言葉をたくさんもらったからです。彼はそれを糧にこれからの学校生活を頑張っていこうと思っていました。そして誰を伴奏者にするかの挙手が始まりました。最初に弾いた女の子にちらほらと手が挙がりました。そして次は彼の番となりました、するとどうでしょう多数のクラスメイトが彼の演奏が良いと挙手してくれました。かくして彼は合唱コンクールの伴奏者に選ばれました。彼が人生で初めて同年代の子達に認められた瞬間でした。彼はその後も一生懸命伴奏の練習をしました。するとある日放課後の合唱練習後彼は一人で伴奏の練習をしている時に一人の女の子が彼に話しかけてきました。彼にとってその女の子は特別な存在いわゆる意中の人でした。その女の子は言いました「君なら将来ピアニストになれるよ。」と思春期まっただ中の彼にとってその言葉は至高の喜びに他なりませ

んでした。彼はその言葉からピアニストになる事を決意し音大付属高校受験に向けての勉強を始めました。しかし勉強は困難を極めました。通常の勉強に加え　楽典　視唱　等と言った専門的な事も学ばねばならず。そして音大教授の元に個人レッスン等をしてもらいに遠くへ出向くこともありました。最初の動機は不純であれ彼は徐々に本当にピアニストになりたいと思い始めました。もちろん合唱コンクールの伴奏も毎年引き受けました、それが彼の思い人と話すための唯一手段であったから。

13節　ダムゼル・オブ・ザ・ナイト　夜の乙女（前書き）

この小説を投降し始めてまだ三日位しか立っていませんが、もう御二方からお気に入り登録されてて私はとてもうれしいです。メッセージとかも待ってますのでばしばし送ってください。でもお手柔らかにお願いします。

13節　ダムゼル・オブ・ザ・ナイト　夜の乙女

かつてない大量の古龍種の襲撃から一月が立とうとしていた。ジュノは三日間の検査入院を終えてマイハウスに帰宅を許可された。結局、今回の襲撃騒動は負傷者を多く出したものの、死者は十数名程度で済んだのが不幸中の幸いと言えよう。ただし一つ謎が残った特異個体クシャの謎の焼死である。ジュノは街の復興の手伝いをあらかた終えると、ギルドに呼び出され何か知っている事はないかと尋問され自分が特異個体と戦った時の現状を洗いざらい答えた。奴がどのような攻撃をしてきたのかと奴の見た目の何処が変わった所と自身が装備していたのは龍属性の武器という事そして自分が奴に瀕死の重傷を負わされたこともその後の記憶がまったくないということも・・・ギルドはそれを聞いてクシャルダオラとは別の新たなモンスターが現れ特異個体クシャを焼き払った、という推測に達しジュノはギルドから解放された。

メゼポルタ　ハンター共同墓地

ハンター共同墓地それはモンスターによって喰い殺された者達が集う墓地である、墓地の中には遺骨はなく形だけの大きな墓石が中央に立っている。墓石には様々な花が手向けられており、「勇敢なるハンター達よ、来世でも幸あらん事を」と墓石の中心に彫られている。

「・・・・」

「あら珍しい人が居るものね。」

振り返るとそこにはナターシャが花を持って立っていた。

「ああ、今回の襲撃で一人亡くしてしまったからね。」

「エリックさんね、私達より先輩よねたしか。」

そう言うとナターシャは墓石の前で花を手向けた。

「お前はどんな用できたんだ?」

「私は、前同行契約していたハンターさんが今回の襲撃事件でね・・・」

「そうか・・・」

二人はしばらく黙とうを続けその場に立った。時刻は夕刻もう日が沈み始めていた。

「あんたはこれからどうするの?」

「俺?俺はこれから酒場に行って飲むつもりだけど。お前は?」

「私は特にこれといった用事はないわ、私もあなたに便乗して酒場で飲もうかしら。」

「そうかそう言えばお前と飲むのは、久々だな。でもお前の場合この街でかなり有名だから普通の大衆酒場で飲むと大騒ぎになるんじゃないか?」

「有名なのはあなたも一緒でしょ、大衆酒場で騒ぎ起こしたくないならラスタ酒場で飲めばいいじゃない、あそこもお酒飲めるし。ほら行くわよ。早く行かないと満席になっちゃうわ。」

そう言うと二人は墓地を後にし酒場へと向かった。

メゼポルタ　ラスタ酒場

ラスタ酒場に着くといつものように酒場は賑わっていた。酒がまわり舞台の上で踊る者や落胆した表情で酒をのみ同行契約しているレジェンドラスタに慰められてる者まで様々だ。二人は隅のテーブル

に着くとアイルーに酒を注文した。

「俺、ホピ酒につまみはサシミウオの刺身で。」
「私は、ブレスワインにホワイトレバーのソテーで」
「合点ニャー！あっお客さん・・・・」
「ん？どうした？ああチップね、ほれ」
「ニャー！ありがとニャー！！」

チップをもらうとアイルーは厨房へと駆けて行った。

「しかし、普段は大衆酒場で飲んでるからこういうお高いとこで飲むとなんか緊張するな。」
「あらそう？私のような高貴で美しい存在はあんな大衆酒場でなんかとても飲み食いできないわ。それにあなたホピ酒ってダサいの飲むのね。」
「ダサいって・・・あのねホピ酒は庶民の味方とまで言われてて安い割に結構うまいんだぞ。しらないのか？」
「知るはずないでしょ、私の美貌にふさわしくないお酒なんて頼むはずないもの。でもちょっと飲んでみたいわね庶民の味ってのがどんなものか知りたいわ。今後契約者さんと飲むときに役に立つかもしれないし」
「そうか、じゃあ酒が来たら俺の分けてやるよ。」
そう言うとしばらくして頼んでもいない酒がテーブルに置かれた。
「おっ！サービスか！」
「ちがうニャー！あちらのお客さんがナターシャさんへとの事ですニャー！！」

そう言うと向こうのテーブルにグラスを掲げてこちらを見ている団子鼻の男が一人いた。

「お前、モテてるんだな～流石は雑誌でグラビア飾るだけの事はあるわ。」
そう言うとナターシャはジュノをにらみつけた、その睨みはモンスター顔負けで思わず怯んでしまった。
「グラビアの事は・・・言わないで頂戴・・・それとこの酒あなたに上げるわ。」
「えっ、いいのか俺は一向に構わないが。そんなことしたらあっちの男がかわいそうだろ～一口だけでも飲んでやれよ。」
「こういうのは頂かない事にしてるの！ナンパとかもお断りよ。それにこういうのを頂いたら安っぽい女って見られるかもしれないじゃない。私は高貴で・・・」
「あぁ～わかったわかった、高貴で美しい存在のこの私がこんな酒飲めるかって言うんだろ。もう耳が腐るほど聞いたわ。んじゃ遠慮なく頂くぞ。止めるなら今のうちだぞ。」
「いいから、さっさと飲みなさいよ。バカ」
「へいへい。」

そう言うとジュノはグラスに注がれた酒を一気に飲み干した。

「！こいつは黄金芋酒じゃねえか幻の酒って言われてるんだぞこれ。これをお前にって相当気合い入ってたんじゃねえかあいつ。なんか悪い事した気分だ・・・」

そう言っていると先ほどグラスを掲げた男がこちらに向かってきた。

「てめぇ！何さまのつもりだ！？俺はナターシャさんにその酒を贈ったのになんで、てめぇが飲むんだよ！」
「あぁ？こいつが飲んでいいわよって言うから飲んだだけだけど。なんか問題あり？」
「ナターシャさん！なんでいつも俺からの贈り物を受け取ってくれ

ないんですか！？」
「私をそんな安っぽい女として見ていたなんてあなたにはさらに失望したわ。ハンターさん、私とお近づきになりたかったら大巌竜の鱗で作ったバッグでも贈ることね。そしたら考えてあ・げ・る。」
「（うわあ、とんでもねえ事言うなナターシャ、大巌竜のバッグなんて相当高いぞ・・・つか注文まだ来ないの）」
「クッ！おいてめぇナターシャさんのなんなんだよ！さっきから親しそうに喋りやがって！」
「俺？俺はこいつの～ん～・・・・・」
「（めんどくせえな～しかしなんなんだろうな～俺はこいつにとって。幼馴染でいいか。）」
「俺はこいつのおさ・・」
「彼氏よ、なんか文句ある？」

場の空気が一瞬凍りつく、団子鼻の男は机に手を置き小刻みに震えていた。ジュノは小言でナターシャに話しかける。

「おいおいこの状況で彼氏はねえだろ、火に油注ぐようなモノだぞ。」
「あら良いじゃない。こいつにはもう散々なのよダサいし。ここはガツンと言ってやった方が良いのよ。それになに？私の彼氏役は不安なわけ？」
「いや、不安じゃねえけどさ・・・（もっと言葉を選べよ・・・）」

小言での会話を交わしていると男が机を叩きジュノに向けて大きな声で話しかけてきた。

「畜生！！決闘だナターシャさんを賭けて！！」

場が静まり返る。

「決闘ってそんな古典的な・・・それにほらそんな大声出すと皆が注目しますよ。」
「うるせえ！早く立て！」

しぶしぶと席を立つジュノ、団子鼻の男は挑発を兼ねてかジュノに向けて顔に当たりそうな距離で拳を向けてくる。

「なに？なにかはじまるの？」
「なんかナターシャさんを賭けて決闘するらしいよ。」
「へえなんか面白そうだな！」

場が徐々に盛り上がり始める、これでは穏便に済ますことはできないと決心したジュノはその場で身構えた。

「がんばれ～ジュノさん、ボクジュノさんを応援するよ～」

何処からかフラウの声や他のレジェンドラスタの声が聞こえてくる。店長のおっさんとバーテンダーはこの非常事態を収拾しようとするがもうあとの祭りである。

「行くぞ、ウオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

「お待たせしましたニャー！ホピ酒とサシミウオの刺身とブレスワインとホワイトレバーのソテーですニャ！！」
「おっやっと来たか！」

その場にしゃがみ込み料理を受け取るジュノ、男の放った拳は無残に壁へと当たった。男は拳の痛みをこらえながらその場をはねている。周りからは笑い声が聞こえてくる。

「しかし遅いんじゃない料理来るの。まあ可愛いから良いけど。」
「はい、申し訳ありませんニャ！ではごゆっくりですニャ！！」
そう言い一礼するとアイルーはその場を去っていった。ナターシャは我関知せずという感じで食事を始めている。

「んで決闘だよな・・・どうした？なんでその場をピョンピョンしてんだ？準備体操でもしてんのか？」
「うっうるせー！喰らえ。」

≪バキッ！！≫
団子鼻の男の拳がジュノの右頬にクリーンヒットした、男はニヤリと笑った。しかし

「よし、これより暴行の罪で君を拘束する。残念だったね俺ギルドナイトなんだ。」

そう言うと笑顔絶やさずジュノは男の腹目掛けて一撃を放ち男を気絶させた。

「良い夢、見ろよ。」

「てんちょ―ギルド本部に連絡頼むわ～事の内容はてんちょ～も見てたから俺が説明しなくてもわかるよね。先に手を出したのこいつだって事をちゃんと伝えたえてよ～。」

「さあ皆お祭りはこれで終わりこれ以上は何も出ないから各自テキトーに飲んでくれ。」

手を二三度叩きながら言うと見学していた全員は各自席に戻り談笑し始めた。

「さあ飲むか。あっホピ酒来たから飲んでみろよ上手いから。」
「ええ、そうね頂くわ。」

そう言うとナターシャはホピ酒を飲み始めた。

「あら、結構おいしいわね庶民の味もしかも飲みやすい。」
「お！いける口かじゃあボトルで頼むか～おーいホピ酒一本ボトルごと追加で」

メゼポルタ　酒場通り
二人は閉店した酒場の入り口で立ち尽くしていた、一人はべろんべろんに酔っ払っている女性ともう一人はその女性を見て後悔しているように見える男だった。

「しまった、忘れてた。ホピ酒は飲みやすいけどすごく酔いやすいんだった。」
「さあ！ベランボーメやらパネーヨやら知らないけど遊びにいくわよ～！」
「パローネなパローネそれに今の時間はキャラバンの商船が来てるだけだから行ってもつまんねえぞ」
「じゃあキエルの家に遊びに行くわよついてきなさーい。オホホホ！！」

そう言うとナターシャは千鳥足でキャラバンに向かったが行く途中で倒れ込んでしまった。

「おおい！大丈夫か？」
「グゥ・・・・」
「おいこんなとこで寝るな、変なのに襲われても知らんぞ。」
そう言いつつナターシャの頬を叩く。
「ん～大丈夫よ～私の弓術でぇ～オホホホ・・・グゥ・・・」
「だめだこりゃ。ナターシャのマイハウスに運ぶかって、レジェンドラスタ用のマイハウスの場所なんて知らねえしなぁ・・・・うーん。」
「家に運ぶしかないか・・・・」
そう言うとナターシャを背中に背負い込みマイハウスへと歩いて行った。
「そう言えば、子供の頃に良く疲れ切ったこいつを背負ってナターシャん家まで歩いてったな。」
「（こどものころか・・・ん、ナターシャの親父さんに稽古付けてもらった事と他の師匠に稽古付けてもらった事しか思い出せねえな。）」
ジュノはいろいろと考え込むと様々な謎がふつふつと現れてきた。
「（あれ？俺に父さんや母さんって居たっけ。なんか大長老の顔しか思い出せない。今まで狩りとギルドナイトの仕事ばっかりしてたからそんな事考えたこともなかったな。今度大長老のじじいに聞いてみるか。）」
そう思うと自身のマイハウスに向けて足を運んでいった。

マイハウス　ジュノ宅

「帰ったぞ～いサブローコップに水くれ水、二つな」
「お帰りなさいニャ！ニャニャ！その人はご主人様の彼女かニャ！？」
「違うよ、幼馴染だ。良いからコップに水くれ水二個な。」
「ニャフフフ！がってんニャー！！おーいみんなご主人様が彼女・・・」
そう言うと給仕アイルーのサブローは厨房へと駆けて行った。水を持ってきた。
「それじゃあ。ご主人様ゆっくりお楽しみに・・・・」
「違うっていってんだろ・・・」
「ニャ・・・ニャーン！」

給仕アイルーに一睨み効かすと給仕アイルーは奥へと逃げるように駆けて行った。

「ったく・・・おいナターシャ水だ、寝るならこれ飲んで寝ろ、おれのベット使って良いから。」
「うーん、頭回る・・・」

ナターシャは水を飲み干すとジュノのベットに倒れ込んだ。ジュノはナターシャのブーツを脱がしちゃんとベットから落ちないようベットの中央へナターシャを移動させシーツをかけナターシャを眺めた。

「こうして黙ってれば美人なんだけどな～うーん」

そう独り言を言うとジュノは自身のベットの下から代えの枕を取り出しテーブルに枕を置きそこに座り頭を乗せ眠った。

朝の日差しが部屋に差し込める、ナターシャは目を覚まし服装を整え身支度をする。ジュノはまだ机に座って眠っている。

「この、意気地なし。」

そう言うとナターシャはジュノのマイハウスから出ていった。

「意気地なしってなんだよ・・・それが一晩泊めてもらった奴が言う言葉かよ。」

そう独り言を言うとジュノは自身のベットに身を投げ出し再び眠りに着いた。

13節　ダムゼル・オブ・ザ・ナイト　夜の乙女（後書き）

音楽少年４

中学三年１１月某日、ついに音大付属高等学校への試験日がやってきた。彼はこの日の為に血の滲むような努力を行ってきた。部活を辞め友人の誘いをすべて断りただピアニストになると言う夢の為に心血を注いできた。彼は自らを奮い立たせ試験会場へと乗り込んだ。試験会場では３つの課題曲の最終確認の為か譜面を鍵盤に見立てて指で叩いている子、ＭＰ３ウォークマンで課題曲を聞きながら空間に作られた鍵盤で演奏をしている子といった様々なイメージトレーニングを行っている子たちにあふれていた。彼もその子たちを習ってイメージトレーニングを行った。目を閉じ頭を下に向けイメージする。課題曲をミスなしで弾く自分をそしてとうとう自分の番号を呼ばれ試験室へと入って行った。試験室はとても大きな講堂でその中央にピアノが一台置かれスポットライトで照らされている。番号と名前出身校を言うために試験官の人達と向き合う。２０メートル付近で８人の試験官が腰をかけている。本当はもっと近くに腰を掛けているのだろうが、彼にはとても遠くにいるように見えた。課題曲の演奏を促され演奏を行う、出来は今までの中で一番の出来だった。彼は確信した「第一試験は通ったな。」としかし現実はそんなに甘くなかった。数時間後合格者が張り出された。結果はピアノ科の第一試験に合格した人物は０人だった。彼は驚愕した、「あんな完璧な演奏だったのに。まあそれはいいきっと自身の演奏は試験官の心に響く演奏ではなかったのであろう。でも０人ってなんだ？３０人近く受けたんだぞ。」彼は思った「自分はこの世界では絶対生きられない。生半可な気持ちで入っちゃいけない世界なんだ」とそして彼のピアニストになるという夢の炎は徐々に小さくなっていった。それからの彼の学校生活は苦痛であった。付属高校にあれだけ

入ると周りに豪語していたのに入れなかったという事実を突き付けながら彼は生活していった。近辺の高校に入学が決まりもう中学生でいられるのも数カ月となった彼の周りにはなぜだか知らないが空前のカップルブームが訪れた。普通の中学生と比べ今まで浮世離れした生活を送っていた彼にとって最初はどうでもいいと思っていたが、彼も思春期まっ盛りの少年徐々に恋事に興味が湧き彼はピアニストになる事を勧めてくれた女の子に思いを告げようと決めた。しかしそれは一つのいたずら電話によって終わる事になる。ある少年が罰ゲームの一環として彼の意中の子の家に電話をかけ偽りの思いを告げたのである。その結果彼女はその思いを承諾しその少年は彼の意中の人と付き合う事となってしまったのである。彼のすべてが終わった時であった。彼は音楽の教員から卒業式の伴奏を頼まれたがそれを拒否した。彼の中ではもうどうでもいい事だったから、卒業式当日彼の周りは制服の第二ボタンやその他のボタンを欲しがる同年代の女子生徒及び後輩の女子生徒達で賑わった。彼は作り笑顔浮かべ事務的にすべてのボタンを女子生徒達に渡した。周りを見ると意中の子であった女の子がいたずらに告白した少年と一緒に笑顔で帰っているのが目に見えた。彼は下を向き帰路についた目に涙を浮かべながら。

１４節　真実の破片を求めて（前書き）

ついにタンクトップ一枚で夜道を歩くと肌寒くなってきましたね。
はぁガリガリ君ナシ味が恋しいです。

１４節　真実の破片を求めて

ジュノは自身のベットに寝転がり考え事をしていた。そうあの時の特異個体クシャの戦いを思い返していた。

「（あの時、俺は確かに重症の傷を負って意識を失ったはずだ、そうあれは死んでもおかしくない傷だった、なのに今何の後遺症もなくこうして生きてる。何故だ・・・）」

「（それに密猟団に捕まった時から頻繁に見るあの夢、母さんってなんだ。）」

「ご主人様、整備に出してた防具が戻ってきましたニャ。」

「整備？防具なんて整備に出した覚えないぞ。」

「なにを言ってますニャ、ならなんでここに防具が届けられるのニャ？」

「んまあ、そうだが・・・！」

「（そうだ！俺は確かあの時クシャに噛みつかれて防具に穴が空いたはずだ。）」

「なあサブローちょっと武器工房に行ってくるから留守番頼んだぞ。」

「はいですニャ！」

メゼポルタ　武器工房

「っらっしゃい！おおジュノじゃねえか！また珍しい素材を持ってきてくれたのか？」

「いや、今日は別件だ。親方俺の防具の整備履歴を見せてくれないか？」
「おう！ちょっとまってろ！おいアネット整備帳簿持ってこい！」
「（たしか整備履歴にはだれが整備に出したかが載っているはずだ、それにユーノがギルドの連中に俺が支えられて立ってたって言ってたしな。もし支えてた奴が俺の防具の整備に出してたなら整備前の防具の状態が分かるはず。）」
「はーいジュノさんこれ、ここ最近の整備帳簿ですよ～」
考え事をしていると間延びした声でメガネをかけた受付嬢アネットが整備帳簿を持ってこちらに駆けてきた。
「ありがとう、ってやっぱ多いな・・・」
「そりゃあそうですよ。今回の古龍襲撃の影響で防具が破損した人沢山いますもん。」
「おうい！！アネット客が来たぞ接客してくれい！」
「あっはーい。じゃあジュノさん読み終わったら帳簿机の上に置きっぱなしで良いですからごゆっくり～。」
そう言うとアネットはお客のもとへと駆けて行った。整備帳簿をしばらく読み返してみるとジュノの防具の整備記録の欄のページにたどりついた。
「っハッハ―！あいつか～なら話は早く済むな。おーいアネットちゃん！帳簿ココにおいておくからね～。」
そう言うとジュノはある場所へと駆けて行った。

メゼポルタ　大長老の間
「グーガァァ・・・・」
「大長老、大長老、起きてください。まだ勤務中ですぞ。」
「う、ウム!!・・・ゴゥ・・・ガァァ・・・」

大長老が眠気で船を漕いでいると部屋の扉が勢いよく開かれた。

「おい、じいさん。聞きたい事がある。」
「グゥ・・・・ガァァ・・・」
「ちッ・・・・また寝てんのか。しかたないな・・・・」

そう言うとジュノは部屋内を警護しているギルドナイトの方へ向かいギルドナイトから槍を借りた。そして殺気を込めて大長老の頭に向け槍をぶん投げた。しかし

「むん!!」

≪ガキン!!!≫

大長老は恐ろしい速度で脇差を抜刀し槍をはじき返し立ち上がった。

「何奴じゃ!その程度でこのわしの命を狙う事など百年早いわ!」

「そうかじゃあ次は殺気を殺して本気で投げることにするよ。」
「む!お主はジュノではないか何用でここに来た?」
「ちょっとじいさんに聞きたい事があってね、結構長くなるけど寝ないでちゃんと聞いてくれよ俺にとっては深刻な話だ。」

そう言うと大長老は椅子に座りなおし真剣な表情をした、どうやらジュノの真剣な表情をみて彼にとってとても重要な話になると悟ったようであった。

「この前の古龍襲撃の時の話だ。俺はあの時瀕死の重傷を負って倒れたはずだった、その証拠に防具に例の特異個体のクシャルに噛みつかれた跡があったことが解ったよ、さっき武器工房によって防具の整備帳簿を見せてもらってね、したら驚いたことにギルドの要請で防具の整備を行ったって書いてあってね。それと最近夢を見るんだよね。」

「ほう、夢とは」

「ぼやけた世界でさ、見たことない道具が沢山ある部屋の中で男と女が目の前で何かの作業をしてる夢。その男女のうちの女の方が自分の事を母さんと言ってたな。」

「なあおかしいよな、それに例のクシャルダオラ、羽を切り取られ黒焦げの状態だったんだろ、俺はあいつの羽を切り取った記憶もないし切り取れるほどの腕力もないはずだ・・・俺に親と呼べる人物なんていない、でもじいちゃんと呼べる人物はここにいる。なあじいちゃん俺に何か隠してないか？」

しばらくの間沈黙が続いた、そして大長老が静かに口を開いた。

「むぅ・・・お前にもそろそろ話しておくべきじゃな昨今の件もあるしのう、皆の者少しの間外に出てくれるか、そして古生物書士隊長も呼んできてくれ。」

そう言うと大長老以外の人物は部屋から出ていきしばらくすると古生物書士隊長の竜人族の男性が部屋の中へと入って来た

「お呼びでしょうか、大長老。」
「うむ、こやつの出生について話そうとおもう。お主もこやつの出生には詳しかろう。同席してくれぬか？」
そう言うと竜人族の男性はこちらへ振り返り何かを決心した表情で大長老の言葉に頷いた。
「うむ、では話そうとおもう、ジュノよこれから話す事はお主にとってとても大事な事じゃがそれ以上につらい事実でもある。それでも聞く覚悟があるか？」
ジュノは下を向き少し戸惑いつつも決心した表情で大長老に向き直った。
「わかった。覚悟はできた、話してくれ。」
「そうか、では話そう結論から言うとそなたはふつうの人間ではないかもしれぬ。」
「・・・！」
「そなたは突然現れた海底火山の急激な活動によって現れた島の遺跡の中で石の様な鉄の様な良くわからぬ四角形の古代文字が記されておった箱の中におったのじゃ赤子の状態でな。」
そう大長老が言うと今度は古生物書士隊隊長の竜人族の男性が話を始めた
「その当時の遺跡の調査を行っていたのが私達の隊でねとりあえず謎に包まれた君を急いでメゼポルタへと連れて帰ったよ。我々は君を古代文明の何らかの遺産だと考えたからね、だが君の事を詳しく調査してみても当時は何も分からなくてね、結局は遺跡に捨てられた人間の子供という結論に達したのだ。」

「わしらはそなたをとある村の夫婦に里子にだしたわしら竜人族は人間の乳飲み子を育てる事は出来るが同じ人間の者達によって育てられた方がそなたにとっても幸せだと思ったからじゃ。それから数年の時が過ぎた。この数年はそなたにとっても平和な時であったであろう・・・だが・・・・」

大長老が口ごもると竜人族の男性が淡々と続きを話し始めた。

「君を里子に出していた村が飛竜に襲われてね。私達はギルドナイトを率いて急いで救援に向かったよ。村に着いた時は村人は全滅、村に在住していたハンターも重傷の傷を負っていた。しかし奇妙な事にその村を襲ったと思われる飛竜は脚や羽を引きちぎられ焼けただれて死んでいたんだ、村の外れでね。我々は重傷を負っていたハンターに何があったか聞いてみたんだ。すると蒼い炎を纏った何かが飛竜を燃やしつくしたといっていたんだ。そしてその何かはまだこの周辺にいるはずだ。あれは新種のモンスターに違いないとも言ってたね。我々はその新種のモンスターを捜した。もちろん討伐する事を前提としてね。」

「・・・・・」

「そしてその新種のモンスターは村の裏山で発見された。我々はそのモンスターを討伐するために剣を向けた、するとその新種のモンスターは泣き始めてね、我々は戸惑ったよ、その姿はそう、人間の子供と変わらなかったからね。」

「モンスターは痛みを伴って涙を流す時はあるが、恐怖にたいして泣く事は無い。恐怖に対して泣くのは感情のある人間だけだ。私達はその子をメゼポルタに連れて帰る事にした。そしてギルドの監視のもとその子を育てることにした。はじめはそんな危険因子をギル

ドに置くのは危険すぎると言う言葉もあったが、でもその子はいろんな人に対して優しくてね。そんな声はすぐになくなったよ。」

しばらくの沈黙の中黙っていた大長老が口を開いた。

「しばらくするとその子は急にハンターになると言い始めての。なんでハンターになりたいのじゃ？と聞いたところハンターになって沢山の人を守るんだって言っておったのう、ワシらはいろいろとハンターになるための適性試験を行った。その結果、非常に高い適正結果が出てのう、体力、スタミナ、筋力どれも通常のハンターの平均を上回っておったよ。まだ子供の状態でな。ワシらはその子に様々な狩猟技術を叩きこんだ。するとその子は恐ろしい速度でその狩猟技術を覚えたのじゃよ。しばらくの間その子はハンターとして普通に過ごした。しかしワシらはまたいつその子が蒼い炎を纏うか不安でのその子をギルドナイトの籍に置いたのじゃ。監視と言う形での、でもその子供はだんだん大きくなるにつれてあまりギルド本部に顔を出さなくなった。どうしてギルド本部に顔を出さないのか？と尋ねたところ、めんどくせえといっておったな。フォフォ。あの時のような優しかった頃はどこにいってしまったのやら。」

「へっ・・・反抗期って奴じゃねのか・・・」

「フォフォ！そうかもしれんの。しかしその子は昨日の古龍迎撃戦の時にまた蒼い炎をだしての我々は焦ったよ。その子がこのメゼポルタを焼き払うのではないかと。だがそれは杞憂に終わった。もうわかっておるかも知れんがその蒼い炎をだした子供、いや今は青年と言うべきか、それがお主じゃ。」

しばらく押し黙るジュノ、場の空気が徐々に重くなっていく。そうすると古生物書士隊長の竜人の男性が語りだした。

「実のところ今君に対して古生物書士隊のなかで処分すべきか否かの議論が少しづつ湧きつつある。この街を救ってもらってもらったのにもかかわらずだ、その点に関しては本当に申し訳ないと思っているよ。そこでどうだろう少しの間この街を離れてはいかがかな。もちろん目的もなく離れるわけではない。この間に君が発見された遺跡に行ってみてはどうだろうか?もしかしたら君が本当に何者なのかが解るかもしれないよ。もちろんその時の遺跡の調査記録も君に渡すつもりだ。」

そういうと竜人族の男性は後ろへと下がり次に大長老が口を開いた。

「我々がそなたの出生について語れる事はここまでじゃ、後はお主次第じゃ。どうする?そなたの生まれ故郷かもしれぬその遺跡に赴いてみるか?」

「その・・・その遺跡に行ってみたら何かわかるかも知れないんだな。」

「確証はないが何か解るかもしれないね。」

「・・・だったら行ってみるよ。自分が俺が何者なのかが解るんなら。」

「そうか、じゃあ気球船の手筈は私がしておこう。君は準備ができたら私の元に来てくれ。では私はこれで失礼するよ。仕事があるんでね。」

そう言うと竜人族の男性は部屋を出ていこうとしたするとジュノが口を開いた。

「二人ともありがとう。小さなころから俺を守ってくれて。」

「フォフォ！素直にお礼を言うとは普段のお主らしくないのう。」
「まったくだ。じゃあ私は失礼するよ。」

そう言うと竜人族の男性は部屋を出ていった、そして大長老が静かに口を開いた。

「真実を聞いて後悔したかのう？」
「そんなことないさ、むしろ謎が解けてすっきりしたさ、まあ全ての謎が解けたわけじゃないけどな。じゃあ俺は旅行の準備でもしにマイハウスに戻るわ。ありがとなじいさん。」

そう言うとジュノは部屋を後にした。しばらくすると大長老がぽつりと一言言った。

「真実に突き進む勇敢な狩人に明るい未来あれ」

１４節　真実の破片を求めて（後書き）

毎回あとがきって何を書けばいいか悩みますね。前の節みたいに駄文を書いてつぶしてみようとも思いましたがやっぱりやめておきます。そろそろ登場人物のまとめ書かなくちゃな～。

１５節　時間を超えた出会い（前書き）

猫って５秒以上目があった状態だとその相手に好意を持っているって言われているんですよ。うちも猫が居るのですがたまに５秒以上目を合わせてくれます。良くできた猫です。

15節　時間を超えた出会い

ノルン島　　ディオネ遺跡

海底火山の急激な活動によって現れた島の遺跡、内部は広い広場となっていて奥に入口と思われる扉があるが調査隊の調査によるとどんなショックを与えても開く事はなくこれ以上の調査を断念、もっか謎に包まれた遺跡である。

「ほっほー謎に包まれたね～テキトーな調査結果な事。」

調査気球船　調査員控室

そう言うとジュノは調査資料を床に放り出した。今回ジュノは表向きは新しい狩猟場としてノルン島がその狩猟場にふさわしいかどうか見極めるためにノルン島に向かっている。しかし裏の理由としてはギルド内のジュノの立ち位置が落ち着くまでの自粛を兼ねての旅行でもあるし自身の出生に掛かる謎がつかめるかもしれないという希望をもってノルン島のディオネ遺跡に乗り込むわけである。様々な思いが交錯しながら気球船はノルン島へと到着する。

「ギルドナイトさま、ノルン島へ到着しましたので下船の準備の方お願いします。」

「あいよ、ところでこの船にはアイルーはいないのか?さっき甲板とか操舵室見ても一匹も見かけなかったけど。」

「この船にはアイルーは乗船しておりません。下船の準備をお願いします。」

「そうかい、わぁたよ。」

ノルン島　沿岸部

「では明日の夕刻にご迎えに上がりますのでそれまで調査の方お願いいたします。」

そう乗組員は言うと綱梯子を登り気球船へと乗船しノルン島から離れていった。沿岸部には様々な石柱が対をなして山頂まで続いている。

「明日の夕刻に迎えか・・・そんな短期間でいいのか?まぁ正規の生態調査じゃないからそんなもんなのか。しかしまあ、まだ沿岸部だけど何も居ねえなヤオザミの一匹くらいいると思って一応狩猟武器もって来たんだけど。」

そう言うとジュノは毒双剣　ローゼンエーアガイツ虚空へ向け振りかざした。

「まあ何も出なきゃ出なきゃで楽だけどね。じゃあ行くか遺跡に。」

そう言うとジュノは古生物書記隊長からもらった地図を元にして遺跡へと向かうどうやら遺跡はこの石柱をたどった先にあると記されていた途中ランポスに似たモンスター別の大陸ではジャギィと呼ばれるモンスターが日向ごっこしていた。

「なるほど新大陸のモンスターの生息が有りか、一応メモっとくかとりあえず生態調査の名目で来てる事になってるしな。」

そう報告書に記すとジュノは遺跡の方へ歩いて行った。

ノルン島　ディオネ遺跡

ディオネ遺跡に着くとそこは大きな広場が広がっていた広場の隅々

には腰かけの様な石が点在している。

「ここで昔集会でもしてたのかな、まあ中にはいてみるとしよう。」

そう言うとジュノは遺跡内部へと入っていった。遺跡内部は報告書に有った通り内部は広い広場となっていて奥に入口と思われる扉があるだけだった。

「（ここが俺が発見された場所、すべての始まりか。）」

ジュノは壁際に沿って歩いていく何か仕掛けがないかを確認するようにしかし虚しい事に何も仕掛けと思われるような物は発見できなかった。そしてついに開かずの扉の前へとたどり着く。

「（報告書ではどんなショックを与えても開く事はなかったって言ってたな。）」

ジュノは徐に双剣を手に取るとその扉へ向けて乱舞を放つ、しかし扉と思われる入口は切り刻まれる事もなく忽然と沈黙を保っている。

「ぬぅ・・・今度は蹴りまくって見るか。」

そう独り言を言うとジュノは扉に蹴りを入れるしかし扉にはなんの反応もなかった。しばらく扉とにらめっこをしジュノは扉に背中を預ける形でその場へと座り込んだ。

「だめだ・・・わかんね・・・・なんだよこれホントに扉なのかよクソ」

悪態をついてその場を見回すと扉の横にくぼみがある事に気付きそ

の場を立ち上がる。

「なんだのこのくぼみ?覗き穴か何かか?」

ジュノは試しにその穴にその場に落ちていた木の枝を突っ込む、中に何も居ない事を確認すると穴の中を覗いてみる。

「(ん～なんだ?なんかほのかに赤い光が見えるな)」

その赤い光をしばらく見つめていると穴の奥から声と思われる音が発せられた。

「Ｒｅｔｉｎａ　ｐａｔｔｅｒｎ・・・Ａｔｔｅｓｔａｔｉｏｎ・・・Ｅｘｐｅｒｉｍｅｎｔ　ｂｏｄｙ　ｎｕｍｂｅｒＪ－１０１　Ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ・・・Ｐｌｅａｓｅ　ｅｎｔｅｒ.（網膜パターン認証実験体Ｊ－１０１確認どうぞお入りください)」

「だれだ!中にいるのか!!答えろ!!」

その場に身構えるジュノすると大きな音と共に扉がゆっくりと開きだした。

「・・・なんだかよくわからねえが入れってことだよな・・・」

そう言うとジュノは恐る恐る中に入っていった。中にはいるとそこは見覚えのある空間が広がっていたそう夢の中で見ていた現代の技術では再現することのできない道具が沢山ある部屋。部屋の奥の中央には大きなガラスが一面に張られた何かが壁一面に張られておりその下にはこれまた面妖な文字書かれているボタンが沢山ある板が土台の上にびっしりと張り巡らされてあった。

「（なんだこれ？でもこれの存在をなんとなく知ってるような・・・・う～ん）」

そう思いつつ突起物を適当に押していくすると中央に人の手形がはめ込まれた板がある事に気付いた。

「なんだこれ？人の手形？か・・・とりあえず触れてみるか・・・・」

そういうとジュノはその手形の様な板に自身の手をゆっくり重ねてみる。その瞬間ジュノの手は拘束され身動きが取れなくなる。

「うわ・・！なんだこれ！くっそ！！はずれねえ！！」

「Ｊｕｓｔ　・・・ａ・・・・ｍｏｍｅｎｔ（少々お待ちください）」

「あっ！？さっきから何処にいやがる！隠れてないでこの仕掛けさっさとはずせよ。痛っ！！！」

拘束された手に何かが刺さる痛みを一瞬感じると拘束された手は外され．ジュノはその場に尻もちをついた。

「出てこい、今ならケツひっぱたくだけで許してやるからよ。」

そう言うと何かが動き出す音が聞こえてきたその音は徐々に大きくなり急に音が止まると一面が光に包まれる壁一面に張り巡らされていたガラスが光りだしたのである。

「Ｇｅｎｅｔｉｃ　ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ　ａｎｄ　ｌａｎｇｕａｇｅ　ｆｕｎｃｔｉｏｎ　ｓｅｔｔｉｎｇ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ.（遺伝子情報確認、言語機能設定開

始。）」

「さっきからわけわかんねえ事言いやがって?出てこいよこの野郎。」

「ようこそ、こちらはアイリスマスターコンピュータです。次のオーダーをどうぞ。」

「あいりすますたーこんぴゅーたー?何言ってんだお前?オーダーってなんだ。」

「システム内に、疑似思考パターンプログラムと思われるアプリケーションファイルを確認。オーダーにより強制インポート開始。シャットダウン後再起動しますシャットダウンまで残り5秒」

「だからさっきから一方的に何言ってんだよ。こっちの話聞けよ。」

「・・・・2、1、シャットダウン開始」

そう言うとガラスから発せられた光は消失しまた部屋内は薄暗い部屋へと様変わりした。

「なんだよ、一方的に変な事言って逃げやがった。クソ。」

そう悪態をつくと部屋から出ていこうとするが入って来た扉はいつの間にか閉められていた。

「はいぃ!?今度は閉じ込めですか!?ほんと性格悪いなお前。」

部屋内にはジュノの言葉が木霊するだけで何も変化はなかった。しかし入って来た時より多少の変化があったそれは何かがかすかな音を立てて動いている事と部屋奥のボタンが沢山付いている板のボタンの一つがほのかに緑色に光っていた。

「んなんだこれ?光っ・・・てるな。」

ジュノは緑色に光っている突起物を戻らなくなるほどの力で強く押した。すると部屋内はまたまばゆく光りだした。

「最新のプログラムを更新中しばらくお待ちください。」
「あっまた出やがったな今度こそ話聞いてもらうぞ！ココはなんだ？お前は誰だ？それと早く扉開けろ！」
「プログラム更新確認、アイリスマスターコンピューター起動します。」
「また話し聞いてねえよ・・・もういい！どうにかして扉ぶっ壊して勝手に出てくからな！」

そう言うとジュノは再び扉の方へとむかい双剣を取り出し扉を切ったり蹴ったりし始めた。
すると後ろの方から若い女性の声がした。

「フフフ、そんなことしてもその扉は開かれませんし壊れませんよ。」

若い女性の声と共に部屋内が徐々に明るくなっていく。

「今度は誰だ！何処に居やがる！答えろ！」

後ろを振り返るジュノ、しかしそこにはまばゆく光るガラスがあるだけだった。

「私はあなたの目の前にいますよ。」

そう言われるとジュノは双剣をしまい声のする方向へと歩いて行った。

「ガラスがしゃべってる・・・お前の正体はこのでけぇガラスなのか？それともガラスの中にいるのか？」
「いいえ、この部屋の内部そのものが私ですね。」
「えっ・・・どういうこと？この部屋がお前なの？」
「はい、そうですね。」
「ん～・・・そうなるとなんか喋りずらいしそして部屋から声がするのもなんか気色悪いな。壁に向かって喋ってる気がしてなんか変になりそうだわ。」
「フフ、確かにそうかもしれませんね。ちょっと待っててください今コミュニケーション端末に乗り換えますから。」

そうするとガラスから若い女性の声はしなくなり部屋内が沈黙に包まれた。

「ちょっとまってくださいって・・・まあ言われたら待つけどさ、こみゅにけーしょんたんまつってなんだ？」

しばらく待っていると部屋の一室が開かれそこから緑色の髪をした銀色と黒を基調とした服をまとったショートヘアーの女性が現れた。

「フフ、これでどうですか？さっきよりかはずっと話しやすくなったでしょ？」
「・・・・」
「？、どうかしましたか？」
「かわいいな、あんた。」
「まあ、かわいいだなんてそんな・・・」

そう言うと緑髪の女性は顔を隠し頭を左右に振った。

「（まずい、これは何かにめざめそうだ・・・）」

緑髪の女性はしばらく頭を左右に振るとはっと思い立ったようにジュノに向き直った。

「申し遅れました。私の名前はアイリス。お帰りなさいジュノ。」
「ん?あぁただいま・・・ん?なんで俺の名前知ってるの?」
「フフ、それはですね手を出してもらえますか?ジュノ?」
「えっ!ああこんな風にか?」

アイギスに言われるとジュノは手のひらを前へ突き出した。

「あはは・・・そうじゃなくてですね。」

そう言うとアイリスはジュノの手を取るよう自身の手を重ね手をに握った。

「ちょっと頭の中が変な感じになりますけどすこし我慢してくださいね。」

そう言うとアイリスは目を閉じ何かに意識を集中しだした。するとジュノの頭に様々な情景が頭に送り込まれてきた。

「うわっなんだこれ!?ちょっとアイリスちゃん!?」
「私のデータベースにある。データをあなたの頭に直接送っている所です。」
「でーたべーすってなに?」
「えっと…記憶の塊見たいな物と言えばわかりますか?」
「なるほど、記憶の塊ね・・・」

ジュノがそう言うとアイリスは静かにゆっくりと喋りだした。

「まずなぜ私が貴方の事を知っているか言う前に順を追って説明していきますね。私達の文明は最初こそは生きるためと食を得るために手に武器を持ち獲物を狩る低俗的な物でしたが。徐々に様々な技術が発達し武器を手にして獲物を狩る事はなくなりました。しかし獲物を狩る事はなくなりましたが人々同士の戦いは無くなりませんでした。」

「人々の争いが起こるたびに技術や文明は発展していきました。そして最終的には自分自身をコピー・・・あっ分身って言った方が解りやすいですね。分身を作りだす事や古代にほろんだ生物を生き返らしたり、あらたな生物を生み出したり、自身の寿命を延ばしたりと様々な事が出来るようになりました。正に天地創造の神と同列になったと言っても過言ではありませんでした。あっ・・・神と言うのはですね。」

「なんかすごい事や圧倒的な力をもった者のたとえだろ、いいから話を続けてくれ。」

そう言うジュノは言うとアイリスはだまって説明を続けた。

「じゃあ続けますね、さっき旧人類は古代に滅んだ生物や新たな生物を生み出したりする事ができたって言いましたよね。旧人類はそれらの技術を応用して人々の間で語られてきた空想上の生物、そうですね人々達の間ではドラゴン・ワイバーン・ヨルムンガンド・フェンリル等と伝えられていた生物を生み出すことに成功しました。」

「（なんだこれ・・・リオレウスにクシャルダオラにオルガロンにラヴィエンテにそっくりとまでは行かないが似てるじゃねえか）」

「ん?どうかしましたか?ジュノ?具合が悪くなったのなら一度中

断しますよ?」

「あ・・・あぁちょっと考え事してただけだ。話はちゃんと聞いてたからな。安心してくれ。」

「フフならよいですが、続けますね。神話などの空想上の生物を生み出した旧人類はそれを娯楽の一環として愛玩物として手に取るようになりました。しかし心無い人々がそれら空想上の生物を上手く躾けることや手なずけることができなくなりそれらの生物を捨てる人々が次々と現れました。当初はそう言った事が起きてもそれらの生物が旧人類に危害を加えないように力も貧弱で小さく繁殖力もほとんどなく短命に造っていました。しかしある時捨てられた生物の中から非常に強い力を持ち繁殖力も高く長寿な個体が現れ始めました。」

「徐々にその強力な個体は増え自らの遺伝子を組み換え巨大化し旧人類の脅威になりました。旧人類はそれらの生物を神獣と名付けました。皮肉ですね空想上の神話に出てくる生物をいたずらに造り、その生命に人間が苦しめられるなんて・・・・」

「・・・・・」

「しかし旧人類はこの現状を打破するためにそれらの生物を狩る。神獣の強力な力を身に宿し人語を理解し人類に忠実な人型の生物を作りました。彼らはアンサラー と呼称されました。アンサラー達は神獣達を狩り続けましたその絶対的な力を持って。やがて神獣達はアンサラー達の活躍によって我々の生きていた世界で姿を見せなくなりました。こうして神獣達によって旧人類は滅ぶ事はなくなりました。しかし・・・・」

「旧人類は新たな問題を抱える事になりました。なんとなく想像は付くでしょう?そうです神獣達を狩り終えたアンサラー達をどうす

るかです。旧人類の大半はアンサラ―達を処分する事に賛成しました。しかし少数の間でアンサラ―達と共生を望む者もいました。それらの研究を行う研究所もありました。でも世論というのを動かすのは難しいものでそれらの研究所はほどなくしてアンサラー達を処分する者たちによって襲撃され、そして閉鎖されていきました。」

「ちょっと休憩しますか。これが私達が築いてきた文明の大方のあらすじですね。なにか質問はあります？」

アイリスはジュノに向けてそう言うとジュノは質問を述べた。

「そのアンサラーって奴、それの事をもっと詳しく知りたい。」

「解りました。アンサラ―はさっきも言ったように特殊な能力を宿した人間の様な物です。ほんらい人間は体内受精を行い女性の体内で子を育みますが、アンサラ―の場合は体外で受精を行いその受精卵は試験管の中でまた新たな遺伝子。そう神獣達の遺伝子を組み込み培養液の中で育成を行います。アンサラ―は旧人類の命令に忠実に作られ、生成時に脳内の脳幹部にある特殊な神経データを組み込まれそして完成となります。ですから彼ら自体が旧人類に抵抗や命令違反をする事は一切ありません。アンサラ―の培養は様々な国で行われました。もちろんこの研究所でも培養は行われていました。この研究所では１００体の培養に成功しています。そして１０１体目の生成の過程でこの研究所は襲撃を受けました。しかし一人の女性のおかげでこの１０１体目は処分される事は免れました。」

「その女性の名前と顔は！？」

「はい。その女性の名は栗実　夏奈博士、生物工学や脳科学に詳しく私の疑似思考パターンのもととなった人です。あっ・・・疑似思考パターンと言うのは解りやすく言うと魂の塊みたいなものですね。」

「栗実　夏奈・・・・・」

頭の中で映し出された彼女の顔はジュノが夢の中でみた女性とうり二つだった。

「栗実博士は実験番号１０１番を我が子の様に育てました。なぜなら１０１番には彼女の遺伝子情報が使われていたからです。彼女は幼いころ病気で子供を産めなくなり何とかして自分の遺伝子を引き継いだ子供が欲しかったのでしょう。しかしアンサラ―処分賛成派の犯行により命を落とします。彼女は命を落とす寸前にあかちゃんの状態まで体の成長を後退させた実験体番号１０１培養液から取り出し生命維持装置を取り付けコールドスリープさせ封印を施し命を落としました。封印した子に明るい未来を祈りながら。」

そう言うとアイリスはジュノの手をはなしてジュノの方を向いた。

「これがあなたに対しての答えになりますね。他に質問とかありますか？」

「・・・その後旧人類はどうなったんだ？」

「すいません。隕石の衝突により氷河期を迎えた事まではデータベース上にはあるのですが氷河期時の旧人類の動向については私のデータベースには記録がありません。」

「・・・あんたが・・・いや貴方が俺の母親・・・母さんなのか。」

そうジュノが言うとアイリスはゆっくりとジュノの方へ振り返りジュノにほほ笑みながら喋り始めた。

「フフ、そうですね、姿と形は違い心は疑似的な物ですけど貴方の母親と言われればそうかもしれませんね。」

アイリスはそう答えるとジュノにほほ笑みを向けてこう言った。

「ジュノ、お帰りなさい。大きくなったわね。」

そういうとジュノは目に涙を浮かべその場にしゃがみ込みアイリスに抱きついた。

「母さん・・母さん・・・!」

「はいはい、こんなに大きいのに泣いてたら恥ずかしいですよ。」

「だって…だってさ・・・」

「よしよし、姿形は違うけどまた会えましたね。もう泣かないで愛しい私の息子よ。」

そういうとしばらくの間ジュノはアイリスに抱かれ頭を撫でられていた。

15節　時間を超えた出会い（後書き）

英文が間違ってたら言ってくださいね。

１６節　力の使い方（前書き）

前の１６節は登場人物紹介でしたが、こっちを投下してからの方がキリがいいかなと思いまして差し替えしました。次の１７節は登場人物紹介まとめです。

16節　力の使い方

メゼポルタ　マイハウス

ジュノのマイトレハウス内に何やら怪しげに思案に暮れる生物が一匹居た。

「ニャハハー！今日はご主人様も居ないしサボり放題ニャ！！」

そう言うとジュノの給仕ネコの中の一匹であるサブローはジュノの寝ているベットに飛び込みその場で飛び跳ねた。

「ニャハハハ！！！ものすごいフカフカで跳ねるニャー！！」

サブローはベットの上で飛び跳ねているとブロードが急に訪ねてきた。

「先輩、この前貸してくれた昆虫王者オウビートの単行本返しに来ました。」

「ニャ！」

「あっ・・・」

「ニャーン！！！！！」

ノルン島　ディオネ遺跡

ジュノはしばらくの間アイリスに抱きつき泣いていた姿は違えど母親との再会に涙していた。

「・・・・・」

「もう、落ち着きましたか？」

「えっ、ああうん。落ち着いたよ。」

そう言うとジュノはアイリスから離れアイリスをまじまじと見た。

「でも、やっぱり自分より幼いというか自分と同じ年代くらいの女性を母さんって言うのは、なんか変な気分だな。」

「フフたしかにそうかもしれませんね。無理に母さんと呼ばなくてもいいですよ。今の私は栗実　夏奈博士の疑似思考パターンをインストールされたアイリスと言う存在でもありますから。そうですね最初はアイリスと呼んでいただいても構いませんよ。」

「そう、じゃあアイリスちょっと疑問に思った事がある。俺のアンサラーとしての能力っていったい何なの?」

「ええと、あなたの能力は主に自然発火能力と炎を自在に操る力と異常な再生能力そして通常の人間よりも遥かに高い身体能力ですね。なにか兆候がありましたか?」

「ああそう言えば二回ほど炎を纏ってモンスターを狩ったらしいよ。あっもう一つ疑問に思っている事があるんだけど聞いてもいいかなアイリス?」

「アイリス達が暮らしてた世界に造られた、確か神獣だっけ?あれと似たようなモンスターがこの世界に居るんだけど。なにか関係があるのかな?」

「神獣に似たようなモンスター・・・ちょっとまた手をかざしてもらってもいいですか?あなたの記憶の中のにある映像を読み取りたいので。」

そう言うとアイリスは目の前に手を差し出した、ジュノはその手に手を重ねる。

「ではそのモンスターを思い描いてください。そうすると私の中にその情報が流れますので。」

ジュノは今まで戦ってきたモンスターを思い描く。飛竜や古龍、牙獣種の事を思い描きながら。

「これは・・・確かに私達の暮らしていた時代に現れた神獣と似ていますね。姿は少し違うと言うよりこれは独自に進化していますね。」

「やっぱり、でも神獣は俺達アンサラ―達の手で全て滅ぼされたはずだよね。」

「はい確かにそのはずです。でも何らかの形で生きながらえ氷河期を越しこの世界で繁殖を行ったと考える事が正しいでしょう。」

そう言い手を話すと少しの間アイギスは考え始めた。

「ねえジュノ今あなたから読み取った映像の中でハンターとギルドナイトっていう単語が出てきたけどそれはいったい何かしら?」

「ああギルドナイトとハンターって言うのはモンスターを狩る事を仕事としている人達の事だよ。俺もその仕事をして今暮らしてる。」

「なるほど。旧人類が犯した過ちを新人類が引き継ぐ形で償っているという訳ですか・・・すいません私たちの過ちを引き継がせてしまって。」

「いやいや、そんな謝んなくたっていいよアイリス。それに今のところこのモンスター達と共生を取れてる部分もあるんだ。人に懐くモンスターだっているしモンスターと一緒に暮らしたりもしてるんだよ。」

「そうですか・・なら良いのですが。」

そういうとアイリスは部屋内を歩き回り始めた。なにやら考え事を

しているらしい。

「ねえジュノ、あなたは多くの人々を守る力が欲しくないですか？話しを聞く限り今のあなたは自身に宿った力の使い方をまだ上手く制御で来てないようです。制御できるようになれば自身を守ることも、仲間を傷つけることもなくなり、多くの人達を救う事が出来ます。」

そう言われるとジュノは少しその場に立ち尽くし考え始めた。

「確かに、今の俺は力を上手く利用できてないから。俺は力を上手く使えるようになりたい。皆を守る力がほしい。」

「フフ正義感のある子に育って母さんは嬉しいわ、ではまず力の最適化から行いましょう。」

「さいてきか？」

「えっと・・・力を効率よく使えるようにするって考えてください。」

「なるほど、わかった。」

「では私の手を取って目を閉じ心の中に蒼い炎を思い描いてください。」

そう言うとジュノはアイリスの手を取り意識を集中させ、心の中に炎を思い描いた。

「こんな感じ？」

「はい、そのような感じででは次にこの炎を様々な形に変形させてください」

「うーん…」

ジュノは心の中に造った炎を様々な形に変形させた、ある時は炎を

剣の形に槍の形に盾の形に柱の形に・・・

「こんな感じかな、どうアイリス。」

「はい、十分です。流石は私の子ですねとっても良くできました。では次はお外に出て実際に能力を出しての実戦に移りましょう。付いて来てください。」

そう言うとアイリスは扉を出ていった。ジュノもそれに続き扉を出た。

「ここで良いでしょう。」

そう言うとアイリスは立ち止った。立ち止った所は遺跡の入り口付近に広がる円形上の広場だった。

「久しぶりにお外に出ると日差しが気持ちいですね～。あっごめんなさい。では能力出し実戦に移りましょう。」

「今度はどうすればいいんだ?」

「ええとですねさっきの要領で心に炎を思い描いてそれを外に引き出すって感じですかね。

簡単に言うと「炎よでろー」ってかんじです。」

「炎よ出ろ―ねぇ・・・ウーン」

そう言うとジュノはさっきと同じように心の中で炎を作り出しそれを外に出すように思い描いた。

「あっ!腕が炎に包まれてきましたよ。その感じで次は炎を自分の思い描いた形にしてみてください。大丈夫きっとできますよ。」

そうアイギスに言われるとジュノは炎を剣の形へと変形させた。

「おっこんな感じか～」
「そうですそうです、では今度は様々な形に変化させてみましょう私の言ったとおりに炎を変形させてくださいね。じゃあ最初は鳥。」
「よーし・・・」
ジュノとアイリスはそのまま特訓に明け暮れた。

メゼポルタ　マイルーム
サブローはマイハウス内にある食材の確認をしながらぶつぶつ独り言を言っていた。
「ニャー・・・さっきはブロードさんに見られたから何とか事なきを得たけど今度は慎重にサボらなければニャ・・・」
そう言うとマイハウス内にある食材を確認し終えると、床に横たわりアイルー用に発刊されている週刊アイルーを読み始めた。
「ニャーこのオトモアイルー装備かっこいいニャー、僕もご主人様の狩りのオトモをしてみたいニャー、リオレウスはちょっと怖いけどドスファンゴ位なら何とかなるニャきっと。ニャニャ！この子可愛いニャ―！！なるほどミーちゃんって言うのかニャフフフ・・・」
「ちょっと！！ジュノいる！？この私の買い物に付き合いなさいよ！！」
「ニャ・・・」
「あら・・・」

しばらく見つめあうサブローとナターシャ、徐々に重い空気が漂う。

「あんた何サボってんの？給仕は掃除は買いだしは！？」
「ちょ・・・ちょっと待ってほしいニャ。食材の確認も終わったし掃除も終わったニャそれにこれは休憩でサボってる訳じゃ、あ止めて！矢切りは止めて！ニャーン！！」

ノルン島　ディオネ遺跡

時刻は夕刻を過ぎ日はすっかり暮れて辺りは真っ暗になっていた。
ジュノは一通りの訓練を終えて地面へ仰向けに倒れていた。

「よくできましたね。だいぶ能力を自在に操る事が出来るようになりましたよ。」
「・・・・・」
「？どうかしましたか？」
「疲れた、腹減った。飯にしよう。」

そう言うとジュノは塩で味付けしてある肉と携帯肉焼き機を取り出し肉を焼き始めた。

「まあ、ジュノは自炊もできるのですね。流石私の子。関心だわ。」
「ははっ、こんなのハンターなら誰でもできるよ。アイリスも食べる？」
「いいえ、遠慮しておくわ、と言うよりこの体では食料は食べられないの、この体はコミュニケーション端末だから。あなたが食べてる姿を見てるだけで母さんおなかいっぱいになるからいいの。」
「そっか、じゃあその・・・頂きます。」
「はい、召し上がれフフ。」

そう言うとアイリスはニコニコしながらジュノの食べている姿を眺めていた。

「あっそうだ、俺明日この島を離れなきゃならないんだ。街に戻る船が明日来るんだ。」

「フフ知ってますよさっきあなたの記憶をこっそり見させてもらいましたから。」

「えっ、なんでも知ってるんだな～アイリスは。」

二人は談笑を交わしながら食事を行った。すると突然アイリスはだまり真剣な表情をし始めた。

「ねえジュノ、私は貴方に能力の使い方を教えました。でも貴方の場合この能力は際限なく使えるわけではないの、普通のアンサラーは成体まで育成させて初めてアンサラーとして能力を活用するの。でも貴方の場合は成体状態の時に強制的に幼体まで退行させて封印を施したから。能力を使いすぎれば自分の体になんらかの負荷がかかり貴方の体に不具合が出る事も考えられるわ。」

そう言うとアイリスはジュノの手を取った。

「そして能力の使い方を誤ればジュノ、貴方は人から恐れられ孤立してしまう。約束してくれるジュノ？この能力をむやみにいたずらに使わない事を、勝手にこの能力を授けて使い方を教えた私が言う事じゃないのかもしれないけど。」

アイリスは目を伏せながらジュノの答えを待っていた。

「大丈夫だよアイリス！この力はむやみやたら使うもんじゃないっ

て俺自身も解ってる。だから力の使い方や制御する方法を母さんから学んだんだ。約束するよこの力をむやみにいたずらに使わない事をそしてこの力は人が本当に困った時しか使わない事も約束するよ。」

「そうですか、ありがとう。私のお願を聞いてくれて。」

「ハッハ―可愛い子のお願いは断れない主義なのさ～。」

「まあ、かわいいだなんて。もうジュノったら・・・・」

そうジュノはアイリスに言うとアイリスは両手を顔に当て頭を左右に振った。

「（やっぱまずい、アイリスは人ではないがやはり新たな何かに目覚めそうだ）」

ディオネ遺跡内　メインコンピューター室

アイリスはジュノの手を引いてメインコンピューター室へと入っていったどうやら能力の制御に疲れたジュノの疲れを取るための特別な何かがあるらしい。

「この中に疲れが取れる特別な物があるの?アイリス?」

「はい、この中に我々の時代に使われていた特別な装置があります。今日はそこで寝ると良いでしょう。そうすると明日には疲れも取れて元気いっぱいになりますよ。」

そう言うとアイリスは部屋の中央奥に位置する機械を操作し始めた。すると部屋の中央の床が開かれ赤ん坊の揺りかごの様な物体が現れた。

「これは酸素カプセルと呼ばれ私達旧人類が疲れを早く癒す為に造

られた特別な機械です、もちろんアンサラ―のジュノにも効果はありますよ。さあ中に入って寝てください。」

そう言われるがままにジュノは酸素カプセルと呼ばれた機械の中に入り横になった。

「では扉を閉めますね目を閉じてリラックスしてください。」

「りらっくす？」

「あっ、えっとですね体の力を抜いて体をだら～んってしてください。って意味です。では目を閉じて体の力を抜いてください。それじゃあ扉を閉めますね。」

そういうとアイリスは扉を閉めた。扉を閉めた途端カプセル内にさわやかな風が流れ始めアイリスの声が響きわたる。

「今特別な酸素をカプセル内に注入しています。」

「母さん、特別な酸素って何？」

「あっ、えっとですね疲れが取れやすくなる特別な性質をもった物って考えてください。えっと・・なにか音楽とか流しますか？」

「せっかくだから母さんの子守唄がいいな。」

「子守唄ですか・・・解りました。頑張ってみます。」

そういうとアイリスは歌を歌い始めたその声はとても綺麗で幻想的な歌声であった、ほどなくしてジュノは涙を流しながら深い眠りについた。

「フフ、お休み。私の愛しい子よ。」

その日ジュノが見た夢は赤子が揺り籠に揺られながら母親に子守唄を唄って眠っている夢だった赤子の顔はそれは穏やかな顔をしてい

て幸せそうであった。翌朝目が覚めると昨日の疲れは嘘のように吹き飛んでいた。そして体の調子もすこぶる良い感じで今なら何でも出来そうな気分であった。

「どうでしたか?酸素カプセルの効果は?」
「うん、すごくよかったよ!アイリス。今ならなんでも出来そうだよ。」
「それはよかったですね。ではあんまり調子に乗りすぎると道端で転んで泣いても知りませんよ。」
「ハッハ―!もう俺は大人だよ、転んで泣いたりはしないよ。」
「まぁ、母さんは知ってますよ。貴方が昔泣き虫だった事を。」
「また、人の記憶をこっそり覗いたなアイリス?」
「あっしまった。えへへ。」

二人は顔を見ながらし笑い合った。その後一通りの能力の制御の確認を行うとジュノは帰る身支度をし始めた。ジュノの後ろにはアイリスがほほ笑みながらこちらを見ている。

「あっそうでした。貴方に渡す物があります、ジュノ。」
「なに?抱きつきなら恥ずかしいからいらないよ。」
「フフ抱きつきたい気持ちもありますけど、ちがいます。これを持っていってください。」

そう言うとアイリスは自身の首に掛けていた首飾り外しジュノに手渡した。首飾りの先端に取り付けられている石は光の当て具合によって様々な色に変化している。

「これは御守りみたいなものです。大事にして無くさないでくださいね。」
「わかった。大事にするよ。・・・なあ、アイリス。」

「はい、なんでしょうジュノ？」

「またこの場所にここに帰ってきてもいいよね？」

「ええ、もちろんですよ。だってこの場所は貴方の家でもあるんだから。私はいつでも貴方の帰りを待ってますよ。」

「わかった。じゃあ・・・行ってきます母さん。」

「はい、行ってらっしゃいジュノ。体に気をつけるのよ。」

そう言うとジュノはまっすぐ遺跡を後にした。アイリスはジュノが見えなくなるまで手を振り続けたがジュノは後ろを振り返る事はなかったなぜなら後ろを振り返ったら涙が溢れ決心が揺らぎそうになるから。

調査気球船　調査員控室

ジュノはアイリスからもらった首飾りの石をぼんやりと眺めていた。石は光に当てられ様々な色に変化している。

「ギルドナイト様、今回のノルン島は新しい狩猟場としての価値はいかがなものでしょうか？」

「あぁ、あそこは駄目だな、一応別の大陸で生息の確認がされているジャギィの存在は確認できたがその他の大型モンスターの生息等もないし目新しい鉱物や植物の生息も無い、観光名所位にしかならねぇんじゃねえか、まあ一般向けの観光名所じゃなくてよくわかんねえ遺跡好きの観光名所だけどな。」

「そうですか、解りましたギルドには報告の通り伝えておきますね。では失礼します。」

そう言い残すと調査気球船の乗組員は控室を後にした。

「・・・また必ず、会いに行くからね。母さん。」

１６節　力の使い方（後書き）

もしモンハンを題材としたアクションＲＰＧが出たらどんなゲームになるのかな？そんな事を考えながらこの小説を書いてます。

登場人物紹介（前書き）

自分の中で切りの良いところまで進んだと思ったのでここで登場人物紹介を挟みたいと思います。尺稼ぎですね。

登場人物紹介

名前　ジュノ
年齢　発見当初から計算して２０代前半
主要武器　様々な武器を扱い主に双剣を好む　たまに太刀　弓　ライトボウガン
防具　メゼポルタでの凄腕ハンターは様々な防具を組み合わせて狩りに行くので今日は割愛。
備考　怠惰な性格だが仲間思い。ネコが非常に好き

メゼポルタで主に活動するハンター、本来人並み外れた身体能力を保持しているが本人は全力を出すと周りから恐れられるのでちょっと遊ぶくらいの感覚の力で常に狩猟を行っている。ギルドナイトの籍を持っているがあまり仕事をしない。当初は出生が謎に満ちていたが旧人類によって作り出された人に近い生命体である事が解りさらに人に恐れられる要素が増えた事に頭を悩ませつつも能力を使っていく事になる。

名前　ユーノ
年齢　１９
主要武器　ライトボウガン　蒼桜の対弩・覇
防具　リオハートシリーズ
備考　成長速度が速い
リオレイアに友人を食われリオレイアに復讐する事をすることだけを考え速く強くなろうとしていたが。ジュノに諭され一歩一歩強くなりジュノの背中を守れるくらい強くなろうと決心する。当初は引っ込み思案な性格だったが徐々に開放的な性格へとかわり現在では狩猟仲間もでき着実に成長して行っている。

名前　ブロード
年齢　３０代半ば
主要武器　大剣　モルス＝アーラ
防具　主にギルドナイトシリーズ
備考　ちょっと自分に自信の無いおっさん
メゼポルタに襲撃した謎の龍をレジェンドラスタのフラウと共に撃退しその龍の角をギルドに提供し謎の龍の生態解明に尽力を注いだ功績を認められＨＲ１００あまりでギルドナイトになった大剣使いのハンター。現在はジュノの下に付きギルドナイトとしての業務に奮闘している。ジュノのギルドナイトとしての業務態度に不安を持ちつつもちゃんと先輩として敬っている。レジェンドラスタのフラウに気があるが自らに自信がないのでアプローチは積極的ではない。
※元ネタはネ実のスレに投降された短編ＳＳに登場した人物。この時のブロードは謎の龍襲撃の時に死亡していますが、あんまりにも可哀そうな死に様だったのでもしも彼が生存したまま謎の龍撃退したら？という設定で活躍してもらってます。原作者の人及びネ実民の人見てたら勝手に使ってごめんなさい。

名前　ヨハネス　Ｇ　ウラ―ズ
年齢　３０代後半
モンスターの生態、科学技術・古代文明この世界のあらゆる分野の情報に精通し、その類まれな天才的な頭脳を駆使し日夜研究にいそしむ姿を評価され、このメゼポルタのギルドの司令官の座を与えられた人物として知られているその前の経歴は一切不明である。
元ネタはＭＨＦ内で最も有名で実在する人物です

名前　ダルカン
年齢　４０代前半
メゼポルタの気球船技師の一人で多くのハンター達を様々な狩猟場に送り届けてきたベテランの気球船技師でありジュノのアイルーア

タックを止められる数少ない人々の内の一人でもある。

名前　ロイド
年齢　２０代後半
ダルカンの元で気球船の操舵技術を学んでいる青年。

シンとエビィー
年齢　２０代前半
ジュノの同僚。ギルドナイトの業務の時はいつも一緒にペアを組んでいる。
元ネタは実際のＭＨＦで一緒に遊んできた仲間。

名前　アイリス
旧人類時代に造られたコンピューター。当初は事務的な会話能力しか持たないコンピューターであったが、ジュノの製造及び育成者、栗実　夏奈博士の作成した彼女の思考パターンをベースにした疑似思考パターンプログラムをインストールした事で人間身を帯びた会話が出来るようになった。ジュノにとっては擬似的な母親的存在であるが恥ずかしさのあまりお母さんと呼ばれないのをちょっと残念に思っている。コミュニケーション端末に乗り換える事により外を自由に出歩くことが出来る。

名前　栗実　夏奈
旧人類の科学者でジュノの製造及び育成にかかわったとされる人物。自身の遺伝子情報をジュノに埋め込んでいるのでジュノの本当母親である。脳科学、生物工学に精通している。

【フロンティア内のＮＰＣキャラ】
ここからはここまでの物語に出て来たＭＨＦ内のゲーム内に実在に存在するキャラの紹介です。

画像検索してみるとそのキャラの画像が出てくるのでやってみてはいかかでしょうか。

名前　大長老
モンハンＤｏｓをやって来た人ならわかる御馴染のバカでかい竜人族の爺、本来のＭＨＦではシーズン４．０位まではドンドルマの大老殿でいびきかいて寝てましたがシーズン５．０で寝てばっかいたのが原因か解雇されました。作者的には可愛い爺だなと思っていたのでこの作品の中ではメゼポルタのハンターズギルドの長及びギルドナイトの長として頑張ってもらおうと復活させました。寝る子はよく育つと言いますが彼は育ちすぎです。

武器工房の親方
ゲーム内であいさつすると「っしゃあ”い！！！」といい次の瞬間力瘤を見せつけながら「ムゥ”ーン」と言う人。暑い。お名前募集。

【受付嬢】
本当は５人いるのですがこの物語に出てきた受付嬢だけ紹介。たぶん皆２０代前半ではないかと思ってます。顔も画像検索すると出てくるので見てみてください。後ここに紹介されていない二人も魅力的な人物なので画像検索してみてはいかがでしょうか。

名前　ユニス
性格は誰にも媚びず、上目線な感じです。そして、感情が表に出にくい娘です。ＭＨＦ内での人気は一番である。ヴォルガノスがとても愛しいようでゲーム内ではハンター達に「ヴォルガノス・・・とても可愛いと思う・・・あなたはどう？」と聞いてきます。「フッ・・ヴォルガノスより君の方が可愛いさ≪キラキラ≫」と言ったらどんな反応をするのでしょうか？と思ったりしてます。

典型的なエヴァの綾波レイやゼロの使い魔のタバサタイプですね。

名前　ヒルデ
受付嬢の中でも一番の元気っ娘である。ＭＨＦのゲーム内での人気は二番目にある。雨の日は気分が落ち込むので嫌いらしい。同級生に例えると登校すると後ろから「オッス！！※※～」って言ってきそうなタイプと言えぱ分かりやすいでしょうか。
最近のアニメキャラに例えるとけいおん！の田井中律ぽい子ですね。
おでこ出してませんが。
ヒルデちゃん俺だー、幼馴染になってくれー！！！
髪の色は金髪ですがもし緑髪だったらＹＡＭＡＨＡの某ボーカロイドと化す。
おっとだれかきｔ

名前　アネット
ＭＨＦ内で貴重なメガネっ娘。ＭＨＦのゲーム内での人気は最下位。ドジっ子な雰囲気をしていますが実は根はしっかりしている。プーギーが大好きなようす。彼女はギルドのクエスト受付嬢としてではなくギルドの総合ショップや武器工房等で働いています。あの暑苦しい男共にあふれた武器工房に佇む一輪の花ですね。
アネットちゃん俺だー、姉ちゃんになってくれー！！

ラスタ酒場の店主
ダンディ・・それ以上は何も言うまい。昔ハンターをしていたらしくガンランサーだったそうな。もちろんそのガンランスの名前はダンディズム。んーマンダム。

ラスタ酒場の店主の横に居る男
イケメン　店主の息子か孫か何かだろう。

【レジェンドラスタ】
名前　ナターシャ
年齢　２０代前半
主要武器　炎妃弓【媚態】
防具　メランシリーズ
オホホの人。弓をこよなく愛す女性レジェンドラスタ弓は全狩猟武器の中で一番美しいと思っていてその美しさはまるで自分のようだと必ず2回言ってくる。彼女の父もレジェンドラスタで弓使いである。狩猟中会話でたまに「尻を射抜くわよ！」と言ってくるマジコワイ。でも寂しがり屋な様子も会話を見て垣間見ることができる。ここまではゲーム内設定、この小説では主人公の幼馴染として活躍してもらっています。

名前　フラウ
年齢　１０代後半
主要武器　炎妃双【悪女】
防具　頭はアクラバレッタ以下ルクスシリーズ
ボクっ娘の人。双剣のレジェンドラスタ、可愛らしい容姿とその行動で人気である。過去に双剣の片方を忘れて狩猟に向かった事があるが、その愛らしい性格で事なきを得ている。作者の推測によると片手剣使いのレジェンドラスタのフローラとは同年代ぽい。
この小説のフラウはブロードと同じくネ実に投下された短編ＳＳのフラウです。もしもあの短編ＳＳでのブロードとフラウが死に別れなかったらどんな風になっていくのかを想像して書いていきたいと思っています。この小説ではどんなにつらい事があってもこの二人を幸せな方向に持っていくつもりです。

名前　リア
年齢　２０代前半
主要武器　炎王大剣【暴君】

防具　頭デュールＦヘルム以下ミラドシリーズ
大剣使いのレジェンドラスタ。まともな性格かと思われがちだが、いざ狩猟に出かけると暴言を吐きまくる。ゲーム内で暴言を吐く際にはちゃんと伏字がしてある。いったいこの伏字の下にはどのような恐ろしい言葉が吐かれているのか・・・正に羊の皮をかぶった悪・・・あっちょっとまｔ。この小説では感情が高ぶると暴言を吐くと言う設定がプラスされています。

名前　タイゾウ
年齢　２０代前半
主要武器　怒髪銃斬【雪蛍】
防具　頭ラヴィバレッタ以下シャッセシリーズ
高まれ僕のガンランス♂使いのレジェンドラスタ。熱い。某芸人のタイゾウとは違いおもむろに全裸になったり葉っぱ一枚になってＹＡＴＴＡ！！等はしませんのであしからず。この小説内ではネタ扱いされがちですが、ちゃんとレジェンドラスタらしく実力もあると言う設定です。こういう奴が友達に一人いたら楽しいでしょうね。

名前　フローラ
年齢　１０代後半
主要武器　怒髪突剣【慕情】
防具　リオデュオシリーズ
片手剣使いのレジェンドラスタ。ゲーム内設定では「はわわわっ！！」と奇声を発する。片手剣収集が趣味で可愛い防具が好き。お祖父ちゃんッ子らしく祖父の元で片手剣術を教わり。祖父との修行の際に祖父の修行の厳しさからよく修行中に泣いたらしい。狩猟中の会話で噛む事がある。レジェンドラスタの先輩としてナターシャを敬っている。この小説内ではメゼポルタ内のハンター達にカリスマ的人気で彼女と狩猟同行予約はもう１年先まで一杯って事にしてあります。

レジェンドラスタは合計１１人いますので上記で紹介されていないレジェンドラスタもいますので気が向いたら検索してみてはいかがでしょうか。

登場人物紹介（後書き）

以上が現行で出てきた大体の登場人物の紹介です。これからもご愛読よろしくお願いします。

17節　クーデター（前書き）

ＭＨＦ内では剛種クエストと言うものがあって通常種よりそれはそれは強いモンスターが出てくるんですよ。ポータブルで言うとＧ級より強いんじゃないんかな～。あとＨＣ（ハードコア）クエストと言うのも存在して通常種ではしない動きをしてきてＨＣでしか手に入らない素材が手に入るんですよ～ドロップ率は１％ですが…

17節　クーデター

ノルン島から戻って来たジュノはすぐに二人のギルドナイトによってギルドに召集された。どうやらヨハネス司令に名指しで呼ばれているらしい、どうせ特務だろうとおもいジュノは二人のギルドナイトによってヨハネス司令の待つ司令室へと連れて行かれた、連れていかれてるとヨハネス司令は珍しく特務の事ではなく。「ここ、二日何処へ行っていた?」と聞いてきたのでジュノは「古生物隊隊長に頼まれとある島の調査をしていた。」と答えた。ヨハネス司令はその答えを聞き数分考え込むとジュノの答えに関して何も言わずに「よろしい下がってよい」と言い司令との会話を終えジュノは商業区へと繰り出した。留守にしている間マイハウス内の留守番をしていたアイルー達のご褒美のマタタビを買いに。
商業区へと繰り出すとジュノにとっては悲しくも奇妙な記事が掲載されている雑誌に目がとまった。

［メゼポルタ一の片手剣使い　隼氏　レジェンドラスタフローラ氏の同行の元謎のパリアプリアの剛種のクエストにより謎の死と遂げる。隼氏は毒に侵され死亡した模様、フローラ氏の発言によると今回同行した通常剛種のパリアプリアは一度は瀕死に陥り巣に戻ったものの巣に入ったとたんHCクエストにおけるパリアプリアの動きをし始めたの事、この件に関してはギルドは目下調査中とのこと」

「（隼君の奴死んじまったのか、惜しい片手剣使いを亡くしたな…でも通常剛種のパリアがいきなりHCの動きなんてするのか?それに毒に侵されて死亡って確かに剛種のパリアが居る場所にはガブラスが居るけどガブラスごときの毒で奴が死ぬなんて考えられないし、フローラちゃんが居たなら解毒の粉塵を飲んでなんとかしてくれるはずだよな。フローラちゃんに会って話を聞いてみたいけどまあ止

めとくか。まだ落ち込んでるだろうし。）」

雑誌の立ち読みを終えると商店を後にしジュノは考えながらマイハウスへと向かった。

「（最近多いよな、通常モンスターの謎の行動で死ぬ奴・・・ギルドの観測の連中観測サボってんのか？）」

マイハウス　ジュノ宅

「おーい、今帰ったぞサブロー。ちゃんとサボらず留守番してくたか？」

「もちろんニャ。僕は真面目だからサボることなんてしないニャ！」

「そうか～そりゃあ感心だな。んでその矢切りされた跡は仕事してる時に着いたと。」

「ニャ！こ・・・これはですニャ・・・」

「まあいい、ちゃんと留守番してくれてたんだからそれでいいさ。ほれマタタビだ。皆で分け合って食べるんだぞ～。」

そう言いジュノはサブローに向けてマタタビが沢山入った袋を投げた。サブローはマタタビが入った袋を受け取ると厨房奥へと駆けて行った。

「ニャ―！ありがとニャー！！みんな～ご主人様がマタタビ持ってきてくれたニャー」

「やっぱ、アイルーは可愛いな～…」

そう言いジュノは装備していた装備を脱ぎ私服に着替えるとベットに横たわりアイリスから手渡された首飾りを眺めながら。一昨日の出来事を思い出していた。

【・・この場所は貴方の家でもあるんだから。私はいつでも貴方の帰りを待ってますよ。】

【これは御守りみたいなものです。大事にして無くさないでくださいね。】

「母さんか・・・結局アイリスの事を母さんって呼ぶ事あまりできなかったな。今度はもっと母さんって呼べるように努力しよう・・・」

虚空に向かって御守りを投げるとジュノはアイリスからもらったお守りを自身の首に掛けた。
御守りを首に掛け終え雑誌を呼んでいると。ブロードが息を切らしながらジュノのマイハウスに駆けてきた。

「先輩！大変です。」
「あぁ、トイレか？トイレなら左奥だぞ。ったくいちいち人のマイハウスに来てトイレするんじゃねえよ。自分のマイハウスのトイレ使えよな。お前はコンガか？コンガなのか？」
「トイレじゃありません！そんな事態じゃないんです。」
「じゃあどんな事態なんだ？ったく雑誌のグラビアがいいとこだったに・・・」

そう言うとジュノは雑誌を閉じ厨房へ行きコップに水を汲みブロードに手渡した。

「ほれ、水だこれ飲んでとりあえず落ち着け。呼吸を整えろ。」
「あっすいませんありがとうございます。」

そう言うとブロードは一気に水を飲み干し呼吸を整えた。

「んで、何が大変なんだ?」

「はい、なんでもヨハネス司令がメゼポルタの全ギルドナイトに緊急召集命令を出しました。なんでもモンスターに対してもう怯えて暮らさなくてもいい画期的な案を考えたそうでこれはギルドナイトの全員の力を借りないと成就する事はないそうです。」

「ハッハー!そりゃまた壮大な。面白そうだちょっとその画期的な案を御拝聴しに行ってみようぜ。」

そう言うとジュノはギルドナイトの制服に袖を通しギルド本部に向かうためブロードと共に部屋をでた。

メゼポルタ　ハンターズギルド内大講堂

大講堂にはメゼポルタじゅうのギルドナイト全てが集められていた。そのなかヨハネス司令は演説を行っていた。

「なんかこの中変なにおいが漂ってるな、お香でも焚いてんのか?」

「確かに言われてみればなんか変なにおいしますね。」

「おい。ヨハネス司令の重要な演説だぞ!ちゃんと聞けよ。」

「あっすいません。」

「すんませーん」

他のギルドナイトに注意されるとヨハネス司令がそれに気付いたのかジュノに向かって話を振って来た。

「フッ、私の演説がそんなに退屈かね。ジュノ君。」

「前節は良いから早く本題に入ってくださーい。」
「ちょっと、先輩失礼ですよ！」

周りのギルドナイトの視線が一気にジュノとブロードに集中される、ブロードはその視線に委縮してしまったが。ジュノは平然としていた。そのジュノの姿を確認するとヨハネス司令は鼻で笑い、演説の続きをし始めた。

「では前節はこれ位にして本題に入るとしよう、諸君私は長きにわたり古代文明の解析に勤めていたのは諸君らも知っている事であろう。そして私はついにモンスターの完全なる管理に成功した。この私が作ったこの変種モンスターによって。」

そう言うとヨハネスは頭上に手を挙げ何かのサインをしたするとリオレウスが大講堂の頭上から降り立ってきた。

「どういうことだ、あの人にめったになつく事のないリオレウスがネコの様に司令になついているぞ。」

「ふっ諸君らが驚くのも無理はない、本来野生のリオレウスは滅多に人になつく事がないのは諸君らも知っていよう、だがこうして私の従順なしもべとしてここに舞い降りたのは紛れもない事実だ。」

しかしギルドナイトの一人がヨハネスに対して野次を飛ばす。

「そのリオレウスはただ司令が飼ってるペットじゃないか！？」

「ふっ、たしかにそう思われても仕方がない、ではここで少し余興を挟もうではないか。どんなに飼い主に懐いていようともリオレウスは自ら命を絶つことは無い、それは彼らの空の王と呼ばれる彼ら

のプライドが許さないからだ。しかし私が改造を施したこのリオレウス変種は違う。私の命令によって自ら命を絶つことができる。その証拠がこれだ。」

司令がリオレウスに向けて何か合図を出すとリオレウスが中空へと飛びあがり自らの尾を自身の胸部分に勢いよく突き刺した。尾は胸を貫通しリオレウスは悲鳴を上げることも無く落下しそのプライド高き王者の命の灯を自ら消した、まるでプライドなど最初から無かったように、その光景を目にしたギルドナイト達は言葉も出ず静まり返った。

「諸君らに対しては少し刺激が強すぎる余興だったかな？今の光景を見てもらえたなら私のモンスターの完全なる管理に成功した事が理解してもらえただろう。私はこの改造変種モンスターを今この時より世界に放つ！」

「この変種モンスターの力によって世界中の原種モンスターは駆逐され、あらたな平和を私は築く、しかし私一人ではこの計画は達成する事はままならない。この計画を成就させるためには。諸君らギルドナイトの力が必要だ。諸君の力を今、私に貸してはくれないだろうか！諸君らの力とこの強力な力を宿させた変種モンスターの力をもってすれば。神が定めたもうた摂理を捻じ曲げる事すら可能だ！諸君！私と共にこの世界に新たなる摂理を作り出そうではないか！」

ヨハネス司令が両手を掲げ下ろし片手で拳を握るとギルドナイト達から喝采が上がり賛成の拍手が広場に響き渡った。

「諸君！私が行った古代文明の解析の結果かつて古代人はこの世界の頂点に君臨していた！しかし今の我々の世界ではどうだ、我々は日々モンスターに怯え生活を行っている。だが！この計画が成就さ

れれば人々はこの恐怖から解放され真の自由を得、この世界の頂点に君臨する事が出来る。そう！我々人間はこの新たな世界でも世界の頂点に君臨すべきなのだ！そう！人間は・・・いや！我々こそが神となるべき者なのだ！」

ヨハネス司令が演説を終えると多くのギルドナイトがその場を立ち拍手喝采していた数名を残して。

「すばらしい、流石ヨハネス司令だ！そう思いますよね！先輩！」
「・・・・（似ているアイリスが言っていた旧人類の犯した過ちと似ている）」
「先輩！？どうかしたんですか！？あっもしかしてこの素晴らしい演説を聞いて言葉も出ないんですか！？」
「・・・・おいブロードちょっとマイハウスまで一緒についてこい。」
「え！解りました！！」

そう言うと他のギルドナイト達が盛り上がる中二人はマイハウスへと向かった。

マイハウス　ジュノ邸

「いやあでもすごかったなぁ！ヨハネス司令の演説。」
「ああ、あのおっさんがあそこまで演技派だったとは驚きだな、舞台役者にでも転職した方がいいんじゃないか？」
「もう！先輩は素直じゃないな～でもモンスターに怯えなくてもいい世界か～楽しみだな～。」
「おい、ブロードこれ飲むんだ。鼻はつまむなよ。」

そう言うとジュノはコップにめいっぱい異臭が漂う紫色のドロドロ

した液体が入ったコップをブロードに
手渡した。

「・・・なんですかこれ。こんなの飲みたくないんですけど。」
「・・・良いから飲めよ・・・飲まないと首が飛ぶぞ。」

そうジュノは殺気を込めてブロードに飲み干すよう促すとブロードは命の危機を感じたのかコップに入った紫色のドロドロした液体を一気に飲み干した。

「・・・!!!」

ブロードは吐き気を催しトイレに駆け込もうとするが、ジュノに呼びとめられる。

「吐くな!!飲み干すんだ!!」

ブロードは何とか吐き気を抑え込み紫色の液体を飲み干した。

「がっは・・・なんて物、飲ますんですか先輩!!」
「飲んだか?じゃあさっきヨハネスの言っていた事をもう一度良く考えてみろ。」
「え…司令が言っていた事ですか・・・」
「・・・・!」
「気づいたか?」
「はい。」
「あいつが言ってた事それはこの世界の生態系をいたずらに壊そうとしている事だ。今この世界はモンスターや古龍の脅威に侵されてはいるが。モンスターと共生が出来ている部分もある。身近な例でアイルーとの共生がそうだな。もしこの世界の均衡が崩れたらどう

なる？もしあいつの造った強力な変種モンスターの中から制御の効かないモンスターが出て勝手に繁殖したらどうなる？世界は本当に終わるぞ。」

「・・・たしかに先輩の言うとおりです。確かにモンスターはたまに街を襲ったり人に怪我をさせたりもしますけどそれはモンスターにも理由があって行ってる事ですものね。彼らだってこの世界で僕たちと同じように生きてる仲間なんですね。」

「そうだ・・・どうやら洗脳は解けたようだな。」

「洗脳？」

「ああ、さっき大講堂に変な臭いが充満してたろ？あれは洗脳しやすくするためのお香をどっかで焚いてたんだな。あの臭いを嗅ぐと洗脳されやすくなるんだ。よく地方の村のシャーマンとかが使ってるやつだ。それにさっきお前に無理やり飲ませたのはその洗脳を解くための薬みたいなもんだ、悪かったな無理やり飲まして。」

そう言うとジュノはブロードに向けて元気ドリンコを投げた。

「それで口直ししてくれ。」

そう言われるとブロードは元気ドリンコを飲み始めた。

「はい・・・ありがとうございます。でも先輩はなんで洗脳されなかったんですか？」

「洗脳って言うのはな、心の弱い奴ほど掛かりやすいんだよ、俺は心も体も強いからな。かからなかっただけさ。お前も肉体鍛錬も重要だが精神鍛錬もちゃんとしとけよ。」

「俺は今からギルドナイトの籍を一旦離れて、普通の一般ハンターになって改造変種モンスターと思われるモンスターを片っ端から駆

除してくる。お前は俺の諜報員としてギルドナイトに留まり奴があやしい動きをしたら俺に伝えてくれ。」
「わかりました。じゃあとりあえずギルド本部に行きましょう。」
二人はその場を立ちあがりギルド本部に向かおうとしたその時だったマイハウス内に二人のギルドナイトが音も立てずに入りこんできたのである。

「話は聞かせてもらったぞ、ジュノ、ブロード。どうやら司令の作戦を潰すようだな。」
「そうだよ。司令が考えた素晴らしい作戦を潰させるもんですか。」
「ちっ・・・ヨハネスの野郎…付けてやがったな…」
しばらくの間身構える二人と二人辺りは緊迫とした状態であった。
しかし。

「・・・なんてね、どうだい驚いたか？」
「えっ・・・・・」

そう言うとギルドナイトの一人が帽子を外しこちらに向き直った。

「やあ、ジュノさん。ジュノさんも司令の洗脳にはかからなかったみたいだね。」
「あっ・・・シン君！・・・・ってことは」

もう一人のギルドナイトもすかさず帽子を外した。

「ちーす。どうもジュノさん」
「エビィちゃん！二人とも良く洗脳にかからなかったね！」
「あんなの大講堂に漂ってたお香の臭いですぐわかったよ、あっこ

れは洗脳されるなって。ねっエビィーさん」

そうシンがエビィーに会話を振るとエビィはジュノのマイハウス内の冷蔵庫から元気ドリンコを取り出していた。

「そうそう、あんなのバレバレだってのそれに司令は前からよからぬうわさが立ってたからね。んぐんぐんぐ、プハー！！！」

「えっそれはどんな噂なのエビィちゃん、それと勝手に冷蔵庫の元気ドリンコ飲まないでください。高いんだから。」

「まあ、かたい事は良いじゃないジュノさん、なんでもね司令は大長老らギルドに関わる竜人族たちを良く思っていないらしく近いうちにギルドから追い出そうとしてるらしいよ。まあ今回の件でこの噂の信憑性は高まったね、多分司令は次に大長老たちを追いだすと思うよ。」

「本当かよ。多分止めようとしても洗脳されたギルドナイト達が止めようと襲ってくるだろうな。俺は仲間を切るのだけは勘弁だから大長老の件は迂闊に手がだせないな。」

「そうね、わたしもジュノさんと同じ考え。大長老には悪いけど私たちは一応このままギルドの様子を見て何か動きがあったらギルドナイトを抜けて戦うつもり。ジュノさんと・・・そっちのギルドナイトさんは？」

「俺は今からギルドナイトの籍を離れてバカが放った変種モンスターをなるべく多く狩るつもり。こいつはギルドナイトに残ってギルドナイトの動きとバカの動きを逐一俺に報告する諜報員役をしてもらうように今さっき頼んだ。」

「なるほどね。じゃあ私たちもその諜報作業手伝おうかしらえっと・・名前はブロードさんで大丈夫だよねたしか？」

「はい、ブロードです。よろしくお願いします。」

「そっかじゃあよろしくブロードさん。それじゃあとりあえずギルド本部に向かいましょ。」

そうエビィが言うと四人はギルド本部に向かうためマイハウスを後にした。

17節　クーデター（後書き）

ＭＨＦでは今日４周年アニバーサリーのパッケが発売されてすごくデカイプーギーのぬいぐるみと読み切り漫画と武具のコード付きでなんと１マソ位で発売されたんですけどぬいぐるみと武具コードはいらないから漫画だけ読みたいな～と思っています。

18節　ユーノのお願いごと（前書き）

私は去年のＭＨＦの２０１０アニバーサリーパッケージなるものを買ってしまったんですけど（エスピナスと言うモンスターのフィギュアがついてたのでつい衝動的に・・・）その中にＭＨＦのオリジナルモンスターの初期設定画やオリジナル武具集等が掲載されてる本がついてきたのですが、改めて見るとこれが面白いんですよねこれが。

18節　ユーノのお願いごと

ヨハネスの演説の後ジュノはギルドナイトを抜け改造変種モンスターと思われるモンスターを狩り続けてきた。しかし改造変種モンスターは現存する原種モンスターと姿形が似ているのでその作業は困難を極めた。

「（はあ…改造変種モンスターを狩りつつけるとは宣言したもののこりゃあ結構骨が折れる・・・取り合えず改造変種モンスターの特徴としてわかった事はまったくと言っていいほど怯まないだけか・・・）」

思案しつつ帰路に就こうとしていたその時だった後ろの方から声がした。

「ジュノさーん」

「ん、ああユーノちゃんか久しぶりだね。」

「はい、ご無沙汰してます。あれなんか暗いですけどどうかしましたか？悩み事だったら相談乗りますよ。」

「ん？そんなに暗かった？そうか～じゃあ気が緩んでたんだな。もっとシャキッとしないと。それに悩み事か～そうだな～素敵な奥さんが欲しいって悩みならあるな。それにしても久々だね、あの古龍襲撃戦以来かな？」

「はい、たしかにそうですね～。ところでジュノさんちょっとお時間ありますか？」

「ん？あるっちゃあるけど、どうかしたの？」

「実は今銀レウスを狩りに行こうとしてて友達が一人風邪引いて急に寝込んじゃってメンバーが一人足りないんです。もしよければ一緒にいきませんか？」

「（銀レウスか・・・まあ気分転換にいいか。）」
「ん?ああいいよ～でも大丈夫なの俺が同行して。皆委縮しちゃうんじゃないかな?」
「あっ・・たしかにそうですね…」
「（ウーンどうしたものか。息抜きに手伝いに行きたいのは山々なんだけど…あっ！）」
「良い事思いついた。マイハウスで着替えてくるから気球船ドックでまってて～。」

そう言うとジュノはマイハウスに駆けて行った。

「あっ!ジュノさんちょっと～・・・行っちゃった。良い事って何だろう?」

マイハウス　ジュノ邸

「たしかここに・・・あった!装着!」カポッ!
「これならばれないな…うんばれないニャ!!!」

メゼポルタ　気球ドック

「ホントに助っ人来るのユーノ?もうすぐ気球船出るけど。」
「うん、大丈夫だよカノンちゃん」
「それなら良いけど。ああ早く銀レウスの尻尾を私の片手剣で切り取りたいわ。」
「おい、カノン!銀レウスの尻尾を切り取るのは俺の太刀だぜ。俺はこの日の為に鬼神斬波刀を作ったんだ。お前は大人しく足でも切っとけよ。」
「あら?貴方こそその太刀で脚切ってなさいよマルク。」
「（はやく来てよ～ジュノさん。）」

二人が言い争っていると気球ドック入口から一人の男が姿を現した。

「待たせたな！」

「・・・・・」

「・・・・・」

その姿をみて言い争っていた二人は固まった。

「あっジュ・・・・・」

「今回ユーノちゃん達のオトモをする。アイルー仮面デス！！」

ユーノは顔を赤らめものすごいスピードでジュノの装備の袖を引っ張りドックの隅で小さな声で話し始めた。

「何なんですかその装備、それにアイルー仮面てなんですか！？」

「いやほら俺メゼポルタで顔知れ渡ってるじゃないそれで委縮されちゃ困ると思って、そこで思いついたんだよ変装すればいいじゃない。ってだからアイルーフェイクかぶって来た。」

「ジュノさんのそれは変装じゃなくて、仮装です。見てくださいよ、二人とも別の意味で委縮しちゃってるじゃないですか！」

「えっ…」

奥の二人を見ると二人も隅で塊こちらを見てひそひそと喋っていた。

「大丈夫だってここはフレンドリーに握手交わしとけば何とかなるもんなんだよ。見てなよ今見せてやるから。」

そう言うとジュノは二人の元へと自身有り気に歩いて行き二人の目

の前で止まると深々とお辞儀をした。

「こんにちは！お二人さん今回皆と狩りに行く事になったアイルー仮面デス！よろしくお願いします！」

そう言うとジュノは二人の間に手を差し出した。

「あ…ああこちらこそ、よろしく・・・お願いします。」

「よ・・・よろしく」

「よし熱い握手も済んだ事だし出発ニャ！！！気球船に乗り込め～！」

「（大丈夫かな～・・・・）」

気球船内　ハンター控室

控室内では女子は女子同士で話し合っていた男子の二人はと言うとマルクはジュノの仮装した姿をまじまじと見ていた。

「（しかしこの人こんなふざけた装備で来てるけど武器はちゃんとしたの持ってるな。あれはたしかベルキュロスの双剣の舞雷双【朱鷺】・・かな？でも武器自体から紅いオーラが漂ってるようにも見えるし・・・まさかＨＣ剛武器の・・・・）」

「ん！このアイルー仮面に何か用かニャ！？」

「えっいや、特にないです・・・」

「そうか！」

しばらくの間沈黙が続くするとこの沈黙に耐えれなくなったのかジュノがマルクに対して口を開いた。

「さて、あっちはあっちでガールズトークしてるしこっちもボーイズトークで盛り上がろうじゃないか！マルク君はどっちが好みなのかな？」

「はっ？好みってなんでしょう？」
「好みってそりゃああっちに居る女の子達どっちが好みに決まってるだろ～。」
「いえ、俺はそう言うの考えないようにしてますので。」
「またまた、お堅い事言っちゃって耳が赤くなってますよっと。」
そう言うとジュノはマルクの耳を軽くはじいた。

「いえ、違うんですこれは・・・・」
「まあ、誰にも言わないしここでお兄さんにちょろっと話しちゃいなよ。」

そう言うとアイルー仮面もといジュノはマルクの肩を数回叩いた。

「そ、そうですね・・ユ・・・ユーノさんが好みですね。」
「ユーノちゃんか～わかるぞ～あの子は良い奥さんになりそうだもんな～あははは！！！」
「・・・・・・」

一方ユーノ達の方はと言うととある話題で盛り上がっていた。そうアイルー仮面と名乗る人物の事である。

「ねえあの人ホントにユーノの知り合いなの？それに腕の方は大丈夫なの？なんか変なかぶり物してるし。」
「う・・うん腕の方は凄腕クラスの人だから心配しないでカノンちゃん・・・」
「そう・・・なら良いけど。そうこの前雑誌でさあ可愛い装備見つけたんだよね～」
「えっ…そうなのどんな装備なのかな？」

アルフ古塔　中間部

アルフ古塔中間部にはギアノスと言うランポスの亜種が集団で活動していたので四人は個別にフォローし合いながらギアノス達を狩っていく。

「ふう、だいたい片付いたわね。」
「そうだな、じゃあこのまま古塔頂上部まで行こう。」

そう言うとマルクとカノンは頂上部にむけて駆けて行こうとしたしかしここである男が二人を引きとめる。

「ちょっと待つんだ二人とも二人は銀レウスを狩った経験があるのかニャ？」
「なめてもらっちゃ困るわね、私たち二人はこのメゼポルタ出身ではないけれどもとある村では優秀なハンターとして村でも評判だったのよ。銀レウスだって見あきるほど狩って来たわよ。」
「ははっカノンの言う通りですよアイルー仮面さん、俺らの村の近くの古塔に住む銀レウスはいつも頂上に居ましたからね。このメゼポルタの古塔、たしかアルフ古塔でしたっけ。ここでも同じような構造してますし絶対に頂上にいますよ。」

二人はアイルー仮面に嘲笑気味で説明をしてくる。その目はこの人は凄腕ハンターじゃないただのあほだと物語っているように。するとユーノが小さな声でジュノに向かって話しかけて来た。

「ちょっとジュノさん何を言い出すんですかこの人たちこのメゼポルタではまだ上位で無名だけど、さっき言ってた通り銀レウスをたくさん狩って来た上級者なんですよ。二人の指示にここはしたがった方が。」

「まあちょっとだまってなさいって。」

ユーノを諭すとジュノは二人に向けて提案した。

「そうか、でもこの塔の頂上には銀レウスはいないニャ。実はこの地方の塔に住む銀レウスは塔の頂上じゃなくて横の崖を降りたところの秘境に良く姿を現すんだニャ～」

「ハハ、そんなはずは」

「そうですよ、絶対塔の上に居ますって。」

「そんなに塔の上に居るって言うなら二人で見てくると良いニャ僕とユーノちゃんはここで皆の肉焼いて待ってるニャ。」

そう言うとジュノは携帯肉焼きセットを取り出しその場で肉を焼き始めた。マルクとカノンの方は少々あきれ顔で塔頂上へと向かっていった。

「あの～行かなくて良いんですかジュノさん？」

「いいの、いいの、辺境の村から来た人たちにとっての通過儀礼みたいなものだから、さっ肉焼こう肉。ほれ。焼けたよ～」

「あっいただきます。」

しばらくの間ユーノと二人で食事をしていると阿鼻叫喚な顔をして頂上から二人が戻って来た。

「おっ戻って来たニャ！お帰り～どうだった～」

「いなかった・・・・・」

「ああ・・・」

「でしょ～はいこれ二人の分の焼いた肉。疲れたでしょ？ここで腹ごしらえしたら秘境への入り口を案内するから。いったんここで休憩しよう。」

そう言うとジュノは二人に塩とコショウで味付けしたこんがり肉を二人に手渡した。二人は肉を手渡されると黙々と肉を食べ始めた。

「これでちょっとは信用してくれた?」
「まあ、さっきよりかは・・・ね、マルクはどう?」
「実力次第では・・・」
「ハッハー!こりゃあがんばんなきゃニャ〜。」

四人の談笑が古塔に木霊する中大きな咆哮が塔周辺に響き渡った。

「おっ肉の臭いを嗅ぎつけてきたか。そろそろ休憩は終わりにして銀レウスのいる所へと行こうか・・・案内するニャ!」

そう言うとアイルー仮面は肉焼きセット手早くかたし、自前の双剣を研ぎ始めた。仮面越しにはわからないが彼自身周辺には狩人としてのスイッチが入ったとでも言うのか何とも言えない威圧感が漂い始めた。例えるのならば獲物を目の前に牙を向く猛獣とでも言うべきか。

「(うっ・・・・)」
「(・・・・・)」
「さっ、武器も研ぎ終えたし私についてくるのニャー!」

三人はアイルー仮面についていくとアイルー仮面は切り立った崖の所で立ち止った、その崖は下が雲で覆われていて底が見えなかった。

「あの〜もしかしてこの崖を飛び降りるんですか?」

恐る恐るマルクかアイルー仮面に問いかける。

「その通り！ここが銀レウスが住む秘境への入り口なのデス！もしかしてみんな飛び降りるの怖かったりする？」
「私、高いの少し苦手です。」
「私も・・・・・」

ここでアイルー仮面はマルクに周りに対して聞こえないように小さな声で助言をした。内容としては「ここで男らしく一番乗りで飛べばユーノちゃんに対してのポイントが上がるでお兄さん。」というくだらない内容だ。

「あはは、二人ともだめだな～ここは俺が一番に飛び込んでやるから二人とも見てろよ～。」
「アッー・・・・・・・」

マルクは勢いよくがけ下へと飛び込んで行った。

「いやあ、マルク君勇気あるニャー。最初は飛び降りるのに結構勇気いるのにニャー。さっ次は御二人さんの番だニャどうする？手でもつないで仲良く一緒に落ちるかにゃ？」
「いいえ、マルクに先越されちゃ嫌ですから、次私行きます。」

そう言うとカノンは崖を飛び降りていった。

「二人とも勇気あるニャー流石地方の村で優秀だった事だけはあるニャ。お次はユーノちゃんだけどどうする？」

ジュノが振り返るとそこにはもうユーノの姿はなく崖から飛び降りた後であった。虚しく広場にこだまするジュノの声。

「なにも言わずに行っちゃうなんてお兄さんかなしいぞっと。」

独り言をつぶやくとジュノも崖を飛び降りていった。

崖から飛び降り底に安着すると広場は霧に包まれていた。ジュノはすかさず点呼を取る。

「皆無事かニャ？」

「なんとか大丈夫です。」

「怖かった・・・」

「そうね・・・生きた心地がしなかったわ。」

「ここはもう奴のテリトリーの中だ。奴がいつ襲ってきてもおかしくない、皆武器をだして戦闘態勢へ。・・・・ニャ！」

霧が晴れない中各自武器を取り出し精神を研ぎ澄ます。霧が徐々に晴れていく、霧が晴れた先には銀の威厳を全身に身に纏った勇ましき空の王が姿を露わにした。

「通常よりも全長が大きい・・・皆注意してかかれよ、あっ襲いかかるまえに先輩からアドバイスだ。危なくなったら逃げろ隠れろ、そして助けてもらったらその恩は忘れるな。以上。皆行く・・行くニャ！！！」

「「「はい！」」」

全員が一斉にこの空間を支配する王者へと斬りかかる

「（まずは脚に切掛かり奴の態勢を崩す！）」

「ウォォォ！！！」

マルクの太刀が銀レウスの脚を襲う。銀レウスの脚周辺には雷が辺りに広がる。しかし銀レウスもこの空間を支配する王者、その攻撃を物ともせずにその巨躯を最大限に使い尾を振りまわす。マルクに銀レウスの尾が襲いかかる。

「！」

当たると思ったその瞬間後ろに引っ張られ事なきを得る。引っ張られた先には猫のかぶり物を被った男が立っていた。

「猛攻で相手の態勢を切り崩すのも手だけど、この地方の銀レウスはそんな一筋縄じゃ行かない、切り下がりを多用しつつ相手の見かたと周りを見るんだニャ。」

そう言うと猫のかぶり物をかぶった男は銀レウスの尻尾へと飛びかかり回転切りを加える。
銀レウスの尻尾に轟音と共に稲妻が走る。しかし銀レウスの尻尾は切れる事は無かった。しかし次の瞬間銀レウスの体の自由が奪われる。

「今です！早く尻尾を！」

ユーノが銀レウスの死角からの麻痺弾のサポートで銀レウスは麻痺状態に入る。

「いいぞ！ユーノちゃん！よしマルク君カノンちゃん一緒に尻尾に総攻撃だニャ！」
「はい！」

三人で尻尾へと猛攻を仕掛ける、すると銀レウスの堅牢な甲殻と鱗

は徐々に剥がれ落ちやがって銀の王者の尾は空へと投げ出される。

「よし！もうすぐ麻痺が切れる一度散会して態勢を立て直すニャ！」

「その必要はないわ。」

その声がした瞬間また王者の体の自由が奪われる。

「さあもう一度総攻撃よ！」

「（この子麻痺状態が切れる時間を計算して麻痺が切れる時間と同時にしびれ罠を置いたのか。なんて子だ。）」

ジュノはカノンの罠師としての才能の片鱗に驚きつつもマルクと共に銀レウスの弱点部位にの羽根に切掛かる羽根を切るたびに辺りには血しぶきが飛ぶ。

しびれ罠の拘束時間が切れるとともに銀の王者の耳をつんざく咆哮が大気を震え上がらせる。そして王者は空へと飛び上がり周りを旋回し始める。そして辺りはまた霧の世界へと包まれる。空間には銀レウスが空を羽ばたく音が響き渡る。空の王者にとって空とはハンター達が入り込めない不可侵領域。その領域のなか獲物の品定めをし王者は不可侵領域から地上へと急降下しハンターを襲う。

「アイルーさん後ろ。」

「！」

銀レウスの急降下の勢いに任せた脚の鉤爪攻撃ががアイルー仮面の仮面をもぎ取りその衝撃でアイルー仮面は後方へと吹き飛ぶ。

「くっ！この野郎！」

マルクはその場で悪態を着くと銀レウスに向け閃光玉を投げる。銀

レウスは視界を失い狂乱している。

「アイルーさん！」

三人はアイルー仮面の元へと駆けよる。彼のアイルーフェイクは銀レウスにはぎ取られ素顔が露わになっているが霧が掛かっているせいで顔は良く見えない。

「大丈夫ですか今、生命の粉塵を・・・」

「いや、必要ない・・・」

「でもその体じゃ後数撃もらうと再起不能になっちゃいますよ。」

「火事場ってしってるかい？」

「火事場ですか・・？たしか極限の状態で己の力を最大限に開放するわざですよね。」

「正解。今わた・・・俺はその状態だ。それにお気に入りのアイルーフェイクもあの野郎に取られてかなり頭にきてる。そろそろ本気出してあいつ少しボコボコにしてくるから。三人はしびれ罠を張って罠の上に爆弾を置いて待っててくれ。」

そう言うと霧の中にアイルー仮面は姿を消していった、その数秒後霧の中すさまじい稲光と共に辺りに稲妻が走り渡り銀レウスの悲痛の叫びが辺りに響き渡る。

「なに！？何がおこってるの？ユーノ！？」

「なんだこの轟音はユーノ！？」

二人はユーノに問いかける。ユーノは静かに口を開く。

「あの人が、本気出して暴れてるんだと思う・・・あの人アイルー大好きだから・・・アイルーフェイク破壊されて怒ってるんだと思

うよ・・・」
「あの人何者なの？」
「そうだよ、火事場状態であの銀レウスに猛攻を加えるなんて普通じゃ考えられない！」
「もうすぐ、その正体が解るよ・・・さっ私たちはあの人の言う通り罠を張って爆弾を仕掛けよう。」

そうユーノが言うとユーノはしびれ罠の設置に取り掛かった。

「ハッハ―！！！よくも俺のお気に入りをぶっ壊してくれたな銀火竜！その代償は重いぜ。」
ジュノは猛烈な速度で銀レウスの羽根を突き辺りを血の海へと変えていく。
「（もうこのくらいで良いか。）」
「よーし、準備はできたか～？今そっちへ誘導する。」

そう言うと霧の中銀火竜に追われる男が猛烈なスピードで駆けて来た。そして銀レウスはしびれ罠に掛かり身動きが取れなくなる。

「今だ！爆弾を起爆しろ！」

猛烈な爆音と爆風で辺りの霧は晴れ銀の王者の鱗が爆風で吹き飛ぶ。しかし銀レウスはまだ生きている。

「まだ削りが浅かったか。よし全員もてる全ての力を奴にぶつけろ！総攻撃だ！！！」

霧が晴れ姿を露わにした銀レウスはすでに満身創痍ハンター達の全てを賭けた攻撃を一身に受けこの空間を支配していた銀の威厳は砕け散った。

「俺のアイルーフェイクが・・・・」
「まあいいじゃないですかジュノさん、ジュノさんほどの腕ならまたすぐに作れますよ。」
「また肉球のスタンプを集めるだけの為にアイルーやメラルーたちを虐める事がいやなんだよ俺は！わかる？マルク君！」
「ははは、本当にネコが好きなんですね。ジュノさんは、私ジュノさんはもっと屈強な男で怖いイメージしかなかったのでなんか意外です。この人がメゼポルタの危機を沢山救った人だなんて、ねっユーノ。」
「フフ、そうだねカノンちゃん」

アイルーフェイクが銀レウスによって壊されてしまいジュノの正体は二人にばれてしまった。しかしジュノがおもっていたほど彼らはジュノに対して委縮する事はなかった。

「それにしても、俺ってそんな怖いイメージなのか。あっそうだユーノちゃん火竜の紅玉取れてよかったね。それでなにか武器作ると良いよ。」
「ありがとうございます。なにかお勧めなボウガンってありますジュノさん？」
「んー繚乱の対弩とかいいと思うよ。あでも雌火竜の紅玉と金火竜の堅殻が必要か。」
「あっ雌火竜の紅玉ならこの前リオレイヤ狩った時に手に入れたので大丈夫です。となると後は金火竜の紅玉か・・・」
「ん・・なんならまた今度手伝おうか？」
「いえ大丈夫です。私には素敵な仲間がいますから。」

そう言うとユーノはマルクとカノンに微笑みかけた。

「なんかそう言われると照れるわねマルク。」

「そう、だね・・・」

「おっマルク君耳と顔がまっかだよ。てれ屋さんだな～」

「ここれ・・・違います！照れてません。」

４人の談笑が船内に木霊するなか気球船はメゼポルタへと向かっていくのだった。

18節　ユーノのお願いごと（後書き）

この話で銀レウスの居場所を間違えたマルク君とカノンちゃんは実際私もモンハンポータブル２ｎＧからＭＨＦに移った時やらかした事です。いやぁ古塔の頂上まで行って戻れなくなって、一緒に狩りに行った野良ＰＴの３人にゴメンナサイして一人恥ずかしくリタイヤしたのはいい思い出です。

１９節　動き出す悪（前書き）

昔おはスタでやっていたトムさんのサッカーテクニックスと言うコーナーはどういう経緯で始まったのだろう。あと「レイモンドだヨー。」でおなじみのレイモンドは今どこに居るんだろうか。最近ふと思います。

19節　動き出す悪

ヨハネスが放った改造変種モンスターをジュノは狩り続ける日々を続けていたが、快調と言えるほどの進展はなくまたヨハネスに至っても表立っての行動はなくあるとすればかつてエビィーが噂をしていたギルドから徐々に竜人族を追い出す噂だけが実行に移されただけであった。理由づけとしてはかつて栄えていた狩猟都市ドンドンマの再興という名目でドンドルマへと追いやる事となった。ドンドルマの再興は竜人族だけと言う訳ではなく少なからずもハンター達もドンドルマ再興へと狩りだされているとの噂が立っているので、ハンター達が疑問に思う事はあったが表立った騒動は起きる事は無かった。しかしヨハネスの放った改造変種モンスターは徐々にハンター達の間でも囁かれるようになった。「まったく怯まず弱点部位を攻撃してもあまり効果が表れないモンスターが居る」と言う噂が。

「・・・・」

ジュノは商業地区と狩人地区を行ったり来たりしていた、なにかおかしなモンスターの噂や情報を集める為である。しかしどの人物にも当たってもジュノ自身が知っている情報とほとんど変わらない情報が聞き取れるだけであった。

「・・・マイハウスに戻ろう。」

マイハウス　ジュノ邸

「大丈夫かニャ？旦那さま？ベットで横になった方がいいニャ」
「ああ、大丈夫少し疲れてるだけ、そうだな少し横になるか・・・
冷蔵庫にある元気ドリンコ持ってきてくれ。」

給仕アイルーに横になる事を促され横になる。体調への異常は感じられない、しかし物事が上手くいかないと人間は塞ぎがちになる。ジュノは自身がアンサラーとしての自覚を持ちつつもこの様な人間身溢れる感情を感じる事が出来る喜びを頭の隅に感じつつもベットに横になり今後どうなるのだろう、このまま当てもなく世界に放たれた改造変種モンスターと思われるモンスターを狩り続けるか、それとも改造変種モンスターに狩られるか。そんな事を頭の中で交錯させながらベットに横たわっていた。

「ご主人様、ベットの横に元気ドリンコと栄養剤グレート置いときますニャ。」

「ありがとう。でも栄養剤グレートは頼んでないぞ。」

「僕からの気持ですニャ。これ飲んで元気になると良いニャ。それじゃあ食事の時は呼び付けてくださいニャ。」

そう言うと給仕アイルーは部屋から出ていった、一人部屋に残されるジュノ。ジュノはベットから起き上がるとベット横の元気ドリンコを飲み干しそして一息ついた。

「給仕アイルーに心配されるほど酷い顔してたんだな。俺・・・俺自身が腐ってたら周りも腐っちまう気を付けないとな。」

そう独り言を言い窓際へ向かうとアイルーから手渡された栄養剤グレートを一気に飲み干し空を眺めたしかし月は出ておらず空は星が少し見えるだけで真っ暗だった。

「こういう時に月が出てればいいんだけどな。空気が読めてないな～…」

愚痴をこぼし夜風に当たっていると、誰かがマイハウスに入ってくる気配を感じた。ブロードとは違い極限まで気配を消してこちらへ迫ってくる。

「誰だお前？夜這いにしちゃがたいが良い奴じゃねえか、俺はモンスターの夜這いは勘弁だな。」

「最近、狩猟地区内や商業地区内で妙なモンスターの情報を集めモンスターを討伐しているのはお前か？」

「そう確信があるからここに来たんだろ？腰にそんな物騒な物もってさ。」

男の腰には単発用の拳銃が数丁ぶら下がっているのをジュノは布越しで確認し男に振り返る。

「誰の命令だ・・・って言っても言わないだろうね。まあギルドのお偉い方に命令されたんだろ、仕事とはいえ大変だね～こんな奴の相手をしろだなんて同情するよ。」

部屋内に乾いた音が響きわたるしかしジュノがとっさに投げた栄養剤グレートの空き瓶によって玉の弾道はずれ壁へと跳弾し暖炉に飾ってあった置物に当たるそのすきにジュノは男の背後を取り腕を締め上げ脚を払い床へと押し付ける。

「テキトーに投げたビンが当たるとは運がいいな、君も次襲う時はもう少し暗殺のお勉強をしてくるんだな。これは宿題だ。」

そう言うとジュノは男の後頭部を殴り付け気絶させた。気絶させたあと男の道具ポーチからなにか情報になりそうなものは無いかとポ

ーチ内を漁ると面白い事が記された紙が2枚出て来た。一つは「フローラ・ナターシャ　クエストにて契約者を残し敵前逃亡、逮捕したギルドナイトに賞金」もう一つは「レジェンドラスタをギルドナイト専属性欲奴隷として活用、ギルドナイトはラスタ酒場に明日集合」についての内応だった。

「・・・日付は昨日、だとしたら今日が祭りか・・」

そうつぶやくとジュノは装備を整え始めた。するとシンとエビィーが部屋に駆けこんできた。

「よかった無事だったんだな。今ギルドナイト内でレジェンドラスタ達を言いたくは無いが性欲処理紛いの道具にする計画が進んでる。情報をつかむのが遅くなってすまない。ブロードは先に行ってその計画を阻止すると言って先に潜伏している手筈だ。」

「その情報ならさっき俺を襲撃してきた奴から得た。それとレジェンドラスタが居るラスタ酒場には・・・俺が一人で行く。」

「何言ってるの！そんなの危険よ！」

エビィーが制止にかかるがジュノの顔はものすごい形相へと変わっていたためこれ以上の言及は無理だと悟る。

「3人で行ったとしても、お前達もろとも切り刻みかねん。俺は仲間は斬りたくは無い。」

そう言うとジュノは装備を整え部屋を出ていった。

ラスタ酒場

ラスタ酒場内にはギルドナイト達が全てのレジェンドラスタ達を蹂躙し己の欲望を成就するがために弄ばれていた。酒場内には悲鳴と悲痛な叫びが木霊している。

「止めてくれ！フラウを離してくれ！！俺が代わりになるから！！」

ブロードは先にこの場所に乗り込みせめてフラウだけでも救おうとしたが他のギルドナイトに感づかれ鋼金の手枷と足枷を付けられ身柄を拘束されていた。

「バーカ。おっさんと犯ってなにが楽しいんだよ。俺は女と犯りてえの！聞いてるぜ、お前この女の彼氏なんだろ。この女もあほだねぇこんなおっさんの何処が良いんだか・・・」

フラウは全ての服を奪われ首と手の自由を奪われ四つん這いの形になっていた。

「やめてよ！離して！助けてよ、ブロード！ねえ！！」
「うるせえな・・・おいこいつの口塞いどけ。」
「ンー！！」

フラウは別の男に口の中に異物を入れられ口を塞がれる。

「へへへ、てめえはそこで見てろよ愛した女が目の前で弄ばれる様をよ、ヒュー！！この背徳感たまらねえぜ。」
「お前ホントに変態だな。」

仲間のギルドナイトがへらへら笑いながらフラウを今にも犯そうとする男に問いかける。

「へへ、俺が一番最初で嫉妬してんのか？まあ良いじゃねえかお前もこの女犯れるんだからよ。」
「まあな、さっさと済ませろよ。」
フラウの臀部に手を掛け男はフラウの秘部に自身の一物を当てる。
「さてゆっくり行くか一気に行くか。選ばせてやるよおっさん。」
「止めろー！！止めてくれー！！！それだけは・・・それだけはっ！！！！頼む！止めてくれ！！！！」
泣き叫ぶブロードの声が酒場内に響き渡る。
「あーあ、聞いてねえよこのおっさん・・・じゃあゆっくりとてめえの女が回されて様でも見てるんだな。」
「！」
男はそう言うとフラウの秘部に一物を押しこみ始めた。
「ウワアアアアア！！！！！！！」
その時だった轟音と共にラスタ酒場の扉が吹き飛び壁にぶち当たり粉々となっていた。扉があった場所からは身の丈ほどある大刀を持ち静かに顔が見えないほど深々とフードをかぶりその場に佇む男が一人いた。男は酒場内を見回すとゆっくりと歩き出した。すると一人のギルドナイトの男が乱入してきた男の肩を掴み話しかけて来た。
「兄ちゃん、今日はこの場所はギルドナイトの俺達の貸し切りだ。さっさと出ていきな。ん？兄ちゃん女見てえな顔してんな如何だい俺達と遊んでかねぇか？まあ兄ちゃんは受けの方だけどよへへへ。」
「今日はいつもの酒場のマスター達はいないのかじゃあ・・・だ

な」

「あっ!?なんだって?っ!!!」

男がフードをかぶっている男に問いかけていた次の瞬間男はその場で顔を掴まれる。

「あだだ!なにをする俺はギルドナイトだぞ、てめえのハンターライセンスを消すこ・・」

フードをかぶった男はさらに力を込めギルドナイトの男を体を浮かばせた。

「あいにく畜生と話す言葉を俺は持ち合わせていない。」

そう言うと片手で中空に持ち上げられている男が悲鳴を上げた。

「あつい!熱い!!誰か助けてくれ!!」

「安心しろ、手加減してある。まあ顔は軽いやけどは負うだろうがな・・・・」

そう言うとギルドナイトの男をカウンターへと投げ飛ばし背負っていたフードをかぶった男は大刀を片手で静かに抜く。

「俺は仲間を傷つける剣は持ち合わせていないが、畜生共を切り刻む剣は今持ち合わせている。貴様らは全ハンターの理想に泥を塗ったからだ。さあ選べ、畜生なら畜生らしく俺に食いかかって八つ裂きにされるか。それとも尻尾を巻いて逃げるか・・・」

フードをかぶった男がそう言った瞬間禍々しい殺気が男から発せら

れるギルドナイト達は身ぐるみを全て片手に持ちその場を離れていった。

「二度とこんな真似するなよっと・・・」

一言つぶやくとレジェンドラスタ達の鋼金で作られた足枷手枷を破壊していく。

「皆、体の汚れを落としたらはぎ取られた防具を早く着てくれ。体に異常があるなら病院行けよ。」

そう言いつつフードをかぶった男はブロード達の所へと向かっていく。

「何とか事なきを得たなブロード。お前のお姫様はかなり危なかったがまあ事なきを得たな。」

そう言うと男はフードを外しほほ笑みながらブロードに話しかけた。

「先・・・輩・・・・ありがとうございます。助けてもらって。」

「いいってそんなお礼なんか、それに今回のあいつらの行いは流石に行きすぎたからちょっとケツひっぱたきに来ただけだ。あと今の俺はギルドナイトじゃないだから名前でいいよ。名前で。それより動くなよ、今からその手枷と足枷壊すから。」

そう言うとジュノは太刀を抜刀し鋼金で出来た手枷と足枷を破壊し、次はフラウの拘束具をすべて破壊した。

「フラウちゃんは・・・・気絶か、まああんだけ怖い思いしたから当然か・・防具の方は、ボロボロだなこりゃ仕方ないこれ着させて

運ぶか。」

ジュノは身に纏っていたフード付きの羽織りをフラウに身につけさせブロードにフラウを差し出した。

「ほれ、お前のマイハウスに運んで介抱してやれ。それよりナターシャとフローラちゃんの居場所知らないか？二人の身の安全を確認したいだけども。」

「すいません、二人の居場所はちょっとわからないです。」

「そうか。じゃあ心当たりをしらみつぶしに探してみるか。お前たちもギルドナイトに見つからないよう気をつけろよ。」

そう言うとジュノはラスタ酒場を後にした。

「一番可能性が高いのはやっぱあそこか・・・行きたくねえけど今は仕方がないか・・・」

ジュノはメゼポルタの町はずれの通りへと駆けて行った。

１９節　動き出す悪（後書き）

ブラックロックシューターＴＨＥゲームと言うＰＳＰのゲームを買って今少しづづプレイしてますが、とあるミッションでトライクに乗ってノーダメージで目的地まで行くといい物がもらえるというミッションばっかやっているせいか全然本編やってません。トライクミッション止めて本編進めればいい話ですが、止められないんですよね～。

２０節　商船の頭（前書き）

ヤフオクで前に言ってたＭＨＦ２０１１アニバーサリーパッケージについてる。読み切り漫画がほしいと言ってましたが。すんごい低価格で出品されてたので落札しちゃいました。いやぁいい買い物シタナー。

20節　商船の頭

パローネキャラバン

高い気球船技術を有し当初はメゼポルタにその高い気球船技術を提供したり医療物資や生活用品を運ぶためのキャラバン地区であったがキャラバン航路に強力な個体のモンスターが現れ始め商隊を襲うようになってからギルドと提携を結びパローネキャラバン地区として正式に上位ハンター達から解放される事となった。ハンター達にはギルドから狩人珠と言う特殊な珠が配られキャラバンの商隊の護衛に貢献していく事によってキャラバンポイントがもらえ狩人珠の特殊な能力の恩恵が受け受けられるがギルドの規定により定期的にお手入れをしないと狩人珠が劣化してしまう。この規定によってハンター達はあまりキャラバンの商隊を守ろうとする者は少なく、パローネキャラバンは現在ギルドと相談をし、キャラバン航路上に突如海底火山の活発な活動により現れた絶島に出現する大厳竜ラヴィエンテを討伐するための大討伐クエストをギルドに申請、ギルドはこれを受理しパローネキャラバンのみで受注する事のできる大討伐クエストの権利をキャラバンに与えたが大討伐クエストに出現するモンスター大厳竜ラヴィエンテは大きさと攻守ともに圧倒的で討伐に多大な時間と人数を有するため一部のハンターのみパローネキャラバンの商隊は守られている状態である。パローネキャラバンはハンターと共にギルドの設けたキャラバンポイントに不満を抱いているがパローネキャラバンはギルドに申しだてをしても依然ギルドは沈黙を守ったままであり。パローネキャラバンとハンターズギルドは物資の補給は行ってはいるが互いの仲はあまり良くは無い。

「とりあえずここに逃げ込めばギルドナイトの連中はそう簡単に入ってこないから大丈夫よフローラ。」

ナターシャは栗色のショートカットの女の子を慰める。

「そうさ！ここはパローネキャラバンでしかもギルドの連中も知らないあたいの家何だ。それに外にはうちの弟のオリオールとその仲間が見張っているからね。心配ないさ！」

褐色肌で姉御肌な口調の面倒見の良さそうな女性も栗色のショートカットの女の子を慰めた。

「迷惑掛けてごめんねキエル。」

「いいんだよ、別にさ、あたし達幼馴染じゃん？あたいはキャラバンの頭なんだ幼馴染のピンチなんだよ。あたいだって黙っちゃいられないさ。」

そう言うとキエルと呼ばれた女性はナターシャの肩を力強くたたいた。

キエル＝アルバーロ
若いながらパローネキャラバンの指揮を務めておりその姉御肌な口調と優しさからパローネの民からはカシラと呼ばれ慕われている。

「それにあたい達キャラバンの民もあんたに諜報員紛いのことさせて来たんだ。こうなったのも少なからずあたい達にも責任があるさ。」

「それは別に良いのよ。私も今のハンターズギルドに少し疑問を持っていた事だし、この諜報活動のおかげで寸での所で危険を回避する事も出来たしね。あとは大長老の件をどうするかなんだけど…」

「そうだね、あたい達は気球船を出す事は出来るけど…」

三人が頭を悩ませていると何やら外が騒がしくなっている事にキエルが気付いた。

「ちょっと外が騒がしいね、ギルドナイトの連中が来たのかもしれない様子を見てくるからあんた達二人は隠れてて。」

そう言い残し部屋を後にし玄関にむかうと弟のオリオールが誰かともめている事に気づき玄関付近の窓から様子を覗くと身知った男がオリオールと言い争いをしていた。

「ここには姉貴はいないッスよ。」
「じゃあお前なんでキエルの家の前にいるんだよ。」
「ここ守れって姉貴に言われたッスよ！」
「じゃあキエルここに居るだろう。用事があるんだキエル出してくれキエル。」
「それは出来ないっす。」
「さっきから言っている事がなんかおかしいぞお前。」
「そんなこと無いッス」
「はぁ…よしもっかい聞くぞ今度はおかしいとこ指摘するからちゃんと考えて答えるんだぞいいな。」
「何か間違ってた事答えてましたか？それに気付くなんて流石ジュノさんです！それに間違いも正してくれるなんて優しいッス！」
「俺は昔からやさしいからな、じゃあ聞くぞここはキエルの家だろだからキエルを出してくれ用事があるんだ。」
「ここには姉貴はいな・・・」
「（はぁ・・・何やってんだよオリオール・・・・）」

キエルは心の中で嘆くと玄関を開けた。

「なんだい、久しぶりに見る顔だね。ジュノ。」

「おまえ、ここで出てきたらダメだろせっかくお前の弟の訓練してんのに。」
「あたいに用があるってさっき聞こえたけど。そうかい・・ないんなら良いんだ。閉めるよ」
「はい！あります！ありますからちょっと中に入れてください。」
「今はわけあって中には入れられない、用があるならここで言いな！」

そう言うとキエルは玄関を出て腕を組みジュノと向き合った。その姿は威厳が溢れ正にこのパローネキャラバンを取り仕切る頭であった。

「いや、ナターシャとフローラちゃんここに来てないかな～って。」
「・・・あんた、たしかギルドナイトだったわね。二人はここにはいないよ帰ってもらうか。」
「いや俺は今はギルドナイトじゃないよ。それにほらギルドナイトとして来るんだったら後二人くらい連れて正装で来るだろ普通。それに任務時の義務所持のはずのギルドナイトセーバーもレイピアも今所持してないし。それに幼馴染を差し出す程ギルドナイトに忠誠を誓ってないし。」
「まあ、あんたは普段からギルドナイトに籍置きながらまともに仕事してないのは確かだな。」
「そうだろ～それに今俺もギルドナイトに命狙われる身になっちまったからちょっと匿ってよ～昔遊んだなかじゃないか～。」
「一応聞くけど何やらかしたんだい？」
「ヨハネスの放った改造変種モンスターを狩り続けその情報も集めてた。それにこの件ははお前達キャラバンの民がハンターズギルドに放った諜報員にとっても結構関係があるんじゃない？」
「・・・・・入んな。」
「姉貴、ジュノさんを家の中に入れてもいいのか？」

「ああ、こいつはあたし達キャラバンの民の連中が欲しがってる情報を持ってるかもしれない。それにあたいの昔の遊び仲間でもあるしね。」

そう言うとジュノはキエルの家へと招き入れられた。中は様々な商船記録や帳簿があり女性の部屋に似つかない気球船の模型が棚に飾ってある。

「おっこの気球船まだあったのか、よくこれ持って昔一緒に遊んだよな～。」

「ああそうだね、懐かしいね。昔はよかったよ色々な事やっても新鮮で楽しくて。あたいとナターシャはきつい性格でいつもあんたに言いすぎてあんた泣きべそかいてたの思い出したよ。その後親父に怒られたっけなぁ・・・・」

「あれは下手したらトラウマもんだぞ・・・まあ今では良い思いでだけどな。」

「フフ、そうだね。それでさっそくだけどあんた持ってる情報聞かせてもらおうか。」

「・・・今ギルドはヨハネスが牛耳ってる状態だ。しかもあいつは改造変種モンスターとか言う原種より遥かに強力かつ奴自身命令を聞くモンスターを世に放った。このままだと生態系は崩れヨハネスの提示した人が一番上の世界になっちまう。確かにモンスター達に怯えている人々は居るかもしれないがあいつらもこの世界で俺らと同じように生きてる住民だ。言葉は通じなくても共生し合って生きてくべきなんだ。だから俺はギルドから一時的に離れヨハネスの放った改造変種モンスターを狩り続けた。改造変種モンスターの特徴としては主に・・・・」

「怯まない・・・肉質が変更されている。だろ?」

「なんで・・・その事をお前が知ってるんだ？」
「あたい達キャラバンも前からギルドに不信感を抱いていてね、あんたがさっき言った通りギルドに諜報員を送り込んでたのさ。まあその結果こういう事態になっているわけだけどね。」
「二人ともこいつはギルドの回し物じゃない。安心してでてきな。」
キエルが部屋の奥に声を掛けると二人の女性がゆっくりと奥から出て来た。

「ナターシャ！フローラちゃん！よかったここに居たのか。」
「あっジュノさん！お久しぶりです！」
「お～そうだな～フローラちゃんはレジェンドラスタ適性試験ぶりじゃないかな。その後はどう？あの爺さんから教わった片手剣術で頑張って仕事してる？」
「はい、それはもうバシバシと！」
「ははっならよかった。」
ジュノが二人の安全を確認するとジュノはキエルに振り返り問いかけた。

「もしかしてフローラちゃんがパローネが送り込んだ諜報員？」
「いえ私はちがいますよ。ナターシャ先輩がパローネが送りだした諜報員なんですよ！すごいですよね。」
そうフローラがジュノに言うとジュノは無言でナターシャに振り返った。

「な・・・なによ、あっ驚いて口も開かない状態なのね！まあそうでしょうねすばらしい美貌と狩猟術・・・」
「ねぇキエル、人選ミスじゃね？」

「・・・・尻を矢切りするわよ・・・・・」
「それは勘弁してください。」
「アハハ！！人選ミスじゃないさ。ナターシャはよくやってくれたよ。私達に有益な情報を色々伝えてくれたからね。」
「そのおかげで決心が固まった。私達パローネキャラバンはハンター達と何とか手を組んでハンターズギルドに対抗する事にしたんだ。」
「おおっ！そりゃすげえな！！んで何時対抗するんだ？」
「本当なら今でも対抗したいんだけどね、知ってるだろ私たちは弾薬や医療品の補給は出来てもハンター達を指揮する人物がいない事を。」
「お前やれば良いじゃねえか、大討伐の指揮もお前取ってるんだろ？」
「アハハ！表向きはそうなってるけど、ほとんどはハンターさん達の間で仕切ってるからね。あたいはお飾りみたいなもんさ。それに今回はギルドナイトとヨハネスの改造変種モンスターと戦うんだ、数ではうちらの方が勝ってるけど有象無象がよってたかって統率のとれた奴らと戦ってみなよ。勝敗は決まってる。」
「うーん。まあそうだな。」
「そこであたいらは今メゼポルタから離れてる大長老ら竜人族に指揮を取ってもらおうと考えてるんだけどこれが上手くいかなくてね。」
「なんでだ？大長老なら今ドンドルマに居るだろ。」
「それが居ないんだよ。今ドンドルマには人っ子一人もギルドに関わってた竜人族一人もいやしないんだ。」
「ホントかそれは？」
「ああ、あたいの部下が身に行って来てくれたんだ間違いないよ。」
「じゃあ大長老達は今どこに・・・」

「ナターシャが持ち帰って来た情報によると大長老達は今絶島付近の島ブルム島に捕われてるって話だ。」
「ホントか！ナターシャお前意外とやるなぁ！」
「意外とってなによ！意外とって！」

「コホン！話を戻すぞ。それで大長老達の居場所はわかったから後は解放しに行くだけなんだが。レジェンドラスタ達は今表立って動けない状態だしあたい達はその島まで運ぶ事はできても戦力には到底ならないしどうしようかって所で今悩んでる。」

「なるほど、俺がじじい共を連れだせば良いんだな。」
「えっでも相手はヨハネスの私設部隊が監獄の護衛をしてるんだよ、いくらあんたが強く立って一人だと辛いんじゃないかい。」
「ここまで俺に話して、俺を引きとめるとか意外と女々しいなお前。大丈夫だってバカの私設部隊なんざ俺の一睨みでくもの子散らす用にどっか行くだろう。それに幼馴染が二人してこんなに悩んでるんだ、俺が動かなくて誰が動くんだよ。」

「ジュノ・・・わかったあんたに賭けてみるよ、大長老達の救出に向かわせる船の操縦にはオリオールに行わせるよ。出発は明日の早朝にしよう。だからあんたは無事に戻ってくる事！いいね？」

「わかった。じゃあ身支度してくるからこっそり武器工房とマイハウスに行って準備してくるわ。それまでに船の準備しとけよ。じゃあな！」

そう言うとジュノはキエルの家を後にしマイハウスと武器工房にむかった。残ったキエルとナターシャとフローラはジュノの事について話し合っていた。

「あいつ、昔からかわってないな。」
「そうよね…昔は私達に泣かされてばっかいた泣き虫だったのにね。」
「えっ、ジュノさん昔は泣き虫だったんですか？」
「まぁ、あたい達がきつい性格な子供だったのもあるけどな。」

「でもジュノは泣き虫だったけど優しかったわ。私達がどんなにきつく当たっても次の日には家の前に来て遊びに誘ってくれたもの。昔はなんだ、こいつ？って思ってたけれど。私達はきつい性格だったから友達があまりいなかったのを察してくれて私達を遊びに誘ってくれてたのよね。」

「アハハ、そうだね。あたいはきつい性格に加えキャラバンの民だったから常にメゼポルタに居るわけじゃ無かったからナターシャよりも友達はすくなかったね。でもあいつはあたいが帰ってくるたびに「おかえり～一緒に遊ぼう～」って言ってくれてた。最初はうれしくは思わなかったけど徐々にあいつにおかえりって言ってもらえるのが嬉しかったけ。」
「へ～そうだったんですか。じゃあジュノさんは昔から優しい人なんですね。」

3人はジュノの事で大いに盛り上がり夜は更けていくのであった。

２０節　商船の頭（後書き）

私は良く空を飛ぶ夢を見るんですよね。夢の中のそらの飛び方としては片足を上に思いっきり振り上げて、体を浮かせて後は上に向かって飛んでいくって感じですね。

21節　決死の救出劇（前書き）

最近思い始めたのですがドラえもんの本物のきぐるみを来た人とツーショットで写真を撮りたい。なぜ子供の時に一緒に撮らなかったんだ。毎年ドラえもん映画を見に行ってたのに。とちょっと後悔しています。

21節　決死の救出劇

気球艇　操舵室

ジュノとオリオール達は絶島付近に存在する島ブルム島へと向かっていた囚われの身の大長老達を救うべく

「進み具合どんな感じよ？オリオール？」

「問題ないッスこの調子だと4分くらいで着くっすね。」

「そっか、わかった。着いたら俺は島に降下する。それと同時に積み荷のあれも一緒に降ろしてくれ。」

「わかったッス。監獄は横に何層にわたる壁で張りめぐらされているとの情報ッス、それにしてもあんなデカイ物一人で持てるんスか。それに誰が使うんスか？」

「俺が使うのさ、まぁ重くて力加減しずらいけど、何とかなるさ。」

「そうッスか。あっ！見えてきましたあの島ッス」

「あの島に大長老達が、よっしじゃあ大長老達が捕えられてる監獄付近まで飛んでくれ。俺と積み荷のあれを降ろしたらお前は島周辺を旋回しつつ待機。大長老達を救ったらお前からもらった信号弾を撃つから信号が見えたら大長老達と俺を船に乗せて島を離れる。後はメゼポルタまでお空の旅を満喫って感じでいいよな？」

「はい、そんな感じでヨロシクッス。じゃあ降下準備ヨロシクッス。」

オリオールがそう告げるとジュノは気球船デッキへと降下準備をしに向かった。

「ハンターさん気をつけて行ってらっしゃいですニャ！」
「わかってるって、じゃあオリオールに後はよろしくって言っといてくれじゃあね～」

気球船乗り組み員のアイルーに告げるとジュノはブルム島へと降下していった。降下時に掛かるすさまじい風圧を感じるも狩人珠の能力の一つ着地術の恩恵を受けながら何とか地上へと軟着陸に成功する。そして積み荷も落下傘に吊るされゆっくりと地上へと落ちて来た。積み荷の落下傘を外し手早く包みを開封するとそこにはとても普通の人間が振るうことのできない長さの太刀が現れた。

「しかしまあ、やっぱ大長老が現役時代に使ってた太刀だけにでかいな。」

試しに太刀を持ちその場で振るうとその場に風圧による風が巻き起こる。

「まあ、これとポーチに持ってきた大タル爆弾Ｇ３で監獄を爆破しつつ、おじい様達を助けに行くかな。」

そう一言言うと目の前に広がる監獄に向けてジュノは駆けだしていった。一方監獄側ではすでにジュノの存在を確認されていたがそれほどの脅威にはならないだろうと確認したのかまったく警戒の動きを見せなかった。ジュノが監獄の近くまで行くと見張りの兵らしき男が声をかけて来た。

「そこのお前！いったいココで何をしている。」
「うちの居眠りおじいさんを迎えに来たから。この扉あけておくれ。」

「何をバカな事を言ってるんだ。さっさとこの島から出ていけ。」
「そうか、開けてくれないよな、じゃあ壊して入りますね。」

そう言うとあらかじめ抜刀してあった大長老の太刀に力を込めその場で鬼刃切りの応用で目の前の門と壁を刻むと門と壁は吹き飛び中が露わになった。扉と壁が破壊された音を聞き様々な場所からヨハネスの私設部隊が出てきジュノを包囲する。

「貴様ふざけた真似を。今すぐ捕えて牢獄にぶち込んでやるから覚悟しろ！」
「こまったな～…数は十数か・・・この太刀長くて重いから峰打ちしてもあばら折れるくらいするかも知れないけど勘弁な、じゃあたのしい宴の・・・・始まりだ！」

そう言うとジュノは極長の太刀を振り回しながらヨハネスの私設部隊に向かっていった。

監獄　牢屋内

ズズン！

「なにやら外が騒がしいですな大長老？」
「うむぅ、この気配もしや奴が来たのかもしれぬのう。」
「奴とは誰の事ですじゃ？」
「我々が危険因子として監視していた彼ですよ、副補佐官。」
「彼・・・まさか！」

轟音と共に目の前の壁が叩き壊されるとそこには極長の太刀を肩に掛けへらへらしている男が現れた。

「ハッハー！じいさん達、洒落た装飾品付けてるな～似合ってるぜ。」
「フォフォ、外が騒がしいと思っていたらやはりお主だったかジュノ、何をしに来た？」
「こんな格好してんのに小遣いでも貰いに来たとでも思ってんのか？」
「フォフォ、そうじゃな、頑張って助けに来てくれたのだな。ありがとうジュノ。」
「・・・・いいから檻とその磔になってる拘束具ぶっ壊すからじっとしてろよ。あぶないから」

そう言うとジュノは檻を破壊し磔にされてる者達の拘束具を破壊していく、ロクな食事も与えられず衰弱しきっている者もいるのかその場でへたり込む物も居たそう言った者には携帯食料と水を与えさせ何とか回復を図ろうとするが、それ程の時間の猶予はないなぜなら外の兵士が気絶から覚醒するかもしれないからだ。

「その携帯食料と水を補給したらすぐにここから脱出する。遠足に来たわけじゃないからな。それと安心していい敵と言う敵は片っ端から排除してある、穴があいてるとこを真直ぐ進めばこの監獄から出る事が出来る。すまないがまだ走れない者は助け合って進んでくれ。」

「大長老、あんた体力の方は？」
「さっきの食事で腹を満たす事は出来なかったが、まあそうじゃの少しだけなら戦うことも出来そうな位の体力はあるのう。」
「そうか、じゃあこれ返すわ。どうもでかくて使いにくい、やっぱり持ち主が使ってこそ武器も喜ぶってもんだ。」

そう言うとジュノは持っていた極長の太刀を大長老に渡し予め持っ

てきていた肩に掛けてた双剣の手入れをし始めた。

「これはワシの斬老刀［スサノオ］、お主これを振るってここまで来たのか？」

「ああ、どうにもそれは重すぎて力加減がわからねえからあんたが持っててくれ。」

「・・・やはり、お主をあの島にやって正解だったようじゃな。」

「あぁ？早くここから脱出しろよ。居眠りじいさん。俺はまだここでやる事があるんだ。あんたがそれ持って先陣切ってくれると助かる。」

「お主の願い聞き入れようぞ、皆の者！ワシが先陣を切るお主らはワシに着いてまいれ。」

そう言うと大長老の勇猛なる轍を後に続くように捕われていた竜人族はジュノが破壊してきた穴に向けて進み始めた。

「流石は大長老だな・・・さて俺はしんがりを務めるとするか。」

そう言うとジュノは後方に気を配りながら隊列の後ろについて行った。

監獄前　門前

「おぉ！外だ！」

「我々は自由だ！」

脱出の途中では何も起こる事は無く無事に全員監獄からの脱出に成功し感極まる、竜人族達しかしジュノは不安に思っていたいくら監獄内の兵士達をあらかた排除したとしても事が簡単に進みすぎて不気味に思っていた。

「ともかく、信号弾を撃ってオリオールに伝えなくちゃな。」

信号弾を放つと数分もしないうちに気球艇が空から現れ地面へと着陸し乗務員らしき女性が姿をあらわした。

「皆さんご無事ですか？私はパローネキャラバンの民の者ですこれからこの船はメゼポルタに向かいますので、押さないで順番に乗船してください。」

そう女性が告げると竜人族は順番に船へと乗船し始めた、ジュノと大長老は全員が乗船しきるまで船周辺の警戒を行っていた。すると気球艇乗船員のアイルーが走って来た。

「皆さん乗船完了しましたニャ。あとはお二人だけですニャ。」

「うむ、わかった。ジュノ気球艇に乗り込むぞ。」

「あぁ、」

二人が乗船すると気球艇は地面から浮上し始め大空を駆けるようにメゼポルタに向けて飛んで行った。

気球艇　貨物室

貨物室では温かい食事が竜人族に振舞われていた。それにみんな安心したのかところどころ笑顔がこぼれていた。しかしジュノはまだ思慮に耽っていた、あまりにも簡単に事が進んでいる事に。

「（なにもなきゃ・・・何もないで良いんだけどな。でも上手くいきすぎてる気もする。）」

「どうしたジュノ、お主は食べぬのか？」

「ん？あぁ俺は良いよ皆おなか空いてるだろうから皆で食べてよ。俺は操舵室の方へ行ってくるから。」

そう言うとジュノは気球艇操舵室の方へと向かっていった。

気球艇　操舵室

「何か追ってみたいなのとか来てないか？オリオール？」
「今のところはそう言った報告は来てないッスね。」
「もし来たとしたらこの船に迎撃用の武器とかはあるのか？」
「とりあえず、バリスタとネコ気球船による空中砲撃が出来るようには準備してあるッス。」
「そうか・・・・」
「どうしたんすか？ジュノさん？浮かない顔して？」
「いやあまりにも事が上手く進みすぎてる気がしてね。」
「こちらに良い風が吹いてるって事ですよ。だからあまり気にせず行きましょうよ。」
「フフ、そうだね俺の気にしすぎか。」

ジュノとオリオールが話していると操舵室に女性乗船員が入って来た。

「お伝えします。気球艇後方海面にモンスターらしき影が観測アイルーにて発見されました。ハンターさんデッキの方へに来てもらえますか。」
「それは、ほんとッスかネリス？」
「やっぱり簡単には逃がしてくれないか・・・わかった、案内してくれ。それとオリオールこの事は竜人族の人達には言うなよ、やっと解放されて安心してるんだ。何があっても感ずかせるなよ。」

オリオールが首を縦に振るのを確認するとジュノは気球艇デッキへと案内された。

気球艇デッキ

デッキは後方を見渡せ広々としており様々な武器や砲丸の弾が入った箱が並べられていた。

「ハンターさんあれです真直ぐ後方の海面を見てください。」
「（・・・あれは・・・・ラヴィエンテ・・・・）」
「あれはラヴィエンテだな、ヨハネスの私設部隊の誰かが絶島からあいつを焚きつけて俺らを襲わせるつもりなんだろう。」
「ラヴィエンテってあの大巌竜ですか!?あんなのに襲われたらこの気球艇は木端微塵ですよ!」
「上手くいきすぎてると思ったらこんな展開になるとはな・・・このまま逃げ切ってもいいかもしれねえが、もしそのままついてきてメゼポルタに突っ込んだりしたらメゼポルタは壊滅するな・・・」
「（今こそあの力使うべきか・・・・）」
「よっし、あいつは俺がなんとか絶島に追い返す。君・・・・たしかネリスちゃんだっけ?ネリスちゃんはこのデッキを封鎖することと大巌竜の件と大巌竜は俺がなんとか追い返すから、そのままの速度で進めって事をオリオールに伝えてくれ。」
「そんな一人で無茶ですよ大巌竜は通常多人数で挑んでやっと倒せる相手ですよそれを一人で追い返すなんて。」
「大丈夫、俺に考えがあるから安心しろって。だからネリスちゃんは安心してデッキを封鎖しろそんで大巌竜がひき返したのを観測アイルーが確認したらデッキを開けてくれ。いいな」
「・・・わかりました。ではご武運を」

そう言い残すと乗船員はデッキを後にしデッキの鍵を閉めた。

「ごぶうんってなんだ？東方の言葉かなにかかな？まあいいか。」

そう独り言を言うとジュノは目を閉じ意識を集中し始めたはじめは心に蒼炎を作り出し蒼炎を特大の槍状にそしてその蒼炎槍を実体化かしその手に宿すイメージをする。目を見開くとジュノの体は蒼炎に包まれ背中に紋章を浮かばせて空中へ浮遊して巨大な炎の槍を手に構えていた。

「おっアイリスとの特訓の成果だな。でもこの姿になるとやはり俺は普通の人間じゃないんだな…まあ今はそんな事気にしてる場合じゃない。ともかく大巌竜を追っ払わないと！」

そう言うとジュノは大巌竜に向け巨大な槍を投了する。見事大巌竜の体に炎槍は突き刺さり大巌竜は悲鳴を上げるが大巌竜はあい変わらずこちらへ向かってくる。ジュノも負けじと複数の炎槍を作り出しまとめて大巌竜に向けて投了するが大巌竜は怯まずこちらへと向かってくる。

「流石、大巌竜だな。このくらいじゃ怒りを買うだけか。」

大巌竜は猛烈な速度ですぐそこまで迫っているこのままだと気球艇に噛みつかれて木端微塵となってしまう。それは何としても避けたいとジュノは辺りに使えそうな物を探す。すると砲丸の弾が沢山入っている箱に目が止まった。

「そうだこれを奴の頭に有りっ丈ぶん投げてスタンさせれば！」

ジュノは砲丸の入った箱に手を駆け力を込めて持ち上げそして大巌竜の頭が海面から出るのを待つと大巌竜はこちらに火球を放つ呼び

動作をするために海面から首を出し首を大きく曲げて顔をこちらに向けた。

「そら！いいもんやるぞ！！！」

大巌竜が火球を放つ瞬間にジュノは大巌竜の顔目掛けて砲丸が入った箱ごと大巌竜の頭にぶつけた、大巌竜の首は大きく右にそれ火球は右の方へと飛んで行った。

「結構危なかったな…でもこれでだいぶ頭がクラクラしてるはずだ・・・」

そう思い下の大巌竜に目をやると再びブレスの呼び動作を終えて大巌竜は気球艇に向けて特大の火球を放った。

「（まずい！！）」

ジュノもとっさに巨大な蒼槍を作り出し火球に向けて投げる。火球と槍は相殺されるが相殺された火球の後ろから大巌竜がこちらへ向けて飛びかかって来ていた。

「（いちかばちかだ！！）」

ジュノもその場を駆け大巌竜に拳を向け飛びかかる。

「ゥオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！」

ジュノの放った拳が大巌竜の脳天に当たり大巌竜は海面へと崩れ落ちる。崩れ落ちる際に大巌竜の牙が気球艇にかすり気球艇が大きく揺れジュノ脳天にも砲丸の弾が当たる。

「ウグッ！！（まずい、まだ戦闘中なのに意識が・・・）」

寸での所で意識を保ち大巌竜を見つめると大巌竜は咆哮を上げながら絶島に帰っていく姿を確認した。そうジュノは大巌竜の撃退に成功したのである。

「はは…なんとかなったか・・・あいつが凶暴期の大巌竜だったらこう上手くは行かなかっただろうな…」

自身の体を纏っている蒼炎を解きデッキへと着地する。するとやはりさっきの砲丸の弾によるダメージと実戦での初めての能力使用で頭がふらついていた。

「はは…ちょっと寝るか・・・」

そう言うとジュノはデッキの側面に座り静かに目を閉じた、するとデッキの扉が開かれる音とこちらに向かって誰かが駆けてくる音が薄れゆく意識の中微かに聞こえた。

「・・・さん！！ハ・・サ・・・！！」

「（おやすみ・・・）」

気球艇　観測室

「ニャニャ！ネリスさん大巌竜が絶島へと逃げてくニャ」

「ハンターさんが大巌竜を退けてくれたんだ。早くデッキの封鎖を解いて！それと救護アイルーと先生も一応私と一緒に。」

「了解ニャ―」

ネリスと呼ばれている乗船員は救護アイルーと医師と共にすぐにデッキへと向かった。デッキの扉を開くとそこにはデッキに背中を持たれかけて座っているジュノの姿があった。

「ーーー！ハンターさん！！ハンターさん！！しっかりしてください！！先生！救護アイルー！ハンターさんの救護を。」

救護アイルーと医師はジュノのもとへと駆けよる。医師は最初は難しい顔をしていたがすぐにその顔は普通の顔へと戻った。

「ハンターさんは寝てるだけ見たいだな、じきに目を覚ますだろう。」

「そうなの、よかった・・・」

アイルーとネリスが安心している中ひとり救護の医師が頭を抱えていた。

「でもおかしな点がある、頭部にとても大きな衝撃を受けて頭部がついさっきまで裂傷らしき跡があったのに今は元通り。おかしい・・・」

「でも先生今ハンターさんは寝てるだけなんでしょ？」

「そうだが。いくら凄腕のハンターであることや薬があるとはいえこれだけの治癒力は普通の人間では考えられない・・・」

「まあいいじゃないですか先生。ハンターさんも無事何だし大厳竜も絶島に戻っていった事だし。」

「まあそうだな。ともかくハンターさんが無事で何よりだよ。じゃあ私は貨物室の竜人族の健康診断に戻るとするよ。」

そういい医師と呼ばれた男はデッキを離れた。

「じゃあ救護アイルーハンターさんを運ぶの手伝って、いつまでもこんなとこに居たらかわいそうだからね。」

「はいニャー！！」

かくして大厳竜に襲われるという非常事態はあったが大長老達の救出作戦は成功し気球艇はメゼポルタのパローネキャラバンへと進んでいくのであった。

21節　決死の救出劇（後書き）

本来のＭＨＦ内でラヴィエンテと戦うときって１０フェイズに別れて戦う事になるんですけど、最初の1フェイズ目は３０秒くらいで終わるんですよ。大討伐に参加してるほとんどの人が火事場してラヴィエンテに攻撃しますから。でも最後の方は倒れたりする人が増えてきて火事場状態で１０分間位戦って倒すことになるんですよね。それで総合的な拘束時間を見ると1時間半は超える事はざらにあるんですよ。実装当初は皆負けまくって、某掲示板で勝てなくて悔しい奴集まって討伐しようって流れになって皆で集まってチャットで「ドンマイ！がんばろう！」と言いながら3時間かけて討伐し、討伐した瞬間ＭＨＦ内の大討伐チャットが歓喜のチャットで埋まったのはいい思い出です。

22節　狼煙を上げよ（前書き）

猛禽類ってカッコいいですよね。イヌワシとか…河原で自転車こぎながらイヌワシと散歩してみたいです。でも突かれたら「イタッ！」じゃなくて「ア”ー！！！」ってなるんだろうな。

22節　狼煙を上げよ

パローネキャラバン　？？？

大厳竜との戦いの後無事にパローネキャラバンへとたどり着いたジュノ達はパローネの民達によって手厚く介助をされていた。その間のメゼポルタのギルドナイトの動きとしてはとても大きな事柄あったヨハネスがギルドナイトを率いて西シュレイドに在する古城へ姿を消したとの情報が入ったのである。その間大長老達はパローネの気球艇の発着場の下のドックにて体力の回復を図りジュノはネリスの家のベットでまだ眠りにふけっていた。

「まだ目を覚まさないなーージュノさん。」

ネリスはベットの横に座りジュノの寝顔を観察していた。

「こうしてみるとジュノさんの顔ってきれいな顔してるな～髪の毛もっと伸ばしたら。女の人と間違われてもおかしくないかも。」

そうネリスは言うとジュノの顔に自身の顔を近づけジュノの顔を近くて見ていた。

「肌も白いし羨ましいな～」

「ん・・・・」

「（あっ目を覚ましちゃう、イスに座ってないと）」

ジュノは目を覚ますと辺りを見回し上半身を掛けられた掛け布を払い上半身を起こし辺りを見回した。

「ここは何処だ・・・？」
「ここは私の家です。安心してください。大長老達も無事ですよ。」
「君はたしか・・・ネリス？だったよね名前。」
「はい！覚えててくれてうれしいですジュノさん！」
「ん？なんで俺の名を知ってるんだ？」
「あっキエルさんがジュノさんの事をそう呼んでたのでそれで知りました。」
「そう・・・か。あの後大巌竜は追ってこなかったかい？」
「はい、大巌竜は絶島の方へ逃げて行きました。流石凄腕ハンターさんですね。」
「ははっ・・・それほどでもないさ・・・それと今まで看病してくれてたんだね。ありがとう。」
「いえいえ、私が進んでやったことですし。」

静まり返る室内、ジュノとネリスは無言で見つめあっていた。するとネリスの顔がほのかに赤くなりその場に立ちあがった。

「あっ・・あの、私お水持ってきます！」
「あぁ」

ジュノに見送られながらネリスは部屋を出ていくとジュノはベットから立ち上がり体を屈伸した。すると外が何やら騒がしい事に気付き窓から外を覗くとパローネの広場に溢れかえるほどのハンター達が来ておりその先の壇上でキエルが何やら演説の様な事をしているのが目に入って来たのである。

「なんだありゃ・・？」

窓を開け声を聞こうとするがキエルが話している場所とジュノが居る場所ではかなり離れていたので演説の内応を聞き取る事は出来な

かった。

「ジュノさん水持ってきました。」

「ああ、ありがとう。ネリスちゃん今日はパローネは何かのお祭りなのかい？広場にやけにハンターが集まっているみたいだけど？」

「あっあれですか。あれはですね。実はハンターさん達と私達パローネの民が手を組んでギルドナイトに立ち向かう事になったんです。おカシラは今その事になったきっかけと経緯を話しているんですよ。」

寝起きの頭を回転させるとジュノは大長老達を救いだすきっかけを思い出した。

「あーなんかそんな事言ってたっけかな～それで大長老が必要で俺が助けに行ったんだったね。駄目だ寝起きで頭がまだ朦朧としてるみたいだ。」

「となるとここでうつらうつらしてる場合じゃないな、俺もあの場所に行って演説聞かなきゃ。」

「はい、案内します着いて来てください。」

そうネリスに言われるとジュノはネリスの後に着いて行った。

パローネキャラバン　広場

広場にはメゼポルタじゅうのハンターが集まりもう広場全体に溢れかえるほど人が集まっていた。

「ハハっすげえ人だな。　でもなんとかキエルの演説は聞こえるな。」

独り言をいいジュノはキエルの演説に耳を傾けた。

「我々パローネの民はハンターズギルドのギルドナイト達によって様々な迫害を受けて来た、そこで我々はハンターズギルドに疑問を抱きギルドに対して諜報員を送り込んだその結果、驚愕の事実が発覚した。ギルドナイト達によって秘密裏にモンスターが改良されそのモンスターを野に放つ事によって全てのモンスターを駆逐させるという事を、これは今この世界の保たれつつあるモンスターと人間との均衡を崩す決定的な物となるだろう。」

辺りにどよめきがわき始める。しかしキエルの演説は続く。

「そうなれば世界は終わり君達の職も追われてしまうだろう。そこで我々はハンターギルドに対しここに抵抗する事を宣言する。しかし我々は弾丸や医療品の補給は出来てもギルドナイトに抵抗すべく力は持ち合わせていない。そこで我々はハンター諸君と手を組んでこの問題を解決したいと思っている。ハンター諸君！我々パローネの民に力を貸してくれないだろうか？」

「手を貸すには良いが誰が指揮を執るんだよ。戦闘経験のないお前らパローネの民か？」

一人の男がキエルに対し反論を起こす、すると周りのハンターも同時に野次を飛ばす。

「ハンター諸君その点に関しての疑問はわかる。なので今回の作戦はこの方に指揮を執ってもらう事にした。」

そういいその場を離れるとひな壇の後ろの方から大長老が姿をあらわした。あたりに野次を飛ばしていたものが静まり返り大長老のそ

の姿に喝采が溢れた。

「フォフォ、狩人達よ久しぶりじゃのう。」

大長老は斬老刀［スサノオ］を床にたてつき話をし始めた。

「ムオッホン！キエル殿に代わって、ワシから話をさせてもらおう！ヨハネスの放った改造変種モンスターに対抗するにはそう、チームワークが大切じゃ」

「だがいくらメンバーのチームワークがよくとも少なからず武器の相性というものが出来てしまう、そこでじゃまずお主らの一番得意な武器種別に集って欲しいのじゃ、そこからＰＴを固定登録をしてゆく！」

「装備の選択着替えなどはキャラバンの即席のテント内で行う事が出来るはずじゃ、着替え終えたら再びここに集って欲しい、以上！」

そう大長老は言うとハンター達は喝采を上げテント内での装備選択を行った。

「さっすがじいさんだな、どっかのバカとは違ってちゃちなもん使わずにハンター達をまとめ上げるとわね～」

「さっじゃあ俺も装備選択しにテントに移動するか～どれにしようか・・・」

「ジュノさん、ジュノさん！」

後ろから服の裾を引っ張られ後ろを向くとそこにはネリスがジュノ

を見上げていた。

「おっネリスちゃんかどうしたの？」

「装備着替え終えたらカシラの元に向かってください。カシラと大長老がジュノさんに話があるそうです。カシラの元には私が案内しますのでジュノさんは着替えを済まして来てください。私ここで待ってますから。」

「話ってなんだ？」

「私は何も聞かされてないのでお答えする事は出来ませんがとっても重要な事だから必ず来るようにとのことです。」

「なんかめんどくせえ気がするから行きたくないけど。この状況じゃ仕方ないか。わかったさっさと着替えを済ましてくるから。」

そう言うとジュノはテントの中へと駆けこんだ。

テント内

テント内では様々な装備を身に纏ったハンター達がごった返していた。その中には見知った顔もいてジュノは軽く挨拶を交わしたりもした、しかし見知った顔のほとんどの目には闘志の炎が灯っているのがわかった。

「（みんな、めっちゃやる気だな。俺もやるき出して装備考えなきゃな。）」

「あっ・・・ジュ・・サ・・」

「（得意な武器か～と言ってもほとんどの武器種が得意だからな～好きな武器種で選ぶとするかとなると双剣かな…）」

「ジュノさん！！」

大声で呼びだされるとそこにはユーノが立っていた。

「おお！ユーノちゃんじゃないか。ごめんごめんどの武器にするか考えてて聞こえなかったよ。」

「フフ、そうですかジュノさんもこの戦いに参加するんですね。」

「まぁね、この事態を引き起こしたのは俺の元上司だしね。それに世界の危機でもあるし参加しないなんてまずないんじゃないか？」

「そうですよね。あっこの前一緒に銀レウスを狩ってくれたあと頑張ってこの武器作ったんですよ。」

そう言いユーノは背中に掛けてあった繚乱の対弩をジュノに見せた。

「おっついに作ったんだ繚乱の対弩。このボウガンはね～強力な弾が撃てるし種類豊富な状態異常弾が撃ててとっても使い勝手が良いボウガンなんだユーノちゃん頑張ったんだね～最初に出会ったころとは大違いだ。」

「えへへ、これもジュノさんのご指導のおかげです。それじゃ私着替え終わったんでテントの外に出てます。絶対勝ちましょうねこの戦い！」

そう言うとユーノは拳を上げた

「おう！絶対勝とう！」

ジュノとユーノは拳を合わせユーノはテントの外へと出ていった。

「出会ったころは私怨に燃えてゆがみかけてたのに。真直ぐに育ってまあ嬉しい限りだ。」

「（出会ったころか・・・あの時はただぐうたら過ごしてただけだったのにこの短期間で色々な事があったな…特異個体クシャや俺の出生・・・・俺の存在・・・・）」

「・・・いかん！さっさと選ばないとネリスちゃん待たせてるんだった。とりあえず怒髪双乱【挽歌】でいいか。」

ジュノは自身の装備用ボックスから怒髪双乱【挽歌】を取り出すと急いでテントの外へと駆けていった。

パローネ装備　テント外

「いやあ。ごめんごめん待たせちゃったねネリスちゃん。装備選ぶの手間取っちゃってさ。」

「いえ、良いんです。さあカシラがお待ちです。私に着いて来てください。」

そう言うとネリスはジュノの手を引きとある場所へと歩き出した。ネリスがジュノを連れて来た場所は迎賓館の野外に設置してある即席の作戦室であった。

「カシラ、ジュノさんを連れてきました。」

「おおネリスかい。ありがとう、あとはあたいが引き受けるからネリスは準備に取り掛かってくれていいよ。」

「わかりました。ではジュノさんまた後で会いましょう。」

「あぁ、またね。」

そう言うとネリスは手を振りながらその場を後にした。

「（ん・・・またあとで？）」

「なにぼ～としてるんだい。さっさと入りなよ。」

「なんだよ、特別な話があるって。」

「まず、昨今の大厳竜の件ありがとう。うちの民達とオリオール救ってくれてパローネの民の代表として感謝するよ。」

「あぁあんなのサービスだ気にすんな。それに昔からの仲だろ堅い事言うなよ。それより特別な話って何だ？」

「フフ、そうだね。特別な話っていうのはさ、実は今ハンターさん達に集まってもらって兵力が高まってきているのは良いんだ。でもこのまま増えるとパローネで全てのハンターさん達を受け入れる事が出来なくなっちまうんだ。」

「ハッハー、そいつはやべえな。」

「ムオッホン、そこでじゃワシらの拠点をまず破棄されたドンドルマに移そうと思っての。あそこなら多くのハンター達を受け入れる事が可能だろうて、そこでじゃお主には先にドンドルマに赴きヨハネスの息のかかった者どもがドンドルマにいないかどうか偵察しに言って欲しいのじゃ。」

「なるほどねぇ。でじいさん達はどうするんだ？」

「あたい達もあんたを追ってドンドルマに向かって進む事にしてあるあんたには出来るだけ先に行って露払いをしてきてほしいって考えさ。」

「ハッハー、高く買われたもんだ俺も。先にドンドルマに行って露払いかこれで何もなかったら笑えるな。でもいいよ、その話引き受けよう。世界の命運が掛かってるしな。」

「あんたならそう言ってくれると思ってたよ。もう高速気球船の手配はしてあるんだ。あんたが乗り込んでくれればすぐに出発できる。あたい達もあんたが出発したらパーティ編成してすぐに追いかけるからさ・・・前回に引き続き今回も損な役回りさせてすまないと思ってる。」

キエルがそう言い下向くとジュノはキエルの肩をそっと叩いた

「そんな顔するなよパローネのカシラたるものシャキッとしてろ。大丈夫、お前達が来るまでほとんどの露を払っておいてやるさ。じゃあ先に行くからな後で会おうぜ。キエルに大長老」

そう言うとジュノは作戦室を後にし高速気球船の待つドックへと移動した。

22節　狼煙を上げよ（後書き）

後書き　明日関東に大きい地震が来るみたいですね。怖いな―・・・
でも来たら来たらで仕方がないか～。

23節　風に乗って（前書き）

ＭＨＦ２０１１アニバーサリーパッケについてくる漫画がついに届きました。いやぁ面白いですね。毎度思うんですけど絵心があれば挿絵付けれるのにｏｒｚ

23節　風に乗って

高速気球船が止めてある停泊所に行くとそこには通常の気球船とは異なる構造の小さな気球船が停泊されていた。船上の上には気球が取り付けてあり気球船後部にはネコがプロペラを漕ぐためのペダルが合計四つと、後部には巨大なプロペラとけむりが溢れる煙突が取り付けられていた。

「（これが高速気球船？なんかけむり後ろから漏れてるし、大丈夫なのこれ？）」

「あっ来たね、ジュノさん！すぐに出発できるように待ってたんだよ。さあ早く乗ってください。」

「あっネリスちゃん。まさかこれネリスちゃんが操縦するの？オリオールじゃなくて？」

「当初この高速気球船はオリオールさんが乗る予定で設計してたんですけど。オリオールさんの体重と体の大きさがさらに大きくなっちゃったんで乗れなくなったんです。それからは私が遊びで操縦してたんですけどついにこの子が日の目を見る事が出来て私嬉しいです。」

「あ、ああそうなの、そりゃあ良かったね。てことはこの気球船の操縦に関してはネリスちゃんの右に出る者はいないってことか。」

「そうです！安心して乗り込んでください！」

「（高速って言うんだから間違いなく早いんだろうな・・・）」

そう思いつつもジュノは高速気球船へと乗り込んだ。中の構造はとてもせまく普通の気球船とは違いハンター控室などは無く操縦席の

横にもう一つイスが取り付けられている構造だった。どうやら後部にプロペラを漕ぐためのネコが乗り込んだらしく何やら掛け声の様なものが聞こえた。

「なんか後ろのネコちゃん達めっちゃくちゃやる気だな。」
「そりゃそうですよだって、一世一代の大作戦の先行者役として役に立つんですもの私もやる気出てきましたよ！　後ろの皆一緒にガンバロー！！」
「ニャニャ―！！！」
「ほらジュノさんも一緒にガンバロー！！！！」
「が・・がんばろー。」
「もっと大きな声で！ガンバロー！！！」
「ガンバロー！！！！！」
「よーし、では発進！！」

ネリスの掛け声とともに煙突から大量の煙が出始めそしてプロペラが大きく回り始めるアイルー達も掛け声をかけながらペダルを漕ぎ始めるとプロペラが高速で回り始める。すると一気に高速気球船は前へと進み始め高度を高めパローネキャラバンから離れていった。

「おお～！！速い！ところでネリスちゃんこの気球船今までに無い形をしてるけど、パローネキャラバンが開発した新型の気球船なの？」

「そうなんです！実はこの気球船は従来の気球船とは違い古代文明の遺跡で発見されたものなんですよ。発見された当初は長細くて魚みたいな尾びれが後ろについたヘンテコな形だったらしいですけど後々解析していくにあたって現代の気球船みたいな物とわかったんです。それで解析で分かった事を現代の技術に転用して何度も改良してできた物がこれ何ですよ。今のところ獄炎石や爆炎袋を大量に

使って高温・高圧のガスを後方に勢いよく出して推進力を経て進むんです。こう行った船がどんどん増えていけばいいんですけど何にせよまだ原理がまだ上手くわかってないし燃料の獄炎石や爆炎袋等のコストも結構かかりますし復旧するまで、まだまだ時間が掛かりそうですね。」

「ふ―ん、そうなんだ。にしてもこの船早いね～もうメゼポルタが見えなくなったよ。それにドンドルマも見えて来たし。」

「降下予定地に着いたら降下準備お願いしますねジュノさん。」
「はいはい。」
「降下予定地上空に着いたら合図しますからその合図で飛んでください。」
「その予定地まであとどのくらいよ?」
「およそ１０分ですね。」
「１０分か・・・昔はメゼポルタからドンドルマまで竜車で二日位は揺られたもんだけどな。」
「技術は常に進歩するんですよ。ジュノさん!」
「そうだな・・・・」

ジュノはしばらくアイリスからもらった首飾りの石を日の光にかざした。石は様々な色に変化し輝いている。

「綺麗な石ですね、虹色鉱石か何かの種類の石ですか?」

ネリスは横目でジュノの持っている石について尋ねてくる。その目は興味に満ち溢れていた。

「言っとくけどやらないからな、これは大事なものなんだ。それにほれちゃんと操縦しないと危ないぞ。」

「そんなこと考えてませんよ～。緊張を解そうと言っただけですよ。」

「ハハ、緊張？俺はいつも通りさ。」

「そうですか～なら良いですけど。あっそろそろ着きますね。これから降下可能の高さまで降りますので。準備お願いします。」

「はいはい。」

そう言うとジュノは入り口の方まで進んで行き装備の確認をしたポーチ内には様々な道具がぎっしり詰まっており膨れ上がっておりポーチの中から砥石を取り出し武器を研ぎ始める。

「降下可能高度まで降りました。ジュノさん降下の方お願いします！」

ネリスは大声でジュノにそう伝えるとジュノは気球船入り口を開けた。すると轟音と共に船内に風が入り込み船内は風に包まれた。

「ジュノさん！ではご武運を！」

ネリスが大声でジュノに伝えるとジュノは手で合図をし船内からドンドルマに向けて飛び降りた。大気中に漂う空気を切る音が耳に伝わる中ジュノはドンドルマに軟着陸する事に成功した。着陸に成功した後ジュノは大声でその場で叫んだ。

「おぉ、懐かしき我がドンドルマ！」

「・・・・・」

ジュノの叫んだ声は虚しくドンドルマ内の広場に響き渡った。ドンドルマ内は静寂を保っている。

「敵がうじゃうじゃ出てくると思ったんだがな…まあ色々探検してみるか。なんか出てくるかもしれないし。」

ジュノはドンドルマ内の探索を始めた最初は商業区や住民区を探索したところ案の定イーオスが数対いたのでそのイーオスを掃討し次は武器工房内と大老殿にむけて歩き出した。

武器工房内に入るとジュノは子供の頃の様々な事を思い出した初めて大親方にハンターナイフを作ってもらった事、武器工房内の受付嬢に恥ずかしながら防具を選んでもらった事、初めてモンスターの素材を持ち帰って大長老や大親方その周りの人に褒めてもらった事。

「なつかしいな…」

ジュノが懐かしみながら武器工房内を回っていると物陰からジュノに襲いかかってくる者が現れたしかし、しかしジュノはその物を持っていた双剣で切り返しその物をはじき返した。

「ヒャハハハ！ヨハネス様が言ってた通りお前はドンドルマを取り返しに来たやつってとこか？」

「おい、今ヨハネスって言ったな？お前は誰だギルドナイト内で見たこと無い顔をって辺りヨハネスの私兵か？」

「そんなのお前に言ってどうすんだよば～か。お前はさしずめ取り返しに来た先遣隊ってところか。見たところ一人か・・・かわいそうにな～あのジジイにこき使われて。」

「ヨハネスのバカにこき使われるよか、十分ましさ。」

「おい、今ヨハネス様の事なんつった？てめぇ・・・・」

「もっかい言っても状況が悪くなるだけだろ、バーカそんな事もわからないの？わんちゃん？」

険悪な状態の中武器工房の中に一人のギルドナイトが入って来た。

「ゴート様～キャラバンの兵がこちらに向かって来ている事が確認が取れましたので言われた通り改造変種モンスターを放ちました。我々も巨龍誘導通路に向かいキャラバンの兵を迎え撃ちましょう。」

「ちっ・・・そうだな、あのクソジジイもキャラバンの兵と一緒にこっちに向かって来てるみたいだしな。おいお前ドンドルマはもう用済みだからお前にくれてやるよ。キャラバンの兵は全滅させるけどなヒャハハハ。」

そう言うとゴートと呼ばれた男は閃光玉を目くらまし変わりに投げギルドナイトと共に武器工房から姿を消した。

「キャラバンの兵・・・・皆が危ない！」

そう言うとジュノも巨龍誘導通路に向けて走り出したすると頭上に大きな影が横切った。

「あれは・・・黒龍・・・・何故伝承上のモンスターが・・・」

すかさずポーチ内の双眼鏡を手に取り最大望遠で黒龍を捕えるとそこには二人の人物が黒龍の上に立っているのがわかった一人の顔は知らなかったがもう一人の顔はジュノの見知った顔だった。

「ヨハネス・・・・！」

黒龍はヨハネス達を乗せて巨龍誘導通路へと飛び立っていった。ジュノもすかさず黒龍の後を追い全力で疾走するしかし、道の端々にはイーオスやガブラスが行く手を阻む。

「邪魔だあああ！！！！！！！」

ジュノはモンスター達を切り伏せながら巨龍誘導通路へと向かった。
しかしもうすぐ巨龍誘導通路の通路に差し掛かるとした時に広場に一体のモンスターが空から舞い降りた。
橙色の羽根を身に纏い辺りに白い睡眠作用を含むブレスを吐き出す眠鳥ヒプノック。

「この忙しい時に糞鳥のご登場かよ。良いぜこいよ、ひよこ野郎永遠に眠らせてやるからよ。」

眠鳥もジュノの存在に気付いたのかジュノに向きかえり尾羽根広げ威嚇をしてきた。

「俺に威嚇たあ。気合い入ってるじゃねえか！良いぜ遊んでやるよ。

ジュノは双剣を抜くとヒプノックに向けて駆けだした。いまここにハンターとモンスターの一対一の命の駆け引きが始まった。

23節　風に乗って（後書き）

ニッポンが土地の広い国だったら一家に一台車じゃなくて小型飛行機！ってなったんでしょうか。あっセスナ機って３００万位で買えるらしいですよ。凄い値段の高い車を買うと思えば安い！…のかな？

２４節　禍々しき影（前書き）

最近割と涼しくなってきましたね。過ごしやすくて調子が良いです。

24節　禍々しき影

ジュノを見つけるや否や腰付近の橙色の尾羽を逆立ち戦闘態勢に入る眠鳥ヒプノック、ヒプノックはジュノ目掛けて睡眠作用のあるブレスを辺りに撒き散らしながら突進してくる。

「フッ！！！」

ジュノはヒプノックの突進を上空へ回転しながら回避し背中に双剣で一太刀を浴びせる。しかしヒプノックはそれに怯むことなく近くにあった壁へと激突する。

「（野生のヒプノックはこんな街中にはふつうは現れないとなるとヨハネスの手が施されてる改造モンスターか・・・）」

「頭から激突しても怯まないなんて、鉄でも食ってんのか？」

ジュノは激突したヒプノックに向かい追撃をしかける、しかしヒプノックは真上へと睡眠ブレスを吐き出し、周囲に白い粉が舞う。

「（うっ…かわしきれない）」

真上へと放たれた睡眠ブレスを喰らい、強烈な眠気に襲われる。

「（まずい・・・瞼が重い。）」

通常のヒプノックなら目の前に敵が現れた場合睡眠ブレスを吐きかけ、相手が眠った後にその場から立ち去るがこのヒプノックは通常種とは違い、ヨハネスの改造が施された改造変種モンスター。その場から立ち去るという行為はせずにジュノに向かってその鋭利な嘴

を使った攻撃を仕掛けてくる。

「（しかたない、ここは適当に攻撃を喰らって目を覚ますか。）」

ジュノは朦朧とする意識の中鋭利な嘴を何とかよけヒプノックの突進だけを体に喰らいジュノは建物の中へと突き飛ばされた。

「グッ・・・ッ～・・・・」

建物は栄えていたころ商店として機能していたらしく様々な商品がクッションとなったのかジュノの怪我は左肩の脱臼と切り傷で難を得た。すぐに自らの気配を消し左肩の骨を関節に入れポーチ内に入れておいた包帯で脱臼した個所をテーピングする。じっと身を潜ませる

「（隙を造って一気に畳みかけるか？しかしヒプノックの弱点属性は火属性あいにく手持ちの武器は怒髪双乱【挽歌】水属性の双剣だ、切れ味が良いからと言って持って来ては見たが一気に畳みかけるのは無理か。）」

「（能力を使って双剣に炎を纏わせてみるか？いや駄目だ上手くいったとしてもその後もし反動が来て意識を失ったら皆の元にいけなくなる。）」

「（ここは腹くくって体力の続く限り攻め立てて一気に終わらすか）」

そう決めるとジュノはポーチ内から閃光玉を取り出し閃光玉を手に握り建物から飛び出した。

「おい！ひよこ野郎こっちだ！！」

手を二三度叩き自身の咆哮に注意を向けるとジュノは閃光玉を投げヒプノックの視界を奪ったヒプノックは視界を奪われ尻尾を振り回し所構わず鋭利な嘴でその場を啄んでいる。ジュノはヒプノックの攻撃に当たらないように細心の注意を払いながらヒプノックの脚の腱部分に必要に攻撃を当てていく。ヒプノックの腱を切断し相手を動けなくしたのちに麻酔玉で捕獲し巨龍誘導路に急ぐという魂胆だ。

「切れろっ―！！！！！！！！！！」

ジュノは身に見えぬ速度でヒプノック脚に執拗に攻撃を仕掛けていく。次第に脚に覆われていた鱗は剥がれ次第とヒプノックの素肌が露わになる。

「これで終わり！！！！」

最後の一撃を入れようとした瞬間ヒプノックの視界不良は回復しジュノに目掛けて睡眠ブレスを仕掛けてきた。間一髪で睡眠ブレスを回避する事に成功するが睡眠ブレスの白い粉塵が風に流されジュノの気管へと入る。

「（っつ…また睡魔が。）」

睡魔に襲われながらも何とか態勢を整える。ヒプノックの尾羽根はさっきの攻撃でか背中へと張りつき捕獲ラインには達しているがジュノは睡魔によって頭が上手く回らなかった。

「（駄目だ、寝る・・・）」

その場へ倒れ込むジュノそれを見のがさずヒプノックはジュノに向けて羽ばたきながら嘴をジュノに向け中空から突進してくる。
ジュノの体に嘴が突き刺さる瞬間だった、ヒプノックの動きは止まりその場で身悶え始めたのだ。そうジュノは意識を失う前に咄嗟にしびれ罠を地面に仕掛けたのである。ジュノはヒプノックの突進によって引き起こされた風圧によって目を覚ます。

「引っかかったな糞鳥！これでもう終わりだ！おやすみ～」

そう言うとジュノはヒプノックに向けて捕獲用麻酔玉を数発投げつけるとヒプノックはその場に倒れ込み寝息を立て始めた。

「本当は息の根を止めてやりたいところだが今回は時間がないから勘弁してやるよ。ヒヨコ野郎そこで一生寝てろ、じゃあな」

ジュノはヒプノックに背を向けると巨龍誘導路へ続く戦闘街へ繋がる通路へと走り出す。

「グッ・・・やはり肩が痛い回復薬を塗り込んで少し休んでからの方がよさそうだ。」

ジュノはその場に座り込み包帯を解き回復薬を肩に塗り込み少し様子を見る事にした。

「ちょっと待ってろよヨハネス・・・・」

巨龍誘導路　戦闘街

巨龍誘導通路を抜けた先にある戦闘街ではすでにキャラバンのハンター達のパーティが戦闘街に放たれた複数の改造変種飛竜種のモン

スターとの戦闘を繰り広げていた。

「くっ・・やはり複数同時に相手となると目が回るわね。」

そう大剣を持った女ハンターが近くに居る飛竜種を切り伏せる。

「まったくですね、姉御。」

そう言うとランスを担いだ男ハンターは飛竜種に突進を喰らわす、あまりの連携攻撃で飛竜種の怯むそのすきに二人の後ろから片手剣を持った女ハンターが飛び出す。

「はっ！」

女ハンターが飛竜種に切り上げ攻撃を行うと飛竜種は力つきその場へと倒れる。

「すさまじいな、流石はレジェンドラスタのフローラさんだ。もう残りの改造飛竜種は二頭だ。」

太刀を背負ったハンターがフローラに話しかける。

「そんなことありませんよ。それより粉塵行きます。」

そう言うとフローラは辺りに生命の粉塵を振りかけ共に闘うハンターの体力を回復させる。

「さあ、ドンドルマへと急ぎましょう！」

「そうだな残りは向こうのパーティと大長老に任せても大丈夫そうだ。」

太刀を背負ったハンターがそう言うとフローラがその場にいた3人に問いかける。

「皆さん、大丈夫ですか？」

「何とかね、フローラちゃんのおかげで目立った負傷はないよ。」

「俺も目立った負傷箇所はないっす」

「俺達のパーティは4人大丈夫だったが向こうのパーティでは何人か負傷者が出たらしい、すぐに救出されて大事にはならなかったようだが…」

「ただでさえ改造変種モンスター相手にするのが初めてな方々が多いのにそれも5対同時に放たれたら、無理もないですよ。」

フローラはうなだれながらそうつぶやく。すると向こうの改造変種モンスターとの戦闘を終えた大長老が大声を上げ点呼を取り始めた。

「残っている者は皆無事か！薬やアイテムの補給が必要な者は名乗りでるのじゃ、アイテム補充の必要のない者はこのままドンドルマ居住区へと移動する。」

「大長老さん上です！」

そうフローラが言うと大長老の頭上から奇襲をかけてくる者が現れた。寸でのところで大長老は奇襲から免れる。大長老が居た場所からは奇襲のすさまじさを物語るように土ぼこりが舞っているその土埃の中から人を小馬鹿にするような笑い声と共に男の声が聞こえてき極長の大剣を手にした男が姿を現した。

「ヒャハハハ！！優秀な部下をお持ちだねぇ～大長老？危うくおっちぬとこだったなぁ～ヒャッハハハ！！！」

「・・・お主何者じゃ？ヨハネスの手下か？」

「手下じゃなきゃ、じいさん相手にこんな事するわけないだろう？ヒャハハハ！！いつも寝てばっかでついにボケたか？ギャハハハハ！！！！！！遊ぼうぜ、おじいちゃん。」

そう言うと極長の大剣を手にした男は大長老に向けて刃を向けた。

「そうだ忘れてた、俺の名はゴート。よろしくねおじいちゃん。ギャハハハハ！！！！！！！！！」

「むぅ・・・・どうやらワシを御指名らしいのう、皆の者この者はワシが引き受ける先に行くのじゃ」

「でも大長老！」

「フローラ！行くよ！！！」

大剣を背負った女ハンターはフローラの腕を掴み走り出す。しかし上空に思わぬ来訪者が現れる。

「あ・・・あれは、黒龍！？」

「何でこんなとこに黒龍が現れるんだよ！？」

「知らないわよ！？私に聞かないで！？」

「３人とも見て黒龍の上に誰かが乗ってるわ。」

「（あの黒龍異様な雰囲気を纏ってるまさかあれも改造されているの？）」

黒龍は４人の目の前に降り立つと黒龍から二人の男女が地上へ降り立った。

「ゴート勝手な行動は慎め。」

「っち・・・うるせえな・・・セレイン。今からこのじじいの解

体ショーするんだからよアヒャヒャヒャ！！！」
「ゴート君今はその剣を納めてこちらへ来なさい。これから私が彼らに自己紹介をするのだから。」
「けっ・・・・了解です。」

そう言うとゴートは極長の大剣を納めヨハネスの元へと向かった。

「命拾いしたなじいさん、ヒャハハハ！！」
「さて、大長老以外は初めまして、かな？ゴートが少々手荒な真似をしたようで申し訳ない。」
「ふむ、そうじゃな。かつてこのシュレイドを統治していた王よ。」
「ハハッ確かにそんなこともしていたことがありましたねぇ。大長老よくご存じで。」

この事実を前にして辺りがざわめく、その中ヨハネスは口を開く。

「そうだな、これもいずれは知る事になる定め、いずれこのことは話しておこうと思っていたのだ。教えてやろう、何故私が改造変種を作っているかを」

「今も昔もこの世界まさには狩るか狩られるかの世界だ、だがそれは人間とモンスターだけの関係ではない。フフフ、人というものは恐ろしいものでね。黒龍との戦で王城を放棄を決意した私は母上を東シュレイド側の兵に殺されたよ。　没落貴族と化した私は命からがら逃げた、だが、そんなとき私を救った者がいた、西シュレイド側の人間だ」

「当の西側の首領は人助けをしたと思っていたのだろう、だが、私は知っていた若くして死を迎えた父上がシュレイド国が東西に分かれて内紛状態にあることを悩んでおられたのを。　そして、シュレ

イド王城が黒龍によって襲撃された理由がその西シュレイド側がモンスターを操作して兵器として操っていたからだと言うことも」

「私も伊達に若くして王の座に付いたわけではない。学問に関しては自信があった私はまだ確立していなかったその技術を手中に入れるべく日夜研究に没頭し世界のあらゆる古代文明の技術を解析したよ」

「そしてある日私はついにその技術を完成させたここにはいない一人の女性と一人のハンターの手を借りてね。試しに報復として西シュレイドの一つの城に彼らがしたことをした。慌ててハンターを招集しようとしたのだろう、だがもう遅い。ミナガルデに残っていたのは老ハンターばかり、若い力強いハンターはその拠点をメゼポルタへと移しつつあったからな」

「私は西シュレイドを見限った、東シュレイドも今や形骸となりつつある。そして今この世界でもっとも力を持つ集団　ハンターズギルドに目を付けたのさ」

「結論を言おう。私はこの改造変種とそれを操る技術によって、この世界を統一する戦争は起きない、そしてモンスターに襲われることもない。なぜならこの原種とは比較にならない力と甲殻を持つ改造変種がいるからだ。」

「今ならまだ間に合う、君達はまだ若い、これからの私の時代を生きなくてはならないのだよ。そのために私と共に来て欲しいのだ、私のこの理想の世界へと！！！」

辺りが静まり返る中フローラは声を出しヨハネスに訴えかけた。

「貴方のやろうとしている事は間違ってます！貴方が作り出した改

造変種が蔓延した後のこの世界はどうなるんですか！？彼らは凶暴で原種を絶滅に追いやることなんて簡単なことでしょう！」

「それに私達はそんな世界でなんか生きたくは無い！私達とモンスターは争う事はあるけれど、この世界で生きている同じ仲間なんです！彼らにも生活があるんです！共生だって可能なんです！それを壊そうなんて絶対間違ってる！」

「君は確かフローラと言ったか・・・つまり君は私の技術力に不安があると言いたいのかね？」

「そうじゃありません！貴方が行おうとしている力を行使してこの世界を生きる者を押さえつけようとするその姿勢間違っているのです！」

「フフフ、君はハンターとしての腕も頭も優秀なようだねフローラ君」

ヨハネスとフローラの討論をしている間キャラバンで編隊された兵がすぐ近くまで迫っていた。

「ヨハネス様、キャラバンの兵がすぐそこまできております。ここは一旦引きましょう。」

「え―つまんねえよ、セレイン。ヨハネス様キャラバンの兵なんざ俺の大剣で真っ二つにしてやりますよ。ヒャハハハハ！！！！」

「フフフ、では一旦引く事にしようかセレイン、ゴート。ハンターの諸君また会おうか。次に会うときはどちらかが勝者になっている事だろう。ハハハ！！！！！」

ヨハネスが黒龍に飛び乗り辺りが黒龍の羽ばたきで風に包まれたその時だった戦闘街の入り口から一人の男が現れた。

「ヨハネース！！！！！！！！！！！！！」

「フフフっフハハハ！！！！これはこれは、ジュノ君。君には礼を言わねばならないね。君の集めてくれた紅玉を解析したおかげで私はこの技術を手にすることが出来た！！感謝しているよ！！！！」

「うっせえ！！！降りてこいバカ！！！！！今すぐそのお花畑の頭叩いて、普通に戻してやるからよ！！！！」

「フッ！せいぜい地上で吠えているが良い！！ではさらばだハンター諸君。」

そう言うと三人を乗せた黒龍はシュレイド城へと飛び去っていった。

２４節　禍々しき影（後書き）

実際のヨハネスの元となっている人はこんなに悪い事たくらむ人じゃないですよ。むしろＭＨＦ内のアイドル的存在です。

25節　シュレイドの地（前書き）

私は子供の頃よくチップスターの空き缶を右手に詰めて「ロックバスター！」って遊んでました。最終的に取れなくなって半べそかくんですけどね。

25節　シュレイドの地

ドンドルマの奪還に成功したキャラバンの兵とハンター達は次なる作戦へと移行するために頭を悩ませていた。今ヨハネスは多数の変種モンスターに囲まれながらシュレイド城へ籠城している状態なのだ。ドンドルマ奪還直後ジュノのヨハネスの改造変種研究に加担していた事実が上げられジュノがヨハネスの送り込んだスパイではないかと言う疑問の声が上がったが今まで一人でヨハネスの改造変種モンスターを駆逐してきた功績と先の作戦のドンドルマへの先行行動、そして大長老の鶴の一声でハンター達の疑問は解消され現在ジュノは通常通り皆と接している。そして今この状態をいかに攻略するかの議論が大老殿で行われていた。

「ヨハネスのバカの計画を少し手伝ってた身だ。俺は罪の清算の為にヨハネスの所に行くからな！キエル！じいさん！」

「私もヨハネスさんを止めるべくジュノさんと共にヨハネスの所に向かいたいです。キエルさん、大長老。」

「落ち着いて二人ともまだドンドルマを奪還して数日しか経ってないのよ。それに編隊の編成もまだ終えてないのにそう急ぐのは危険よ。」

「ナターシャの言うとおりさ落ち着きなよ二人とも。」

キエルとナターシャに宥められ二人は席へと着く。

「うむ、二人の言うとおりじゃな。ジュノ、フローラ。まずそち達二人はヨハネスを捕える隊への加入を認める残りはあと二人じゃが

…ナターシャ頼まれてくれるかの。」

「仰せのままに大長老。しかし後一人はいかがしましょう。他のレジェンドラスタ達は先のギルドナイト襲撃時の傷がまだ完全に癒えてないようで作戦に支障が出るかと。」

「うむ、そこなんじゃが。どうにかならぬものか・・・」

大老殿で集まっている5人で悩んでいると一人の男が大老殿を訪ねて来た。

「俺もそのメンバーに入れてください大長老。」

「むっそなたはブロードではないか。おぬしフラウの看病をしていたはずでは?」

「そうだぞブロードあんなひどい目にあったんだまだフラウちゃんのそばに居てやれよ。」

「大長老、それに先輩心配してくれてありがとうございます。フラウの方はもう大丈夫だって言ってました。それにフラウが言ってたんです。ジュノさん達の力になってあげてって…俺まだ色々と経験は浅いですけど、今回の戦いに参加したいんです。それにヨハネス司令の紅玉あつめを手伝ってしまった前科も俺にもあるし。だから俺もパーティに入れてください。お願いします!」

そう言うとブロードは頭を皆に向けて深々とさげた。しばらくの間沈黙が続くと大長老が口を開いた。

「ブロードよ表を上げよ、そなたの熱意と決心はワシにはよく伝わったワシはそなたを今回のメンバーに加えたいと今思っている。他の者はどうじゃ?」

大長老は他の三人に問いかけるすると最初に口を開いたのはナターシャだった。

「私は賛成よ、私もブロードと同じくヨハネスの紅玉集めに少し加担した身だしね。」

「ブロードさん、ブロードさんの話はフラウちゃんから良く聞いてましたブロードさんってホント仲間思いで優しい方なんですね。そんな方とパーティ組めるなんて私嬉しいです。」

「ナターシャさん・・・・フローラさん・・・・」

「ジュノ？貴方の意見はどうなの？」

ナターシャはジュノに話を振るジュノは難しい顔をしてブロードを見つめている。

「先輩・・・・」

「そんな顔で見るなよ気持ち悪いなぁ！俺も別にお前がパーティに加わる事は反対じゃねえよ。ただ心配なんだよお前を守りきれるかどうかがさ、お前に何かあったらフラウちゃんが泣くだろ？」

「ん？その点は大丈夫なんじゃないかい？なんてたって二人のレジェンドラスタにあんたが着いてるだ、それにこのハンターさんあたい達キャラバンの民達にも良くしてくれて評判いいんだよ。だから連れててやりなよジュノ。」

ジュノはまたしばらく考え込む、ブロードを巻き込んでいいものかについて彼は頭を悩ませていた。

「うーん・・・・じゃあ頼むぜブロードお前の大剣術でモンスター達をなぎ倒してくれよ。」

「・・・・はい！先輩ありがとうございます！」

「フォフォ。ではヨハネスを捕えるパーティの編成は決まりじゃな。後は準備ができ次第シュレイド城へと乗り込むとしよう。ではこれにて一時解散とする。突入前になったら召集をかけるでの、皆の者準備を怠るでないぞ。」

そう大長老は言うと作戦会議は終わりを告げた４人は大老殿から退出し大老殿にはキエルと大長老が残った。

「ぬぅ、上手く事が運べば良いがのう。」

「大長老何かご不満でも？」

「うむ、ヨハネスがこうもあっさりとドンドルマを手放しシュレイド城に籠城した事に関してのう、少し上手くいきすぎてる気がしてのう。」

「奴として、ドンドンルマは自身の思った通りの戦略拠点にはならなかったのでは？」

「ふむ、まあ真実は奴自身しか知らんじゃろうて、歳をとりすぎると悩みすぎてしまうのが駄目じゃな、悩む事はこれで止めるとするかの。今は戦士達のつかの間の休息を満喫すべきじゃな。」

「そうですね、悩んでいても始まらないですしね。」

ドンドルマ　大老殿階段前

かつて多くハンター達がここを拠点としハンター都市として栄えていた街ドンドルマ今は一時的ではあるがこの街には多くのハンター達が佇んでいる。多くのハンターは今このドンドルマを懐かしみながらメゼポルタで生活を営んでいたがこういった形でまたドンドルマに拠点を移すことになるとは思ってもみなかった事だろう。ジュノもかつてはここドンドルマでの思い入れは深く幼少時代ここドン

ドルマで生活を営みそして少年時代にハンターとして生きていく事を決心した所でもある。

「よくこの階段前で門番の人と話をしたっけなぁ～。」

最近彼の中ではある変化が起き始めているノルン島でのアイリスとの出会いをへて彼の幼き頃の記憶が甦りつつあるのだ、それは楽しかった事ばかりではないのは明白だが。

「モンスターが襲撃してきた時はナターシャのおやじさんのとこに居て良く泣いてたな。それでナターシャに怒られてまた泣いたっけな・・・・」

「はは、とんだ泣き虫だったな～さて。」

ジュノはそう言うと階段から腰を上げ目的も無く歩き出した。すると後ろからジュノを呼びとめる声がしたので振り向くとそこにはユーノが居た。

「ジュノさん！ご無事だったんですね。よかった～」

全身リオハートメイルに薄紫色の髪を揺らしながらユーノはジュノに駆けよって来た、ユーノは遠くから駆けよって来たのか少し息を切らしている。

「あぁ、特に目立った外傷は無くピンピンしてるさ。ユーノちゃんの方は大丈夫だった？」

「はい、私の方は大丈夫でした、なんでも弓のレジェンドラスタのナターシャさんと一緒のパーティだったんですよ！すごかったな～あの弓術。」

ユーノは興奮し気味にその時ナターシャがやった弓術のモノマネをその場でやって見せた。

「ハハッそうか～あいつは弓術に関してはすごいからな～でもユーノちゃんって本当に変わったよね出会ったころと比べて。」

そうジュノが言うとユーノは弓術のまねをするのを止めジュノの言葉に耳を傾けた。

「最初に出会った頃はさ、なんかこう暗い感じで口数も少なかったし何か幼い感じだったけどさ、今はなんか明るくて口数も多くなったし少し大人びたよね～恋でもしましたか？なんてね。」

ジュノはそう言うと自身の言った言葉に対して笑い始めたユーノはそれを見て顔をほほ笑ませながら、周囲を歩きだした。

「恋・・・ですか。確かにあこがれの人ならできましたね。」

「ホントか！どうだいその人のことお兄さんに話してみないかな～ん？」

「フフ、そうですね。その人はとってもネコが好きで普段はへらへらしてるけどいざとなるととっても強くてかつ歪みかけてた私を優しく諭してくれました。」

「ほ～ネコが好きって点では気が合いそうだなその人と。それでその人にもう自分の思いは伝えたの？」

「いや、まだですよ。」

「だめだな～恋って奴はね蝶の如く相手を翻弄し蜂の用に決めるとこビシ！と決めなきゃ。」

「フフ、なんですかその例えホントジュノさんは面白い人ですね～でも私決めてるんです。その人に思いを告げる時はその人の背中や

皆の背中を守れるくらいハンターとして成長したら。この思いを告げようとおもうんです。でもその人ってとっても凄い人だからあとどれくらい先になるやらわからないですけどね。」

ユーノは笑いを交えながらそうジュノに告げた。ジュノはと言うとそのユーノの笑い姿を見てにこやかな顔をしていた。

「あっそうだ。ジュノさんってこのドンドルマに詳しかったりします？」

「えっ、まあ詳しい方だと思うよ。子供の頃はここで過ごしたしハンターになったのもここだしね。」

「そうなんですか！じゃあいろんな所案内してくれますか？」

「案内って、今のドンドルマを案内してもあんまりつまらないと思うよ。」

「見ておきたいんです。そのあこがれの人もドンドルマで育ったって言ってから。」

「ふぅーむ、まだ部隊の編成まで時間があるしまあよしとするか。ならお粗末ながら私が案内してしんぜよう、ついて来るのだ！」

そう言うとジュノはユーノを引き連れてドンドルマの様々な場所を案内しに行った。

シュレイド城　王座の間

王座の間にある玉座にはヨハネスが腰をかけ何やら古代文字で書かれた書物を読んでいたその顔は不敵な笑みを浮かべていた。すると玉座の間に一人の女が入って来た。

「セレインか・・・何用だ？」

「ヨハネス様、ギルドナイトに任せた黒龍の改造の件終了したとの

ことです。」
「そうか、ならもうギルドナイト達は用済みだな適当に処分しておけ。」
「かしこまりました。それともう一つご報告がございます。大長老達の兵が編隊を組み始めたようです。ここに来るのも時間の問題かと。」
「フ、心配には及ばぬよセレイン。私が作り出した改造変種モンスターに加え私の指示のもと調整を加えた黒龍も居るのだ何の心配もいらないさ。」
「そうですか、御報告は以上になります。」
「うむ、下がってよい。」
「失礼いたしました。」

セレインが去った後王座の間にはまた静寂に包まれたするとふとヨハネスが本を読みながらこうつぶやいた。

「・・・どれほどの力を振るうのだろうな、この技術は。フフフ・・・楽しみにしているよハンター諸君・・・・」

25節　シュレイドの地（後書き）

とあるイカは腕と顔を体内にしまう事ができるそうなんですよ。どっかの海からの使者として地上を侵略するために来た娘の乗り物になるんでゲソかね？

26節　黒翼に包まれし魔（前書き）

数年ぶりにアニメのポケモン見たんですけど、なんかいつの間にニャースがサトシの仲間になってました。ついにムサシとコジローとの間に一体何があったんだ…

26節　黒翼に包まれし魔

大長老のハンター達の部隊の編成も終わりハンター達はシュレイド城の城塞付近まで来ていた、事前にあった情報通り城塞付近には多数の改造変種モンスターが闊歩していた。
ヨハネスを捕える部隊として加わっているジュノ、ナターシャ、フローラ、ブロードはキエルの用意した気球船に乗り込みシュレイド城内まで侵入するために空中を飛行していた。

気球船内　ハンター控室

「しっかしついにここまで来たって感じか。今まで溜めこんでた分存分に暴れまわってやるぜ。」
「あまり先走った行動は止めてよジュノ、今回はモンスターの狩猟じゃなくてヨハネスの拘束が目的なんだから。」
「そうですよ、先輩。」
「はいはい、気をつけますよ。」
「じゃあ今回の作戦の説明、フローラお願いできる?」
「はい!任せてください先輩。」

そう言うとフローラはシュレイド城の見取り図を床に広げ指揮棒で説明を始めた。

「今回の作戦はヨハネスの拘束がマストオーダーです、しかしヨハネスの配下にはギルドナイト及び先の件でヨハネスの近くに居た二人がヨハネスの警護に当たっていると思われます。ギルドナイトの方は催眠状態にあるので極力殺生は控えてください。催眠状態を解くには何か強力な刺激が必要です。そこでこれを使います。」

フローラは懐から丸い球体を取り出した。

「キャラバンの方から特注で作ってもらった強臭玉です。本来ならラヴィエンテに使う強臭玉ですが、この強臭玉には催眠効果を解く作用が含まれた物質が含まれています。もしギルドナイトの方達が襲いかかって来たらこれを投げてください。すると催眠状態は解かれますしかし副作用で一時的に睡眠状態に入る事が確認されてますのでギルドナイトの方達を戦力に加える事は不可能となります。」

「侵入の経路ですがまずシュレイド城はみたとおり二つの大広場から形成され奥に進む事で内部に侵入が可能です。本来ならば城壁まで近づきそこから侵入という感じに事を進めたいですが城壁付近には迎撃兵器が多数配置されておりヨハネスの私兵がうろついている状態なのでそれは無理と判断されます。よって、わずらわしいですが大広場から侵入し城塞内まで入る作戦となります。以上ですね何か質問等はありますか？」

フローラが皆に促すとジュノが挙手をした。

「ヨハネスの私兵ってのはどれ位居るんだ？フローラちゃん？俺が前の大長老救出時に大方片づけたと思うんだけど」

「報告によると、ジュノさんが前回ヨハネスの私兵を大方片づけてくれたおかげかもしれませんが兵は現在の所２０名程確認されてます。」

「２０名程か・・・えらい少ないな、こりゃなにか巨力な隠し玉があるに違いないな。」

「確かにその可能性も否定できませんので皆さん用心してください。」

「ヨハネスの私兵にはどのような対処をしたらいいのかしら？」

次にナターシャが挙手をしフローラに問いかける。

「基本的には殺生は控えなるべく生きたままで拘束ですかね。どうしようもない場合は各自の判断に任せます。」

ナターシャが質問をし終えると控室のドアが開かれ乗員のネリスが入って来た。

「ハンターさん達、そろそろ城塞内付近に到着しますので準備の方お願いしますね。」

「はい、わざわざありがとうございます。ネリスちゃん。」

「いやいや、これが私達パローネの民が出来る精一杯の事だから気にしないでよ。フローラちゃん。じゃあ降下用の扉開いとくから皆さんご武運を!」

そう言うとネリスは扉を閉め操舵室へと向かって言った。

「なあブロード、ごぶうんをってどんな意味なんだ?」

「えっ、なんでも東方の言葉で貴方に幸運がありますようにだったような気がします。先輩。」

「ほ~っていうとネリスちゃんは東方の生まれなのか・・・先行ってるぜ~」

そう言うとジュノは双剣を肩に背負いこみ降下用の扉に向けて歩き出した。降下用の扉を開けるとシュレイド城周辺に様々な改造変種モンスターらしき影が数十体確認できることができそのモンスター達と交戦状態にあるハンター達の姿も確認できた。

「いよいよ・・・て感じか気を引き締めないとな・・・」

「この戦いは絶対に負けられないです。ヨハネス司令の思惑もなんてしても止めなくちゃ。」

そう後ろから声がすると後ろにはすでに降下準備ができた三人がジュノの後ろに並んでいた。

「早く降りなさいよ。後ろが詰まってるんだから。」

そうナターシャはジュノを急かすどうやらナターシャも早くこの事態を収めたい様子で顔は決心に満ちた顔になっている。

「わぁってるよ・・・そう急かすなよっと！」

気球船がシュレイド城大広場に入ったところを見計らってジュノは気球船から降下する次いで3人も広場に向かいって降下した。４人は大広場に軟着陸するとすぐに周囲の様子を伺った、しかし周囲には生物の気配を捕える事はなかったが大広場を通った城塞の向こう側から大きな羽音が聞こえてくる。ナターシャが羽音を聞き取り顔に不安の色を募らせる。

「なに・・・この大きな羽音・・・」

「さあ？これだけ大きな羽音だでっかいお客さんなのは間違いなさそうだ。とりあえず武器は出しとけよ皆。」

ジュノはナターシャの問いに軽く答えると3人に向けて戦闘態勢に入れと支持を促す。

「一一一！！！皆さん前方を見てください！！！」

フローラの言葉に三人は反応しフローラの指差した方向に目をやる

と漆黒の翼を羽ばたかせながらこちらに向かってくる邪悪な存在に気がつく。すると邪悪な存在に気がついたブロードが口を開く。

「あれは・・・・黒龍・・・・・！！！」

ブロードの言葉と共に黒龍の咆哮が大広場に響き渡る。黒龍の目は異常な狂気を纏っており誰かによってさらに力を得たと言っても過言ではない。すると黒龍の背から一つの影が大広場の建物に降り立った。その降り立った影は建物の上部に立ちこちらを眺めて言葉を放った。

「久しぶりだな諸君。ようこそ我が城主催のパーティに！私は諸君らを歓迎するよ。」

「・・・・ヨハネス・・・・・！！！」

「フフ・・・まずパーティ余興として諸君らにはダンスを楽しんでもらおう！！！」

そうヨハネスが言うと黒龍は地上に降り立ちシュレイド城に響き渡るほどの大咆哮を上げる。その咆哮は人を心の奥から恐怖を呼びさましジュノ以外の３人はその咆哮を聞き身をすくませた。その目には黒龍に恐怖を抱いているようにも見える。

「ダンスの相手はこちらで用意させてもらった。さあダンスを楽しんでくれたまえ！」

そう言うと黒龍は咆哮と共に特大の火球のブレスを４人に向けて放ってきた。

「ーーーーーーー！！！全員避けろ！！！」

ジュノの言葉と共に3人は正気を取り戻しブレス横へと緊急回避をする難を逃れた四人は先ほど自身が居た場所を見るとブレスにより地面がめくり上がり大きな穴が開いていた。

「なに・・・これ・・・」

ナターシャが口を開くその声色からして今起きている現状を把握しきれていないようにも捕える事ができた。

「・・・おそらくあの黒龍も司令によって何らかの手が加えてあるのでしょう。そうでなければいくら伝説と言ってもここまで大規模な穴は空きませんよ・・・・」

ブロードが冷静に事の状況を分析しナターシャに伝える。しかしブロード自身もその状況をみて恐怖の色を隠せないでいた。

「フフフ、諸君、最高の相手だろう私は観覧席から君達の舞踏を見させてもらうよ。ハーッハハハハ!!!」

そうヨハネスは言い残すと建物内部へと入っていった。黒龍は四人を見て舌なめずりをしている。

「・・・お前ら三人はヨハネスを追って、捕えろ。あいにく向こうのよこしたダンスの相手ってのは一人しかいない、俺が残ってダンスしてやるよ。」

「正気ですか!?ジュノさん危険すぎます。ここは四人で力をあわせて・・・」

「そうよフローラの言う通りだわ、ここは四人で力をあわせて・・・」

「そんな事言ったらヨハネスの奴に逃げられてしまう。忘れたのかナターシャ、フローラちゃん。俺達は黒龍を倒しに来たんじゃないヨハネスを捕えに来たんだ。今回もそれがマストオーダーだとさっき自分で言ってただろう?さあ俺に気にせず三人ともヨハネスのもとに行くんだ!!」

ジュノがそう三人に促すと黒龍は上空へと羽ばたき上空からのブレスを放とうと予備動作を行う。

「早く!!!」

黒龍は地上に向けて特大のブレスを連続して放つ。そのブレスが地面に着弾しジュノと三人を分断する。

「・・・わかりました。ジュノさんここはお願いします。皆さん行きましょう!!」

そうフローラが言うと3人は城内部に向けて駆けだす。するとナターシャが立ち止りジュノに声を投げかける。

「良い!?わかってる死んだら承知しないわよ。もし無様に死んでたりしたらまた尻を矢で射抜くわよ!ジュノ!」
「ハハハ!そりゃあ勘弁だな。早く行け。」

そうジュノはナターシャに言葉を返すとナターシャは二人の後を追った。後ろ髪をひかれる思いを心に潜ませて。
黒龍は地上へと降り立ち再びジュノに向けて咆哮を放つ。

「さぁて、じゃあ踊ろうか!!!」

その言葉と共にジュノは双剣を抜刀し邪神と化したと言っても過言でもない黒龍に向けて駆けだした。

「ハッ！！」

まずジュノはその場を飛びあがり手持ちの双剣で黒龍の胸に向けて切掛かる、刃は通りはするがやはり伝説上の存在なのかあまり深くまで双剣の刃が通る事は無かった。ジュノは地面に着地すると黒龍が腕を振りかざしてきたのでそれを避け黒龍との距離を取った。

「まったく刃が通らないって訳じゃなさそうだ。なら地道に削っていくのが今のところの手段か・・・」

しかしここで黒龍は何の予備動作もなくブレスをジュノに向けて放ってきた。ジュノは寸でのところで回避に成功する。

「ハッハー！考える時間も与えてくれないとはせっかちな子だ。」

ジュノはその場で鬼人化をし黒龍に向け賭けて行き黒龍の脚目掛けて必要に乱舞をしかけていく。

「はぁ！！」

「激しいのがお好きなら激しく行かせてもらうぜ！！！」

ジュノは黒龍に執拗に双剣での乱舞をしかけていったしかしジュノはあとで知る事になるこの黒龍はヨハネスによってさらにある特殊な能力を備えている事を。

シュレイド城　城塞内部

3人はシュレイド城城塞内部に特に何の抵抗もなく侵入する事に成功し三人はヨハネスが居ると思われる最上階へと駆けていた。途中ギルドナイトによる侵攻の妨げがあったがキャバンの民から渡された特注の強臭玉のおかげでギルドナイト達は特に傷を負うことなく睡眠状態へと入っていった。

「おかしいですね。いままでギルドナイトの方々の抵抗は見られましたがヨハネス司令の私兵には出会ってないですね。」
「そうだな、きっと最上階で待ち伏せでもしているのだろう用心せねば。」

そう言うとブロードは大剣を刃を研ぎ始め、ポーチ内のアイテムを確認し始める。アイテムにはまだ十分余裕があるようだ。

「・・・・」
「ん、どうかしましたかナターシャさん?」
「えっ…なんでもないわ。ちょっと強臭玉の臭いがきつくて服に移ったらどうしようと思ってただけだから。」
「ジュノ先輩なら心配ないですよ。あの人やる時には以上に強いですから。」
「なっ・・・あいつの事なんか心配してないわよ。ブロード矢で射抜かれたいの!?」
「いや、すいません。深読みしすぎました。」
「フン!ほら二人とも行くわよ。」

ナターシャは少し不機嫌気味に通路の奥の階段を上っていった。

「(大丈夫よね、あいつなら死んだりしないわよね…)」

三人は階段を登りきるとそこには大きな広間が広がっていた。広場内にはヨハネスの私兵らしき人間が数十人待ち構えていた。

「やっとお出ましね。さあ誰から私の華麗な弓術で射抜かれたいのかしら！？」

「報告にあった通り二十人弱は居ますね。皆さんなるべく殺生は控えて拘束を優先させてください。」

「わかっている。二人とも行くぞ！」

3人はヨハネスの私兵に向かって駆けていく。すると私兵達も剣を抜き三人に対して切りかかって来た。

「やぁぁ―！！！」

まずフローラはもっていた剣でヨハネスの私兵の剣をいなし盾で兵士の頭部を思いっきり叩きつける事に専念した頭部に攻撃を加え続ける事で兵士の気絶を狙うという魂胆だ。猛烈な盾での頭部の攻撃によってやがて兵士は倒れ気絶をした。

「よっし！まずは一人目。」

ナターシャはと言うと弓や本体で頭部を殴り付けたり睡眠効果のある薬を塗った矢を兵士に向かって矢を放っていた。

「こっちはもう6人は拘束したわよフローラ。」

「あっ先輩は弓だからずるいですよ～それに競争するなんてきいてませんっよっ！」

「フフ。こういうのは競争した方が効率が上がるのよ。ほら8人目！」

「うーあたしもなんだか負けてられないです！やー！！！」

「（二人とも凄いな・・俺なんて一人を気絶させるのに手一杯なのに会話する余裕があるなんて）」

そうブロードはおもっているとブロードの背後から襲いかかる影あった。しかしその影はブロードにもたれかかるように倒れた。

「ーーーー！」

「よそ見してるんじゃないの。ブロード！ほら次来るわよ！」

「ははは。すいませんナターシャさん。」

3人は次々とヨハネスの私兵を無力化していった。

26節　黒翼に包まれし魔（後書き）

そろそろ物語に出てきた人物まとめ2でも作らないと。

27節　哀れな命を救う者（前書き）

ＭＨＦで新しい牙獣種のモンスターが今度実装されるんですけど、猿なんですよね～オルガロンって言う狼の牙獣種が実装された時は胸がときめいたんですけど。今回の猿は・・・うーん。

27節　哀れな命を救う者

シュレイド城大広場そこには片膝着くジュノと力尽き口を広げ横たわっている黒龍の姿があった。

「いっつ・・・打撲が少々に助骨少々ヒビ入った位か・・・あまり大した事なかったな、こいつもヨハネスによって力を増幅させられて命を縮められた者だったってことか・・・」

ジュノは横たわる黒龍の目をじっと見つめていたその目はまるで水晶の如く透き通っており見る者を全て魅了するような光を放っていた。

「・・・・!!」

しばらく黒龍の眼を眺めていると黒龍の眼が急速に動き出し黒龍の体が波打ち始めた。まるで息を吹き返そうとしているがごとく。

「・・・一体何が始まるんだ・・・!!」

黒龍の体が波打ち始めて数分後黒龍の眼が怪しく光り出し黒龍の体が再生を始めた。ボロボロになった翼膜は元の綺麗な姿に胸の傷はふさがりそして体を揺らしながら黒龍は復活を遂げ咆哮を上げた。

「ハッハ・・・お前改造モンスターにしてはタフなんだな。」

咆哮を上げている黒龍を見るとジュノはある事に気付いた。黒龍が咆哮を上げながら涙を流しているのである。

「モンスターは痛みに対して涙を流すと前誰かが言ってたな…って事は再生にも相当な痛みを伴うって事か・・・・」

「痛みを伴い尚再生され、相手を駆逐するまで使役される・・・・何処まで生命を弄べば気が済むんだヨハネス・・・。」

ジュノは眼をつむり炎を思い描いた。するとジュノの体は蒼い炎に包まれ中空へと浮き出し始めた。

「終わらしてやる、このふざけた事を。」

そう言うとジュノは蒼き炎を纏い片方には蒼き炎で作られた炎剣を持ちそしてもう片方は蒼き炎で作られた炎槍を携え背中に光の紋様を抱えた状態となって浮いている状態となったその姿は正にこの前アイリスに見せられた古代の映像に映っていた神獣達を狩るアンサラ―その物であった。

「傷の再生は・・・済んだか。こういった点に関しては俺もお前と同じモンスターかもな。」

そう言うとジュノはありったけの炎槍作り出しを黒龍目掛けて投げつける。炎槍は黒龍の体を突き刺し黒龍の体の自由を奪う。体の自由を奪うと次は黒龍の首目掛けて炎剣を振るう、黒龍の再生系統の信号を送っているのは頭だと考えたからだ。しかし

「ーーーー!!」

黒龍は首をありえない方向まで曲げジュノに向けて口を広げその全てをかみ砕く牙で噛みついてくる。ジュノの体は黒龍に体半分噛みつかれ装備していた防具に無数の穴が空きそこから血潮が噴き出す。しかしその血潮は噴き出した瞬間蒼き炎へと変わり体に空いた穴も

炎に包まれ傷は塞がれる。黒龍は槍で拘束された体を無理やり外しジュノに噛みついたまま天空へと羽ばたく。そして天空へと羽ばたいた黒龍はそのまま地面へと急降下しジュノに噛みついたまま頭を地面へと叩きつける。

「んぐッ！！はっ！！！」

ジュノは頭から地面に叩きつけられたため一瞬頭の意識が吹き飛びそうになるも瞬時に頭の損傷個所を再生させ意識を再び引き戻す。

「なりふり構ってない攻撃してくる・・・な・・・こっちも有意義に事を構えてる場合じゃないなこりゃ。」

そう言うとジュノは体中にありったけの力を込めて黒龍の口から脱出を試みる黒龍の強靭な咬筋はジュノ力によって無理やりこじ開けられ体が自由となった瞬間即座に黒龍の咬筋目掛けて炎剣で一太刀を浴びせる。黒龍は痛みを対して声を上げ一太刀浴びせられた黒龍の咬筋は無残に切断され黒龍は下顎を開けた状態でその場に佇むがまたしても黒龍はジュノによって断ち切られた咬筋を再生させ再び黒龍の下顎は上顎とかみ合った。

「通常の攻撃だと効果があまりないな…ここは一気に終わらせるほどの特大の攻撃を放つしかないか・・・でもどうやって・・・」

ジュノに考える隙を与える事は黒龍は許しはしなかった。黒龍は傷の再生をし終えると即に次の攻撃に移ったジュノに向かい羽ばたき低空飛行でその大質量の身ごと突っ込んできたのである。ジュノは回避しようにももう眼と鼻の先に黒龍が迫ってきていたのでそのまま黒龍と衝突する事となる。鈍重な音がシュレイド城の大広場内に響き渡り黒龍とジュノとの力比べが始まった。体格の関係上一目見

ればジュノの方が圧倒的不利に見えるが能力を発現させたジュノの前では黒龍に対して力で押し負ける事はまずなかった。

「っぉおおおら―！！！」

ジュノは己に鼓舞するが如く掛け声と共に黒龍の首を捻じ曲げそして体を持ち上げ左右に黒龍の体を地面へと打ちつける。打ちつけるごとにシュレイド城に響く地鳴りの中黒龍の力が抜けその体を地面に投げだしたとたんジュノは黒龍の頭に飛びつき一気に力を込め黒龍の首をねじ切ろうと力を込める。

「フンヌゥウゥゥ！！！！！」

骨が折れと肉がブチリと鈍い音を立てながら黒龍の首は引きちぎられ引きちぎられた先からはおびただしい血が噴水の如く湧き出る、ジュノの体は黒龍の血によって赤黒く染まる。そしてジュノは引きちぎった黒龍のその首を黒龍の腹目掛けて投げつける。黒龍は腹部に首を投げつけられその場を揺らめきその場に倒れた。

「・・・これで終わりか・・・・？」

シュレイド城の広場には再びジュノと横たわる黒龍だけがその場にあった。最もその黒龍にはもはや首は無く悲惨な惨状が広がっている。ジュノは再び黒龍の体をじっと見つめた。すると黒龍の体はまた波打ち始め黒龍は首の無い状態でまた復活し始めた。

「首がなくても復活するなんて・・・・化け物め・・・・」

ジュノによって引きちぎられた首の部分からは肉腫が腫れあがりそしてその肉腫は歪な筒状へと姿を変える。そうただ特大の火球を放

つための気管として、シュレイド城の大広場には生物の咆哮とは思えないような恐ろしい音が響き渡る。

「（本当に全体ごと焼き払わないといけないらしいな。でもどうやって。）」

ジュノは黒龍の猛攻を回避しながら思考を繰り返す己の中にある大質量攻撃を放てるような事を考えながら、するとジュノは爆弾をイメージが浮かび上がった。

「（そうか、俺の体ごと爆発を生じ炎の柱を作り出し奴にぶつければ奴を一気に焼き払えるかもしれない・・・でもそんなに大容量の能力を使った場合俺自身に何らかの支障がでるはずだ・・・・）」

そう考えていると黒龍は今までにない特大の火球を放ってきた。ジュノはとっさに炎の壁を作り出しその火球を相殺する。

「（そんなこと心配してる場合じゃねえな。ともかくやってみるか）」

ジュノは周りに特大の炎の壁を作り出しその場で自身を大容量の炎へと変えるためイメージと両手に蒼き炎の剣を生成するこの剣は黒龍を拘束するために使う物だ。徐々にジュノの体が蒼く光り始め周りの城壁はあまりの熱量に焼け焦げ始める。

「・・・・よし。」

その言葉と共に炎の壁は消え去りジュノの体は蒼き炎に包まれ今にも爆発しそうなぐらい光り輝いている。次の瞬間ジュノは黒龍に向けて飛び出し両手の炎剣を黒龍に突き刺す、そして

「これで終わりだ！！！」

その言葉と共に蒼き炎と共に爆炎が巻き上がり辺りは爆音と共に焦土と化した。しばらくすると爆炎は引きその場には蒼い炎を練って中空に浮いているジュノと焼けただれてその場に鎮座する黒龍が居た。しばらくの静寂のあと一陣の風が舞い黒龍の体を覆う甲殻は灰となってその場に散り乱れたまるで花弁が風によって舞うように。そして黒龍は骨格のみとなった。それを確認したジュノは能力を解き地面へと降り立った。

「終わったか・・・はやく皆の所に向かわなければ。」

そう思いシュレイド城城塞へと駆けだそうとしたその時ジュノ鼻から血が垂れ出しジュノの視界は霞みその場に倒れ込んだ。

「っく、やっぱり来たか反動が・・・しかも今まで来た反動より段違いだな・・・それに血が止まらねぇ・・・」

ジュノは霞みゆく視界の中、何とか壁際まで歩いて行き壁にもたれかかりポーチ内の回復系統の薬を飲み干す。しかし

「ぐっ・・・おえ・・・」

回復系統の薬を飲み干すとその薬がそのまま胃で逆流しジュノはその場で薬を吐き出してしまった。

「へっ・・・こりゃあいよいよやばいな・・・・」

ジュノは霞んで行く視界の中上を見上げその場に佇んだ。

シュレイド城　城塞内部

城塞内部ではヨハネスの私兵をあらかた拘束した3人達が居た。三人は兵士がもう現れない事を確認すると最上階へと続く階段へと登り始めた。するとそこにはやはりヨハネスとその配下の一人セレインが立っていた。

「見つけました。司令！その身拘束させてもらいます。」
「来ましたか・・セレイン少しその者達と遊んでやりなさい。」
「仰せのままに、ヨハネス様」

ブロードがヨハネスに対し剣を向けるしかしその配下の一人のセレインが一瞬でブロードのもとに近づきブロードに剣を向ける。ブロードもセレインの剣にすぐさま反応し激しい剣戟が始まる。

「ブロード！！」

すぐさまナターシャもフローラに加勢し遠距離からの弓の支援を行うがセレインのその矢はセレインの太刀にはじき返される。

「フローラ！私とブロードでこの女を食いとめる！だからヨハネスを・・・捕まえて！」
「はい！」

フローラはヨハネスの元に近づきヨハネスの腕を掴もうとした瞬間ヨハネスは立ち上がり背中に背負っていた大剣でフローラに切掛かって来た。即座に盾でヨハネスの攻撃を防ぎ片手剣で横一線を加えるも大剣によってその一線はいなされ距離を置かれる。

「ヨハネス司令！貴方の負けです！大人しく投降してください。」
「フッ・・・敗者は呪われる、皮肉にも今回私は敗者と認めざる追えないようだ。しかし今回の観測結果とこの書物が手に入った時、次の私に敗北は無くなる。」
「何を言っているんです？貴方に次などありません。貴方の野望はここで私達によって潰えるのだから！」

そう言うとフローラは剣に渾身の力を込めヨハネスに切掛かるしかしヨハネスは斜め下に剣を構え恐ろしい速度でその剣を振り上げる、フローラは瞬時にその攻撃を把握し盾を構えるがそのすさまじい威力によって天井へ叩きつけられる。

「ガハッ！！」

フローラは叩きつけられたあとすぐに斬りかかろうとするも体が言う事を聞かなかった。

「（この手足の痺れ・・・まさかあの剣には高い神経毒が塗られているの！？）」
「潰える？私の野望がかね？私の野望はこんな所では潰えはしないさ。私の野望はまだ初期段階にあるのだから・・・少し話をしようか、人は緩慢な滅亡の道を歩んでいる。それがこの世界の今の姿だモンスターに怯えそして人々はモンスターに捕食されている。しかし滅亡よりも先に悪い未来が待っているかもしれない。そうなる前に私は様々な研究を重ねて来たそして私はある結論へと達した。」

「かつて古代人達はアンサラーと呼ばれる存在を作りだした。このアンサラーはとても優秀でね別の強力な存在と共感する事でより強くなる事の出来る素晴らしい発明なのだよ。私の作り出した改造変種モンスターはその研究の産物でしかない。私はこのアンサラーの

技術を現在に甦らせそして、私は新たな平和が約束された世界を作り出す!!」

ヨハネスの話の途中に大広場から何かが爆発する音が聞こえシュレイド城はその爆発によって揺さぶられる。

「（なに・・・・この爆発音・・・）」
「フッ・・・どうやら終わったようだな。」
「ヨハネス様!申し上げます、実験の観測が終了いたしました。」
「ふむ、わかりましたゴート、セレインもうこの場所に用はありません。もう退きますよ。」
「わかりましたヨハネス様。」

そう言うとセレインはブロードとナターシャの二人を吹き飛ばしヨハネスの元に跳躍した。吹き飛ばされた二人は何とか空中で態勢を立て直し床へと軟着陸したのちにフローラの元に駆け寄る。

「大丈夫?フローラ?」
「は・・・い・・・」

するとフローラは立ち上がりヨハネスに向けて言葉を放った。

「どんなに・・・どんなに見っともなくても生物は最後の瞬間まで生きようとします!それは人間もモンスターも同じです!」
「フッ・・・最後の瞬間までかそれは一体いつになる?数百年後か?数時間後か!?やがては朽ちるこの世界で終焉を待つなど私はごめんだ。では諸君これで私は失礼するよ。今度は私が作り出した新世界で会おう。もっとも君達はその世界で生きる事は許されてはいないだろうがね。」

そう言うと辺りは真っ白な世界へと姿を変える。セレインとゴートは3人に対して閃光玉を投げつけたのだ。3人の視野が回復する頃にはヨハネス達は姿を消していた。するとフローラが口を開いた。

「すいません・・私の力不足で司令を・・・ヨハネスを捕える事は出来ませんでした。」

「いいのよ。それに失敗は誰にでもあるわ。それに奴の口ぶりからして奴はまた私達の元に現れる。その時に捕まえればいいだけよ。」

そうナターシャはフローラに対し慰めの言葉を言った。すると今度はブロードが口を開いた。

「さっきの爆発音・・・黒龍がいた大広場から音がしましたけど先輩、大丈夫でしょうか。」

「ーーーー!!ジュノ!!ブロード、フローラの事は任せたわよ私はあいつの様子を見てくる。」

そう言うとナターシャは立ち上がり大広場に向けて駆けていった。

「あっ!ナターシャさん!!」

ブロードが声をかける頃にはナターシャは階段を降りた後だった。

シュレイド城　大広場

ナターシャが大広場にたどり着いた時広場はさっきとは打って変わり酷いありさまであった広場の城壁は焼け焦げあらゆる場所に穴が空きそして何よりナターシャの眼には行ったのは広場の中心に大きな穴が開いていたところだった。

「・・・ジュノ・・・ジュノ！！！何処に居るの！？」

声を上げ辺りを見回りながら歩くと崩れかけた壁にジュノが座り込み頭を下に向けているジュノをナターシャはみつけた。ジュノを見つけたとともにナターシャはジュノに向けて駆けだしジュノを肩を揺さぶる。

「ジュノ！起きなさいコラ！」

「・・・・・」

ジュノを激しく揺さぶるがジュノは一向に目を開けない。

「起きなさいよ！！起きてよ！ねえ！」

「・・・ん、その声はナターシャか・・・すまないさっきまでは眼が霞むだけだったんだが今度は意識まで遠くなってきたようだ・・・」

「よかった・・・無事とは言い難いけど大丈夫みたいね。」

「フ・・・ところが大丈夫じゃないみたいなんだ。さっきから回復薬を飲んでも傷口に刷り込んでもまるで効果がないんだよね…おかげで血が止まらない。」

「バカ！そんなはずないじゃない！今生命の粉塵をかけるから大人しくしてて。」

ナターシャは生命の粉塵をジュノに振りかける、だがしかしジュノから流れ出る血は止まる事は無かった。

「嘘・・・なんで・・・」

「ははっ・・・だから言ったろ効かないってさ・・・なんかすっごく眠くなって来た・・・少し寝るわ・・・」

「駄目！今寝たらホントに死んじゃう」

「大丈夫だって…少し疲れただけだからさ・・・それに少し寝て起きなかったらお前が起こしてくれるだろ…矢を尻に射・・てさ・・・」

「・・・・・」

ジュノはナターシャの頬に手を伸ばすナターシャから流れ出ている涙を拭きとるために。

「・・・泣くんじゃねえよ・・・馬鹿、そう言うのは大事な人のために取っとけよ・・・」

「・・・だから今泣いてるんじゃないの馬鹿・・・」

「・・・・」

「悪いがもう限界だ・・・少し眠らせてもらうよ。起きなかったら起こしてくれよな…ナターシャ、それじゃあ・・おや・・す・・み・・・」

「いや！いやよ!!ジュノ・・・」

そう言うとナターシャはジュノの手を右手で取りジュノの肩を左手で揺さぶるがジュノは目を覚ます事は無かった。

「起きてよ・・・ねえ…お願いだから・・・目を・・・覚ましてよ。ジュノ・・・」

シュレイド城の大広場に彼女がむせび泣く声が小さく木霊した。

気球艇　???

気球艇のとある一室でヨハネスは実験の観測結果を見て複雑な表情をしていた。

「フッ・・・やはり私の作り出した模造品では十分な結果は得られ

なかったか・・」

そう一言言うとヨハネスは次に不敵な笑みを浮かべた。

「しかし思わぬ収穫もあった、私はもう君には利用価値は無いと思っていたが思わぬ利用価値が出て来たよ。次会う時を楽しみにしているよジュノ君。」

ヨハネスの乗せた飛空挺は黒い野望を乗せながら漆黒の空を駆けていった。

27節　哀れな命を救う者（後書き）

私には弟が居るんですけどね。ちょっと弟の部屋に入って机の上を見てみたらＡＫＢ４８で学ぶ～シリーズとか言う教科書ガイドみたいなのが数冊置いてあったんですね。いやー男だねえ、今度もえたん買ってやってこっちの世界にに引きずり込んでやろう。

28節　可逆のリブート（前書き）

最近会いたい芸能人はマツコデラックスです。

28節　可逆のリブート

シュレイド城での黒龍との戦闘後眠りに着いたジュノが目覚めたのはマイハウス内のベットの上であった。

「ん・・・何でここに居るんだ？」

ジュノはベットから下り辺りを見回すとある点に気がついた。まず一つにいつもベットの横に居るはずの給仕アイルーのサブローが居ない事、そしてもう一つは昼間だと言うのに外の音はまるで聞こえず真夜中の様な不気味な静けさなのである事だった。ジュノは不審に思いマイハウスから出ようとするが不思議とマイハウスから出ようとする事が出来ないのである。それはまるでマイハウスの出口に見えない壁があるようだった。

「・・・どういう事だ、ここから出られない・・・」

「目が覚めましたか？ジュノ？」

ふと後ろから声がし振り返るとそこにはアイリスがその場に立っていた。

「アイリス・・・何故ここに？まさか俺は死んだのか？だからこの不気味な場所に居るのか？」

そう言うとアイリスはジュノの胸から下げているアイリスからもらったお守りを指差した。

「フフ・・・貴方が島を離れる時に渡した御守りが有るでしょう、ちゃんと肌身離さず持っててくれるなんて母さん嬉しいわ。私は今

そのお守りを経由して貴方の精神世界に居ます。それに貴方は死んではいませんよ。ここは貴方の記憶から作り出された精神の避難所です。」

「避難所・・・」

「ええ、貴方は先日の戦いにおいて頭に深刻なダメージを追いませんでしたか？」

「ん～言われてみれば頭に砲丸の弾がぶつかったり、頭から落下したりすることが有った。」

そう言うとアイリスはくすりと笑い説明を続けた。

「フフ、やっぱり。頭に受けたダメージは最初は貴方に備わっているアンサラーの能力の一つの自己再生能力で補える代物でしたが、貴方は旧文明で活躍していたアンサラー達とは少し違う過程をへて作られているので自己再生時にバグが生じました。あっバグと言うのはそうですね・・・欠陥と捉えてもらった方がいいでしょう。その欠陥が脳に蓄積されて自己再生能力に支障が生じました。」

「ほうほう、それで？もう御先真っ暗ってこと？」

「いいえ、貴方はまだお先真っ暗じゃありませんよ。これから私が貴方の脳内に蓄積された欠陥を今から私が除去します。貴方の体に発生している欠陥はかなりの量なので少し時間が掛かるでしょうけど。その際に記憶の再構成も並行して行いますので昔の記憶が脳裏に浮かぶ事になりますがよろしいですか？」

「昔の記憶か・・・ちょうど昔の記憶があやふやな部分もあるし別にいいかな、それに結構時間が掛かるんなら暇つぶしにもなるし別

に良いよ。」
「そうですか、ではそこのベットで横になっていてください。」
そう言うとアイリスはジュノにベットで横になるよう促した。ジュノはベットに横になると目をつむり体の力を抜いた。
「そうそう、たまには顔を見せに島に寄ってくださいね。あなたまた来るって言ってしばらく貴方の顔を見てないから母さん寂しいわ。」
「うっ…色々と忙しかったんだよ・・・わかった。今回の件がひと段落したらまたあの島に遊びに行くよ。」
「フフ、楽しみにしてますよ。ではおやすみなさい。今度は直接顔を見せに来てくださいね。」
そう言うとアイリスは自身の手をジュノの瞼に覆いかぶせた、そうするとジュノはすぐに眠りに落ちた。
次にジュノの意識が覚醒した時は見た事のない場所であった。辺りを見回すと頭に何かを乗せられ木に磔にされている男の中に居ることが分かった。
「（えっなんで磔になってるの俺?とりあえずこの磔を解かねば。）」
そう思いジュノは体に力を入れて拘束された腕を解こうとするも体が言う事を聞かず拘束は一向に外れなかった。
「（あれ・・・おかしいな。力を入れてるんだけど体が言う事を聞かない・・・そうか、これがアイリスの言ってた記憶の再構築による記憶の断片って奴か、どうやら今の俺は昔の俺の記憶を見ているらしいな。だから体の言う事が効かないのか・・・ならだまって

見ているか・・・・）

そう思いジュノが考えるのを止めしばらくじっとしていると遠方から自らの頭上に目掛けて何かが当たる音が聞こえた

「（ーーーー！！！）」

自身の体が咄嗟に跳ね上がった瞬間その場には無傷の果実と狩猟練習用に用いられるの矢が転がっていた。

「（うお！あっぶねーこんなの当たったらとんでもねえぞ）」

「もうなんで動くのよジュノ！」

視界の上の方から女の子の声が聞こえ視界が上の方に移動するとそこには銀色の短い髪にカチューシャを付けた小さな女の子が練習用の小さな弓を抱え立っていた。

「（うっ・・・この顔見覚えが・・・）」

「うっ…でもナターシャちゃん僕一緒に弓の練習付き合うって言ったけどこんなの危ないし怖いよ～」

「なに泣きべそかいてるのよ。しっかりしなさい男の子でしょ！いい次動いたらお尻に矢を射抜くからね！」

「うっ…わかったよ～・・・」

そう言うとナターシャと呼ばれた小さな女の子幼き日のジュノ頭上に果実を乗せ遠くへ走っていった。

「（あれは小さい時のナターシャか・・・それにしても小さい時の俺情けねえな…）」

そう思うと幼少時のナターシャの元に今度は別の方向から浅黒い肌をした髪の長い女の子が現れた。

「（ん・・・あれは・・・）」
「やぁ！ナターシャ今日も特訓？」
「あっキエルちゃん久しぶり～そう今ジュノが的の役を引き受けてくれたから今練習している所なの。キエルちゃんもやってみる？」
「あはは、あたいはそう言うのは不得意だからここで見てるよ。」
「（あれは・・・キエルか・・・ちいせえなあ皆。）」
「あらそう・・・じゃあそこで見ててね。」

そう言うとナターシャは狙いを定め矢を射抜くすると練習用の矢はジュノの頭の上の果実ではなく額に当たった。

「あっ・・・」
「痛いよ～ナターシャちゃん～」

額に練習用の矢が当たった幼いジュノはそのあまりの痛みに泣き始めた。すると二人がジュノの方へとやってきてジュノを泣きやむまでジュノの事をなだめた。

「大丈夫～ジュノ君？当たったのはここ？痛いの痛いの飛んでいけ～ほらナターシャちゃんもジュノ君に誤って。」
「ごめんなさい。今度は私が的の役するから許してちょうだい。」
「うっ…ナターシャちゃんに危ない事させるのは僕嫌だよ～ワーン。」
「あーまた泣かせてほらナターシャちゃんも一緒に痛いの痛いの飛んで行けーしよう。」
「うん。痛いの痛いの飛んで行けー。」
「（・・・それにしても泣き虫だな～俺・・・情けね～確かこの頃

はナターシャの親父さんの元で数年弓の使い方をナターシャと一緒に学んでたんだよな～俺のが飲み込み速くてよくナターシャに練習の後ああやって特訓に付き合わされてたっけか、キエルはこの頃よく俺達の修行を見学に来てたんだっけ。）」

そうジュノが思っていると辺りの風景がだんだんと引き延ばされていき辺りは真っ暗闇になった。

「おっ辺りが暗くなったぞ・・・何もねえな…ん?」

真っ暗なだった世界に一つ水泡がわき出ている場所をジュノは見つけジュノはその場所へと歩いていく。水泡がわき出ている場所に着きしばらく水泡を眺めていると水泡になにか様々な物が映り込んでいる事に気づく。

「ん・・・これは俺の記憶が映し出されているのか・・・?」

その水泡の中の一つを手に取ってみると水泡は割れ暗転していた世界は一気に明るくなりジュノの視界は真っ白になる。視界が回復するとそこはドンドルマの郊外で双剣の様々な型を練習している少年時代のジュノの姿が有った。

「（あーよくここで練習したよな、と言う事は近くにお師匠様がいるなこりゃ。おっ）」

「ハーイ、ジュノちゃんとノルマ達成してきた?」

声のする方向を向くとそこには少年時代のジュノに歩み寄る一人の女性が現れた。その女性はとても整った顔つきをし男の目の引く胸と尻、そして何よりもその胸を強調するような装備を纏っていた。

「（うわ～ルシャナ師匠だ～懐かしいな。）」
「はい！ルシャナ師匠さっき今日のノルマのレウス亜種とレイア亜種の討伐と武器と防具を装備しながら走り込みを５００本と体術の型と双剣の全ての型の復讐を終わらせたとこです。今はルシャナ師匠見たいに狩猟場で舞うように立ち回るかの特訓としてたところです。」

「よしよし関心関心、ホントジュノは良い子だしすぐに私の教えた事を飲みこんでくれるからあたしも教えがいがあるわ～。」

そう言うとルシャナ師匠はジュノを強く抱擁し頭を数回なでた。少年時代のジュノの顔はルシャナの胸の間にすっぽりと収まり手と足をばたつかせている。

「（あの頃はあれやられると恥ずかしくて仕方なかったけど。今思うと羨ましいな。おい）」

ルシャナはしばらくジュノの頭を撫でまわすとふと何かに気付いたようでいきなりジュノ頭を撫でるのを止め抱擁を解きジュノに問いかけた。

「ジュノ、あたしが一番最初に教えた狩猟場での一番大切な事三つ言ってごらんなさい。」
「はい、死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな、ですね。」
「あなた、今日のノルマ達成するときにちゃんとこの三つの内一つでも破ってないでしょうね？」
「やぶって・・・ません！」
「そう・・・じゃあこれはなに？」

そう言うとルシャナはジュノの右肩を強く叩いた。するとジュノはビクンと跳ねあがりその場にしゃがみこんだ。

「やっぱり・・・ノルマを遂行させてる時に右肩の関節が外れたわね。まったく・・ほらちゃんと応急手当が確認出来てるかどうか確認するから装備とインナーを脱ぎなさい。」

「うっ…すいません・・・」

そう言うとジュノは装備と上のインナーを脱ぎルシャナの目の前に立った、確かにルシャナの言っていた通りにジュノの右肩は薬の塗られた包帯でぐるぐる巻きに固定されていた。

「ふむ、ちゃんと応急処置は万全ね。それじゃあ約束一つ破った罰として装備と武器を装備したまま走り込み３００本しなさい。それが終わったら病院に行くわよ。ほら走った走った。」

「は～い・・・」

ジュノ少年は返事をすると直ぐにインナーと装備を装着しルシャナの目の前で走り込みを開始した。

「（そう言えば、早く師匠見たいになりたくて結構無茶とかやってたよなこの頃は。この後数年師匠の元で双剣や他の武器の使い方を学んでたんだよな～確かその後師匠はドンドルマのギルドナイトの人と結婚してどこか遠くに行ってしまったっけ…師匠元気にしてるかな～）」

そう思うとまた辺りの風景が引き延ばされ周囲は暗闇に染まり水泡がわき出ている場所にまたジュノは戻された。

「次はどんな記憶を見るかな・・・ん・・・」

ジュノは水泡が溢れ出ている場所の下に目をやると何かが落ちているのを目にした。

「なんだこれ・・ネコのぬいぐるみ?」

ジュノはネコのぬいぐるみに手を触れた瞬間暗闇に染まっていた辺りはまた光に包まれた。

28節　可逆のリブート（後書き）

海の貝？の仲間？でホッケって居ますよね。あれよく田舎の宮城の魚市場でばあちゃんが買ってきてその場でさばいてよく食べさせてくれたんですけど、見た目はなかなかグロイんですけど上手いんですよねあれ。いや刺身醤油のおかげで上手いのかな？

29節　太古の記憶（前書き）

愛猫の遊び道具としてRCミニチョロQを買ったんですけど、全然興味を示してくれません（；；）

29節　太古の記憶

ネコのぬいぐるみにジュノが触れた時今度は来た事も見たこともない場所へとジュノの意識は覚醒した。

「（ここは・・・水の中？しかも狭いな…筒の中に入っているのか？）」

ジュノの意識が覚醒した場所それはディオネ遺跡でアイリスと出会った場所に酷似している場所だった。

「（もしかして、旧文明の記憶を見ているのか・・・？）」

そう思っているとジュノの下の方から徐々に水が抜かれていきジュノの目の前に張り巡らされている筒が下から上に上がっていった。すると目の前に白い服を着た男が現れた。

「実験体Ｊゆっくり腕を上げさげしたあと脚を屈伸させてみろ。言ってる意味はわかるな？」

男に命令されるとジュノの体は腕を上下し脚を屈伸させ、また男の方に振り向いた。

「よし聴覚器官及び命令処理能力に支障は無いな。では次は自身のシリアルとこの文章を読んでみろ。」

そう言うと男は紙をジュノに手渡した、紙には何やら見たこともない字が書いてある。

「（なんだこれ？文字・・・か・・・初めて見る、でもなんか意味はわかるな）」

そう考えているとジュノの口は紙に書かれた字を読み始めた。

「私のシリアルはＪ－１０１、この文章には我々アンサラ―は人類に似せて作られた似非者である。と記されています。」

「ふむ、見たところ以上は無いようだな…栗実博士、そちらのモニターではどう映っている？」

男が右の方に向きジュノの首も同じように右を向くとそこには女性が椅子に座りガラスの画面を見て何かを記録していた。女性は書くのを止めるとこちらに振りかえった。

「（あ…母さん・・・って事はこれは旧文明時代の俺の記憶か・・おもしれぇ…だまって見てるか。）」

「こちらのモニターには異常を示す数値は表示されていません。」

「そうか・・・ではこのアンサラ―にはなんの欠陥もないと言う事だな。では次の検査に入る。栗実博士、準備の方を頼む私は検査室に先に向かっているよ。」

そう男は言うとジュノから離れ検査室と呼ばれる場所へと向かうために部屋を後にした。そしてこの場にはジュノと栗実博士が二人残された。ジュノの体はその場を動かずじっとしていた、すると栗実博士がジュノに向かって近づいてきた。

「初めまして。私の赤ちゃん！いや・・・もう成体だから赤ちゃんじゃなくて青年か～」

「初めまして栗実博士。貴方が私の担当責任者ですね。」

「はい。挨拶よくできました～でも私の事は母さんって呼んでほしいな～貴方がこーんな豆粒の時から面倒みてるんだから！」

「それは命令ですか？」

「うーん…命令と言うか…お願いかな？」
「願望ですか？しかし、我々アンサラーは制作者である博士または人類に対し忠じ・・・・」
「アー！！！もうわかった！！これは命令！！私の事はこれからお母さん或いは母さんと呼びなさい！！」

過去のジュノが発言しようとした内容をかき消すように栗実博士は大声を出し過去のジュノの顔に指を指しながらそう伝えた。それに反応した過去のジュノは顔色を変えず栗実博士の命令に答えた。

「わかりました。母さん。」
「うんうん！上手に言えました～よしよし。」

そう言うと栗実博士はつま先立ちになりジュノの頭を撫でようとするも背の関係上届く事は無かった。

「うっ…届かない・・・」

その光景を見たジュノは脚を屈伸させ博士の手が届く位置に自らの頭を合わせた。

「これで届きますか。母さん？」
「うん届いた。ジュノは優しいね～。」
「ジュノ？私はアンサラーＪ－１０１です。ジュノではありません。」
「いいの。貴方は私の子供同然なんだから名前を付けて当然です。今日から貴方の名前はジュノです。いいですねジュノ。」
「・・・了解しました。今日から私の名称はジュノです。」
「うーんまだ言葉が硬いな～いい私と話すときはもっと砕けた感じで喋って頂戴。」

「・・・砕けた感じとは・・・？私はアンサラーです。博士達が制作者である以上、私は敬意を払わなくてはなりません。」
「もーその喋り方がだめなの！いい？まずは私が言う事を真似しなさい。」

そう言うと博士は少し首をひねって考え出した。

「（これが母さんか・・・なんかアイリスと違って性格がちょっと違うな。）」
「ん～あっそうだ！良いジュノ「母さん、今日の晩御飯なに～？」っていってみなさい。」
「母さん、今日の晩御飯何～？」
「うーん、棒読み・・・まあ今日が初めて喋るし仕方がないか～まあ私と話すときは今みたいな感じで話す事、いいわねジュノ。」
「例が少ないですが尽力します。」
「ちがうーそこは「そうするよ、母さん」です。はい！言ってみて！」
「そうするよ、お母さん・・・こんな感じでしょうか？」
「うん。そんな感じそんな感じ！偉いぞ～ジュノ。流石私の息子！」

そう言うと博士はジュノの肩を数回叩いた。すると何やら博士のいる方からけたたましい音が部屋中に響き渡った。

「やばっ！主任を検査室に待たせてるんだった。ジュノそこにある白い服着て準備してて。」

そう言うと博士はけたたましい音のする方に行き何やら話し始めた。

「はい！栗実です。あっ今準備が終え向かうところですので、もう少しお待ちください。はい！失礼します。」

「よし着替え終えたね。じゃあ行くよ！私について来て。」

そう言うと栗実博士はジュノの手をつなぎ検査室へと向かった。検査室に入るとジュノと栗実博士は別々になり栗実博士は検査室内にジュノは外へと分かれた。ジュノの入れられた場所には重厚な大きな箱と無数の穴の空いた壁が辺りに散らばった場所にジュノは入られた、奥には赤い線が引いてある。

「では検査を行う検体番号Ｊ－１０１今から君は自身の能力をフルに活用し君に襲ってくる全ての障害を撃破しつつその赤い線に向かってダッシュしてもらう。」

「いいジュノ！落ち着いてやるのよ。貴方ならきっと出来るわ。」

「では検査を始める。栗実博士お願いします。」

そう音声が入ると周囲からけたたましい音を響いた瞬間無数の穴から銃が飛び出し銃弾の雨がジュノに襲いかかる。ジュノはそれを避け能力を発動し銃を全て破壊すると赤い線が引いてある場所へと駆けだす。すると次は重厚な大きな箱が割れ中からは神獣と思しきモンスターがジュノへと襲いかかってくる。ジュノと神獣は正面から激しくぶつかり合う。その瞬間ジュノの目の前は蒼い炎に包まれ神獣は焼け焦げ原形を留めない状態となる。そしてジュノは神獣だった物体を飛び越し赤い線へと到達したとたんまたけたたましい音が鳴り響き辺りは静かになった。すこし時間が立つと栗実博士の声が聞こえて来た。

「ジュノ、お疲れ様今日の検査はこれで終わり。今そっちに行くから待っててね。」

その声が聞こえると扉が開かれる音が聞こえ遠方から栗実博士が駆けて来た。

「お疲れ～さすが私の子凄い記録が出たよ～知りたい？」

栗実博士は笑顔でジュノの頭を撫でて問いかけてくる。

「いえ、特には・・・それよりも母さんさっきより少し元気がないようですが、どうなさいましたか？」

「ん・・・いや、ジュノがあまりにも凄いから母さん凄く驚いて疲れちゃっただけよ。心配してくれてありがとう。それじゃあジュノ研究室に戻ろっか。」

そう言うと栗実博士はジュノの手を取って研究室へと歩いていった。研究室に入るとジュノはベットに腰を掛けてと言われ腰を掛けて待っていると栗実博士が両手に様々な物を抱えながらベットへと歩いてきてジュノの隣へと座った。

「いいですかジュノ。今からさっきの続きをします。まずはこれを貴方にあげます。」

そう言うと栗実博士はネコのぬいぐるみをジュノに手渡した。

「これは何ですか？栗実・・・いえ、母さん。私の脳内の情報にはない新たな神獣ですか？」

「フフ。ジュノこれは神獣じゃありません。ネコって言う生き物のぬいぐるみです。可愛いでしょ～。」

「ぬいぐるみ・・・ネコと言う生物を模した玩具のことですね。」

「まぁそうなんだけどさ…とりあえずそのぬいぐるみを最低一日一回こう胸に抱いて優しくぎゅーってしなさい。」

「わかりました。こうですか？」

そう言うとジュノはぬいぐるみを胸に抱きとめる。すると胸がなんとも表現しづらい感覚をジュノは覚えた。

「どうジュノ？なにか感じない？」
「なにか、胸が変な感じです。母さん」
「そうでしょ～それは感情の一つで愛情って言うんだよ～」
「愛情・・・」

しばらくジュノはネコのぬいぐるみを抱きとめていると栗実博士がジュノにこう伝えて来た。

「ジュノ。貴方は従来のアンサラーとは違って特殊に造られています。そのひとつに貴方は従来のアンサラーに比べて感情に特化するよう私は作りました。貴方達アンサラーは今はただ神獣達を滅ぼす為の存在に過ぎませんが、私はいづれ人間とアンサラー達が手を取り合って共に生きていくことが必要な時が来ると思うの、だからその感情を忘れてはいけませんよ。」
「わかりました。お母さん。」

「（そうだ・・・俺はこの後母さん達に色々な感情を教わったんだ・・・そして・・・そして・・・うっ）」

空間が暗黒に染まり温かい気持ちでその場に立ち尽くしていると今度は目の前に強大な何かがその場に鎮座しているのがわかった。

「なんだ・・・これ・・・牙獣種っぽい体つきだけど尻尾が生えてて頭が龍だな…」

【Ｉｔ　ｆｏｕｎｄ　ｉｔ！】

「！！」

ジュノの頭の中に声とも捉えられる音が響いた次の瞬間目の間にいた強大な物体はジュノに振り返りジュノに向かって目にもとまらぬ速度で突進してきた。しかし痛みは感じず体に何かがぶつかった痕跡はなかった。

「・・・なんだったんだ一体・・・」

【ＷＥ　ｗｉｌｌ　ｏｂｓｔｒｕｃｔ　ｉｔ.】

「っうお！！だれだ！！！！」

ジュノは大声をあげて周りを見渡したが周りには誰も居なかった。

「長い間、お待たせしてごめんなさいジュノ。蓄積された欠陥の除去と記憶の再構成が終わりましたよジュノ。」

ジュノの横から声が聞こえるとそこには作業を終えたアイリスが立っていた。

「！！なんだ母さんか・・・」

「まぁ…いきなり母さんだなんて。なんだか今までアイリスと呼ばれてたのでなんだか新鮮な気分です。」

「母さん・・・」

「えっと?どうしましたジュノ?」

「いや、やっぱり良いや。なんでもない」

「?」

「（さっきのはきっと気のせいだな。うん）」

「それでは私はこれで失礼しますね。ジュノたまには顔を見せに来

てくださいよ。」

そう言うとアイリスはその場から消えジュノが次に瞬きをした瞬間そこはさっきいた暗闇に包まれた世界ではなくメゼポルタにある病院の一室だった。

「・・・ここは・・・病院か・・・」

そう思いジュノは体を起こそうとすると左手が温かい事に気づきながら体を起こすとそこにはジュノの左手を握りベットに顔を伏せて寝息を立てているナターシャが居た。ジュノは右手でナターシャの髪を撫でた。するとナターシャは飛び上がるように目覚めた。

「ハッ!!!ジュノ!!!起きたのね。もう三日も眠り続けてたのよ。」

「そうか・・・心配かけたなナターシャ、手まで握ってもらって悪いことしたな。」

「あっ・・・」

ナターシャは自身がジュノの手を握っていた事に気付くと慌てて左手から手を離した。

「あんたが一向に目を覚まさないから手を強く握ったりして刺激を与えてたのよ。別に他意があって握ってたわけじゃないわ。」

「ははっ・・・そうか。ありがとな・・・」

「そうよ感謝しなさいよ。」

「ヨハネスはどうなったんだ?」

「・・・ごめんなさい。ヨハネスには逃げられたわ・・・」

「そうか・・・まあ気にするな。」

しばらくの間病室は沈黙に包まれる。するとジュノが静かに口を開いた。

「夢見てたんだ。凄く懐かしい夢を一杯見てた。そして色々思いだした。」

「へぇ～どんな夢よ？」

「まず昔まだ俺が小さい時にお前に弓術の特訓だと言われて的変わりにされてた事思いだしたな。」

「うっ…忘れてると思ったのに…」

「おまけによく泣いてたな俺、それとルシャナ師匠に大事な事を教わった時の夢を見た。懐かしかったよ。」

「ルシャナって…あのルシャナさん？戦場の踊り子って言われてたルシャナさんの事？」

「ああ、そうだけど。」

「あなた・・・凄い人の元で修行してたのね・・・・・」

そうナターシャは言い羨望のまなざしを受けると病室の扉が開かれフローラが病室に入って来た。

「あっ！ジュノさん！よかった無事に目を覚ましたんですね。こうしちゃいられない、私ジュノさんが目を覚ました事を皆に伝えてきますね。」

そう言うとフローラはすぐに病室を出ていった。しばらくすると病室にジュノを心配する様々な人たちが病室に訪れジュノの目覚めを祝福した。

29節　太古の記憶（後書き）

英文の部分は本当はエノク語って言う言語が入る予定だったのですがどうもこのサイトでは対応してない様なので止む無く英文に（；；）

まぁモンハンの世界の言語はムービーとか見る限り英語じゃないんでこれでいいかな～と断念しました。

次位に登場人物紹介や用語説明とか入れようかな～と思います。

登場人物紹介2とその他（前書き）

またキリのよいところまで進んだのでここまで新たに登場した人物及びＭＨＦ内のＮＰＣ紹介等をしたいと思います。それとＭＨＦ独自のシステムや小説に出てくるジュノの装備についても話したいと思います。
しゃく稼ぎその2ですね

登場人物紹介2とその他

【新しいオリジナル登場人物】

マルク
主要武器　鬼神斬波刀
年齢１０代後半
ユーノとよくＰＴを組むポッケ村出身の男性ハンター。ポッケ村では腕の立つハンターだったらしく同じポッケ村出身のカノンとコンビを組んでいた。ユーノが好みらしい。太刀を主に使う

カノン
主要武器　片手剣
年齢１０代後半
マルクと同じくユーノとよくＰＴを組み狩猟に出かけるポッケ村出身のハンター。マルクと同じようにポッケ村では腕の立つハンターでありよくマルクとコンビを組んでいた。

ネリス
年齢２０代前半
パローネキャラバンで気球船操舵術を学ぶ真面目な女性、パローネで埃かぶっていた高速気球船を現状唯一手足のように操れる人物である。

ルシャナ
年齢?
主要武器　様々な武器種を操り主に双剣を使う。
過去にジュノに狩猟術の稽古をつけた人物。戦場の踊り子と呼ばれるほど高名なハンターであったがジュノの記憶によると結婚後ハンター業を引退している。

ゴート
年齢?
主要武器　極長大剣
人を小馬鹿にしたように笑い、ジュノ達に牙を向ける男性ハンターでありヨハネスに仕える人物。ヨハネスの命には忠実に従う。

セレイン
年齢?
主要武器　太刀
寡黙でヨハネスの命に忠実に従う女性ハンター、仮にもギルドナイトのブロードの懐に一瞬でもぐり込み切掛かり、ブロードに攻撃している最中にもレジェンドラスタのナターシャの攻撃に反応するほど身体能力が高い。

【小説内で登場したＭＨＦの実在するＮＰＣキャラ】
（年齢等は筆者の予測です。）顔や姿を見たい人は画像検索してみると良いかもしれません。

キエル＝アルバーロ
年齢　２０代
常によりよい土地を求めて放浪しているというパローネキャラバンの民を取り仕切るカシラで明るく開放的な性格で仕事一筋！褐色肌な女性。一部ではその豊満なバスト故か【褐色ゼリーおっぱい】とも呼ばれている。この小説ではジュノの幼馴染の一人として活躍してもらってます。

オリオール＝アルバーロ
年齢　２０代
キエルの弟で高い気球操船術を持った人物。体つきは筋骨隆々で身

長がデカイ。実装当初はいつもクエスト出発時の場所に居た為ＭＨＦをプレイしている人たちからは「邪魔だ」「この肉ダルマめが」と罵声を浴びていた可哀そうな人物。語尾に「ッス！」と付ける事が多い。この小説では気球船操舵技術が高い人物として活躍してもらってます。

【小説で使われた用語、乗り物説明】

【超速射】

ＭＨＦ内で一部のライトボウガンにのみ実装されている機能。簡単に説明するとマシンガンの如くボウガンの装填した弾をすべて射出する。その際にはかなりの反動を有する。種類は今のところ通常弾　貫通弾　散弾　徹甲榴弾　の４種が一部のボウガンごとに実装されている。

【排熱砲】

元はＭＨＦ内の一部のヘヴィボウガンに実装されている排熱弾を発射する排熱噴射機構を気球船のモンスター迎撃兵器として流用したこの小説独自の兵器。ヘヴィボウガンの場合はボウガン内に篭った熱を排熱弾に蓄積して一気に噴射するが、この排熱砲は気球船内の熱を排熱弾に蓄積しそれを噴射すると言う設定。排熱噴射と言うのは簡単に説明するとビーム兵器見たいな物です。

【高速気球船】

ＭＨＦ内には存在しない小説オリジナルの乗り物。最初は蒸気エンジンを搭載した飛行機を元にしようと考えてたのですが、蒸気エンジンを搭載した飛行機の歴史を調べてみるとあまり良い評価ではなかったので止む無く現在の飛行機の多くに使われているガスタービンエンジンに変更しました。ガスタービンエンジンが搭載された飛行機が綺麗な状態でモンハンの世界で発見されてそれをモンハン内

世界の技術レベルに合わせた物と言う設定。

【気球船】
ＭＨＦ内には存在しないこの小説独自の空の乗り物。モンハン内には本来気球が存在しますが、その技術をもっと進化させ現在の飛行船みたいな感じになっていると言う設定。

【馬】
まだこの小説には登場していないがいずれ登場する事になるであろう生物。モンハンのムービーとかを見るとハンターの移動手段としては主に徒歩やＭＨＰ３で出てきたガ―グァをけん引させた荷車やアプトノスをけん引させた荷車が存在しますが、モンハン内の世界観設定をいろいろ調べてみると馬で全速力で逃げても追いかけてくるガノトトスを振り切れなかったみたいな文章が見つかったのでこの小説に取り入れる予定。ふ・・・普通の猫はいるのだろうか？

【ジュノ達の主に使用している防具やスキルの組み合わせ。（ＭＨＦ内の装備多数使用）】
ＭＨＦ内では独自の装飾品や防具そしてプーギ―を利用する事によって使えるスキルカフと言う者が多数存在しておりそれらの組み合わせて多くのハンターが狩猟を行っている。ここでは主人公のジュノがどのような装備を組み合わせ使っているのかを文字をつかって説明したいと思います。（ホントは写真乗せて説明したいのですがそれが出来ないので見た目は文字で表現します。）

ジュノ
剣士装備（女）
超絶のピアス？

Ｌｖ７　１２７　●●●

剛力珠，剛力珠，剛力珠
ブリッツベスト　（伝）　Ｌｖ７　１２５
●●　剛力珠，剛力珠
千裂Ｆ腕環・※　（パ）　Ｌｖ７　１２３　●●
●　剛力珠，剛力珠，剛力珠
百裂Ｆ腰帯・※　（パ）　Ｌｖ７　１２３　●●
●　斬空珠Ｇ，仙人珠Ｇ，剛力珠
ベルＦＸグリーヴ　（ＦＸ）　Ｌｖ７　１８０
●●　斬空珠Ｇ，斬空珠Ｇ
服Ｐスロット２　★★
回避カフ？ＰＡ２

防御値：６７８　スロット：■０□０●１３○０　火：２　水：４
雷：９　氷：１　龍：３

見切り＋４，攻撃力ＵＰ【大】，超高級耳栓，餓狼＋２，業物＋２
火事場力＋２，斬れ味レベル＋１，回避性能＋１，ランナー，はらへり倍加【大】

私のＭＨＦ内の自キャラは女の子なので見た目はＭＨＦ内の見た目は中華少女って感じですね。でもジュノは男なのでおそらく見た目は武闘派青年になっていると思われます。
ＭＨＦ内はスキルがインフレ状態なのでこれ位スキルを発動させて狩りに出かけるハンターは沢山いますね。

ガンナー（女）

アクラＦＸキャップ※　（ＦＸ）　Ｌｖ７　８３
●●●　針穴珠，捕獲珠Ｇ，捕獲珠Ｇ

ラヴィＦＸレジスト　（ＦＸ）　Ｌｖ７　９２
●●●　剛力珠，針穴珠，針穴珠
エスピナＦＸベギアデ　（ＦＸ）　Ｌｖ７　１１９　●
●●　剛力珠，剛力珠，音無珠Ｇ
エクエスＦＸコート　（ＦＸ）　Ｌｖ７　１０９
●●●　剛力珠，剛力珠，剛力珠
エクエスＦＸレギンス　（ＦＸ）　Ｌｖ７　１０９　●
●●　剛力珠，剛力珠，剛力珠
服Ｐスロット２　★★
精密射カフＰＡ１

防御値：５１２　スロット：■０□０●１５〇０　火：９　水：７
雷：１０　氷：６　龍：６

攻撃力ＵＰ【大】，見切り＋３，狙い撃ち，捕獲名人，高級耳栓
反動軽減＋２，火事場力＋２，装填速度＋１，通常弾・連射矢威力ＵＰ，装填数ＵＰ

小説内のジュノのガンナー装備。頭防具のせいか見た目はキザなマフィアぽい感じですね。

【おまけ】
ユーノの現在装備しているリオハートシリーズ。彼女はこのような装飾品を防具にセットしてスキルを発動させ狩猟に赴いている設定です。

ガンナー（女）　Ｌｖ７　４０　●●
リオハートキャップ
万里珠Ｇ，受身珠Ｇ

リオハートレジスト　Ｌｖ７　５９　●
万里珠Ｇ
リオハートガード　Ｌｖ７　５９　●●●
　弾穴珠，　弾穴珠，　弾穴珠
リオハートコート　Ｌｖ７　４８　●●
　反動珠
リオハートレギンス　Ｌｖ７　４８　●●
反動珠

防御値：２５４　スロット：■０□０●１０○０　火：３５　水：－１０　雷：１０　氷：２０　龍：０

広域化＋２，反動軽減＋２，自動マーキング，装填数ＵＰ，精霊の気まぐれ
受け身

【ＭＨＦ内の独自のシステム紹介】

【クエスト受付嬢のマイハウス訪問】

ＭＨＦ内では稀にギルドの看板受付嬢が自身のプレイするキャラのマイハウスに訪れて話しかけてきます。そしてギャルゲの如く二択の選択肢が現れます。良い選択肢を選ぶと良い返事が返ってきますが悪い選択肢をすると悪い返事が返ってきます。好感度とかがあるのなら良い選択肢を選びまくりますが、そんなもの多分無いと思われるのでＭＨＦやってる皆さんは適当な返事を返してるのでは無いでしょうか。これが実装された当初は「ＭＨＦがギャルゲ化してくんじゃないか？」と言う反対意見と「ウヒョー！！キタコレ―！！」の賛成意見があったようですが、今のところギャルゲ化は進まずただマイハウスにたまに遊びに来るってシステムになってます。この

小説でもいつかジュノのマイハウスに受付嬢を登場させる予定です。

【マイギャラリー】

家具屋で買った家具を展示したりすることができる場所、ゲーム内ではとても重要なシステムでマイギャラリーコンテスト的な物に応募していい評価をもらえると剛力珠やら剛体珠といった特殊な装飾品がもらえます。まぁＭＨＦ内のプレイヤーは主に剛力珠目当てでコンテストに応募しますが中にはマイギャラリーを自分好みにレイアウトしている人もいます。筆者のマイギャラリーは【アイルー仮面がそれぞれの武器を掲げ悪に立ち向かう！】的なコンセプトをイメージしたアイルーバー（通称ねこバー）にレイアウトしています。

【マイトレ】

ＨＲ１００を超えると利用できるシステム、マイトレには様々なアイルーが行きかいそこでマイトレポイントと言うポイントを使ってアイルーを雇ったりお店を出したりプーギ―を飼ったりプーギ―を成長させる施設を作ったりすることができます。アイルーの出すお店の売り上げはプレイヤーのちょっとしたおこずかいになってたりもします。後マイトレにはマイトレ管理人と言う三姉妹が居てプレイヤーはその三姉妹から一人選ぶことができその選んだ娘にマイトレポイントと言うポイントを使っていろんな服を上げたりすることができモンスターの素材を渡す事で好感度が上がります。妙なところでこういうギャルゲシステムがあるのがＭＨＦです。

【プーギ―】

モンハン内のマスコットキャラ二番手のブタの様な生物。ＭＨＦ内ではマイトレで飼育する事ができます。飼育だけされていた頃はそんなにＭＨＦ内で日の光浴びる事がなかったプーギ―ですが、シーズンいくつかのアップデートでクエストに連れていくことができるようになったりプーギ―の服にスキルカフを付ける事が出来るよう

になったので今ではＭＨＦ内ではかなり重要ポジションになってます。後レジェンドラスタもプーギーを連れていてそちらはレジェンドプーギーと名称されています。このレジェンドプーギーを連れていくとスキル激運効果が発動されるので素材集めをしたいとおもっている方にとっては
とっても重要視されていると思われます。作者的には「はよオトモアイルー実装せい。」ですね。

【お詫び】

１７節から公開していた話は元はネ実スレに投下されて放置されたお話を自分の書いている小説の話に繋がるように再編集し作りなおしたお話である事を指摘される前にここにお詫び申し上げます。なぜこのような事をしたかと言うと続きが気になって仕方がなかったのが原因であります。一向に続きが投下されないのでじゃあ自分なりにこの話をベースとした話を再編集してしまえと思いこのヨハネス謀反編を書きました。もしネ実スレにこの話を投下していた人物がこの小説を見ていたら。ごめんなさい。

登場人物紹介2とその他（後書き）

毎日大体百人以上の方々にこの小説を読んでもらって大変うれしいです。アクセスも二万を超えてとてもうれしく思います。これからもがんばって書いていくのでご愛読お願い申し上げます。

３０節　つかの間の休息（前書き）

髪の毛が伸びてきたんで今日美容院で髪を切りに行ったんですね、それでヘアカタログ雑誌をなんとなく見てたんですよ。そしたら中学の頃の同級生がなんとその雑誌に二人も載ってたんです。いやーもうテンション上がりまくりですよ。

30節　つかの間の休息

ヨハネスの放った改造変種モンスター騒動の戦いはヨハネスに逃げられたはしたもののシュレイド城での戦いを境にヨハネスの作りだした改造変種モンスターの数は除々に減り事態は収束に向かいつつあった。ヨハネスによって操られていたギルドナイト達もブロード、フラウ、ナターシャ三人の活躍によって催眠は解かれ正気を取り戻した。ヨハネスに操られていた件での悪行等により最初こそはメゼポルタの人々から非難を受けていたギルドナイト達であったが大長老と事情を知るハンター達の説明によって信頼を取り戻し、現在ではメゼポルタで今まで通り勤務にあたっていた。ハンター達の目の前に現れ世界を混沌の渦に巻き込もうとした伝説上のモンスターである黒龍もジュノの活躍によって黒龍は討伐され世界の危機は一時的ではあるが回避された。しかしまだ元凶であるヨハネスが捕まらない限り世界の危機は完全に去った訳ではない。ハンター達はその事を頭の隅に置きつつも戻ってきたの平和な日常を堪能しているのだった。

「ご主人様、今日は仕事や狩りに行かないのかニャ？」
「ん、あぁいいんだよまだ病院から退院したばかりだしそれにギルドからの呼び出しも特にないからな。」

ジュノも事件の後大長老の計らいでギルドナイトに復職しギルドに籍を置きつつ前と同じように暮らしていた、アイリスによる記憶の再構築の時より頭の隅に響く声の様な異音に不安を持ちながら。

「おっ！東方で話題のオトモアイル一についての特集が組まれてるぞサブロー読んでみるか？」
「ニャー、読むにゃー！」

ジュノはサブロー をベットへ手招きし横で一緒に週刊狩り通のオトモアイル ー特集を一緒に読んでいた。

「ご主人様この文はなんて読むのニャ？」

「ん、あぁこれはオトモアイル ーは最初の装備はドングリメイルが一般的であるって書いてあるぞ。」

「ニャー、ありがとニャー。」

サブロー はそういうとまた週刊狩り通の特集を食い入るように見ていた。そういうとマイハウス内にブロードが現れた。

「先輩、体の調子はどうですか？」

「おぉ～ブロードか、どうだ？フラウちゃんはちゃんとレジェンドラスタの仕事をこなしてる？」

「はい、いろんな出来事がありましたがフラウはちゃんと仕事に復帰してがんばってますよ。それより先輩、今日からメゼポルタで東方に由来した祭りを行うようですよ。」

「ん？祭り？そんな急に祭りをやるなんてギルドらしくないな。なんでまたそんな事になったんだ？」

「ええ、なんでも今回の件でギルドはキャラバンとの固執は少し緩和されたじゃないですか、そこでキャラバンが今回の件でギルドとの関係を今より良好な関係に保とうと今回の東方に由来した祭りを提案したんだそうです。それをギルドも今回の件でキャラバンに大きな借りができたということもあるので今回の要望を飲んで共同で祭りを主催することにしたそうですよ。戦いに参加したハンター達の労うという目的も兼ねてだそうですけど。」

「ふーん。んでどんな祭りなんだ?その東方に由来した祭りってのは?」

「ええ、なんでもこの東方に由来した祭りは気候が暖かい時に行われる祭りだそうです。その祭りが行われる際には一時的に様々な店が軒を連ねそして人々はユカタと呼ばれる衣服を着て星に願いを祈るのだそうですよ。」

「へ~東方にそんな祭りが…まあ今はちょうどメゼポルタは温暖期だからちょうどいいな。
ところで、ユカタってのはどうするんだ?それを着なきゃ祭りに参加できないんだろ?それとこのメゼポルタの連中はユカタなんて絶対持ってないぞ。」

「いや、ユカタを着なくても祭りに参加はできます。それとユカタの件に関してはキャラバンの方とメゼポルタの商業区の衣服屋や雑貨屋達が総出で制作されてこのメゼポルタに住む人々の人数分のユカタはもう用意できてるそうですよ。」
「ほんとか…俺がだらだらしてる間にそんな事が進行されてたなんて…」

「まぁ先輩は今回の戦いで傷を負って入院してましたし、ギルドに復職して間もないですから知らないのは仕方がないですよ。それに先輩は今回一番の功労者ですからね、ギルドとキャラバンの両方からぜひ今回の祭りに参加してほしいとのことですよ。」

「そうか~面白そうだし参加してみるか、だらだらしてるのもちょうど飽きたとこだしな。おいサブロー話聞いてただろ。今日は祭りらしいからお前も他の給仕アイル一達と一緒に外に遊びに行っても

いいぞ。」

「ニャ！ホントかニャ！？それじゃあ早速みんなと一緒に街に遊びに行ってくるニャ！ご主人様ありがとニャー！おーいみんニャー・・・・」

そういうと足早にサブローは部屋の隅の給紙アイルー用出入り口へと駆けていった。

「さて、じゃあ俺達も外にでてユカタとやらを手に入れに行くか。ブロード、案内してくれ。」

「はい、たしか商業区の様々な服屋で取り扱っているそうなので案内します。」

そう言うとジュノとブロードはマイハウスを後にしメゼポルタ商業区へと向かっていった。

メゼポルタ　商業地区

商業地区に入ると多くの人々がユカタを着て街を闊歩していた。そしてこの祭りに便乗してか様々な店も特売を行っていた。

「ほほーあれがユカタか～なんか涼しそうで良いな。」

「ええ、これからもこういう異国文化がもっと浸透していくと良いですよね。」

二人は何気ない雑談を交わしながらユカタを取り扱っている商店へ向けて歩いて行った。そうしているうちに目的の商店に着き二人は商店の中に入っていった。

目的に商店は服の他にも雑誌や娯楽品なども取り扱っておりジュノ

は服には目もくれず雑誌の置かれている場所へと歩いて行った。

「お！オトモアイルーの解体新書だってよ！これサブローに買ってこうかな…。」

「先輩はホントにアイルー好きですね・・・何でそんなに好きなんですか？」

「ん～まず一つに小さい時はギルドに所属してるアイルー達に世話になったのもあるかな、でも一番の原因は可愛い事かな。」

「そうですか。でも所構わずアイルーを愛でるのは控えてくださいよ。」

「はいはい。以後気をつけますよ～。じゃあさっそくユカタを買おうかね。」

「じゃあ、俺は仕事が有るのでここで失礼します。」

「えっ！ブロード、お前はユカタ買わないのか？」

「俺は祭りが行われる際に会場の警備をしなくちゃいけないので。ユカタを着て祭りには参加できないんですよ。先輩は俺の分まで祭り楽しんで行ってください。」

「そうか・・・それなら仕方ないな…じゃあ仕事がんばってな。」

「ありがとうございます。それじゃあ失礼します先輩。」

そう言うとブロードは店を後にし店には数名の客とジュノが残された。ジュノはユカタが置いてある場所に移動し様々なユカタを手に取った。

「ん～どれがいいかな～。」

「あっ！！あの時のお兄ちゃん！！」

「ん？」

ジュノがユカタを手に取り品定めをしていると、後ろから声がしたので振り返るとそこには見た事のある小さな男の子が立っていた。

「お兄ちゃん！あの時はありがとう！」

「ん！おっおう！元気か！？（んー見覚えあるけど誰だっけかな～）」

「うん。元気元気！お兄ちゃんの方は？」

「うーん…ぼちぼちだな！」

「こら、カイト！お客様の邪魔をするんじゃありません。」

声のした方向を向くとそこには店の店主らしき女性が立っていた。

「お客様すいません。この子が邪魔しちゃったみたいで。」

「いや、邪魔なんてしてないよな！カイト君！」

「うん！お母さんこの人だよ、前モンスターが街にやって来た時に僕を助けてくれたお兄ちゃんは。」

「えっ、この人が。これは大変だわ！ちょっと待っててくださいね。あなたーカイトの命の恩人の方がお店にきてるわ～」

そう言うと店主らしき女性は店の奥へと走っていった。

「えへへ、ちょっとまっててね。お兄ちゃん」

「あぁ、わかった。（思いだした。この子は前の古龍襲撃戦の時に助けた子共だ！）」

しばらくその場で待っているとカイトの母親が店の奥から父親と思しき男性と共に出て来きジュノの目の前に並びそして父親と思しき男性が口を開いた。

「貴方がカイトをお救いになってくれた方ですか。私はカイトの父親のジェイドそして横に居るのは妻のエミリアです。その節は大変ありがとうございました。」
「お兄ちゃん、ありがとう！」
そう言うと夫妻はカイトと共に深々と頭を下げた。

「いやいや、当然の事をしたまでですよ。頭を上げてください。」
「このご恩は一生忘れません。息子を救っていただいたお礼をさせてもらいたいのですが…そうだ店内にある物を好きなだけ差し上げます。」
「えっ！それはちょっと申し訳ないですよ～それにお礼なんて良いですって。」
「いえいえ、なにかお礼をさせてもらわないと私の気が済みません！」
「ん～そこまで言うなら・・・」
「お兄ちゃんユカタが欲しいんだよね？お父さん、お兄ちゃんにこのユカタを上げようよ。」
「ん、そうなのかカイト。ではそのユカタを差し上げます。」
そう言うとジェイドはジュノに店で取り扱っているユカタを差し出した。

「じゃあ御厚意に甘えさせてもらってそのユカタもらって行きますね。それじゃあ俺はこれで。」
そう言いユカタを受け取るとジュノは店から出ようとすると「待ってください」と呼びとめられ振り返った。

「私とした事が貴方様お名前をお伺いするのを忘れていました。お名前をお教えてください。」
「あぁ、ジュノです。」
「ジュノさんですか、本日はご来店ありがとうございました。」
「またね～ジュノお兄ちゃん！」

ジュノは3人に見送られながら店を後にした。

「ん～なんかタダでユカタを手に入れてしまった・・・とりあえずマイハウスに戻ってユカタに着替えて祭り会場に行くとするか。」

ジュノはマイハウスに戻るために商業区を抜け狩人区に向かった。マイハウスに戻りユカタに着替えると日はすでに傾き夕暮れに差し掛かっていた。

「しまった。ブロードに祭り会場の場所を聞くの忘れた・・・・まあ大規模な祭りっぽいし外に出ればわかるか、まあわかんなかったら人に聞けばいいか。」

そう言うとジュノはマイハウスを後にし祭り会場へと向かった。

メゼポルタ　七夕祭り会場前

「・・・こりゃあすげぇ人だな・・・・」

ジュノは七夕会場へ行くためメゼポルタからパローネキャラバンへ向かう通りを歩いていた。その通り道の両編には即席の露店が立ち並んでおり人々はその露店で食事をしたり買い物や射的をして遊んでいる人々が多数いた。

「うーん…人がごった返していてなかなか進めない・・・まぁ仕方ないか、祭りなんて言ったら今まで一般の人には無縁のハンター達だけの狩人祭くらいしかなかったもんな。そりゃ一般人も参加となるとこれだけの人が集まって当然か。」

そう思いつつジュノは前へとゆっくり進んで行った。すると進んでいる途中で前方で何やら人の波が何かを避けて二手に分かれている事に気が流れに任せて進むと一匹の見覚えのあるアイルーがボロボロになって道の真ん中に倒れていた。

「このアイルーは・・・サブロー・・・？おい、大丈夫か？」

仰向けに倒れているアイルーの体に着いている泥をはたき落とし体を抱き上げ数回揺さぶると力なく倒れていた尻尾がピンと立ちサブローはゆっくりと顔を上げた。

「ん・・・ニャ！御主人様！！どうしてここに！」
「お前と同じように祭りを楽しみに来たんだよ。お前こそ何で泥まみれになって倒れてたんだ？一緒に遊びに行った他の皆は？」

「それはですニャ、僕達途中までは一緒だったんですニャ。でもこの道に入った途端に皆と逸れてしまったのですニャ、それで僕は皆を探しながら進んで行ったんですが、途中で転んで後は色んなヒトに踏みつけられまくってこのざまですニャ。」
「・・・まぁ、お前小さいしこの人だかりだしな…よし。」

ジュノは一息つくとサブローを持ち上げ肩に乗せた。

「これで大丈夫だろ～じゃあ会場へ行ってみるか。お前の友達もそこに居るかもしれないしな。」

「ニャ！！ありがとニャー」

ジュノはサブローを肩に乗せゆっくりと会場までの道のりを歩いて行った。

３０節　つかの間の休息（後書き）

私は中学の頃にバンドを組んでたんですけどその時のドラム担当だった子は今テレビに出たり中国で行われた舞台公演でドラム叩いてたり凄い事になってるんですよ～。ＹＯＵＴＵＢＥでタツルと検索するとその子の活躍が見れるので皆さん気が向いたら検索して見てやってください。彼も喜びますので。

31節　メゼポルタに響く祭囃子（前書き）

高校時代マックで「お札は逆さに入れるとお金持ちになる」って事を友達に力説してたら店員さんに笑われました。良い思い出です。

31節　メゼポルタに響く祭囃子

メゼポルタ　キャラバン区　七夕祭り会場

祭り会場に着くと離れ離れになっていたサブローの仲間がサブローの事を探しており会場内をうろうろしていた。それを見つけるとサブローは肩から飛び降り仲間の元へと走っていった。

「ニャー！！ご主人様ありがとニャー！！」
「おー今度は離れるなよ～」

ジュノはサブローに手を振ると七夕会場を一回りするべく辺りを散策する事にした、辺りを散策してみると会場の中心にやぐらが立ちその一番上に胸にさらしを巻いてジュノの着ているユカタをさらに簡素したような衣服を身に纏い太鼓を叩いているキエルの姿があった。

「（なんだ、あの格好は・・・うーむ・・・・けしからん・・・・）」
「おっ！ジュノさんじゃないっスか！」

声のした方向を振り返るとそこにはキエルと同じようなユカタを簡素にした服を身に纏い食材の入った箱を抱えているオリオールの姿があった。

「お～オリオールじゃないか。病室であった以来だな。」
「そうっスね、いや～でも祭りに着てくれて俺嬉しいッスよ。ジュノさんの事だからこういう祭りごとはめんどくさいからパスすると俺思ってましたよ。」

「まぁ普通の祭りだったらパスしてたな～でも今回の祭りってなんか東方由来の祭りって聞いたからさ、どんなもんかちょっと興味湧いたから参加してみた訳よ。そうだ！お前とキエルが着てる服のことなんだけど俺の着てるユカタとはなんだかちょっとデザインが違うけどそれも東方由来の服なのか？」

「ああ、これっスか？これはハッピって言う服らしいですよ。これも祭り際に着られる服だそうで、今回はこの祭りを取り仕切る立場の者達が着る事になって要るッス。」

そう言うとオリオールは腕をまくり力こぶ魅せるポーズをした。彼の着ているハッピはまさに彼自身の筋骨隆々な体を引き立てていた。

「まぁ。祭り楽しんでってくださいよ。俺はこの後仕事があるんでこれで失礼しますね。」
「おー頑張ってな～。」

そう言うとオリオールは荷物抱えて露店の方へと歩いて行った。それと同時にジュノの腹の虫が急に泣き出した。

「そう言えば昼からなんも食べてないな・・・・とりあえず、露店に出てる飯を適当に食うか。」

ジュノは会場に軒を連ねている露店へと歩き出しだ。露店が立ち並ぶ区域に入るととても大きなこんがり肉を売っている露店に人の列が出来ているを見つけたのでジュノはその露店に並ぶ事にした。

「はい。いらっしゃい！！なんだお兄さん一人ですか？さみしいなぁ…ってジュノさんじゃないですか。」

「ほっといてくれよ・・・ネリスちゃん・・・とりあえずこんがり肉二つ頂戴。」
「はいはいー。（なんだ来てるんだったら私が一緒に祭り会場を回ってあげたのにチキショー仕事入れるんじゃなかった）」
「・・・どした？お代は払ったんだから早くこんがり肉頂戴よ。」
「あっ、はい。どうぞ～ジュノさん、祭り楽しんでってくださいね～」
「んー。ありがとね～ネリスちゃんも仕事がんばって。」

ジュノはこんがり肉にかぶりつきながら露店から去りキャラバンの迎賓館方面へと歩いて行った。

「しっかし・・・良く回りを見ると皆連れと一緒に歩いてるな。というかカップル率がなんかやけに多い・・・・一人で歩いてるのは俺だけじゃないか。これ・・・・」

ジュノはふと朝ブロードが言っていた事を思い出した。

【星に願いを祈るのだそうですよ。】

「・・・なるほど、だからカップル率が多いのか・・・？二人の愛が続きますようにってか・・・」

迎賓館前のラウンジにたどり着くとジュノはそこで座り込みながら残りのこんがり肉を食べながらキャラバン区域全体を眺めた。

「まぁ平和なのはいいことだよな。ここ最近物騒事だらけだったしな。にしても・・・」

ふと空を見上げると月が尊厳なる輝きを放ちながら夜空を照らしその周りを様々な星達が月に負けじと輝きを放っている。

「こんな状況になるんだったら誰か誘えば良かった。ユーノちゃんとか・・・あっユーノちゃんはマルク君が狙ってるんだっけなら誘わない方がいいな。他の子は・・・ん・・・良く考えれば俺の知ってる女の子って皆ギルド関係やキャラバン関係の子ばっかだな…だとすると皆この祭りの運営関係で忙しいな…初めから勝負はついてったって事か。」

手にしたこんがり肉に噛り付きながら遠くを眺める。遠くには幸せそうに夜空の星達に願い事をする男女たちが多くみられた。

「・・・まぁいいか・・・そろそろ帰るか。ん?」

立ちあがりやぐら付近に目をやるとそこには銀色の髪の女性が男性と一緒に三人のあまり人相の良くない男達に絡まれていた。

「あれは・・・ナターシャか?お隣さんは彼氏かなにかかな?」

すでに二人の辺りに輪を作るように野次馬が出来ていた、その野次馬の中にジュノは紛れ込み良く見えるところで二人と絡んでいる男達を見ていた。どういう状況か隣に居た男に聞いてみるとどうやら一方的な言いがかりで二人に絡んでいるとの事だった。

「(まぁ…ナターシャはレジェンドラスタだし連れの男性ハンターさんも強そうだからこのまま観戦してるかな。)」

そんな事を考えているうちにナターシャの連れの男性ハンターは3

人の男達に袋叩きにされ残るはナターシャの身となってしまった。

「（えぇ～まぁナターシャなら何とか・・）」

ふとナターシャに手をかける男たちの手の甲を見てみるとヘビを基調とした刺青をしている事がわかった。

「（ん・・・あれはマーシレスの連中か。これはちょっとまずいな）」

ジュノはそう思いナターシャを救出すべく前へ進み男達の前へと身を乗り出した。

「はいはい、そこまでだ。お前達のやった事は全て見させてもらった。これ以上の暴挙に出るならギルドナイトに連行しちゃうよ。」

「ジュ・・・ジュノ・・・」

「よっ、ナターシャ。らしくないないつものキーキー声はどうした？」

「おい！俺達がマーシレスの者だと知って邪魔すんのか？」

そう言うと取り巻きの一人の顔に入れ墨をした男がこれでもかとばかり手の甲の刺青をジュノの眼前へと突き出した。

「ハッハ―！！カッコ良い刺青じゃないか！でも・・・」

ジュノは瞬時に相手の手の甲を手に取り手首を捻り相手の背後へと回り相手の背中を押しだした。

「イダダダ！！！離せ！！！」

手首を捻られた男は情けなく声を上げ始めた。しかしそれでもジュノは手を緩める事は無かった。

「今日はせっかくのお祭りなんだそれもただのお祭りじゃない民衆の人達も参加してる貴重なお祭りなんだ。そういった場面でもめ事をするのは良くないと思うね。」

ジュノが男の手首を捻り上げていると誰かが通報したのか会場を警備していたギルドナイト達がジュノの元へとやって来た。

「どいてください、ギルドナイトです。貴方達ですが喧嘩騒ぎを起こしているのは？って先輩じゃないですか。どういうことですかこれは！？」

「おー遅かったなブロード、こいつら動機は良くわからねえがそこに倒れてるハンターさんを袋叩きにしてたから。俺が現行犯で取り押さえといた。俺が今縛ってるこいつはその内の一人残りは・・・」

目配せした先に見えた物それは騒ぎを聞きつけて駆けつけたオリオールが残りの二人の襟を掴み逃げられぬように持ち上げている姿だった。

「あそこの肉ダルマが抱えてる二人だな。」

「わかりました。とりあえず皆さん簡易屯所の方まで来てもらえますか？そこで色々と事情聴取しますので。」

そうブロードが言うとジュノ達は簡易屯所の方まで歩いて行った。

メゼポルタ　キャラバン区　七夕会場ラウンジ

屯所に行ったジュノは軽いマーシレスの3人が行った悪行の説明をブロードに済まし七夕会場のラウンジでポルタジュースを頼みラウンジの手すりに持たれかけながらそれを飲み喉を潤していた。

「たまにはジュースもいいもんだな～」

「そうね。」

隣にはナターシャがポルタジュースを片手に持ちながらラウンジの手すりにもたれかかっている、ナターシャもギルドナイトにある程度事情を話し、連れの男性ハンターの無事を確認して一緒に付いてきたのである。二人はラウンジの外に広がる海を眺めていた。

「いやぁでも、お前の彼氏さん大したこと無くてよかったな！」

「彼氏？もしかしてさっき一緒に居たハンターさんのこと？あの人は雇い主よ、どうしても私と一緒に祭りに行きたいって言うから仕方がなく付いて行っただけ。まぁ美しい私と一緒に歩きたいって気持ちは分からなくないわ。オホホ！」

「あっそう、でもあれだな。」

ジュノは手に持っていたコップを手すりの上に置きナターシャに振りかえりじっとナターシャを見つめた。

「な…なに？」

「髪を結ってるせいもあるのか普段と雰囲気が違うな。ユカタも着ているせいもあるのか最初遠くから見た時誰だか分らなかったわ。」

「そうね、いつもは髪下ろしてるからわからなくても当然かもね。」

しばらく沈黙が続くと会場から数発の花火が打ち上げられた、その花火の形は様々でアイルーの形や肉の形を模したもの等様々だった。

「綺麗ね・・・・」

「プッ・・・ックック、君の方が綺麗アハハハハ！！！」

「何一人で盛り上がってのよ？」

「いや・・・ックック、まえ小説読んだ時にキザな主人公がヒロインに【花火より君の方が綺麗さ】って言ってたんだけど実際にこれ言ってみると恥ずかしいし自分のキザ加減に笑いがフッ・・・・ハハハハハハ！！！」

「はぁ…人が感傷に浸ってるのに雰囲気ぶち壊しよ。まったく・・・」

しばらく花火を見つめる二人するとふとジュノが口を開いた。

「ありがとうな、色々あった時にいつもそばにいてくれて。」

「・・・何よ急に真剣な表情しちゃって。さっき笑いころげてた時に頭のネジでも吹き飛んだの？」

「いや、いつもお礼しそこなってたからさ。しかも最近色々あって忙しかったし良い機会だと思って。」

「そうね。いつも無償で貴方の看病してきたんだからお礼の一つもらって当然よね。」

またしばらく夜空の花火を見つめる二人、その間沈黙は続いたが嫌な沈黙ではなかったむしろ心地よい沈黙とも言えようか。その沈黙を破ったのはナターシャであった。

「さてっと、そろそろ私帰るわ。明日も契約者のハンターさんとの

狩りが控えてるし。」
「そうか。じゃあお前の大豪邸まで送るよ。」

ジュノはナターシャに向かって手を差し伸べた。

「一人で十分よって言いたいところだけど、さっき見たいのにまた絡まれたら困るしそうさせてもらうわ。あんたとなら絡まれても何とかなるし。」
「大豪邸まできちんとエスコートしますよ。お譲様♪」
「言ったからにはきちんとエスコートしなさいよ。」

そう言うとナターシャはジュノの手を取り横に並びそしてジュノと共に七夕会場を後にした。このまま何も起こらず平穏な日々を送れるように祈りながら。

31節　メゼポルタに響く祭囃子（後書き）

川崎市だかどこか忘れましたけど、藤子F藤夫先生のミュージアムができたそうですね。そこにはドラえもんのオブジェがきっとたくさんあるんだろうな～。

32節　緊急要請（前書き）

私のパソコンは自作ＰＣなんです。普通の人が自作ＰＣって聞くと「良く作れるな～すげぇ！！」って思うかもしれないですけど実はプラモデルを作るくらい簡単なんですよ。

32節　緊急要請

「うぅむ・・・・」

本格的にギルドナイトに復職したジュノは手始めに前回のヨハネスの反乱事件についての詳しい報告書を書いていた。ヨハネスに命じられて様々なモンスターの紅玉を集めていた事やシュレイド城で戦った黒龍らしきモンスターのこと、黒龍の件に関しては自身の能力の事に触れてしまう可能性がかなり高いので能力の事に触れずに書くのに苦労していた。

「ご主人様、ポルタソーダですニャ。」
「んー横に置いといて。」
「そんなに難しい書類なのですニャ？」
「いや、難しくは無いんだけど…まぁ色々あるのさ。」
「ニャー、僕に出来る事があれば何でも言って欲しいニャ！！！」
「・・・じゃあそこに並べてある元気ドリンコ片付けといて。」
「はいニャ！！！」

次々に手に持っていたおぼんに元気ドリンコの空を置いていくサブローそして全ての元気ドリンコをおぼんに置き終えると厨房の方へと下がっていった。厨房の方へと言った瞬間サブローの鳴き声と元気ドリンコが床に落ちた音が聞こえたが気に留めずにジュノは報告書をまとめていった。

「よし！終り！じゃあサブローちょっとギルドの方に報告書提出してくるから。留守番頼んだよ～」
「ハイですニャ！！」

サブローに戸締りを任せるとジュノはギルド本部に向かって歩き出した。ギルド本部に到着すると同僚のエビィーが書類の山と格闘しているのを目にしたのでギルド内にあるショップで元気ドリンコを買いエビィーの元へと向かった。

「よっ！！」

「ひゃ！冷た！！なんだジュノさんですか。驚かさないでよ」

「ハハっ！なんか煮詰まってるみたいだからさ。これ差し入れ。」

「おぉ！！キンキンに冷えた元気ドリンコとか最高の差し入れですよ！」

そう言うとエビィーはジュノから元気ドリンコを受け取り蓋を開け一気に飲み干した。

「ふぅー少しすっきりしました。」

「そっか、そりゃ良かった。んでなに？この書類の山は？」

「あぁこれですか。ギルドの受付をクビになってレジェンドラスタになった子の事知ってますジュノさん？」

「あぁ、チルカちゃんだっけ？」

「そう、そのチルカって子のメゼポルタでのハンター登録とレジェンドラスタ登録を先輩に依託されちゃって。それで先輩が処理するはずだった生態調査の報告書のミスもなぜかこっちに回ってきて私が代わりに処理してるんです。まったくとんだ迷惑ですよ。それに新しいクエスト依頼も舞い込んでくるし大変ですよもう。」

「そんなに大変ならシン君に手伝わせればいいじゃない。」

「シンにも手伝わせてますよ。ほらあそこに」

エビィーの指差す方向を見るともうひとつ書類の山と血眼になりな

がら無言で格闘するシンの姿があったその姿はとても近寄りがたい雰囲気を周りに垂れ流していた。

「・・・近づいたら命が危ないなあれは・・・」

「アハハ、そうね二日前から寝ずにやってるみたいだし。」

そんな談笑をエビィーと交わしていると伝書鳥が窓から侵入しエビィーの机の上に止まった。

「あら、緊急依頼だわ。どれどれ～」

エビィーは伝書鳥の脚にくくり付けられている紙を取り外すとすぐに解読に入った。

「何々・・・アルティ山でモンスター被害が頻発してるので応援求む・・・か。」

「たしかアルティ山って前に古龍が出たとかで騒いでたよな。」

「ええ、でも結局書士隊の人達が向かった際に見つけた物はクシャルダオラの脱皮した抜けがらのみだったわ。それでこの事件は解決したんだけど。その後山に隣接する村がモンスターに襲われる事件が発生したみたいなのよ。ホントは直ぐにでもハンターを派遣したかったんだけど…」

「この前のヨハネスのゴタゴタでそれどころじゃ無かったと。」

「そうなんだよね～ウーン。」

長い間書類と格闘していたので軽く伸びをするエビィー。その際に肩や首の骨の関節をコキコキと鳴らしていた。

「あっその案件だけどジュノさん引き受けてくれる?なんか新種のモンスターだったら困るし」
「ん~まぁ良いけど。最近報告書ばっか書いてたし。久々に遠出して羽を伸ばすかな。」

「よかった、じゃあその案件の処理ジュノさんやっといて、ちゃんとクエスト受注票書いたらユニスちゃんかヒルデちゃんとかに渡してね。後一般のハンターの募集募って行くんですよ。」
「えっなんで?これ位ひとりで・・・」

「駄目です。最近ハンター同士の交流が少なくて問題になってるんですから。最低でももう一人募ってクエストに出発してください良いですね?ジュノさんも高ランクハンターの一人なんですから見本になってもらわないと。いいですね!」

「はい・・・」

ジュノは机に座るとさっそくクエスト受注票の作成に取り掛かり羽根ペンを走らせた。

「ねぇねぇシン君ココちょっとどう描くか分からな・・・」

「あ゛?」
「なんでもないです・・・・」

メゼポルタ　大衆酒場
クエスト受注票を何とか書き終えたジュノはメゼポルタの大衆酒場に来ていた。書き終えた受注票をユニスに渡すと黙って頷きクエストボードにジュノの参加しているクエスト受注票を張りだした。

「おっし。後はクエスト参加者を待つだけだな！！」

クエストボードにクエストを張ってから数時間たとうとしていた。
しかし一向に誰も参加する気配を見せない、ジュノのテーブルにはポルタビールが注がれたコップがすでに５つ並んでいた。

「エビィーの行ってた通りホントにハンター同士の交流が希薄になってきてんだな。」
「あはは、人が来ないのはそれだけじゃないかもよ。」

声のした方向に振り向くとヒルデとユニスが立っていた。

「ん？どういうことだよ？」
「・・・ここの報酬の項目・・・見てみて・・・。」

ユニスの指差す項目を見てみるとそこには報酬金２００Ｚとアオキノコ５個と薬草７個と書かれてあった。

「ん・・・あれ？書き間違えたかな…」
「やっぱり～。私もクエストボード見た時書き間違えじゃないかな～って思ったんだよね～。」
「・・・書き間違いなら・・・早く直した方が良い・・」
「じゃあここで書きなおすか、ちょうどここに今回のクエスト内容の事が書かれた原本があるし。」
「うんうん、そうしなよ！私羽根ペン持ってくるね」

そう言うとヒルデは酒場のカウンターへ小走りして向かっていった。

「さて原本の報酬の方はどうなってるのかなっと・・・あれ？」
「・・・どうしたのジュノ？」

「ユニスちゃん、ちょっとこの報酬の欄を読んでみてくれ。」
「？」
首をかしげながらユニスはジュノから原本を渡され指示された所を読みあげた。
「・・・報酬金２００Ｚ、アオキノコ５個、薬草７個・・・」
「・・・」
「おまたせ～羽根ペン持って来たよ～ってあれ？なんかさっきより暗いよ。どしたの？」
「・・・まあこれの報酬の欄の所読んでみろよ。」
そう言うとジュノはユニスから原本を取り上げヒルデに渡した。
「ん？なになに・・・む！！」
「・・・俺の書き間違いじゃ無かったって事だな。どうしようか・・・このまま一人で行ってもいいんだけどエビィーに最低でも二人で行けって言われてるしな…」
３人で頭を悩ませると天からの救いか一人の女性が声をかけて来た。
「ジュノさんお久しぶりです！ヒルデさんとユニスさんもこんにちは。皆さんそろって何してるんですか？」
声をかけて来た人物それはユーノだった。その姿は数か月前のヨハネス黒龍騒動の時よりもさらに頼もしくなっていた。
「あぁ、ユーノちゃんか。いやね今俺クエスト受注をギルドから頼まれてるんだけど、その報酬がしょぼくてなかなか人が集まらなく

てね。まあそこまで難しい内容じゃないから一人で行きたいんだけど上の方から最低でももう一人連れて出発するようにって言われてて頭を悩ませてる訳。」
「へ～ちょっとクエスト内容見せてもらって良いですか？」
そう言うとユーノはヒルデからクエスト票を受け取り内容を読み始めた。
「アハハ、これ酷いですね特に報酬が。」
「だろう、それでちょっと困ってる訳よ。まあ最悪このまま来なかったら俺の財布からちょろっと金額上乗せして張ってやろうかとか・・・」
「私、このクエスト参加してもいいですよ！」
「え？ホントに？こんなしょぼい報酬なのに受けてくれるの？」
「ええ、アルティ山って景色が綺麗で有名じゃないですか。一度行ってみたかったんですよね。」
「ホントか！いやぁ良かった良かった。それじゃあさっそくこの参加欄にサインしてもらえる？」
そう言うとジュノはユーノに羽根ペンを渡しクエスト参加欄にユーノの名前を希求するように促した。
「よかったね～ジュノさん参加してくれる人が居て。私も一安心だよ。」
「私も・・・安心・・・した。」
「おぅ。二人ともありがとね一緒に悩んでくれて通常業務に戻っていいよ。」
「うん、そうするよ！じゃあ準備が出来たらユニスに言って。私は

他の仕事してるからさ。」

そう言うとヒルデはクエストカウンターの奥へと引っ込んでしまった。横にはユニスがユーノのサインが終わるのをじっと待っている。

「・・よっし！できた！！はい、ユニスさん処理の方お願いします。」

「わかった・・・ちょっと待ってて・・」

ユニスはクエスト受注書を受け取ると気球船の手筈をするためにクエストカウンターの奥へと姿を消した。

「そう言えばマルク君とカノンちゃんは元気にしてる？」

「ええ、二人とも元気ですよ。今はポッケ村に里帰りしてますけど。」

「ポッケ村か～確かあそこは狩りの御供にアイルーがついて来るんだよな。良いな～オトモアイルー、メゼポルタもオトモアイルー制度実装すればいいのに…」

「フフ、ジュノさんってホントアイルーの事が好きなんですね。」

たわいのない雑談をしているとユニスがクエストカウンターの奥から出てき気球の手筈が整った事を知らせた。

「・・・準備が出来ました。気球船ドック2番に向かってください。それじゃ頑張って二人とも」

「おぉ！」

「頑張ります！」

ジュノとユーノは今回乗る気球船が停泊している気球船ドックへと向かった。

32節　緊急要請（後書き）

今日は暑かったですね～外へ出る用事があったんで外へ出てたんですけどもう暑さでヒ―ヒ―言いながら歩きましたね。

33節　雪山の村　マタメ村（前書き）

十代後半頃はV系いわゆるヴィジュアル系ってやつですね。そんな服を着て街中歩いたりライブハウスでライブしたりしましたが。今思うと【よくそんな服買ったり着たりその服でよく街中を歩いたな。】って思いますね。

33節　雪山の村　マタメ村

気球船内　操舵室

気球船へ乗り込みしばらく控室でのんびりしていると船が通常より良く揺れるのでジュノは操舵室へと向かい扉を開くとダルカン船長の右腕であるロイドが気球船の操舵を握っていた。ロイドは緊張しているのか顔が強張って心ここにあらずという状態であった。緊張をほぐしてやろうと思いジュノはロイドに声をかける。

「おい！」

「・・・・あぁジュノさんかどうも今回この気球船を操舵するロイドです。よろしく・・・」

「ダルカンのおっさんはどうした？いつも俺の任務の時はだいたいおっさんが操舵してたぞ。今日はなんでお前なんだ？」

「ダルカン師匠は休暇中なので今回は俺が操舵してるんですよ、なんでも初孫が生まれたらしくて。それと「お前も俺の元で5年下積みをしてきたんだからそろそろ独り立ちの時だ」と言われまして・・・」

「へ～んで今日がもしやハンターを乗せての始めての気球船操舵と。」

「・・・ええ。そうなんですよ。無人での操舵訓練はちゃんとしてきたんで大丈夫だと思うんですけど、やはり人を乗せて飛ぶとなるとなんか緊張してしまって。」

「まぁあんま気にすんな、気にしすぎると余計失敗するぞ。気楽にやんな、じゃあこの操舵補助アイルー借りてくからな～」

そう言うとジュノは気球船の計器をチェックしていたアイルーを抱え操舵室を後にしようとした。

「あっ、はい・・・・ってちょっと！駄目ですよ！！運行に支障が出ます！！」

「ハッハー冗談、冗談。ほれロイド君をしっかり補助してやれよ。えっと名前は・・・なんていうのかな？ネコちゃん？」

「ライトですニャ！」

「そっかライトか、ロイド君の事をちゃんと補佐してやれよ。じゃあ控室に行ってるわ。」

そう言うとジュノは操舵室を後にし控室へと向かった。向かう途中アイルーが揺れで転げまわっていたのでそれを助け上げちゃんと見送ったところで控室に入るとユーノが入念にライトボウガンの作動点検をしていた。

気球船　ハンター控室

「おっ関心関心、ちゃんと武器の作動点検してるな。」

「はい、ライトボウガンは狩猟中に弾詰まり起こしたら命に関わりますからね。それに仲間にも迷惑がかかるし。」

ユーノはライトボウガンのロングバレルを取り外すと羽毛が沢山周りに着いたロッドをバレルの中に入れ中の汚れをふき取りさらにボウガン本体のバレルの中にも同じように掃除用のロッドを入れ汚れをふき取って行った。

「・・・良く見るとそのライトボウガン、バール＝ダオラじゃないかユーノちゃんいつの間にＨＲ１００超えてたの？しかもバール＝ダオラだなんて作るための費用や素材が大変なんだぞ。」

「ＨＲはそうですね前に一緒に銀レウスを狩りに行った時にはもうＨＲ９０は超えてましたからね１００になったのはそのすぐだったような…まぁ今はこの子作るのに必死になって素材集めしたのとライトボウガン用の専用装備作るのに素材集めしたせいでもうＨＲ２００超えてますけど。」

ユーノは少し笑いながらジュノの質問に答えそしてまた武器の点検を始めた。

「そっか・・・でもクシャルダオラの宝玉なんか手に入れるのとってもめんどかったんじゃない？あと汎用素材とか。」

「クシャの宝玉と古龍汎用素材はこの前の街を襲った特異クシャ群の報酬で貰ったんですよ。私これでもかなりの数のクシャをあの時倒したんですから。」

ユーノは得意げな顔をしてジュノの顔をみて、今度は持ち込んだアイテムの確認を行い始めた。ジュノもそれを見て自身の持ち込んだ武器の動作確認を行った。今回持ち込んだ武器は水双剣、怒髪双乱【挽歌】である。切味が優秀でハンマーとレンチのような形をしているがちゃんと物を切り裂く事が出来る双剣である。

「しっかしまぁ、あれだね。」

「どうしました？」

持ち込みのアイテムの確認を終え専門書を読んでいるユーノに話しかける。

「こうやってユーノちゃんと二人で狩猟に行くと初めてあった頃を思い出すよ。あの時はまだ右も左もわからない小さくてか弱そうな女の子だったのに、いつの間にか背も伸びてＨＲも１００超えて凄腕ハンターと来た時間てのは怖いもんだねぇ。」

「フフ、頑張ったんですよ。はやく貴方の背中を守れるくらい強くなろうと。」

「ハッハ―嬉しい事言ってくれるじゃない。えらいえらい！」

ジュノはアイテムの確認を終えるとユーノの近くに行き頭を撫でた。ユーノは撫でられている時目を閉じ悦に浸っていた。

「これだと今回の任務は楽に終われそうだな。期待してるよ～凄腕ハンターユーノちゃん」

「はい！後方支援はドンとまかせてください。」

しばらく談笑を交わしていると控室のドアがノックされ乗組員のアイルーが部屋に入って来た。

「まもなくマタメ村周辺に付きますので準備してくださいニャ。下船してからは竜車に乗って村まで行ってもらう事になりますニャ！」

「はいはい、お勤め御苦労さま。はいコレご褒美のマタタビ皆にばれない様に食べるんだぞ。」

「ニャー！！ハンターさん太っ腹ニャ！！ありがとニャ！！！」

乗組員のアイルーはあまりの嬉しさか踊りながら控室を後にした。
残された二人は下船の為の身支度をし始めた。

「私、竜車って初めて乗るんですよ。見た事はあるんですけどね乗り心地はどんな感じなんですか？」

「えっ乗ったこと無いの竜車？まぁ近年は気球船技術が発達したから仕方がないか。えっとね道によるけど長時間乗ってると尻が痛くなるかな。」

「えっそうなんですか・・・ちょっと不安になってきましたよ・・・」

「まぁ下にクッションか毛布を敷いておくといいかもね。さあ部屋を出ますか。」

「はい。」

二人は控室を後にし下船用のハッチへと歩いて行った。ハッチに向かう際に先ほどマタタビを上げたアイルーがウニャウニャ良いながら床を転げまわっていた。

マタメ村　周辺付近

ハッチから下船すると朝の日差しが指し辺りが薄明るくなっていた。気球船のすぐ近くには二体のアプトノスが荷車に繋がれていた一つはキャンプ用の様々な用品が入った箱とアイルーが乗り込む用の竜車、そしてもう一つはハンター達が乗る竜車だ。幸いにもハンター達が乗る竜車の方にはクッションと毛布が付いていたのでユーノはほっとした顔をしていた。

「マタメ村にはここから半日竜車にのって付く距離です。一応捜査

期間は5日と設けられますがそれ以上伸びる時または援軍が必要な時はこの伝書鳥を使ってメゼポルタの方へ連絡をしてください。それではお気をつけて。」

乗組員の男がそうジュノとユーノに伝えると気球船の方へと去って行った。二人はさっそく竜車に乗り込みマタメ村へと出発した。竜車に揺られる事数時間少し眠たくなりうたた寝をしていると急に竜車が止まり荷車の角に盛大に頭をぶつけた。

「ってぇ・・・どうした?もう着いたのか?」

アプトノスを騎手しているアイルーに尋ねるとどうも目的地に着いたと言う訳ではないらしい。

「マタメ村の人が出迎えに来てくれたみたいだニャ。ちょっと挨拶してくるニャー。」

そう言うと騎手アイルーは荷車から飛び降りマタメ村の住人の元へと駆けていった。

「なんか、マタメ村の人の服って紋様が付いててておしゃれですね。新大陸地方の村のユクモ村の服になんとなく似てるかな?」

「ん?あぁ言われてみるとそうだな。」

ユーノとそんなたわいもない話をしていると騎手アイルーとマタメ村住民と言う中年男性がこちらへやってきて二人に挨拶をし始めた。

「わざわざ、遠いところからありがとうございます。わたくしマタメ村の副村長をしておりますユクと申します。貴方達が今回メゼポルタハンターギルドからの派遣者ですか?」

「はい！ユーノと言います！事件解決に全力を尽くします！！」
「はっは！元気なお嬢さんだ。んでそちらの方は？」
「あっこの人はですね。私のし・・・」
「ジュノです。これでもギルドナイトです。ユーノちゃんに負けないように頑張ります。」
「はっは！！よろしく！！」

そう言うとユクは手を差し伸べ握手を交わした。力が強いのか少し痛かった。

「この先の道は遠回りになっております。近道をお教えしますので付いて来てください。」

そう言うとユクは先導をきって歩き始めた。それに続き竜車も動き出しまた規則的な揺れをし始めた。

「マタメ村、どんなことかわくわくしますね！！」
「ユーノちゃん、旅行気分も対外にしておきなよ。付いてきてもらって言うのもなんだけどさ、俺らは任務でマタメ村に向かってるんだから。」
「あっ、すいません・・・・」
「うむ、わかればよし。ふぁ・・じゃあ俺はまた寝るから着いたら起こしてくれぇ」

そう言うとジュノはまた眠りだした。今度は竜車が大幅に揺れても彼は起きる事は無かった。ユクの近道への先導もあってか昼過ぎにはマタメ村に着く事が出来た。

「ふぁああ・・・・よく寝た・・・・」
「あんなに揺れてたのによく寝れましたね。私だったら絶対寝れな

いですよ。」

「そか～、まぁ気球船が普及するまでずっと竜車で狩猟地に向かってたからな。なれってヤツ？ともかく荷物を今回止まる宿場に運んで依頼主に会おう。」

ユーノとジュノは荷車内にある荷物をまとめ宿場へと向かった。宿場は民家を客用に改装した感じであった。窓の位置はアルティ雪山が一望できる位置に取り付けられていた、ユーノは窓を開けて歓喜していた。そしてさらにユーノを歓喜させる事が待っていた、なんとマタメ村には温泉が湧いていてそれを利用出来るとの事だった。それを聞いたユーノはさらに歓喜したモンスターに例えるならイャンガルルガ位である。しかしその喜びは後に消えることとなる。

「また出たぞぉ！！！！！魔獣の仕業だぁー！！！！！」

村中に声が響き渡った。とっさにジュノとユーノは装備を整え宿場から飛び出した、そして村人が集まっている民家へと向かった。ジュノは人を押しのけながら民家の入り口に向かうと二人の男が民家の前に立っていた。二人のうち一人は先ほど道案内をしてくれたユクでもう一人の男は年老いた男性であった。二人は民家の入り口に誰も近づけまいと民家の入り口を塞いでた。

「ギルドから来たものです、中の状況を確認させてもらってよいでしょうか？」

ジュノは年老いた男性に尋ねると直ぐに隣に居たユクが年老いた男性に話しかけた。

「親父、シュンクの依頼を引き受けてメゼポルタギルドから来たジ

ュノさんとユーノさんだ。」
「おぉ、貴方達がそうか。どうぞお入りください。」
そう言うとユクとその父親は塞いでいた入り口から退きそして状況説明のためユクが同伴する事となりジュノとユーノとユクは被害にあった民家へと入って行った。血生臭い臭いが充満し民家内の家屋が無作為に荒らされていた後であった。この民家に住んでいた者は子供一人父親母親の計三人家族だとユクから情報をもらった。
「なぁユーノ。お前人の死体は見た事あるか?綺麗な死体じゃ無くて無残な状態の死体だ。」
「・・・ないです。」
「引き返すなら今のうちだぞ。」
「いえ、引き返しません。ちゃんと覚悟してここに来ていますから大丈夫です。」
「そうか・・・ならこのまま進むが吐くなら外で吐けよ。」
進むと子供の死体が頬から首元までの肉が噛み千切られた無残な状態で転がっていた。
「ひどい・・・」
「あぁ…取りあえず生存者の確認だけはしよう。」
民家内に散らばる家財を退かしていく、すると今度は頭半分を噛み千切られ右腕の肉をほぼ食われた男性の遺体が発見された。それを見たユーノはとうとう限界に達し外へ飛び出し胃の中の全ての物を嘔吐した。最終的に見つかったのはこの二人の遺体と母親の者らしき下半身だけ残された遺体そして壁に開けられた大きな穴、そしてその穴周辺に落ちていた白い獣の毛であった。

33節　雪山の村　マタメ村（後書き）

お気に入り登録してもらってる人たちにはもうしわけないですが、ちょっとこれから更新スピードが落ちるかもしれないです。それにしても外暑いですね～早く涼しくならないかな～。

３４節　村を覆う恐怖（前書き）

この前買った靴に穴が空いちゃったので靴を買いにアメ横のＡＢＣマートに行ったんですね。そしたらＡＢＣマート限定モデルのコンバースのカッコいいスニーカーが売ってたんで思わず買っちゃいました。いやぁ買ったは良いが限定モデルだからあまり汚したくないな～

３４節　村を覆う恐怖

「大丈夫？ユーノちゃん？これ水、これで口の中ゆすぐといいよ。」
「・・・すいません。」
手渡した水を受け取るとユーノはそれを口の中に含み数回ゆすいでから水を吐き出した。
「村の集会所で今後についての話し合いがあるそうだ。今回の依頼者も同席してる。俺達も急ごう。」
「はい・・・」
二人は村の集会所へと向かった。集会所に着くとそこにはエカシ村長並びユク副村長と見た目から１０代もいっていないであろうの男の子とそして被害にあった者達が集まって討論を行っていた。
村人の意見としては【もうこの村は駄目だ。他に移住した方が良い。】と言う意見と【せっかくここまで開拓した村を棄てられるか】という意見で真っ二つに割れていた。
「見事に意見が二つに割れてんな～・・・」
「ええ・・・」
しばらく村人達の口論を眺めているとエカシ村長がジュノ達二人の存在に気づき手を二三回叩き場を収めた。
「皆の者静かにするのだ。今回のモンスター騒ぎの件じゃがすでに打開策をシュンクが打ってくれた。ほれシュンク皆の物に説明しなさい。」

エカシ村長がそう言うとユク副村長の横に居たシュンクと呼ばれた男の子が前へと出そして口を開いた。

「えっと、僕のおこづかいと村長さんと一緒に取って来たアオキノコと薬草で副村長さんに頼んで、んと・・・メゼポリタの強いハンターさんに助けてくださいってお手紙書きました。」

「よし！良く言えたぞシュンク。あとメゼポリタじゃなくてメゼポルタな。」

ユク副村長は言葉足らずながら皆に自分の行った事を伝えたシュンクを優しく撫でた。そしてその後入り口付近に佇んでいたジュノ達二人を紹介した。

「皆この二人が今回メゼポルタからはるばるやってきてくれたハンター二人だ。歓迎してやってくれ。」

「どうも～ジュノです！！」

「ユーノと言いますよろしくお願いします。」

二人は自己紹介を終えた後歓喜に包まれると思っていたがそのま逆で辺りは静まり返り村人同士小言で何かを言い合っていた。聞き取れた一部としては

【今度きたハンターは見た目が若く、頼りなさそう。】

【また討伐したと嘘の報告をして報酬金の倍額ふんだくって行くに違いない。】

等だ。

その小言を耳にしたのかユーノがジュノに目線を合わせず囁いた。

「なんかあまり歓迎的ではないですね、ジュノさん。」

「だな～・・・・」

そんな二人を見てか村長がここで助け船を出してくれた。

「皆の衆！！なんだその態度は二人に失礼だぞ。ちゃんと挨拶せんか！！！」

村長が一声そう言うと村の民はしぶしぶ二人を歓迎し始めた。そこでやっとジュノは今までの被害の状況について村全員から聞き出そうとした。するとユク副村長とシュンクは集会所から出ていってしまった。

「まず最初どのような被害から始まったのかを聞きたい。」

ジュノが村の皆に問いかけると代表と称して事の顛末を村長が話してくれた。

「最初は家の外に干していたポポノタンがなくなる程度だった。我々はアルティ雪山から下りて来たブランゴが悪戯をしたのだろうと思っていた。しかし数日後村の者が襲われる被害が出た最初の被害者はシュンクの両親だった。シュンクの両親は今日起きた事件のように無残に噛み千切られ殺されてしまった。その時シュンクはワシの所に来てワシの昔話を聞いていたので被害に会わずに済んだ。それから徐々に被害は酷くなって行きたびたび村の民が襲われるようになってしまった。そう今日起こった事件のように。」

「その民家を襲ったモンスターを目撃した物はいないのか？」

「うむ、今のところは・・・」

「そうですか・・・皆さん今まで派遣されてきたハンター達はどん

なにひどかったか私たちは解りませんが。私達は持てる限りの力で今回の事件の解決に尽力を注ぎますのでよろしくお願いします。とりあえず私はさっき事件が起きた民家の中に開いた穴の付近で白い毛を見つけました。これは人毛ではなくモンスターの体毛ですこの白い毛から推測しておそらく先ほど村長の言っていた通り牙獣種のブランゴであるとも考えられます。しかしブランゴは主にドドブランゴと群れを成して生活している物なのでブランゴの可能性は低いと考えられます。」

「現段階での私の推測ですがおそらく群れの長争いに負けたドドブランゴが今回事件を起こしている者と考えられます。私はこれから今日被害にあった民家をさらに調べ情報を集め、明日アルティ雪山に村に被害をもたらしたモンスターを相方のユーノと共に討伐に向かいます。それまで村人の皆さまにはご不安な時をお過ごしになるでしょうかなにとぞご容赦ください。では我々は調査に当たりますのでこれで失礼します。行くぞユーノ。」

「えっ、あっはい！！」

ジュノは集会所に集まった村人たちにそう伝えるとユーノと共に集会所を後にした。

「あ“あ”～・・・・づがれた～久しぶりに丁寧に喋ったわ～」
「ジュノさんってあんな風に喋る事も出来るんですね。すっごく以外です。」

「だって集会所の雰囲気がものすっごく重たかったからさ～それに前ここに派遣されてきたハンターの印象悪かったみたいだし。これはすっごい真面目に喋らないといかんと思ったからね～、・・・それに今日もその事件が起きたしね。」

「あぁ…そうですよね。あんな惨状見てへらへらしてたらなんか失礼ですもんね。」

会話をしつつ二人は今日事件が起きた家へと向かっている最中にユクとシュンクが前から歩いてきた。

「あぁジュノさん、お話の方はもう終わったんですね。」

「まあね～、おっ君がメゼポルタのギルドにお手紙書いてくれたシュンク君か。さっきはかっこよかったぞ～。僕たちはねシュンク君が書いたギルドに書いたお手紙で来たハンターだよ。よろしくね。」

「・・・うん！頑張ってね。お兄ちゃん、お姉ちゃん。」

「よーし良い子だな～。よしユーノちゃん今から夕方までシュンク君の遊び相手になってやれ。命令な。」

「えっ私がですが！？しかも命令って…」

「わ～お姉ちゃん、何して遊ぶ？そうだ！！遊び広場でかけっこしようよ。」

そう言うとシュンクはユーノの手をつなぎ村の遊び広場まで引っ張られていった。

「あっちょっとわかったからそんなに引っ張らないで～」

「シュンク君の世話はユーノに任せてと俺は今日被害にあった家の捜索をするかな。それじゃあユクさんまた後で。」

そう言うとジュノは今日被害があった家に向かって行こうとするとユクに引きとめられた。どうやら報酬の件について話しておきたい事があるらしい。

「報酬はシュンクの２００ｚと僅かばかりの雑貨でジュノさん方に

は来ていただいていますが。私と親父の金を報酬に上乗せしてお出ししますので、ご安心を。」
「いや、そんなことしなくてもいいよ。」
「しかしそれでは。あまりにも・・・」

「俺とユーノちゃんは２００ｚとアオキノコ５個、薬草７個でこの依頼を引き受けたんだ。それ以上は受け取らないよ。もし報酬の金額を秘密裏に上乗せした事がばれたら面倒な事になるし、それにほら俺ギルドナイトでそういうの取り締まる側の人間だから。」

「・・・すいません。」
「謝んなくてもいいって！そんな事言ってる暇があったら村人達の俺達に対する信用度を今すぐ村に行って上げてきてくれよ。」
「はい・・・じゃあよろしくお願いします。」

ユクはジュノに会釈をして村の中心へと向かっていった。それを確認したジュノは今日被害にあった民家へと向かっていった。民家に着くとまずモンスターが侵入したと思われる家に空いた大穴を外から見そして何かもっと証拠は無いか調べたすると大穴の外からアルティ雪山に向かって消えかかっているが獣の足跡を見つける事が出来た。

「これは・・・」

マタメ村　宿場
ある程度情報を仕入れ思考に耽っていると夕飯時となっていた。ユーノはシュンク君と夕方すぎまで遊び相手をしていたせいか少し疲れた様子であったが。夕飯が食べた途端元気を取り戻したようで今では食べ過ぎたせいか横になっている。

「ユーノちゃん少し伝えたいことがある。」
「なんですか～？」
「今回村を襲ったモンスターについてだ。」

そうジュノはユーノに伝えるとユーノは起き上がりジュノに振り返った。どうやらジュノが重要な話をする事を感じ取ったようだ。

「今日の昼間村人達には今回の事件を起こしているモンスターは群れの長争いに負けたドドブランゴだと俺言っていたけど。もしかしたらドドブランゴじゃないかもしれない。」

「どういうことですか？」

「ユーノちゃんがシュンク君と遊んでもらってた間に今日被害にあった民家を調べたんだ。そしたら足跡が残っててね、その足跡がどうもドドブランゴの物じゃないんだ。」

「・・・・・」

ユーノはジュノの集めた情報を真剣に聞き入っている。

「俺の推測からするにあの足跡はオルガロンのものだ。」

「オルガロン！？オルガロンってあのクルプティオス沼地に近年現れるようになった。あのオルガロンですか！？」
「あぁ」
「でも現在の所オルガロンってクルプティオス沼地にしか姿を現してませんよね？」

「うん、だけど本来オルガロンは遠大な狩猟ルートを周回している

モンスターなんだ。だからこのアルティ雪山にオルガロンが現れても何の不思議もない。それに民家に残された白い体毛、もしかするとあれはオルガロンの雌個体のノノ・オルガロンの体毛が抜け落ちた物なのかもしれない。」

「確かにジュノさんのその考えも可能性がありますね。ドドブランゴよりも・・・」

「あぁ、そこでだ明日は二つの展開を想定してアルティ山にはいる一つ目の展開はドドブランゴだが、二つ目はオルガロン、しかも雄雌のつがいの可能性が非常に高い。」

「・・・・・」

「ともかく今日は明日に備えて武器の点検をしたら早めに寝よう。」

そう言うとジュノは双剣の手入れと持ち込むアイテムの整理を始めユーノはライトボウガンを分解し入念にメンテナンスを行い持ち込む弾やアイテムの整理を行い二人は床に着いた。

朝の日差しが部屋に差し込む始める頃に二人は目を覚まし黙ってアルティ山に調査に行くための準備を行い宿場を後にした。村を出ると村の出口に村長と副村長が佇んでいた。どうやらこれから調査に向かうジュノ達二人を見送りをしに来てくれたらしい。

「お二人ともどうかお気をつけてください。」

「あぁ、わざわざ見送りありがとうなユク副村長。」

「ありがとうございます。二人とも。」

ジュノ達はユク副村長とエカシ村長に手を振るとキャンプ設営の用具が積まれた竜車と共にアルティ山に向けて歩き出した。はたして雪山に待ち受ける者はいったい何者なのか。

３４節　村を覆う恐怖（後書き）

来週位から秋になるみたいですね。やっと涼しくなるよ！やったね！！

35節　アルティ山に潜む魔獣（前書き）

冬と言えば皆さんは何をしますか？私はお金と時間に余裕がある限りスノボーをしに雪山へ行きますね。楽しいんですよ～スノボー。

35節　アルティ山に潜む魔獣

アルティ雪山近辺　キャンプ

アルティ雪山のおおよそふもと付近にキャンプを設営できるような場所を見つけると、ジュノ達は竜車からキャンプ用品を取り出しキャンプの設営を荷車に乗り合わせていた救助アイルー達ともに行った。キャンプは直ぐに出来上がり後はアルティ雪山に調査に向かうだけとなった。

「じゃあ救助アイルー達、これ今回の報酬の先渡しね。」

そういうとユーノはアイルー達に報酬金が入った袋を個別に渡していった。もちろんシュンクの支払った２００ｚだけでは救助アイルーは雇えないのでジュノの貯金から支払っている。

「ニャ！！いつもすいませんニャ！！ではハンターさん達いってらっしゃいですニャ！！」

アイルー達に見送られるといよいよジュノ達はアルティ雪山へと乗り込んで行った。

「ユーノちゃん。今回行う狩猟はいつもと違う、いつも俺達が狩猟に向かうダラス雪山とちがってアルティ雪山は人の出入りは少なく、狩猟環境の整ってない山だ。だから想定外の出来事が起こる可能性も十分ある、注意していくぞ。それと・・・」

「死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな…ですよね。ジュノさん？」

「ハッハ―解かってるじゃない。じゃあ前ギルドがこの山に調査に来た時に書いてった地図を頼りに順に調べていくか。まずは麓からだな。」
「はい！でもその前に、はい！これホットドリンクです。これ飲まないと凍え死んじゃいますよ。」

本来ならば能力を使って体表面温度を調節して温かく出来るが、その際薄蒼く光ってしまいユーノを驚かせてしまうのが目に見えているのでジュノはしぶしぶホットドリンクを受け取る。

「・・・苦手なんだよね、ホットドリンク・・・辛いし、苦いし。ユーノちゃんは苦手じゃないのコレ？」

ジュノはそう言いユーノの方を見るとユーノはホットドリンクを何の抵抗も無くゴクゴクと飲んでいた。まるで飲料水を飲むように。

「・・・・・」
「んー！苦い！辛い！これってくせになる味ですよね。不味いですけど。苦手なら一気に飲んじゃえば良いんですよ。」

ユーノはけらけらと笑いながらジュノにそう話を切り返した。

「はは・・・ユーノちゃんは大丈夫な人なのね。」

そう言うとジュノはユーノに言われた通りホットドリンクを一気に飲み干す
飲み干した瞬間体全体が熱くなる感覚と同時に気分が悪くなって行った。

「気持ちわり・・・」

「あはは！大丈夫ですか～まさかジュノさんがホットドリンクが苦手なんて良い事知っちゃった。じゃあクーラードリンクと温冷ドリンクはどうなんですか？」

そう言いながらユーノはジュノの背中を摩る。

「クーラードリンクは飲まないと暑さで体力奪われて瀕死になるから仕方なく飲んでるけどやっぱり苦手だし、温冷ドリンクなんて見るのも・・・嫌だ。ウェ・・・」

「フフ！なんか意外な一面が見れてちょっと嬉しいかも。」

そう言うとユーノは更に早く背中を摩る。ジュノの体が揺れるほど。

「ユーノちゃんそれ以上・・・強く擦らないで、ホントに戻しそうになる・・・」

「あっ！すいません・・・」

「ふぅ。摩ってくれてありがと。でもこの気持ち悪さは一時的に来る物だから次からは擦らなくて大丈夫だから覚えといてね。じゃあ行こうか。」

ジュノ達はアルティ雪山の麓へ向かって歩き出した。

アルティ雪山　麓

二人で麓を調査したところ麓には草食種で繁殖力の強いとされるポポすら存在しなかった。唯一発見出来た物はポポの口元に生えている長い牙と獣骨のみであった。それらの品を見て一応は草食種は存在していると言う仮説を立て山の麓から中腹まで登って行く。すると山の中腹付近でブランゴが数頭が何かに群がり何かを貪っていた。

「何を・・・食べてるんでしょうか・・・？」
「んーポポかな…ともかく追い払って調べてみよう。」

二人は武器を抜き何かに群がっているブランゴを追い払う、するとブランゴが群がっていた何かが姿を現す。それはほとんどの肉片を噛み千切られ骨がむき出しになっている大きなブランゴの死体であった。

「この大きな牙からしてこれはドドブランゴだな。」
「そうですね・・・しかもかなり大きい。あっ見てください、よく見ると周りにもブランゴの物らしき骨が転がってますよ。」

ドドブランゴとブランゴの死体を見てジュノは村を襲っている犯人がおおよその判断が付こうとしていた。そう最悪のパターンとして予想していたあのモンスターだと。

「ジュノさん、やっぱり村を襲ったモンスターって…」
「いや、まだ決断するのは早い。それにまだ山の中腹付近だ。山頂付近まで山をくまなく調べよう。」

そう言うとジュノとユーノは山を再び登り始めた。山の中腹付近に来ると少し開けた場所に出た。周りは雪が幾層にも積もった斜面と開けた場所を上から見下ろせる程の崖そして山頂へと続くであろう道があった。

「（ここで奴に出会ったら厄介だな…）」

ジュノはそう思い辺りを散策する取りあえず手がかりになりそうな物は無いようだ。しかし視線をジュノは感じていた。そうモンスターが獲物を狙う時の視線である。ユーノもその視線に気づいたのか

ジュノの顔を見て武器に手を添えながら辺りを散策していく特に上から見下ろせる崖方面に注意を向ける。ジュノはわざと隙だらけの状態にして辺りを散策するあえて自分が囮になり襲ってきたモンスターをカウンターの要領でねじ伏せる為に。辺りが吹雪始めホットドリンクの効能が切れ始めたのか少し肌寒くなってきたその時だったついにモンスターが吹雪の中に姿を現す。吹雪いているせいで純白の毛並みが保護色となっているが背中の紅褐色のたてがみを確認できる。そうジュノが最悪のパターンとして想定していたモンスター。

ノノ・オルガロン　別称　雌響狼。

純白の毛並みと背中の紅褐色のたてがみ、雄より小さい牙が特徴で、純白の雌狼とも呼ばれている。遠大な狩猟ルートを周回しており。優れた嗅覚と聴覚で、獲物の位置を正確に把握する事ができる。発せられる咆哮には、周辺に棲む生物に甚大な影響を及ぼすとされており、『響狼』と呼称されてもいる。強靭な心肺機能も有し、肺内の空気を圧縮させることで空気弾を放つ事か出来る

吹雪の中姿を現した雌狼はジュノ達には襲ってこなかった。依然と崖の上に立ちつくしジュノ達を見下ろしている。

「上から眺めてるとは良い身分ね！穴だらけにしてやる！」

ユーノはそれをチャンスと思いはバールダオラに通常弾を装填し始める。超速射を雌響狼に向けて放とうと言う考えだ。ユーノが雌狼に標準を合わせている時雌響狼は首を下に向け背中を盛り上がらせた。

「ユーノ！！だめだ！！撃つんじゃない！！！」

ジュノの忠告は神のいたずらか吹雪いた事によりかき消されユーノの耳には届かずユーノは雌響狼に向けて超速射を放った。弾が後少しで雌響狼に当たるその時だった雌響狼は咆哮を上げたのである。その咆哮はアルティ山全域に響き渡る程強大であり咆哮によって発生された音圧によってユーノが雌響狼に放った弾がそのままユーノ方へと返って行った。

「くっ！！！」

ユーノは咄嗟の出来ごとに何とか対応し急所をライトボウガンで隠すが超速射によって全ての弾を受けた為か体が硬直状態となる。

「（まずい、ユーノが硬直状態だ。あれじゃあ格好の的だ。）」

「くそ！！ふっ！！！」

ジュノは雪が積もった斜面を一気に駆け上がりと雌響狼の居る崖へと登ろうとしたその時だった。

≪ウオーン！！！！！！≫

ジュノの上っている斜面の上を目掛けて雌響狼が咆哮と共に空気弾を放ったのである。空気弾を放った事により斜面に幾重にも積もっていた雪に穴が空き亀裂が走り斜面の雪がずり落ちていく。

「なっ・・・！！！」

雪崩落ちていく雪と共にジュノの体は徐々に雪に飲まれて、雪崩落ちてくる雪と共に山の斜面から落ちていく。

「ジュノさん！！」

「・・・か！ユ・・き・・ろ・・・・」

大きな音をたて雪と共に山の斜面を下って行くジュノの声は途切れ途切れにしか聞き取れず。ユーノはただ雪と共に奈落の底へと落ちていくジュノを見ることしかできなかった。

「・・・ジュノさん・・・」

ユーノは悲しさの余り目頭が熱くなり声をあげて泣きそうになった雌響狼のように、しかし雌響狼はそれを許さず。ついに崖の上からユーノの居る場所の数メートル先へと降り立つ。

獣である彼女はこれを待っていた。群れから離れた獲物を狩り取る時期を・・だからこそ本能的に強い個体と悟ったジュノをユーノから強制的に離したのである。

雌響狼は絶望に項垂れるユーノにじりじりと近づいて行った。ユーノは自身の数メートル先から迫ってくる雌響狼をちらりと見て、またうな垂れた状態へと戻った。雌響狼は一瞬脚を止めるとユーノがもう敵意がない事を悟りゆっくりとユーノに近づいて行った。ユーノのは徐々に近づいてくる雌響狼に対して肩を震わせていた。それが寒さによる物なのかそれともうすぐ訪れる死に対しての物なのかは分からない。ついに後数歩でユーノにたどり着くところで雌響狼は牙をむき走り出した。雌響狼の牙がユーノ頭を襲う、その瞬間雌響狼には見えていないがユーノは口角を上げ笑っていた。

「ざんねんでした。」

雌響狼はその瞬間何が起きたか分からなかった。後少しで人の娘の肉を己の牙で引き裂けると思っていたのに体がしびれて動けないのである。

「流石の雌響狼も無機質なものの臭いは判断出来なかったようね！」

そうユーノは自分の放った弾による硬直状態が解けた瞬間目の前に手早くしびれ罠を設置したのである。

「正直しびれ罠の作動音で感づかれるかと思ったけど。奴の方向から吹雪いてたおかげでで聞き取りにくくなってたみたいね。んじゃこれはさっきのお返し！！！」

ユーノはバール＝ダオラに通常弾を素早く装填すると雌響狼に標準を合わせる。

「これはジュノさんの分だ！！」

ユーノの声と共に通常弾が身動きが取れなくなった雌響狼に対して恐ろしい速度で連続して射出される。弾は雌響狼の顔面に当たり額の硬質な角飾りが鮮血と共に徐々に砕けていく。シビレ罠からの拘束が解けたのか雌響狼が牙がユーノに向けて襲いかかる。しかしユーノは全ての弾を射出し終えた反動を利用して後ろへ飛び雌狼も攻撃を回避する。そして少し離れたところで対峙し合いにらみ合う雌狼と女性ハンター。

「まぁこのくらいじゃ倒れないよね～じゃあ本番行きますか！！！」

ユーノは麻痺弾を装填し駆けだす、雌響狼もそれに反応してユーノに対して牙を?く。
今まさに女同士の戦いが火ぶたを切った。

35節　アルティ山に潜む魔獣（後書き）

スノボー関連のお話になっちゃいますけど、私は高校生の時にスノボーしに雪山に行ったんですけどその時にコース脇の5メートル位の高さかな?まぁ谷に落っこちちゃったんですね。いやー板は傷つくは体中痛いし谷の底に流れてた川の水でウェアの内側が水浸しになるわで最悪でしたね。とりあえず脱出しようとするんですけど雪に体が埋まってて上手く歩けないし、谷から出ようとしても掴めそうな物は雪で覆われて良く分からないですしあっても草くらいですし、山ですから携帯繋がらないですしおまけに天候が悪化して私の居たコースは立ち入り禁止になって人の通りかかる望みはなくなるわで遭難ってやつになりかけました。でも人間てのは不思議なもんで自身が危機的状況になると頭がフル回転するんですよ、生き残るために。このモンスターハンターの世界のハンターも危機的状況に立たされているからこそ自分より巨大なモンスターを倒す事が出来るのかもしれないですね。

36節　Howling　wolves.（前書き）

狼の遠吠えをＹＯＵＴＵＢＥとか見て聞いたりしたんですけど。アオーン！じゃなくてアウォーとかウオ！なんですよね。まぁアオーンもアウォーンも人間の耳からしたら大した違いじゃないですけどね。

36節　Howling wolves.

あの雌狼が居た場所からどれくらい落ちただろうか、ジュノは雪崩によって雪の下に埋もれてしまった。目の前は雪の下に埋もれているためか青白い。

「（・・・まさかあそこで空気弾を放ってくるとはなぁ、あの雌響狼なかなか狡猾じゃないか）」

ジュノは雪の中に埋もれながら雌響狼を評価していた。

「（にしても、ユーノちゃん大丈夫かな?あの狡猾な雌狼相手に・・・まぁ危なくなったら逃げろって出会った時から言ってるから大丈夫か。）」

ジュノは後に知る事になる。あの出会った時は気弱な少女だったユーノが精神的に逞しく成長しあの狡猾な雌響狼を凌ぐほど怜悧な若者として成長している事に。

「（ユーノちゃんの心配よりもまずは俺のこの状況を何とかしないと。はぁ…どうか周りに誰もいなくてユーノちゃんにも気づかれませんように。）」

そう願うとジュノは能力を発現させ体中が蒼い炎に包まれる。炎によって周りの雪は解け蒸発していく。

「（はぁ…能力があってよかったって思いたいけど、やっぱりなんか複雑な気持ちだ。しかしまだ埋もれたままだな・・もう少し力を強めてみるか。）」

そう思いこみ能力をもう少しだけ引き出したつもりだったが。

【Ｉｓ　ｉｔ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ　ｂｉｔ？　Ｌｅｔ’ｓ　ｐｕｔ　ｉｔ　ｏｕｔ　ｍｏｒｅ.】

「！」

【Ａ・・・】

頭の中に響いた声ような音と共に背中に浮き上がっている紋様が強い光りを放ち、一気に体中の蒼い炎は燃えあがり巨大な火柱となった。そのせいかジュノの埋もれてた部分のみならず辺り一面の雪が炎によって無くなってしまったほか地面も少し赤みをおび柔らかくなっている。

「（あれ？少し強めただけなのにな・・・それに今聞こえた声みたいな音・・なんだ？周りに人はいないのに…まぁいいか。）」

ジュノは直ぐに能力を解除し地面へと降り立つ、辺りを散策すると近くに川が流れていたどうやら山の中腹からアルティ雪山に隣接する渓谷付近まで落ちて来たようだ。上を見上げるとさっき居たアルティ雪山の中腹がみえる。

「（とりあえず中腹まで戻ろう、ユーノちゃんが心配だ。）」

そう思いジュノは渓谷を登りアルティ雪山へ再び戻ろうとしたその時だった。渓谷の横の茂みからジュノに向かって漆黒の大きな塊が飛び出したのである。漆黒の塊は自身に生えているその鋭利な牙で様々な命を狩り取って来た。気配も完全に消し、対象に襲いかかる

タイミングも完璧で後は相手の体にその鋭利な牙を付きつけるだけだった。そう・・・いつもならそれで決着がついていた、しかし今回は違った噛みついた所にはすでに今回の対象となる獲物がすでにいなかった。

「なかなか賢い雄響狼ちゃんだ。捕まえてペットにしてモンスターバトル大会に出たら優勝間違いなしだろうぜ。」

カム・オルガロン　別称　雄響狼
雌のノノ・オルガロンの体毛は純白の毛なのに対し雄のカム・オルガロンの体毛は銀の体毛が混ざった漆黒の毛並みと額の硬質な角飾り、長い牙が特徴で、漆黒の雄狼と呼ばれる。普段は雌雄一対で狩りを行うが、つがい同士離れて狩りを行う事もある。その際は雄たけび上げ互いに連絡を取り合う。

ジュノは雄響狼の奇襲攻撃を瞬間的に察知し前方に重心を移動させ力強く一歩を踏み出し通常の倍以上の速度で移動したのである。雄響狼は『何故だ!?何故そこに居る!?』とでも訴えんばかりにジュノに向かって吠えている。

「落ちつけよ雄狼ちゃん。それともお散歩の時間かな?」

ジュノは雄響狼に挑発するように大げさな振る舞いを見せながら雄響狼に話しかける。雄響狼はそのジュノの態度を見て本能的に馬鹿にされていると察し長く発達した牙を見せながら唸り始めた。

「いいコだな、ほらどうした?ペイントボールでも欲しいのか?」

ジュノはそう言うとペイントボールを雄響狼に向けて投げつけた。ペイントボールは見事相手に当たり雄響狼の漆黒の体表をピンクに

染め上げ辺り周辺に強烈な臭いが漂っていく雄響狼はそれに対しての反応なのか雄響狼は遠吠えをし始めた。その遠吠えは雌響狼と同じくアルティ雪山全体に響き渡る、雄響狼の遠吠えが終わると雌響狼が居たアルティ山中腹付近から遠吠えが返って来た。

「ハッハ―!!嫁さんに大事な服を汚されてご立腹って事を伝えたのか?」

ジュノがそう言うと雄響狼はジュノに向かって空気弾を放ったしかしジュノはそれを横へ回避する。ジュノが避けた際空気弾が渓谷の岩肌に当たりその振動からか渓谷の上から岩が降ってき道を塞ぐ。

「お互い狩りの時間って奴だ。来いよ!」

雄響狼は自身の長い牙をむき出しながら駆けてくる。それに答えるようにジュノも双剣を抜き雄響狼に向け駆けていく。今渓谷の中で男同士の戦いが火ぶたを切った。

雄響狼は牙をジュノに向けると思いきや牙を仕舞いジュノに対して頭突きを繰り出す。しかしジュノは雄響狼の眉間に双剣の片方を当て身を乗り出し後ろへと回る。

「はっ!!!」

ジュノは雄響狼の尻尾目掛けて双剣を突き出す、しかし雄響狼は後方に回れた事を瞬時に察知したのその場で遥か頭上に飛び上がる、ジュノの双剣での尻尾への一撃は少しかすっただけであった。雄響狼は限界の高さまで飛び上がると身を回転させ背中に生えている棘を射出して来た。ジュノの居る縦一線に雄響狼の鋭利な棘が突き刺さって行く、ジュノもそれに反応し棘が射出された縦一線の横に回避するが回避しきれず後ろ脇腹に雄響狼の鋭利な棘が突き刺さる。

「痛って！！」

ジュノは即座にその場を離れ後ろに突き刺さっている棘を引き抜き棘が突き刺さって箇所に回復薬グレートをぶっ掛ける、しかし雄響狼はその猶予を与えず周りを飛び跳ねながら辺り全体を見境なしに攻撃してくる、その姿はまるで飛び跳ねながら踊るように。雄響狼の攻撃は見事ジュノに当たりジュノは後方へと当たり飛ばされる。雄響狼はこの自身の連続攻撃を喰らったジュノはさぞかし苦痛の表情を浮かべていると思った。しかし実際は違ったジュノの口はニヤリと曲がり笑っている。

「いいねぇ！久々の狩りって奴はしかも相手も踊りが上手いとはなぁ。」

そう言うとジュノはその場を飛び跳ねし準備体操し始めた。雄響狼はその光景をみて不思議に思ったのかキョトンとしている。

「ハッハ―！！ご褒美だ！良いもん魅してやるよ！！ルシャナ師匠直伝の舞踏演武だ。準備は良いか？」

雄響狼に向けそう叫ぶとジュノは独特のステップを踏みながら雄響狼に向け攻撃を繰り出す。雄響狼はそれに対して牙を？くしかしその牙は双剣の刃によっていなされ、雄響狼の横っ腹に移動するとジュノは目にもとまらぬ速さで双剣を突き出しては引き抜きその場に飛びあがり前方宙返りをしながら雄響狼の背に回転切りを加える。

≪ガッッゥ！　≫

雄響狼が切られた痛みに耐えかねジュノの飛び上がりジュノが着地

する所を予測して自身の鋭爪を繰り出すが。

≪！≫

「捕まえてみな！」

ジュノはすでにそこにはおらず後方へ回られ尻尾を滅多切りされる。尻尾の方に周り込まれている事を察知すると雄響狼はその場に飛び上がり体を反転させ落下する時に掛かる重力と自身の腕力を合わせた強力な一撃を喰らわす。しかしまたしてもその場にジュノは居ず攻撃は不発に終わる。雄響狼は臭いと聴覚を頼りにジュノの居場所を特定し振り向くと、ジュノは高速砥石で自身の武器を研ぎ終わっていた。

「おいおい、どうした？来いよ！雄響狼！」

そう言うとジュノはさっきとは違うステップを踏み雄響狼に向け攻撃を繰り出していく。
雄響狼に対しての死への舞踏がはじまった。

アルティ雪山　中腹
ユーノと雌響狼の戦いは依然と続いていた雌響狼の飛びかかりを回避しユーノその際にコマ目に超速射をしては反動が少ないうちに打ち止め回避に転ずる。そしてある程度のパターンが読めてきたら雌響狼が飛びかかり着地する所を事前に予測し麻痺弾を撃ち込み相手を麻痺状態にしてから超速射による全弾を雌響狼に喰らわす。その繰り返しをユーノは行っていた。雌響狼もその猛攻を喰らい続けているので体中から血を流し徐々に息が荒くなって行く。

「（いい加減このパターンに雌響狼も慣れてきてるはずだし、また

何か違うパターンを組みこまないと・・・）」

通常弾及び麻痺弾を調合しながらユーノは新たな作戦を考える。しかしガンナーは剣士と違い持ち込めるアイテムが限られてしまう。そうほとんどアイテムポーチ内は弾薬生成用の素材や弾でポーチ内は埋まってしまうのである。ガンナーでの狩りは狩猟に出発する前から始まっていると言っても過言ではない。

「（オルガロンに対して閃光玉使うと怒り状態になるから使えないってジュノさん言ってたしな～…ん？）」

ユーノがそんな事を考えながら弾薬を調合していると。山の何処からか雌響狼とは別のオルガロンの遠吠えが聞こえて来た。それに呼応するように雌響狼も遠吠えで答えている。

「（ん、今のうちに少し遠くへ移動して作戦を練ろう！）」

そう思うとユーノは急いで中腹から山頂へ続くであろう道へと走って行った。走っている最中道脇から出てくるブランゴの眉間に性格に弾を撃ち込みブランゴを掃討していると、山の下の方からペイントボールによる異臭が漂ってくるのが解った。

「（ペイントボールの臭い・・・今この山の中に入っているハンターは私とジュノさんしかいないはず・・）」

ユーノの顔が徐々に緩みだす。今までジュノに対して絶望的な考えで頭の中が曇っていたユーノの中に一筋の光が射す。

「（ジュノさんが・・生きてるかもしれない！）」

しかしユーノはその場で喜びをせずさらに気を引き締める。そうまだ雌響狼との戦いはまだ終わっていないからだ。

「（ともかく、何か作戦を考えなきゃ・・・ん？）」

少し進んだ所に誰かがキャンプを行ったらしい後があった。調べてみるとそのキャンプは前にアルティ雪山に古龍が出現した騒ぎで調査に向かったメゼポルタギルドの物らしかった。ユーノはそのキャンプの中に入ると支給用大タル爆弾が数個と投げナイフが少々放置されていた。支給用大タル爆弾を解体し中を確認すると火薬がびっしり詰まっていた。

「（良い事思いついた！！後はこの辺にあの草が生えてれば・・・）」

ユーノはキャンプ跡地周辺を散策すると運の良い事に目的の物を発見する事が出来た。

「（後はこれを弾薬調合してアイツに当てれば・・・！）」

そう思った矢先に雌響狼が中腹からユーノの元にゆっくり上がってきている事が解った、すかさずユーノはキャンプ後ろの草むらに身を潜めそして先ほど調合した弾をバール＝ダオラに装填出来る限界まで装填しスコープ越しに雌響狼に標準を合わせる。

「（風が吹いているから角度を調節して奴に当てないと・・・）」

ユーノは少したりとも標準を狂わせないようにする為に息を思いっきり吸い込み息を止めた。そして弾を射出する、まずは一発命中そこで雌響狼は辺りの何処かにユーノが居る事に気づきユーノの居場

所を探る、そして二発目、三発目と当ていよいよ草むらに隠れているユーノを発見し飛びかかってくるがしかし。

「おやすみ。」

ユーノの射出した弾が雌響狼に当たり雌響狼はその場に倒れ込んだ。雌響狼は静かに寝息を立てながら眠っている。

「さて、起きる前に準備しないと・・・」

そう言うとユーノはキャンプ跡地に放置されていた支給用大タル爆弾をキャンプ内に有るだけ雌響狼の近くに敷き詰める。そして先ほどキャンプ内で拾った投げナイフを取り出した。

「後は上手くこれが爆弾に当たった衝撃で起爆するかどうかだけど…考えても仕方がない！てぃ！！」

ユーノは雌響狼からかなり離れ爆風によって物が飛んできても大丈夫な岩陰に隠れたそこからナイフを爆弾にむけ投了した。するとナイフは見事爆弾に当たりその衝撃で爆弾は起爆し当たりは轟音と共に大爆発した。通常時のモンスターに爆弾を使っても身を固めてしまい大したダメージにならないが、睡眠時の無防備な状態で爆弾による攻撃を与えるとそのダメージは通常の数倍に至る。

「これで、ちから尽きてると良いけど…」

しかしユーノの期待は大きく裏切られる、雌響狼は依然としてその場に立ち尽くしていたのである。

「うそ!?っく!」

咄嗟にライトボウガンに弾薬を詰め雌響狼に標準を合わせる。しかし雌響狼はユーノに向かってこず足を引きずりながらその場から飛び去ってしまった。ユーノはその場に立ちつくし今起きた事にあっけにとられていた。

「逃げたのかな…?あっ!!」

ユーノは大事な事をしていない事に気づいた、それはハンターにとって基本中の基本の事である。

「ペイント弾撃つの忘れた・・・」

辺りには依然風と共にペイントボールの臭いが漂ってくる。

「とりあえず、この臭いをたどってみよう・・・ジュノさんが別のモンスターと戦ってるかもしれないし。」

そう言うとユーノはペイントボールの臭いをたどって道を進んで行った。

36節　Howling　wolves.（後書き）

皆さんは家着と普段着を使い分けてますか？私は昔は使い分けてたんですけど、最近はもう家着のまま出かけたり学校に行ったりしてますね。なんかめんどくさいから。あっでもちゃんと香水はつけてきますし髪の毛のセットもしていきますよ流石に。秋になると大体ジャージ一本で生活できるから便利ですよね。

37節　流れるは涙、得るのは心構え（前書き）

狼のＤＮＡに一番近い犬種ってどれだかご存知ですか？見た目からして何となくシベリアンハスキーかなと思うかもしれないですけど、実は柴犬が一番近い犬種なんですよ。一方シベリアンハスキーは狼のＤＮＡからは遠い存在なんですって見た目で物事を判断しちゃいけないってホントですね。

37節　流れるは涙、得るのは心構え

ジュノと雄響狼の戦いは依然として続いていた、しかしそれは一方的な物であった。

「突き刺し!!!踊る!!力を込めて!!さらに強く!!角度を変え!!舞い踊る!!」

ジュノによる舞踏演武に翻弄されまったく手が出せずにいる雄響狼、そして一切攻撃を緩めないジュノ。雄響狼はジュノによって滅多切りにされ牙は折られ体中切り傷まみれで漆黒の体毛からは血が垂れている。しかしジュノの攻撃は続く。

「さらに・・・もっと強く!!!切り裂きそして突き刺す!!!」

雄響狼の体にさらに双剣による切り傷と刺し傷が出来上がりそこから鮮血が吹き出す。ジュノは最後の一撃を加える為飛び上がり雄響狼の背に回転切りを加える。

「最後に・・・終わりを迎えた後――」

ジュノは雄響狼の後ろへと降り立ち双剣の刃についた雄響狼の血を振り払う。

「君は解き放たれる――――」

ジュノのその言葉と共に雄響狼は膝をつき大地に倒れた。ジュノは雄響狼に近づき本当に力尽きたかどうか確認する。すると微かだが息がありその場から立ち上がろうとしていた。

「ハッハー！なかなかタフな雄響狼だ。嫁さんより先には逝けないってか？ヒュー！！男だねぇ～惚れちゃうぜ～。」

そう言いジュノは双剣の抜き雄響狼に向かっていこうとしたその時だった。アルティ雪山頂上付近から物凄い爆音が響き渡った。

「おっ！なんだありゃ！？」

ジュノは爆発に気をとられていると雄響狼はその隙を逃さずジュノに向けて空気弾を放つがジュノはそれを横に緊急回避し雄響狼に剣を向ける。しかしその場には雄響狼は居ず足を引きずりながら何処かへと飛び上がりながら逃げていった。

「フン、まぁこんなこともあるか。ペイントボールでマーキングしてあるし何処へ逃げようと臭いでわかっちゃうから良いけど。とりあえず中腹付近で戦っているはずのユーノちゃんとはやく合流しなくちゃ。」

そう言うとジュノはアルティ雪山に隣接する渓谷を抜け、雪山の中腹に向けて駆けだした。

アルティ雪山　中腹

ジュノはなんとかペイントボールの臭いをたどって行くと渓谷からアルティ雪山の中腹まで戻る事が出来た。

「フゥー！何とか戻ってこれたな・・・さて雄響狼は何処へ行ったのやら、ここら辺から臭いはするんだよな・・・おっ」

当たりを見回していると山頂へと通じる道からユーノが歩いて来るのが見えた。ジュノは向こうからやってくるユーノに手を振るとユーノもそれに気づいたのか走って来た。近くで見た感じではユーノはどこも傷を負っていなくジュノは安心した。

「やっぱり、ペイントボールを使ったのはジュノさんだったんですね！良かった～大丈夫でしたか？」

「ひどい目にあった。んで雌響狼の方はどうした？」

「はい、とりあえず交戦して瀕死の状態まで追いやったんですけど…ペイント弾持ち忘れて・・・行方知らずです。」

「フゥー、今度からこういう依頼に行く時は必ずペイントボール持ってきなよ。」

ジュノはそう言うと軽くユーノの鼻を指で弾いた。

「あ痛た！すいません。ところでジュノさんは何に向けてペイントボールを投げたんですか？」

「あぁ雪崩で落とされた先に雄響狼と出会ってね、そいつに向かって投げた。とりあえずそいつもあと一歩で倒せたんだが、山の頂上付近が急に爆発してさ、それに気を取られてたら逃げられた。ユーノちゃんあの爆発はなんだったの？」

「あぁ…はは、実は山頂付近に前にギルドが古龍調査に来てた時に残してった爆弾が数個あったんでそれを雌響狼にお見舞いしました。」

「ンー・・・なかなか派手な事するのね。まあその事の詳細は後で聞く事にして今はこの雪山内に居るオルガロン達を仕留めよう。」

「そうですね。でもさっき言った通り雄響狼の方はペイントしてあって臭いをたどれば位置が解りますけど、雌響狼の方はどうします？」

「ユーノちゃんオルガロンの生態の特徴を思い出してごらん。」

「特徴・・・・アッ！！」

「わかった？じゃあ臭いをたどって行こうか。」

ジュノとユーノはペイントボールの臭いをたどって辺りを散策した。どうやら臭いの元は最初雌響狼がジュノ達を見下ろしていた崖の上から漂ってくるらしく先ほど雌響狼の攻撃で起こされた雪崩によって雪が流され表面が露わになった斜面を登り崖の上へと降り立つとそこには山肌に洞穴がありその前に雪の降る中雄響狼と雌響狼はお互いの傷をなめ合っていた。

「・・・やっぱりつがいか。ユーノちゃん、手持ちの残弾は？」

「麻痺弾や８発と通常弾が４８発、睡眠弾が１発ですね。」

「十分！ユーノちゃん、君はまず雄響狼に麻痺弾を撃ち続けてくれ。奴はまだ一回も麻痺状態に陥ってないから麻痺耐性はないはずだ、俺はその間雌響狼の相手をしてる。雄響狼が麻痺状態になったらユーノちゃんは俺と一気に雄響狼を畳みこむ。雄響狼が倒れたら後は雌響狼だ。いいか、たとえ相手は瀕死の状態であっても危険だ。確

か東方の言葉で・・・」

「手負いの獅子程たちの悪い物は無い・・・ですか？」

「それだ・・行くぞ！」

ジュノ達は駆けていく手負いのオルガロンたちに、オルガロン達もジュノ達の存在に気づいたかまずジュノに向けて雄響狼は空気弾を放ちもう雌響狼はジュノの元に飛び上がり爪での一撃を喰らわしてくる。ジュノは空気弾を回避し雌響狼の爪での攻撃をいなし一太刀入れようとするが雌響狼はその場から一気に離れ。いつの間に回り込まれたのか背後から雄響狼が自身の背中の棘を飛ばしジュノはその棘による攻撃を受けてしまう。

「ッ！！」

「ジュノさん！」

「大丈夫だ！！撃て！！」

背中に棘が刺さったままジュノはオルガロン達に攻撃していく。すると雄響狼の動きが徐々に鈍くなり麻痺状態へと落ちた。ジュノはそれを見逃さず雄響狼に向け駆けていき雄響狼の頭上に向けて飛び上がり力を込めて双剣を振り下ろす。

「これで終わりだ。」

ジュノの双剣は雄響狼の頭骨を砕き深々と刺さり雄響狼の動きが徐々に鈍くなる。一瞬雄響狼の口元が開き己の牙を露わにしたそれは笑っているようにも見えた。

「上！ジュノさん！」

ユーノ声を聞いた瞬間辺りが薄暗くなり上を見るとジュノの頭上に雌響狼が己の牙を立てながらジュノに襲いかかろうとしていた。急いで雄響狼から双剣を抜こうとするか深く突き刺さっているのでなかなか抜けず仕方なく片方だけありったけの力を込めて抜き取り雌響狼に刃を向け飛び上がろうとしたが少し手遅れかすでに雌響狼は眼前まで牙を立てていた。

「ッチ！！」

ジュノが雌響狼の攻撃に対し身を固めようとした次の瞬間雌響狼の体が少し浮きあがった。

「今です！！早く！！」

そうユーノが背後まで来ておりジュノに牙を向けようとしていた雌響狼に対し超速射を浴びせてたのである。ジュノはユーノの作ってくれた隙を逃さず双剣の片方を雌響狼の胸部に思いっきり突き刺す。その瞬間雌響狼の胸部から止め度めなく血が吹き出でその血を顔面に浴びるジュノ。雌響狼は重力に従って地に落ち痙攣しながらその命を散らした。辺りの一面の白い景色はオルガロン達の血によってところどころ紅く染まっていた。ジュノは顔についた雌響狼の血を手で拭うとそれぞれのオルガロン達に突き刺さっている双剣を抜き刃についた血を振り払った。するとユーノが後ろから近づきジュノの背中に突き刺さっている雄響狼の棘に手をかけた。

「背中の棘・・抜きますから、じっとしててください。」

そう言うとジュノに突き刺さっている背中の棘を抜いて行く。

「終わり・・・ですかね・・・・・」

「いやまだ仕事は終わっていない・・こいつらに食べられた住民達の遺品の有無を確認をする。おそらくあの洞穴内が奴らの巣だ・・中に入って確かめるぞ。」

そう言うと二人は洞穴内へと入って行った。しばらく歩いて行くと洞穴内には様々なまだ少し肉がこびり付いた骨が散乱していた。それはブランゴの物だったり衣服の破片が付いている物だった。洞窟のさらに奥へと進むと衣服や人毛、獣毛で盛り上がっている箇所があり二人はそれに近づく。すると盛り上がっている箇所から小さな唸り声が聞こえて来た。

「・・・・・・」

目の前まで行くとそこにはオルガロンの子供が数匹、ジュノ達に向けて唸り声をあげていた。

「ユーノ・・・わかってるな…?」

「・・・・はい・・・・」

二人はオルガロンの子達に武器を向けた、洞窟内には悲痛な鳴き声が響き渡った。鳴き声が収まると二人のハンターが洞窟から出て来た。当たりに降っていた雪は止み空からは太陽が照りつけている。

「・・これでしばらくは大丈夫だ。」

「はい・・」

「・・・・・」

「泣いてるのか？」
「雪が目の中に入っただけですよ。」
「振ってないみたいだけど…」
「人々をモンスターから守るハンターがモンスターの為には泣かないですよ。」
「そうだな…でも奪った命を弔う為に泣くハンターもこの世界の何処かに居るのかも…そうは思わない？」
「そうですね…」

二人の間に一陣の風が雪を舞い上がらせ舞い上がった雪が日射光に当たり煌めいていた。

マタメ村　宿場
オルガロン達の討伐を終えたジュノ達はその亡骸と遺品を持ち帰りマタメ村へと戻ると村人は歓喜と共にジュノ達を歓迎してくれた。ジュノ達は笑顔でそれに答えながら宿場へと戻った。ユーノは宿場に戻るや否やライトボウガンの手入れをし始めた。ジュノも同じく双剣の手入れをする、手入れをしている間二人に会話は無かった。ジュノはひと足早く武器の手入れを終え武器を仕舞いその場に立ち宿場の玄関まで歩いて行った。するとユーノがそれに気づき声をかけて来た。

「何処行くんです？」
「温泉・・・ちょっと浸かって体の汚れを落としてくるわ。」

そう言うとジュノは温泉へと向かった。

マタメ村　温泉
温泉に入る前に体についたオルガロン達の血を湯を体に掛けて擦って落としていく。徐々に体についたオルガロン達の血は落ち、ジュ

ノは温泉につかり今日の疲れをいやした。

「（今日能力を使った時に聞こえた音は何だったんだろう。）」

そんな事を考えながら体の節々を伸ばす。節々を伸ばしていると関節が鳴りその感触が心地よい。関節を伸ばし終え湯に体を浮かしていると誰かが温泉に入ってくる音が聞こえた。

「（誰だ・・・まぁいいや・・・）」

「ジュノさん」

「おぉ、ユーノちゃん・・かぁ!?」

思わず人物の登場に湯に浮かしていた体を元の状態へと戻し少し距離を取る。幸いな事に湯船は乳白色なのでお互い大事なところは見えていない。

「そんなに驚かなくても・・・」

「な…何で入って来たん!?」

「いや・・・裸の付き合いってのをしてみようかと・・あははは。」

「そ、そう・・・（は・・裸の付き合い・・だとぅ）」

しばし無言が続く、ユーノちゃんはと言うとずっと湯面を見たままである。ジュノは何か話さなくてはと思い適当な話題を振ろうとしたが先に話題を振って来たのはユーノの方だった。

「あの・・・今日の狩りで、ハンターとしての心構えって何なんだろうって疑問が湧いたんです。ジュノさんにとってのハンターの心構えっていったい何なんですか?私…今日命を絶ってしまったオルガロンの子供もこんな事言っちゃハンター失格って言われちゃうかもしれないですけど本当は生かしてやりたかった。」

「それはかわいそうと思ったからか？」

「・・・はい。」

「そうか、でもその考えはユーノちゃんの人としてのやさしさからくるものだ、だから間違っちゃいない。すべての生命は個々の生と種の存続を目指して生きている。今回のオルガロン達は子供ができ種の繁栄のために人の生活圏に入り込んで人を襲ってきた。食べ物がなきゃ子供を育てられないからな。でもそれは俺達人も同じ、俺達人もモンスターも他の種の命奪わずに生きていく事は出来ない。」

「ハンターって言う仕事はさ、モンスターから人を守る仕事って一般的には言われてるけどさ、人の中で一番他の種から命を奪う仕事だと俺は考えてる。だから俺のハンターとしての心構えって言うのかな？まぁ心構えはもちろん人をモンスターから守るってのはあたりまえだけどもう一つ、この世界で生きてる人の中で一番真摯に生と向き合い犠牲にしてきた生を背負って生きてくって感じかな。」

「・・・真摯に生と向き合い犠牲としてきた生を背負って生きていく。」

「まぁ難しいよねそこら辺の考えは、俺もまだそこら辺の心構えってのが上手くできてないし。だからそんな難しく考えずにモンスターも人もお互い持ちつ持たれずに生きてるって考えればいいよ。」

「そう…ですね、解かりました。あっそれともう一つ。」

「ん？」

「今度双剣の使い方を教えてください。やっぱり独学じゃ限界があって…私ジュノさんみたいに舞うように双剣を使ってみたいんです！！」

「そっか、別に良いよ～教えても。でも大変だよ～最初のうちは毎日吐く事になっちゃうかも。」

「うっ…でも頑張ります！」

「ハッハ―頑張れよ～」

温泉内に二人の談笑が木霊した。しかしジュノもまた一つの不安が湧きつつあったもしも自身の力が皆にばれ狩猟対象となるような事が起きたらいったい自分はどうなってしまうのだろうと。この誰にも相談できない不安を抱えて自分はちゃんとこの世界を生きていけるのかと。そんな不安が横にチラつきながら夜は更けていくのだった。

37節　流れるは涙、得るのは心構え（後書き）

このオルガロン達との戦いの元ネタとなった事件があるんです。それは昔日本で起きた物で何となくこのお話読んで分かった人も居るかもしれませんが。北海道で起きた三毛別村熊事件って奴ですね。興味持った人は調べてみるといいかもしれないですね。でも事件の内容はかなり悲惨な物で気分が悪くなるかもしれないので自己責任で調べてください。

38節　新人レジェンドラスタ（前書き）

いやー昨日の台風は凄かったですね。台風のせいで電車が止まっちゃって結局帰るのがいつもより遅くなっちゃいましたよ。ＨＡＨＡＨＡ！

38節　新人レジェンドラスタ

気球船　ハンター控室

ジュノはマタメ村での狩猟での報告書を書いていた。沼地に現れるはずのオルガロンが雪山にも表れた事、雪山で子を育んでいた事等様々だ。ユーノには内緒でギルドナイトへの推薦状も書いておいた。今回の彼女の狩猟技術や応用力に洞察力には目を見張るものがあったからである、それと昨今のクシャルダオラ襲撃事件での戦歴もある事だからおそらくこの推薦状は通るはずだろう。ジュノが一通りの書類を書き終えた頃にはもう近くにメゼポルタが見え始めていた。

「やっとメゼポルタに返ってきましたね！」

「だなぁ、さっさと書類出してマイハウスで寝たい。」

ジュノは欠伸をしながらユーノの問いに受け答えていると控室に乗船員アイルーが息を切らしながら入ってきた。

「たっ大変だニャー！！！ハンターさん」

「後で。今なんだかだるい」

「そう言わずに聞いてほしいニャ！！！」

アイルーを尻目にそっぽ向いてごろごろしているジュノを見かけてかユーノが声をかけて来た。

「どうしたんです？いつもならアイルーを見ると飛び付くのに？」

「書類書いた後は休みたいんです。ユーノちゃん代わりに聞いといて。」

「もう、ねこちゃんどうしたの？」

「はいニャ！！メゼポルタの迎撃拠点が襲われてるニャ！！」
「どうせ観測されてる古龍だろ、そんなのメゼポルタの在住の凄腕ハンターやギルドナイトが何とかするだろ？」
「それが…前に迎撃拠点を襲った謎の龍らしいですニャ…」
「なんだって！それを早くいいなよ。んで後飛ばしてどれくらいでメゼポルタに着くんだ？」

謎の龍の話を聞くや否や目を輝かせて飛び起きるジュノ、かつてブロードとフラウが退けた謎の龍。ずっと話を聞いて来てジュノにとってはいつかは一戦交えたいと思っていた相手だ。

「ニャーもう着くニャ。」
「ホントか！おっしゃあ！！直ぐに下船準備だ！！」

「物凄い変わりようニャ・・・・」
「そうですね…」

ユーノと乗船員アイルーが飽きれる中ジュノは物凄い行きよいで下船準備をすると直ぐに控室を後にしメゼポルタの気球船ドックに発着中の気球船から飛び降り大老殿へと駆けだした。

メゼポルタ　大老殿

「おい！じいさん！！今帰ったぞ！！！コレ報告書類等な！！んで謎の龍の情報をくれ！！」
「この一大事にそんなに焦るでない！！」

大長老に一喝され頭に拳骨を喰らうジュノはさっきまでの生きのよさは無くなり縮こまってしまった。

「まったく…今迎撃拠点は前におぬしの部下が過去に撃退した龍に襲われている。現在は防衛部隊による攻撃を行っているがあまり進展は無い。そして凄腕ハンター達に募集を呼び掛けてはいるがあまり良い成果は出てないみたいじゃのう…」

「なるほど、んでその龍に関しての特徴は？」

「その龍に関してはお主の部下がまとめてくれた書類を見ると良い。どうせおぬしは行くなと言っても行くのであろう。後で迎撃拠点に行く際に見ると言い。ワシはこれ以上あの龍に迎撃拠点に居座ってもらっては住民達の不安を煽ると判断し討伐隊を出す事に決めた。」

「その中に俺は？」

「先ほどわしが話した内容が聞こえんかったのか？まだ落ち着きが足りんようじゃのう。どれもう一発…」

大長老は腕まくりをすると席を立とうとした。その腕はすさまじいオーラを纏っている。

「ちょっ！！待って！！ちゃんと落ち着いて聞くから！！どうかその拳をお納めください。」

ジュノは必死に謝罪をすると大長老は椅子に再び腰掛けた。

「討伐隊は龍の生態に詳しいブロードとフラウそしてお主。後は新しくレジェンドラスタになった者の４名じゃ。」

「新しいレジェンドラスタ？」

「うむ、すでに3人は迎撃拠点行きの気球船ドック内に居る新しいレジェンドラスタにはその時会えばよかろう。お主も早く支度をして向かうのじゃ。」

「りょーかい！」

気球船ドック　内部

気球船ドックに着くとそこにはすでにブロードとフラウが待機をし何やら資料を片手に話し合いをしていた。近くまで寄るとジュノの存在に気づいたのか話し合いを中断しこちらに向きなおった。

「あっ先輩！お久しぶりです。」

「ジュノさん久しぶり～。」

「おぉ、久しぶりだな。ん…噂の新人レジェンドラスタちゃんは何処かな？」

「はぁそれなんですが…まだ来てないんですよね。まったく一大事なのに。」

「えぇ～・・・・」

「今日メゼポルタに来たばっかりだからきっと道に迷ってるんだと思うよ。ジュノさん探してくれる～ボク達はここで情報の整理してるから。」

「えぇ～…まぁ良いけどさ。その子の特徴と装備と名前は？」

「えっとね～女の子で赤いリアンシリーズ装備で狩猟笛を装備してるよ～名前は…チルカちゃんだって！」

「あぁ！あの子ね。今日配属だったのか…わかった。急いで探してくる。」

ジュノはチルカの情報をフラウから聞き出すと気球船ドックを後にし急いでメゼポルタ広場へと足を運んだ。

メゼポルタ広場

広場は慌ただしく防衛拠点に襲撃している謎の龍に関しての情報を聞こうとしているハンター達で溢れかえっていた。受付嬢もそのハンター達の対応に追われていてとてもチルカの事を聞けるような雰囲気ではなかった。

「（困ったな…デメちゃんかユニスちゃんヒルデちゃん辺りに聞けば一発だと思ったんだけどなぁ…あぁエフィーちゃんがまだ残ってたか！）」

そう思いいつもメゼポルタの入り口で様々な人々に笑顔を振りまいているエフィーの所へ行こうとしたがエフィ―の所にはハンターとメゼポルタの市民が集まって近寄れない状態であった。

「（おいおい、こっちもかよ…それにしても皆良くこの状態で笑顔を崩さないよな～一人を除いて。にして困ったぞ…）」

ジュノが困り果てた状態でその場に立ちつくしているとキャラバン方面へ続く入り口付近に佇む門番に道を聞いてはおろおろしている狩猟笛を装備している赤いリアンシリーズを装備をした女の子が居た。

「どうしてさっきから気球船ドックにつかないんです～！？私急がないと行けないんですよ～。」

「いや、私に言われましても…ともかくここから先はキャラバン区

ですよ。気球船ドックは大衆酒場に入って・・・・」

「（絶対あれだな。あれに違いない。）」

ジュノはそう思い赤いリアンシリーズを装備したハンターに声をかけた。

「お嬢ちゃんが、チルカちゃんかい？」

「そうですけど。なんですなんです～？貴方誰です～？」

「ギルドナイトのジュノだ。お嬢ちゃんとこれから迎撃拠点の龍を一緒に討伐しに行く手筈になってるはずだよ。」

そう言うとチルカは懐から何やら書類を取り出した。どうやら今回発行された任務に参加するメンバーを確認しているようだ。

「あぁ～！！貴方があのジュノさんですか～今日からレジェンドラスタとして配属する事になっ・・・・」

「急いでるんだ！挨拶は後。気球船ドックに行くよ。ついて来て！！」

そう言うとジュノは駆けだした。しかし後ろを見るとチルカはそこには居なかった。ジュノは慌てて引き返すとチルカはまたキャラバンの方向へと歩いていた。

「（なんであっちに行るんだよ…まぁこの人だかりだから仕方ないか…）」

ジュノはチルカの元へ戻るとチルカの有無を言わせずチルカの手を掴み駆けだした。

「わぁ！？何をするです！？」
「人を待たしてるんだ、悪いけどこのまま行くよ！！」
「あっちょ待って！とまてー！！」

チルカの制止の言葉もむなしくメゼポルタに木霊しながらジュノは気球船ドックへと走り出した。

気球船　ハンター控室

なんとか気球船ドックにたどり着いたジュノとチルカはフラウとブロードと合流し迎撃拠点へと向かう気球船へと乗り込んだ。気球船責任者は案の定ダルカン船長だったのでジュノは船長に謝罪の言葉を述べてからハンター控室へと向かうとチルカがフラウとブロードに自己紹介をしていた。

「遅れてすいませんでした。本日からレジェンドラスタとして皆さんと働かしてもらいますチルカです。よろしくお願いします。主要武器は狩猟笛です！狩猟笛いっぱい吹いてお手伝いするです！」

「ボクはフラウ。双剣使いのレジェンドラスタだよ～レジェンドラスタのことで何か解らない事があったら何でもボクに聞いてね！こっちの人はブロード！！大剣使いのギルドナイトなんだよ～」

「はい！よろしくお願いしますです。先輩！ブロードさん！」

3人は一通りの挨拶を終えたところでジュノの存在に気づき引き続きフラウはジュノの紹介もしてくれた。

「あっこの人はジュノさんでね～」

「知ってますよ！化け物見たいに強いんですよね！私の前受付嬢してた村でも話題になってましたよ。厄災ともいわれる古龍を倒しまくってる化け物みたいなハンターが居るって。」

「ハッハ―！！化け物か～確かにそうだな！！しかし遠く離れた村でも有名なんだな俺！」

「ええ～そりゃもう凄い有名ですよ！」

「そうかそうか。しかし色々と走り回ったせいで喉が渇いた。ちょっと飲み物飲んでくるわ。」

そう言うとジュノはハンター控室を後にし飲み物を探しに気球船内をうろついた。ハンター控室にはジュノを除く3人が残った。チルカは自身が村に居た時のジュノの噂を二人に披露していた。どうやらあの噂の人物と一緒に狩猟ができて興奮しているらしい。チルカがジュノの話題を話している時にブロードとフラウは作り笑いをしていたが話のきりをみてブロードがチルカに話しだした。

「チルカさんだっけ、あのね…あまりジュノ先輩の事を化け物呼ばわりしないで欲しいんだ。確かにあの人は厄災と言われる古龍を倒す程とても強い。それで大体多くの人から英雄視されてる、でもハンター内やギルドナイト内ではその強さ故からか強さへの嫉妬から化け物呼ばわりされてるんだ。あの人とっても優しいからいつも勝手に言わせとけって言って気にしてない素振りをしてるけど、本当はとっても気にしていると思うんだ。だからあの先輩の前ではあまり化け物って言わないでほしい。」

ブロードの話を聞いたチルカは黙りこんでしまった、それを見てかフラウはその場に立ちチルカの助け舟に回った。

「ま…まぁチルカちゃんは、今日メゼポルタに来たばっかだし知らなくて当然だから仕方がないよう。それにブロードもチルカちゃんにちょっと言い過ぎじゃないの～？」

「そ・・そうか、すまんチルカさん。でもあの人の事をあまり化け物って言わないで上げてほしい。」

「・・・いえ、ブロードさんは悪くありません。誰だって化け物って言われたら嫌ですよね。私、ジュノさんに謝ってきます。」

そう言うとチルカはハンター控室を後にした。

気球船　デッキ

デッキではジュノが一人飲み物片手に景色を見ていた。

【あぁあの化け物か。】

【あいつは化け物だからな…】

「・・・・」

ジュノは思っていた、今までは大長老や古龍書士隊隊長達の手で自身は皆から迫害を受けずにすんでいたが。昨今発覚した自身の出生の事実、確かに母と呼べる人物が居た事は嬉しかった・・だがそれ以上に自分の存在が本当に化け物と同じと言う事に…自分を作り出した時に母は言っていた【アンサラ―も人と一緒に歩んで生きていく時代が来る】としかしジュノは少し人に恐怖していた。もし自身の能力や存在を洗いざらいメゼポルタの人々にに告白したとしたら、少なくても少数はジュノを擁護してくれる人は出てくるだろうが大多数の人が旧人類時代に起きたアンサラ―処理賛成法のようにジュ

ノをモンスターと認定し襲いかかってくるに違いない。その時自分はどうなってしまうのか・・・・

「（考えたくもないな…）」

そう思いジュノはデッキを後にしようとした時デッキのドアが開かれチルカがもじもじしながら入って来た。

「なんだ、トイレか?トイレはデッキをでて右の通路を行ったところの・・・・」

「違います!」

「?じゃあなんだ?」

しばし沈黙が続く・・ジュノにとってこの沈黙は早く脱出したい気持ちでいっぱいだった。何か話題を振らなければと頭をフル回転させる。

「あぁ!!そうだ!!チルカちゃんが今回持ってきた笛!!天狼笛【天津風】!!あれって音色が良いよね。実は俺も色んな狩猟笛持っててあの笛も持ってるんだよ~チルカちゃんは他にはどんな笛持ってるの?」

笛の話題となるとチルカは今まで暗かった顔色を変え明るい表情となったどうやら危機は脱したらしい。

「えっそうなんですか!!えっとですね~げねぽおるデラックスにマドロミオ―ボワに幻雷笛【天鼓】に炎妃笛【妖艶】が取りあえず今メゼポルタに持ちこんであるものです。」

「おぉ!!今紹介してくれた笛みんな作ってるよ!!特に炎妃笛【

妖艶】は綺麗な音色だよね～」

「そうです！！そうです！！ジュノさんとは狩猟笛との好みが合いそうです！！」

「（あっ…謝る機会が…でもいつでも謝れるし良いよね。）」

何とか沈黙からの危機を脱したジュノはその後チルカと共に狩猟笛に関しての話を熱く語らいながら気球船は迎撃拠点へと向かうのであった。

38節　新人レジェンドラスタ（後書き）

今日は台風一過おかげか天気が良いですね～。私は晴れてて涼しい日が好きなんですよね、昔は天気の好き嫌いなんてなかったんですけど今年に入って雨の日が一番嫌いになりました。それは今年からなんですけど窓枠から雨漏りするようになったからなんですよとりあえず応急処置として雨漏りする所にタオル敷き詰めてあるんですけどね。しかし昨日は台風だったので夜遅く帰ったら案の定窓枠から雨漏りがひどくて部屋がびしょびしょになってましたよ～。

３９節　マグネットイズム（前書き）

先日通販でジャージとか買ったんですけど、届く前に涼しくなっちゃっいましたね。早く来てくれＮＥＷジャージ！！

39節　マグネットイズム

迎撃拠点

４人は迎撃拠点へと到着すると、多くのハンター達が負傷しネコ台車で運ばれてきていた。その中で見知った顔をジュノは見つけ話を掛けに行くため3人をその場に残し見知った顔の人物たちに声を掛けに行った。

「よ！ギネルのおっさんに悪…リアちゃん！」
「おぉ！ジュノかお前さんも迎撃拠点を守りに？」
「だなぁ、おっさんやリアちゃんが手こずるほどの強敵なのか？」

「はい、アタ・・私達はハンターさんと共に狩りの同行をしてたのですが。あの野・・モンスターブロードさんの報告書に書いてあった通り角は折れてたので前に襲ってきた個体と同一かと思われますが力がどうも通常種とは違うようでおそらく剛種個体に変異したのかと。」

「大剣のお嬢さんもそう思ってたか。実は俺様もそう思ってたんだ。こんな結果じゃあ遠くから弓で撃つことしかできないお嬢さんに顔向けできんな！ガハハハッ！」

「そうか、まぁ二人とも雇い主さんの所に行ってやって励ましてやってくれ。後は俺達４人が何とかする。」

そう言うとジュノは残してきた3人の元へと帰った。

「どうやら今回の相手は剛種個体みたいだな。」

「そうですか…前撃退した龍とは違う個体なのか…？」

「いや、角は折れてるみたいだから前お前たち二人が撃退した時と同じ個体だろう…まぁ力を蓄えてお前たちに復讐しに来たってところかな？ともかく各自準備が終わったら拠点へ急ごう。」

４人はベースキャンプへ行き各自装備やアイテム類を整えるとキャンプをで迎撃拠点へと向かった。迎撃拠点の広場へ向かうと様々な武器が広場に散乱していた、おそらく先の戦いで敗れたハンター達の者だろうその散乱している武器の先に輝く粉塵を捲いて淡く光る金色の翼を羽ばたかせている角の折れた龍が一匹居た。それをみたブロードが静かに呟いた。

「奴だ…ルコディオラだ…」

ルコディオラ　別称　極龍

「光る翼で浮遊するもの」「輝く粉塵」などと以前よりメゼポルタの各地で伝承が伝わっていた古龍。それがクシャルダオラやテオ・テスカトルの特徴と酷似していたために誤った伝わり方をされたものと思われていたが、近年になって目撃情報が相次ぎ、いずれにも該当しない新種の古龍であることが確認された。

「皆さん、あいつは磁力を自在に操る古龍で俺達の纏っている鉄製の武具や瓦礫は奴に引き寄せられたり飛ばされたりして危険です。後鉄分を含んだ岩石を自身の周りに浮遊させ防御手段として用いたり攻撃手段としても使ってきますから注意してください。それともしあいつが本当に剛種個体ならとんでもない攻撃をしてくるはずです。注意してください。」

「「はい」」

「うーす」

「それじゃあ行きましょう！！」

４人は極龍に向け走り出した、今回の作戦としては珍しくブロードが立案し、まずチルカが攻撃旋律及び防御旋律を吹きつつ極龍の頭を攻撃しスタンを狙う、後の３人はチルカに極龍のスタンを取りやすくすべく足や羽を集中攻撃すると言う作戦だ。極龍もこちらの存在に気づき周辺に磁場を発生させ様々な瓦礫や岩を浮かび上がらせ咆哮と共にこちらに向かって物を飛ばしてくる。４人は飛ばされてきた物を回避しながら極龍の元へと近づく。

「まずは小手調べだなっと。」

そう言うとジュノは極龍に向けて一太刀を入れようと力を込め極龍の脇腹目掛けて攻撃をする、がしかし次の瞬間ジュノは極龍の磁力を操る力によって極龍から遠く離される。

「おぉ！！こいつはすげぇな！！」

と思った次の瞬間またジュノは極龍の磁力によって引き戻されるその先に見えた物は極龍が自身の鋭利な爪をジュノに振りかざす姿だった。ジュノは横に回避しようとしたが極龍の磁力によって体は言う事を聞かず極龍の爪に吸い込まれるように攻撃が当たろうとした次の瞬間だった目の前に大剣を構えたブロードがジュノの前に現れ極龍の攻撃を大剣でガードしたのである。

「大丈夫ですか！先輩！？」

「おぉ！！助かった！！」

大剣で極龍の攻撃をガードしたブロードはすぐさま極龍から距離を置き大剣を構えた。ジュノも同じように一旦極龍から離れ呼吸を整える。

「奴はああやって磁場を操り自身の懐までハンターを引き寄せ攻撃を放ったり、突き放してきます。後離れ過ぎても厄介ですブレス攻撃や磁場を使って対象のハンター目掛けて岩を隆起させてきます。」

「うわっ…攻守万能ってことかよ…なるほどなぁ…おっと!!!」

極龍に関してのブロードの情報を聞いていると極龍は二人の直線状に岩を隆起させる攻撃を放ってきた。二人は交互に違う方向へと回避する。

「（ほんと、やっかいだな…良くブロード達はこんなのを撃退したなぁ…）」

【ｈｅ ｉｓ ａ ｆｏｒｍｉｄａｂｌｅ ｅｎｅｍｙ. Ｐｏｗｅｒ ｉｓ ｌｅｎｔ.】

「あっ？」

ジュノの頭の中にこの前能力を使った時に聞こえた声の様な音が響く、その声が聞こえた瞬間体から力が溢れだすのをジュノは感じた。それは能力を使った時とはまた別の感覚であった。

「どうしました？先輩？」

ジュノの様子がおかしい事を感じ取ったブロードが話しかけてくる。

「ん～妖精さんが今頭の中に入って来た。」
「はぁ？こんな時に何言ってんですか…それよりもフラウ達に任せきりじゃ俺達の顔が立ちませんよ！」
「だな！おっし行くか！！」

二人は再び極龍の元へと駆けだすそこには支援旋律を吹き終え極龍の頭に笛を殴り付けているチルカと鬼人化をし肉体を限界まで酷使し極龍に切り付けているフラウの姿があった。二人も極龍の放つ磁力の影響で思った通りに攻撃が当てられないようだった。そこでブロードは極龍目掛けて閃光玉を投げつける。すると極龍の視界は奪われ錯乱状態となり磁場が少し弱まった。

「今です！！皆さん！！」

ブロードの号令と共に４人はここぞとばかりに極龍に攻撃を浴びせる。するとチルカの狩猟笛での打撃攻撃が極龍の頭にクリーンヒットし極龍はスタン状態になり身を大地に投げ出しもがき始める。

「やった。スタン来ましたです！！」

極龍の拘束時間が増えさらに４人は激しく攻撃を加える。４人の猛攻に対しての痛みで極龍はその場で咆哮し始める。ここでチルカは支援旋律効果時間がそろそろ切れると判断しその場を離れ攻撃旋律を奏で始める、チルカの演奏した旋律は天狼笛【天津風】の硬質な弦によって辺りに響き渡る。ここでチルカは演奏している最中にとある事に気づいた極龍の倒れ込んでいる周辺の砂鉄が紅い稲妻を帯びつつ浮かびつつある事にそれは徐々に大量に増えていく。

「皆さん！！離れてぇ！！」

「くっ！」
「とう！！」

チルカの声と共にブロードとフラウはその場から離れ距離をとる。しかしジュノは極龍から離れようとするも体が言う事を聞かないジュノは極龍の磁場に捕えられ自由に身動きが取れなくなってしまったのである。

「おぉ！！なんだこれぇ！！」
「先輩！！！極龍の様子がおかしいです！！全力で走って逃げてください！！」
「今やってるって！！」

極龍はその場に飛び上がり中空で円を描くように飛び回る、すると極龍の周辺に赤い稲妻を帯びた円陣が浮きあがり辺りの瓦礫や散らばっていた武器がすさまじい速度で円の中心へと吸い込まれる。

「クソ！！　」

ブロードはジュノを救うべくジュノの元へと駆けていくがフラウに引き留められその場へ立ち止る。

「離せフラウ！早くしないと先輩が！！」
「だめだよ！ブロード！！ブロードまで行ったらブロードも巻き込まれちゃうよ！」

ブロードとフラウの言い争っているとチルカが代わりにジュノの元へと駆けだした。

「だめ！チルカちゃん！！」

フラウの制止も聞かずに駆けていくチルカ、ジュノまでの距離は近いようで遠く感じた。

「（私が何とかしなくちゃ、それにまだひどい事言ったのにちゃんと謝ってないちゃんと謝ってないのにこのままお別れは絶対嫌！！）」

ジュノまで後数メートルと言うとこだった後ろから引力によって引き寄せられた握りこぶし大の岩がチルカの後頭部に当たりチルカは体制を崩し転んでしまう。

「うっ…！！」

チルカが地面へ転び極龍に目を向けた瞬間極龍は辺りに響き渡るほどの大きな咆哮をし自身の操る磁力で轟音と共に周りの物を岩盤ごと浮き上がらせた。その攻撃は辺りの地形を変形させるほど強力な物で攻撃を行った後空からは瓦礫や岩そしてハンター達が残していった武器が降って来た。辺りに降り注いでいる瓦礫等と共に地面に降り立つ極龍その力そしてその姿はまさに【厄災】と言われんがままの姿であった。

「そんな…」

起きた状況が理解できずに膝を着き佇むチルカ、後頭部に触れると手が血だらけであった。

フラウとブロードは急いでチルカに近づきチルカを極龍に気づかれないよう防衛拠点の横に隣接する広場へと移動した。二人はチルカを運ぶとチルカの手当てを始めた。

「大丈夫!?チルカちゃん!?大変頭から血が!!今応急処置するから少しの間じっとしてて!!」

フラウは血に濡れたチルカの後頭部をふき取ると頭から血の出ている箇所に応急処置を施していく。するとチルカが誰かに語りかけるように口を開いた。

「・・・またやっちゃった、私何をやってもてんで駄目で師匠が与えてくれた唯一出来る事、人の為に役立てる事それが狩猟笛での援護だったのに…私また何も取り柄が無くなっちゃった・・・まだジュノさんに謝ってないのに…こんな結果になっちゃうなんて…」

「フラウ!!奴が気づいた!こっちに向かってくる!!」

ブロードの声がした瞬間極龍はとてつもない速度でこちらへ回り込み3人に向けてブレスを放つ動作をしていた。二人を庇おうとブロードは咄嗟にガードをするが間に合いそうにない。

「（ごめん、師匠…私はやっぱり何をやっても出来ない子でした。）」

チルカはそう思い目を閉じ狩猟笛を手放した。

「まったく、やってくれるよ!コレ借りるぜ!!」

「！」

目を開くとそこには狩猟笛は無く極龍の方を見ると突然現れた男に狩猟笛によって頭を殴られブレスの軌道を変えられていた極龍姿が飛び込んできた。

「ハッハ―！！！これでも食らってオネンネしてな！！」

男の手に握られた狩猟笛によって物凄い早さで左右に頭を揺さぶられる極龍、その衝撃からか頭の縁を象っていた角は徐々に欠けていきやがて極龍はスタン状態に陥る。

「ほら、返すぞ。」

男は借りていた狩猟笛をチルカに投げ返し3人に歩み寄る。

「先輩！！」

ブロードが歩み寄るその目は少し涙で潤んでいる。

「ヒュー！！ベースキャンプまでぶっ飛ばされて、鳥になった気分だったぜ。しかし困った飛ばされた拍子に双剣どっか吹き飛んじまったよ。」

「ジュノさんあの攻撃を受けて良く無事だったね。でも武器がないんじゃここは一旦引いた方が…」

フラウの口を指で押さえジュノは周りを見て少し考える、周りにはハンター達が残していった武器や瓦礫が散乱している。するといい案が思いついたのか顔がニヤリと笑いだす。

「なるほどね、選び放題って訳だ!!」

「チルカちゃん、大丈夫そう?支援旋律の方任せられる?」

「・・・はい!!大丈夫です!!」

「ヒュー!!流石レジェンドラスタ!!フラウちゃん!!ブロード!!このまま一気に押し切るぞ!!」

「えっ!先輩、武器も持たずに・・・まさか!」

「ご明答!!始めよう!!新種の古龍様と戦う事ができるとは素晴らしい幸運だ!」

ジュノは道に放り出されていた太刀を握りしめると極龍に向けて駆けだし渾身の力を込めた突きを繰り出す。

「ハァ!!!」

ジュノの放った突きは極龍の甲殻を突き破り右前脚へと突きささる。そこへすかさずブロードとフラウは追撃を加える。身の危機を感じたのか極龍はまた磁場を作り出し周りに瓦礫や岩を纏いそして全てを吹き飛ばすブロードとフラウはその衝撃により極龍のより少し離れた場所に身を移動させられたが二人が移動している方向の逆をジュノは突き進み極龍の方向と共に飛んできた大剣を空中で掴み横に回転しながら極龍に攻撃を加える。極龍はその攻撃に構わず支援旋律を吹いているチルカに向けてブレスを放とうとする。しかし

「どこ見てんだ?役者はこっちだぜ。お嬢様?」

ジュノは瞬時に極龍の前へ移動し下弾からの放った強烈な溜め切り

を極龍の頭目掛けて放つそれと同時にジュノは中空へと浮きあがり大剣をまた極龍の頭目掛けて振り下ろす。

「砕けろ！！」

ジュノ大剣の一撃とも極龍の頭を縁取っていた角は完全に砕け散る。しかしジュノの攻撃は止まない大剣をまるで棒きれを振るかの如くすさまじい早さで極龍に切掛かる、その際極龍の様々な箇所から血しぶきが飛び肉片が飛び散る。極龍も最後の抵抗か再び赤い稲妻と共に極龍の周りに円陣が浮かびあがる。

「その手はもう食わねえよ！」

ジュノは極龍の尻尾に一撃を喰らわすと極龍は円陣を解き尻尾を切断された衝撃で前のめりとななり地に体を投げ出す。

「さぁ！！終幕だ3人とも行くぞ！！」

その合図と共に鬼人化したフラウが極龍に向けて乱舞を加えるそしてブロードは精神を集中させ渾身の溜め切りを食らわせる。その壮絶な攻撃を食らってか極龍は翼を羽ばたかせ空へと羽ばたきその場から逃げようとしたその時だった突然極龍の目の前が暗闇に染まった。

「たぁ―！！！」

その暗闇の正体それはチルカが放った狩猟笛による渾身の力を込めた叩き付けだった。チルカの打撃攻撃を食らった事によりよろけながら極龍は巨躯を大地の横に倒し痙攣している。ジュノはそれに近づき極龍の首目掛けて剣を突きたて極龍は絶命し迎撃拠点での戦い

は幕を閉じた。

気球船　デッキ

迎撃拠点を襲った極龍ルコディオラの遺体は古龍書士隊の隊員がすぐさま駆けつけ処理をしていった。今回襲った極龍は書士隊の話によるとやはり剛種個体と断定され後で各自に極龍の素材を受け渡すとのことだった。ジュノの狩猟途中で無くした双剣は迎撃拠点の隅で発見され刀身にヒビが入っていたので修理に出されることとなった。

「（またあの音が聞こえた…今度は能力を発現した時と同等の力が発現した…まぁそのおかげであの攻撃の中何とか回避ができたわけだけど…なんか怖いな…今度アイリスに体の調子を見てもらおう…）」

そう考え夕陽を眺めているとデッキの扉が開かれる音がしたそこにはもじもじしたチルカが立っていた。

「どうした、またトイレか？トイレはそこを出て右の通路を…」

「違いますぅ！！プー！！」

「じゃあ、なんだ？あっもしかして俺が笛使った事で笛の調子が悪いとか？」

「そうです。あれから笛がギューンギューンって言うんです。って違います！！」

「・・・じゃあなんだ？」

「その…化け物って言ってすいませんでした。ジュノさんの気持ちも知らずに…」

「・・・なんだそんな事か、いいって気にすんなよ。俺もそんな気にしてないしさ。」

「・・・・」

またしてもしばし沈黙が続くジュノが最も苦手とする沈黙だ。

「（まずい、狩猟笛の話は行きに使っちまったしもう何も引き出しがねえぞ…）」

「・・・やさしいですね。」

「おっ？」

「私初めての仕事がジュノさんと一緒で良かったです。今日はありがとうございました！！」

そう言うとチルカはデッキを後にしデッキにはジュノが残された。

「…やさしいか、もし優しい化け物なら皆は俺の事を受け入れてくれるのだろうか・・・」

ジュノは夕闇を見ながらふと湧いた疑問と共にメゼポルタへと向かっていくのであった。

39節　マグネットイズム（後書き）

今日は三連休の始まりですが皆さんはどこかに出かけますか?残念ながら私は大学でお勉強です・・・・
ちょっと最後の方を編集しました。

４０節　王の依頼（前書き）

涼しくなってきましたねぇ。私の住んでる地区ではひぐらしはあまり鳴かないんですけど。（ちょっと山間の方に行けば居ますが）今さっき家の近くでヒグラシが鳴いてました。もう夏は終わりですね。

40節　王の依頼

メゼポルタ　求人区　郊外

「フッ！！ハッ！！ティ！！」
「そうそう、そんな感じでベルキュロスの様に舞うようにそしてたまに妖艶に」

極龍の一件から数カ月今メゼポルタは比較的平和な時を歩んでいる。
ジュノもユーノにお願いされた双剣の稽古を毎日付けてやっている。
ジュノ自体も弟子を持つ事は初めてなのでルシャナ師匠に教わった出来事を出来るだけ思い出してユーノに教授していると言う状況だ。
ユーノの舞いの様子を見ているとトコトコとサブローがやって来た。

「ニャー！！ご主人様二人分の元気ドリンコ持って来たニャ！！」
「おぉ！そこに置いといてくれ。」

「あっ！あとマイトレ管理人のお姉さんが雑草が生えて来たから狩りとって置くって伝えておいてって言ってたニャ！！」

「あぁ、あの豆かサブローマイハウスのアイテムボックスからガルルガの鱗とってあの豆に渡しといてくれ。」

「ニャー！！わかったニャ！！あとたまにはマイトレに顔出してあげないとお姉さんがかわいそうだニャ。」

「わかった。ともかく鱗の件頼んだぞ。」
「ガッテンニャー」
「さて、おーい！！ユーノ休憩だ。」

そう言うとユーノは舞うのを止めフラフラになりながらこちらへと近づいてくる。身に纏っている装備の胴と頭の部分だけを急いで外すると湯気が立ち上りインナーまで汗びっしょりのユーノが姿を現した。

「はぁはぁ、どうでした?今の舞いは?」

そう言い元気ドリンコの封を切りドリンコを口に運ぶ。

「うーん…まだ演武じゃないな～でも良い線行ってるよ。」

「ホントですか!!」

「うん、最初の頃よりかはずっといいね!よしじゃあ防具と武器装備して広場５００本走り込みね。」

「うっ…はい…」

「はいはい、そんな嫌な顔しないで双剣はスタミナが命なんだから。ほら走った走った。」

ユーノは直ぐに防具と武器を装備し広場を駆け始めた。ユーノに双剣の稽古をつけてわかった事それはユーノは意外と双剣の扱いが上手い事だ独学で今まで影ながら稽古して来たので変な癖は付いていたがセンスは十分ある。

【ｉｔ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｂｅ　ｐｌｅａｓａｎｔ.】

「――!」

ジュノの頭の中にまた声とも聞き取れる音が響き渡る、極龍との戦いの後ジュノはアイリスの元へ行き頭の中に変な音が響くから調べてくれと簡易的な調査をしてもらった。しかし何も異常を示す値は検出されなかった。そう何も・・アイリスはその結果を不審に思い引き続き調査に当たると言う事でこの頭に響く音の件は今膠着状態

にあるのが現状だ。

「（何なんだろうな…この音…）」

ジュノは考えに耽っているとジュノ達の元にブロードが歩み寄って来た。

「頑張ってますね、ユーノさん」

「だなぁ。んで何しに来たブロード？フラウちゃんのことならフローラちゃんの所へ行け。」

「違いますよ…先輩が頼んでた先日の極龍の素材を使ったライトボウガンが出来上がった件を知らせに来たのと後仕事の件です。」

「良い知らせと、悪い知らせか・・・じゃあ悪い方の仕事の件について教えてくれ。」

「あれ、珍しいですね。仕事の事に興味持つなんて。」

「今までの俺のお目付け役はあんまり厳しくなかったんだがお目付け役が変わってな、シン君になったんだよ。だから多少真面目に働かないと後が怖い。」

「あぁ…シンさん怒ると怖そうですからね…それで仕事の件なんですが王都ヴェルドからの要請でギルドナイトを派遣してほしいとの事です。」

「王都ヴェルドなんてモンスターと無縁の場所じゃないか。何でまたギルドナイトを派遣する必要があるんだ？」

「それが、マーシレスご存知ですよね？」

「あぁ、あの腐れ猟団だろ。あれがどうした？」

ブロードと話しているとガシャンと何かが地面に落ちる音がした音のした方向を見てみるとユーノがへばって地面に倒れていた。

「あっ、まずいまずい。大丈夫か～ユーノちゃん。」

ジュノはユーノを抱き上げすぐさま木陰にユーノを避難させユーノを覆っている防具を外す。防具を外したユーノは汗だくで顔が真っ赤であった。

「どこか体が変なところある？ユーノちゃん？」

「・・・頭…痛くて…だるいです…」

「うーん、脱水症状かな？ちょっと待ってて。おいブロードユーノちゃんをちょっとの間見ててくれ。」

ジュノはマイハウスに戻りサブローと共に団扇と塩を混ぜた冷たい水を持ってそれをユーノに飲ませた。

「これで少しは良くなるはずだけど…まぁユーノちゃん今日の訓練はこれ位にしとこう。サブローはその団扇でユーノちゃんを扇いでやってあげて。」

「ガッテンニャー！！」

サブローの扇ぐ団扇によってユーノの前髪が揺れる、ユーノは自力で水を口に含んでいるのを見る限り大丈夫だと判断しジュノはブロードに話の続きを促した。

「それで話の続きですが今回王都ヴェルドで第一王女のエレノア王女の生誕２３年を記念してのパーティが開かれるのですが、それにマーシレスの連中がですね不穏な動きを見せてるとの事でギルドナイトの派遣要請が来たんですよ。」

「不穏な動きねぇ…で具体的にはどんな？」

「王女誘拐とかですかね・・・・・・」

「しょぼい仕事だな・・・他のギルドナイトに回せよそれ・・・・」

「それが・・・国王から指名されてるんですよ。先日の古龍を撃退したギルドナイト二名と数ヶ月前に起きたヨハネスの件で黒龍を討伐したハンターを寄こせと。」

「えぇ～なんでそんな事知ってんの？」

「さぁ先日の古龍の件はなぜ国王が知っているのか分かりませんが・・・黒龍の件は戦った場所のシュレイド城は王都ヴェルドに近いですからね。多分誰かの耳に入ってそれが国王の耳に伝わったのでしょう」

「やだな～アイルーの居ない場所には行きたくないよ～それにユーノちゃんの修行見なくちゃいけないし…」

「フフ…ホント…アイルーが好きなんですねジュノさん…」

体が回復したのかユーノが話に加わって来た。まだ顔は赤いがさっ

きほど具合は悪くなさそうである。

「おっ、回復した。体の具合は？」
「はい…なんとか。すいません…」
「良いって良いって。技術身につける前に体壊しちゃ元も子無いからね。しばらくそのまま休んでなよ。」
「わかりました・・・・」

そう言うとユーノは目を閉じサブローの扇ぐ団扇の風に当たり始めた。

「それで先輩、どうします？」
「どうしますって…行くしかないんでしょ？国王直々の御指名だもの…」
「まぁそうですよね。わかりました本部には俺が行くと報告しときます。それと出発は明朝で滞在期間は1週間位だそうです。」
「うっ・・・急でながい・・・わかった。国王には喜んで御伺いさせてもらいますとでも手紙に書いて伝書鳥飛ばしといて。」

ブロードはその言葉を聞くとギルド本部へと駆けていった。残されたジュノはユーノを眺めてた。

「ユーノさんはガンバリ屋さんだニャ！！」

「そうだな。さてユーノちゃん俺急な仕事が入ったから一週間サボらずしてね。じゃあ俺武器工房に出来た武器取りに行くから。悪いおじさんに声かけられない様にマイハウスに帰るんだぞ。」

「・・・・・」
「ん？ユーノちゃん？」

「寝てるみたいだニャ。」

ジュノはやれやれとした表情を見せユーノを起こさない様に抱きかかえ広場からマイハウスに向けてサブローと共に歩いた。

「そう言えばユーノちゃんのマイハウスどこだ?」

「ウチに運べばいいニャ!!」

「だな!じゃあ行くか。」

ユーノを抱えながらジュノとサブローはユーノの事を話しながらマイハウスへと歩いて行った。

メゼポルタ　マイハウス　ジュノ邸

「・・ここは・・?」

「アッ!!目が覚めましたかニャ?ユーノさん。」

「サブロー君…って事はここはジュノさんのマイハウスか…」

ユーノは辺りを見回す、ジュノのマイハウスはユーノのマイハウスと比べるととても遊び心漂う内装であった。

「フフ・・なんだか子供部屋見たい。」

「ご主人様の性格がよく出てますニャ!!」

「そうだね。特にこのアイルーの枕とかジュノさん好きそうだもんね。ところでサブロー君ジュノさんは?」

「ニャ!!ご主人様は武器工房に制作を頼んでおいた武器を取りに行きましたニャ!!結構前に出ていったからもうすぐ帰ってきますニャ!!」

「そっか…じゃあ待たしてもらおうかな。」

そういいしばらくベットに腰かけているとマイハウスにライトボウガンを片手にジュノが帰ってきた。

「あっおかえりなさい、ジュノさん。」
「おっ、目が覚めたか。体の具合はどう?ユーノちゃん?」
「はい、おかげさまで大丈夫です。それにしてもなんか凄いライトボウガンですね・・・」

ユーノはベットから腰を上げるとジュノの元へ近づきジュノの持っているライトボウガンを指差した。

「見せてもらってもいいですか?」
「ん?あぁいいよ。重いから気をつけてね。」

ユーノはジュノからライトボウガンを手渡されるとライトボウガンを隅々までみたそのライトボウガンは基本構造は今までのライトボウガンと一緒だが外装が他のライトボウガンと比べ異質な雰囲気を漂わせ銃身が時より鼓動するように紅く光っていた。

「これ先日の極龍の件での素材で作られたものですか?なんて名前のライトボウガンなんですか?」

「えっと、たしかニゲル＝フルグルって名前だったかな。なんか貫通弾が超速射対応されてて今までの貫通弾超速射ボウガンより凄く強力なんだって。あっそんな事よりも!」

ジュノはユーノに大事な事を伝えなければならない事を思い出しユーノの前の方にある机に腰かけた。

「実は俺ね、ギルドの命令で明日の朝から一週間位任務で王都ヴェ

ルドの方に行かなきゃならなくなっちゃったんだよ～だから俺が居ない間ちゃんと今までやって来た練習メニュー一式毎日ちゃんとやっててね。あと今日みたいに体の調子が直ぐ悪くなったら直ぐに練習止めて水分補給しないとダメだからな。」

「わかりました、師匠。それにしても王都ヴェルドなんてモンスターとは無縁の大都会じゃないですか。なんでまた行く事になったんです？」

「あぁ～いろいろあるのよ、いろいろと。じゃあ俺明日朝早いからユーノちゃん一週間自主トレ頑張ってね！！」

「はい！お土産期待してますね。それじゃあおやすみなさい。」

そう言うとユーノはジュノから受け取ったライトボウガンをジュノに手渡すと自身のマイハウスへと帰っていった。

「・・・・」

「大丈夫。お前にもお土産にマタタビ買ってきてやるから！！そんな目で見るな！！」

「ニャニャ！！流石ご主人様僕の考えが読めるとは流石だニャ！！」

「まぁねぇ～それじゃ俺寝るから後はよろしくなサブロー。」

「ガッテンニャー！！」

そう言うとジュノは明日に備えて寝る事にした一体王都ヴェルドではどんな事が起こるのかを想像しながら目を閉じた。

４０節　王の依頼（後書き）

王都ヴェルドはモンハンの設定集の中で実在する都市なんですよ。
まぁメゼポルタはどこにあるのか確認できませんでしたが・・・・
きっとドンドルマの近くにあるんだと思いますよ。たぶん…

４１節　王都ヴェルド（前書き）

スマートフォンでのこのサイトの表示が少し変わって戸惑っています。

41節　王都ヴェルド

メゼポルタ　ジュノマイハウス

日の出の薄明かりがジュノのマイハウスに光を差し込める。今日の朝ジュノは王都ヴェルドに向けて任務をしに行く予定だ。給仕アイルーのサブローもまだ寝ている、すると鍵がかけられているマイハウスの鍵がゆっくり開けられドアが開きマイハウス内に誰かが侵入してきた。給仕アイルーのサブローはその意外な侵入者にいち早く気づき声を上げようとするが。

「しー・・」

その意外な侵入者に口止めをされる、侵入者はジュノに気づかれないよう細心の注意を払いながらジュノの寝ているベットに近づく。そしてベットの前に立つと深呼吸をし耳元まで口を近づけようとしたその時。

「・・・良いルームサービスだ。チップ次第でキスは付くのか？ヒルデちゃん？」

「わっ！！！なんだ気づいてたの～？ちぇ！ざんねーん。いつから気づいてたの？」

「マイハウスのドアに鍵を指した音で気づいたよ、もう少し気配の消し方を勉強するんだな～」

「クエスト受付嬢にそんな技術必要ありませんよーだ。」

ヒルデは腰に手を当てて笑いながらジュノにそう言った。ジュノはヒルデにある事を尋ねた。

「んで、チップ次第でモーニングキッスは付くのか？」
「そんなの付くわけないじゃな～い。あはは！！！」
「あっ…そうなの…」

気球船　ハンター控室

気球船は二人のギルドナイトを乗せ空を駆けていた日はまだ地平線の低い所に位置している。ジュノはハンター控室の窓の脇に背もたれながらあくびをしていた。

「眠い。」
「まぁまだ日が昇ったばっかですからね。ところで先輩何故狩猟武器を二つ持ってきてるんですか？」

ブロードはジュノの横に置いてある狩猟弓のシスネ＝ダオラ？と太刀のエール＝ダオラ指差した。

「あぁ、いやほら今回ヴェルドに滞在する時期が長いじゃない。だから暇つぶしに久々に弓と太刀使って遊ぼうかな～とね。」

「遊ぶって…今回ヴェルドに行くのはマーシレスの連中が不穏な動きを見せているからその動きを未然に食い止める為に行くんですよ！旅行じゃないんですよ！」

「わかってるって、それにしてもホントにマーシレスの連中現れるのか？案外本当はエレノア王女に熱心な奴が流したデマが大きくなってマーシレスの連中が～でくだりじゃないの？」

「それは…その可能性もあるかもしれないですけど…」

「まぁ、いいやともかくヴェルドに着いたら起こせよ。俺は寝る、起こすなよ！ただでさえ朝早くにヒルデちゃんにマイハウス訪問されて眠いんだからな。」

そう言うとジュノはハンター控室の隅に座り壁に寄り掛かり目を閉じた。気球船の緩やかな揺れが心地よくジュノは直ぐに寝息を立てるのであった。

王都ヴェルド

王都ヴェルドそこはモンスターとは無縁の都市国家であり西シュレイド地方最大の都市である。城塞都市とも呼ばれ、街の全方位を囲む物々しい外壁や大砲、バリスタが特徴である。街は一見、賑やかに見えるが経済力に乏しい市民は厳しい生活を送っているのが現状である。ジュノ達は気球船を降りるとすでにヴェルドからのジュノ達を迎える為の馬車と迎えの者らしき男達が立っていた。

「ようこそ王都ヴェルドにお越しいただきました。私は国王の命により貴方様方を御向かいに上がった者です。迎えの馬車を用意しておりますのでどうぞお乗りください。」

男に馬車に乗るよう促されるとジュノ達二人は馬車へと乗り込み馬車は国王の待つ城へと進みだした。馬車内では椅子に深く腰を掛けるブロードと馬車の窓から張り付くように馬の様子をずっと見ているジュノが居た。

「・・・先輩、落ち着いてください。そんなに馬が珍しいですか？」

「おぉ！俺始めてみるぞ！アプトノスと違って歩くとパッカパッカ

音鳴らして面白いな馬って奴は！！」

「・・・これから一週間嫌ってほど見る事になるんですから落ち着いて座ってください。」

「ん、そうだな。あっ！まずい！俺の荷物気球船に置きっぱなしだ！！」

「・・・さっき別の馬車に俺達の荷物を積み込んでるのを見ましたから大丈夫ですよ。」

「そうか、なら大丈夫だな。ところでブロードお前気分でも悪いのか？」

「えぇ、緊張して気分が悪いです…」

「何をそんな緊張する必要があるんだ？」

「だってあのこの国を統治する国王と会うんですよ！！それにもし本当にマーシレスの連中が現れて何かをしでかして俺達が任務を失敗すれば今後メゼポルタと王都ヴェルドの外交に悪影響を及ぼすかもしれないんですよ！！」

「そんな大声出すなよ…そんな事今から心配しても意味ないだろ？俺に任しとけって！お前は普段通りにしてればいい。なっ！！」

「・・・わかりました。」

そう言うとジュノはブロードの肩を二三回叩き再び馬車をけん引している馬を見始めた。しばらく王都内を進むと馬車が王城内へと入りジュノ達二人は城の中へと案内され謁見の間の前へと連れてこられた。

「この先に国王ゼバスティアン王とその親族の方々がお待ちです。くれぐれもご失礼の無いよう。」

「わかりました。」
「へい。」

ジュノ達を迎えに来た男が二人にそう言うと男は何かの合図をし謁見の間の扉は開かれた。
謁見の間はとても奥行きがあり部屋の両編には国王に仕える者達や護衛の近衛兵が周囲に控え、一番奥の壇上の一番上に国王と王妃が二人並んで座っており一段下には第一王女と第二王子、第三王女と王と王妃を挟むように座っていた。ジュノ達は部屋の中央へと進むと国王に仕える者の一人が声の通る声で号令をした。

「それではこれより謁見を執り行う」

そう言うと国王に仕える者は羊皮紙に書かれた口上を読み上げ始めた。ジュノとブロードはその場に片膝を立て座り込み頭を深く下げた。この時ジュノは国王とその親族達の容姿を謁見の間に入った時に見た際の記憶を頼りに心の中で感想を述べていた。

「（ゼバスティアン国王って名前長くて言いずらいなでも威厳がありそうだな～アンナ王妃は優しそうな顔してんな～第一王女・・エレノア姫だっけ…おっほ!!すっげえ美人だな。王子はルートヴィヒって言うのかふーん、第三王女はソフィーね、にしても横のブロードが…）」

ブロードはあまりの緊張感からか肩をブルブルと震わせていた。

「（ぷっ…フラウちゃんにこの姿見せてやりて～）」

ジュノは必死に笑いをこらえていると国王に仕える者口上が終わったのか。国王がジュノ達に向けて話しかけて来た。

「この度は重畳である。よくぞ参られた、二人とも表をあげよ。先ほども紹介が有ったように私はこの国を治めるゼバスティアン＝ルネサンスだ。」

国王がそう言うとブロードが国王に対して言葉を返そうとしていたがどうやら余りの緊張のせいか言葉が出ないようで口をパクパクさせている。

「（だめだ、このおっさん。しかたがないな～…）」

ジュノは心の中でブロードに対して悪態をつくと国王と向き合い口を開いた。

「国王陛下におかれましては、わがメゼポルタギルドナイトでを奉じ奉り謹んでお礼申し上げます。私はジュノ、横に控えておりますのは我がメゼポルタギルドナイトの一人ブロードと申します。重ねてご配慮いただきたく存じ奉ります。」

ブロードは一瞬ジュノの方へ振り向くと再び深く頭を下げた。

「（い…いつもの先輩じゃない。だだ誰だこの人？？？）」

「よろしい。二人ともこういう堅苦しい行事には慣れていないだろう、これ以降は自然体で振舞って構わぬぞ。」

「あっ、本当ですか？助かります～おいブロードよかったな！自然体で良いってよ！」

「はぁ…申し訳ありません国王陛下。」

「はっは！かまわぬ。しかし・・・・」

そう言うと国王はジュノをまじまじと見始めた。

「そなた声を聞くまでは男装の麗人かと思ったぞ。それで黒龍を倒したハンターは何処におるのだ？」

「あっそれ俺です。」

ジュノがその言葉言うと辺りは水を打ったように静まり返った。周囲の者達はジュノを見てひそひそと話している。

「ブロードとやらそれは真か？」

「はい、真実です。先輩いやジュノさんは幾多の古龍を退けたり討伐してますし、先日の黒龍の件もジュノさんが討伐しました。黒龍の件はジュノさんが討伐したという所を誰も見てないので少し信憑性が欠けますが黒龍が居た場所にはジュノさんと黒龍と思わしき白骨化した龍の亡骸が発見されていますから、ジュノさんが討伐したとギルド内では判断されています。」

「ううむ・・・人は見かけには寄らぬと言うが、そなたが嘘をついているとも思わぬ…真の事実か…」

「陛下。」

国王に一番近くに居る国王に仕える者が国王に近づき何やらジュノの顔を見ながら国王に耳打ちをしている。その間ジュノはずっと第二王子から視線を浴びていた。

「（サブローサボってないかな～サボってるか～…んー流石第一王女可愛いな～お話してみて～…）」

ジュノはそんな能天気な事を考えていると急に号令の係の者らしき男がその場の全員に向けて号令をした。

「以上で謁見を終了する一同礼。」

その言葉と周囲の者は頭を下げ始める。それにならってジュノ達二人も頭を下げそして国王たちは謁見の間から退室して行った。そして徐々にジュノ達の周囲に居た者たちも退出して行った。二人はどうしたらいいのか分からずその場に立ちつくしているとジュノ達を先ほど国王に耳打ちをしていた男がジュノ達に話しかけて来た。

「これからちょっとした試験をジュノ様達に受けてもらいます。」
「えっ？なんで？」
「王が望みなのです。こちらへ来てもらえますか？」
「えー。」
「国王の命です。拒否はできません。」
「先輩、ここは従うしか…」
「・・・わかったよ。じゃあ案内してくれ。」

ジュノ達はそう言うと国王に仕える者について行ったしばらく国王に仕える者について行くと男は立ち止まりジュノ達に振り返った。

「今から、貴方達には簡単な模擬戦をしてもらいます。相手は我が王国に仕える騎士団の者です。まずはブロード様からですお願いします。ジュノ様は別の場所で行いますのでまた私に着いて来てください。」

「ブロード、がんばれよ～。」
「はい！」

ジュノはブロードを激励するとまた男に着いて行った。その間男は何もしゃべらないのでジュノは男に喋りかけた。

「俺も、この国の騎士団達と模擬戦するのか？」
「ええ、でも貴方の場合は少し違います。」
「ふーん。」

またしばらく歩くと男は扉の前で立ち止った、そしてジュノに扉にはいるように促した。扉の中に入ると様々な甲冑が置いてあり周囲の棚には剣が置いてあった。

「ジュノ様には騎士団の精鋭達と副騎士団長と模擬戦を行ってもらいます。ではこちらで用意させてもらったこの剣と甲冑をお使いください。」

そう言うと男は棚から剣を取り出した。

「これ真剣？」
「いえ刃止めされております。」
「ふーん」

そう言うとジュノは扉へと向かいだした。

「ジュノ様甲冑を装備し忘れですよ。」
「そんなむさくるしいもん装備できっかよ、いらねぇよ」
「そうですか、では準備の方が出来ましたらあちらの扉の方へ扉を出ますと演習場となっております。」
「そんなに俺の見た目のせいでこんなめんどくさい事やるのか？」
「・・・・」

「フン…たいしたもてなしだぜ。多分お前の考えでこんな事になってるんだろうけどその判断後で後悔する事になるぜ。」

ジュノはそう言うと男から剣を受け取り扉を出た。扉を出るとそこはメゼポルタで言うと大闘技場の様な場所であった。ジュノから見て演習場の反対側には騎士団の者達が二十名待機しており、観覧席には国王と第二王子が腰かけてその後ろには副団長らしき男が立っている。ジュノが観覧席に居る国王と王子を見ていると目の前から何処からか男の声がした。

「ではこれより演習を始める！双方前へ！」

その声と共に騎士団の男が一人前へと出てきジュノの前へと立ち止る。そして始まりの号令が演習場に響いた。しかしジュノは相変わらず観覧席の方を見ている。

「おい！お前！敵を目の前にしていい度胸だな！」
「なんだよ坊っちゃん。飴でも欲しいのか？」
「ふざけた事を！行くぞ！」

騎士団の男が剣を振りかざすしかしジュノに簡単にいなされてしまい男の剣は上空へと吹き飛びその瞬間ジュノは男の腹目掛けて剣を振るう。ジュノによって振るわれた剣は騎士団の男の甲冑を砕き騎士団の男は後ろへと吹き飛んで行った。そしてジュノは上空へと吹き飛んでいた剣を取り双剣の構えを取る。

「やっぱりこっちの方がしっくりくるぜ！！」

そう言うと演習場の隅に控えている残りの騎士団全員にジュノは振り返る。

「このまま一対一でも面倒だ、かかって来いよ坊っちゃんたち。おいで～お兄さんが遊んでやるよ。」

そう言うと剣を地面へと突き刺し残りの騎士団全員に大げさに挑発をする。すると騎士たちはその挑発に自身のプライドを傷つけられたのかジュノの挑発に上手く乗ったらしく次々と残りの騎士団の男達が次々とジュノに向かって駆けだしてきた。

「ハッハー！！さぁダンスの時間だぜ！！」

そう言うとジュノは地面に突き刺した剣を抜きとり騎士団の男達に向けて斬り込んで行った。

４１節　王都ヴェルド（後書き）

果物において梨っておいしいですよね。うちの少し離れたところには梨園があってよく家の近くまで梨園のおばあさんが梨を売りに来ます。またその梨が市販のよりなんかおいしいんですよねこれが。

42節　ジュノの受難（前書き）

モンスターハンター3Gが出ますけどなんか買う気が起きません。
皆さんはモンハン3G買いますか？

42節　ジュノの受難

王都ヴェルド　パルティータ城　客室

ヴェルドの客室には持ってきた狩猟武器を弄っているジュノとややや疲れ気味なのかうつむき加減のブロードが居た。ジュノはブロードが試験で良い結果が出せなかったのだと思い声をかけた。

「なぁ、ブロード。」
「なんでしょう…？」
「そんなに試験が難しかったのか？」

「いえ、騎士団の方が一人現れてその方達と一対一で勝負してその方倒してお終いでしたけど・・・・先輩の方はどんな試験だったんです？」

「いや、お前のとほとんど同じ少し違うのは人数と副騎士団長が出て来た事だったかな～」
「その人数は副団長含めてどれ位いたんですか…？」
「んー２０人位かな～」
「ちゃんと一対一で勝負しましたよね…？」
「・・・副騎士団長以外まとめて相手した。」
「・・・・ちゃんと手加減してますよね…？」

「死なない程度にはやったさ。後は演習場少し壊した位か？まぁなかなか趣のあるおもてなしだったからこっちもそれ相応のお返ししなきゃな！」

その言葉を聞くとさらにブロードの顔色は悪くなった。

「大丈夫だって鎧が砕けてちょっと吹き飛ぶ位だから死んじゃいないだろ。それにさっきの試験って奴は自分の力を示せって事だろ？ならちゃんとやらなきゃダメだろ～。」

「まぁそうですけど…。はぁ騎士団の人達には悪いことしたな…後遺症になっていなければいいけど。」

「まぁいつもモンスター相手に戦ってる俺らの度量を人間で測るって時点でダメだろ。俺らは悪くない！だから自分のした事に気を病むなって！！」

そう言うとジュノはブロードの肩を二三度叩いた、しかしブロードの顔色は変わらなかった。

「（俺のした事じゃなくて先輩がやらかした事で気に病んでるんだが…この人は…）」

しばらくすると部屋の扉が開かれ王に仕える男が部屋の中へ入って来た。

「国王陛下がお呼びです。王座の間までご案内しますので御二方準備の方お願いします。」

「はい。（はぁ～ついに来たよ。おそらく先輩がやった事で何か言われるんだろう…）」

王都ヴェルド　王座の間

王座の間に入ると国王が玉座に腰を掛けジュノ達を来るのを待って

いた。

「次はどんなおもてなしを俺たちにしてくれるんだ王様？デザートは付いてるんだろうな？」

「ちょっと先輩失礼ですよ。すいません国王陛下。」

「いや、かまわぬ。先ほどはすまなかったね、大臣がどうしても君達の度量を知りたくてああしたのだ。」

「俺達、じゃなくて俺の度量を知りたかったんだろう？だったらなんだここでもうひとダンスしてやってもいいぜ！」

「いや、遠慮しておくよ。これ以上施設を破壊されては国益に支障が出てしまうからね。」

国王はそう言うと一息起き今回の依頼の説明を行った依頼内容は先日ブロードからの説明が有った通り王族の護衛、特に第一王女と第二王子の護衛についてほしいとの事だった。

護衛の対象に第三王女と国王と王妃が含まれてないがこの三人は王国の騎士団が護衛に着くから良いとのことだった。

「なるほど、と言う事は俺はエレノア王女の護衛だな！そしてブロードお前はルートヴィヒ王子の護衛だ。」

「・・・先輩…第一王女に変なことしないでくださいよ。」

「ハッハ―、そんなことするわけないだろ～」

二人はどちらがどの王族を護衛するかで盛り上がっていると、国王が咳払いをした。

「その護衛の事なのだがジュノ、君にはルートヴィヒの護衛を頼みたい。そしてブロード、君はエレノアの護衛を頼みたい。」

「え―、なんでだよゼバス国王？」

横で文句を垂れているジュノをブロードは近くに引き寄せ耳元でジュノに自分の解釈なりの国王の考えを教えた。

「いいですか先輩。何故先輩が第二王子を護衛しろと言っているのはですね…」

「第二王子が次期国王になる重要な存在だからだろ？んなの分かってるって。でもせっかくだから美しい第一王女エレノアちゃんと踊りたいじゃねえかよ。」

「エレノアちゃんって…まぁわかってるならいいですけど。」

そう言うとブロードはジュノの耳元から離れ王に向き合った。

「国王の命仕りました。何が起きようとも第一王女の安全を確保いたします。」

「そうか、それは良かった。それでジュノ、君の方は…」

「・・・わかりました。パーティ時は王子の安全を最優先いたします。」

「そうか、それは良かった。これで話が先に進める、さて二人にはこれからパーティに必要な簡単な礼儀作法そして舞踏の練習をしてもらう。」

「舞踏の練習ですか？」

「うむ、君達二人は娘ら二人を片時も離れてもらっては困るからね、そこでダンスの練習が必要と言う訳だよ。」

「なるほど・・・・」
「ちょっとまて！」

ブロートゼバスティアン国王が話をしているとジュノが話を割って入って来た。

「第二王子を守る俺はどうなるんだ？男同士でダンスするのか？」

ジュノが国王にそう言い放つと国王は少し黙り込んでしまった。そして何かを言いだそうとしているのかそわそわしだした。

「なんだよ、トイレか？なら早く行って来いよ。」
「いや、違うのだその…」

国王は今だもじもじしているそして決意が固まったのかジュノに対してこう言い放った。

「君には女装してもらう。」

王都ヴェルド　パルティータ城　客間

外は夕陽が沈み真っ暗となっていた客間にはさっきと違いベットでうつむき加減のジュノと机で日誌を書いているブロードの姿があった。ブロードは心配になったのかうつむき加減のジュノに声をかけ

た。

「大丈夫ですか？先輩。」
「大丈夫じゃねえよ。」

「・・・でも仕方がないじゃないですか王子を守るためなんですし、これもメゼポルタとヴェルドの国交の為だと思って。」

「わかってるって・・・でもなんで女装しなきゃならねぇんだ？絶対俺に合う衣装なんてねぇし声だって。」

「いや、先輩の声男にしては意外と高いですよ。それに喉仏も出てないというかほとんど出てないじゃないですか。それに顔も…」

「それ以上言ったら二度とフラウちゃんの顔が見れなくなるぞ。」
「・・・・・」

「はぁ、まぁいい国交の為か…じゃあやるしかないよなぁ。ほんとあの国王狂ってやがるぜ・・・・」

「あっ、先輩明日は衣装合わせや礼儀作法、そしてダンスの練習が朝から始まるとの事なのでお忘れなく。」

「はいはい、そうだブロード。」
「何でしょう？」

「今回俺が女装する件メゼポルタに帰っても誰にも言うなよ。」
「・・・わかりました・・」

ジュノはブロードにそう言い放つとベットに飛び込み目をつむり寝

息を立て始めた。

パルティータ城　衣装室

衣装室には王に仕える数人の侍女とジュノが居た。侍女の中で一番偉いとされる女がジュノの前へと歩いて来ると残りの侍女もそれに続き歩いてきた。

「（あぁ、母さん俺はここで汚されちゃうよごめんよ…）」

「失礼します。」

その言葉と共に侍女たちは次々とジュノの服を脱がしにかかった。

「ちょっとまて、それくらい一人でできる。何処まで脱げばいいんだ？」

「全部です。」

「……はい。」

そう言うとジュノは一気に着ているギルドナイトスーツを脱ぎ始め全裸となった。

「これで良いか。」

「はい、では両腕を左右に上げてもらえますかコルセットとパニエを取り付けますので。」

「（もうどうにでもなれ…）」

そう思うとジュノは両腕を上げ侍女たちの言われるがままなすがままとなった。

「あっ止めろ！そんなにきつく締めるな！！」
「コルセットは腰を細く見せる物なのです！じっとしててくださいまし！」

「ローブはどちらにいたしますか？」
「知るか！どっちでもいい！」

しばらく立つと侍女たちは全ての衣装を取り付けたのかジュノから離れていった。そして一人の侍女が姿見の為の大きな鏡を持ってきた。

「いかかでしょうか？ジュノ様。」
「男の俺に感想を言えと？あんたはどう思うんだ俺を見て。」
「大変御美しゅうございます。」
「・・そうかい。」

侍女の持ってきた姿見に映っていた者それは大変美しい娘であった。ジュノの伸びていた黒髪上へ纏められドレスには蝶を象ったコサージュが取り付けられていた。

「（こんな事になるならめんどくさがらず髪切りアイルーの所へ行って髪を短くしとくんだった…いやそれでもカツラかぶされて終わりか…それと俺をこの顔にして作った母さん…は今いないからアイリスに今度文句言ってやる。）」

「着替えが済みましたので王座の間までご案内いたします。ジュノ様歩く際はドレスのはじを掴んでそっとあるいてくださいまし。」

そう言うと数人の侍女と共にジュノを王座の間へと向かった。途中何人もの城を警備する兵士がジュノの姿を見て振り返っていた、そ

れが何の意味で振り返り見ていたのかはジュノ自身は滑稽な姿で笑われていると思っていたが本来は別の理由で振り返ってジュノの事を見ていたのは本人の知る余地もなかった。

パルティータ城　王座の間

王座の間にはすでに着替えの終えたブロードが居たブロードはジュノの姿を見ると目をぱちぱちし次に顔を赤らめた。

「ど…どうですか？女性の衣装を着た感想は？」

「きゅうくつで歩きにくいな…それにしてもなに赤くなってんだお前？」

「いや、その、大変似合っていて綺麗だなと。」

「そうか…まぁ一生に一度位こんな恰好しても悪くないだろう、でもいいな～お前はかっこいい服着れてよ。変わってほしいぜ。」

「俺の女装姿そんなに見たいですか？」

「・・・見たくねぇ…」

二人で雑談を交わしていると国王が王座の間に入るとの事なのでブロードは立て膝をついて頭を下げた、しかしジュノは女装をしているのでどのように礼をし良いか分からずあたふたしていたすると救いの船か侍女の一人がジュノの元へ着てドレスを着た状態でのお辞儀の仕方を簡単に押し経てくれたので事なきを経た。しばらく二人は深く礼をしていると国王が玉座の間に入って来た。

「二人とも表を上げよ。」

その言葉と共にジュノ達は顔を上げ国王の顔を見た。すると国王は二人の姿をみて感嘆の声を上げた。

「おぉ、二人とも良く似合っておるぞ。特にジュノそなたは彫刻のように美しく目が眩むほどだ。」

「そうかい。褒め言葉ありがとよ王様。そんで次は何するんだ？」

「うむ、二人の為に礼儀作法そして舞踏の先生をお呼びした。」

そう言うと国王は合図をし合図と共に二人の男女が現れた。ここでジュノは驚愕する事となるこの男女のうちの一人が彼の歩んできた人生の中で最も影響を与えた人物だという事に気づいてしまった。そしてその人物はもっともこの姿を見られたくない人物でもあった。

「紹介しよう、これから君達の礼儀作法及び舞踏を教えるエドガーとルシャナだ。」

「（まじかよ、なんでこんな所に師匠居るんだよ。しかも舞踏の先生って師匠元ハンターだろそんなの無縁だろ）」

「ブロードにはエドガー、そしてジュノにはルシャナが礼儀作法を教える事となる。二人とも頑張ってくれたまえ。」

そう言うと国王は王座の間を去りその場に四人が取り残された。

「よろしく！僕はエドガーこれから君にご婦人の扱い方を丁寧に教えるから緊張しないでね。」

「はい、ブロードです。こちらこそよろしくお願いします。」

そう言うとエドガーとブロードは玉座の間を後にし玉座の間にはジュノとルシャナが残された。

「（やばい。どうしよう。とりあえず声色代えて挨拶するしかねぇ何としてでも隠し通してやる！）」

「ジュ…ジュノと申します。ご指導よろしくお願いいたしますわ。」

ジュノはドレスの両端を軽くつまみそしてルシャナに対してお辞儀をした。

「（完璧だ、これならばれまい。）」

ジュノがお辞儀をしているとゆっくりとした足取りでルシャナはジュノの近くへと歩いてきそしてこういった。

「久しぶりね、ジュノ。そのドレスとってもよく似合ってるわよ。」

「！！」

ルシャナの目は誤魔化す事はできなかった

42節　ジュノの受難（後書き）

私も7歳位まで七五三の時等に女の子用の晴れ着や服を着せられてましたね。大学の友人にその事を話した所なんでも強く健康的な男の子に育って欲しいという願いを込めて男の子に女装をさせると言う風習が日本にはあるそうで。でも最近調べてみてもそんな風習見つからないんですよね。ダマサレタ！！チクショー！！

43節　貴婦人修行（前書き）

何か重要な日に見た悪い結果の夢は必ず当たる。
これ私の人生の教訓です。

43節　貴婦人修行

ルシャナ師匠との思わぬ再会にジュノは本来喜びたいところだが状況が状況なうえにあまり喜べなかった、むしろ恥ずかしかった。ルシャナ師匠はジュノを見て笑いを堪えている。

「ぷっ・・・しかしあれね。どんな奴に稽古をつけると思っていたけどまさかジュノ。貴方とはね。」

「・・・お久しぶりです、ルシャナ師匠。しかし師匠、貴方は元はハンターなはず。舞踏なんてできるんですか？」

「あぁその点は問題ないわ、舞踏なんて昔貴方に教えた舞踏演武と同じよ。舞踏演武も元は舞踏での足取りが基礎だし。それに舞踏会では男性が女性をリードする物なのよだから心配ないわ。せっかくだしちょっと踊ってみるかジュノ。」

そう言うとルシャナは手を差し出したジュノはその手を取りルシャナと共にその場で踊り始めた。二人が踊ったその場には誰もいなかったがもし人が居たら二人の踊りを見て見とれていたであろう。

「うむ、完璧ね。しいて言うならダンスの時はそんなに相手を振らなくてもいいわ。相手もちゃんと動いてくれから。あとパートナーに優しくしなさい。それと・・」

ルシャナはジュノの顔をじっと見つめる。

「な・・なんですか？師匠？」

「まだ恥じらいが残ってるわね。」

「当たり前ですよ！俺は男なんですよ！！」

「ハッハ―！！そう怒鳴るな。そうだな～よしこれからお前に乙女修行並び礼儀作法を付けてやろう。ちょっと家まで来い！」

そう言うとルシャナはジュノの手を取り城の外にあるルシャナの自宅まで歩きだした。

王都ヴェルド　ルシャナ邸

ジュノはルシャナ師匠の家まで連れてこられ家の応接間に押し込まれた。

「ちょっとそこで待ってなさい。」

「はぁ…」

そう言い残しルシャナ師匠は応接間から出ていった、ルシャナ師匠の家の応接間は優美に飾られていた。ジュノは応接間で待っている間ドレスでの歩き方の練習や挨拶の練習をしてルシャナ師匠の帰りを待っていた。

「・・・だいぶ歩き方に慣れて来たな…はぁ何でこんな事に…」

そう思い歩き方の練習を止めるとちょうどルシャナと共に様々な箱を持ったルシャナに使える使用人らしき男が応接間へと入って来た。

「待たせたね。それじゃあさっそくその服に着替えてもらおうか。」

そう言うとルシャナは使用人から箱を取り上げ箱の中身を取り出した、それはジュノが今着ているドレスよりもいくらかは動きやすそ

うな物であった。ジュノはルシャナに手伝ってもらいながらドレスを脱ぎにかかったそしてルシャナの持ってきた質素な服に着替えたもちろんそれは女性用であった。着替えの終えたジュノは使用人の持ってきた姿見の鏡へと立たされる、着替える最中に顔が熱くなるのを感じたのでなんとなく予想は付いていたが鏡で見た顔は赤く染まっていた。

「私の見たて通りぴったりだな、今から女性としての礼儀作法を教える。大体の事を教え終わったら次は私と一緒にこの服で街に出てもらう。」

「ま・・・街に出るんですか。この格好で?」

「そうだよ。なにさっき着てたドレスで街に出たいのかい?」

「・・・いや、これで良いです。」

「じゃあ始めましょう。」

そう言うとルシャナはジュノの頭に分厚い本を置いた。

「それが落ちない様に歩いてみなさい。」

ルシャナの言われた通りにジュノは歩く普段は脚防具を装備しているジュノにとってバランス感覚操作など簡単な物であったが今は貴婦人用のヒールの着いた靴を履いているのでバランスを取るのは困難を極めた。

「へっぴり腰になってるわよ!姿勢を正しなさい!」

そう言うとルシャナはジュノの腰を叩いた。

「おわっ！！」

王都ヴェルド　マズルカ道り

ルシャナ師匠との鬼の貴婦人修行が終わるには二日かかった今はジュノの中に残る女装への恥じらいを少しでも緩和すべくルシャナ師匠と共に王都ヴェルドの中心の通りのマズルカ通りの雑貨店へ来ている。

「ねぇジュノこの服とこの服どちらが私に似合うかしら？」

「俺はこ…」

「口調！！！」

「私はこちらの方がいいと思いますわ・・・・」

「あらそう。じゃあこっちの服を頂く事にしようかしら。」

「（あ、、～帰りてぇ～）」

ルシャナとの長い買い物は終りジュノ今はルシャナの家へと戻る為馬車の中にいる。

「師匠、俺の…いえ私の今日の立ち振る舞いいかがでしたでしょうか？」

「うーん・・・だいたい合格ね、明日から自由行動していいわよ。たまに口調が男言葉になるからそれに注意しなさいよ。」

「はい！ありがとうございます。（やったぜー）」

「はぁそれにしてもジュノ、貴方って昔と変わらず本当に覚えが早

いわね。教えてる際本当に楽だったわ。」

「ありがとうございます。昔と言えばルシャナ師匠、旦那さんは今どちらにいるのですか？ここ二日師匠の家で姿を見かけませんでしたが。」

「あぁうちの旦那はねぇ、今ミナガルデの方のギルドナイトで働いてるわ。あんまり帰ってこないけど・・・まぁ仕方ないわね。ジュノの方はどうなの？確かドンドルマに住むハンターが全員メゼポルタって新しい街に移動した事は知ってるけどどうなの？メゼポルタって？」

「メゼポルタはですね、まぁ良い街ですよ。最近他国との交流も盛んになって他国の文化を取り入れた祭りも開催されましたし。治安もギルドナイトが街を出歩いてますからね良い方だと思いますよ。」

「そうか、なら引っ込み思案気味のうちの娘も安心だな。」

「へ～お子さんが居たんですか師匠。なんて名前なんですか？」

「ユーノって言うんだ。」

「ユーノさんですか～さぞかし師匠に似て美しいのでしょうね（ユーノ・・まさかな…）」

二人は談笑を交わしながらルシャナの家に向けて馬車に揺られて行った。馬車はルシャナ宅へと着くと城から迎えの者が来ていた。どうやらルシャナ師匠が事前に呼んでおいたらしい。

「いいかい！私の教えた事舞踏会本番まで忘れるんじゃないよ！」

「わかってますよ。それじゃあ失礼します。」

ジュノはルシャナに別れを告げると馬車へと乗り込み城へと向けて走り出した。

パルティータ城　客間

城に着くや否や今まで着ていた女性用の服を脱ぎさり洗面台で顔の化粧を落としベットへと横になった。そして目を閉じ夢の世界へと旅立とうとしたその時だった突然客間の扉が行きよいよく開かれ侍女が部屋の中へと入って来た。

「突然失礼します。すいません、ここにソフィー王女は訪れていませんか？」

「王女？見てないな～」

「そうですか…見かけたら他の侍女にお伝えください。それでは。」

そう言うと侍女は部屋から出ていき部屋の中にはジュノ一人となった。

「さて部屋の中にいるデカいネズミでも倒すかな…」

そう言うと部屋の隅に置かれている持ってきた狩猟武器の一つ太刀のエール＝ダオラを手にし隣のベットへ向けて刃を向けた。そして太刀を振り上げベットに向けて一撃を放つその時だった。

「まま待つのじゃ！！」

ベットの下から少女の声が聞こえて来た。

「じゃあ早く出てこいよ。豆王女。」

ジュノがベットにそう言い放つとベットの下からのそのそと女の子が出て来た。女の子はとてもきれいなドレスを着ていたがベットの下にいたせいか少し薄汚れていた。

「おぬし、いつからわらわがベットの下に隠れていると分かっておった？」

「部屋に入った瞬間だな。侍女の姉ちゃん達を騙せても俺には無理だな。気配でバレバレ。」

「むぅ、さすがハンターじゃのう。それと豆王女ではない！わらわは王都ヴェルド第三王女のソフィー王女であるぞ。無礼者め！」

「そうか、で豆のお嬢様はなんでこんなとこに隠れてたんだ？」

「そうじゃ！お主メゼポルタのハンターであろう。それも様々なモンスターを狩って来た優秀な狩人と聞いたぞ。だから色んな話を聞かせてほしいのじゃ！」

「優秀ね～どうだか？それにモンスターとの戦いの話を聞いてもつまんねぇぞ。」

「そんな事ない！わらわは毎日この城で生活して退屈でしかたがないのじゃ。だからまずハンターとは何かを話してたもれ。」

「退屈ねぇ～まぁその気持ち分からなくもないな。じゃあ話を聞いたら自分の部屋に戻れよ。」

「うむ！！」

「そうだな～俺達ハンターが生きてる世界それは弱肉強食の世界、温和なモンスターはお互い寄りそり合い、猛きモンスターは大自然に吠える。そんな強者だけが生き残る世界で己鍛えたの技術や力で強者を狩る、それがハンターだな。」

ジュノが話始めるとソフィー王女は目を輝かせながらジュノの顔を見た。

「おぉ！！それでその世界にはどのようなモンスターがおるのじゃ？聞いた話によると空を飛びまわる者の代表がリオレイヤで大地を駆け廻る者の代表がドスファンゴそして水中を泳ぐ者がガノトトスと言うのが居ると聞いたことが有るぞ。」

「なんだ大体知ってるじゃねえか。でもリオレイヤの解釈は少し違うなあいつは飛竜だがあまり飛ばない。だがそれゆえに足腰は強靭で陸の女王って呼ばれてるな。」

「陸の女王…！！それでもっとリオレイヤの話を聞かせるのじゃ！！」

「んーと言ってもそんなに話す事ないぞ、火球を放つとか背中に棘が有るとか尻尾に毒あるとか体が緑色とか位か…あ～そうだリオレイヤにも3種に分けられてな一つは緑色のリオレイヤこれは雌火竜って呼ばれてるなもうひとつは亜種のリオレイヤ体色は桜色だから桜火竜って呼ばれてる、最後は希少種こいつの体色は金色で金火竜って呼ばれてるな。この位かリオレイヤの事って言ったら。」

「ほわぁ～良いのう！！一度でいいから実物を見てみたいのう！！」

「ハッハ―!!止めとけ止めとけ。実物を見たらおしっこちびって腰抜かして食べられちまうぜ。」

「むぅ!!そんなこと無いのじゃ!!」

そう言うとソフィー王女は顔を膨らませそっぽを向いてしまった。

「ハッハ―!!そう顔を膨らますなって。さぁお話は終わりだ自分の部屋に戻ってお勉強でもしな。」

「あっ!!もっと話を聞かせてほしいのじゃ!!」

「ちゃんと部屋に戻って侍女の姉ちゃん達の言う事聞くなら明日また色んなモンスターの話してやるぜ。」

「ぬぅ…分かった。お主との約束必ず守るから明日もモンスターの話を聞かせてたもれ。よいな!!」

「分かったからさっさと自分の部屋に戻れ。」

ジュノがソフィー王女に自室に戻るよう促すとソフィー王女は部屋の扉に手をかけジュノに向かって振り返った

「そうじゃ!!お主名前は何と言うのじゃ?」

「ジュノだ。」

「そうか。ジュノと言うのか…ではまた明日も来るからのジュノ!ちゃんとモンスターの話を聞かせておくれ。」

「あぁ、豆王女もちゃんと侍女の姉ちゃん達の言う事聞けよ。」

ジュノはそう言うとソフィー王女はジュノに手を振ると部屋から出ていった。それと入れ替わるように次はブロードが部屋に入って来た。

「あっ、先輩どうですが貴婦人修行の方は？」
「修行か？もうすべて終了してはれて自由の身だ。お前の方はどうなんだ？」
「もう終わったんですか！？俺は今日やっとダンスの練習を始めたところですよ…」

「そうか～まっ頑張れよ。そうだ俺からダンスの助言を一つ言っといてやるよパートナーを優しく扱う事と回る時相手を強く振らない事だ。」

「なるほど…分かりました。」
「それじゃあ俺は飯の時間まで寝るからお呼びがかかったら起こしてくれよブロード。」

ジュノはそう言うと目を閉じ夢の世界へと旅立った。

43節　貴婦人修行（後書き）

最近見た目はデニムそっくりなんですけど素材がゴムみたいに伸びるメガストレッチデニムを試しに一着買ったんですけどこれすごいですね！ホント動きやすくてしゃがんだ時苦痛じゃないんですよこのデニム。ホントおススメデニムですね。

４４節　舞踏会（前書き）

最近駐輪所で自分の自転車止めたとこを良く忘れます。もっと目印になる様なものをつけなければいかんのか…

４４節　舞踏会

王都へ来てから6日が立とうとしてたジュノは貴婦人修行が終わってから予め持ってきていた狩猟弓と太刀の振る舞いの練習を毎朝城の演習場で行っていた。今日は主に太刀の振る舞いの練習をしている。演習場には空気を切り裂く音が響き渡りエ―ル＝ダオラから染み出る冷気が辺りの温度を下げていた。そのジュノの舞いの光景を影ながら見る物が一人。

「（先日見せてもらったあの者力…あれは私の今まで見て来たすべて者達の常軌を逸していた…）」

「（ハンターやギルドナイトはモンスターを相手に日夜人々の為に戦っていると聞く・・・だからあれ程の力を・・・）」

「おは～」
「！！」

ルートヴィヒ王子はジュノの声に驚きその場から急いで距離を置き腰に掲げているレイピアに手をかける。

「…貴様いつからそこに…」

「王子が俺の立ち振る舞いを見て呆けてる辺りからかな？それで？昨日から隠れて見てるみたいだけどご用件が御有りかな王子様？あんたの姉上様とのデートのお誘いなら喜んで受けるぜ。」

「…私と勝負してもら・・」

「それは無理だな。あんたはこの国の王位第一継承者だ、もしもの事が有ったら色々と面倒だ。用件がそれだけなら俺は外へ散歩とあんたの妹におとぎ話を聞かせに行くかな。」

そう言うとジュノはエ―ル＝ダオラを肩に担ぎその場から離れようとした。しかし

「待ってくれ！なら、どうやったら貴方の様な強さを得る事が出来る！？教えてくれ！」

「…じゃあなんで強さを求めるんだ？」

「国民に私の強さを誇示し次期王位継承者としての信頼を得たいからだ。それができれば我が国家の基盤はより盤石なものとなり、父上をよりも良き王になれると思ったからだ。それに民に危害を加えるモンスターを放ってはおけぬ！」

「…あんた今歳いくつだ？」

「１７だ、それがどうした？」

「ヒュー！！１７歳でもう国の事考えてるのかよ流石王族。でも強さを求める前に王子様はもっと知るべき事が有るよ。あと色々学ぶべきこともありそうだね。」

「知るべき事…それは何だ！？」

「本当の民の姿かな？後は学ぶべき事はあんたの身近な人達の立ち振る舞いから学べるよきっと。ともかく強さを人々に知らしめて信頼を得るのはハンターだったら簡単にできるけど国民となるとそれだけじゃ信頼は得られないし、良い王様にはなれないと思うな～。」

「まぁ俺は国営政治云々の世界とは無縁の世界で生きてるから、俺の言う強さをもし王子様に教えてもあまり意味がないと思うよ。良い王様になりたいのなら。あぁ！それとね王子様良く国を抜け出してはモンスターを狩猟しに行ってるみたいだけどそういう自分の命をわざわざ危険にさらすような事は控えるべきだとお兄さんは思うな～。」

「・・・・・」

「まぁそう言う事だから、色々頑張ってね未来の王様。」

そう言うとジュノは演習場から去り演習場には王子ただ一人が残った。しばらく佇んでいると王子の従者らしき男が現れ王子に声をかけた。

「ここにおられましたかルートヴィヒ殿下、帝王学の時間であります自室に御戻りを。」

「…分かった。ところでお前、私をみて道思う？」

「殿下をご覧になってですか…？勇猛で博識もあり民思いの立派な御方と…」

「フッ…そうか…本当に私がお前の言うそのような人物ならこの国の民の望んでいる事等手に取るように分かるだろうな。しかし私は…」

「殿下いかがなされました？」

「いや…なんでもない。行くぞ。」

そう言うと王子は自室へと歩いて行った、ふつふつとわき上がる今までの自分の在り方にに対し自問自答しながら。

パルティータ城　衣装室

衣装室では今夜舞踏会でのジュノの女装するための準備が執り行われていた。ジュノは侍女達によって服を全て脱がされ腰にはコルセットを絞められパニエを着せられている。

「なぁあんた達前よりもなんか熱心じゃない？」

「それはもうジュノ様のドレス姿は大変美しゅうございますもの。熱が入るのも仕方が有りませんわ。」

【Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｔｈａｔ　Ｉ　ａｍ　ａｌｓｏ　ｓｕｉｔｅｄ　ｗｅｌｌ．】

「（またか…）」

「…そうですか…でもやり過ぎは止めてね。」

「（これで何も起きなかったら、それはそれで良いが…そしたら俺の恥ずかし損だな…）」

パルティータ城　ホール

ホールには様々な貴族の面々が音楽に合わせダンスを踊っていたり貴婦人同士で集まりあって自身の来ているドレスの自慢をしている。この舞踏会はエレノア第一王女の生誕２３年の御祝いと名を打ってはいるが、王族や国内有力貴族を招いての、親睦パーティーも兼ねているのでなおさら人が多かった。そのせいもあるのかジュノへの視線も多く集まった。

［おくさま！あの方をごらんなさいまし。なんて御美しい…目が眩みそうですわ！］

［いったいどちらのご婦人なのかしら？］
［なんでも異国の伯爵夫人だそうですわよ。］
［マダム、一曲おあいてを］

そんな声が囁かれるホールの中でジュノは男性の誘いのダンスを笑顔でこなしながらただ一つの事を考えていたそう【帰りたい！】と。一通りの男性とのダンスの相手を終えるとジュノは第二王子近くへと歩いて行った、そう今回の任務はあくまで第二王子の護衛である。ジュノはその事を念頭に置いて行動をしているのだがどうもさっきから他の男性からのアプローチが多いせいかなかなか王子の元へと行けずにいた。

「（くそ、なかなか王子のとこに行けねぇな。ブロードの方はちゃんと護衛出来てるみたいだな。しかし困った…）」

そう考えて様々な男性に囲まれていると王子が自らジュノの方へと近づいて来てくれてジュノをダンスに誘った。

「マダム、私と御一曲いかかですか？」

ルートヴィヒ王子はそう言うとジュノに手を差し伸べジュノはその手を取りダンスの列へと入って行った。

「いやぁ、助かったぜ王子。野郎共がマダム、マダムうっさくてよ～」
「言葉づかいに注意しなさいとルシャナさんに言われませんでしたか？」
「おっと、忘れてましたわ。」

ダンスホールから流れ来る音に合わせて踊る二人その姿は見る物を

魅了していた。

［あの方何とすらっととしてらっしゃるのでしょうね！私ひけめを感じてしまいますわ！］

［スキの無い身のこなし惚れ惚れしてしまいますわ。］

そんな声が飛び交っている中ついに事件は起きた。ダンスホールの明かりが突然消え至る所から悲鳴が聞こえ始めたのである。ジュノは咄嗟に王子に覆いかぶさるように王子を守った。

「早く明りを！！」

明りがつくと様々な貴婦人の首飾りや貴重品が盗まれていた。

「大丈夫か王子？」

「君が守ってくれたおかげで大丈夫だ。それより父様達は…」

王族の様子を見ると第三王女ソフィーがダンスホールから消えているのが分かった。

「今すぐ国のすべての門を閉めるのじゃ！！犯人はまだこの城の中におるかもしれぬ徹底的に探し出すのじゃ！！」

国王が集まった騎士団全員にそう号令をかけると騎士団は城内へと散って行った。

「本当に起こってしまいましたね…先輩。」

「私達も私なりに動きますか。相手がマーシレスにしろなんにしろ事件は事件ですからね。」

そう言うとジュノはドレスの足元を引きちぎり予め城のダンスホールの隅に隠しておいたエ―ル＝ダオラとシスネ＝ダオラ?を抱え外へと飛び出して行った。

「先輩口調が女言葉だったな…」

外へと飛び出すとさっそく騎士団の面々が怪しい者達を発見したのかジュノから離れた場所で交戦に入っていた、しかし怪しい者達は騎士団の攻撃を軽々跳ねのけ用意していた馬車に乗り込みその場から逃げようとしていた。

「今日のジュノさんはストレス溜まりまくりだぞっと」

そう言うとジュノは弓に爆撃ビンを装填し馬と馬車をけん引している箇所目掛けて弓矢を放った放たれた弓矢は見事馬車のけん引箇所全てに命中し馬は馬車を残し何処かへ駆けて行ってしまった。

「先輩!!何爆撃ビン使ってるんですか!?馬車の中にはソフィー王女が…」

「あっちょうどいいとこに来たね、これあずかってて～」

そう言うとジュノはブロードに狩猟弓を放り投げると太刀を片手に馬車の方へと駆けて行った。

「あっちょっと～!!」

王都ヴェルドの路地に決して身なりの綺麗とは言えない男と目隠しをされてその男に担がれている少女が一人とある追跡者から逃げていた。

「はぁはぁ…いったい…なんなんだあの女…」

男が語るその女それは身の丈ほどある太刀をまるで棒きれでも振るうが如く振り回し男を見つけるや否や男に向かって切りつけてくる恐ろしい女だった。

「はなせ!離すのじゃ!!わらわは王都ヴェルドの第三王女ソフィー・ルネサンスであるぞ!!無礼者!!」

「うっせえ!!!クソガキが!!黙ってろ!!!」

「あぐっ!!」

男は怒りにまかせてソフィー王女の顔を殴り付けるとソフィー王女は黙りすすり泣き始めてっしまった。

「ヒグッ…エッ…」

「ともかくこのガキを連れてこの国から出なければでもどうやって。」

《見つけた》

「ヒィ!!」

男は声のした方向見るとそこには太刀を手にした女が立っていた。女の着ていたドレスは様々な場所を駆けまわった為かボロボロである。女は男へとじりじりと近づいて行った。

「くっ来るな!!このガキがどうなってもいいのか!?まずは武器を捨てろ!?」

そう言うと男は持っていた片手剣をソフィー王女の首に向けた。

「お前はマーシレスか？」

「だ…だったらなんだってんだ？」

「そうか・・・・待ってろ。今助けてやる。」

女は太刀を男の方へ投げる、男は太刀が女のいる位置から遠くの地面に転がったのを確認するとその太刀を両手に手に取り女に向けて切掛かって来た。

「死ねぇぇ！！」

男は太刀の剣先を女へと突き刺そうとしたが女は咄嗟に横へ回避し様に男の背中を強く押し出した男は余計な力が加わったためか地面に顔面から転がりこんだ。その隙を逃さず女は男の背面目掛け上空から飛び蹴りを食らわす。女の蹴りが入った瞬間路地内には骨が砕ける嫌な音が響き渡った。

「頭は冷えたか坊や？」

「・・・・」

「フーム、痛みの余り失神したかまぁ都合がいいな。」

女は男が意識がない事を確認すると路地の裏に放り出されていたソフィー王女を抱き起こしそして目隠しを解いた。

「かわいそうに、顔が腫れてるじゃないか。」

「おぬし…ジュノか・・・？」

「おぉ、豆王女は俺の事分かってくれたか～」

ソフィー王女はジュノと分かった途端泣きだしてしまった、彼女も

王女と言う肩書を持ちながらもまだ年はの行かない娘今回の件はとても王室育ちの彼女にとってとても怖い出来事だったのであろう。ジュノはそんな彼女を見て慌てふためいてしまった。

「そんな、泣くなよ～。なぁ！」

ジュノはソフィー王女を抱き上げ赤ん坊のようにあやしたこれが功を気したのかソフィー王女は徐々に落ち着きを取り戻していった。落ち着きを取り戻した王女を確認するとジュノは王女を降ろそうとしたが王女はジュノから離れようとはしなかった。

「…どうした豆、落ち着いたろ？早く降りないと恥ずかしいぞ。」

「嫌じゃ、このままが良い。そうじゃ！おぬし褒美としてわしをお姫様だっこするが良い。さぁ今すぐ抱き方を変えるのじゃ。」

「御姫様だっこは後１０年したらしてやるよ、お嬢ちゃんにはまだ早い。」

そう言うとジュノは王女を抱き抱えながら太刀を背に掲げ王女をさらった男の襟首をつかみながら城へと向かっていった。

気球船　ハンター控室

「いやぁでも良かったですね！！ソフィー王女も無事に救出できて盗まれた貴金属も回収できそれにマーシレスの連中も確保でき今回は先輩すごく御手柄ですよ。ゼバスティアン国王も凄くギルドの事を評価してましたし、今度もまた是非来てくれって言ってましたよ！！」

「…そうか、でももう女装は勘弁だけどな。」

ブロードの話を横に聞きながしながらジュノは絵付きの手紙を読んでいた。

「誰からの手紙ですか?」
「主に第三王女と第二王子からだな。」
「へぇ〜なんて書いてあるんですか?」

「感謝の言葉がうんたらかんたら書いてある。今度来た時恩賞やら称号やらくれるってよ。」
「それは凄い事じゃないですか!!」
「そうだな…」

「…どうしたんですか先輩?今日はやけに静かですね。」
「いや、この絵見てさ、なんか複雑な気持ちにね。」

ジュノがブロードに見せた絵にはドレスを着た女性が剣を地に立てつけ王女らしき女の子と手をつなぎ笑っている姿で絵の上部には「ありがとう」と書かれていた。

「…この剣を持ってる女性まちがいなく先輩ですよね・・・・」
「あの豆め・・・・」

４４節　舞踏会（後書き）

私が小さかった頃とかは家の周りに銭湯とかがたくさんありましたが今はあまり見かけなくなりましたね。温泉街に行くしかないのか・・・

４５節　王女来日（前書き）

ＹＡＴＴＡ！！月見バーガーだ！！旨い！！

45節　王女来日

王都ヴェルドからの依頼をこなしてから数カ月がたとうとしていた。ジュノはお目付け役のシン君に怒られない程度にギルドナイトの仕事をこなしては一般ハンターと共に狩猟依頼を受け生活をしていた。ユーノはジュノの推薦状のおかげかジュノが王都ヴェルドに行っている最中に無事にギルドナイトとなり今ではジュノの下で仕事をこなしながらジュノの双剣の修行をこなしている。ここ数カ月で彼女は目まぐるしいほど成長を遂げもうジュノの持っている双剣の技術はもう教える事は無くなりつつあった。今日のジュノはギルドの仕事を終えて大衆酒場で飲み食いをしながら雑誌を読んでいた。雑誌を読んでいるとジュノは奇妙な記事を目にした。

【昨日起きた王都ヴェルドの第三王女誘拐事件、その際に王女を救ったのは謎の麗しき黒髪の女性戦士!!女戦士は颯爽と誘拐犯に現れ誘拐犯を倒しソフィー王女を救うのであった。当社ではこの女性戦士の情報を求めております。】

「（誰だこの記事書いた野郎は・・・・）」カタカタ

ジュノは大衆酒場で仕事を終えて雑誌を読んでいたそして見つけたのがこの記事である。

「あー、この女戦士の人かっこいいよね～ギルドでも話題になってるよ。デメトリアはこの女戦士どう思う?」

「うふふ…そうね、とても素晴らしいと思うわ。同じ女性として誇らしいわね。そう思わないエフィ―?」

「そうですね！きっと強くて優しくて素敵な方なんでしょうね～そう思いません？ジュノさん？」

「そっ…そうだな…」

現在メゼポルタにいるジュノは知る由もないが現在王都ヴェルドではこの記事の女戦士の話題もそうだが、特に貴族や王族間での間では舞踏会に参加していた異国の貴婦人の詳細を調べようと躍起なっている男性が多くいた。その真実を知ったらおそらく多くの男性達は卒倒するであろう。

「それにしても、今日はいつになく大衆酒場の中に居るハンターが少ないな。どうしたんだ依頼でも少ないのか？」

「いや～依頼はいつも通り沢山来てるけど、多分あれじゃないのかな？今日王都ヴェルドから来た御姫様を皆見に行ってるんじゃない？」

「（嫌な予感がするぜ…）」

ジュノの感じたその嫌な予感は見事的中する事となる、徐々に大衆酒場の外が騒がしくなると一人のドレスを着た女の子が侍女を二人引き連れて大衆酒場へと入って来たのである。

「おぉここが大衆酒場か！！酒とたばこ臭いのう！！」

「（豆ぇ…）」

大衆酒場にいる連中とは場違いの服装を身に纏った女の子その正体はヴェルド第三王女のソフィーであった。王女はちょこまかと大衆

酒場を見て回っている。

「あれがヴェルドから御姫様か～綺麗なドレスだね～」

「そうね、一度でいいからあのようなドレスを着てみたいわね。」

王女は大衆酒場内を一通り見終わると今度はジュノの方へと歩いてきた。

「おぉ！！そなたたちがメゼポルタで話題の看板娘達か！！大長老の行っていた通り綺麗だのう。それにその可愛い服も良く似合っておるぞ。」

第三王女から御褒めの言葉をもらった受付嬢達はわきあいあいと喜んでいる、そんな受付嬢達が喜んでいる後ろの席で雑誌を顔まで上げなるべく王女に顔を見られない様にしているジュノの姿があった。

「（ともかく、雑誌で顔を隠して奴がここから立ち去るのを待とう。なに相手は子供だ直ぐに飽きて他の所に…）」

「なにを熱心に読んでおるのじゃ？」

「！！」

声がした時にはすでに受付嬢達を通り抜けジュノのすぐ横に第三王女がジュノの読んでいる雑誌に興味を示していた。

「おぉ、お主はジュノではないか久しいのう！」

「（もう諦めよう・・・・）」

ジュノは雑誌をテーブルに置き王女に振り返った。

「おぉ、そなたは豆の国からきた豆王女ではありませんか。お久しゅうございます。」

「無礼な！わらわの名は豆では無い！！王都ヴェルド第三王女ソフィーなるぞ！」

「うっさい、ミックスビーンズ。」

「ムキー！！」

王女の怒りは頂点に達したのかジュノに向かってポカポカと殴りかかってくる、その様子を見てか受付嬢達はジュノと第三王女を奇異なまなざしを向けていた。

「ジュノさん王女様と知り合いなんですか？」

「前に俺とブロードが王都ヴェルドに派遣された時が有ったろ、その時にちょっと顔を合わした程度だ。」

「へぇ～でもそれにしては凄く仲が良いみたいだけど～？」

「気のせいだ。」

受付嬢達と会話をしているとすでに王女の猛攻は終わっており王女はジュノが机に置いた雑誌を指差しに再び興味を示し始めた。

「それでジュノ、そなたが先ほど熱心に読んでいる雑誌は何なのじゃ？」

「これはエッチな内容が書かれた雑誌でございます。」

「（フフフ、勝った！この発言をすればどんな女の子でも顔を真っ赤にして雑誌からの興味を示さなくなるはずだ。）」

「…そんな内容書いてないぞ、嘘つきめ。おぉ！！わらわの誘拐された時の記事が載っておるぞ。」

ジュノの思惑は大きく外れソフィー王女は雑誌を手に取り雑誌の内容を読み始めた。ジュノはこの時思った［流石王族予想の斜め上を行きやがる」と。

「アハハ！！ジュノこの記事を見てみよ。謎の麗しき黒髪の女性戦士！と書いてあるぞ、バカじゃのうこの女戦士は実はお…」

王女が重要な事を言いかける前にジュノは王女を抱え込み、席を立ち上がった。

「わっ！何をする！！」

「さぁ、ソフィー王女様メゼポルタを私目が丁重に案内してさしあげましょう。」

「（この事件の真相・・・それだけは誰にも知られてならぬ！！）」

ジュノはソフィー王女を抱えながら急いで大衆酒場を後にし、それに続き王女の侍女たちもジュノの後を追い酒場から出て行った。

「あら、ジュノさん食い逃げしていったわ。」
「ギルドに代金請求しておけばなんの問題もないですよ。」
「さっすが、エフィ―しっかりしてる～。」

メゼポルタ　ジュノマイハウス

「それで、何しにメゼポルタに来た？観光か？…まさか外交か？」
「おぉ！！この部屋至る所にアイルーの置物が有るぞ！！しかも広い！！」
「・・・・」
「あはは！！！ベットもフカフカじゃ！！」
「ソフィー様、殿方の前ではしたのうございます。おやめくださいまし。」

ジュノのマイハウス内を走り回ったりベットで飛び跳ねまくってるソフィー王女を侍女達は必死に止めようとしていたが王女は侍女たちの制止を振り払いなおジュノのベットで飛び跳ねている。その様子を見かねた給仕アイルーのサブローも侍女達と共に王女を止めにかかるが今度はサブローがソフィー王女の玩具にされていた。

「やっ止めてニャー！！背中から降りてほしいニャ！！あっヒゲ引っ張るのは止めてニャ！！！」

要塞都市ヴェルドに住む彼女にとってメゼポルタはとても彼女の感性に触れる刺激溢れる物で満ちていた。そしてましてや彼女は一般人ではない、一国の王女のうちの一人閉鎖的な空間の中で育ってきた彼女にとってはその刺激は常人の倍である。

「いい加減、落ち着け豆王女。」

ジュノはそう言うとサブローの上に乗っかっているソフィー王女をつまみ上げベットの上に座らせた。

「それで、何をしにメゼポルタに来たんだ王女様？」
「遊びに来た！」
「・・・・それだけ？」
「あと、ペットを捕まえに来た！」
「ペット？何をペットにするんだ？アイルーか？」

ジュノのアイルーと言う言葉を聞いて体をビクンとさせ全身の毛を逆立たせカタカタ震わすサブロー。

「違う！リオレイアをペットにしたいのじゃ！！ジュノよ今すぐリオレイヤを捕まえてくるのじゃ！！」

「プッ・・・・アハハハ！！！お前にはドスファンゴがお似合いだよ。走り回る所とかそっくりで相性が合いそうじゃないか。」

マイハウス内にはジュノの笑い声が響き渡る、それを見てソフィーは口元をニヤリと笑った。

「そうか、ではお主が我が国で女装をして様々な殿方殿と踊っていた事を言いふらすとするかのう。」

「…そんなの皆が信じると思ってるのか」

「フフフ、ここに我が国にお主たちが来た時の報告書が有る。」
「何故お前がそれを！」

ジュノの声を無視しソフィー王女は報告書を読みあげていく。

「ふむ、なになにブロードは礼服を纏い第一王女を護衛、ジュノは第二王子を護衛するため女装で…」

「…わかったよ、リオレイアを捕獲しに行けば良いんだろ？」

「やったー！！それではさっそくクエスト依頼書にサインを！！」

ソフィー王女はそう言うと侍女が持っていたクエスト依頼書と羽根ペンを取り上げ机の上に置きジュノにサインをするよう勧めた。

「…ところでその報告書どうやって持ち出してきた？普通なら関係者以外持ち出し不可能なはずだぞ。」

「あぁ、ここに来る前にのうメゼポルタのギルド内部を案内してもらったのだ。そこでこの報告書を手に入れたのじゃ！！」

「…その報告書を整理していた人物の特徴は？」

「うむ、女の人で名前はたしかエビィーと言う名だったな！」

「（エビィーちゃんんンン！！！！！！！）」

ジュノはしぶしぶとクエスト依頼書にサインをし王女に手渡すと王女はジュノのマイハウスから飛び出して行った。侍女達もジュノに軽くお辞儀をしてからジュノのマイハウスを後にした。

「ご主人様、じょそうって何かニャ？」

「お前は知らなくて良い言葉だよ。そして出来ればその言葉忘れて

くれ、いや忘れろ。」
「は…はいですニャ…」

そう言うとジュノは装備ボックスの中から今回狩猟する際に持っていく狩猟武器を選択するためにボックス内を漁り始めた。彼にとってこのリオレイア捕獲依頼は後に彼の人生の転機をもたらす事になるとはまだ知る余地は無かった。

４５節　王女来日（後書き）

１９９９円でアルトネリコ３って言う戦闘音楽がとっても良いと聞いたＰＳ３のゲーム買ったんですけど、それ地雷ゲーって言うんですけどどうなんでしょ？まだプレイしてないのでわかりません。

46節　The　other　Replicant（前書き）

秋の夜長に皆さんは何をしますか?読書も良いですし、おいしい物を食べるのも良いですしスポーツもいいですね。

46節　The other Replicant

昔ハンターだった母さんが私によく言っていた言葉それは

「運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ。」

ハンターになった私はその言葉を頭の隅に置きながら狩猟生活を営んできた。

あの時友達がハンターとして再起不能になった時も少し心が歪みかけたその時に声をかけたあの人と出会ったおかげで私の心が歪む事はなく立派に成長する事が出来た。

あの人の背中を守れるほど強くなるって言う目標も出来た。

でも神様、私があの時下した決断は正しかったのでしょうか?皆を幸せな現実に導いたのでしょうか?

それともあの決断は私とあの人…いや皆の運命を狂わす間違った決断だったのでしょうか?

気球船　ハンター控室

結局王女の引き受ける事になった、当初はリオレイアをそんなえり好みするほどのクエスト依頼なんて無いと思っていたのだが運命のいたずらか何かは分からないが有ったのでる、セクメーア砂漠の近郊にある村で3頭のリオレイアが縄張り争いをしていて困っているという依頼が。

「アハハ！！！大きな大剣じゃのう！！」
「あっ！！ソフィー王女様むやみに触ると怪我しますよ。」
「・・・・・・」

ギルドとしては第三王女は王都ヴェルドからの重要な要人である為、メゼポルタギルドからギルドナイトを三名警護に就かせ王都ヴェルドからの騎士団１０名という大所帯でセクメーア砂漠へと出向く事になった。

「おぉ！！このボウガンかっこいいのう！！持たせておくれ！！」
「あぁ！！王女様むやみに持つと手がススだらけになってまっくろになっちゃいますよ。」
「・・・・・・」

現在この船には3人のギルドナイトと一人の要人が乗り合わせているジュノとブロードとユーノだ。ユーノはギルドナイトとしてメゼポルタの外に出て任務を行う事は初めてとなる。相当緊張しているはずなのだが。

「ジュノ、お主の今回持ってきた双剣を見せてたもれ。」
「・・・・・」
「どうした？寝ておるのか？おーい！！！！！」

ジュノは不思議に思ったなぜ…なぜこいつが…なんでこいつが…

「だー！！うるさい！！ここはお前の部屋じゃねえ！！それに何でお前がこっちの船に乗ってるんだ！？侍女達と騎士団の連中が乗ってるあっちの船に乗れば良いじゃねえか！王都ヴェルドからはるばるあれに乗って来たんだろ？」

「あっちの船は騎士団の連中しかいないからつまらん、それに帰りもあの船に乗る事になるからのう折角だからメゼポルタの気球船に乗っておかねば損ではないか。それよりほら双剣を見せておくれ。」

「こんな血の臭いが染み付いた双剣をお嬢ちゃんが持つべきじゃないから見せてあげません。お嬢ちゃんは工房の親方が特注で作ったそのハンターナイフもどきでも振り回してろ。」

「むぅ…けち！！」

「なんとでも言え！！」

第三王女は今ドレスではなく王女の寸法に合わせたルーキーメイルを装備してもらっている。一応護身の為に侍女達がいやいや言う王女に無理やり着せた物である。もちろん普段ハンターが見に纏うルーキーメイルと違ってスキル隠密が発動している特注仕様だ。これのおかげで狩猟中のリオレイヤが王女に気づく事はまずないであろう、まぁ気づく前に３人がリオレイアを捕獲し終えてしまうだろうが。しかし体を防御する作用は少ししか付いていないので王女はどのリオレイヤが良いか三人に指示を出しながらジュノ達三人がリオレイヤを捕獲すると言う事になる。王女が指示を出している間は３名の騎士団が護衛に付くと言う。なんてめんどくさいペット捕獲作戦だ。そう思いながらジュノは控室で横になって目をつむり始めようとしたが。

「のう、ジュノ。」

「なんだお嬢ちゃん？」

「気持ち悪い。」

ジュノはすぐさま起き上がり王女を抱えトイレの方へと向かった。

気球船　トイレ

トイレでは王女がトイレへ向かって胃の中の吐しゃ物を吐いている。
ジュノは王女の背中を擦り嘔吐を促しながら思った。

「（まったくとんだ子守りだぜ・・・・）」
「おい、今水持ってくるからそこから動くな。いいな！」
「う…うん。」

そう言うとジュノはトイレを後にして通路を歩くと向こうから水を持ったユーノが歩いてきたどうやら気を効かせて水を王女とジュノの元へと向かおうとしていたらしい。

「あっジュノさんこれお水です。王女様にこれ渡してください。」
「あぁ、ありがとう助かるよ。しかしすまないね…初の外の任務が子守りなんてさ。」

「いえいえ、新人の私には最初はこれ位が合ってますから。それにジュノさんが謝ること無いですよ。それよりも早くお水王女様に持って行って上げてください。」

「そうかい。とりあえず水持ってきてくれてありがとうね！」

そう言うとジュノは水を片手に王女がへたり込んでいるトイレへと駆けだした。

セクメーア砂漠　洞穴

「おぉジュノ！リオレイアじゃリオレイアじゃ！！」
「見りゃ分かる。それにもう本日三頭目のリオレイアだぞ。なんでそんなに始めてみたような態度取れるんだよ。」
「だって最初の二頭よりも大きく気品が溢れているではないか！！あれこそわらわにふさわしい陸の女王じゃ！！」
「どれも同じだろう・・・・」
「まぁまぁ先輩王女様が楽しんでらっしゃるから良いじゃないですか。」
「楽しむって…こっちは命がけで捕獲してる身なんですけどね。」
「ハハハ…まぁ行きましょうジュノさんこれで最後ですし。」
「そうじゃ！早く捕獲してまいれ！！」
「へいへい…」
ジュノ達は洞窟の穴から出て砂漠を闊歩しているリオレイヤに向かって走り出した。
「ユーノ、麻痺弾よろしく。ブロードは閃光玉で目くらまし。いいな」
「了解です。」
「はい！」
ユーノは遠距離から麻痺弾をレイアに撃つ、撃った麻痺弾はレイアに着弾し向かってくる三人に気づくとレイアは三人に向かって咆哮を放った。

「ふん！！」

咆哮と共にブロードはリオレイアに眼前に向け閃光玉を投げ閃光玉は炸裂し見事レイアの目くらましに成功する。あとはレイアが麻痺状態になるまでブロードとジュノでレイアの体力を削り麻痺状態に入ったらユーノが麻痺拘束時間を計算し再び閃光玉をレイアの眼前に投げ再び麻痺弾を撃ち込む。今回狩猟依頼のリオレイア達は皆下位クラスの個体なのでこの工程を繰り返せば簡単に捕獲できてしまうのである。

「麻痺状態、入りました！」
「はいはいーじゃあ、後は手筈通りよろしくユーノちゃん。」

しばらくこの工程を繰り返すとリオレイアは徐々に弱ってゆき足を引きずりその場から立ち去ろうと中空へと飛び立つ。

「ユーノ！！ペイント弾！！」
「はい！」

ユーノはすぐさまペイント弾を装填しリオレイアに向けてペイント弾を発射する。ペイント弾は見事リオレイアの脚部に当たりリオレイアは飛び立っていった。

「おい、ジュノ！！レイアが逃げてしまったぞ！！どうするのじゃ！？」

「安心しろよお嬢ちゃんちゃんとマーキングしてあるから。よーし、後はペイントの臭いたどってを罠を仕掛けて捕獲だな。あ～やっと帰れるぜ。」

「ならよいが・・よしお主ら移動じゃ！！」

「「ハッ！！」」

「ちょっと待った、ちゃんとホットドリンク飲んでるだろうな?たとえ短時間でも夜の砂漠の寒さを侮っちゃいけないぞ。」

「あぁ、あの飲み物か!?あれなら飲んだぞ!!少し辛かったがのう!!」

「そうか…なら行くぞ（くそ・・なんで平気なんだよこの豆。）」

セクメーア砂漠　砂漠地帯

ペイントの臭いをたどって行くとそこにはリオレイヤが体力を回復する為に睡眠をとっていた。罠を仕掛ける機会としては最高の機会である。

「じゃあ私罠を仕掛けますから二人は捕獲用麻酔玉をお願いしますね。」

そう言うとユーノは罠を片手にリオレイアの方へと歩いて行こうとしたその瞬間だった。突如砂漠全体に響き渡るほどの大きな咆哮と共に上空から青白いブレスがリオレイアを焼き払ったのである。ジュノをのぞいてその場にいた全員がその恐怖心を狩られる咆哮に身を怯ませそして今目の前に起きた事の状況を飲み込めずにいた。

「な…なに?今の?」

ユーノがそうつぶやくと上空から漆黒の飛竜思わしき者が目の前へと降り立った。姿形はリオレイアその者だが翼爪は赤く染まっており目も禍々しく赤く光っていたその者は通常のリオレイアより明らかに異質の雰囲気を纏っていた。

「全員!!全力でこの場から離れろ!!」

ジュノ言葉と共に漆黒のリオレイアは咆哮を上げ始める。ジュノはリオレイアに向けて閃光玉を投げつける。辺りは昼間の如く真っ白になるが光が止んだ後漆黒のレイアはその場に居なかった。

「あぶない!!ユーノ!!」

漆黒のレイアは閃光玉の光を意図もせず中空へと飛び立ち翼を大きく振りかぶっていた、

「チッ!!」

ジュノは瞬間的にまずいと判断しジュノの目の前に居たユーノの手を取るとユーノに覆いかぶさるようにかばったそして瞬間。

「グッ!!」

背中に激しい激痛が走る、漆黒のレイアは自身の翼爪をジュノに向けて飛ばしてきたのである。その翼爪は背中を貫通し止まりジュノの血がユーノの顔に大量に飛び散る。

「何が起きたんです!!ジュノさん!!!」

ユーノは今目にジュノの血が入りユーノは今目が見えない状態とな

っている。その声を無視しジュノはユーノを担いで漆黒のレイアが居るその場を全力で逃げた。

セクメーア砂漠　洞穴

何とかユーノを担いで洞穴内へと避難して来たが、各々今さっき起きた事に恐怖し震えている者や呆然としている者が居た。ジュノはユーノを下ろすと背中に突き刺さった翼爪を抜きその翼爪の性質を分析し始めた。どうやらこの翼爪には強酸作用が有るらしく突き刺さった箇所周辺の肌は赤くただれていた。

「・・・・」

「先輩あのレイア何だったんでしょう…」

「わからない…亜種や希少種ではないな…新種かもな…」

ジュノとブロードが話し合っていると洞穴の直ぐそこから咆哮が聞こえて聞こえて来た。どうやらジュノの流れ出る血の臭いをたどってここまで来たようだ。

「ユーノ、目の方は大丈夫か?」

「はい、大丈夫です。ジュノさんの傷の方は?」

「問題無いな。ブロードそしてユーノ、これから命令を出す。ブロードお前は全員を統率しつつは退路を開け、ユーノ、お前はブロードの援護及びソフィー第三王女護衛しつつベースキャンプまで向かい気球船でメゼポルタに戻れ。以上だ行け!!」

「ジュノさんは…ジュノさんはどうするんですか?」

「俺はこの後洞窟の外で待ってる素敵な淑女と優美にディナータイ

ムだ。」
「ふざけないでくださいよ!!そんな傷を負って戦えるわけないじゃないですか!!」
「・・・・」
「ユーノさんの言う通りです先輩!!その傷で戦うつもりですか!?俺達も残って戦います!!」
「俺達三人が死んだら誰が王女達を守るんだ?」
そう言うとジュノはソフィー王女の元へと向かった王女は今さっき起きた事に震え上がり今にも泣きだしそうな顔をしていた。その顔を見てジュノはソフィー王女の頭を撫でた。
「ごめんな。すっごく怖い経験させて、でもこんなことが突然起きるのがハンターの世界なんだ。ハンター達皆はそれを覚悟して狩りを行ってる王女様にはそれを覚えていてほしい。貴方はこっちの世界に来るべき人間ではない、貴方は一輪の花を愛でそして民思いの優しい王女様に育ってほしい。約束してくれる?」
「…うん。」
「そっか、ちゃんと約束守れよ。豆」
「…豆ではない、ソフィーじゃ…」
「ハッハー!!そうだったな。じゃあソフィー王女また会おうぜ。おい騎士団の連中どもしっかり王女様をまもるんだぞ。」

そう言うとジュノは立ち上がり洞窟の出口の方へと歩き出した。するとユーノがジュノの手を掴み引き留めた。

「私も行きます。だってせっかく貴方の背中を守れるほど強くなったんですよ！！」

ユーノはジュノに向かって強く訴えかけた、目に涙を浮かべながら。

「…強くなったんですよ…」

「行く必要は無い。」

「でも！！」

そう言うとジュノは首から下げているアイリスからもらった首飾りをユーノに手渡した。

「そいつは預けとく、俺の大事な御守りみたいなものだ。後で取りに来るからなくすなよ。」

ジュノはそう言うと洞窟の出口に向かって歩いて行った。

「…絶対…絶対取りに来てくださいよ…約束ですよ…」

そう言うとユーノはジュノから預けられた首飾りを首に掛けブロードと王女たちと共にベースキャンプへと向かった。

セクメーア砂漠　砂漠地帯

「行ったか…」

ジュノはユーノとブロード達が洞窟内の別の出口から出るのを確認すると漆黒のレイアの元へと歩き出した。

「ハッハー、お待たせ女王様。俺をディナーにご招待してくれるとは感謝感激だ。」

ジュノの体が青く光り始め腕には蒼炎が纏い始める。

「遅れたお詫びとしてとっておきのプレゼントを用意したんだ。気にってもらえるとうれしいぜ！！」

ジュノは蒼炎を槍状に変え漆黒レイアに投げようとした、しかし投げようとした瞬間体が重くなりその場に倒れこんでしまった。自分でも何が起こったのか分からず胸を見ると緋い炎で練られた炎剣がジュノの胸に深々と刺さっていた。

「（なんだ…これ…）」

そう思いジュノは顔を上げるとそこには一人の見た事のある女性が立っていた。その女性は背中に緋色の紋様を浮かび上がらせ腕には緋色の炎に包まれている、漆黒のレイアは女性に向けて突進してきたが女性はそれを片手で受け止め漆黒のレイアの顔を離さずにいる。

「フン…不安定物質が…」

そう言うと女性は漆黒のレイアの顔を離すとレイアの下にもぐり込み即座に片手に作り出した緋色の炎剣を腹に突き刺しレイアを持ち上げた。

「死ネ」

その言葉と共に炎剣から轟音と共に炎が立ちあがり漆黒のリオレイアはあとかたも無く爆散してしまった。ジュノはその光景をただ呆然と見ていた、いや見ることしかできなかった女性によって突き刺されたであろう炎剣がジュノの体の自由を許さなかったからだ。薄れゆく意識の中胸に突き刺さった箇所からにじみ出る血の流れを感じながらジュノは何とか首だけを女性の方へと向けた。

「（なんで…あの女が俺と同じ力を…）」

女性はジュノの視線に気づくと振り返りジュノに対し一言言った。その一言はジュノとアイリス以外知ることの無い言葉であった。

「久しぶりだな、シリアルＪ－１０１。」

その言葉と共に女性はジュノに炎剣を突き刺しジュノの意識は途絶えた。

46節　The　other　Replicant（後書き）

涼しさを通り越して寒いですね～何日か前かは忘れましたけど11月並みの気温の日があったみたいですよ。

４７節　受け継ぐ思い（前書き）

今月は色々物を後先考えずに買ったのでピンチです。

47節　受け継ぐ思い

メゼポルタに戻った私達はすぐさま大長老と古生物書士隊の人達にセクメーア砂漠での出来事を伝えギルドナイト10名と古生物書士隊の数名を連れ再びセクメーア砂漠へと戻った。しかしそこに有った物は漆黒のレイアの物らしき破片と砂にしみ込んだ血そしてジュノさんが装備していた双剣のみだった。

「・・・・・」

三日間かけて行われた漆黒のレイアの調査とジュノさんの捜索はほとんど初日に来た時と変わらず私達はそれらを回収しメゼポルタに戻る事になった。この業界では狩猟場で三日以上行方不明となるとそれは死亡を意味する。ジュノさんの場合はなぜだかそれが適応されなかった。たぶん大長老や皆ジュノさんが死ぬなんて事が想像できないからだと私は思った。それからもセクメーア砂漠でのジュノさんの捜索は続けられた、私も必ず生きててあの人から預かったこの首飾りを受け取りにひょっこり現れると思いながら捜索をし続けた、でも現実は厳しかった、行方不明になってから一月が立った頃大長老はジュノさんの捜索を取りやめると言う事を宣言した。私はその判断に反対し大長老に食ってかかったがブロード先輩に止められた。

「皆同じ気持ちだ、あやつが死ぬはずがないと。しかしこれ以上あやつの捜索に手をかける訳には行かぬ、我々ギルドナイトはこのメゼポルタの民を守らねばならぬ。分かってくれるな、ユーノ隊員。」

「・・・・はい。」

メゼポルタ　ハンター共同墓地

ジュノさんの遺体の無い葬儀は最初はギルド内で秘密裏に行う予定だったが、当日は沢山の人が集まった。メゼポルタの住民区の人達、キャラバン区の人達、驚いたのは王都ヴェルドの王族の面々まで集まっていた事だ。どこから情報が漏れたか分からないがこれだけの人が集まると言う事はあの人は様々な人達に慕われていたと言う事を意味をするんだろうと私は思った。多くの人が現実を受け入れられずに呆然と墓標を眺めていた。その中だれかが声をあげて泣きはじめた。それは服装から見て住民区に住んでる子供だった。その子が泣き始めると様々人たちが泣き始めた。でも私はなぜか涙は出なかった、泣いたらあの人が本当に死んだと認める事になってしまうと思ったからだと思う。

葬儀が終わり人が徐々に墓地から出て行くなか私はナターシャさんを引き留めジュノさんから渡された首飾りを手渡した。

「なにこれ？」

「ジュノさんが私に手渡した首飾りです。私なんかが持つよりジュノさんと親交が深いナターシャさんが持っていた方がいいと思って。」

「ふーん、あなた、なんて言われてアイツにこれ渡されたの？」

「え・・俺の大事なお守りだから、後で取りに来るからなくすなって…」

そう言うとナターシャは少し笑うと手渡した御守りをユーノへ返した。

「じゃあ、あなたが持ってなさいよ。そうしないとあいつがそれ取りに来た時混乱するでしょ。それじゃあ私仕事有るから貴方も暗くならない内に帰りなさいよ、お嬢ちゃん」

そう言うとナターシャは共同墓地を後にし墓地にはユーノ一人が残された。ユーノは手渡された御守りを持ちながらただそこにずっと立っていた。

「なにか迷った顔してるわねユーノ…」

声のする方向に振り向くとそこにはルシャナが立っていた。

「お母さんも来てたんだ…」

「・・・まぁこの子は私の最初の教え子だしね…」

「母さん…」

「ん？」

「…昔母さんに聞かせてもらってた言葉「運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ。」だとしたらあの時の決断は間違っていたのだろうか。もしあの人の命令を違反してまでもあの人のサポートに入っていたら運命は変わっていたのかな。」

「あんたはどう思うんだい？」

ユーノはその時あの時の事を思い出した、あの漆黒のレイアの事だあいつが現れた瞬間心臓が鷲掴みされたように苦しく逃げ出したくなった。そしてあの恐怖心を狩られる咆哮を聞いたとたん体が動かなくなった。

「…わからない。」

「そうかい…」
「母さんは…ジュノさんは生きてると思う？」
「私の教えをちゃんと守っていれば何処かで生きているだろうな。」
「その教えってなに？」

「死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな。」

「…私にも母さんが言ってた事と同じ事を毎回言われてた。」

「…そうか、ならあいつは生きてるさこの世界の何処かで…今はちょっと事情があって動けないだけなのかもね。」

「そうだよね…ジュノさんが死ぬはず無いよね。じゃあ私のやる事は一つだ。あの人を探し続ける。」
「そうかい、じゃあ私もあんたを手伝うとするかな。」
「手伝う？」

「あんた、ジュノに狩りの稽古付けてもらってたんだってさっきギルドナイトのお兄さんに教えてもらったんだ。奴が戻ってくる間私が稽古つけてやるよ。」

「母さんもうハンターを引退したんじゃ…」
「引退したってまだ体や頭の中には技術や知識は覚えてるもんさ、だからなんの問題も無いよ。」
「…それじゃあ、師匠！！よろしくお願いします！！」
「まかせな！！」

「（私はこんな運命絶対受け入れない！！だからあの人を探しに行く為にさらに力を付ける事にした。待っててください、必ずこの首

飾り貴方に返しに行きますから）」

そう心に誓うとユーノは手にした首飾りを首に掛け空を見上げた。

？？？

何か大きなものが動作している音が微かに響いている中一人の女性ともに数人の者達が何かの作業をしていた。

「しかし、本当にヨハネス様の命令でこのような事を？セレイン様」

「・・・・」

その言葉を最後にセレインに話しかけた男はセレインの太刀によって切り捨てられた。

「私の必要としている部下は私の命令に忠実に従う者だけだ。他の者も口答えをする暇が有るなら作業を早く終わらせる事を心がけるのだな。」

その言葉と共に他の作業員は作業する手を速めた。セレインはガラスの向こう側の部屋で磔になっている男を見た。

「Ｊ－１０１…栗実の最後の作品か…あの時始末し損ねたが物がこんな形でまた会うことになるとはな・・」

「セレイン様、準備完了いたしました。」

「はじめろ。」

メゼポルタ　マイハウス

「っはぁ！！！…ここはマイハウス…」

ジュノが飛び起きた場所そこはセクメーア砂漠ではなくメゼポルタのマイハウスだった。ジュノは意識が途絶える前の事を思い出した。ヨハネスに従えていたあの女、セレインがジュノと同じ力を行使して漆黒のレイアを焼き払った事を。

「あの女、ヨハネスに従えてた女だよな。何であいつが俺と同じ力を…ともかく大長老にヨハネスがまた動き出した件を伝えないと！！」

そう思いジュノはベットから起き上がるとマイハウスをで大老殿へと向かった。

メゼポルタ　広場

広場に出るとジュノは異変に気付いた広場にはいつも受付嬢やハンター達が溢れかえっているのに誰もいないので有る。

「なんだ…どうなってんだ？まさかモンスターが街に侵攻してきてるのか…？」

ジュノはその場で立ち止っていると一人のハンターがジュノの向こう側から歩いて来るのが見えたのでジュノは声をかけながらそのハンターに歩み寄って行った。

「おぉ！丁度よかった。あんた、今街はどうなってるん・・・・」

「出たな！！化け物め！！」

そう言うとハンターはジュノに武器を向け切ってかかって来た。

「おっおい！落ちつけよ！！今街はどうなってるんだって！？」

「黙れ！！モンスターめ！！！」

そう言うとハンターはジュノに向けて尚切掛かってくる。すると徐々にジュノの周りにハンター達が増えて行きジュノに攻撃を仕掛けて来た。

「（これ以上は流石にキツイ！！）」

そう思ったジュノは何とかハンター達の猛攻をくぐり抜けその場を後にし大老殿へと駆けだした。

メゼポルタ　大老殿

大老殿にたどり着くとジュノは自分の目を疑った、いつも大老殿の台座に腰かけていた大長老が焼き焦げ四肢が引きちぎられた無残な状態で倒れていたのである。大長老の周りにはいつも大長老を補佐していた人たちも同じように無残な姿で転がっていた。

「そんな…いったい誰が・・・・」

ジュノがその場で立ち尽くしていると大老殿のした方から先ほどジュノを攻撃して来たハンター達の声が聞こえて来たのでジュノは大老殿を後にした。

メゼポルタ　広場

「…いったいどうなってんだよ…」
ジュノはクエストボードに寄りかかりながらそうつぶやいた、すると後ろの方から聞き慣れた声がした。

「先輩…」
「おぉ！！ブロード！！聞いてくれよ！！大長老が…」
「なぜ、フラウにまで手をかけたんですか…？」
「何言ってんだ俺は今さっきマイハウスから出て来たばっかで…」
「じゃあその手や体に付いた血は何ですか！！！！」
「はぁ？血なんてどこにも・・・・！！！！」

ジュノは手や体に目をやると体中鮮血まみれで赤く染まっていた手には今も血が滴り落ちている。

「やっぱり、先輩はモンスターなんですね。だからフラウ達を食い散らかしたんですね。」

≪違う！！俺はやって無い！！！！≫

「言葉すら喋れなくなったんですか、もう貴方は人じゃないただのモンスター。覚悟！！」

ブロードはそう言うとジュノに向かって切掛かって来たジュノは咄嗟に横に回避しようとしたが体は別の行動をとっていた。

「グボェ…き…貴様、この化け物め…」

ジュノはブロードの腹目掛けて貫手を放っていた、ジュノの貫き手

はブロードの体を貫通しブロードの背後からは貫手によって引きちぎられ押し出された臓物が飛び散っている、ブロードの体から手を引き抜くとブロードは崩れ落ち辺りには血の海が広がった。

≪あっ…えっ…違う。そんなつもりじゃ…！！≫

ブロードから流れ出て出来た血の海に映っている自分を見るとそれはいつのも自分の姿では無かった黒く醜い姿となったジュノがそこには映っていた。

「ギルドナイトが一人また殺されたぞ！！」

「化け物めぇ！！！！」

ジュノの辺りはすでにハンターに囲まれていた。

≪違う！！俺じゃない！！俺は化け物じゃない！！！これは事故だ！！！！≫

ジュノの発した言葉はもうハンター達には届いていないただのモンスターの咆哮としてハンター達の耳に届いていた。

「どいて！！」

その言葉と共に一人の女性ギルドナイト前へと出てき、ジュノに向けて双剣で切掛かって来た、ジュノはその双剣を手で防ぐ。

≪ユーノ！！聞いてくれ！！！これは違うんだ…≫

ジュノがそう言った瞬間だった先ほど切掛かって来たユーノをジュノ自身の巨大な手でつかんでいた。

「くっ・・・離せ！！！モンスターめ！！」

≪違う俺は、モンスターじゃない！！≫

〔本当にそうか？〕

≪！！≫

〔忘れてねえか？俺はアンサラー。旧文明の人類が作り出した似非者だってこと〕

≪…≫

〔周りを見てみろよ。全員が俺に敵意むき出し、しかもあの目はモンスターを狩るときの目だお前も良く見覚えがあるだろう〕

〔人間の様に振舞って生活している事に問題があった事だよ、諦めな。〕

その言葉と共にジュノの意思とは反しユーノを掴んでいる手に熱くなり始めた。

≪止まれ…止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止ま…≫

「ア、、ア、、ア、、ーーーー！！！！ア、、ヅィ！！！」

≪ウワアアアアアア！！！！！！！≫

ジュノの手が燃え盛る中ユーノの人が発するとは考えられない声と共にユーノは燃え尽きてしまった。それと同時にジュノの体中に何かが突き刺さったそれは拘束用のバリスタ弾だったバリスタの飛んできた方向を見るとそこにはナターシャが弓を構えジュノに向けて弓矢を放った瞬間だった。その時微かに聞こえた。「モンスターめ…」とナターシャの放った弓矢はジュノの目に突き刺さり激痛と共に視界の片方が真っ暗になった。

「今だ！！全員奴を殺せ！！！！」

その言葉と共に多くのハンターから攻撃を受けるジュノ激痛がジュノの体中に響き渡る。

≪ユルシテクレ…許してクダサイ…≫

徐々に下半身の感覚が無くなり今度は上半身全体に激痛が走る。

≪ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ≫

ジュノを攻撃するハンター達の顔はニヤリと歪みジュノを攻撃するたびに笑って見える。

≪怖い恐いコワい。オレコワイ。コワイ。ボクコワイヨウ≫

【Ｇｒａｓｐ　ａ　ｈａｎｄ！　Ｅａｒｌｙ！】

ジュノの視界は徐々に黒く染まってゆく。

【Ｇｒａｓｐ　ａ　ｈａｎｄ！　早く！！】

≪タスケテ…カアサン・・・シニタクナイヨウ…オカアサン≫

【手を握って！！早く！！】

≪…オカア…サン？≫

声のする方を見てみると光と共に手が差し伸べられているのがわかった。ジュノは無意識にその手に向けて手を伸ばした光から差し伸べられている手を握るとそれはとても温かく今まで激痛が消えて行くのが感じられた。

？？？

セレインの居る部屋内には何かの異常を示す音がけたたましく音が響き渡っている。

「何が起きている!?」

「わかりません!?最終段階が終わる瞬間に異常が発生しました。」

「チッ!!」

セレインはジュノが磔になっている部屋へと目を向ける。ジュノは能力が発現され背中の紋様は直視できないほど眩しく光を放っている。するとジュノを中心に周りに蒼い炎が渦巻き始めジュノ覆って炎は大きくなってゆく。

「これ以上は危険です!!セレイン様避難を!!」

その言葉と共にセレインが見た物それは炎の中から何かが姿を現しその瞬間辺りは真っ白に染まり咆哮と共に辺りの物は跡かたも無く吹き飛んだ。セレインは咄嗟に能力を発現し事なきを経たが彼女の周りに居た作業員や施設は無くなってしまった。セレインは咄嗟に空を見上げると地平線の暁の空に向かって何かが駆けて行った。

「奴に何を仕掛けた…栗実。」

セレインは空を見上げたまま暁とは反対の方向へと飛び上がりその場を後にした。

４７節　受け継ぐ思い（後書き）

もうタンクトップ一枚とジャージのみで生活するのが厳しくなってきましたね。本格的に衣替えしなくちゃいけないな・・・・

登場人物紹介3　その他（前書き）

尺稼ぎその3でございます。

登場人物紹介3　その他

ジェイドとエミリア
二人とも30代
いつぞやの特異個体クシャ襲撃時にジュノが助けたカイト君の両親
メゼポルタ　商業地区で雑貨屋を営んで生活している。

マタメ村
フラヒヤ山脈（これは公式設定で存在する山脈）の東に位置する最近開拓し終えた村。村の方針としてはユクモ村の様な湯治村を目指している。
村名称はアイヌ語でマタは冬と言うのでそれをもじってマタメにしました。要は冬村でございます。

ユク
40代後半
マタメ村の副村長で現在はシュンクの面倒を見ている人物。
ユクはアイヌ語でエゾシカを意味します。日本語訳だとエゾシカ副村長ですね

エカシ
70代位
マタメ村の村長。副村長のユクと共にシュンクを見守る人物。
エカシはアイヌ語でお爺さんや長老を意味します。日本語訳だと長老でOK

シュンク
9歳
両親をオルガロンによって食べられてしまった孤児。現在はユク村

長の元で暮らしている。
シュンクはアイヌ語でエゾ松を意味します。日本語役だとエゾ松君ですね

マタメ村住民の服装の模様はアイヌ民族の伝統的な衣装の模様を参考にするとわかりやすいです。

アルティ山　名前の由来　なんとなく

マタメ村を舞台にしたオルガロンの狩猟は北海道で起きた三毛別村獣害事件を元にして書きました。実際の事件に出て来た熊は３メートル位の巨体で冬眠する為の穴が見つからずこのような獣害事件が起きたそうです。熊を仕留めたのは今まで熊ばかり仕留めて来た熊専門の伝説のマタギの人が鉄砲で仕留めたそうですよ。もっと詳しく知りたい人は調べてみてはいかかでしょうか。

王都ヴェルド
実際にモンスターハンターの世界の設定で存在する首都です。たぶんこの主都内なら馬は存在するはずと思い前乗り物紹介の時に紹介した馬を登場させました。よかったな馬！！

ゼバスティアン・ルネサンス国王
年齢５０代位
現在王都ヴェルドを統治する国王。首都を囲むほどの壁と対モンスター用のバリスタや大砲を首都全体に配備させてるあたり相当モンスターの事を恐れていると感じられる。その過剰すぎるほどの対モンスター対策で国益に支障は出ないのであろうか。ジュノいわく「狂ってやがる。」らしい。
名前の元ネタは偉大な音楽の父ヨハン・ゼバスティアン・バッハの

名前から拝借

王妃　アンナ　ルネサンス
年齢４０代後半
国王の妻。
元ネタはバッハの再婚相手の宮廷歌手アンナ・マクダレーナ・ヴィルケから拝借

第一王女　エレノア　ルネサンス
２３歳
国王一家の長女。実際のモンハンのゲーム内にも出てくる美しい第一王女に名前を勝手につけました。
元ネタは実際に存在した女性音楽家エレノア・ポウダから名前を拝借

第二王子　ルートヴィヒ　ルネサンス
１７歳
国王一家の長男にして次期国王、これも実際のモンハンのゲーム内に出てくるナルガクルガを国を抜けだして狩猟しに行ったわ良いが一方的にボこられて悔しかったのかＭＨＰ２Ｇのネコートさんにこっそりとナルガクルガに関しての依頼を出している第二王子に名前を勝手につけました。
元ネタは　偉大なるルートヴィヒ・ヴァン・ベートベンから名前から拝借

第三王女　ソフィー　ルネサンス
１４歳
国王一家の二女。実際のモンハンのゲーム内に出てくるわがままな第三王女に勝手に名前を着けました。
元ネタは　実際に居た女性音楽家　ソフィー＝カルメン・エックハルト＝グラマッテから名前を拝借

ルシャナ
４０代後半
元ハンターでジュノのお師匠さん、現在は舞踏の先生として王都ヴェルドで生活しているユーノの母でどっか行ったジュノの代わりに稽古をつけることとなった。

セクメーア砂漠
モンハンの公式設定内に実在する砂漠の名称です。

ＭＨＦ内の実在するＮＰＣ　容姿を知りたい人は画像検索してみてください。
レジェンドラスタ組

チルカ
１０代後半
語尾に【です】を結構な確率でつけてくる娘（どっかの世界のお父様が作った語尾が【ですぅ】のドール程ではない）とある街で受付嬢をしていたがあまりの要領の悪さでクビになり、その後高名な狩猟笛使いと出会い、才能を見いだされ若くして狩猟笛のレジェンドラスタとなる。会話中に謎の効果音（例ギューン！！ぷーっ！ブンブンプープー）を挟む事があり狩猟笛の扱い以外の事はからっきしダメだったりする。リアンシリーズ装備の腰部分はスカートなので彼女の秘密の花園を目指し最近ＭＨＦ内では全国の【ローアングラー】ハンターや酒場で佇む彼女から一定の距離を取りただひたすらそこに佇み、異能の力【スケルトンビューア―】を駆使し彼女の秘密の花園を堪能するハンターもいる。今日もメゼポルタは平和です。

ギネル
４０後半

【ガハハッ！！】の人。とても澄んだ瞳をしていて技も性格も豪快なハンマァー！！♂使いの自称最強のレジェンドラスタ。酒好きで「俺のハンマァー♂があの獲物を狩りたい。」と語りかけてくると平気で言ってくるあたりかなり重症である。狩りが成功に終わると「どんなもんじゃーい」と言い（どっかの世界のボクシング一家の長男が同じ事言って気がする。）狩りが失敗すると「悔しいのう！」（某名作漫画の少年が同じ言葉をあんちゃんに向かって連呼してたような。）と言いたまに「むふーっ！！」だったか「ぬふぅ！！」と言ったり（どっかの歪みねぇ兄貴とはいていない妖精達とお戯れになってはいかかでしょうか？）「待てえ～い！モンスタ～っ！逃がさんぞ～！」（何処の国際刑事警察機構（ＩＣＰＯ）銭の刑事ですか？）と言ったりする。なんか色んな世界のキャラが融合そして凝縮されたおっさん。かつては美少年だったらしい。片手剣も弓もいらん！と言った事で全国のＭＨＦ内のフローラちゃんとナターシャさん大好き男性ハンターから目の敵にされてるんじゃなかろうか。まぁ彼自身ガチムチぽいしナウいばな奈持ってそうだから大丈夫だろう。（あぁん！？あんかけチャーハン！？や仕方ないね、あぁん！？最近だらしねぇの！？とは残念ながら言いません。）なんかすいません。

受付嬢

デメトリア　別称ドリル

巻き髪が特徴の高飛車口調の受付嬢、見た目からしてお嬢様オーラがにじみ出ているが狩人弁当を今度コッソリ分けてくれとか言ってくるので意外と庶民オーラが漂う。好きなモンスターはナナ・テスカトリで「一人でしか参加できない過酷なクエストだから是非挑戦してほしいわ。」と言ってくる。討伐したあかつきにはきっと夜の予定を空けておいてくれるに違いない。多分・・・・メゼポルタで４番目に人気がある受付嬢です。

エフィー

メゼポルタで3番目に人気の貴重なＰｏｎｙ　ｔａｉｌ　Ｇｉｒｌ．物腰穏やかでな女性で、話しかけると深々とお辞儀をしてくれると言う接客スキル１００％誇る受付嬢の彼女だがこんがり肉を上手に焼けないと言う弱点を持つ。そして時より「皆さんの役に立ってるのか急に不安になると事があるんです…」と真剣に悩んだりする一面もある。「そんなに肩の力入れてちゃ体が持たないぜ。（キラ☆」と言ったらどうなるんでしょうか。先生！！僕気になって眠れません！！

モンスター編

漆黒のレイア

ＭＨＦ内で最近実装された古生種と言う不安定な存在という位置付けにいる黒いレイア　通称Ｕｎｋｎｏｗｎまたはうんこなう。クエストを受注すると凄い低確率で乱入してくる。噂によると１／１００の確率で出会う事が出来るらしい。ＭＨＦ内の良モンスターで荷電粒子砲みたいな青白いビームを吐いたりどっかのＲＰＧの召喚獣の様にメガフレアぽいの連発したりして来る。しかもダメージを与えれば与えるほど強くなって行き最大５段階に分けて強くなる戦闘力５３万のフリーザ様もびっくりのとんでもモンスターだＺＥ！！

一人で適当にクエスト張って遊んでいた筆者はこれに偶然遭遇し４０分間戦い負けました。ちゃんと準備して挑めば勝てたかもしれない・・・動画サイト等で黒レイアと検索すると動画がポンポン出てくるので一度見てみるのをお勧めします。

語句編

Ｒｅｐｌｉｃａｎｔ　レプリカント

アメリカのＳＦ作家フィリップ・Ｋ・ディック氏の「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」と言う小説から生まれたディック氏が作

った造語。最近だと二―アレプリカントってゲームで使われましたね。
意味は「遺伝子工学によって生み出された人造人間」です。

おまけ
ユーノちゃんのマタメ村での装備組み合わせ。

ガンナー（女）

武器スロット１　　Ｌｖ１　　●
剛力珠
ＳＰガンナー頭　　Ｌｖ７　１０９　■
強弾珠ＳＰ
ストレガＦレジスト　（伝祭）　Ｌｖ７　１０４　●
●●　剛力珠，剛力珠，剛力珠
ブランゴＵガード　　Ｌｖ７　６２　●
●　剛力珠，剛力珠，剛力珠　　●
ストレガＦコート　（伝祭）　Ｌｖ７　９２　●
●●　剛力珠，剛力珠，剛力珠
ラヴァＵレギンス　　Ｌｖ７　７５　●
音無珠Ｇ，音無珠Ｇ　　●
プーギー服なし

防御値：４４２　スロット：■１□０●１２○０　火：７　水：７
雷：７　氷：３　龍：５

攻撃力ＵＰ【大】，見切り＋３，火事場力＋２，反動軽減＋２，高級耳栓
装填数ＵＰ，通常弾・連射矢威力ＵＰ

頭装備は黒いギルドガードハットを被ってます。ＭＨＦ内での見た目はガンウーマンな感じ。ストレガシリーズはＭＨＦ内のオリジナル防具です。

登場人物紹介3　その他（後書き）

最近5万ＰＶを達成し毎日大体１００人位の人達にこの作品を読んでもらって私はとてもうれしいです。だんだんモンハン色が薄れてきてるような気がしなくもないですが、途中で投げ出さずがんばって書いて行きますので蒼炎の狩人をこれからもご愛読よろしくお願いします。

48節　Boot（前書き）

一旦主人公交代であります。ユーノちゃん頑張ってね～

48節　Boot

メゼポルタ　住民区

メゼポルタ、ここには多くの人々が暮らし様々な職業を営み生活を営んでいる。このメゼポルタの人口の大半は己の力や技術でこの世界に住むモンスターを狩り生活を営むハンター達で占めている。しかしハンターにも一般住民にも様々な性格の者がおりメゼポルタに住む一般住民達に危害を加えるものも多数存在する。そんなならず者たちを取り締まる為にメゼポルタにはギルドナイトという組織が形成されている。そんなメゼポルタの住民区の街角で二人の男女が何かを話し合っていた。一人は顔が隠れるほど帽子を深くかぶり赤を基調とした騎士風の服装を身にまとう男ともう一人は見るものすべてが目を引くほどの抜群のプロポーションを誇る体に娼婦ような服を身にまとった女性だ。

「いいか、今回の任務はだな…」

「悪い坊や達と甘い一時を興じる。でしょ？」

「甘い一時って…まぁいつも通りあまりやりすぎないでくれよ。ここは住民区一般市民も居るんだからな。」

「はいはい～」

男性の注意を聞くと女性は軽い返事をしながら街の雑踏へとまぎれていった。女性はすれ違う男性をすべて魅了するがごとく歩いていく。女性はしばらく街中を歩くととある飲み屋へと入っていった。飲み屋の中は煙草や酒の臭いが充満し客層も見た目からしてあまり

良い者とは言えない者たちで溢れかえっていた。女性は周辺を艶めかしく見渡しカウンターへと腰かけた。

「ご注文は？」

「ポルタジュース、ラオシャメロン味で」

女性が注文を言うと辺りから笑い声が聞こえてきた。

「お姉さんこの酒場にはそんな子供の飲み物おいてねえぜ。」

「ふ～ん。」

注文を頼んだ女性に声をかけた男は席を立ち女性の座るカウンターのすぐ隣へと座った。

「それで、幾らなんだ？」

「お金はいらないわ、でも教えてもらいたいことがあるのぅ。」

女性は隣のカウンターに腰かけてる男性の膝を指でなぞり始めた。

「最近、ここらでねお客さんが飲みに行くと不思議なことに全部身ぐるみ剥がされちゃう怖～い飲み屋があるんですって。それってここかしら？」

「へへ、物知りなお姉さんだ。でも世の中には知らない方がいい事もあるんだぜ。」

男がそうつぶやくと店中の男が立ち上がり女性の方へとゆっくり歩きだした。

「私と遊びたいの？おいで、まとめて相手してあげるわ。」

女性はそういうと服を脱ぎ迫ってくる男たちに着ていた服を投げつけ男たちの頭上後方へと飛び抜けた。服を脱いだ女性の姿それは胸が大きく開いた全身を覆う黒いインナーに両足ふとももにレイピアを装備した姿だった。

「さぁダンスの時間だ！！」

そう言うと女性は両脚に装備してあるレイピアを抜き男達に駆けていった。

メゼポルタ　住民区

女性が入った店の前には店の店主と十数名の男たちがボロボロな状態のままギルドナイト達に拘束され連行されていた。

「…まったくお前は…やり過ぎるなとあれ程言っただろうユーノ。」

「いいじゃないですか、ブロードさん。おかげで違法な行為をしていた酒場の検挙が一斉にできたわけだし。」

「検挙って言っても店の中あんなに無茶苦茶にしてどうするんだ！！店の中を監察する側の者の気持ちも考えてやってくれ。」

「でも、逮捕した中の男にマーシレスの連中も含まれてたからいいじゃないですか。」

「まぁ・・・思わぬ収穫もあったことは認める…だけどな。」

「あーあーわかりました。今度はもっと丁寧にやります～。まった

く堅いんだから…それだからいまだにフラウさんと何の進展もないんですよ～」

そう言うとユーノは街の喧騒の中へと入っていった。

「あっ！！後で会議があるからちゃんと本部によるんだぞ！！わかったな！！」

ユーノはブロードの声が聞こえたのか手を挙げ頭上の上で手をひらひらさせながら喧噪のなかへと姿を消した。

「まったく…」

メゼポルタ　マイハウス　ユーノ邸

ユーノは自身のマイハウスに着くと装備していたレイピアとインナーをマイハウス内に脱ぎ捨て部屋着へと着替えベットへと身を投げた。

「ふぅ、疲れた～。」

「ご主人様今日の仕事はどんなだったのニャ？」

部屋の隅から現れた給仕アイルーはユーノの脱ぎ捨てたインナーとレイピアをかたずけながらユーノに尋ねた。

「ん～悪い男の子たちと遊んできただけかな～」

「遊んできた…と言うことはその男の人たちはボコボコですニャ？」

「ふふん♪当たり～」

「流石ですニャ～！！！やっぱりご主人様はかっこいいニャ！！」

「ふふーん♪」

ユーノはベットに横になると首から下げてる首飾りを眺めた。

「（貴方ほどじゃないけど私は私なり頑張って仕事してます。）」

ユーノはそう思い首飾りを手に取るのをやめるとある事に気づいた。

「あっ！！そういえばこの後ギルドで会議があるんだった！！フーちゃん、私ちょっと出かけるから戸締りお願いね。」

「はいニャー！！」

「あっそうだ！！家のマタタビの在庫まだある？」

「まだたくさん有るニャ！！」

「そっか、じゃあちょっと食べていいからね。みんなと分け合って食べるんだよ～。」

「ニャー！！わかったニャ！！」

ユーノは急いでギルドナイトスーツに着替えるとすぐさまマイハウスを飛び出していった。

メゼポルタ　ギルドナイト本部

会議場では現状報告されている大陸各地で報告されているモンスターの被害やメゼポルタで起きている事件の報告等がされていた。

「（退屈～）」

ユーノは口に手を当てながらあくびをした、すると横に立っている

ブロードから注意を受けた。ユーノは再び壇上で報告書を読み上げている女性ギルドナイトの言葉に耳を傾けた。

「つい最近ですが狩猟中のハンター達の前に謎のモンスターが出現したとの報告がありました。謎のモンスターは遭遇したハンター達に危害等は加えることは無かったのことです。このモンスターの目撃情報は多数でハンター達の証言によると特徴としては体色は青く二足歩行で移動するとの事、古龍観測隊および古生物書士隊の過去の観測記述にもこのような特徴のモンスターの記述はされておらずおそらくこれまで確認が取れていない種族のモンスターと現在では推測されています。ギルドナイトの皆さんも狩猟を行う際に出くわした場合は十分気を付けてください。以上で会議を終了します、解散。」

号令と共に他のギルドナイトは会議場から退出していった。

「（青い新種のモンスターか…面白そう！）」

「おい、ユーノ会議は終わったぞ。早く退出するぞ。」

「あっブロードさん。私これからちょっと新種のモンスターについてもっと詳しく聞きに行くんで先に帰っていいですよ。早く帰ってフラウさんと遊んであげてくださいね～じゃ！！」

そういうとユーノは先ほど報告を行っていた女性ギルドナイトの元へと駆けて行った。

「（…駄目だ、なんで俺のパートナーはあんな性格の人ばかり付くんだろうか…まぁ仕事はちゃんとしてくれるからいいけど…）」

ブロードはそう思うと会議場を後にした。

メゼポルタ　ギルドナイト本部　事務室

事務室では様々な狩猟依頼やメゼポルタでの民衆被害報告、そして古龍進行予測表等が机に幾重にも積み重ねられていた。ユーノその机の一角に座る先ほど会議場の壇上で報告書を読み上げていた女性ギルドナイトに声をかけた。

「ねぇねぇ！エビィーさんエビィーさん！！」

「ん？何ユーノちゃん？」

「さっき話してた青い新種のモンスターの話だけどもっと詳しく教えてくれない？」

「えー主にさっき話した通りの情報しかないんだけどな～。そうだな～その新種のモンスターってハンターには一切危害を加えないって事とハンターが狩猟中に危なくなった時に急に現れて狩猟中のモンスターをハンターの代わりに討伐した。これくらいかな～」

「その一切危害を加えないってそのモンスターに攻撃しても？後そのモンスターが目撃された場所ってどれくらいあるの？」

「目撃例は～この地図に印つけてる場所全部かな。最近だと樹海の方かな？」

そういうとエビィーは机の横にある大陸地図を広げ指さし始めた。その印の打っている個所を見てユーノは苦い顔をした。

「うわっ…結構な範囲に出現してるのね…」

「ハンターがどんなに攻撃しても反撃してこないんだって。攻撃してもハンターの事じっと姿を見つめて飛び去るんだってさ。」

「うーん、変なモンスターだね。」

「まったくその通りだよ。この世界はほんと謎めいてるね。」

「そうだね～じゃあエビィーちゃん情報ありがとね～」

エビィーにお礼を言うとユーノはギルドナイト本部を後にし大衆酒場へと足を運んで行った。

???

真っ白で何もない空間に男は漂っている、一見死んでいるように見えるが呼吸をしているのか胸が僅かに上下している。

【調子はどうさ?】

真っ白な空間の中にぼんやりと少女らしき影が浮かび影から声が響き渡る。

「コワい、ダレ?カあサン?」

【だから君の母さんじゃないんだけどな～まぁあれだけ怖い思いしたんだから無理もないか…でも会話がちょっと出来るようになった

だけ快調に進んでるかな。それじゃあ次からはもっと栄養のありそうな奴でも食べるとするかな…大丈夫！！君が外に出てた時にやっていた仕事はあたしなりにやってるから安心して寝てるといいよ！！】

「シゴト…ギルドナイト…」

【そうそのギルドナイトって仕事を今あたしなりにやってるから、君はそこでゆっくり休んでいるといいよ。それじゃ！仕事が終ったらまた来るから。】

そういうと女の子の影は消えたが再び空間内に女の子の声が響き渡った。

【そうそうちゃんと君のお守りを預けてる女の子も探してるから安心してね～じゃ！！】

女の子の声が響き終わると真っ白な空間には男が一人残された。

「オマモリ…預けた…約束…」

48節　Boot（後書き）

ちょっとリアル事情が忙しくなるので毎日更新って言うのは辛くなるかもしれません。でも最低一週間に1~2回は更新できるように頑張ります。

49節　shock（前書き）

昨日額に【肉】と書かれた女の子が表紙の漫画が気になったので表紙買いしました。自分でこんなかわいい子をすらすらと書けたらなぁと思いました。

49節　shock

メゼポルタ　ユーノ　マイハウス

ユーノはベットに転がりながら週刊狩りフェミを読んでいた。この雑誌は最新の狩りの狩猟防具狩猟武器そして普段着等が掲載されている、メゼポルタに多く生活する女性ハンター達に読まれている雑誌だ。

「どれも値段が高い…」

「でもご主人様はどれも似合いそうニャ！！」

「褒めてもマタタビは出ないよ～ん」

「ニャ～・・・」

ユーノはそう言いつつ寝返りうち雑誌を読みふけっているとマイハウスの扉が開かれ男が駆け込んできた。

「おい！ユーノ仕ご！！！なんて格好をしてるんだ！！！」

ブロードは顔を隠しながら後ろへ振り返った。無理もないユーノの身に着けているのは下着のみなのだから。

「女性の部屋にノックしないで入ってくるブロード先輩が悪いんですよ。フラウさんの部屋にもノックなしで入るんですか？先輩は？だとしたら意外と仲進んでるんですね～安心安心。」

「いいから、早く服を着ろ！」

「は～い」

しばらく部屋内に服と肌が擦れる音が響きわたる。

「どうぞ～これで大丈夫です。」

ユーノがそう言いブロードは振り返るとそこには薄着を一枚だけきたユーノの姿があった。

「…あまり前と変わってないような気がするのだが…」

「何を言いますか！ちゃんと大事なところは隠れてますよ！」

ユーノの言うとおりユーノの着ている薄着はちゃんと大事なところは隠れていた、ギリギリのラインだが。

「…もういいともかく仕事だ！！　クルプティオス湿地帯で古龍が出現したとの古龍観測船から連絡が入った。これからクルプティオス湿地帯に向かうから装備を整え次第気球船ドッグまで向かうぞ。」

「二人で行くんですか～？」

「一般ハンターから募集を募る。そろわなければ同行契約されていないレジェンドラスタと共に撃退及び討伐を行う。ともかく急げよ。」

「うぃーす」

「返事ははい！か了解！だ。」

「は～い」

「（もういい…）」

ユーノはブロードに返事を返すと狩猟装備に着替え始めた、ユーノが着替えを始めるとあわててブロードはユーノのマイハウスのドアを開け外へと出てユーノの着替えを待った。

メゼポルタ　気球船ドック

気球船ドックへと着くと太刀を所持している一般ハンター1名が既に待機していた。ブロードは直ぐに一般ハンターの元へと駆けて行った。

「遅れてすまない。それと今回は募集に乗ってくれてありがとう。」

「いえいえ、でも珍しいですねギルドナイトの方々からクエスト募集文を出すなんて。」

「緊急の依頼だったのでね、ともかく依頼内容の方は気球船内で話そう。」

そう言うとユーノ達三人は気球船内へと乗り込んだ

気球船　ハンター控室

今回の緊急依頼の内容は湿地帯付近を移動していた竜車の荷台が何者かに襲撃されたと言う物だった荷台には乗客を乗せていて何名かはその場で振り落とされてしまったらしい。移動していた際周辺にはモンスター一匹もいなかったと言う情報からメゼポルタの古生物書士隊は古龍オオナズチが出現した可能性が高いとの判断を下した。

「今回の任務はまず振り落とされた乗客を捜索する事が最優先だ。

オオナズチに発見された場合は撃退そして出来れば討伐とする事にする。」

「了解です。」

「は〜い」

「ところで君の名前を聞いてなかったな。俺はギルドナイトのブロード、そして君の横でねっ転がってるのは俺後輩のギルドナイトのユ…」

「ユーノでーす。好きな事はネコいじりです！！」

「私はアイザックです。古生物書士隊員兼ハンターで今回は古龍オオナズチとの接触があり得るのでノレッジから調査に向かってくれと頼まれたのでこの依頼に参加してるってとこですかね。」

アイザックの自己紹介を聞くとユーノはアイザックに向き直った。

「ノレッジってノレッジ・フォールさんの事？それに古生物書士隊に所属してるって本当？」

「なんだ、ユーノ。ノレッジって言う人と知り合いか？」

「ブロードさん知らないんですか！？ノレッジ・フォールと言ったらオオナズチの生態解明に今最も尽力してる人物ですよ！」

「そうなのか？アイザック君？」

「ええ、ユーノさんの言う通りですね。でも良く知ってましたね彼女の事。」

「だてに色んな雑誌読んでるからね。それよりも古生物書士隊に所属してるんでしょ？じゃあ最近噂されてる新種の青いモンスターの何か知ってたら話し聞かせてくれない？」

「新種の青いモンスターの話ですか…そうですね…新種の古龍ではないかと話されてますね。目撃例は多いですが何せ遭遇時間が少ないですからね…それにサンプルとなりそうな物も落とさないですし…こっちも正体究明に手を焼いてる状況ですね。でも運が良い事にサー・ベイヌさんが遭遇したらしく今そのモンスターの特徴を捉えた絵画を描いてるそうですよ。」

「本当！！あのサーさんが出会ったって言うなら青い新種のモンスターのその姿がメゼポルタに知れ渡るのも時間の問題ね。」

「（俺も今度からもっと雑誌を読むようにしよう…）」

クルプティオス湿地帯　キャンプ地

クルプティオス湿地帯、その場所は主にメゼポルタのハンター達からは沼地と呼ばれている場所である。沼地に付いた三人はさっそくキャンプの設営に取り掛かり装備とアイテムのチェックを行いすぐさま沼地へと入って行った。

「アイザック君は片手剣使いなんだね。」

「えぇ、モンスターの生態を観察しつつメモの取れますからね、ユーノさんは双剣なんですね。」

「まぁねえ～これ以外の武器も扱えるけど一番得意なのは双剣だね！！」

「任務中は会話は慎めよ、二人とも。生存者を見つけそこなったら大変だからな。」

「わかってますよ～大剣一筋のブロードさん♪」

「（ぬぅ・・・今度他の武器種も練習しよう・・・）」

三人はまずキャンプ近隣と沼地の東に位置する洞窟内の探索を行ったが振り落とされたとされる人々は見つける事は出来なかった。

「見つかりませんね・・・」

「そうだな…」

「・・・見られてますね。」

「何がだユーノ？」

「気づかないんですか？ブロードさん？洞窟を出てからずっと見られてますよ奴に。襲ってくる気はないみたいですけどね…千里眼の薬を飲んでみてください。なんとなく気配がわかりますよ。」

ユーノに言われるがままブロードは千里眼の薬をアイテムポーチから取り出し一気に飲み干し、意識を集中させた。

「…確かに近辺に気配を感じるな…」

「ユーノさんよく薬も飲まずに気配がわかりましたね…」

「私達が洞窟から出た瞬間微妙な風圧で落ち葉が動いたのを見ました。多分今は離れた所で私達の事見てる。」

「凄い観察力ですね…」

「そうだな…アイザック君片手剣の腕に覚えは？」

「お二人の足を引っ張らない程度の自身はありますよ。」

「そうか…じゃあ気を付けて奥へと進もう。」

ブロードはそう言うと三人は武器を抜きながら沼地の奥へと進んで行った。

沼地　最深部

沼地の最深部には草が周りに生い茂り一面緑一色であった。

「ガブラスが飛んでるな…という事はここに居るということか…」

「あっ！！皆さん見てくださいあそこに人が倒れてますよ！！」

アイザックの指差した方向には確かに人が一人倒れていた、アイザックとブロードは倒れている人の元へと駆けて行った。するとそこには竜人族の若い女性が倒れていた、アイザックは直ぐに抱き起こすと意識の確認を行った。

「大丈夫ですか！？救助に来たものです！！」

アイザックは何度か竜人族の女性を揺すると女性はか細い声で受け答えに反応した。

「良かった、多少怪我は負っていますが大丈夫なようだな。二人ともこのままキャンプまで急いで戻ろう。」

「それは無理みたいですよ、二人とも。どうやら私達奴の仕掛けた罠にまんまと引っ掛かったみたいです。」

ユーノがそう言った瞬間二人の体は何かににらまれた時に用に怯んだ、そう龍が獲物を見つめた時に起こる人の心の奥底の恐怖心を駆りたてる怯みだ。

「二人とも横に回避！！」

ユーノのその声と共に三人は横へと飛ぶと先ほど三人が居た場所に紫色の液状の塊が着弾し辺りに飛散した。すると三人の前方に紫色の巨大な龍が姿を現した。

オオナズチ　別称　霞龍

古龍の一種で比較的世間一般的にもよく知られている古龍であるが、驚異的な擬態能力のせいか特に目撃例の少ない古龍種である。多彩な毒を体内に保有しており、危険が迫ると口から吐き出して攻撃する。そのほとんどは皮膚から浸透して生物の身体を脅かす危険な物で、浴びせられた毒液によって様々な症状を引き起こす。

「…アイザックさん。」

「はい…」

「私は今から持ち合わせの閃光玉を有る分全部投げます。その間彼女をキャンプに避難させてください。ブロードさんはペイントボールを奴に投げた後奴の挙動に注意しつつ攻撃をお願いします。」

そう言うとユーノはポーチから閃光玉をオオナズチの眼前に目掛けて投げつけた。辺りは真っ白に染まりオオナズチの視界が奪われるとオオナズチは姿をくらました。

「臭いで相手の位置を探りつつ攻撃か…考えたなユーノ。」

「これ位ギルドナイトなら思いついて普通ですよブロード先輩。」

「・・・・アイザックが逃げ切るまで時間を稼ぐぞ。」

「はい！」

ユーノはそう言うとペイントボールの臭いを頼りに何も無い場所へと双剣を振りかざす。するとそこから鮮血が吹き出してきた。

「ブロードさん！！」

「おぅ！！」

ブロードは前脚を踏み込み大剣をその場に振りかざすとオオナズチは怯み姿を現した。オオナズチの実体が浮かび上がったの確認するとユーノは鬼人化しオオナズチに向けて乱舞を放ちブロードは大剣を振りかぶり力を込めて溜め切りを繰り出した。二人の猛攻を受けると再びオオナズチは姿を消しその場から距離を置いた。辺りにまたガブラスの羽ばたく音が響き渡る。

「（ペイントの臭いが薄れてきている…）」

薄れつつあるペイントの臭いを頼りに二人は辺りを警戒する。

「どうするユーノ、一度撤退するか？」

「出来たらしたいですね…でも奴に目を付けられた異常それは難しいと思いますよ。」

「だよ…なっ！！」

「ブロードさん！！」

二人が会話をしているとブロードが遠くへと吹き飛ばされた。ユーノはすぐさま辺りを警戒し薄れたペイントの臭いを頼りに何もない空間へ双剣を切り込んで行くすると今度は剣を弾かれ体の重心が後ろに移る。その時だったオオナズチは姿を現しユーノに向けて毒霧状のブレスを吐いた。ユーノはオオナズチの吐いたブレスを全身に受けてしまい体力が一気に疲労状態へと陥ってしまった。ユーノの状態を確認したオオナズチは姿を現し先ほど吹き飛ばし態勢を立て直しているブロードの元へと鋭利な角をブロードに向けて駆けて行く。

「――――！」

「（声がでない・・・ブロード先輩！！）」

ユーノは必死に声を出しブロードに危険を伝えようとするが声帯が麻痺しているのか声が全く出ない、ブロードの元にオオナズチが迫るその瞬間だった。辺りに強大な咆哮が響き渡ったその咆哮はオオナズチの動きを止めるほどの咆哮でオオナズチは標的をブロードから外し辺りを警戒し始める。

「（なに今の咆哮…）」

ユーノがそう思った次の瞬間上空から蒼い槍状の物がオオナズチ目

掛けて降り注いだ、オオナズチはそれを何とか回避し再び辺りを警戒し始める。地面に突き刺さった蒼い槍は蒼い炎へと変わり草むらに火を着けオオナズチの周りを火の海にしていく。

「ユーノ!!何かがおかしい!!逃げるぞ!!」

ブロードは何とか態勢を立て直し離れた場所に居るユーノに向けて声を掛ける。しかしユーノは動けなかった、その時だった炎の海となっている場所に巨大な青い塊が上空から降り立ちオオナズチの元へと駆けて行った。

「（――――!!）」

辺りにオオナズチの悲痛な鳴き声と肉と骨を噛み砕く音が響くユーノは今起きた非現実的な事を理解できずに呆然としていた。あの【厄災】とも言われる古龍がなすすべなく生きたまま青い塊に捕食されているのである。しばらくするとオオナズチの悲痛な声が止み肉と骨がかみ砕かれている音だけが沼地に響きわたり雨が降り出した。沼地に降り注ぐ雨は火が着いている草の火を消し青い塊の正体が露わになった。その青い塊は骨格は牙獣種に通じるものがあるが顔と形は龍その物で尻尾も龍その物だった。捕食が終わったのか青い龍は周りを見回し始めユーノの元へと歩いて来る。

「（に…逃げないと…!!）」

ユーノは立ち上がり青い龍から逃げようとするも先ほどのオオナズチが放った毒がまだ体に回っているのか上手く歩けない。

「（まずい…）」

「ユーノ!!大丈夫か?歩けないのか?よし掴まってろ!!」

ブロードはユーノを担ぎあげると青い龍から走って逃げた。ユーノはブロードに担がれながら青い龍をじっと見ていた。青い龍も自分の事を見ているような気がしたから。

４９節　ｓｈｏｃｋ（後書き）

最近耳にするチャラオタクってなんでしょう?チャラ男な上にオタクって事でしょうか。てことはイケメンな上にオタクならイケオタクってことですかね。最近の１０代の子の言葉は良くわかりません。

50節　ブルーインパルス（前書き）

アルトネリコ3と言うPS3のゲームを買ったは良いが全くプレイしてないです。こうやって詰みゲーができていくのであった。

50節　ブルーインパルス

フラヒヤ山脈　山頂付近

「なんなのだ…これは…」

フラヒヤ山脈に古龍クシャルダオラが出現したとの情報を聞き私達書士隊のメンバーはハンターを引き連れて気球船に乗って急いでフラヒヤ山脈へと向かった。しかしそこで我々に見せつけられた物は古龍クシャルダオラと情報に聞いていた青い新種のモンスターによる戦いであった。しかしその戦いは一方的な物であったクシャルダオラの凍てつくブレスを物ともせず青い新種のモンスターはクシャルダオラに掴みかかり頭を一撃で潰されそして捕食された。青いモンスターは鋼龍ともいわれるクシャルダオラの堅牢な外殻を物ともせずそのまま喰らい付き肉と骨を噛み砕いていて一心不乱に捕食をしている。人智を超えた力を宿し古の時より【厄災】として位置づけられそしてこの世界の多くの人々から世界の頂点に位置するの存在として恐れられそして時には敬られていた古龍種が今私の目の前でいとも簡単に倒され捕食されている。

「彼らも被食者という事なのか…」

「ダレン隊長!!奴がこちらに!!」

青いモンスターはクシャルダオラを捕食し終えたのか我々調査隊の方に向き直ってこちらをじっと眺めていた。ハンター達は武器を抜き奴を取り囲み、私はすぐさまメモを取り出し青いモンスターの特徴をメモした、骨格は牙獣種に近いが発達した後ろ足で二足歩行し顔と尻尾はまさに龍その物。メモをしながらふと思った事があった

我々に対する見方が他のモンスターとは違うのである、それはまるで誰かを探しているようにも見えた。特徴をメモに殴り書き私も武器を抜き青いモンスター元へと駆けると青いモンスターは上空へ飛び上がり空を駆けて行った。

メゼポルタ　病院

オオナズチと青いモンスターの戦いの中何とか逃げ帰って来たユーノ達計４人はアイザックを除いて病院送りとなった。竜人族の女性とブロードは比較的軽症であったがユーノの場合はオオナズチの様々な毒が体内にまだ残っている状態だったので入院を余儀なくされた。特に声帯麻痺毒の影響が多く残っていたので以前のように喋れるように四日を有した。

そして今ユーノは病室の一室で四日前の出来事を思い返していた。最初は興味本位であってみたいと思っていた新種のモンスターしかしそれは古龍を凌ぐとても強大な力を有した存在であった。あの古龍がなすすべなく捕食されている姿を思い出すと今でも恐ろしく感じた、しかしブロードに担がれてモンスターから逃れる際にユーノを見つめていたあのモンスターの目は確かに人に対しての敵意は感じられなかった。むしろ何かを探しているような目だとユーノは感じた。

「（あのモンスター、もし何かを探しているとしたら何を探しているのかな…）」

ユーノがそう考えていると病室の扉が開かれ一人の女性が病室へと入って来た。

「久しぶり、ユーノ…色々大変だった見たいね…」

「ナターシャさん…こちらこそお久しぶりです。」

「声の方はもう大丈夫？」

「まだ、声を出す時ちょっと違和感ありますけどまぁ大丈夫ですね。」

「そっか…ところで貴方も例のモンスターに出くわしたそうらしいじゃない。」

「はい…古龍を凌ぐほどとても強い存在でした。ナターシャさんも？」

「二三度ね…私が出会った時はデュラガウアが一瞬で倒されて捕食されたわ…その後同行してたハンターさんと私の事をじっと見て去って行ったわ。」

「見られてる時何か探してるような感じじゃありませんでしたか？」

「…そう言われてみれば…そんな風にも見えたわね。何かを探しているとしたら、高い知能を有してる可能性もあるわね…」

「そうですね…」

二人が会話を交わしていると病室に看護アイルーが入って来た。

「ニャー、患者さんこれ今日の薬だニャー。後患者さんに面会人ニャ！！」

看護アイルーがそう言うと病室にとても気品の溢れる男性と両手に荷物を抱えたアイザックが病室に現れた。

「ユーノさんどうですか体の方は？」

「アイザック君…何とか大丈夫だよ。ところでそちらの方は？」

そう言うと気品あふれる男性はユーノに対して自己紹介を始めた。

「私はサー・ベイヌ、古生物書士隊の者だ。」

「あなたがサー・ベイヌ男爵ですか！？」

サー男爵の名前を聞いてユーノは驚いた、そうそれ程サー・ベイヌ男爵はギルドに所属する者たちの間で有名なのだ。

「はっは、そんなに驚かなくても。ナターシャ君は久しぶりだね君のお父さんは元気にしてるかね？」

「いまだに元気に狩猟弓で狩猟を行う程元気ですよ。」

「そうか、彼らしいな。今日は君達二人に見てもらいたい物があってね、アイザック例の物を」

サー男爵はアイザックに声をかけるとアイザックは両脇に抱えていた荷物を床に置いた一つは絵を描く時に必要な絵具と白いシーツに覆われた額縁だった。アイザックは額縁のシーツを取り払うとそこにはモンスターの絵が描かれていた。

「どうかね？私も例のモンスターに出くわして急いで絵に描いて起

こしてみたのだが、二人が見た例のモンスターもこのような姿だったかね？」

絵画に描かれていたモンスターそれはユーノとナターシャが見た例の青いモンスターの特徴をほぼ完璧に捉えていた。

「すごい…姿形はほとんどこの絵の通りです。後私が見た時はこの例のモンスターは蒼い炎状の槍を数本オオナズチに向けて投げてました。」

ユーノがそう言うとサー男爵の横に居たアイザックはすぐさまメモとペンを取り出しその事をメモし始めた。

「そうか、ではこの絵画をロンに見てもらうとしよう。二人とも協力ありがとうでは私達は失礼するとしよう。行くぞアイザック。」

そう言うとサー男爵とアイザックは病室から出て行った。

「あー！！びっくりした…まさかサー・ベイヌ男爵に合うなんて…」

ユーノは思わぬ人物との対面に少し驚きベットに仰向きに倒れた。

するとナターシャが口を開いた。

「サー男爵の絵画が出来上がったと言う事は大陸全域に例のモンスターの姿と主な習性がギルドナイトやハンター達に知れ渡る事になるわね…」

「そうですね…狩猟対象になるのかそれとも別の扱いを受けるのか…」

ユーノとナターシャは窓の外を眺めた。これから例のモンスターがどうなって行くのかを想像しながら。

メゼポルタ　古生物書士隊本部

古生物書士隊それは大人しい草食種から強大な古龍まで、モンスター全体を研究対象としている。現在モンスターの情報が豊富に得られるのも、この書士隊達の研究の賜であると言っても過言ではない。彼らの研究結果は古龍観測局に報告され、ハンター向けに書き直されギルドを通して販売されている。しかし未だにモンスターには謎が多く、その解明のために書士隊の研究は続けられている。

本部の一室に机に向かって難しい顔をしながら様々な文献を読みふけっているメガネをかけた男が居た。部屋の中は様々なモンスターの素材が溢れかえっている。その男の部屋に一人の狩猟武器を装備した男が入って来た。

「今帰ったぞロン。」

「ダレンかい。どうだった?クシャルダオラのさらに詳しい生態がわかったかい?」

「いや、例の青いモンスターに捕食されてしまったよ。」

「そうか…それは残念だったね。でもその例のモンスターに付いての生態は記録出来たんだろう?」

「すこしはな・・・見るか?」

「そりゃあ是非とも。」

そう言うとロンと呼ばれたメガネをかけた男はダレンと呼ばれた男が手渡した報告書を読み始めた。

「うーん、牙獣種に近い体躯だけど二足歩行し羽根も無いのに空を駆けるか…滅茶苦茶な奴だね～こいつはおまけに古龍を一撃で仕留め捕食するときた。」

「俺が思うに新大陸地方で確認されているイビルジョーの様なモンスターなのではないかと思うのだが。」

「イビルジョーね。あいつは確か竜盤目　獣脚亜目　暴竜上科　イビル科だよね。その新種のモンスターに竜盤目とイビルジョーの様な獣脚は確認できたかい？」

「…竜盤目もなかったし獣脚の様な脚もしてなかったな。」

「うーん…牙獣種に近い体躯はしてるけど体毛はまったくない。竜盤目もない。おまけに獣脚でもない、でも顔と尻尾は龍その物そして古龍を一撃で仕留めるほどの攻撃を有しおまけに羽根もなしに飛ぶと来た…滅茶苦茶な奴だな～。」

そう言うとロンは笑いだした。

「どうした？大陸屈指の博識のお前でもお手上げか？」

「そうだね～まぁでも滅茶苦茶って点で似てるモンスターがいるけど、それとはまったく体の形や習性が違いすぎるしな～…」

「ラヴィエンテか…あれも滅茶苦茶な存在だな、現在は主だって活動をしてないから安全だが…」

「そうだね・・・」

二人が考えに耽っていると部屋にもう一人絵画を抱えた男が入って来た。

「おや。先客が居るとは…」

「サーかい？例のモンスターの絵画が出来上がったのかな？ちょうどダレンとも例のモンスターに付いて話してたんだ。」

「それは本当か！？ならこの絵画の信憑性を上げる為にダレンも見てくれないか。」

そう言うとサー男爵は出来上がった絵画二人に見せた。

「流石はサー男爵だな、正確に特徴を捉えてらっしゃる。ロン俺が見た例のモンスターはまさにこれだ。」

「そうかぁ…うーんこの絵画の通りだとこの世界に報告されてるどの種にも分類するのが困難なモンスターって事で決まりかな…だとするとラヴィエンテと同じで種族不明って事になるね。」

「そうだな…あぁ後昨日こいつに遭遇したギルドナイトの話によると蒼い炎で形成された槍状な物をオオナズチに向けて投げつけていたと証言していたぞ。」

「蒼い炎で練られた槍かぁ～そいつの攻撃手段の一種として記載し

ておくよ。情報ありがとうサー。となると残りは名称をどうするか・・・いつまでも例のモンスターて言うのは言いずらいし。」

そう言うと三人は考え出した、ラヴィエンテ以外のモンスターは過去の文献等に名前が記載されているモンスターが多かった為この作業は書士隊隊員にとって難しい作業ではあるが嬉しい作業でもある。なぜなら自分の考えた名称が世界中のハンターに知れ渡るのだから。

???

真っ白な部屋の中に男が一人ベットに寝転がっていた。その部屋はメゼポルタのマイハウスに酷似しているが普通のマイハウスと違って家具や装飾そして窓から見えるはずの空にまで色が付いておらず真っ白なのである。そんな場所に男は寝転がって真っ白な天井の一点をただずっと見ていた。するとその部屋のドアが開き一人の少女が部屋の中へと入って来た。

「おぉ!!ずいぶん回復して来てるみたいだね。前来た時より構造がしっかりしてる、これなら前よりましな会話ができそうだね。」

そう言うと少女は男の寝転がっているベットの横へと近づいた。

「気分はどう?」

「…ココはドこだ?」

「うーん、私の中かな…」

「キみのナか…精紳のナかカ?」

「あぁ！！そうだね！私の精神の中ってことで。」

「ここかラ出ラれなイのか？」

「出れるよ。試しに出てみる？」

そう言うと少女は男の手を取り部屋の外へと一緒に出て行った。

５０節　ブルーインパルス（後書き）

昨日アップルのＣＥＯのジョブス氏が死んでしまわれましたね。私の携帯はｉＰｈｏｎｅ３ＧＳでぶっ壊れるまで使おうと考えてたんですけど、ジョブス氏が死んでしまわれたので哀悼の意味を込めて昨日発表されたｉＰｈｏｎｅ４Ｓに機種変する事にしました。

51節　探し物（前書き）

いやーあれですね。お祝い事があってその席でお酒飲んでさっき帰ってきてお話の続きを書こうとしたんですけど、まったく文章思いつきませんね！！いやーまいった！！ＨＡＨＡＨＡ！！

51節　探し物

あの人が居なくなってから良く見る夢がある。私に向かって緑の髪の女性があの人の名を呼び続ける夢だ。私はあの人ではないのにだ私の中でまだあの人に対しての希望が残っているから故に見る夢なのか、だとしたらあの夢の中に出てくる緑の髪の女性は誰なのだろう…

「ご主人様どうかしましたかなニャ？」

「ん？あぁなんでもないよ。ふーちゃん」

あのオオナズチとの戦闘で負った毒の後遺症はすっかり治り今ではギルドナイトの任務に再び付いている、とはいってもまだ住民区の見周りや軽い調査依頼しかこなさせてもらえない為かなりの余裕が出来てるのが現状だが。

「カノンちゃんとマルク君はポッケ村の専属ハンターとして頑張ってる…か…だとするともうメゼポルタには帰ってこないよね…」

ユーノは今朝届いた手紙を見ていた。カノンとマルク、彼らはユーノの駆け出し時代時に苦楽を共したハンターだ。メゼポルタには修行の為に来たと言っていたのでいつかはポッケ村に帰ってしまう事はわかっていた事だが実際別れてしまうと悲しい物である。

「…少し出てくるね、戸締りよろしくふーちゃん。」

「はいニャ！！」

ユーノは普段着に着替えると自身のマイハウスを後にした。メゼポルタ広場に出るととても懐かしい人物を見かけた、かつてジュノのマイハウスで給仕アイルーとして働いていたサブローである。何やら大荷物を抱えて何処かへ向かおうとしている最中らしかった。ユーノは久しぶりに会ったサブローの手伝いをしてあげようとサブローの元へと向かおうしたが往来のハンター達に足止めを食らってしまった。

「（あぁ～！！見失う！！）」

往来のハンター達の数が少なくなるのを見計らってユーノはサブローの元へと向かった。マイハウス付近の案内嬢に大きな荷物を持ったアイルーを見なかったか？マイハウス内に入って行ったと聞きユーノはマイハウス棟へと入って行った。

「（新しい雇い主さんに頼まれたお使いでもしてたのかな？）」

そんな事を思いマイハウス棟内を探しているとサブローの姿をまた見失ってしまったのでまた近くを前方からあるいて来たハンターに聞くとギルドナイト兼ハンター用マイハウス棟に向かって行ったとの情報を得た。

「（ギルドナイトにサブローを雇ってるって言ってた人なんていたかな？）」

そう思いながらユーノはサブローの元へと急いだ、少し駆け足でマイハウス棟内を駆けて行くとサブローが誰かのマイハウス内に入って行ってしまった。

「（…結局手伝えなかった…でも今誰の元で給仕アイルーやってい

るかだけでも確認しておくかな…）」

そう思いユーノはサブローの入って行ったマイハウスの扉の前へと向かった。

「（…この場所…）」

サブローが入って行ったマイハウスはかつてジュノが住んでいたマイハウスであった。使われていないマイハウスには通常鍵がかけられて入れないようになっている。しかしサブローがマイハウスの中に入っていったという事は誰が使っていると言う事なのでユーノはマイハウスの仕様者の表札を探してみるが表札は何処にも存在しなかった。

「（…勝手に住んでるのかな？）」

そう思いユーノはマイハウスの扉のドアノブに手を掛けかつてジュノが使っていたマイハウス内へと入って行った。

メゼポルタ　ジュノマイハウス

マイハウス内は誰かが使っている痕跡はなくジュノが使っていた当初のままとても綺麗に整頓されていた。

「懐かしいな…」

そう言うとユーノはジュノのマイハウス内の奥へと入って行った。すると厨房の奥からサブローが箒とバケツを持ちながらトコトコと歩いて来た。サブローはユーノの存在に気づくとパッと顔が明るく

なった。

「ニャ！！ユーノさんお久しぶりですニャ！！」

「久しぶりだね～元気にしてた？」

「はい、それはもう元気でしたニャ！！」

しばらくユーノとサブローはお互いの近況報告を行った実に二年ぶりの再会である、話は大いに盛り上がった。

「ところでサブロー君は今どのギルドナイトの給仕アイルーとして働いてるの？」

その言葉をユーノが口にするとサブローの顔色が急に変わり罰の悪い顔へと変化した。

「そ…それはですニャ・・」

「…もしかして、無断で使用しているの？そう言うことなら今すぐ連行するよ。」

そう言うとユーノはサブローを捕まえマイハウスの外へと連れて行こうとした。

「イヤ！！違いますニャ！！これは大長老からの…アッ」

「ん？大長老がなんだって？」

「き…聞き間違いですニャ…」

「ふーん…訳あり？」

「・・・・」

しばらくの間沈黙が続くとユーノはサブローの手を離し向き直った。

「訳ありならこれ以上は聞かないよ。まぁ他の皆に気づかれない様にするんだね、じゃあまたね。」

そう言うとユーノはジュノのマイハウスを後にした、マイハウス内にはサブローが残された。

「すいませんニャ…」

メゼポルタ　広場

「（以前にもジュノさんに関しての情報をギルドナイトの本部で調べた事があった。でも私の持つ権限での情報開示だとあの人の経歴はほとんどが不明、そしてもっと詳しい経歴を見る為にはとても高い権限を持つ者しか見る事が出来なかった…）」

ユーノはメゼポルタ広場の腰かけに腰を掛けながら今まで自分が行ってきたジュノに関する情報を再び整理していた。

「（それからはともかく自分の今置かれているギルドナイトとして行使できる権限を大きくする為に嫌な事も含めて何でもやっては来たけど…それでもまだ見れる程の権限を得るにはまだ程遠い…）」

「（それにさっきジュノさんのマイハウスに言った時にサブロー君

がこぼした言葉…大長老…普通なら殉職したギルドナイトの部屋は一月もしない内に持ち物整理され新しいギルドナイトの為の部屋として使われるのに…あの人が二年以上いなくなってもあの人が居た時と同じ状態だった、これはあの人の経歴の事にも当てはまる、殉職したギルドナイトの経歴は普通は処分されるはずだ。）」

「（ギルドがあの人に関しての情報を隠してるの…？だとしたらあの人はいったい何者なんだろう…ギルド以外であの人の事に詳しいとなると・・・）」

そう思いユーノは腰を上げ有る場所へと歩き出した。

「（キャラバンのあの人か…）」

メゼポルタ　キャラバン区

キャラバン区では今日も多くの商船や商船を護衛する為の依頼を受ける為のハンター達が出入りし商船の多くの人やアイルーが荷物を抱えメゼポルタへ向けて仕入れた商品を搬入を行っていた。そんな中キャラバンの民達を良く通る声で指揮している女性が居た。

「キエルさん？ですよね？」

「ん？あんたギルドナイトのユーノさんじゃないか。どうしたんだい？キャラバンの護衛でもしに来てくれたのかい？」

「いえ、今日はちょっと聞きたい事があって。」

「聞きたい事？いったいなんだい？」

「ジュノさんの事なんですけど…」

ユーノのその言葉を聞くとキエルの顔はそれまでユーノに向けていた笑顔が消えた。

「ジュノ？あぁそんな奴いたねぇ…それで何が聞きたいんだい？」

「あの人って何者なんですか？」

「何者も何も普通のギルドナイト兼ハンターだったじゃないか、あぁそれと私の幼馴染位か？」

「そんな事は知ってます！私はもっと詳しい事を知りたいんです！！」

「詳しい事って言っても…それ以上は知らないよ。あたいだって知りたいさ！！急にいなくなっちまったんだもの！！でもいない奴の情報をくれって言われても困るよ…」

「…すいません。そうですよね…仕事中失礼しました…」

そう言うとユーノはキエルの元から離れキャラバンを後にした。

メゼポルタ　ユーノマイハウス

「（もう当てがないや…）」

キャラバンから戻ったユーノはベットの上で寝転がってジュノから

預かっている首飾りを手に持ち天井に掲げていた。首飾りは日の光を受け様々な色に変化している首飾りを弄っているとマイハウスの扉が叩かれブロードの声が扉の向こうから聞こえて来た。

「入っていいか?」

「どうぞ〜」

ユーノが入室を促すとブロードは手を顔で隠しながら入って来た。

「…何してるんですか?」

「今日はちゃんと服着てるよな?」

「…着てますよちゃんと。ねぇふーちゃん?」

「下着一枚じゃないニャ!!」

「そっそうか…」

そう言うとブロードは顔を覆っていた手を取りユーノを見た瞬間ほっとした顔をした。

「…先輩その歳で女のはしたない格好に態勢が無いのはどうかと思いますよ。」

「うっ…うるさい。それより古生物書士隊から新しいモンスターの情報が入った。例の青いモンスターの件についてだ。」

そう言うとブロードは懐から一枚の洋紙を取り出しユーノに手渡し

た。

「イレスデウス…別称　炎人竜・・・」

「取り合えず今のところはギルドナイトとメゼポルタギルドに属するレジェンドラスタ内のみの情報公開だそうだ。他の一般ハンター達や一般人にはこの情報はまだ漏らすなよ。生態解明がもう少し進んだら一般人や一般ハンター達にも情報公開をするとの事だ。書士隊の話によると最近の主だった行動は古龍が現れた場所に現れては古龍を倒し捕食しては去って行くようだ。」

「人的被害は今のところどうなんですか？」

「人間への被害は今のところ無いな…人間に興味を示しているようだが捕食対象としては見ていないようだな。」

「人間に興味…か…この前私達がイレスデウスに出くわしたときは奴は何かを探しているような目で私達の事見てたような気がするんですよね、それにみられた時恐怖感は感じなかったですし…」

「…確かに俺もあいつと目があった時不思議と恐怖感は感じなかったな…それと何かを探すか…何かを探しているとしたら一体何を探しているんだろうな…」

「（何かを探すか…立場は違うけど今の私と同じだな…）」

ユーノはそう思いイレスデウスについて書かれた洋紙をベットに投げた、洋紙に書かれていたイレスデウスの姿は蒼く染まった槍を手にし獲物を狩るハンターの様な姿だった。

メルチッタ

メルチッタそこは昔、隕石が落ちて出来たといわれメルチッタの大円湖のほとりにある比較的新しく出来た村である。　元々は大円湖を研究するためにミナガルデからやってきた学者やハンターの集落に過ぎなかったが、人口の増加とともに村となった。

その村に赤い衣をまとった者とその隣に極長の大剣を装備したハンターが人々の雑踏の中佇んでいた。しばらくすると赤い衣の者の元に太刀を装備したハンターが近づいてきた。

「目的の情報は見つかったか？セレイン？」

「わずかながらだが収穫はあった。お前の方はどうだゴート？」

「まったくだったわ、ギャハハハ！！」

「…使えん男だ…」

「まぁよいでは有りませんか、セレインその収穫をこちらに。」

セレインは赤い衣をまとった男に洋紙を手渡した、洋紙には解読不能な文字列が幾重にも並んでいた。

「なるほど、候補は二つありとそして私の計画に必要な物が一つ必要と言う事ですか…」

「そのようです、ヨハネス様。」

「…ではこの街にもう用は有りませんね。行きますよゴート、セレイン。」

不敵な笑みを浮かべながらヨハネスと二人はこの村を後にした。

51節　探し物（後書き）

友達に勧められてアメーバピグをやり始めたんですけどね、いやー凄いですね、第二のｍｉｘｉですねあれは。それに妖精さんも沢山居てもう凄いですね。一番驚いたのは小学生もやってるって点ですね。最近の小学生は進んでるな～って思いましたよ、私が小学生の頃はなんか家に会ったキュッパチにインストールされてるゲームで遊ぶくらいでローマ字とかはローマ字表見ながらやっと打てる位だったのに今の子はローマ字とか余裕で打てるみたいですからね。

52節　焦燥（前書き）

皆さんは一日最大何時間寝た事がありますか?私は２０時間位寝た事があります。（途中覚醒なし）でもあまり寝過ぎるのって心臓に悪いみたいですから程々に寝た方が良いみたいですね。

52節　焦燥

ヒンメルン山脈
“空へかぎりなく近い山”と呼ばれる高い峰が連なる山脈。東シュレイド地方からこの山脈を越えると、温帯地域が広がっている。
その山頂の一角に青い竜が静かに佇んでいた。
青い竜の佇む目の先にはメゼポルタが存在し街の明かりがぽつぽつと灯っている青い竜はじっと灯りの灯っているメゼポルタを眺めていた。

【やっぱりあそこから君の探してる女の人の気配を感じるね。】

【・・・・】

【行ってみる?】

【コノスがタじゃ、ムりダな。】

【じゃあ、元の姿に戻って行ってみる?】

【・・・・】

【・・・やっぱりまだ怖い?人間のこと?】

【前よリかハこワくハなイさ。モうスこシ様子をみテかラ戻った方がイイと思ウ。そレにタしカめたイ事ガアるしナ。】

【確かめたい事?・・・・まぁいいか、君に戻る意思が出来ただけで十分としよう。】

【ナぁ？イつにナったラコの変なシャベりかタなオるンダ？】

【君に体の主導権を返した時かな？君の体はもう心身ともに回復してるからいつでも主導権の入れ替えは可能だよ。】

【そウか・・・じャあコのスがタのマまコうたいする事はデキるの？】

【できるよ。】

【じャア、コウたイしテくれ、チョッと行きタい所がアる。】

青い竜は咆哮を上げると東の方角へと飛んで行った。

メゼポルタ　ギルドナイト本部　書類室

書類室そこにはメゼポルタに所属する様々なハンターの詳細な情報が収められている。例えば何処生まれの何処出身でいつどこでどのような依頼を受注し狩猟または討伐を行ってきたかの記録などだ。権限の有るギルドナイトならば何の障害も無く様々なハンターの詳細が確認できるが、一般ランクのギルドナイトでは少しの情報しか閲覧することしかできない。

「・・・・」

今宵は新月、月の光は書類室内には届かず暗闇に染まっている。その暗闇の中気配を消し音も立てずに進入し書類室の書類を漁っている者が居た。

「（あった。）」

侵入者は目的の書類を見つけた。書類は頑丈な鍵付きの箱に入れられ簡単には見られない様になっている。侵入者は他の漁った書類を片づけ書類室を去ろうとしたその時だった突然部屋内の明かりが灯り銀髪の女性が脚を組みながらこちらを見ていた。

「いつの間にかに泥棒猫みたいな事するようになったのねあなた。」

「・・・・」

「貴方の行っている行為は懲罰的な事よ、このまま引き渡せばギルドナイトとしてのライセンスもハンターとしてのライセンスも剥奪されるかもね。」

「・・・仕方ないじゃないですか・・・・」

「？」

「どんなに嫌な仕事や厳しい仕事を沢山こなしても一方に私の権限は上がらない！！あとどれ位で私は権限が上がるんですか！？私は早くこの書類を見れるほどの権限が欲しいんです！！そのためだったら手を汚しても構わない！！」

「・・・・自分の手を汚してまでもね・・・・・・それは貴女の欲しい権限の為に手を汚すのかしら？」

「権限の為じゃない！！　私はあの人に会ってこの御守りを返したいんです！！早く会う為に少しでもあの人に関しての情報が欲しい

んです！！」

「例えその情報が本人に取って他人に絶対知られたくはない情報だとしてもあなたはその情報が載った書類を持っていくのかしら？」

「それは・・・・」

「それにあいつはそんなに歪み切ったあなたと再会して喜ぶかしら？」

「・・・じゃあ私はどうしたらいいんですか・・・・」

「知らないわ～オホホ。」

「・・・・」

「そうねぇ～私なら待ちつづける、たとえどんな運命になってもね。」

「待ち続けるんですか、ナターシャさんは？あの人を…どんな運命になっても。」

「ええ、待ち続ける。」

「・・・わかりません・・・・ナターシャさんの考え。」

「別にわからなくても結構よ、さっ早くその書類を元のあった場所に仕舞いなさいユーノ。他の人が来ないうちにね。」

ナターシャはそう言うとユーノの手に持つ箱を元にあった場所に戻

すように指示した。ユーノは納得がいかない表情をしていたがゆっくりとジュノに関する書類を元の場所へと戻した。

「よし、それじゃあ早く本部から出ましょ。こんな時間に見つかったら怪しまれちゃうわ。オホホ！！」

「そんな大きな声で笑ったら見つかりますよ…」

「そ…そうね。オホホ…」

メゼポルタ　病院室

翌朝ユーノとブロードの元にギルドナイト本部からメゼポルタの病院へと至急向かうようにとの通達が届いた。内容は先日のオオナズチの件で助けた竜人族の女性が二人に聞きたい事があるとの事だった。

「どうしたユーノ？元気が無いようだが・・・・疲れてるのか？」

「疲れてませんよ、それより急ぎましょう・・・・」

「あっ、あぁ・・・・」

竜人族の女性が入室している病室の前に付くと二人は病室へと入って行った。病室に入るとベットに半身だけ起こした竜人族の女性がこちらを見て会釈をしてきた。

「本日は忙しい中来ていただいてありがとうございます。」

「いえ、御身体の調子の方はいかがですか？」

「はい、以前よりかは行く分楽になりました。」

「そうですか・・・・それは良かった。そうだ紹介が遅れました、俺はブロードと言います。そして後ろに控えているのはユーノです。それで聞きたい事と言うのは一体何でしょうか？」

「はい・・・その事を話す前にまず私の素性についてお話しておきますね。私の名前はグラシェ見ての通り竜人族です、御二人は竜人族の中で唄を歌うことにその身と生活の全てを捧げ、唄と共に生きる希少民族の事をご存知ですか？」

「確かドンドルマが栄えていた時に酒場に居た歌姫の方がその民族だと聞いたことが・・・・」

「そうですか、私はその希少民族のカントの民と言う者の一人です。カントの民は唄に込められた意味を知りそしてそれを世の人や大地に対し唄い伝える事と世界に散らばった遥か昔から私達カントの民の伝承に伝えられる唄を回収するために様々な場所へ旅をしてきました。今はその旅は二つの唄を残してほぼ終えて辺境の土地で村を拠点に世界各地に散らばり唄に込められた意味を伝えながら生きています。」

グラシェはそう説明し終わると壁にもたれかかっていたユーノがグラシェの話に対して疑問を問いかけた。

「二つの唄を残してって今言ったけど、その二つの唄って何なんですか？」

「はい、その唄は一つは終焉の唄そしてもう一つは再誕の唄と言う物です。もともとこの二つはカントの民の間ではその二つの唄の楽譜は存在しない物として今まで扱われつつあったのですが、最近その一つである再誕の唄が見つかり私はそれをカントの民の村に持ち帰っていたのですが…」

「オオナズチに遭遇し無くしてしまったってわけですね。」

「ええ、正確にはオオナズチにそれを取られてしまったと言う解釈が正しいでしょうか…」

「盗られた?唄って言っても紙に書かれた楽譜でしょ?それをオオナズチにとられたって事?」

「いえ、見つかった再誕の唄は楽譜の周りを特殊な鉱物によって覆われてました。」

「なるほど、オオナズチはそれをアイテムと認識し盗られてしまったと言う事ですね。」

「はい、あの唄は世界の至宝と言っても過言ではありません。そしてカントの民に古来から伝わる伝承の解明の鍵になるかもしれない大変貴重な物なのです。」

「伝承?その伝承ってなに?」

「はいそれは…

【天空が彼の者の力により緋く染まりし時、天空より彼の者の唄が聞こえてくるであろう。

耳あらば聞け、心あらば祈れ彼の者の訪れを。全てを始まりである

彼の者のもたらす唄を】
…と言う物です」

「…ふーんいかにも胡散臭さが漂う伝承って感じね。」

「コラ！ユーノ！失礼だぞ！…すいません、グラシェさん。」

「いえ、良いんです。私達カントの民の間でも今まで怪しい伝承だなぁと笑ってたくらいですから。それで本題に入りますとお二人にはオオナズチに盗られたその再誕の唄を取り返してきてほしいと言う物なのです。とても難しい依頼だと思いますがお願いできますでしょうか？」

グラシェの言葉と共に病室内が静まり返る。あの時のオオナズチはもういない、そう例の蒼い龍イレスデウスによって完全に捕食されてしまったからだ。もしオオナズチがグラシェの言う再誕の唄を奪い取ったとなると今その再誕の唄を持っているのはオオナズチを捕食したイレスデウスと言う事になる。しばらく二人は沈黙を続けるとユーノがグラシェに事情を説明しようと口を開いたがブロードの声によってかき消されてしまった。

「わかりました、グラシェさんの依頼引き受けましょう。直ぐに取り返してきますのでグラシェさんは療養に専念してください。では依頼書を書きに私達は本部へと戻りますのでこれで失礼します。行くぞユーノ。」

そう言うとブロードはユーノの手を強引に引いて病室から出て行った

「あっ…ブロードさん！！ちょっと～」

メゼポルタ　病院前

「いい加減手を離して下さい！！」

「あぁすまん。」

そう言うとブロードは病院の外まで引っ張って来たユーノの手を離した。ユーノはブロードに掴まれた手を擦っている。

「そんなに痛かったか？」

「まぁ痛かったですけど、それより何でグラシェさんの依頼を引き受けたんですか？オオナズチはイレスデウスに捕食されたんですよ！」

「イレスデウスの情報はまだ一般人に公開になってない。それに彼女は今はメゼポルタにいるが元は外部の人間だ情報が漏洩しては困る。」

「それはそうですけど、でもこの依頼を引き受けたと言う事はイレスデウスを討伐しなくちゃならない事になるんですよ。」

「それが狙いだ。この依頼はまったく明らかになっていないイレスデウスの生態解明にも繋がる。」

「あんな古龍を一撃で倒す化け物を討伐できると思ってるんですか？ブロードさんはいつの間にそんな実力をつけたんですか？」

「討伐できる訳ないだろう、でも捕獲は可能かもしれないだろ？幸い現在の情報によるとイレスデウスは俺達人に興味を持っている。それにどんなに攻撃しても人に対しては反撃はしてこない。なら拘束用バリスタで奴を拘束したのち捕獲する事が出来るだろう。」

「まぁできるかもしれませんけど…ギルドがイレスデウスに関しての依頼を通すと思いますか？」

「その点も大丈夫だろう。古生物書士隊も古龍観測局もメゼポルタギルドも今イレスデウスについてのどんな些細な情報でも欲しい状態だ。簡単にイレスデウスの依頼は通るはずだ。」

「…そう言う状態ならこの依頼は通るかもしれませんね。」

ユーノがそう言うとブロードは黙ってユーノの顔を見た。

「どうしたんだ？なんか最近のお前変だぞ？」

「別に、いつも通りですよ。さぁ早く本部に行って依頼書書きましょうよ、ブロードさん。」

そう言うとユーノはブロードをその場に残しギルドナイト本部に向けて歩き出した。

52節　焦燥（後書き）

ちょっと今後の展開をどうしようかの道筋を改めて考え直したいので一週間位時間もらいますね。早く決まれば一週間より前に更新再開するかもしれないです。でわでわ～

53節　夢のお告げ（前書き）

どういう過程で話を進めていくのかはなんとか決める事が出来ましたが、私実は8月の末頃に野良猫に咬まれまして、猫ひっかき病と言うめんどくさい感染病にかかってしまいました。結構しんどい病気なので更新速度はどんずまりのままです。ゴメンナサイ。

53節　夢のお告げ

テロス密林

大陸の東側沿岸部に位置しており、島の中央は巨大な洞穴、北側には謎の古代遺跡がある。
潮の満ち引きの影響で夜は北の遺跡への道は閉ざされてしまう。遺跡があったことから昔は文明があったと推測され、昔は東の国と交易があったと考えられている。

密林の北部に位置する場所には一匹の蒼い竜が佇んでいた。蒼い竜は遺跡へと近づこうとすると背後に気配を感じ後ろを振り返った。

「その姿で良くいられる物だな。」

後ろを振り返るとそこには緋く光る紋様を背に輝かせながら佇む一人の女性が蒼い竜を見ていた。

「・・・何の用だ。2年前の続きをしに来たのか?」

「あの時私がしたかった事は大方達成されている。その結果お前は今揺れ動いている私の思う方向にな、違うか?」

「・・・・」

「お前は私と同じ立場の物だ、今もそして昔も変わらない。」

「・・・・何を言っている?」

「ふっ・・・・少し話をしようか。」

メゼポルタ　ユーノマイハウス

またあの夢だ。緑の髪の女性が私の目の前であの人の名前を呼ぶ夢・・・・でも今日のはちょっと少し違う事がある。いつもの様にぼやけてなくて鮮明に女性が私の目の前に立っている事とあの人の名前を私に向かって呼んでいない事だ。女性はしばらく私も方を見ていると私に話しかけて来た。

「初めまして私はアイリス。時間が無いので手短に言います、ジュノの事であなたに伝えなければならない事があります。私はあなた方の世界で言うノルン島　ディオネ遺跡の中に居ます。あなたの持っている首飾りを必ず持ってノルン島に来てくださいね。」

「（待って、あなたは一体何者!?）」

そう口にしようとするが声は出ず緑の髪の女性には伝わらなかった。そして緑の髪の女性が消えると共に辺りは真っ白に染まって行った。

「ッは!!!」

ユーノは飛び起きると辺りを見回した、辺りはいつも自分が使っているマイハウスと自分が飛び起きた事で驚いているふーちゃんしか居なかった。

「どうしましたニャ?ご主人様?」

「いや・・・・何でもないよ、ちょっと変な夢を見ただけ。驚かし

ちゃってごめんね。」

「ニャー、御気になさらずですニャ！！！」

そう言うとふーちゃんは厨房の方へと向かって行った。

「（今まで見た来た夢とは違う夢、しかも内応はあの人の事・・・・・でも所詮は夢だぞ。信じていいのか？）」

「（・・・とりあえずノルン島と言う島が本当にあるのかを探してみるか。）」

そう思うとユーノはギルドナイトスーツに身を包むとマイハウスを出てギルドナイト本部へと足を運んだ。

ギルドナイト本部　事務室

ユーノは事務室に付くとエビィーを探した、なぜならこの大陸について詳しい人物の一人であるからだ。ユーノは書類の山に囲まれているエビィーを見つけるとエビィーの元へと足を運んだ。

「エビィーさん。こんにちは。」

「おぉ！ユーノちゃん！！なんかすごい久しぶり～オオナズチの件は大変だったね～でも無事で良かった良かった！今日は仕事？」

「ありがとう、今日は私は非番だよ。エビィーさんちょっと教えてもらいたい事があるから本部に来たの。」

「ふ～ん。それで？教えてもらいたいことってなに？」

「うん、あのねノルン島って知ってる？」

「ノルン島・・・・」

エビィーはその名前を聞くと腕を組み考え出した。どうやら思う所があるらしい。

「あぁ！思い出した。確かにそんな島あるね！」

「本当！？」

「うん、確か前にイレスデウスの出現地点のまとめをやってる時にそんな名前の島が地図上にあったね。たぶん資料室に行けばノルン島についての資料保管してあるよ。でも良く知ってたね～ギルドナイト内でも知ってる奴は限られてるのに。」

「前にね雑誌で見たことがあってね、それを今日の朝ふと思い出したの。それで本当にそんな島あるかな～って思ってエビィーさんに聞いたわけ。」

「なるほどね～。あっなんならノルン島に実際行ってみる？ちょうど今イレスデウスの最も多い出現地点を調べようと今ギルドで動き回っているんだよね～。確かその候補に一応ノルン島が挙がってるんだよね。」

「本当？」

「うん、なんで候補に挙がってるのかちょっとわからないけれどね。

ユーノちゃん行く？」

「うん！！その仕事是非やらして！！」

「おっ！いつにもまして意欲的だな～、じゃあ調査隊として行ってもらうとしよう。じゃあこれ資料室の鍵。これでノルン島の予備知識を頭の中に入れておくといいよ。」

「うん！ありがとう！！」

そう言うとユーノはエビィーの元から離れ事務室の扉を開いた。

「（本当に存在する島だったなんて・・・・それにノルン島へ行く口実も出来るなんて・・・・）」

そう思いながらユーノは資料室のある場所へと足を運んだ。

メゼポルタ　ギルドナイト本部　資料室

資料室には大陸全土にわたる様々な場所の詳細な調査結果が並べられている。ユーノはノルン島に関する資料を発見するとその資料を見始めた。

「新大陸のモンスターがごくわずかだが生息確認、島中央に位置する遺跡は内部に入る事は出来るが開かずの扉があり・・・・と・・・・あっ！！！」

ユーノは資料の最後の方に目を通しているとその島の調査担当者の欄にとても懐かしい名前を見つけた。

「調査担当者・・・ジュノ。」

ユーノの中に一つの希望が生まれた。調査担当者の名前を見た瞬間今朝見た夢は信憑性のある物へと変化した。二年の歳月をかけてやっとあの人に関する情報が手に入るかもしれない・・・そう思うとユーノは今にも飛び上がりそうになった。

「（やっとだ!!やっと・・・・一歩前進できる!!!）」

ユーノの顔からは自然と笑みがこぼれた。

ミナガルデ

西シュレイド王国の南方辺境にある街。メゼポルタほどではないがここも多くのモンスターハンター達が狩猟生活を営んでいる。モンスターの骨、牙、卵といった特産品があり自治権を王国から認められている街である。

ミナガルデの外れにある一軒家に二人の男が部屋内に居た。一人は机に座り古代文字を解読している赤い衣をまとった男ともう一人は忙しなく部屋をうろうろしている大剣を背負った男だ。

「・・・落ち着きなさい、ゴート。解読作業に集中できません。」

「しかし、ヨハネス様。あの女の所在が・・・・」

「彼女なら大丈夫でしょう。」

「しかしあの女はここ数年、個人行動が目立ちます。それにあいつは」

「・・・確かに目立ちますが、ここは目を瞑ってあげましょう。ここ数年彼女が私達に与えてくれた恩恵はすさまじい物です。それに免じてそれくらいの事は許してあげましょう。彼女は自分の名前すら忘れ自分の存在意義すらわからないまま数年前まで眠っていたのですから。かわいそうな存在とは思いませんか？ゴート？」

「確かにヨハネス様の言う通りそうですが・・・」

「それに私の計画にも尽力を尽くしてくれている。素晴らしい女性ではありませんか。」

そう言うとヨハネスは再び文章の解読作業に戻った。

テロス密林　北部　遺跡付近

遺跡の位置する部分から緋い閃光が空へと上がりその光は西へと飛んで行った。そして遺跡の位置する場所には蒼い竜がその場に佇んでいた。

【彼女の言う事どう思う？】

「嘘じゃないだろうな。」

【まぁ、そうだね・・・彼女の言ってた事を聞いて君はどうする？彼女と同じような事をする？】

「俺は俺のやり方であいつの言っていた事を確かめる。そして本当にそうなら・・・・」

【・・・・】

「とりあえず、目的の場所へと行こう。」

【そうだね・・・・ところで何でこの場所に寄ったの?】

「特に意味は無い。」

【あぁ・・・・そう・・・・】

蒼い竜はそう言うと空へと飛び上がり緋い閃光と同じ西方向へと空を駆けて行った。

メゼポルタ　大老殿

日は傾き始め大老殿に日の光が丁度大長老の座っているイス付近に差し掛かる。

「グガッ・・・・ゴッ!!スゥ・・・」

「大長老起きてください、まだ勤務中ですよ。」

「・・・・おぉすまぬ。それでどうしたのじゃ?古生物書記隊長?」

「・・・今の私は古生物書記隊長ではありませんよ。私は今あなたの側近として働いてますよ。まぁそんな事はどうでもいいのです。例のイレスデウスの最も多い出現地点を調べようと言う計画の一環で少し問題が発生しまして。」

「どんな問題じゃ？」

「ノルン島の調査員がですね、例のあの子なのですよ。」

そう言うと竜人族の男性は大長老に資料を手渡した。

「ぬぅ、ユーノ隊員か・・・・」

「彼女はここ近年彼についての情報を嗅ぎまわっています。もし彼の正体に関する情報を掴んでしまっては彼が。」

「・・・大丈夫だと思うがのう。あの者があやつを陥れる為に情報を嗅ぎまわっていたとは考えられぬ。それにこうなってしまったのも何かの運命じゃろう。」

「運命ですか・・・・とても使い勝手の良い言葉ですね・・・・とりあえずこの件を無かった事にしますか?それともう一人彼の事情を知る者を監視役としてつけますか?」

「いや、ちょうどあやつと親しかった者がもう一人居るじゃろう、あの者に監視役として行ってもらうとするかのう。」

「ナターシャですか・・・・大長老・・・・長年の私達の努力を水の泡にするおつもりですか?」

「もういいじゃろう、今までは隠し通せていたがついにボロが出始めておる。あやつの給仕アイルーの件や資料室でのあやつの調査記録の抹消ミス等がな。」

「・・・・」

「あやつも人に例えるともう大人じゃ・・・いつまでもわしらが過保護ではあやつもやりずらいじゃろうて。」

「大長老・・・人々は彼の様な存在を受け入れる事が出来るのでしょうか?」

「わからぬ、試される時なのかも知れぬな。人もそしてワシらも・・・」

そう言うと大長老は大老殿の外へと視線を向けた。

53節　夢のお告げ（後書き）

最初お医者さんに「これは・・・猫ひっかき病ですね。」と言われた時は「（何言ってんだこの医者は・・・）」と思いましたが帰ってネットで調べてみると本当に実在する病気なんですよこれが。いや～皆さんも野良猫と遊ぶ時は注意してくださいね～

５４節　ノルン島へ（前書き）

お久しぶりです。やっと体調も良くなってきました。

54節　ノルン島へ

メゼポルタ　気球船ドック

エビィーにノルン島調査依頼を引き受けてから1日後いよいよユーノはノルン島へと向かう事になった。ユーノは気球船ドックへと向かうとそこにはナターシャの姿があった。

「おはよー、ユーノ。」

「ナターシャさん、どうしてここに？」

「大長老に頼まれたのよ。今日調査を行う際にもしイレスデウスに遭遇した事態を考えてあなたの護衛つけってね。」

「そうですか。でもなんでナターシャさんなんでしょうか？」

「なにぃ～私じゃ不満だって言うの～？」

ナターシャはそう言うと腕を組みながらユーノをにらみつけた。

「いや、別に不満って意味じゃないんです。ただ・・・・」

「ただ？」

「いや・・・やっぱりいいです。早く乗りましょう、気球船員の方々を待たせるのは悪いですし。」

そう言うとユーノは気球船内へと入って行った。

「あっ！！ちょっと！！最後まで言いなさいよ！！！・・・・まったくもう。」

ナターシャは腰に手を当て溜息をつくとユーノに続くよう気球船内へと足を運んだ。二人が気球船内に乗り込むのを船員が確認すると気球船はノルン島へと出発した。

気球船　ハンター控室

控室には狩猟弓の手入れをしているナターシャとジュノからもらった首飾りを手に持ちながら窓の外を見るユーノの姿があった。二人の間に会話は無く気球船は着々とノルン島へと向かっている。

「・・・・・・」

「あ・・・・あのさ～」

「なんですか？ナターシャさん。」

「私、あの夜のあなたがやった事は誰にも言ってないわよ。」

「そうですか。」

「うん・・・・」

ナターシャの意を決した話題提供も二人の間で花開くこと無くさらに居心地の悪い空気が控室内に漂う。

「（い・・・いつもなら雇い主の人と狩猟しに行くモンスターの話題提供で何とかなって来たけど・・・今回は調査の同行だし・・・何の話をしたらいいのかしら・・・・）」

ナターシャは弓の整備を行いながら次の話題になりそうな種を探しているとなんとユーノの方から話題を振って来た。

「ナターシャさんは今回のノルン島の調査の件どう思います？」

「えっどうって・・・何でこんな誰も知らない辺境の島に調査に行かなきゃならないのかしら？って思ってるけど。」

「まぁそう思いますよね。でもこのノルン島に関しての前回の調査員の欄見てもらえますか？」

そう言うとユーノはナターシャにノルン島に関する資料を手渡した。

「・・・ジュノ」

「そう最後にあの島を調査した人がジュノさんなんです。ここ二年間ひた隠しにして来たジュノさんに関する情報が資料室に有ったんです。ともいってもこれだけじゃ情報なんて言えた物ではありませんけど。」

「・・・確かにあれだけ隠してたのにこんな所で尻尾を出すなんてギルドらしくないわね。」

「それとこのノルン島の存在を知った日に何と言うか非現実的ですが夢のお告げみたいなのが有ったんですよね。」

「お告げ？なにそれ？悪いけど宗教のお誘いならお断りよ。あなたが彼に対する思いこみの度が越えて見た夢じゃないの？」

「でもその夢でノルン島という言葉を知って本部に行ったら実際に存在する島だったんですよ。」

「・・・・よくできた夢ね」

「それともう一つその夢の中でジュノさんに関する事を知ることができると・・・・そう告げられたんです。」

「あいつ関する事？」

「はい・・・・もし本当にそのお告げ通りジュノさんに関する事情を知ることができるとしたらギルドは私達を調査に向かわせるでしょうか？あんなに高い権限をかけて厳重に保管されていたあの人の情報を。」

「・・・・罠？まさか、ギルドがそんな事・・・・」

「いえ、考えられますよ。私は二年もかけて執拗にあの人の情報をかき集めて来たんですから。ギルドもその事はもう知られているはず。」

「・・・・今回の調査は慎重に行った方がいいわね。」

「はい。」

二人は気を引き締め再び狩猟防具の調整に入った。

ノルン島

気球船は特に問題も無くノルン島へと到着し上陸するためハッチから下船し砂浜へと降り立った、それと同時に観測用のキャンプ設営の道具及び食料を持ったアイルー達も下船し早速キャンプの設営を行っている。

「（今の所異変は無い・・・・か・・・・）」

ユーノは気球船とキャンプを設営しているアイルーを目配せしながら辺りを見回していた。ユーノ達が居る砂浜から石柱と思わしき物が両編に連なり島の中央へと続いている調査資料にはこの石柱の先には遺跡があると書かれている。キャンプの設営が終わると気球船からギルドの関係者が下船しユーノとナターシャの元へと歩いてきた。

「今回のイレスデウス予想出現地点観測隊ギルドナイトのユーノ隊員とその補佐のレジェンドラスタナターシャの二人で間違いないな？」

「はい！」

「間違いありません。」

「うむ、では本件の観測及び調査期間は三日間と定められているがイレスデウスの情報は今そう急に集めなければならない情報だ。二人とも迅速かつ丁寧な調査を心がけるように。では気球船はこれよりメゼポルタへ向け発進するが調査が調査期間より早く終わった場合は伝書鳥をメゼポルタに向け飛ばすように、頼んだぞ二人とも。」

そう言うとギルドの関係者の男は気球船へと乗り込み気球船は二人とアイルー数匹を残してメゼポルタへと進路を変え空を駆けて行った。

「・・・・何も起こらず行っちゃったわね。」

「えぇ、でもこのままこの島に放置かもしれませんよ私達。」

「・・・・考えたくない未来ね・・・・・」

「そうですね・・・・とりあえず遺跡の方に向かいましょう。」

ユーノはそう言うと遺跡に向かう為に石柱に連なった道を歩き出した。それを追うようにナターシャも急いでユーノの元へ駆けて行く。

「ねぇユーノ、どうしていきなり遺跡に向かうのかしら?」

「夢のお告げの通りならば、遺跡の中で私を待っている人がいるはずなんです。」

「人?この島に人が住んでいるの!?」

「わかりません。でもその確認も含めてまず遺跡に向かうんです。」

「でも調査資料によると遺跡の中は何もなくどんな衝撃を与えても閉ざされたままの扉があるだけとしか書いてないわよ。」

「そう書かれてたとしても自分の目で確かめなければ、何のためにこの島に来たのか分かりませんよ。」

「そうね・・・・あなたの言う通りだわ。」

二人は石柱を目印にしながら遺跡へと向かった、遺跡へ向かう途中では新大陸地方で確認されているジャギィと言う小型の鳥龍種モンスターが現れたが二人は難なくジャギィを追い払い島の中央へと進んで行った。

ノルン島　ディオネ遺跡　正面

「ここがディオネ遺跡・・・・」

遺跡の目の前へと到着した二人はまず遺跡の全貌を見て驚いた二人の想像していた遺跡とはテロス密林の北部に位置する風化が進んだ住居の様な遺跡と思っていたがディオネ遺跡は住居の様なものではなく不思議な形をした遺跡であった。

「・・・・何かの施設だったのかしら?」

「わかりません・・・・とりあえず中に入ってみましょう。」

ユーノがそう言うと二人はディオネ遺跡の中へと入って行った。

ディオネ遺跡　内部

二人は内部に入ると遺跡内部は長年空気に晒されてきたせいなのか風化が進んでいた。

「やっぱり気味が悪いわね・・・・・」

「そうですね・・・今は昼間ですから入口の明かりが内部に入ってきて多少明るいですけど夕方になったら遺跡内部の調査は無理ですね・・・・早く調査を始めましょう。」

「そうね・・・・ところでユーノ、さっき言ってたその夢の話だけど、さっき道中で遺跡の中で人が待ってるって言ってたけど・・・・」

「だれも居ないですね・・・・」

「他に何か言われなかったの？」

「一応このお守りを持って必ず来てくださいとは言われました。」

そういうとユーノは胸元からジュノに手渡されたお守りを取り出しナターシャに向けてお守りを見せた。

「ふーん・・・・ということはそのお守りがその夢の中で出会った人に会うための鍵になる可能性はあるわね。」

「そうですね、とりあえずこの部屋内を調べてみましょう。」

二人は左右に分かれて部屋内を調べ始めた、部屋の端の壁には特に変と感じるようなものは無く残りの調べていないところは部屋の奥の扉のみとなった。

「この扉の件ですけど、一応報告書によると【どんな衝撃や力を加えても開くことはなかった。】と書いてありますね。」

「確かに扉の表面が傷だらけね・・・誰かがここで乱舞でもしたのかしら？」

「うーん・・・あっ！ナターシャさん扉の下の部分を見てください！」

「扉の下？」

ユーノが指さす方にナターシャは目を向けるとそこは他の場所とは違って部屋の周囲に張り付いている苔などが扉の開閉で崩れていた。

「苔が擦れてるわね・・・・」

「ここ最近何らかの形で何度か扉が開かれたみたいですね。やっぱりこの扉の向こうに何かが・・・・」

二人は顔を合わせると無言で扉の周辺を調べ始めた。

「ユーノ！ちょっと来て！」

ナターシャが何かを発見したらしくユーノを手招きした。

「このくぼみ・・・いかにもあやしいとは思わない？」

ナターシャの指さす方には人が中を覗けるほどの壁に穴のあいた場所があった。ナターシャは何も言わず壁の穴を覗き始めた。

「なにか見えますか、ナターシャさん？」

「うーん・・・・何かうっすらとだけど赤い光が見えるわね。」

しばらくナターシャはその光を眺めていると穴の奥から声が発せられた。

「網膜パターン認証中・・・・認証できません。扉の開閉には生体認証登録または管理者によって権限を与えられたキーを使用してください。」

「キャ!!ビックリした・・・」

ナターシャは突然の声に驚き後ずさった。

「意外な一面もあるんですねナターシャさんは、こういう事が起きても驚かない方かと思ってましたけど・・・・」

「あなたね・・・・こんな場所でいきなり声がしたら普通驚くでしょ!?」

「まぁ・・・そうですけど・・・・でもこの扉を開く方法は一応あるんですね。生体認証と言うのは多分私たちはそういった登録作業は行ってないから扉を開く事は出来ないですね。」

そういうとユーノはジュノから手渡されたお守りに目をやった。

「(権限を与えられたキーって・・・・もしかしてこれの事かな・・・?)」

そう思うと今度はユーノが壁の穴の前へと立った。壁の穴の周辺を見ると壁の穴とは別に小さな穴が壁にあることに気付いた。ユーノ

はその穴に目をやるとジュノから手渡されたお守りを首から外しその小さな穴へとお守りを差し込んだ。

「インターフェース上にキーの存在を確認・・・・仮想領域上に管理者権限を与えられたシリアルキーを確認・・・・」

「ユーノ!?あなた何をしたの!?」

「ジュノさんから預かっているお守りが権限を与えられたキーだと思ってお守りを使ってみただけです。」

「ＡＧポインタ０ｘ００４２８上にキーの存在を確認・・・・アクセス終了・・・・Ｊ－１０１．ｅｘｅ実行・・・・認証終了どうぞお入りください。」

声が止むと先ほどまで開かれていなかった扉が開き始めた。

「開いたわね・・・・」

「開きましたね・・・・とりあえず中に入りましょう。」

二人は開け放たれた扉の中に入って行った。扉の中は見たことのない道具があちこちにあり部屋の奥の中央にはガラスが壁一面に張られておりその下には見たことのない文字が記されたボタンがたくさんある板が土台の上にびっしり敷き詰められていた。

「なんなんでしょう・・・・これは・・・・」

「私に聞かないでよ・・・・ん?」

「どうかしました？ナターシャさん？」

「あそこのボタン何か光ってない？」

ナターシャの指さす方をユーノは見ると確かにボタンの一つがほのかに緑色にひかっていたのでユーノはそのボタンの近くまで行くとそのボタンを押してみた。すると部屋内がまばゆく光りだした。

「うっ！？」

「（・・・何が起こってるの？）」

部屋内に光が灯ると部屋の隅の扉が開かれた。二人は武器を構え開かれた扉を警戒していると扉の奥から緑色の髪をした銀色と黒を基調とした服をまとったショートヘアーの女性が現れた。ユーノはその女性を目にすると武器を構えるのを止めた、その女性はいつもユーノの夢の中に出てきた女性と酷似していたからだ。緑の髪の女性はユーノを見ると笑顔になりユーノに向けて声をかけた。

「やっと会えましたね。」

５４節　ノルン島へ（後書き）

実はこの一週間の間の中でパソコンのＢＩＯＳっていう所の更新をしたんですけど、そしたらパソコンの調子が悪くなっちゃってもう大変でした。とりあえずＯＳの再インストールし直して事なきを得たんですけど、途中まで書いてた小説のお話が消えちゃってもう大変です；；

いろいろめんどくさがらずにバックアップとっておけばよかった・・・

55節　黒歴史（前書き）

皆さんは車の運転についてどう思いますか？車の運転は憧れますけど実際運転してみるとすっごく怖いんですよ。

55節　黒歴史

部屋内に現れた人物、それはユーノが2年もの間夢の中で出てきた女性であった。今この遺跡内には夢の中で現れていた女性が本当に現実に現れたことに驚いているユーノと突如遺跡の中から現れた女性にいまだ警戒をし女性に武器を向けているナターシャの姿があった。

「あなた・・・・何者?その体つきから竜人族でもなさそうね・・・」

ナターシャは弓矢を緑の髪の女性に標準を合わせている、誰もいないとされている遺跡内から人間と思わしきものが突如現れたのだから当然の対応である。

「落ち着いてください、ナターシャさん。この人です私の夢の中で出てきた人は。」

「そうなの・・・・でも油断はできないわ!」

ユーノの言葉に一度は耳を傾けるがナターシャはまだこの非現実的な出来事に驚いているようで緑の髪の女性に向けて何時でも弓矢を射る事が出来るように構えている。すると緑の髪の女性はナターシャの方へと振り返り慈愛に満ちた笑顔をナターシャに向けそして深くお辞儀をしそしてナターシャに話しかけた。

「驚かせてしまって、ごめんなさい。私はあなた達に危害を加える存在ではありません。」

「証拠は？」

「証拠と言われましても・・・・なにか有るかしら？」

緑の髪の女性はナターシャの質問に対し困った表情を浮かべた、しばらく思い悩んでいると何か思いついたのかナターシャのもとへゆっくりと近づいてきた。

「近づくな！！それ以上近づくと弓を射るわよ！！」

「大丈夫、怖がらないでください。」

緑の髪の女性はナターシャの制止を物ともせずにナターシャのもとに近づきナターシャの弓を引く手にそっと手を添えた。

「！！」

女性の思いの寄らない行動に驚いたナターシャはその場からバックステップをし再び女性に向けて矢を引き始める、その際女性は真剣な表情でナターシャを見つめていた。

「怖がらないで・・・・私はあなた達に伝えたいことがあるのです。お願いだから怖がらずに話を聞いてください・・・・」

「・・・・・」

緑の髪の女性の真摯な訴えと眼差しにナターシャはこの人物は自分に害を及ぼす存在ではないと悟ったのかナターシャは弓を引く弦を緩め弓の標準を下に向けた。女性はナターシャのその姿を見ると再び微笑みだした。

「よかった・・・・敵意が無いことが伝わったのですね。」

「・・・・少しでも怪しい動きをしたら弓を射るわよ・・・・」

「わかりました、留意しますね。あっ自己紹介がまだでしたね、私はアイリスマスターコンピューターこの施設内の設備の管理及びデータの管理を役割としています。」

「あいりすますたーこんぴゅーたー？でーたの管理？あなた何を言ってるの？」

アイリスの自己紹介に今までも生きてきた際聞いたことのない言葉が多く含まれていたのでユーノは思わずアイリスに向けて口を開いてしまった。

「ごめんなさい。わからなくて当然ですよね、配慮が欠けてすいません。私はあなた方の言う古代文明時代に作られた物であなた達の世界でいうハンターズギルドで行っている仕事を全部一人で行うことのできる機械です。データと言うのは記憶の塊みたいな物と言えばわかりますか？」

「機械！？あなたどう見ても人間じゃない？」

ナターシャはアイリスの発言に驚きアイリスに問いかけた。

「そうですね、この体では人間と間違われても仕方がないかもしれませんね。この体は古代文明時代の技術を使われていた生体有機技術を使って人の形を元に作られたコミュニケーション端末と言うものです。あなた方が属してるハンターズギルドがハンター達に提供

しているラスタと言う存在を作る際に使われる技術のさらに上の技術を使って作られた体と思ってもらって結構です。」

アイリスがそう言い終わるとユーノはアイリスに近づきアイリスの片頬をつねった。

「あっ、何をひゅるんでしゅか?」

「人間みたいに柔らかい・・・・痛くはないの?」

「はい、痛くはないでしゅ。あの・・・・放してくれましぇんか?」

「あっ、ごめんなさい。」

アイリスの言葉を聞くとユーノはアイリスの片頬を手放した。しかしまだ信じられないと言った顔をしている。それはナターシャも同じであった。

「でもラスタ見たいなものと言っても何で普通の人みたいに感情豊かに話せるの?それも古代文明時代の技術によるものなの?」

「はい、私にはとある女性の疑似思考パターンプログラムと言う物がインストール・・・・あっわかりづらいですよね。えっとある女性の魂の複製品をこの体の中に宿らせていると言えば分りやすいですか?」

「魂の複製・・・・そんなことまで古代文明はできたの・・・・でもそんな事もできるほど高度な技術を有していたのになぜ滅んでしまったの?」

ユーノ問いかけにアイリスの表情は頬笑みから一変し真面目な顔つきへと変わった。

「これからお話することはあなた達の住む世界がどうしてこのような形となったのか、そしてあの子・・・ジュノと言う存在が一体何なのかと言う事をお話します。最初は信じられないかもしれませんが聞いてください、今後のあの子為に・・・・」

そういうとアイリスは部屋の中央のガラスの下のボタンを操作し始めた、そしてしばらくするとそこに古代人達と思わしき物達が生活している様子が映し出された。アイリスの説明も所々織り交ぜながら最初は尖った石を棒に括りつけた槍状のものを手に持ち大きな生物を罠に掛けて一斉に手にした槍を投げつける様子、そしてその様子から古代人がさまざまな思想や争いへて進化していき最終的には古代に滅んだ生物を生き返らせたり、新たな生物を生み出したり、医療技術の進化等が映し出された。その様子をじっと二人は見ていたがユーノは近くの壁にもたれ込んでしまった。

「・・・・・」

「少し休憩しますか？ユーノさん？」

「え・・・・えぇ、なんで私の名前を知ってるの？」

「前にジュノがここに来た時にジュノの記憶の中を覗かせてもらった時に知ったのです。もちろんあなたの名前も知っていますよナターシャさん。ジュノが小さい時にとてもお世話になった様でありがとうございます。」

「えっ・・・・あぁどういたしまして。」

アイリスはナターシャにお辞儀をするとナターシャは少し困った顔をした。少しの間沈黙が続くとユーノはアイリスに向けて質問をした。

「ところでアイリスさん何で私の夢の中に頻繁に出てきていたの？私とあなたは今まで何の接点もないはず・・・・」

「その答えはこれから順を追って話しますので、それでよろしいですか？」

「わかった。」

「ありがとうございます。では話の続きを始めますね。」

そういうとアイリスはまた映像に沿って説明を始めた。今度映し出された物はユーノ達の世界で生息しているモンスターたちによく似た小さな生物を抱いて笑顔をこぼしている古代人たちであった古代人たちはその生み出した生物を愛玩物として可愛がっていたとアイリスから説明をされた。しかし次に映し出されたのは古代人たちがうまく躾けられずに捨てられたり飽きられて捨てられている様子だった。そしてその捨てられた生物中からとても生命力及び力の強い個体が生まれ進化し古代人達を脅かす存在となった。その生物たちは神獣と名付けられ古代人達と神獣達の生存をかけた戦いが始まったという。その際古代人達は神獣に対抗すべく神獣の強力な力を身に宿し人語を理解し人類に忠実な人型の生物を作った、その生命体はアンサラーと呼ばれ絶対的な力を振るい神獣達を滅ぼし古代人達と神獣の戦いは終わりを告げた。しかしまた新たな問題を古代人達は抱えることになった古代人達より遥かに優れた生命体であるアンサラーをどうするかだ、少数の間では共に共生すべきだと訴える人

もいたそうだが大多数が神獣の件の様な悲劇を回避する為アンサラーはすべて処分されることになった。

「・・・・胸糞悪い話ね・・・・・」

「そうですね・・・・必要とされ作られたのに様が済めば処分するなんて・・・・でも処分賛成派の人の気持ちも分らなくもないですね・・・・誰だって平和な時を過ごしたいものですから・・・・」

「そういってもらえると立場上古代人と同じである私も助かります、ユーノさん。」

「でもその古代に出現した神獣はアンサラーによってすべて処分されたはずでしょ?でもこの世界にはその神獣によく似たモンスターが沢山いるけどこれは何でなのアイリスさん?」

「はい、あくまで私の推測ですがおそらく軍事転用を目的に神獣の卵が何らかの形で残されたと考えられます。」

「軍事転用ね・・・・どっかの馬鹿が数年前に同じような事をやってたわね。」

「ヨハネス司令・・・・ここ数年ほとんど音沙汰ないですけど、どうしてるんでしょうか?」

「さぁ?このまま音沙汰無ければ一番いいわよね・・・・」

「・・・・あなた達の時代でも私達の時代で起きた事と同じような出来事が起きそうになったことはジュノから聞かされました。」

「ところで今まで話してた内容はジュノさんには関係ある内容なの？聞いてた感じだとただの古代人の歴史って感じだったけど。」

ユーノがその言葉を口にするとアイリスは顔を下に向けてしまった。

「どうしたの、アイリスさん？」

アイリスの様子を見かねたのかナターシャはアイリスに問いかけるがアイリスは下を向き口を閉ざしている。しばらくすると意を決したのかアイリスは顔を上に向き二人に向かって話しかけた。

「確かに私が今お話した内容はただの古代人達の黒歴史と聞こえてもしょうがないですね。では次に・・・ジュノについて話をしたいと思います。」

そういうとアイリスはボタンを操作しこれまでとは違う映像が映し出された、それは白い服を身にまとった人たちが液体に満たされた丸い筒状の装置の前で何やら話しこんでいる姿であった、その丸い筒状の中には人とおもしき物体が様々な管を取り付けられていた。

「これはアンサラーの製造工程を映した映像です。この丸い筒状の装置の中でアンサラーは製造されます。」

そういうと映像は変わり数名のアンサラー達の軍事演習の風景が映し出された。アンサラー達は様々な能力を発現させ神獣と思しき物体をものの数分で強大な神獣を狩りとっていた。

「これが従来のアンサラーの能力です。アンサラー達の力はこの程度の力にとどめておけばアンサラー処理法などと言う悲しい法案は可決される事はなかったでしょう。しかし人はさらに優れた物を生

み出そうとしアンサラーの力はこれよりももっと優れた物になって行きました。最終的には一体のアンサラーで数千にも及ぶ神獣を処理できるほどに。その中でアンサラー達にも変化が起き始めていました。わずかながら自我に目覚める者がで始めたり、設計当初よりも恐ろしい力を発揮するアンサラーも出てきました。」

そう言うとアイリスはまた違う映像に切り替えた、今度もまたアンサラーを製造している映像であった。

「これはここの施設の映像です。ここも元はアンサラーを製造する為だけの施設だったのですが終盤ではアンサラーと人々が共存する為の道を研究していました。その研究の中一人の女性研究員が自身の遺伝子情報と特殊な神獣の遺伝子を組み合わせた一体のアンサラーを作りました。」

そう言うとアイリスは映像を切り替えその女性科学者とその横にあるアンサラー製造用の装置を映しだした。アンサラーの製造装置の中には見覚えのある顔の男が浮かんでいた。

「彼女の名前は栗見　夏奈私の疑似思考パターンの元となった人物です。そして彼女が製造を担当していたアンサラーのシリアルはＪ－１０１、あなた達のもっともよく知る人物です。」

「うそ・・・そんな・・・・」

ユーノはその映像を見てふらつき倒れそうになるもナターシャが駆け寄りユーノの体を抱きとめ映像を見るその映像には彼女達が知りたがっていた真実が映し出されていた。

「ジュノはあなた達新人類時代の人間ではありません。・・・ジ

ユノは人間ではありません古代人達によって生み出された・・・・
只の兵器です。」

55節　黒歴史（後書き）

ちなみにこの55節書きたてほやほやで投稿してます。フフフ！！

５６節　異形のもの（前書き）

昨日のうちに更新しようと思ってたのですが、寝てしまった。

56節　異形のもの

ノルン島　ディオネ遺跡　コントロールルーム

「（人ではなく只の兵器・・・・あの感情豊かで私にいろんな事を教えてくれて与えてくれた、あの人が人間じゃなく古代人によって作り出された只の兵器・・・・）」

アイリスによって発言されたジュノの存在、それは二人にとってとても衝撃の事実であった。

「嘘だ・・・あの人が人間じゃないなんて・・・・嘘ですよね？」

ユーノはそう言うとアイリスに詰め寄り両肩を掴んだ。

「こんなたちの悪い嘘を付く為にだけに数年間あなたは私の夢の中に出てきてたんですか！？こんな事を言う為だけに夢の中に出てきたんですか！？あなたは！！」

アイリスはユーノは息を荒げアイリスを強く揺さぶり始めた、その間アイリスはユーノの訴えに対し何も口にすることはなかった。

「ユーノ！！落ち着きなさい！！」

それをアイリスのなされるがままの状態を見かねたナターシャがユーノとアイリスの間に割って入りユーノ落ち着かせようとしたがユーノの興奮は冷めることはなかった。

「どうしてナターシャさんは落ち着いてられるんですか！？ジュノ

さんの事を人ではなく物扱いしているんですよこの女は！！」

「・・・・いいから落ち着きなさいユーノ、アイリスさんの話が途中なのよ。」

「すいません、でもこれが事実何です。ジュノは古代人達の手で作られた人造兵器アンサラー。あなた方も身に覚えが有ったはずです、ジュノが人並み外れた身体能力を有しあなた達の世界でいう狩りを行っていた際に感じる事が有ったはずです。その人並み外れた身体能力もアンサラーたる能力の一つなのです。」

アイリスにそう言われるとユーノは黙り込んでしまった、確かにジュノは災厄とも呼ばれる古龍を一人で何度も討伐したりあの伝説上の生き物とされ人類種の絶対的な敵とまでされていた黒龍も一人で討伐している事実から見るとアイリスの言っている事は間違いではないと思ったからだ。アイリスはユーノの様子を見て二人に対して提案をした。

「どうしますか？一端休憩してお二人とも事実の整理をしますか？」

「えぇ、そうさせてもらうわまだユーノの興奮が収まっていない様だから。私たちは幸い三日間この島に居る予定だから今日はこれで失礼させてもらうわアイリスさん。それに私も少し驚いてこれ以上あなたの話を聞いても頭に入りそうにないから。」

「そうですか・・・分りました。ユーノさんやナターシャさんにお伝えしたい大事な事はまだ有るので気持ちの整理がついたらまたこの部屋に来てください。部屋の鍵は開けておきますから。」

アイリスはそう言い二人に対し頭を下げた、ナターシャは今だ興奮

さめ止まぬ様子のユーノの手を掴むと少し強引にディオネ遺跡を後にした。

ノルン島　ベースキャンプ

時刻は夜、すでに日がすっかり沈み辺りが暗くなりベースキャンプ内の鍋の火とキャンプの外の松明の明かりが冷たく黒く染まった辺りを温かく色づけている。ベースキャンプ内ではベットの端に寝転がっているユーノとそのすぐ近くでベットに座り込み海のさざ波の音を聞きながら遠くを眺めているナターシャの姿があった。二人の間に会話は無い、二人ともこの世界の事実そしてジュノの正体の事で頭の中の整理が付かないと言った様子だった。

「ハンターさん達どうかしたのかニャ？」

二人の様子を心配してかノルン島に一緒に残されたギルド専属のアイルー達が声をかけてきた。

「あぁ、何でもないわ。気にかけてくれてありがとう。」

「後ろで寝込んでいるギルドナイトさんの方は体の具合でも悪いのかニャ？」

「ん？あぁこの子はちょっと今日の調査で張り切りすぎちゃって疲れて寝てるだけだから大丈夫。」

「そうでしたか、お勤め御苦労様ですニャ！」

そう言うとギルド専属のアイルーは持ち場に戻っていき再びテント内では二人が残された。しばらくの沈黙のあとベットの隅に寝ころ

んでいたユーノがそのままの体勢でナターシャに声をかけてきた。

「・・・・信じられますか？アイリスの言っていた事？」

「信じたくないけど・・・・あんなの見せつけられたら信じざるおえないわ・・・・・」

「・・・・ジュノさんが消えてから数年間・・・・必死に探し求めてたあの人に関する事実・・・・最初は只の興味本位だった、でも調べれば調べるほど謎が深まって・・・・そしてたどり着いた事実がこんな物になるなんて・・・・こうなるなら調べなければよかった・・・・・」

「・・・・そうね、小さい時から他の人達とは何か違うと思っていたけどまさか正体は古代兵器でしたなんてね・・・・笑っちゃうわね。それにこの世界に巣くっているモンスター達は元は古代人達が作り出した物のなれの果てなんて、ギルドに報告したら世界中が驚愕するでしょうね。」

「・・・・報告するんですか？ギルドに？」

「仮に報告したって取り合ってもらえないわよ・・・・こんなおとぎ話じみた事実。」

「そうですよね・・・・」

「どう？気持ちの整理はついたのかしらユーノ？」

「ナターシャさんの方はどうなんですか？」

「私はある程度は済んだわ、時間もないからほぼ一方的にだけどね・・・それにまだアイリスさんは私達に大事な事を伝えなければならないと言ってたしね、たぶんその大事な事は今日説明された事よりもっと衝撃的なものになるに違いないわ。こんな事実くらいでへこたれてたら体が持たないわ。オホホホ！！」

「・・・さすがレジェンドラスタですね、ナターシャさんの言う通りこんな事実でへこたれてたらあの人に笑われちゃいますね。」

「そうよ！！あいつに馬鹿にされちゃうのだけは避けたいわ、私のレジェンドラスタとしての誇りと美しさに傷が付くわ！！！オホホホ！！！」

「（美しさは関係ないと思うけどなぁ・・・・）」

ナターシャの笑い声がキャンプ周辺に響き渡り、それを聞いて何事かとギルド専属アイルー達がキャンプの入口に集まって来た。

「ど・・・どうかしましたかニャ？あのハンターさん？」

「あぁ・・・・気にしなくていいから、驚かせてごめんねネコちゃん達。」

「そ・・・・そうですかニャ・・・・何かあったら呼んでくださいですニャ。僕たちはすぐ近くで待機してますので。」

「うん、ありがとね。」

ユーノは集まって来たアイルー達に何の異常もない事を伝えるとユーノは再びベットへと戻った。

「ともかく、今日はもう寝ましょう。明日またディオネ遺跡に言ってアイリスさんの話の続きを聞きに行かなくちゃ。」

「そうね。もう寝て明日朝一でアイリスさんの話の続きを聞きに行きましょう。」

ナターシャがそう言うとユーノもそれにうなずき二人はベットへと寝転がり目を瞑った。

ノルン島　ディオネ遺跡

「よかった、来てくれたんですね。」

アイリスの安堵した顔を二人は見ると、二人は昨日のアイリスに対する態度を詫びた。

「昨日はすいませんでした。いきなり乱暴なことをして・・・・」

「良いんです、いきなりあのような事実を述べたら誰だって取り乱しちゃいますから・・・・」

アイリスはそういうと二人に対して頭を下げた。それを二人は見るとユーノが昨日の話の続きについて切り出した。

「それで今日は昨日の話の続きを聞きに着ました。」

ユーノがそうアイリスに伝えるとアイリスは昨日と同じまた真剣な表情をして二人に話しかけた。

「昨日お伝えした事実はジュノにも2年前ここに来た時に伝えました。彼の場合も少し驚いていましたが姿は違いますが栗見博士の人格データをインストールしている私を母のように慕い、そしてアンサラーとしてこの世界で生きていくための力の使い方を学んでいきました。」

「しかしある日を境に頭の中で時より声のような音が響くと言う悩みを抱える事となりました。一度精密検査をした際は何も異常は見られなかったのですが私は心配だったので彼に渡したお守りに彼の生態波長パターンの変化がいつでも監視できるようにあるアプリケーションをインストール・・・・あっアプリケーションとインストールいうのはですね・・・えっとアプリがとあることをすることができる機能でイントールはその機能を導入すると言う意味と捉えてもらっていいです。」

「生態波長って？」

「あっ・・・そうですね、体の健康状態がわかる波と考えてもらっていいです。そしてある日を境に彼の波長パターンが変化しました。本来ならば彼の波長パターンが変化した際にはすぐに連絡が取れるような機能をそのお守りに導入しているのですが、彼との連絡は一応取ることはできたのですが、彼自身の応答はほとんどありませんでした。」

「その連絡が私の夢の中にアイリスさんが出てきた事になるのかな？」

「はい、本来はジュノ以外の人物にそのお守りを渡してもお守りの機能は作動しないはずなのですが・・・・ユーノさん・・・・ジュ

ノと・・・・何かしましたか？」

「何かって？」

「その・・・・例えばジュノとユーノさんの粘膜同士の接触とか・・・・」

「？」

アイリスの言葉の意味に気付いたナターシャは顔を少し赤らめながらユーノのそばへと近づきユーノに耳打ちをすると次第に顔を赤らめものすごい剣幕な表情をしながら否定に入った。

「そんな事一度もしたことないです！！」

「そ・・・・そうですか・・・・となると後は・・・・あっ輸血ってご存知ですか？」

「ゆけつ？」

「人から人へ血液を映す行為で古代文明における医療技術ではそう言った技術が有ったのです。その様子だとまだ輸血の医療技術はこの世界ではなさそうですね・・・・じゃあジュノの血が目に入ったり耳の中に入った事はありますか？」

「うーん・・・・ない・・・・あっ！！！」

ユーノは有る事を思い出した。二年前そうジュノとブロードと三人で王都ヴェルドの第三王女からの依頼をこなしていた際に遭遇し謎の漆黒のレイアの襲撃の際にユーノをかばったジュノの血が目の中

に入った事を。

「ジュノさんの血が目の中に入った事が一度有ります。」

「なるほど・・・おそらくその際にジュノの血液の中に含まれるアンサラー細胞中の神経ペプチド性伝達物質がユーノさんの眼球を通じてユーノさんの体内に入り込みユーノさんの体の中にジュノと同じ精神通信アドレスを得ることになってしまった為、お守りの機能が作動したのですね、それなら辻褄があいます。」

「しんけいぺぷちど?あどれす?」

「あっ・・・えっとですね神経ペプチド性伝達物質はジュノの体の情報等が入った物質と考えてください。あとアドレスは・・・・そうですね手紙を送る際に書く宛て名ですね。」

「なるほど・・・・」

「話を元に戻しますね。彼自身の応答がなかった為私はそのお守りの持ち主の特定をする為に様々な事をしました。そしてそのお守りは現在ジュノではなく貴女が所有している事がわかったので私はそのお守りに遠隔操作でこの施設に入る為の有る機能を付与しました。」

「それが昨日扉をあける際に扉が言ってた管理者から権限を与えられたキーってやつですか?」

「その通りです。そしてあなた達に伝えなきゃいけない大事な事・・・それは現在のジュノの事です。」

「現在のジュノの事・・・・もしかしてあいつは生きてるの！？」

ナターシャはその言葉を聞きアイリスに少し詰め寄った。

「はい、彼は生きてます。」

アイリスのその言葉を聞くと二人の顔から笑みがこぼれた。死んだとされていた大事な人が生きていた、それだけでも彼女達にとってとても喜ばしい事であったしかし。

「生きてはいますが・・・・前の様な人の姿で生きていると言うわけでは有りません。」

「えっ・・・・どういう意味ですか？」

アイリスは無言で昨日二人に映像を見せていた画面の下のボタンを操作し始めた。しばらくすると画面上に一人のアンサラーがいきなりに人の形から異形の姿へと変化して行く映像が映し出された。

「アンサラー達の中に稀にアンサラー達の中に存在する神獣の遺伝子が異常をきたし、今見せた映像のようにアンサラー自体が神獣のようになってしまう事が有りました。科学者達の間でこの現象の事をオードポイントと呼ばれてました。」

「オードポイントを起こしたアンサラーは最初は通常のアンサラーと同じく古代人の命令に忠実ですが次第に神獣の遺伝子に体を侵食され神獣と同じく人に危害を加える存在になりました。」

そう言うとアイリスはまたボタンを操作し始め別の映像を映し出した。そこには青い体色の牙獣種に近い体躯で尻尾と頭が竜の姿をし

たモンスターが映し出された。

「これは・・・・イレスデウス・・・・」

「見覚えが有るのですか？」

アイリスが二人に質問するとナターシャがそれに答えた。

「えぇ、今私達ハンターズギルドで問題になっている種族不明の謎のモンスターです。」

「・・・そうですか。そのハンターズギルドではこのイレスデウスと名付けられたモンスターに対して何か対策は練って有るのですか？」

「いえ、今のところ人的被害は出ていないので今はなんとか捕獲して生態を調べよう位しか・・・・」

「そうですか、まだ人的被害は出てないのですね。」

アイリスとナターシャの会話が終わると今まで黙っていたユーノが口を開いた。

「アイリスさん・・・・まさかこのイレスデウスは・・・・」

ユーノの質問にアイリスは下を向いて口を閉じてしまった。

「そう言う・・・・事なんですね・・・・」

「はい・・・・これが今のジュノの姿です。」

56節　異形のもの（後書き）

次の節は土曜日の夜か日曜日の朝までには更新できるようにします。

５７節　迷路（前書き）

もう６０節分も投稿してるんですね・・・多いようなまだまだのような・・・・

57節　迷路

ノルン島　ディオネ遺跡　施設内

アイリスの告白した事実それは二人にとってとても喜ばしい事でもあったが非情なものであった。ジュノは生きている、しかし人の姿ではなく種族不明のモンスターイレスデウスとして。

「もう・・・元の姿には戻れないんですか？」

ユーノはアイリスに尋ねる一分の希望を胸に抱きながらしかし。

「私の力では・・・元の状態には戻せません。ジュノの開発者である栗見博士自身なら何らかの解決策を導き出したかもしれませんが、博士はもう・・・・」

「・・・・。」

「彼は特殊な工程をへて尚且つ成体から幼体の状態まで戻し、この時代までこの施設内で封印されていたのでその際に何らかの欠陥が生じこのような姿になってしまったのでしょう。」

アイリスはそう言うと画面下のボタンをまた操作し始めたしばらくすると部屋内の奥の扉が開かれた。

「すこし・・・待っていてください。」

アイリスはそういうと部屋の奥へと入っていき両手に縁取りが黄色で彩られた赤い液体の入ったビン状の物を持って出てきた。

「それはなんですか？」

ナターシャがアイリスの手に持っている赤い液体の入ったビン状の物について尋ねるとアイリスは暗い表情をしながらナターシャの質問に答えた。

「ＰＣＤ・・・・プログラム細胞死を強制的に起こす薬品です。」

「死・・・・それってつまり・・・・・」

「神獣を殺す薬品の一つです。」

「！」

「・・・・殺すしか道は無いのですか？」

「従来このような状態になってしまったアンサラーに対してはこの方法で処理してきました・・・・・」

ユーノとアイリスが黙り込んでしまうとナターシャがアイリスに向けて問いかけた。

「でもあいつは特殊な工程を得て作られたんでしょ？その特殊な工程ってなんなんですか？」

「はい、栗見博士の記録によるとジュノは従来のアンサラーより感情に特化したアンサラーとして作られました。」

「感情に特化・・・・」

「おそらく栗見博士はジュノに古代人たちと一緒に暮らせるよう、自分で悩み考えそして行動するという事をさせるために感情に特化するよう作ったのでしょう。」

「後のあいつの体に対して特殊な事は何かわかっているの？もしかしてあの状態でジュノに呼びかけたら反応とかする？」

「呼びかけ・・・ですか・・・そうですね。特殊な工程をへて作られている彼なら何らかの反応はあるかもしれません、あくまで私の推測にすぎませんが・・・それ以外の特殊な事は・・・すいません、私の権限ではこれ以上の栗見博士のジュノ制作記録を閲覧することはできません。」

「つまりまだ何かあるかも知れないってことよね？」

「わかりません・・・」

「そう、わかった。」

そういうとナターシャは壁にもたれ掛り腕を組んで何か考え始めた。

「ユーノさん。」

「はい・・・」

「あなたの持っている武器・・・確かこの世界ではライトボウガンという物ですよね。それの弾を貸していただいてもよろしいですか？ナターシャさんの弓についているビンも貸してもらっていいですか？」

「どうぞ・・・・」

「はい。」

ユーノとナターシャはそういうとアイテムポーチから通常弾の弾と空になった弓の空き瓶をアイリスに手渡した。

「少し待っていてください。」

そういうとアイリスは先ほどの部屋の中へと入っていった。しばらくするとアイリスは通常弾の弾と赤い液体の入った狩猟弓用のビンを手に持ち部屋から出てきた、アイリスの持っている通常弾は普通の通常弾とは違い赤く染まっている。

「今の時代の技術に合わせてこの弾とビンに強制的にＰＣＤを起こさせる作用を施した薬品を詰めました。これを二人にお渡しします。」

そういうとアイリスは二人に一つずつ弾とビンを手渡していった。二人はそれを受け取るとそれぞれのアイテムポーチの中に入れていった。

「ごめんなさい。貴方達にこんな辛い役割を負わせて・・・・」

そういうとアイリスは二人に対し頭を深く下げた。二人の間にアイリスに対する言葉はなかった。

「これで私から貴方達に伝える事はもうありません。後はお二人の判断にお任せします。」

「・・・わかりました、いろいろ教えてくれてありがとうございます。アイリスさん」

ユーノはアイリスに対してそういうとナターシャと共に施設を後にした。

ノルン島　ベースキャンプ

ベースキャンプに戻った二人はキャンプの中に居た伝書鳥をすぐさまメゼポルタへと飛ばした、もうこの島での目的は果たした。二人はアイリスに手渡されたイレスデウスを滅ぼすアイテムを取り出して黙ってそれを眺めていた。

「・・・まさかイレスデウスの正体があいつだとわね。」

ナターシャがキャンプ内でそうつぶやくとユーノもそれに反応した。

「ここまで驚きの事実が連続すると逆にもう驚くのが面倒になってきますね。」

「ふふ・・・そうね。古代兵器と説明されたら次はイレスデウスが今のあいつなんて笑っちゃうわ。」

「・・・ほんとですよね。前から凄い人と知り合いになっちゃったな～って思ってましたけど、ここまでぶっ飛んでるともう笑っちゃいますね。」

そう言うとユーノは笑い出した。まるでネジが飛んで壊れたおもち

ゃの人形の様に。

ノルン島　ディオネ遺跡　施設奥

施設奥ではアイリスが画面下のボタンを操作している姿と一人の男がアイリスの後姿を見ていた。

「これでよかったのですか？」

「あぁ・・・・」

「どうしても・・・必要な事なんですか？これが・・・・かつての仲間にあなたに対して引き金を引く行為が・・・・」

「俺なりに考えた事だ、あいつらはこの時代を生きる人間・・・・あの女の言う通り本当にこの時代の人間が旧人類と同じなのかどうか。」

「しかしあの方は・・・・」

「知ってる、本人から聞いたしな。」

「でもあなたは従来のアンサラーとは違いオードポイント状態ではない、今のように理性を保ててる。」

「まぁね、母さんのレポートを全部見た限りどうやら俺はいろいろと特別な様だからな。アイリスもそれは知っているだろ？」

「確かに貴方の入力した栗見博士の制作レポートをロックしていた

プロダクトコードを入力したことで貴方の性能は従来のアンサラーに比べてかなり異質な存在なのは分りました、それに貴方の中に宿る存在も・・・・でもこんな事までする必要があるのですか？」

「普通の化け物よりさらに化け物だから試すのさ、この世界の人間と生きていけるのかどうか・・・・それじゃ行ってくる、さよなら。」

そう言うと男は施設の外へと出て行った。

「・・・・栗見博士の人格データをインストールされたと言う事はこの世界であの子の支えとなれと言う栗見博士の意思と思っていたのに、私はあの子を止める事は出来なかった。どんなに諭してもあの子は考えを変えなかった・・・・」

「なぜ私の様な機械にこのような物を強制的にインストールさせたのですか・・・・博士・・・・」

施設の外を出たところで先ほど施設内に居た男が島の沿岸部に有るベースキャンプを眺めていた。

「・・・・・」

【Ｆｏｏｌｉｓｈ　ｂｏｙ.】

「なんだ？」

【別に～今の君の有り様を昔の言葉で言ってみただけ～。】

「どういう意味だ？」

【教えてあげなーい。】

「・・・・」

【それにしても君ほんと変わっちゃったね～悪い意味で！】

「昔より賢くなったつもりだが。」

【はぁ～中途半端に知識を得て頭が良くなるとなんで人間は絶望的な現実しか見なくなるんだろうね～今も昔も。】

「俺は人間じゃない・・・・アンサラー旧人類が作り出した古代兵器だ。」

【ふ～ん。やたら人間臭い古代兵器様も居たもんだ！！あははは！！】

「・・・・・」

男が周りから見て独り言をつぶやいて居ると海の地平線から気球船が島に向かって飛んできていた。

「懐かしいなあれを見るのは・・・・」

ミナガルデ

ミナガルデの外れにある一軒家に二人の男と一人の女が部屋内に居

た。一人は机に座り古代文字を解読している赤い衣をまとった男もう一人は赤い衣をまとった男のすぐ後ろで壁にもたれかかりその男を見守る大剣を背負った男。そしてもう一人は太刀を背負った金色の髪の女が赤い衣を身に纏った男のすぐそばで何やら男に耳打ちをしていた。

「・・・彼が動き出したと。」

「そのようです。」

「なるほど、では彼の演じる初舞台を少し華やかな物にしてあげようではないですか。ゴート！」

「はっ！」

「マーシレスの者達に連絡を例の集めていた物を使ってあげようではありませんか彼の舞台の為に。」

「御意に・・・・」

赤い衣の男に命令されるとゴートと呼ばれた大剣を背負った男は家の外へと出て行った。

「ところでセレイン、例の計画は順調なのですか?」

「はい、今のところ何の問題も生じておりません。」

「そうですか、ならよいです。では近くに寄りなさいセレイン。」

そう言うとセレインと呼ばれた女は黙って赤い衣を纏った男の体に

身を寄せた。

57節　迷路（後書き）

ホントこの国はどうなっちゃうんでしょうね。まぁどうなろうとこのお話は完結させるのでご安心を。

58節　Gluttony（前書き）

夜の時間帯が長くなってきましたね～夜道には注意してくださいね。

58節　Gluttony

気球船　ハンター控室

この二日間様々な事がわかった。何故世界にモンスターが溢れているのか何故アイリスがユーノの夢の中に現れていたのか、そしてジュノと言う存在が何なのか突如現れたイレスデウスの正体が何なのか・・・・二人はアイリスに教えてもらった事を思い返しながらメゼポルタへと向かって行った。ユーノはノルン島での調査に関しての記録をまとめていた、もちろんアイリスに教えてもらった内容は伏せて書いている。

「ふぅ・・・・・」

一通りの事を書き終えるとユーノはペンを置き溜息をついた。

「書き終えたって感じ?」

ユーノのその姿を見てナターシャが声を掛けてきた。

「なんとか・・・・ですね。ほとんど嘘の内容に近いですけど。」

「あら、アイリスさんに言われた事は書かなかったの?貴女なら書くと思ってたんだけど?」

「ナターシャさんも先日行ったじゃないですか。どうせアイリスさんに言われた事を報告した所でギルドには相手にされないだろうって、だから私も書きませんよあまりにも非現実的すぎる内容でしたからね。」

「まぁ・・・・そうね・・・」

「・・・・少しデッキの風に当たってきますね。」

そう言うとユーノは書類をまとめ控室から出て行き控室にはナターシャ一人が残った。

「・・・・」

ナターシャは無言でアイテムポーチからアイリスに渡されたイレスデウスを殺す為のアイテムを取り出した。

「・・・・まるで血の色ね。」

気球船　デッキ

デッキには風に当りながら遠くを眺めているユーノの姿と気球船に備えついてあるバリスタの整備を行っている乗組員アイルーの姿があった。ユーノの顔は日の光を浴びて照らされていたがもう一方は陰で覆われていた。

【これが今のジュノの姿です。】

「・・・・・」

【神獣を殺す薬品の一つです。】

「ッ！！！」

ユーノはもたれかかっているデッキの縁を強くたたいた。その音を聞いてバリスタを整備していたアイルーはユーノに振り返ったが彼女の発している近づきがたい雰囲気に負けて再び整備の方へと戻った。

「（何の為にアイリスさんは私を呼んだんだ？）」

ユーノは自問自答を繰り返した何の為にアイリスが夢の中にまで出てアイリスにジュノの事実を聞かされそしてアンサラーを殺す為のアイテムを渡されたことに。

「（私がギルドナイトだから？私が民を守るモンスターハンターだから？それとも私が新人類だから？）」

何度も考えても答えは出てこない、そして出てくる苛立ちと悲しみ。

「（こんなのってないよ・・・・なんで誰よりも人らしい心を持ったあの人を殺さなきゃならないの・・・・人間らしい彼を・・・・人間の心・・・・）」

ユーノが考え込んでいると突然デッキの扉が開け放たれた。そこには伝書鳥の伝令を持ったナターシャの姿が有った、ナターシャはユーノを見つけるとすぐさま駆け寄ってきた。

「ユーノ！！！大変よ、メゼポルタの街中に突然正体不明のモンスターが数対現れたそうよ！！」

「正体不明？イレスデウスではないんですか？」

「えぇ、観測気球によると黒い稲妻の様な物を吐き出しながら街中

を破壊しながら進んでいるそうよ。」

「黒い稲妻・・・・ドラギュロスですかね？」

「わからないわ・・・ともかくこれから高速巡航に入るからハンター控室に戻って！！そこの整備アイルーも早く船内に入りなさい、振り飛ばされて海に落ちちゃうわよ！！」

「ニャ！！それは勘弁ですニャー！！！」

そう言うと整備アイルーは目にも止まらぬ速さでデッキ内から船内へと入って行った。

「さぁ私たちも。早く！」

そう言うとナターシャはユーノの手を引きながらデッキから船内へユーノを引きこんだとたん気球船は速度を上げ空を駆けるが如くメゼポルタへと向かって行った。

メゼポルタ　気球船ドック

気球船が気球船ドック内に入るとナターシャとユーノは急いで船を降りドック内を見まわしたどうやら気球船ドック内はモンスター達の手によって荒らされては居ない様だ。その様子を見てユーノは後ろに居るナターシャに声をかけた。

「メゼポルタに戻る際上空にガブラスの姿は目撃できなかったって事は古龍種の襲撃と言う事ではなさそうですね。」

「そうね・・・・イーオスの姿も無い様だし・・・・ともかく大老殿へ向かいましょう！大長老が指揮を執っているはずだわ。」

ナターシャがそう言うと二人は気球船ドックから大老殿へと駆けだした。

メゼポルタ　大老殿

大老殿内は様々な人たちで行きかい大長老に現状を報告している状態であった。ユーノ達も大長老に現状を聞くべく大長老の元へと駆けた。

「ギルドナイト隊ユーノ及びレジェンドラスタナターシャただ今調査から戻りました。」

「おぉ、そなたたちか。調査の方御苦労であった、結果の方を今すぐ聞きたいところじゃがそなたらの乗っていた気球船に飛ばした伝令の通り今メゼポルタはモンスターによって襲撃されておる。」

「被害の状況はどうなっているのですか？」

ユーノがそう言うと大長老に代わって大長老の補佐を務めている竜人族の男性がユーノとナターシャに元に歩み寄ってきた。

「現在は主に住民区とハンタースクール内が著しく被害を受けている状況だ。」

「モンスターの正体は？まだ判明されてないのですか！？」

ナターシャが竜人族の男性にものすごい勢いで詰め寄るが竜人族の男性はそれに臆することなく淡々と説明を始めた。

「古生物書士隊の報告によると異国の大陸に生息するイビルジョーと言うモンスターだそうだ。」

「イビルジョー・・・・・まずいわね・・・・・」

「そう。君の思っている通り非常にまずいモンスターだ。」

「ナターシャさん、イビルジョーにご存知なんですか?」

「えぇ、この大陸ではまだ生息の確認されていない外来種のモンスターよ。常に空腹な状態でこいつ一匹で周辺の生物が絶滅に追いやられる程危険なモンスター・・・・それが人の住む街に・・・・ましてやハンターでもない民間人達が住む民間区に現れてる時点でその事態は容易に想像付くでしょ?」

「・・・でもなぜ外来種のモンスターがこの大陸に?ましてや何故メゼポルタに・・・・」

「分らないが何故イビルジョーがこの大陸に居るのかは容易が付く、密輸だろう。何故メゼポルタに数体現れそして襲っているのかはわからないが・・・・」

「ともかく君達も住民区を護衛するハンター達の援護に向かってくれ。ユーノ君の上司に当たるブロード君も現在住民区でイビルジョーの討伐に当たっている。」

「解りました。装備を整えたのちにすぐに急行します。」

そう言うとユーノはそう言うと大老殿を後にしマイハウスへと装備を整えに向かった。

「（まさかね・・・・）」

謎の不安に駆られる心を収めつつナターシャも大老殿を後にイビルジョー達の居る住民区へと向かった。

メゼポルタ　住民区　東

「早く!!!こちらへ!!!」

民間区ではブロード達ギルドナイトが民間人の避難の誘導を行っていた。

「あと少しで非難が終わるか・・・・」

そう安堵した次の瞬間だった民間人達の足元が急に盛り上がり地面の土と数人の民間人が宙へと舞った。

「ッ!!」

土埃の中に見える棘の生えた顎そして赤黒い塊その塊はブロードを見据えていた。ブロードは背中の大剣を抜くと赤黒い塊の前に対峙した。

「覚悟!!!」

その言葉と共にブロードは赤黒い塊の足めがけて大剣で横一線を放った、しかしブロードの放った一線を物ともせずに赤黒い塊は発達した片足を上げすさまじい勢いで踏み下ろした、まるで虫けらをつぶすが如く。

「クッ！！」

咄嗟に後ろへと下がり急いで大剣で目の前をガードして身を固めた次の瞬間轟音と地響きがブロード襲った。ガードを解き再び赤黒い塊に斬りかかろうとした次の瞬間だった。赤黒い塊が宙へと舞い地面にたたき落とされた民間人の一人のもとへ大きく口を開きながら向かって行く姿がブロードの目の中に飛び込んできた、民間人を一飲みする為に、己の満たされる事の無い食欲を少しでも満たす為に。

「止めろー！！！」

急いで大剣をしまい赤黒い塊より先に民間人の元へと向かうブロードしかし赤黒い塊はさらに勢いをつけ民間人に向かってゆく。

「ヒィ！！！食べないで！！！」

民間人の懇願など彼らの耳に届く筈がない弱肉強食の世界で生きてきた彼らにとって民間人は只の目の前にある餌にすぎないのだから。

「とぅ！！！」

赤黒い塊と民間人の間に赤みがかった髪色の女性が降り立つ両手に握っているのは刀身が青い双剣。

「はっ！！」

女性はすぐさま赤黒い塊に振り返ると剣の矛先を赤黒い塊に定め赤黒い塊に乱舞を放つ。すさまじい乱舞が赤黒い塊の顎に当たり赤黒い塊は悲痛な声を上げ後ろへと後ずさった。

「早く!!あのギルドナイトの人の所に!!!」

女性は民間人にそう指示すると再び赤黒い塊の懐へと駆けて行った。

「こちらです!!俺の後に!!」

ブロードは民間人の手を取り避難所へと向かった。赤黒い塊に吹き飛ばされた人たちも含めブロードが避難の誘導をすべて終わらせた頃には赤黒い塊はすでに女性双剣士によって傷だらけにされ虫の息であった。

「ブロード、民間人の人達の避難は無事に済んだ?」

「あぁ、フラウのおかげでスムーズに行ったよ。後はこいつを片づけるだけだな。」

「うん!いくよー!!!」

二人のハンターは赤黒い塊に向け駆けて行く、圧倒的力を誇るモンスターから民を守る為にそれぞれ内に秘める己が信じる物の為に。

「ふっ!!!」

ブロードはモンスターの頭に向け渾身の力を込め大剣を振り下ろその隙にフラウはモンスターの足元を崩す為目にも止まらぬ速度で乱

舞を繰り出す。赤黒い塊は二人の猛攻を喰らい膝をつき地へと身を投げ出した。

「・・・とりあえず一段落ってところか・・・さすがはフラウだな、俺が住民を避難させている間にここまでこいつの体力減らすとは」

「ふふーん！ボクの手にかかればイビルジョーなんてイャンクックも同然だね♪」

「イビルジョーと言うのかこの赤黒いモンスターは・・・」

「そうだよブロード。異国じゃかなり有名なのにブロード知らないの？」

「・・・まったく・・・」

「もっと雑誌とか新聞を読もうよ・・・だからユーノちゃんが言う事聞かないのかもよぉ～」

「ぬぅ・・・！！フラウ！！！後ろだ！！！」

「えっ・・・・・」

ブロードがふとフラウの方を向くと後ろから口を大きくあけながらフラウに迫ってくるイビルジョーの姿が有った。今度のイビルジョーは先ほど二人で倒したイビルジョーとは違い体格も一回り大きく背中が赤く大きく盛り上がっている。フラウもブロードの声と共に後ろへと振り向くがもうすでにイビルジョーはフラウのすぐ先へと迫っていた。

「フラァァウ！！！！」

ブロードがフラウに手を伸ばそうとしたその時であった、上空から蒼い大きな槍がイビルジョーの胴体目掛けて突き刺さった。

「！！」

次の瞬間赤黒い塊とは別に蒼い塊が赤黒い塊の後方へと空から降り立ちイビルジョーの尻尾を掴み持ち上げイビルジョーを後方へと叩きつけそして頭部目掛けて拳を放った。広場に鮮血がほとばしり頭骨の砕ける音と臓物が飛び散る音が響きあたり当たりに血生臭い匂いが漂う。ブロードはフラウの手を急いで掴み蒼い塊を見つめた。

「ブロード・・・・あれって・・・・・」

「あぁ・・・・・」

蒼い塊はブロード達の方に向き直るとじっとブロード達を見据える。

「間違いない・・・・・イレスデウスだ。」

58節　Ｇｌｕｔｔｏｎｙ（後書き）

よく考えればこの章で初めての登場となる、ボクっ娘フラウちゃん。ブロードとの仲は一体どこまで進んでいるのでしょうか？奥手なおっさんだからな～ブロードは。

59節　異種と異種との邂逅（前書き）

急ですが漢字クイズ～
次の漢字の読み方は何と読むでしょう。

【翔鶴】

正解は後書きをチェック。

59節　異種と異種との邂逅

突如ブロード達の目の前に現れたイレスデウスはイビルジョーを一撃の下で粉砕した、一切の躊躇も無く、慈悲の一つも無くイビルジョーの頭部を殴りつぶした。その時ブロードは悟った、かつてこのイレスデウスを捕獲してやろうと息巻いていたがそれは完全に不可能だと言う事に、イレスデウスは人が手に負える領域のはるか上にいるモンスターだと彼は悟った。

「・・・・・」

イレスデウスと向き合うブロードとフラウ、二人は圧倒的な力の差を見せつけられ動けずにいた。しかしイレスデウスはその二人に襲いかかる事も無く一瞥をくれるとすぐさま上空へと飛び立ってしまった。

「ブロード・・・・」

「とりあえず大長老にこの事を報告してくる・・・・イレスデウスがメゼポルタに現れた事を・・・・フラウはそのままイビルジョーの討伐に当たってくれ。」

「うん・・・・」

そう言うと二人は別れた。

メゼポルタ　住民区　北方面

「こちらです！！早く！！！」

ナターシャは逃げ遅れた民間人と共にギルドナイト達が守る避難区へと向かっていた。ハンターでは無い民間人の彼らはハンターとは違いすぐに息を切らしてしまい、ナターシャ達は思うように前へと進めずにいた。

「ハッ・・・ハンター・・・・さん少し休憩を・・・・」

「仕方ないわね・・・・そこの路地に入って少し休憩しましょう。」

ナターシャ達は路地の裏に入り少し休憩を挟む事にした。民間人達は息も絶え絶えである普通に走る程度なら民間人でも呼吸を整えればハンターより劣るが長い距離を走る事が出来る、ただしそれは平常時での話だ。何時も危険にさらされる事のない領域で暮らしている彼らに対しては今の追われる状況化で呼吸を整える事等無茶に等しい。ましてや追う側はこの世界を大半を闊歩しているモンスターとなればさらに呼吸が乱れる、モンスターの世界で逃げる事を止める・・・・それはモンスターの世界では死に直結する。彼らは今その状況に立たされているのだ。

「（とりあえず、イビルジョーから逃げ切ったと考えても良いのか・・・・いやまだ安心するのは早い。この人たちを避難区まで連れて行かなくては危険なのは変わらない・・・・）」

ナターシャが少しの間思案に暮れていると建物が破壊される音と共に隠れている路地の向こうから咆哮を上げながらイビルジョーが現れた。

「追いつかれた！？全員私の後ろへ！！！」

ナターシャは民間人を自身の後ろへと追いやると弓を引きイビルジョーへと駆けて行く、イビルジョーも自分の目の前にのこのこと現れた餌を認識し口を大きく開けナターシャ目掛け突っ込んでくる。

「あなたみたいな気色悪いモンスターに食われるのはゴメンよ！！！」

そう言うとナターシャはイビルジョーの口の中目掛けて弓を数本放つ、放ったその矢はイビルジョーの口内に突き刺さると同時に黒い稲妻を上げイビルジョーは矢が刺さった痛みと口内に走った稲妻の痛撃に耐えきれず後ずさる。

「やっぱり龍属性があなたの身に一番応える様ね！！！」

そう言うとナターシャは真冥雷凄弓【翔鶴】を携えさらにイビルジョーへ弓矢を次々と放って行く。

「シュッ！！！」

まずはどの生物に共通して筋肉に覆われていない唯一の重要な対外器官の目に目掛け弓矢を放つ、しかしイビルジョーも只のデカイ的ではない意思を持つ生物だ。イビルジョーは咄嗟に後ろに後ずさると首を天へと掲げナターシャに向け口から赤黒い稲妻が迸るブレスを吐き出し周囲をなぎ払う。

「ャッ！！！」

ナターシャも伊達にレジェンドラスタとして何年も仕事をこなしている訳ではない。イビルジョーの放ったブレスをバックステップで

難なく回避しまたイビルジョーとの距離を詰めイビルジョー目掛け弓矢を放つ強固な筋肉に覆われていない目に目掛けてそしてナターシャの放った矢は見事イビルジョーのまぶたを貫通し眼球へと突き刺さると同時にイビルジョー自身の脳に痛撃が走り片方の視野が暗転する。

「目が顔の正面に付いてて残念だったわね、狙いやすかったわよ！」

常に捕食者の立場として君臨し進化してきたイビルジョーの眼は常に顔の正面に付いていた、それは獲物を見失わない為に獲物を正確に捉える為に。しかし今回相手にした者もまた彼と同じく顔の正面に目が付いている者であった、彼の相手をした者もまた体こそ小さく力も弱いがその代わり知能が発達した捕食者である。イビルジョーは奪われた片方の視界に対し小さな捕食者に対し怒りの咆哮を上げ背中の筋肉が盛り上がり盛り上がった筋肉からは血飛沫が上がる、歴戦の中で負った古傷が開きそこから血が噴き出したのだ。

「うるさいわね！！！」

ナターシャはそう言うとイビルジョーの古傷に向け弓矢を放つ放たれた弓矢は大きく開いた古傷目掛けて深々と突き刺さったと共に黒い稲妻がイビルジョーの体表にほとばしる、まるで激流の如く勢いよく。

「効いてるみたいね、さぁ最後に私の美貌を残った目によく焼きつけておきなさい！！！」

ナターシャはイビルジョーの残った片方の目に目掛けて弓矢を放った。しかしイビルジョーは突如自身の頭を使い穴を掘り地中へと潜って行った。

「退いた・・・のかしら・・・皆さん!!!一端私の近くへ!!!」

自身の後ろに避難させていた民間人を自身の近くへ呼び寄せるがイビルジョーはその後も姿を現さなかった。

「退いたみたいね・・・皆さん!!これからまた避難区へと向かいます。私の後に続いて!!!」

そう言うとナターシャは民間人と共に避難区へと進みだした。

メゼポルタ　避難区前

「皆さん!!見えてきました!!早くこちらへ!!!」

やっとの思いで避難区へとたどり着いた避難区前ではギルドナイト及びハンターが警護に当たっている。ここまで来れば安心だと民間人達の顔つきも少し和らいだように見えた。ナターシャも安心したのか民間人達を避難区を警護しているギルドナイト達に送りだしたしかし。

「うわぁぁッ!!!!!」

民間人達の驚きの声と共に地面が盛り上がり土埃の中からイビルジョーが現れた。その姿は怒りによって盛り上がった筋肉は雄々しく口からは赤黒い稲妻が溢れだしていた。

「（片目に矢が・・・・付けられてた！！）」

イビルジョーはあの時逃げたのでは無くナターシャ達を付けていたのだ。己の満たされない食欲を満たすほどの餌が最も多く集まっている場所を案内させる為に。

「全員！！私の元に！！！」

ナターシャの声と共に引き返す人々しかし引き返す人々に押されてか一人の子供が地面へと転んでしまった。

「カイト！！！」

転んでしまった子供を名前を叫ぶ女性とその女性が子の元へ行くのを止めようとする男性。

「止めるんだ！！エミリア！！！お前までも危険に！！！」

「でもあなた！！！あの子が！！！あの子が！！！」

「私がお子さんを助けに行きます二人は私の後ろへ！！！」

ナターシャはそう言うと子供の元へと駆けだした、しかしイビルジョーは首を大きく上に掲げブレスを吐く態勢へと既に入っていた。たとえ小さな命とて彼に取っては只の餌、餌に慈悲など要らぬとばかりイビルジョーは子供に向けブレスを放とうとしたその時、突如上空から子供の上に何か大きな塊が覆いかぶさるように地面へと降って来た。イビルジョーのブレスはその大きな塊に直撃し当たりに黒い稲妻が走る。咄嗟に空から降って来た大きな塊によって引き起こされた風圧にナターシャは腕で顔を覆いながらその突如空から降

って来た大きな塊の正体を見た、それはナターシャがよく知る物であった。

「イレス・・・・デウスなの・・・・・・」

突如ナターシャの目の前に現れたイレスデウスその姿は子供を守らんが如く体全体を使って子供を覆いかぶさっていた、イレスデウスはイビルジョーのブレスを防ぎきると少し体を起こしその隙間から先ほど転んでいた子供が出てきた。ナターシャはすぐさま子供の元へと向かい子供の体に異変がないかを確かめた。

「僕!!体の方は大丈夫!?どこも痛いところない?」

「うん!!さっき転んだところはまだちょっと痛いけど全然大丈夫だよ!!」

ナターシャは子供の安否を確かめていると子供の後ろから【ジッ!!!】と音がしたと共に辺りが光りだし急に辺りが暑くなった。ナターシャはすぐさま音のした方向を見るとイビルジョーがイレスデウスの発した蒼い炎によって骨も残らず焼き尽くされていた。イビルジョーを焼き尽くしたイレスデウスは今度ナターシャの方へと振り返りじっと彼女を見つめた。

「ん・・・お兄ちゃん?」

「えっ?」

子供が発した不可思議な言葉に気を取られるとイレスデウスは上空へと飛びあがり北の方角へと飛んで行った。

「カイト！！！」

「お母さん！！！お父さん！！！」

先ほど子供の名前を叫んでいた女性とその夫らしき男がナターシャと子供の元へと駆けより女性は子供を抱き締めた。

「よかった・・・無事で・・・体はどこも痛くない？」

「うん！お兄ちゃんが守ってくれたから大丈夫だよお母さん！」

「お兄ちゃん？誰の事を言ってるのカイト？」

「ジュノのお兄ちゃんだよお母さん！」

「・・・あのねカイト、ジュノのお兄さんはもう居ないのよ。」

「でも、僕を守ってくれたのはお兄ちゃんだったよ！」

「・・・ともかく皆さん避難区へ急いで！」

ナターシャは三人を避難区へと送りだすと他の民間人も避難区へと誘導を始めた。

「（・・・あいつの中の人の心が今のあいつを動かしているの？）」

ナターシャは思案にくれながら民間人の避難を終えるとまた住民区へと駆けだした取り残されているかもしれない住民を探しに。

大老殿

大老殿にはブロードが大長老にイレスデウスに付いての報告を行っていた。

「一報告以上です。」

「うむ、御苦労じゃった。引き続き住民の保護に当たってくれるかブロード？」

「はっ！」

ブロードは大長老に一礼すると再び住民区へと向かう為に大老殿から出て行った。ブロードが大老殿から出ると次は大長老の補佐を務めている竜人族の男性が大長老に現状の報告をし始めた。

「大長老。イレスデウスの出現に伴ってメゼポルタに出没しているイビルジョーの数が急激に減っているそうです。」

「そうか・・・それは良い事じゃの。」

「やはり彼なのでしょうか・・・・」

「それはわからん。ただ異国の物に興味を惹かれて只現れただけかもしれん。」

「まるで彼の様ですね。」

「そうじゃな・・・似たような性格をしておるのかものう・・・・アレは、まったく不思議な者じゃて。」

そう言うと大長老は再びイビルジョーの迎撃の指揮を取り始めた。

59節　異種と異種との邂逅（後書き）

答え　しょうかく

でした～

ちなみに真冥雷凄弓【翔鶴】の読み方はたぶん　しんめいらいせいきゅう【しょうかく】で読み方はあってるはず。【凄】という漢字は訓読みだと【すご】いとか【すさ】まじい　って使われますが音読みにも二つの読み方があって呉音読みだと【さい】で漢読みだと【せい】って読むんだそうです。まぁワードで漢字変換するときに【せい】だとちょっと下のほうに凄って字があったので凄弓（せいきゅう）であっていると思います。ＭＨＦの武器はたまにこんな風な名前の武器が出てくるのでちょっと読み方に困る時があります。

漢字読み方クイズ第2問
これは何と読むでしょう

【不如帰】

答えは次の節で発表しまーす。

60節　Ｔｒａｐ（前書き）

答えは

【不如帰】（ほととぎす）

でした。次の問題はこれ

【真舞雷槍【鳩】】

答えは後書きをチェックです。

60節　Trap

メゼポルタ　ハンタースクール

時刻は夕刻を過ぎ辺りは次第に暗くなっていった。ハンタースクール内では教官とギルドナイト数名が生徒たちの避難を誘導している。

「他の者を押さず慌てずかつ迅速に避難するのだ。」

「はい！」

教官の指示通りに生徒たちは避難をしているその生徒達の先頭を切って進むギルドナイトが二人。

「さすがハンタースクールの生徒たちだね、慌てず騒がず冷静に避難してくれて私たちの仕事もスムーズに進んで大助かりだよ。」

「そうだね、エビィーさんは近年はギルド内では内勤が多かったからこういう外勤は久しぶりだよね。」

「そう言うシン君もほとんど内勤が多かったじゃない。」

「・・・あれはエビィーさんの仕事を手伝わされてたから必然的に内勤が多くなっただけだとおもうんだけど・・・・」

「あっ・・・・そうだっけ!?よく覚えてないな～あはっあははは・・・・」

「・・・・・」

二人が会話をしながら生徒達の避難を誘導していると突如前方の地面が盛り上がりその中からイビルジョーが現れた。

「シン君、覚悟は良いか？私はできてる。」

「俺も何時でも出来てるさ。」

「そう・・・イビルジョーをさっさと片づけるよ！！ほら早く行った行った。」

そう言うとエビィーは背負っていたネブラコルスを手に持ち旋律(せんりつ)を奏(かな)で始めた。

「はいはい。」

一方シンは背負っていた槍を手に持ちイビルジョーに向け進んでゆくエビィーの奏でる狩猟笛の勇猛(ゆうもう)な音を聞き体の底から力が溢れだす。

「（まずは相手の懐に入る！）」

シンはそう思うと真舞雷槍【鴆】を前方に掲げ突進の態勢に入りイビルジョー目掛けて弾丸の如く突進していく、イビルジョーはそのシンの姿を捉えると大きく肉厚な尻尾をシン目掛けて振り回すがシン咄嗟(とっさ)にイビルジョーの振り回した尻尾を盾でガードし再びイビルジョーの懐に駆けてゆく。

「（そしてこいつの軸足となってる足の腱(けん)を切るとするか。）」

シンはそう思うとイビルジョーの軸足となっている左足の腱目掛けて力強く槍を突き刺してゆく槍を突き刺した矛先からは稲妻が走り足元周辺を明るく照らす。しかし相手もシンの考えに気付いたのか左足を大きく振り上げシンを踏みつけようとする。

「そい！！」

イビルジョーの顔付近からエビィーの掛け声と共に狩猟笛がイビルジョーの顔に当たりその衝撃がイビルジョーの脳を揺さぶりシンに向けて踏み下ろした足はシンの居る場所とは違うところへと踏み下ろされる。

「まだまだ～！！」

その掛け声と共にエビィーは一心不乱にイビルジョーの顔目掛けて狩猟笛を当ててゆく、左右に揺さぶられるイビルジョーの脳は段々と並行感覚を失ってゆき、シンはその間ひたすらにイビルジョーの軸足となる左足の腱目掛け槍を突き刺して行きイビルジョーの足元辺りが稲妻（いなずま）によってさらに明るく照らされる。

「（スタン蓄積値的（ちくせきちてき）に考えるとそろそろか・・・・）」

「シン君！！！」

「わかった。」

エビィーがシンに合図を出すとシンはイビルジョーの懐から離れ距離を取った。一方エビィーはイビルジョーの顔の左右に当てていた狩猟笛を頭上（ずじょう）高らかに振り上げそれをイビルジョーの頭上目掛け一気に振り下ろした。振り下ろしたと同時にイビルジョーの脳天は大

きく揺さぶられ態勢を崩し大地に身を投げもがき始めた。

「お前ごときにスタンを取ると言うのはそうムズかしい事じゃあなかったな。」

「そんな事言ってる間にエビィーさん、旋律維持よろしく。」

「分ってるって！」

イビルジョーがもがき苦しんでいる間シンは再びイビルジョーの軸足となっている左足腱を切断する為にイビルジョーに槍の矛先を向け突進してゆきエビィーはまた狩猟笛を手に携え旋律を奏でてゆく、その旋律は先ほどよりさらに力強くシンとエビィーの力はさらに高まって行く。

「ふん！！！」

シンの渾身の突きがイビルジョーの左足腱を切り裂きとうとうイビルジョーはまともに姿勢を制御できない状態へと陥った。激しい激痛に伴い怒りの咆哮を上げ背の筋肉を盛り上げるイビルジョー、しかし起き上がれた物の左足の腱が切断されてしまっているせいか上手く歩けず再び大地に身を転がす。足の自由を失うと言う事それは自然界において劣勢に回る事に等しい、いくら強靭な筋肉や鋭利な牙を持っていたとしても獲物追う為の足の自由を失うと言う事は自然界において死も同然である。今自然界の頂点に座す者の土壌が崩れ去った、彼は只の餌となり下がってしまったのだ。

「これでこいつは足は失った・・・・エビィーさん行こう。もうこいつに脅威を感じる事はない。」

「そうだね、早く生徒達を避難させよう。」

エビィーとシンは大地に身を転がすイビルジョーをしり目にハンタースクールの生徒達の避難の誘導へと戻った。あらかたの生徒と教官の避難を済ませハンタースクールに戻ると先ほどまで大地に身を転がしていたイビルジョーの姿はもうなかった。

「あれ？おかしいな・・・・アイツさっきまでここでもがいてたよねエビィーさん？」

「うーん、穴でも掘って逃げたんじゃない？ほらあそこ。」

エビィーが指を指した先には先ほどイビルジョーが現れた際にあいた大きな穴とは別の穴が出来上がっていた。

「ほんとだ・・・・」

「あの状態で穴掘って逃げれるなんてやっぱり恐ろしいねイビルジョーは・・・・」

「そうだね・・・・」

エビィーとシンはイビルジョーの掘った別の大きな穴を見ているとハンタースクール敷地内から突如イビルジョーの咆哮（ほうこう）が響き渡った。

「誰か！！助けてくれー！！！」

「そんな敷地内（しきちない）の生徒は全員避難させた筈なのに何故人が・・・・」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！！シン君！！」

「あっ・・・・あぁ！！」

敷地内響いた助けを求める男の声を頼りにシンとエビィーは敷地内を駆けて行った。二人はハンタースクールの校庭に位置するところに付くと中年の男性がイビルジョーを見て腰を抜かし這いつくばりながらイビルジョーから逃げている姿が有った。イビルジョー自身も左足の腱を切られてまともに歩行できない状態であっても尚満たされない食欲を満たす為に男性に向かって大きく口を開けじりじりと迫っていた。その姿はまだ捕食者の頂点に君臨する者としてのプライドで動いているようにも見えた。たとえ歩くのが不自由になったとしてもなんとか餌にありつき生き延びてやる、たとえその餌が泥水であっても、死肉であっても生き抜いてやると言う自然界の生物の本性を二人は見た瞬間でもあった。

「・・・行くよシン君！！」

「あぁ！！」

二人は命の危機に晒されている男性の元へと駆けだした人々をモンスターから守るモンスターハンターとして、しかし男性の元にもう一つ向かう影が現れたそれは二人よりも早くイビルジョーの懐に入りスライディングをしながら手に持ったライトボウガンをイビルジョー頭上へ向け貫通弾を放った、貫通弾は見事イビルジョーの脳天を貫通しイビルジョーは満たされない食欲から解放され大地に身を投げ出し絶命した。

「ユーノ！！帰って来てたの？」

「うん、ついさっき帰って来たところだよエビィーさん。シンさん

もお久しぶりです。」

「あぁ久しぶりだなユーノ、前回の定例会議ぶりかな？」

「そうですね・・・・そちらの男性はハンタースクールの職員の方ですか？」

ユーノはそう言うと先ほどイビルジョーに襲われていた男性に向き直った、男性の恰好はメゼポルタに住む民間人達が一般的に着用している衣服を身に纏っていた。

「あっ・・・・いえ私はスクールの職員ではないです。」

「では何故敷地内に？敷地内は関係者以外の立ち入りは禁止されているはずです。」

「その・・・・ハンタースクール内に入れば教官やハンター候補生の方々が居て安全だと思って・・・・すいません。」

「まぁまぁユーノちゃん今は非常事態なんだし別に良いじゃないのそれ位の事。この人は多分民間人の避難勧告に出遅れてハンタースクール内に入って来たんだよきっと。」

「まぁそうですね。今は非常事態ですからね・・・・」

ユーノ達がその場に立ち尽くしていると突如上空に蒼い物体が空へと駆けて行った。

「あれは、イレスデウス！！！」

ユーノはそう言うとイレスデウスの飛んで行った方角へと駆け出した。

「あっ!!!ちょっとユーノ!!!どこに行くの!?」

ユーノはエビィー問いかけに答えることなくイレスデウスの飛んで行った方角へと走って行った。

「まったく・・・・」

「まぁ良いじゃないエビィーさん、それよりもこの人を早く避難区へ誘導しなくちゃ。」

「そうね・・・それじゃあ私達の後に付いて来てください避難区へと向かいますので。」

エビィーはそう言うとシンと共に避難区へと歩き出したが男性は歩き出そうとはしなかった。

「どうかされましたか?」

「いや、あの蒼い奴が向かった方角には一体何があるのか少し興味がわいて・・・すいません。」

「あぁ、あの方角の先にあるのは多分求人区の郊外の広場かな?多分そうだよねシン君?」

「えっ、うーん多分そうだと思うよ。」

「そうですか・・・すいませんわざわざ教えてもらって。」

「いえいえ、さぁ早く避難区へ行きましょう。私達の後に付いて来てください」

エビィーがそう言い避難区へ向け歩き出すと突如男はエビィーの背負っていた狩猟笛を奪い取り、エビィーの頭上目掛けて狩猟笛を振りかざした。

「ギャッ!!」

「エビィーさん!!!貴様一体なんのつもりだ!!!」

「いや～すいません。」

男はそう言うと目にも止まらぬ速度で狩猟笛をシンの顎目掛けて振り上げた、男の振り上げた狩猟笛はシンの顎に当たりシンの体は浮き上がった所を男はシンの顔を掴みそのまま地面へと叩きつけた。

「ガハッ!!!貴・・・貴様・・・・何・・者・・・・・・」

「いや～ほんとすいません。」

「ほんと・・・・すいませんねぇ!!!!!ギャハハハ!!!!!わざわざアイツの行き先までも教えてもらって!!!!!ヒャハハハ!!!!!」

男は笑いながらイレスデウスの飛んで行った方角へと歩き出した。
笑いながら歩く男の姿はまさに狂喜に取りつかれ理性を失っているようにも見えた。

60節　Ｔｒａｐ（後書き）

答えは

真舞雷槍【鴆】＝しんぶらいそう【ちん】

でした。

鴆（ちん）っていうのは中国の古文書に出てくる鳥で大きさは鷲（わし）位で猛毒（もうどく）を持った鳥として紹介されています。一応実在した鳥らしいです、もし現代に鴆（ちん）が生きてたらと思うと怖いですね。

61節　哀しみの夜空（前書き）

昨日位から文章内の漢字に振り仮名をつけることのできる機能を知りました。

61節　哀しみの夜空

メゼポルタ　求人区　郊外

『ここに来るのも久しぶりだな。』

日が暮れ辺りが暗闇に染まりつつある頃メゼポルタの郊外に位置する広場で蒼い竜が佇んでいた、広場には人の気配は無い。

【ねぇ、ほんとにやるの～？】

『当初の予定とは違う出来事が起こったが、問題はすべて取り去った。計画を行う際の支障はもうない。』

【はぁ・・・不毛だと思うけどな～君の計画なんて。】

『そんな筈はない、これは俺が新人類達に与える最初の試練でもあり崇高（すうこう）な計画だ。人類が俺達の様な危険な存在を受け入れる事が出来るのか、それとも受け入れる事が出来ないのか。』

【じゃあ聞くけどさ、君のそのす・・・プッ・・・ククク・・・・】

『なにがおかしい？』

【崇高だなんて・・・・なにカッコいい言葉つかってるんだと・・・・プッ！あははは！！！！】

『・・・・』

【あッ・・・怒った?ごめんごめん。後で飴上げるから機嫌直してよ～。】

『俺はガキじゃない、もう大人だ。』

【ふーん、じゃ大人な君に聞くけどなんであの二人を選んだ訳さ?それに君が言う計画を実行する為なら別に人間一人でも良いじゃない。】

『それは、あの二人は人間の時の俺の事をよく知る者達だからだ。それに人類只一人にこの選択を押しつけるのはかわいそうだろ?』

【あっ!今かわいそうって言った。人間に対してまだそんな感情を持ってる時点でこんな計画は失策だと思うよ。】

『・・・・・』

【それに人選も失敗してると思うけどな～私だったら君に無関係な人を二人を選ぶけど。ホントは君の考えはもう】

『人が来た、もう議論は終わりだ。』

【あっ!!ちょっ】

遠くから人が駆けてくる足音が聞こえる、人ならざる物を狩る事を生業とし人々を異形の者から守るモンスターハンターの足跡が。

メゼポルタ　求人区　郊外

ユーノはイレスデウスの向かった方角を目指し求人区内を走っていた。日は暮れ辺りはもう暗闇に染まりつつある。普段の求人区は夕刻になると暗くなった辺りを照らす為広場全体に明かりを灯すが今は非常事態、そしてましてや求人区の郊外に位置するこの場所に明かり等が照らされる事は無かった。

「確か・・・・こっちの方向に・・・・・」

ユーノは辺りを見回しながらモンスターがどこに居るかを探すと郊外の奥の方で仄かに蒼く光っている所が目に飛び込んできた。

「あそこは・・・・・」

ユーノの頭の中に過るジュノとの思い出、あの場所はジュノに双剣の稽古をよくつけてもらっていた場所だ。彼との思い出がどんどんと蘇る中ユーノはその思い出を払拭(ふっしょく)しながら彼の・・・・モンスターの居る場所へと歩いて行った。求人区の郊外の広場にモンスターは佇んでいた辺りはモンスターが発した炎によって明るく照らされている。

「・・・・」

ユーノはライトボウガンを手に取りアイリスからもらった赤く染まった通常弾をアイテムポーチから取りだしボウガンに装填すると広場に向かう為の階段を一歩ずつ降りて行った。階段を下り終わると広場に佇むモンスターにゆっくりと近づいて行った。その間モンスターはユーノの事を見てはいたが襲いかかってくる事は無かった、ユーノはモンスターとの距離を一定に詰めるとモンスターにライトボウガンの銃口を向けた。

「・・・・・・・・・」

後は銃弾をモンスターに向け発射するだけだった、でも銃弾は発射する事が出来なかった。自分の意思とは違う他の意思がそれを邪魔したからだ。

「・・・・なんで邪魔するんですか？」

「・・・・・」

「放してくださいよ、ナターシャさん・・・・モンスターを討伐できないじゃないですか。」

「あなたは目の前の人間に銃を向けるの？」

「人間？どこに居るんですか人間なんて？私の目の前に居るのはモンスターですよ、モンスターを討伐するのが私達モンスターハンターの仕事ですよ。」

「モンスターなんてどこにも居ないわ、あなたの目の前に居るのは人よ。」

「何を変な事言ってるんですか・・・そうか、ナターシャさんは疲れてるんですね。じゃあ黙ってそこで見ててくださいよ、このモンスターは私が討伐しますから。」

ユーノはそう言うとナターシャを振り払い再びモンスターに対して銃口を向けた、しかしまた邪魔をされた。また自分とは別の意思によって。

「退いてくださいよナターシャさん、この状態だとナターシャさんまで打ち抜いちゃいますよ。」

「・・・・・」

「なんで、退かないんですか?撃てないじゃないですか、退いてくださいよ。」

ナターシャはユーノの言葉に耳を貸さずそこから退こうとしなかった、彼女は黙って両手を広げユーノの前に立ちふさがった。

「退いてください。」

「・・・・・」

「退いて!」

「・・・・・」

「退けっつってるだろ!!!!!」

「退かないわ。あんたは人間を殺そうとしてるから。」

「はぁ?このモンスターが人間?何を言ってるんですか!?」

「あなただって気づいてるんでしょ?イレスデウスがジュノがまだ人間の心を持っている事に・・・・」

「クッ・・・・」

ユーノはナターシャの言葉を聞くと後ずさり、ナターシャに食ってかかった。

「モンスターを狩るのが私たちの仕事です。だから私はイレスデウスを狩る!!　このモンスターが世界を脅かす存在になるのならなおさらです!!!」

ナターシャはユーノの言葉に一切怯むことなく反論しだした。

「人の心が有ればどんな形姿をしてもこいつは人間よ!!それでも貴女は殺すの!?こいつを!?」

「人の心が残っている今の状態だからこそ、人のままで死なせてあげたいんです!!!　そして私は人を殺したと言う罪を背負って生きていく!!!私はそうした覚悟の上でジュノさんに銃を向けてるんです!!!」

「そんな覚悟は自己犠牲にすぎないわ!!」

「じゃあ!!どうしたらいいんですか!?もう私は・・・何をどうすれば良いのか分らない・・・分らないよ・・・」

そう言うとユーノはジュノに銃口を向けていたライトボウガンを手放し地面にへたり込んでしまった、ユーノの顔は下を向き広場にはユーノの泣く声が広場に響き渡った。ナターシャはユーノのその姿を見るとイレスデウスの方に振り返った。

「あんた・・・私達より年下の女の子を泣かせるなんて、何時からこんなひどい事する男になったのかしら?謝りなさい!!今すぐユーノに!!!」

そう言うとナターシャはイレスデウスに向かって行きイレスデウスの足に向かって蹴りを放った、当然イレスデウスに取ってそんな人間の蹴りなど無意味だがナターシャは蹴るのを止めなかった。

「謝りなさいよ、早く!!!」

???

『（・・・・・）』

【プッ・・・彼女のこの行動も君に取っては計算済みな行動なわけ?ククク・・・・】

『（これは予定外の行動だ・・・・）』

【あっははは!!!ホント人間は面白いなぁ〜】

イレスデウス内ではジュノの意思とは別にジュノの中にある神獣の意思である少女がこの光景を見て笑い転げていた。

『（そんなに面白いか?この光景が?）』

【この光景も面白いけど・・・プッ・・・ククク・・・・今の君の姿はもっと可笑しい!!!あっははは!!!】

少女はジュノ姿を見るとさらに足をバタつかせながら笑い転げた。

『（俺のどこがおかしいんだ?）』

【だって、似合いもせずに真剣に考え込んじゃって。考えて思いついた結果がこれでしょそれであの女の子泣かせて幼馴染に謝れって言われて茫然としてるなんて・・・・ククッ・・・・幼稚すぎてもうお腹が捩れそうだよ。アヒャヒャヒャ！！！】

『（・・・・・）』

少女が横で笑い転げているのしり目に見ながらジュノは二人をじっと見つめていた。

『（一時は誰も化け物と呼ばなくなるなら全てを消そうとまで考えた時期があった・・・・）』

ジュノは足元に目をやるとナターシャはまだイレスデウスの足を蹴っていたイレスデウスの視線に気づくとナターシャはイレスデウスの顔を見た。

「いつまで黙ってるのよあんた！さっさと謝りなさい！！」

『（でもこいつらを見てると・・・・）』

ジュノは横で両膝をついて胸に手を当てながら呼吸を整えている少女に向き直り喋りかけた。

『（教えてくれ、お前はなんでそんな風に人間らしいんだ？元は神獣なのだろう？）』

少女はジュノの質問を聞くとゆっくりと立ち上がりジュノの質問に答え始めた。

【あたしも昔は君と同じだった、でも・・・・私みたいな存在でも普通に接してくれる人が居たからあたしは人と繋がり人の心って言うのを得る事が出来た。こんなあたしでも人と繋がることができると感じられた。君にも居るでしょそんな人?】

『（いるのか・・・・俺の周りにそんな奴は・・・・）』

【気づいていないだけだよ。】

『（・・・・・）』

【もう出て行きなよ、自分の作った塀から。そしてもっと知ろうとしなよ。今の君は自分で決める問題を相手に投げて逃げてるだけだよ。】

『（わかってる・・・・わかってるさそんな事、ただ知ることが怖すぎて自分が何なのか分らなくて・・・・）』

【受け入れなさい、周りをすべてをあなた自身を・・・・勇気を持って、ね?】

『（勇気を持って受け入れる・・・・でもどうしたらいいんだ?）』

【大丈夫だよ、君にはあたしがついてるから。無くした思いを取り戻すために一緒に行こう!】

『（わかった。）』

メゼポルタ　求人区　郊外

「痛たた・・・あなたのせいで私の綺麗な足に痣ができそうじゃないの！！！痣ができたら責任取ってもらうわよ！！！」

ナターシャはそう言うと今度は手を握り拳をイレスデウスの足へと放った。

「硬！！馬鹿みたいに硬いわね～・・・・・」

「ナターシャさん・・・・もう止めてください、私もう泣き止みましたから・・・・」

「いいえ、止めないわ！！あなたの気が済んでも私の気がまだ済まないわ！！！」

ユーノはナターシャを止めるべくイレスデウスの足を叩いているナターシャの元に向かうとナターシャを羽交い絞めした。

「もう大丈夫ですから！！もう良いですよナターシャさん！！」

「いいえ！まだまだ止めないわ！！　女の子を泣かせたなんて最低よ！！この男は！！」

羽交い絞めされたナターシャが再びイレスデウスの元に向かわないようにユーノがナターシャを押さえつけていると。後方からライトボウガンの銃声が広場に響き渡った。

「ギャハハハ！！！まったくそこの銀髪の姉ちゃんの言う通り馬鹿

で最低な男だね～！！！こいつは！！！ギャハハハ！！！」

男はユーノの所持していたライトボウガンを手に取りイレスデウスに向け発砲していた。イレスデウスを殺す唯一の手段であるプログラム細胞死を強制的に起こさせる作用を施した弾丸を。

「あなたはさっきの・・・・何をしてるんですか！？」

「俺よりそっちの男の心配をした方がいいんじゃないの～お嬢ちゃん？ギャハハハ！！！」

ユーノとナターシャは男の指さした方向を見るとそこには膝をつき喉元を抑えもがき苦しむイレスデウスの姿が有った、イレスデウスの体表は徐々に爛れ最後は片手を夜空に上げながら苦痛に咆哮を上げ動かなくなった。ナターシャはすぐさま男の居た方を向き直ると既に男はその場にはいなかった。

「そんな・・・・いやだ・・・・・いやぁぁぁ！！！！！！！」

ユーノの慟哭（どうこく）が暗闇に染まった夜に響き渡った。

61節　哀しみの夜空（後書き）

また土曜日くらいに本編更新しまーす。

登場人物紹介４　その他（前書き）

尺稼ぎその４でございます。

登場人物紹介４　その他

オリジナルキャラ

アイザック
２０代半ば
古生物書士隊兼ハンターの青年。ノレッジの後輩としてユーノ達と共にオオナズチの狩猟に同行した。片手剣の技術はハンター基準で言うと人並みである。

名前の元ネタはアイザック・ニュートンからそのまま拝借。

グラシェ
年齢　見た目年齢は２０代。
竜人族の中でも希少民族として有名な唄をうたう事にその身と生活のすべてを捧げ、唄と共に生きるカントの民の竜人族の女性。オオナズチの襲撃に会いせっかく手に入れた再誕の唄の楽譜を取られてしまった。現在はメゼポルタの病院内で生活している。

名前の元ネタは無い、ただ何となく頭にグラシェと浮かんだのです。
ちなみにカントの民のカントは音楽用語で歌うと言う意味から取ってきました。

モンハンの設定内で存在する人物

ギュスターヴ・ロン（古生物書士隊　書記官&歴史学者）
書物による情報収集を行う国内外随一の博識、彼を見習ってか近年部屋に引きこもって机上のみで議論を重ねる書士が増えているらしい。更に、近年ハンターの増加によって彼の部屋にはモンスターの

素材が頻繁に届いている。

ダレン・ディーノ（書士）
古龍について幅広い知識を持つ書士隊員兼ハンター。
古龍観測所に納められているクシャルダオラやテオ・テスカトル、
ヤマツカミの報告書を書いた。
黒龍伝説についても積極的な研究を行っている。

サー・ベイヌ（書士）
爵位を持つ書士隊員。絵画を得意としており、自らの目で見た物は
極めて正確に描く。
また、様々な文献や伝承からモンスターの姿を想像して描く事もあ
り、その絵も高く評価されている。
古龍観測所に納められているラオシャンロンやラージャンの絵は彼
が書いた物。
ラージャンの絵は想像で描いたと言うが、特徴はほぼ完ぺきに捕ら
えられている。

ノレッジ・フォール（書士隊見習い）
多くの先輩や先生から将来を期待されている書士隊見習いの女性。
オオナズチに縁がある。
うっかりオオナズチの皮膚のサンプルの上にフルフルの電気袋を落
としてしまい、
その結果オオナズチの皮膚が電気によって変色する事を発見した。
また、オオナズチの疲労ブレスの仕組みが解明できたのも、
彼女がブレスの毒液を偶然小ビンで回収して来たためである。

引用先　モンハン大辞典ｗｉｋｉ

オリジナルモンスター

イレスデウス
　骨格はラージャンを二足歩行に対応した感じ顔の形は竜で尻尾の竜その物。蒼い火を使いこなし肉弾戦も遠距離戦も得意。正体はジュノである。
今の話の進み具合だとこのモンスター情報はこれ位。

名前の元ネタ　アイヌ神話に登場する火の祖母神カムイフチの別称のイレスカムイとラテン語の神を表すＤｅｕｓ（デウス）をくっつけただけです。要するにカッコよく火の神って言ってみただけってことさ！！

謎の声
ジュノの頭の中で響いていた音みたいな声の主。この話では少ない重要な少女域である。

用語説明
ＰＣＤプログラム細胞死
多細胞生物（人間とか）の中にある要らない細胞の計画的自殺。自殺と言っても利益のある自殺で植物や原生生物が変な病気にからないようにする為に働く。プログラム細胞死は３つの種類があって全部説明するとめんどくさいから作品内の描写で使われたプログラム細胞死の例だけ紹介。その一つが簡単に言うとアポトーシス（壊死（えし））によるもの。この作品では過度に細胞死を起こす為として使っています。イレスデウスはゾンビみたいになって活動を停止してしまったのだ。

想定科学域
神経ペプチドがジュノの意識うんぬん
これは細胞意識説と言う医学界で議論のネタになっている仮説。若干宗教じみた仮説だな～と思うけど細胞意識説関係の本を読んでい

ると、納得できる証明もあるので結構面白い。

この章で登場した人物や用語の詳しい説明はたぶんこれで大丈夫なはず！！たぶん・・・・

登場人物紹介４　その他（後書き）

もう少しだけユーノちゃんの冒険は続くのじゃ、では土曜日に会いましょう。

登場人物その他４　追記（前書き）

補足である。

登場人物その他４　追記

用語説明

オードポイント　ｏｄｄ　ｐｏｉｎｔ
英語で帰天という意味、なんかかっけえ言葉使いてぇな～と思い考えた末に思いついたのが帰天クリスチャン的に言うと死ぬって意味である。この作品ではアンサラーが神獣になる事を指しています。でものちに調べたこの　ｏｄｄ　ｐｏｉｎｔ　って意味は実は奇点という意味でもある。まあ翻訳サイトによって英訳なんていろんな訳を言ってくるからまぁいっか！めっちゃ厨二病全開である！

おまけ用語説明

厨二病
よく人の子供の第二次成長期に一部の子供がかかる病、妄想力が高い子がかかったりする。これにかかると主に魔法の詠唱や闇に属するものを好むようになる。症状が酷いと筆者のように２０代位まで病が続く不治の病で現代医学ではこの病に効く特効薬等は無く恐ろしい病気である（ある意味）。感染源は多々あり主にＪＲＰＧ（ジャパンアールピージー）のテイ○ズシリーズやＦ○等が挙げられると思われる。この病にかかったまま年齢を重ねると高二病や大二病と呼ばれる事もあるようだ。あまりに症状が酷いと周囲から隔離（孤立）する。
※本当の医学的病では無くネットスラング（某掲示板とかでよくつかわれるアレ）である。

【一例】
我は闇より出でし魔剣士ルシファー、愚民共よひれ伏すがいい！！！

クッ！！！右腕が疼く！！！！！

禁断魔法！！！！！エターナルフォースブリーザード！！！！！（相手は死ぬ）

漆黒の闇より出でよ！我が眷属〇〇〇〇！！

〇の所は貴方のカッコいいと思う名前を入れよう？

おわり（　＾ω＾）

62節　慟哭の果てに（前書き）

数年前に秋葉原に行った時にはガンダム喫茶と言うものが秋葉原の駅の近くに出来てましたがこの前秋葉原に行ったらそのガンダム喫茶の横にＡＫＢ喫茶っていうのが出来てました。いやぁ驚いた。

62節　慟哭の果てに

メゼポルタ　ユーノマイハウス

外の雑踏と部屋に差し込む光が鬱陶しい、まるで自分の意に反してあれよこれよ嫌な物を突き付けられている様だ。ユーノはそう思うとシーツを頭から被り目を瞑り手で耳を覆った、外の世界から自分と言う存在を隔離する為に。

「・・・ご主人様仕事は行かないのかニャ？」

「行かない・・・・」

「でも、もう二日も仕事に行ってないニャ。そろそろギルドから呼び出しが・・・・」

「うるさい！！！あっち行って！！！」

普段ユーノに怒鳴られた事の無いふーちゃんは突然ユーノに怒鳴られたのがショックだったのか首を下に向けてしまった。

「・・・あの朝食作ったのでここに置いて置きますニャ・・・・」

「・・・・・」

フーちゃんはユーノにそう言うと厨房の方へと歩いて行った。ユーノはシーツの中で丸くなり目を瞑り耳も塞いでいたが胸元に何かがつっかえたので目を開けるとそこにはジュノから預かっているお守りがあった。

「（あの人はもういない・・・・完全に居なくなってしまったんだ・・・・）」

ユーノはそう思うと再び目を瞑り耳を塞いでベットのシーツの中で丸くなった。

メゼポルタ　求人区　郊外

郊外では古生物書士隊の隊員達が活動を停止したイレスデウスの調査をしていた。

「凄いですね・・・・これ。」

「そうだな、近くで見るとなおさら恐ろしいな・・・・」

表皮（ひょうひ）が爛（ただ）れ硬直しているイレスデウスを眺める二人の男女、一人は片手剣を装備している男性ともう一人は眼鏡をかけ白衣と身にまといメモを書いている女性だその二人の元に片手剣を装備しメモを抱えている男性ハンターが歩いてきた。

「どうだ？イレスデウスの素材のはぎ取りは出来たかアイザック？」

「ダレン隊長！！御苦労様です！！素材の件なのですが・・・・」

アイザックそう言うとモンスターの素材のはぎ取りに使うはぎ取り用のナイフをダレンに見せたアイザックのはぎ取り用のナイフは刃こぼれを起こしているほか刃の先端から中間部分までひび割れそのまま折れていた。

「普通のはぎ取り用のナイフではイレスデウスの素材は愚か表皮も傷一つ付ける事はできませんでした。」

「普通のはぎ取りナイフじゃはぎ取れないとなると普通の剥ぎナイフに要いられる素材よりもより鋭利で強固な物が必要となるとカブレライト鉱石を要いたナイフなら・・・・・」

眼鏡をかけた女性はそう発言するとその提案はすぐにダレンによって否定された。

「ノレッジ、おそらくカブレライトでもこのイレスデウスの表皮すら傷つける事は出来ないだろう。古龍汎用素材(こりゅうはんようそざい)を使ったナイフなら可能かもしれんが・・・・」

「古龍汎用素材を無償で提供してくれそうなハンターなんて今のこのメゼポルタには居ないですよ。」

「昔は居たんだが今はもう行方知らずだからなあいつは・・・・」

「せめてこのイレスデウスをここまでの状態に追いやった原因が分かれば良いんですが・・・・」

「そうだな、まずはその調査から始めるとするか。イレスデウスをここまでの状態に追いやった物質が何か分かればイレスデウスの素材をはぎ取り生態調査が進む。アイザック、ノレッジ後は任せたぞ。私はロンにこの事を伝えてくる。」

ダレンは二人にそう言うとイレスデウスが居る郊外の広場を後にし古生物書士隊本部へと向かった。残された二人はダレンに言われた

事を調査すべく爛れたイレスデウスの方へと歩き出した。

メゼポルタ　ギルドナイト　大老殿

大老殿ではレジェンドラスタのナターシャそして大長老とその補佐を務めている竜人族の男性の3人だけが居た。

「一以上で報告は終わりになります。大長老、ノルン島での調査記録は先日ユーノ隊員が提出した報告書に記されております。」

「うむ、わざわざ多忙な中、召集に応じてくれて御苦労じゃった。引き続き業務に当たるように。」

「かしこまりました。」

ナターシャはそう言うと大老殿を後にしようとしたその時大長老に呼び止められた。

「ところでナターシャ聞きたい事がある。」

「何のご用でしょうか?」

「うむ、もし我々に似た存在がこの世界に現れたとしよう。それは知性を持ち一見我々と同じだが内に秘めたる力は遥かに強大な者である、おぬしはそのような存在と我々竜人族と人々が共に暮らせると思うか?」

大長老の急な質問にナターシャはすぐに答えを返した。

「その存在が人の心を持っているのなら問題は無いとおもいます。最初はかつて私達人と竜人族の間であった固執(こしつ)が生まれるかもしれませんがそれも時間と共になくなって行くと私は思っています。」

「そうか・・・すまんの急に変な質問を投げて。」

「いえ、では私はこれで。」

そう言うとナターシャは大老殿からメゼポルタの街へと降りて行った。ナターシャが大老殿から出て行くと竜人族の男性が大長老へさっきの質問について問いかけた。、

「大長老、なぜあのような質問をあの者に?」

「フォフォ、なーに気まぐれじゃよ。」

「気まぐれであのような質問をされては困ります、それに何故ノルン島での調査記録について問い詰めなかったのですか?」

「問い詰めるも何もあの者が見た内容は事実じゃろう。何もなかったんじゃよ奴に関しての情報は。」

「しかし観測気球の報告によればイレスデウスはノルン島の方角から飛来したとの報告が有りますが。」

「そうか。」

「そうか・・・ではありません!彼女の調査記録には何もなかったと記されていますが、その様な筈は無いはずです。あそこは彼が封印されていた場所でもあるんですよ!それに彼女は再三行ってい

る召集命令を無視し続けています。」

「この数日間で様々な事が彼女達の間で起こったのだから疲れているんじゃろう。」

「気づいているのなら何故問い詰めないのですか？彼女達が知っている情報はもしかしたらこの世界に対しての有益な情報かもしれないのに。」

「確かに有益な情報が含まれているかもしれぬのう、じゃが彼女達を見る限りあまり良い話ではなさそうじゃな。ユーノ隊員が召集に応じない時点で分るじゃろ？恐らくわしらが知っている同じ情報を知ったにすぎぬじゃろう。」

「だからこそ危険性があるのです。もしあの情報がこのメゼポルタに知れ渡ったら・・・その前に彼女達に召集をかけ問いただすべきです。」

「そうかのう？あのような現実離れした情報が漏れたとしても誰も信じぬじゃろうて、それにその場に居ない者の議論をしても仕方がないじゃろう。それよりも補佐官先日のイビルジョーとやらの事で何か分った事は？」

「いえ・・・特に情報の進展は無いですが。不可解な情報が一つあります。」

「ふむ、申してみよ。」

「先日の襲撃の際に現職のギルドナイト二名が一般市民を装った男によって傷を負ったとの情報が。」

「うむ、その男の特徴は？」

「なんでも笑い声がうるさく笑いながらその場を去って行ったとの事です・・・・・」

「笑う男か・・・・」

大長老はその情報を補佐官から聞くと髭をいじりながら何かを考えだした。

「大長老、何か心当たりが？」

「うむ、２年前の黒龍騒動の時に同じような男と相(あい)まみえた事があるのう。」

「黒龍騒動時ですか・・・・」

「あやつがまた動き出したのかも知れぬ。補佐官何時でも事が起こってもよい様に準備をしておくように。」

「かしこまりました。」

メゼポルタ　ユーノマイハウス

「入るぞ。」

その言葉とともにユーノのマイハウスにブロードが入って来た、顔は何時もより少し険しい顔をしている。

「ユーノ、お前大長老からの召集命令に応じてないそうじゃないか。大長老は寛大なお方だから、今からでも遅くは無い俺も一緒に行くから大長老の元へ行こう。」

「・・・・・」

「寝てるのか？」

「・・・・・」

ブロードはユーノが寝転がっているベットに向かいシーツをめくるとそこにはユーノが目を閉じ耳を塞いでいる姿が有った。

「・・・・・」

「いつまで寝てるんだ？いい加減起きろ！！」

ブロードのユーノを怒鳴りつけると腕を掴み耳を覆っている手を放そうとした、しかしユーノもそれを頑なに拒みブロードに対して抵抗する。

「ッ！！一体何なんだ！！ここ数カ月間のお前の行動を見てきたが可笑しいぞ！！何が有ったんだ！？」

「・・・・別に何もありませんよ。」

「なぁ、話してくれよ！一体どうしたんだよ？」

ブロードがユーノに訴えかけるもユーノは黙ったままだった、しば

らくの間続く沈黙ブロードは再びユーノに訴えかけようとしたが先にユーノがブロードに対し口を開いた。

「ブロードさんは・・・・」

「なんだ？」

「もしこの世界に人と同じように話し笑い考える事のできそして自分たちよりも遥かに強大な力を持った者が現れたらどうします？」

「何を言ってるんだお前？」

「・・・まぁそんな対応取りますよね。すいません今まで体の調子が悪かったので召集命令に応じる事ができませんでした。まだ調子がすぐれないので明日必ず命令に応じます。なのでせっかく来てもらって申し訳ないですが今日の所はもう帰ってもらえますか？」

ユーノの突然の態度の変化にブロードは驚いたがブロードはユーノ話した事情を聞くとすぐに返事を返した。

「そ・・・そうか、分った。今日はもう帰るが明日必ず大長老の元へ行けよ。」

「分りました。わざわざ来ていただいてすいません先輩。」

「あぁ、気にするな。それじゃあ今日はゆっくり休んで明日必ず大長老の所へ行くんだぞ。俺からも大長老に今のお前の状況を伝えておくから。」

そう言うとブロードはユーノマイハウスから出て行き大老殿の方へ

と向かって行った。

「・・・・優しい人ですね、ブロードさんは・・・・・・馬鹿みたいに・・・・・」

ユーノはそう呟くとまたベットに寝転がりシーツを頭からかぶり耳を塞ぎ目を閉じた、この世界から自分を切り離すように。

62節　慟哭の果てに（後書き）

ｉｐｈｏｎｅ４ｓってまだ品薄だそうですね。運よく当日機種変できた私は運が良かったのか・・・・

63節　消え行く火と灯る火（前書き）

いやー母ちゃんのｉｐｏｄ　ｔｏｕｃｈのｆａｃｅｔｉｍｅの設定をしてたら約二日もつぶれてしまった。しかもあれですよ結局ｆａｃｅｔｉｍｅの設定はうまくいかず不良品として工場へ戻される事となった。返して！僕の二日間返して！！　ｏｒｚ

63節　消え行く火と灯る火

共和国　リーヴェル　首都部（しゅとぶ）

東シュレイド地方最大の都市リーヴェルは共和国の首都であり　東シュレイド各地に点在する街との交易が盛んで、物とともに多くの人々が行き交う。険しい山岳（さんがく）に囲まれた盆地（ぼんち）に位置するこの一帯は冬が長く、非常に厳しい気候となっている。

首都部の一角にある建物の中の一室で赤い衣を纏った男は古文書を読んでいた古文書には人の形を模したような物やこの世界に巣くうモンスター達の様な挿絵（さしえ）が記されその横では一般人には解読不能な古代文がびっしりと敷き詰められている。古文書を読んでいると男の居る部屋のドアがノックされた。

「入りなさい。」

赤い衣の纏（まと）った男の入室許可が出ると部屋にはメゼポルタの庶民（しょみん）の服を着た男が部屋内に入室してきた。

「報告します、命令通りメゼポルタにイビルジョーを数体放った所、予想通り例の男がメゼポルタに現れました。」

「ふむ、それでどうでした、彼の初舞台は？」

「演出の甲斐（かい）があってか、初舞台にしては良い出来だったと。」

「そうですか、では次の段階に移るとしましょう。大陸に散らばったレギオン達に何時でも事が起こせるように伝えなさい。」

「はっ！」

赤い衣の男が庶民の服を身に纏った男と話し終えると庶民の服を身に纏った男は部屋の外へと出て行った。

「・・・・もうすぐ手に入る、私の望む力が。」

庶民の服を身に纏った男が建物内を歩いていると前方からこの世界の服とは思えない服を身に纏った女性が歩いて来た、女性は男性の目の前に立つと男性に向けて口を開いた。

「ゴート、奴を撃ったらしいな。」

「あぁ、お前の予想通りあの女のライトボウガンにはあいつを殺す為の弾薬が詰まってたぜ。」

「そうか。」

「この世界で唯一の仲間を失った気持ちはどうだよ！？セレインさんよ！！ギャハハハハ！！！！」

「早く仕事に戻れ。」

女性はそう言うと男性のとおって来た通路とは反対の方向へと歩いて行った。

「ケッ！！つまんねぇ・・・・」

そう言うとゴートは建物の外へと出る為通路を歩いて行った。セレ

インはゴートの通って来た通路の中程まで進むと歩むのを止め壁にもたれ掛かった。

「Ｊ－１０１・・・私を知っていた者はもう完全にこの世界から居なくなってしまったと言う訳か・・・・お前の答えを聞きたかったぞジュノ、お前がこの新人類に下した判定を・・・・」

そう言うとセレインは顔を上に上げ目を閉じしばらくの間壁にもたれかかっていた。

メゼポルタ　ギルドナイト本部

ユーノは大長老に数日前に起こったイビルジョー襲撃事件と求人区郊外で表皮が爛れたイレスデウス亡骸についての報告を大長老に行った。一番驚いた事はノルン島での調査記録に対しての言及がなかった事だ、何故この世界にモンスターが溢れかえっているのか。今までひた隠しにされていたジュノと言う存在に関わる重要な情報が眠っていたノルン島。今までギルドの態度ならその情報の開示を求める筈だ、なのに言及はされなかった。ユーノは不思議に思いながらギルドナイト本部歩いていた。

「あっ！！！ユーノー！！！」

思慮に耽っているとユーノの向かい側から女性ギルドナイト一名が手を振っていた。

「エビィーさん！体の具合は大丈夫なんですか？？」

「うん、私は頭強く打って気を失っただけだからね。」

「大事にならなくてよかったですね。もう勤務に出て大丈夫なんですか？あとシンさんの方は大丈夫なんですか？」

「あーシン君はね、鼻の骨折れたからもう少し病院生活するみたいよ。私の方は全然大丈夫、ほら主に私はユーノちゃんと違って内勤だし。」

二人は談笑を交わしながらギルドナイト本部内を歩いて行った。

ギルドナイト本部　事務室

「それより知ってるユーノ？」

「なんでしょう？」

「数日前にイビルジョーの出現と共に現れたイレスデウスの不思議な行動。」

「あまり知らないですね・・・・」

「何かねイビルジョーの討伐に当たっていたレジェンドラスタとイビルジョーに襲われかけた人達の証言なんだけどね、まぁ私達人に一切危害を加えなかったって言うのは通例の報告通り沢山入って来てるんだけど、でも一つ今までになかった報告が入って来てねなんでもイレスデウスがイビルジョーに襲われそうになった子供を庇ったらしいんだよね。」

「子供を庇った？」

「うん、イビルジョーが子供に向けて放ったブレスを子供に覆いかぶさるような形で庇って子供がそこから逃げたのを確認してからイビルジョーを骨一つ残さず焼き尽くしたんだってさ。一応まだすべての人の証言をまとめてないから分らないけど、同行してたレジェンドラスタと子供がそう証言してるから信憑性（しんぴょうせい）は高いと思うよ」

「・・・・不思議な生き物でしたね、イレスデウスって。」

「そうだね～、今はもう亡骸しか残ってないけど。もしかしたら私達モンスターハンターとは別の存在のモンスターハンターだったのかも知れないね。でも不可解な点が一個あるんだよね、ナターシャさんの証言によるとイレスデウスはユーノのライトボウガンの通常弾一発であの状態になったんでしょ。今までどんなハンターが武器で奴を攻撃しても傷一つ付かなかったのにユーノのライトボウガンを拾った謎の男がイレスデウスに向かって通常弾を撃ったらあの状態になった、不思議だよね。」

「・・・・・そうですね。」

「古生物書士隊の人達もイレスデウスに撃ちこまれたその弾の摘出になんとか成功した見たいだけど分析した結果、ギルドショップで売られている弾とまったく同じだったそうだよ。それで今度はユーノ持ってるライトボウガンに何か仕掛けかあるんじゃないかって書士達の間で噂が広まっているから、多分近いうちにイレスデウスがあんな風になった時にユーノのその時携帯してたライトボウガンを調べられると思う。」

「そうですか・・・・・」

「失礼します。」

ユーノとエビィーがイレスデウスについての会話をしていると事務室に一人の男が入って来た。

「・・・・アイザック君。」

「知り合い？」

「はい、前にオオナズチの討伐に向かった際に一緒に同行してくれた古生物書士隊の人です。」

「ははっ・・・・正確にはまだ見習いですけどね。それよりユーノさん古生物書士隊本部から文書を持ってきました。」

そう言うとアイザックは懐（ふところ）からユーノに文書を手渡した、文書の内容は先ほどエビィーが言っていた通り、あの時ユーノが携帯していたライトボウガンを提出する様との事だった。

「ライトボウガンの提出ですか・・・・」

「はい。応じてくれますか？」

「・・・・解りました。今丁度携帯しているのでこのまま持って行ってください。」

「よかった。ご協力感謝します。」

ユーノはアイザックにあの時携帯していたライトボウガンのバール＝ダオラをアイザックに手渡すとアイザックはユーノとエビィーに

会釈をして事務室から出て行った。

「意外とあっさり渡したね～。ユーノの事だから少し揉めるだろうと身構えて準備をしてたんだけど。」

「上からの命令ですから、それには従いますよ。」

「あれ？何時からそんなに受動的（じゅどうてき）になっちゃったの？だってユーノに取ってライトボウガンは主要武器でしょ？いくら上からの命令でも少しは揉めるでしょ？」

「まぁライトボウガンは私に取って主要武器ですけど、ライトボウガンしか使えないってわけじゃないですし、私にはまだ双剣が有りますから別にどうってことないです。」

「あっ！そうか、ユーノにはまだ双剣が有ったね。いやーなんか私はユーノって言ったらライトボウガン！！って印象が強いからさ。」

「ははっ・・・なんですかそれ？」

「ほら、ギルドナイトに入隊した時も主にライトボウガンしか使ってなかったし。ギルド内では精密射撃に関して結構定評が有ったんだよユーノは。」

「へぇ・・・初耳です。」

「そう言えば近年は双剣も結構使ってたし、別に業務に刺し違える事はなさそうでよかったよかった。」

そう言うとエビィーはユーノに対して笑顔を向けた、ユーノもそれ

に応えようと笑顔で返したつもりだったがエビィーから見てユーノは口元は笑っていたが目に光は灯っていなくエビィーから見たら少し不気味に見えた。

「・・・あっ！！そうだあれから求人区郊外には行った？」

「いえ、行ってませんけど。」

「そっか、今一応古生物書士隊の人達の調査が一時的に終わって安全性が確認されて今一般開放されてるんだってユーノも行ってみたら？」

「そうですね・・・それじゃあ行ってみることにします。」

ユーノはそう言うとエビィーの元から離れ事務室から出てゆきギルドナイト本部を出て、メゼポルタ求人区郊外へと足を運んだ。

メゼポルタ　求人区　郊外

普段人等ほとんど居ない郊外では今イレスデウスを一目見ようと沢山の人だかりができていた。人だかりの中にはまだハンター家業を初めて間もない者までも居た、一般ではある一定のハンターランクに達しないとこの求人区には低ランクのハンターは立ち入ることは許されてはいない筈だが人だかりの中に住民区に住む者達もいるので今回は特例で低ランクのハンターや非ハンターも立ち入ることが許可されているのだろう。

「（すごい人だかり・・・前の方へ行けるかな？）」

「あ！・・・ノちゃん！！！おー・・・・・」

ユーノが人だかりの外で茫然としていると人だかりの中からユーノを呼ぶ声が聞こえたようなしたがこの人だかりと雑踏の中ではその声の主を特定するのは難しかった。

「おー・・・・！こ・・・・！っち！！！」

「（なんか聞いた事がある声なんだけどな・・・・とりあえず声のする方向へ進んでみよう。）」

ユーノは人だかりを隙間を抜け声のする方向をへと行くとユーノに対して手を振っている女性がいた。その女性は服装からしてメゼポルタの庶民が着る服ではなく、主にキャラバンの民が来ている服を身に纏っていた。

「よっ！！！」

「あ、お久しぶりです。（どうしよう、誰だっけ・・・・）」

「ユーノちゃん。久しぶりだね一年ぶり位かな？」

「そうですね、少しの間メゼポルタから離れてましたから。（たしか、ジュノさんとの稽古の時にちょくちょく顔を見たような・・・・ネルシさん・・・だっけ？）」

ユーノがそう言うと見た事のある女性はイレスデウスの方へと顔を向けた。

「いやーでも凄いね～このイレスデウスってモンスター「ネリスも

絶対見てきた方がいいッス！！」ってオリオールさんが行ってたから見に来たけど、見て正解だったね。ユーノちゃんはギルドの仕事中に何度か見た事あるの？」

「はい、何度か遭遇した事はあります。ネリスさんは？（そうだネリスさんだ。）」

「私は見たことないけど、キャラバンの商船を操舵してた人達が何回かはイレスデウスが飛んでる所に遭遇してるね。その人が初めてこいつに出くわしたときはもう死んだ・・・・って思ったらしいよ。」

「あぁ、顔が竜でしかも歯むき出しで怖い顔してますからね・・・・」

「そうだよね～でも話を聞くばかりじゃ人には一切手を出さずにしかも子供まで守ったって噂じゃない。見かけによらず人には無害なモンスターと言うか有益なモンスターだったのかもしれないね。」

「そうですね。人の心をもった優しいモンスターだったのかも知れませんね。」

そう言うとネリスとユーノは活動を停止したイレスデウスの亡骸を見上げた、イレスデウスが伸ばしている手の先は丁度太陽と重なり影ができ、ユーノ立っている位置だけその影で辺りが少し暗くなっていた。

63節　消え行く火と灯る火（後書き）

やっと再登場できたね、ネリスちゃん。決して存在を忘れてた訳じゃないよ！！
それじゃあまた土曜日位に会いましょう～。

64節　Lunatic（前書き）

Lunatic（ルナティック）

いやーこの単語の意味は月に関連する意味なんだろうなーって見た感じ聞いた感じ思いますけど実は【狂気】って意味なんですよね。

64節　Lunatic

トルトロス樹海　キャンプ付近

日の光がまだ入る樹海の入口に位置する場所でユーノはかつてユーノのPT（パーティ）を組んでいたカノンとマルクと共にトルトロス樹海近辺に位置する村に被害を及ぼしていたエスピナスの狩猟に当たっていた。本来ならば狩猟の依頼が来たカノンとマルクの二人で狩猟を行う筈であったがエスピナスとの戦闘経験の浅い彼らを心配してか彼らの在住するポッケ村の村長が気を利かせてメゼポルタのギルドに応援を要請した結果ユーノが派遣される事となった。

「それにしてもユーノとは一年ぶりの再会だよね～」

「そうだね、カノンちゃん。」

「元気にしてたかユーノ？ギルドナイトの仕事の方はどうだ？やっぱり辛い？」

「そんなことないよマルク君、まぁ大半がメゼポルタの治安維持とかだから。モンスターの討伐に比べれば全然平気、さっ早く行こう。」

そうそうにかつての友人達との話を切り上げるとユーノはエスピナスの目撃された樹海の中心へと歩いて行った。

「ユーノなんだか顔がやつれてない？それに目もなんだか前あった時に比べて光が灯ってない気がする。」

「それはやっぱりジュノさんの件があるからじゃないか？」

「それもあるかも知れないけど・・・・でも前にメゼポルタに遊びに行ったときはあそこまで顔がやつれてなかったしそれに目もあんなに風には・・・・」

「二人ともなにしてるの？早く行こうよ。」

「あっごめん、アイテムの確認してた。今行くよユーノ」

二人は話を切り上げるとユーノの元へと走って行った。

トルトロス樹海　中心部　巨木内

エスピナス　別称　棘竜（いばらりゅう）

太古の昔から生息している樹海の主とされ、全身に堅い甲殻と紅く鋭い棘を持つ飛竜種。頭部にひときわ巨大な棘を持ち太古の樹海で古龍との生存競争に勝利した生物とされている。一度怒り出すと凶暴化して全身を紅潮させ甲殻に張り巡らせている血管が浮かび上がり、攻撃を行う。

巨木内の隅の方でエスピナスは堂々と寝ていた。それは樹海の帝王故、帝王の前にはあらゆる力等無に等しいと体自身で表現しているようにも見えた。

「私が今からエスピナスの寝ている懐に潜って落とし穴を仕掛ける、穴に落ちたらエスピナスの腹部を二人で集中攻撃、私は背後に回ってこいつの背を攻撃するから。それとおそらく集中攻撃している間

にカノンちゃんの持っている麻痺片手剣の神経毒が回ると思うから拘束時間が少し延びると思うから注意して。」

「一応ユーノの言う通りにメゼポルタに居た時に作って置いたパライズレイピアＳＰを持って来たけど・・・これで大丈夫なの？」

「問題ないよ。」

「俺はエスピナスが落とし穴から出てくるまでエスピの腹部を切ってればいいんだな？」

「そう、落とし穴からエスピが出たら恐らくエスピは怒り状態になると思うからそしたら切ってるだけじゃなくて相手の動向に注意して攻撃して二人とも。」

「わかった、ところでユーノ。」

「なに？」

「今日はライトボウガンじゃないんだな。」

「ライトボウガンは今修理に出してる。マルク君は私が双剣なのが不安なの？」

「いや、不安じゃないよ。前メゼポルタに行った時にユーノが双剣の修行をしてやっとまともに使えるようになったってユーノ自身が俺達に言ってたじゃないか。それにポッケ村じゃ見ない珍しい双剣を担いでるからさ。」

「これは天狼双【疾風】って言う双剣なの、刀身が短いのが特徴、

それじゃ行くよ。」

そう言うとユーノはエスピナスの寝ている懐へ歩いて行った。

「あんなに刀身が短いのに当たるのか攻撃が？」

「どうだろう、そんなに心配になるならいざって時にマルクが守ってあげればいいじゃない。ポイント上がるわよ。」

「な・・・なんのポイントだよ！！！」

「頼れる男ポイントってやつ？ほら行くよ！！」

カノンはマルクの肩を叩くとユーノの元へと駆けて行った。ユーノは既にエスピナスの懐に入り落とし穴の設置が何時でもできるようにしゃがみ込み二人の準備が整うのを待っていた、二人が武器を抜き戦闘態勢に入りユーノに向かって合図を送るとユーノは落とし穴の設置を行った。地面に設置された落とし穴は小さな炸裂音を立て地中に大きな穴を掘りその穴に沿ってモンスターを拘束する網が落とし穴付近に広がる。落とし穴が完成するとエスピナスの体は落とし穴の中へと落下した。急な襲撃に戸惑い必死に落とし穴からは居出ようとするが網がエスピナス自身の足と棘に絡まりエスピナスは穴の中で必死にもがく。

「フッ！！ハッ！！！」

カノンは自身を鼓舞（こぶ）するように掛け声をあげエスピナスの腹部目掛け片手剣で切り込んで行く片手剣から染み出た神経毒は傷口から徐々にエスピナスの体内を駆け巡りエスピナスの体の感覚は麻痺していく。その間カノンの横ではマルクが一心不乱にエスピナスの腹に

向けて太刀で斬りかかっていた。時より斬りかかった際にエスピナスの強固な甲殻にはじかれてはいた物の気刃斬りによる力押しによってはじかれは回避していた。

「（ユーノは大丈夫なのか・・・・・）」

マルクはそう思いユーノの居るエスピナスの背中付近に居るユーノに目をやるとそこには双剣による攻撃によって絶えず冷気が放たれ、放たれた冷気が大気を凍りつかせエスピナスの表皮を凍りつかせていた。双剣による攻撃によってエスピナスの表皮を凍らせていた氷は砕け細氷（さいひょう）となりその細氷は大木内の木漏れ日の光に当たり煌（きら）めき通常なら美しい光景と見えるだろう。しかしマルクから見たその光景はとても恐ろしいものだった、双剣による攻撃を行っているユーノの顔が全く無表情なのである。エスピナスの表皮から噴き出した血を顔全体に浴びても全く表情一つすら変えずに冷徹にエスピナスの表皮を攻撃していく、その攻撃速度はエスピナスの背棘がすべて折れ甲殻が剥がれ落ちもう既にエスピナスの強靭な背筋がちぎれ骨まで見えているであろう程だった。マルクがユーノの攻撃態勢に恐れを抱き攻撃を緩めているとカノンの片手剣の神経毒がエスピナスの体内に完全に回りエスピナスは麻痺状態となり動かなくなった。今までエスピナスの翼の羽ばたきによって時より見えたユーノの姿はエスピナスの麻痺状態に陥った事よって露わになった。ユーノは全身にエスピナスの血を浴びながら尚攻撃を続けていた。ユーノはマルクの視線に気づくと攻撃を止めマルクに向き直った。

「なにしてるの？早く攻撃しなよ。」

ユーノの視線がマルクに向いた時マルクはまるで竜に睨まれた時と同じような感覚になり恐怖に駆られエスピナスを攻撃し始めた。ユーノのからの冷たい視線から逃れるために、エスピナスは麻痺状態

から抜けると翼を大きくはばたかせ落とし穴から抜け再び大地に降り立ち、樹海の帝王たる自身をここまでコケにした人に対し怒りを露わに体全体紅潮させ樹海全土に響き渡るほどの咆哮をあげた。エスピナスの目の前に居たマルクとカノンはその特大の咆哮を聞き耳を塞いで硬直してしまった、エスピナスは硬直したその二人に目を付けるとその二人を粛清（しゅくせい）する為、帝王にはむかう者には死あるのみと言わんが如く体を反り上げ二人に向けてブレスを浴びさせようとしたがエスピナスと二人の間に何かが投げられそれが炸裂し辺りが一瞬真っ白に覆われた、ユーノが閃光玉を投げたのである。

「ありがとう、助かったよユーノ。」

「感謝しているのなら攻撃してよ。」

ユーノはカノンの礼に一瞥もくれず視界が奪われ暴れまわっているエスピナス向け駆けて行った。エスピナスは視界を奪われ全身に生えた棘を利用したなぎ払い攻撃を行っていた、しかし何事も行動を起こす為には軸となる点がある今エスピナスが行っているのは軸足を使ったなぎ払い攻撃、ユーノは軸足となっている足を見極めるとその足目掛け乱舞による攻撃をエスピナスの足に放つ、マルクもユーノのその姿を見てかユーノの元へと行きエスピナスの軸足に気刃斬りを放つマルクが気刃斬りを放つとエスピナスは横転し大地にもがいていた。

「よっしゃ！！やったなユーノ！！」

マルクが隣に居るユーノに声をかけるとユーノの姿はもうそこには無くユーノはエスピナスの尾に向けて攻撃を放っていた。しばらくするとエスピナスは起き上がり尾の方に居るユーノに向け尾でなぎ払うがユーノはエスピの懐へ入り尾でのなぎ払いを回避し腹部へ無

け回転切りを放つ、しかしエスピナスは直ぐに後ろへと飛び上がりユーノとの距離を置くと頭部に生えた角を突き出しユーノに向けて突進してきた。

「危ないユーノ！！！」

マルクはそう叫びエスピナスの突進の射線上にいるユーノを掴み庇おうとしたがマルクの手はユーノに触れる事はなくユーノはエスピナスに向け駆けて行った。ユーノはエスピナスの俊足の突進をギリギリで回避しすれ違った際に地面に手を触れシビレ罠を設置し再びユーノの元へと突進してくるエスピナスをしびれ罠に誘導させシビレ罠を踏んだエスピナスは再び体の自由を奪われその場に拘束される、ユーノはそれを確認すると拘束されているエスピナスに飛び乗り先ほどユーノがひたすらに攻撃を加えていた背中の箇所に向け双剣による連続の突きさし攻撃を行う、その姿には一切の慈悲等なくただただ冷酷な光景であった。エスピナスがシビレ罠による拘束をから逃れたのを察知するとユーノは尻尾に向け飛び上がり回転切りを加え地上へと降り立つ。エスピナスの全身に覆われた紅潮した血管は点滅をしエスピナス自身にもうじき訪れる死期を暗示しているように見えた。エスピナスは自身の死の危機を感じたのか足を引きづりながらユーノ達から遠のこうしたがユーノはそれを見逃さなかった。

「二人ともさっきからなにボーとしてるの？とどめを刺しに行くよ。」

「いや、もういいだろう。ここは捕獲をして・・・・」

マルクがユーノにそう提案しようとしたがユーノはそれに対してマルクに口を開いた。

「捕獲?罠はもってきたの?捕獲用麻酔玉は?そんな事してたらアレ逃げちゃうよ。」

そう言うとユーノは足を引きずりその場から逃げようとするエスピナスに向けて駆けだし尾に向け回転切りを放つとエスピナスの尾は骨の折れる音と主に切れエスピナスは激痛に伴い悲痛な声を上げる。しかしユーノは尚攻撃の手を緩めることなくエスピナスに向け攻撃を加えるユーノの攻撃しているその姿はまるで舞踏の如く見えた。だがユーノはエスピナスが完全に動かなくなるまで舞踏をやめなかった、樹海の帝王は無慈悲な女王による攻撃屈しその命を散らした。

トルトロス樹海　キャンプ地

時刻は夜、樹海は薄暗くキャンプの中の鍋の火だけが辺りを照らしていた。エスピナスの狩猟を終えた三人はキャンプに戻りポッケ村に帰る為の準備を行っていた。もっとも帰るのは明日の朝にかけてだが三人はあらかたの帰る準備を整えるとユーノはキャンプの近くにある川で体と防具を洗ってくると言いユーノは二人の元を離れた。

「なぁカノン・・・今日のユーノ見てどう思った。」

マルクはカノンに今日のユーノの事を尋ねるとカノンは口を重く開いた。

「・・・正直怖かった、別人みたいだった。」

「最後にユーノに会った間にユーノの身に何か起きたんだろうか・・・」

「・・・・・」

「俺ちょっと聞いてくるよ・・・・・」

マルクはそう言うとユーノの居る川へと向かった、川へ向かう辺りは月の光が指し光虫が飛び交う幻想的な風景が広がっていた。月の光に照らされたユーノは防具とインナーを脱ぎ川に入りで体と防具にこびり付いたエスピナスの血を洗い流していた。

「覗きですか、マルク君？まぁ別に良いですけど。」

「何があったんだよユーノ・・・・・最後に会った日から・・・・」

「別に何もありませんよ。」

「なぁ、なんでも良いから話してくれよ。」

「そうですねじゃあ、太刀の扱い方を気を付けてください。太刀は刀身が長いうえに力も込めやすく強力な武器の一つですが、その分一緒に狩りに赴くメンバーを太刀による攻撃に巻き込みやすいんです。昼エスピナスを狩りに行った時もマルク君は私がエスピナスの軸足を切っている時に気刃斬りをやりましたよね。」

「あぁ、でもあれは加勢しようと思って」

「あれも気をつけないと私自身が巻き込まれる所でしたよ。あなたの今の攻撃スタイルは只の独り善がりです、注意してください。カノンさんの為にも。」

「ちがう・・・・」

「まだ何か？」

「違うんだよ！！そんな狩猟アドバイスなんて要らないんだよ！！！　俺ユーノの力になりたいんだ！！！だから教えてくれよ何があったんだよ！！？」

マルクの大声を聞いて川からキャンプに向かう道からカノンが走って来た。

「何やってるの！？マルク！！それにユーノも異性の前なんだから体位隠したらどうなの！？」

「別に構いませんよ。マルク君、私早く顔と髪についた血を落としたいんですけど。」

「なんでだよ・・・なんで教えてくれないんだよ！！！」

「教えるも何も、何を教えるんですか？」

「だからユーノの身に何が起きたんだよ！！今日のユーノの狩猟を見て思ったんだ。いくら刀身が短い双剣を使ってるとは言えあんな危険な事するなんて。一歩間違えば再起不能になるかも知れないんだぞ！！！それになんだよいくら樹海の近辺の村に被害が出てるとは言えあんな風になるまでやらなくても良いじゃないか！！」

「・・・・二人に質問です。」

「はぁ？」

「もしこの世界に人と同じように話し笑い考える事のでき人と同じ形をしそして自分たちよりも遥かに強大な力を持った者が現れたらどうします？」

「話をそらすなよ！！！」

「答えてください。回答によっては私の身に何が起きたのかを・・・・」

「いい加減にしなよユーノ！！あなた何時からそんな喋り方するようになったんだよ！？私達は一時期だけど共に苦楽を共にした仲だろ？」

「苦楽を共にした仲だからこそ聞きたいのです。二人ならどうしますか？」

二人はユーノの投げかけたその質問に対し少し考え込んでしまった。

「答えられませんか。まぁそうですよね非現実的すぎる質問ですからね。それにもしその存在が私たち人の敵になったら私たちなんて一ひねりですからね。」

ユーノがそう言い滝壺の方へと向かおうとするとカノンがユーノを引きとめた。

「ユーノ・・・あんたの質問には今すぐ答えられないけどこれだけは言っておくよ、あんたの今日行ったのは狩猟じゃないよあれは只の虐殺だ。」

ユーノはカノンのその言葉を聞くと無言で顔と髪にこびり付いた血を落とす為に川の奥の小さな滝の近くへ行き滝壺の中へと潜ってしまった。マルクはその場に立ち尽くすしかなかった、答えを導き出す事が出来ぬまま。カノンはマルクの肩に手を添えるとそのままキャンプのある方へと戻って行った。マルクもカノンの後を追うようにキャンプへと向かって行った。

64節　Lunatic（後書き）

なんでルナティック＝【狂気】と訳されるのかと言うと西洋圏（せいようけん）の昔の人は古くから月は不思議な力を常に発していると思われていてそれが人を狂わすと信じられてたそうです。狼男（おおかみおとこ）が満月の夜に現れるのも西洋系のお化けが月に伴って現れるのもそう言う由縁があるからかも知れませんね。

65節　心の行方（前書き）

まさかジャン・レノがドラえもんを演じるとは・・・・あの渋いジャン・レノが・・・・あぁこの節で合わせるともう70話も投下してるんですね。こんな自分善がりな文を読んでくれて皆さんどうもありがとうございます。

65節　心の行方

ディアブロス亜種　別称　黒角竜

棘のついた襟飾(えりかざ)りを持ち、目の上に二本の角を備える飛竜。首にある襟状の甲殻(こうかく)は硬く尾の先端部が棍棒状(こんぼうじょう)になっていて鋭い牙を持つが草食性であり主に砂漠に生えているサボテンを主食とする。自身のプライドが非常に高く、危害を加えられたり縄張りを侵されると凄まじく猛り狂うので「砂漠の暴君」と呼ばれ恐れられており雌個体は繁殖期になると警告色として甲殻が黒ずんでくるようになり凶暴性がさらに増す。

セクメーア砂漠地帯　カヴァール砂漠　洞穴内

洞穴の出口付近では3人のハンター達が手持ちの狩猟武器の研磨や残弾数の確認を行っていた。3人の装備はまだ上位装備でこのディアブロス亜種の2頭狩猟依頼を受けるにはまだ経験が浅すぎそして3人の実力の範囲を大きく上回る狩猟内容であった。砂漠方面ではディアブロスの咆哮らしき声が木霊(こだま)している。

「なぁ凄腕ランクの先輩達に押しつけられてこの狩猟依頼を受けるはめになっちまったけど大丈夫なのかな・・・・」

ハンマーを担いだ男は少しこの依頼を受けた事に後悔したように周りに居る二人に声をかけた。

「大丈夫な訳ないじゃないですか・・・・俺達上位ランクの奴らに凄腕の先輩達から仕事が回ってくるって事は凄腕の先輩達の間でも

厄介な狩猟内容に決まってますよ。」

ヘビィーボウガンを装備した青年は弾薬を装填しながらハンマーを担いだ男にそう言葉をかえした。

「・・・この狩猟内容・・・・巷(ちまた)では死神と呼ばれてる・・・・・」

二人の会話に口を挟むように太刀の刃を研石で研磨している女性が細々と口を開いた。

「死神ぃ!?なんでそれを知ってて伝えなかったのさ!?」

ハンマーを担いだ男は死神と言う言葉を耳にすると声を上ずりながら二人に問いかけた。

「先輩達に良い顔しようとホイホイ引き受けた貴方が悪いですよ。」

ヘビィーボウガンを担いだ青年がハンマーを担いだ男性にそう言うと男性は言葉を返せず黙り込んでしまった。青年の後ろでは太刀の研磨を終えた女性が【青年の言う通りだ】と言わんが如く首を縦に振っている。

「はぁ・・・結局貧乏クジを引かされた訳か・・・出発間際で参加してきた双剣の女の人はなんか怖そうだったし砂漠に到着したらさっさとどっか行っちゃうし・・・・散々だなぁ・・・・・」

「確かに普通の人とは違った雰囲気の人でしたねあの女性。」

「・・・・たぶんランクは私達より遥かに上・・・・・」

「確かに見たことない双剣と防具を装備してたよな～あの人・・・・」

三人が洞穴内でその女性について話していると洞穴の南の出口の方からディアブロスの物と思わしき苦痛の咆哮が聞こえてきた。

「なんだ!?今の音!?」

「砂漠南方面の川付近から聞こえてきましたね。」

「・・・・行ってみるべき。」

「そうだな・・・・様子を見に行こう。」

三人は武器に手を添えながら洞穴の南の方の出口に向かって駆けだした。洞穴を出た先そこにはディアブロスの満身創痍の体が岩に角が突き刺さったまま放置されており、その横では双剣を両手に携えその場に立ち尽くしている女性がいた。

「おぉ!!あんた凄いな!!!」

その光景を目にしたハンマーを担いだ男は女性の元に向かって駆けだしたすると女性は男性の元へと振り返り男性に向けて何かを投げつけた。女性と男性の間で炸裂する高周波音、いきなり耳元で炸裂した音爆弾による高音に耐えきれずハンマーを担いだ男性は耳を塞ぐと男性の目の前に黒い塊が地中から飛び出してきた。その黒い塊は両方の角を折られ突如自身の耳元で発せられた高周波は自身の発達した聴覚器官を強烈に刺激し方向感覚が麻痺し地中から半身だけを出しもがき苦しんでいる。その機会を待っていたが如く女性は口

元が歪みディアブロス亜種に向けて双剣の矛先を向け駆けて行く、女性はディアブロスの背を駆けのぼると首付近で馬乗りになり首に向け双剣での連続攻撃を加える。ディアブロスが痛みにもがき苦しむたびに体を振り回し辺りにまき散らされるディアブロスの鮮血その鮮血は目の前でその光景に茫然としている男性の顔にも振りかかった。しばらくしてディアブロスは首を大きく上に振り馬乗りになっている女性を上空へと吹き飛ばし地中に埋もれた両足を大地に立たせる為に羽ばたきだした。ディアブロスによって吹き飛ばされた女性はディアブロスの前方の地面にたたき落とされた。

「大丈夫ですか！！？」

ヘビィーボウガンを担いだ男性がディアブロスに向け閃光玉を投げ地面に叩き落とされた女性へ向けて走る。

「今、生命の粉塵を使いま」

「邪魔だ。」

女性はそう言うと青年を押しのけ閃光玉によって視界を奪われ猛り狂い怒りの咆哮を上げるディアブロスに向け駆けて行き再びディアブロスに向け駆けて行きディアブロスに向け乱舞と乱舞とは別の攻撃方法でディアブロスの命を削り取っていく。その姿は妖精が踊っているようにも見えるが決して美しいとは言えず戦慄する光景で有った。

「死神・・・・」

太刀を背負った女性がそう呟くとディアブロスの命は一人の女性によって刈り取られた。

気球船　ハンター控室

控室の中では双剣の手入れをしている女性とハンマーを担いだ男性達のＰＴ（パーティ）三人が間を取るように座っていた。女性は双剣の手入れを終えると控室から出ようと立ち上がりドアの方へと歩いて行ったがハンマーを担いだ男性に呼び止められた。

「あの、もしかしてフリーですか？」

「・・・・」

「もしよかったら俺たちのＰＴ（パーティ）に」

「寄生ですか？」

「そ・・・そんな違います！あっちょっと！！！」

女性は男性の制止の言葉を無視し控室から出て行った。

「なんだよ！！あの女！！ちょっと強いからってあんな態度は」

「いや、ちょっとじゃなくて相当強いですよあの方。でもあの方を私たちの仲間に入れるのは危険すぎます。」

「えっ？なんで？」

ハンマーを担いだ男性はヘビィーボウガンを担いだ青年にそう尋ねると青年は真剣な表情で語りだした。

「あの方の戦い方は大事な物を失った人の戦い方です、失う物などもう何もないからこそあのような恐ろしく人並み外れた戦い方ができるんです。あのような人をＰＴ（パーティ）に入れたら私達にも不幸が降りかかりかねますよ・・・・・」

ギルドナイト本部　事務室

事務室にはエビィーが様々な狩猟依頼の処理と大陸各地で起きている現象についての報告書をまとめていた、そこにふらりと双剣を担いだ女性が訪ねてきた。

「何か緊急の狩猟依頼は来て無いの？エビィーさん？」

「おぉ！！！いきなり背後から声をかけないでよユーノちゃん。聞いたよ上位のハンター達の狩猟依頼に勝手に乗って行ったんだってね。」

「・・・凄腕ランクの奴らから無理やり押し付けられてたからかわいそうだと思ってついて行っただけだよ。」

「まぁその点は偉いけど、ろくにその上位３人と協力もせずに勝手に狩猟を行ってたそうじゃないか！！駄目だよそう言うのは！！只でさえハンター達の交流が少ない事で問題になっているんだから。それに緊急の依頼や高難易度で誰も手を付けたがらない依頼を率先（そっせん）して受けてくれるのはありがたいけど、今の自分の体と顔見てみなよ！！！ひどいってもんじゃないよ！！！」

ユーノの今の顔色は暗くこけているように見え防具には様々なモン

スターの血の匂いが染みつき防具の隙間から見える肌は傷だらけであった。

「問題ないよ、だから依頼を」

「駄目です!!ユーノはしばらくの間狩猟業務及びギルドナイト業務は禁止します!!どうせマイハウスにもろくに帰ってないんでしょ!!だからしばらくマイハウスで休みなさい!!以上!!!これは上官からの命令ですから破った場合はどうなるかわかってるよね!?」

「・・・わかりました。」

そう言うとユーノは黙ってエビィーの居るギルドナイト本部の事務室から出て行き本部を後にした。それと入れ違いで今度はシンが事務室に入って来た。

「やぁ、エビィーさん。」

「シン君!!まだ鼻骨の方は大丈夫なの?」

「大丈夫じゃないけど、これ位の怪我なら業務に刺し違えないから強引に退院してきたよ。それよりなんか前よりすごい雰囲気が変わってて一瞬誰だか分らなかったけどさっきユーノとすれ違ったけど・・・なんか有ったの?」

「うん・・・まぁちょっとね。それよりシン君この資料を見てくれる?」

エビィーはそう言うとシンに分厚い資料を手渡したそこには最近の

古龍の出現状況が詳しく記されていた。

「・・・減少傾向にあるって事は別によい事なんじゃない？むしろ増えたら増えたで大変だよ。」

「まぁそうなんだけどある事を始まりに急激に減ってるんだよ。」

「ある事・・・イレスデウスが活動停止した日から急に減ってる・・・」

「そうなんだよ、なんか不気味じゃない？」

「うーん・・・・・」

メゼポルタ　ユーノ　マイハウス

ユーノはマイハウスの扉を開けるとそこにはフーちゃんが椅子にすわり居眠りをしていた。ユーノはフーちゃんのその姿を無視し装備している武器と防具脱ぎそれをボックス内に投げ入れインナー姿でマイハウス内の姿見の前に立った。

「・・・誰これ。」

ユーノはそう言うとベットの方へと向かいベットに身を放り投げた。その拍子に頭に何か硬い物が当たりそれを手に取るとそれはジュノから預かっている首飾りだった。

【そいつは預けとく、俺の大事な御守りみたいなものだ。後で取りに来るからなくすなよ。】

ジュノが昔ユーノに言った言葉が頭の中に響く。

「・・・・取りに来るって行ったのに全然取りに来ないじゃないですか。」

ユーノはそう言うと首飾りを首から外し手に握りしめ地面に叩きつけようと腕を大きく振りあげたが途中でそれを止め振り上げた腕はベットに力なく落ちた。

「・・・・取りに来る機会を駄目にしたのは私自身ですね。」

ユーノはそう言うとベットに寝転がり顔を手に当て静かに目を閉じた。不思議と胸の中が張り裂けそうにならなかった、なにも感じなかった。何も。

65節　心の行方（後書き）

今年はスノボー行けるかな～・・・まぁ暇を見つけて行きますけどね！！いやーでもこの時限爆弾式にぽく話投下できるのいいですね、なんとなく。

66節　レプリカ（前書き）

たまに北斗神拳で秘功を突かれたように額の横の欠陥が「ピギィィン！！」となり痛みます。さすが北斗神拳いつ秘功を突かれたかどうかわからない、恐ろしい暗殺拳よ・・・

66節　レプリカ

アリキタ峡谷（きょうこく）　高台付近

ベルキュロス　別称　舞雷竜（ぶらいりゅう）

峡谷に生息する飛竜種。左右の翼から伸びる尾のような長い鉤爪（かぎづめ）と2本の副尾（ふくび）が特徴。その巨体を宙に舞わせ、空から強力な放電をする姿から舞雷竜と呼ばれている。多彩な攻撃手段を使いこなし、相手に合わせて動きを変えることから飛竜種の中でも非常に高い知能を有してる。

乾いた風が吹く峡谷内で二人のハンターが武器を手に掲げ身構えていた。一人は大剣を背負った女性のハンター防具から見てまだ凄腕に上がりたてだろうか、そしてもう一人は銀色の髪を風にたなびかせ弓を構える黒を基調とした露出度の高い防具を装備した端正な顔立ち女性ハンターその弓を引く姿はとても美しく誰もが見惚れするほどだ。

「上よ!!ハンターさん回避!!!」

銀髪の女性の声と共に上空から電撃を帯びながら急降下し地上へと落下する舞雷竜、舞雷竜が地上へと降り立った瞬間地上では大範囲に電撃が走り昼間の峡谷の大地は舞雷竜の電撃に伴って強烈な光を放った。銀髪の女性はその電撃を華麗に回避するが大剣を背負ったハンターは緊急回避し峡谷地面へとうつ伏せの態勢で飛び込み舞雷竜の電撃をなんとか回避していた。

「ちょっと!アナタ大丈夫!?」

「痛てて・・・なんとか大丈夫です。ナターシャさん」

「あんまり心配させないでよね！！さぁこの華麗な技の数々を、しっかりとその目に焼き付けなさい！！」

「はい！」

ナターシャと呼ばれた長い銀髪の女性はそう言うと弓を引き舞雷竜に向けて矢を射抜く彼女の放った矢は舞雷竜の頭から背中を貫通して行き舞雷竜の発電器官を破壊していき舞雷竜はその痛みに怯み身を後ろへと追いやる。

「やぁ！！！」

ナターシャの華麗な弓さばきに影響してか大剣を背負ったハンターも負けじと舞雷竜の頭上に向けて溜め切りを放つ、渾身の力を込めて放った一撃は見事舞雷竜の頭部へと当たり舞雷竜の重要な発電器官の一つである電撃をコントロールしている角が折れ舞雷竜の周りに自身の生体電流が漏れだす。

「部位破壊、成功よ。ハンターさん！！でも気を緩めないで！！」

「はい！」

遠近ともに激しい攻撃が舞雷竜を襲う、舞雷竜もこのままでは狩られると感じたのか自身の鉤爪を地面へと突き刺し地中に埋まる岩を二人のハンターに向け投げつける。

「防御！」

ナターシャの言葉と共に女性ハンターは大剣で体を覆い体に岩が叩きつけられるのを防ぐ、だがこの行動は舞雷竜の中では計算済みの行為であった真の攻撃目標は遠距離から自身の発電器官を正確に射抜いてくるナターシャ只一人。彼女さえ葬ってしまえばこの目の前の非力な存在など簡単に葬れるそう思い舞雷竜はナターシャに向け大量の岩石を投げつけた。しかし投げつけた先にはもうナターシャの姿は無かった、舞雷竜は咄嗟に左右の目でナターシャの捕捉しようとした次の瞬間目の前でガードしている大剣のハンターの背後から何かが飛び上がり舞雷竜の背に生えている最後の発電器官に矢が貫通し破壊された。

「おバカさぁん♪」

ナターシャのその言葉と共に舞雷竜の中に流れる生体電流は暴走し舞雷竜自身の電撃が自身の体中へと駆け廻る、自身の有する強力電流に伴った強烈な痛みと体中の至る所が異常に熱を帯び身を焦がし舞雷竜の体は放電し煙を上げながら地面へと倒れ込み峡谷に吹く風に命の灯を消され息絶えた。

「や・・・やった!!やりましたね!!ナターシャさん!!!」

大剣を背負ったハンターは喜びナターシャに振り返るしかしナターシャは無言であった。

「・・・・・」

「あれ?ナターシャさん?」

「・・・フフフ、オォーホォホホホッ!!!まぁ当然の結果よね

！！あぁ・・・・私ってなんて弓の扱い方が天才的なの？自分のこの生まれ持った才能そしてこの美しさが素晴らしくて怖いわ！！！美しさも！！！」

「あぁ・・・・そうですね。（これが無ければ完璧なのに残念な人だなぁ～）」

「この私の最高の美貌と華麗な弓術に見惚れすることなく、私と良い連携が取れてたわよ。もしかしたらレジェンドラスタより強いハンターになれるかもしれないわ！」

「ホントですか！？」

「えぇ！！後はあなたの今後の努力次第よ！！」

「よーし、がんばるぞ～！！！」

大剣を担いだ女性ハンターはナターシャの褒め言葉をもらいその場で飛び上がるように喜んでいた。

「さぁ、報酬を受け取ってメゼポルタに帰るわよ！！」

ナターシャはそう言うとキャンプに向けて歩いていこうとしたが同行しているハンターが息絶えたベルキュロスの方向に倒れていた。

「どうしたのハンターさん！？」

ナターシャは急いで倒れているハンターを抱き起こした、胸が微かに動いている事を確認するとナターシャは念のために辺りに生命の粉塵（せいめいのふんじん）を倒れているハンターの体に振りまき、首元に手を触れ倒れた

ハンターの脈を取る。

「・・・・異常はないみたいね。」

ナターシャは救護アイルーを呼ぶ為に角笛を数回吹いた、すると峡谷の洞窟につながる高台に人の気配を感じ振りかえるとそこには下半身は人の形をしているが上半身は肉腫(にくしゅ)の様に膨れ上がり飛竜の形をした謎の生物がナターシャとハンターをじっと見ていた。

「なに・・・・あれ・・・・・。」

ナターシャの視線に気づくとその謎の生物は自身の体の肉腫をナターシャに向けて射出したナターシャはハンターを抱えそれを回避する。

「（なんなのよあいつ!!!人?モンスター!?）」

謎の生物は尚ナターシャに向け肉腫を飛ばしてくるの止めずにいた。

「ニャ!!どうしたのか・・・・ニャオン!!!ニャんだあれは!?」

「良い所に!!ハンターさんをキャンプへ避難させて!!」

ナターシャは気絶しているハンターを猫車に乗せるとすぐさま弓を構え謎の生物目掛け弓を放ったその弓は謎の生物の人で言う額に位置する所を貫通し謎の生物は肉腫を飛ばすのを止め高台からナターシャから離れた場所へと落下した。

「・・・・やったのかしら・・・・」

ナターシャは何時でも矢を入れる体勢を維持しながら落下した物体に近づいて行った、落下した物体はまだ微かにビクビクと動いていたのでナターシャ人の急所と思われる場所に数本矢を物体に放つとその物体は完全に動かなくなった。

メゼポルタ　病院

「・・・・ん」

「気がついた?」

「あっ・・・・ナターシャさん私。」

「バカねぇ狩りはメゼポルタまで戻るまで狩りだって習わなかったの?アナタはガブラスに頭目掛けて後ろから攻撃されて気を失ったのよ。まったく私に褒められたのがそんなに嬉しかったのかしら?」

「すいません・・・・」

「まぁいいわ、これは事故みたいな物だから報酬はちゃんと支払われるから安心しなさい。それじゃ私はこれで、あぁ早くお風呂にゆっくり浸かりたいわ。」

ナターシャそう呟きながら契約しているハンターの病室を後にした。

「・・・・ガブラスなんて居たかな?」

メゼポルタ　ハンターズギルド本部

ナターシャは病院を出た後ハンターズギルドに向かい内部を急ぎ足で歩いていた、目的の場所に着くとナターシャは扉をノックすると扉の中へと入って行った。扉の中にはギルドナイト数名とメゼポルタに居るレジェンドラスタ全員と大長老の補佐を務めている竜人族の男性そして古生物書士隊の面々がある生物を囲って集まっていた。そうナターシャが峡谷内で遭遇した謎の生物を囲って。

「来たか、ナターシャ。」

ナターシャが部屋に入ってくると早速ギネルがナターシャに話しかけた。

「えぇ遅れてすまないわね。」

ナターシャがギネルにそう言うと太刀を背負ったレジェンドラスタの一人が謎の生物を見て口を開いた。

「しかしこれまた面妖な生物でゴザルな・・・」

「面妖(めんよう)ね・・・東方の国ではこんな気持ち悪い生物はいっぱい居るのかな?キース?」

ランスを担いだレジェンドラスタはキースと呼ばれた太刀を担いだレジェンドラスタに問い返した。

「いやこのような物の怪(もののけ)は拙者が修行した東方の国では全く居なかったでゴザルよエドワード殿。」

「でもよく討伐できましたねナターシャさん・・・私ならこのような生物と遭遇したら取り乱してしまいます。」

「えっ！リアさんなら得意の大剣術で容赦なく※※※※と！！」

「黙ってろタイゾウ。※※※ぞ。」

「ハイ！！」

「・・・この大陸内でなにか異変が起きているのでしょうかユウェル姉さま。」

ライトボウガンを携えた女性レジェンドラスタが横に居るヘヴィーボウガンを携えたレジェンドラスタに問いかけた。

「そうねティアラ・・・昨今の他大陸のイビルジョーの出現に加えイレスデウスの出現・・・何かが起きているのは確かかね。」

「あっ！見てくださいみなさん！！この生物の手みたいな所。」

「えっ、どこどこフローラちゃん？」

「ほら、ここだよチルカちゃん。」

フローラが指さした所には何か刺青（いれずみ）の様な物が施されていた。

「これはヘビ・・・かなぁ？どう思うナターシャさん？」

「フラウの言う通りヘビにも見えなくは無いわね・・・もしこの刺青みたいな模様がヘビなら・・・」

「まてよ、弓のお嬢ちゃん。双剣のお嬢ちゃんの言う通りこの模様がヘビだとしたらなにか？この生物がマーシレスの連中の一人って言いたいのか？」

「ヘビを基調（きちょう）とした刺青が人間で言う手の部分に有るってことはそれしか思い浮かばないじゃないハンマーのおっさん。」

「むぅ・・・しかしあいつらは性根が腐ってどうしようもない連中だが人だぞ。このような化け物じゃないだろう・・・」

レジェンドラスタ全員が首を傾げていると竜人族の男性が口を開いた。

「ともかくこの生物は古生物書士隊の方々に解析をお願いしましょう。よろしいですかダレン？」

「はい、隊長。」

「ダレン、私はもう君の上司じゃない今は大長老の補佐官だ。補佐官と呼びなさい。」

「すいません、補佐官。」

「レジェンドラスタの君達は今後契約者との同行中にこのような生物を確認もしくは襲撃された場合は契約者ハンターの安全を最優先に逃走しなさい。契約者ハンターがこの生物を目撃してしまった場合はメゼポルタに帰還後ハンターを私の元まで連れてくる事。一般市民やハンター達の少しでも噂になり不安をあおるような事となれば大変な事になりますからね。」

「一般ハンター同士での狩りでコレと遭遇してしまった場合はどうしますか？」

「その場合は狩猟に赴く際に気球船にギルドの職員を同行させ、同じような対策案をとる事としましょう。詳細がはっきりしない限り、この件が噂の種にならないよう我々で注意を払いましょう。」

「人の口に戸は立てられぬ・・・・でゴザルな・・・・・」

「どういう意味なのぉ、キース君？」

フラウが腕を組み神妙な顔つきをしているキースに言葉の意味を問いかけた。

「東方の国に伝わる言葉の一つでゴザル・・・・噂が伝わるのは、早いもので、とくに悪い噂はたちまち広がり止めようとしても、噂が広まりだしたらもうだれにも止めることはできないでゴザル。」

「へぇ～。」

「ともかくギルドナイトの方々は何時でも非常事態に備えてください。良いですか、この件に関しては最重要機密事項として今後取り扱いをします。情報が漏えいしないよう皆さん細心の注意を払って行動してください。では解散！」

補佐官の号令と共に各自は部屋から出て行った、ナターシャもそれに続き部屋から出て行った、ある事を思い出しながら。

「（アンサラー・・・・オードポイント・・・・）」

今回遭遇した謎の生物、それは前ノルン島でアイリスに見せてもらったオードポイントを起こした状態のアンサラーに近い物があった。

「（まさかあいつにそんな技術力はないはず・・・・よね。）」

不安に駆られる心を抑えながらナターシャはハンターズギルド本部を後にした。

66節　レプリカ（後書き）

ベルキュロスが実装された当初はあまりの強さに死者が続出しましたね・・・でもとあるプロハン（やりこんでる人の事）がベルキュロスの部位破壊を積極的に行うとショートして自爆する事を発見してそれからは一人でも楽に倒せるようになりましたね～でも巷では攻撃行動があまりにも機械的すぎるので機械竜（きかいりゅう）ベルキュロスとも呼ばれてます。でも多彩な動きをしてカッコいいですよベルキュロス。

67節　灯し唄（前書き）

音楽っていうのはいいですね。自分に合う音楽を見つけてそれを聞くとやる気と言うのが操作できる気がしますね。ちなみに私が好きなアーティストはＧａｃｋｔやラルクやジャンヌダルクですね。まぁこの三つアーティスト達が好きになった原点的存在なのがＸ　ＪＡＰＡＮってバンドなんですけどね。

67節　灯し唄

メゼポルタ　ユーノマイハウス

マイハウス内ではベットの上でユーノが横たわりただ天井をずっと見つめていた。業務禁止令が出されてからどれくらい経っただろうか、覚えていない。ユーノ自身は天井を見る事すらも面倒に感じていたので目を閉じようとしたが体が動こうとしなかった。動きたくなかった何も考えたくなかった。

「ご主人様!!今日も気持ちのいい朝ですニャ!!!そして今日はあっと驚く凄い朝食を思いついたのニャ!!」

「そう・・・・」

「ぜひご主人様に食べてほしいのニャ!!」

「要らない・・・・」

「そんな事言わずに食べてほしいのニャ～。」

「・・・・・」

「ニャ・・・・じゃあ!!ベットの横に置いて置きますのでお腹がすいたら食べてくださいですニャ!!」

フーちゃんはそう言うと他の給仕アイルーにテーブルを持ってこさせその上にみんなでがんばって作ったユーノ朝食を置いた。

「それじゃあ、何かあったら呼んでくださいですニャ！！」

フーちゃんはそう言うと厨房の方へと歩いて行った。ユーノは相変わらずベットに横たわり天井だけを見ていた。朝食の食欲をそそる香りが鼻の中に入ってたが食べようという気にはならなかった不思議とお腹も空かない、でもお腹は空腹のサインを示し鳴いている食べなければいけないのに別に食べなくてもよい、そんな気がして食事には手を付けなかった。

「（どうしてこうなったんだろう・・・・）」

ふとユーノの頭が何かを考えようとしたしかし。

「（めんどうだ・・・・）」

ユーノの頭は直ぐに考えるのを止め再びユーノは何も考えずに天井を見始めた。部屋のドアを叩く音が聞こえる、どうせブロードさんだろうと思いユーノは何も反応を示さなかった。いつもみたいにしばらくすれば鳴りやむ・・・・だから別に問題ない。でも今日は少し違ったドアを叩く音はますます大きくなりドア自体から発せられる音が騒音へと変わるユーノはその音を遮断しようとシーツを頭からかぶり手に耳を当て耳を塞いだ、幾分かうるささは軽減されたがまだドアを叩く音は鳴りやまない。あまりのうるささで厨房の方に居たフーちゃんが何事かと思い急いでドアの鍵を開けた。

「もーうるさいニャー！！ご主人様は今具合が悪いのニャ！！！」

「ハッハー！！そりゃあこんな部屋に引きこもってれば具合だって悪くなるさね！！！」

聞き覚えのある女性の声が塞いだ耳の隙間から聞こえる。

「あっ!!ちょっとアナタ誰ですかニャ!?勝手に入られたら困りますニャ!!」

「なんだい!?母親が娘の部屋に勝手に入っちゃ駄目って決まりなのかい?メゼポルタは!?」

「ニャ・・・ルシャナさん!?あっちょっと!?」

女性はユーノベットの近くまで来るとユーノを覆っていたシーツを掴みそれを払いのけた。

「何時まで寝てるんだい?ユーノ!!もう朝だよ!!!」

「母さん・・・・」

「ほら!!!ネコちゃん達が作ってくれた朝ご飯食べなさい!!」

「やる気が起きないから食べる気がしない・・・・」

「なに行ってるんだい!!そんな時は無理矢理でも腹に何か詰め込んでおくんだよ!!さぁ食べな!!!」

ユーノはルシャナに叩き起こされ食事を取るよう促された。ユーノはしぶしぶとフーちゃん達給仕アイルーが用意した朝食を食べた。おいしいとは感じなかった、ただ味がついた粘土を食べてると言う感じだった。ルシャナ監視のもと朝食すべてなんとかを平らげるとルシャナは満面の笑みを浮かべた。

「よし、朝食を食べたら歯磨いて着替えて外に行って遊んできな！！」

「・・・・遊ぶって・・・・私はもう大人だ。」

「親からしたらアンタはいつまで経っても何歳になろうが子供なんだよ！！さぁ！さっさと支度して夕方まで遊んできな！！！ネコちゃん達も遊んできて良いからな！！！」

「ニャ！！そんな訳には・・・・」

「良いから遠慮するなって、日ごろの疲れや鬱憤(うっぷん)を晴らしてきな！！」

ルシャナはそう言うとユーノとアイルー達に外に出る様指示をし始めた、ユーノは仕方がなく歯を磨き私服に着替え母の言う事に従い部屋の外へと出ることにした母があのような状態になるとどう頑張っても気が変わる事は無いのは子供のころから知っていたからだ。

「良いかい！！夕方になったら帰ってくるんだよ！！それ以外は部屋に入れないからな！！じゃあ行ってらっしゃい！！」

ルシャナはユーノ達にそう言うと部屋の扉を閉め鍵をかけた。

「私の部屋なんだけどな・・・・」

「ニャー・・・・どうしますかニャ？ご主人様？」

「母さんの言う通りフーちゃん達は自由に遊んできて良いよ。私は・・・・散歩でもしてるよ。」

「ニャ！！わかりましたニャ！！それにしても・・・・」

「？」

「ご主人様と久しぶりに会話ができて嬉しいですニャ！！じゃあ夕方にまた会いましょうニャ！！！」

「ニャニャー！！！」

フーちゃん達ユーノにそう伝えると蜘蛛の子を散らすように走って行った。

「嬉しかった・・・か・・・・」

ユーノはそう呟くと自身のマイハウスを後にした。

メゼポルタ　交流区

交流区そこはハンター自身が何かのイベントなどを催す時に利用される区である。ユーノは公衆酒場で適当に何かを食べたがそれほどお腹に食事が入らず途中で食事を止め酒場を出て特にどこかに行こうと決めずに歩いていた。しばらく歩くと歌声が微かに聞こえてきその歌声を頼りに歩いていると交流区の一角の広場にたどり着いた。広場では竜人族の女性がハンター達やメゼポルタの住民達に歌を披露していた。

「（あの人は・・・・たしかグラシェさん・・・・？）」

ユーノは広場へと降りるとグラシェの歌声をずっと聞いていた、グラシェの最初歌声はとても力強くユーノの心の中が揺れ動いき次のグラシェの歌声は力強さは失わず更に優しさが加わりユーノの心は震え続けた、恐怖や焦りで心が震えるのではなくまた何か違うユーノ自身もわからない違う意味でユーノの心は震えた。グラシェが一通りの持ち歌を歌い終えるとその場に居たハンターやメゼポルタの住民達は彼女に拍手喝さいを送った。

「今日の皆さんに伝える唄以上です。今日は私の歌を聞きに来てくれてどうもありがとうございました。」

グラシェは唄を聞きに集まった皆にその旨を伝えると皆は広場を次々と後にした、ユーノはと言うとなぜかその場に立ち尽くしていた。それを見て心配したのかグラシェはユーノに話しかけてきた。

「あの・・・どうかなさいましたか?あっ・・・あなたはあの時のギルドナイトさん確か名前は・・・」

「あっ・・・ユーノです。お久しぶりです、グラシェさん。」

「お久しぶりですね。今日はどうなさったんですか?」

「いや、散歩をしてたら歌声が聞こえてきたのでその声を頼りに歩いてたらここに・・・」

「まぁそうなんですか。どうでした?私の唄はユーノさんに伝わりましたか?」

「伝わったかどうかは正直なところよくわかりませんけど何かこう心が震えるって言うんですかね、なんか心が変な気持ちになりまし

た。あのグラシェさんがさっき歌ってた歌ってなんていう歌なんですか？」

「魂を宿す唄と目覚めの唄と言います。先程私が歌っていた唄は、ユーノさんの心が変な気持ちになったと言う事はきっと私の歌った唄がユーノさんに伝わったんだと思いますよ。」

「魂を宿す唄・・・目覚めの唄・・・か、フフ。」

「どうかしましたか？」

「いえ、今の私にぴったりな唄だなと・・・・」

「そうですか。あの・・・あの件は今どうなっているのでしょう？」

「あの件？」

「再誕（さいたん）の唄の件です。」

ユーノはグラシェの再誕の唄の件を聞くと押し黙ってしまった。言える筈がない再誕の唄はもう取り返しのつかない事になってしまったなんて、ましてや今までの自身が知っているイレスデウスの件を話しても信じてもらえるかどうかわからないのだから。

「あの・・・まだ見つからないのでしょうか？」

「・・・・信じられない話かもしれないですけど、聞いてくれますかグラシェさん。再誕の唄の件です。」

メゼポルタ　求人区　郊外

ユーノはあの後意を決してグラシェにすべての事実を伝えた再誕の唄はイレスデウスの中にあるかも知れないと言うこと、この世界のあり方、イレスデウスの正体そしてイレスデウスを滅ぼす銃弾を自分の不注意によって放たれイレスデウスが滅んでしまった事を。しかしグラシェはユーノの話を聞いても一切驚かなかった、ユーノの話を真摯に受け止めそして一言「わかりました。」とだけ良いイレスデウスの元へと案内してくれとユーノにお願いしてきた。

「ここです。」

イレスデウスの亡骸（なきがら）が放置された広場は今は一人の見張りの衛兵しかいなかった。ユーノは衛兵に自身のギルドナイト認証を見せるとしばらくの間広場の外を見張っててくれと頼み広場にはグラシェとユーノ只二人だけとなった。

「これがイレスデウス・・・・なんと猛々（たけだけ）しいのでしょう。」

そう言うとグラシェはイレスデウスの元に行きに手を触れ耳をイレスデウスの体に当て目を閉じた、しばらくの間グラシェはそうしていると何か納得したような顔をしてユーノの元へと帰って来た。

「すいません、私の不注意で世界の至宝とまで言われる大事な物を・・・・」

「いえ、あなたは悪く有りませんよ。それに元はと言えば私の配慮の足りなさも原因ですし。気にしないでください。」

グラシェはそう言うとイレスデウスの元へと再び振り返った。

「それにしても凄いですね。遥か昔この世界にはそのような出来事があり、そしてそれが現代に繋がっているなんて驚きです。」

「信じてくれるんですか？」

「えぇ。あなたが私にこの話を伝える時の顔は真剣そのものでしたから。それに私達の様な種族が何故この世界に存在するのかの説明にもなりますからね。」

グラシェはそう言うとユーノに振り返り頬笑みかけた、ユーノはその微笑みを見てなんだか少し照れくさくなり顔を下へと向けた。

「さぁ、もう夕方ですし私はもう宿の方へと帰ります。ユーノさんはこれからどうするのですか？」

「私は・・・・・あっ。」

【良いかい！！夕方になったら帰ってくるんだよ！！それ以外は部屋に入れないからな！！】

「まずい・・・早く帰らないと母さんに締め出される・・・・」

「あら、それは大変です。」

「今日はありがとーグラシェさん！！また唄聞かせてくださいね！

！！」

ユーノはグラシェにお礼を言いながらマイハウスに向けてかけていたその間グラシェはユーノが見えなくなるまで手を振っていた。

メゼポルタ　ユーノマイハウス

日が地平線に沈みかけようとしている時ユーノはマイハウスに戻って来た。マイハウスには鍵がかかってるユーノは咄嗟にドアを叩き中にいるルシャナを呼んだ。

「母さん！！開けてよ！！まだ日は沈んでないから夕方だよ！！！ねぇたら！！！」

ユーノはドア向こうに居るはずのルシャナにそう言うとドアが勢いよく放たれユーノはドアにおでこをぶつけた。

「うるさい！ドアは一回叩けばいいんだよ！！まったく相変わらずギリギリに帰ってくるのは変わらないのね。」

「痛い・・・・」

「まぁ今日は多めに見てやろう。さぁ早く入りなネコちゃん達も待ってるよ。」

「うん。」

「ニャー！！おかえりなさいだニャ！！！」

「ただいま、みんな。」

ユーノは出迎えてくれたみんなに挨拶をするとマイハウスの中に入って行った。マイハウスの中は何やら食欲のそそる香りが漂っていた。

「ネコちゃんたちがあんたに凄いご馳走を用意してくれたぞ。」

「ルシャナさんに手伝ってもらって頑張ったのニャ！！！」

フーちゃんはそう言うとユーノの後ろに回りユーノに席に座るように促した。

「さぁ食べてみな！」

今までは何もやる気が起きずお腹が鳴っても食べなくて良いやと思っていたユーノだったが今は朝と違って食べたいと言う気が有った。

「いただきます。」

「召し上がれ。」

「「召し上がれだニャン！！」」

ユーノは夕食を口に運ぶと今までとは違い食事がおいしいと思った。今までは食事をしてもただ味がついた粘土を食べてるだけという感覚で有ったが久しぶりにおいしいと感じる事が出来た。

「どうだい？美味しいかい？」

「うん・・・・美味しいよ。」

ユーノは久しぶり夕食をすべて平らげる事ができた。夕食が終ると給仕アイルー達は食器を洗いに厨房の方へと食器をもって歩いて行った。

「母さんはなんで急にメゼポルタに来たの？」

「メゼポルタの良い男をひっかけに」

「・・・・父さん知ったら泣くよ。」

「ハッ！毎月一回しか手紙出さないあいつが悪いのさ！！」

「その手紙がボロボロになるまで何回も読むくせに・・・・」

「むっ！小娘が言うようになったじゃないか！！」

ルシャナはそう言うとユーノの鼻を指ではじいた。

「・・・・母さん、私ね。」

「また迷ったんだろ？自分の選択が正しかったかどうか。」

「・・・・なんでわかるの？」

「そりゃあ、私が腹痛めて産んだ子だからな。それに朝のあんたの顔見りゃ何となく察しがつくさ。」

「・・・・」

「運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ、でもその答えが出るのはいつかはわからない。明日かも知れないし1年後かもしれないしはたまた10年後いや死後かもしれない、でもね迷う事は無いんだよ。」

「うん・・・・」

「また迷ったら、私が今まであんたに伝えたたくさんの事を思い出してごらん。そうすればきっと大丈夫。」

「大丈夫かな・・・私。またやっていけるかな?」

「大丈夫さ!あんたは私の自慢の娘だ。」

ルシャナはそう言うとユーノの頭をなでた。

「んじゃあ、私はこの後メゼポルタの良い男と飲む約束してるから帰るよ!」

「え?」

「じゃあな!自慢の娘よー!!」

ルシャナ大声でユーノにそう言うとマイハウスのドアを開け夜のメゼポルタへと向かって行った。

「・・・ありがとう、母さん。」

メゼポルタ　マイハウス前

ルシャナはマイハウスの入口まで出ると一人のギルドナイトがルシャナが出て来るのを待っていた。

「本日は遠いヴェルドから来ていただきありがとうございました。」

「娘の危機となれば世界の裏からでも駆けつけるのが親ってもんさ。だから気にすんなよ、ブロード君。それよりあんたフラウちゃんとはどうなってるのさ？」

「な・・・なんでその事をあなたが。」

「前ジュノから聞いた。そんで進展はあったの？」

「現状維持です・・・・」

「・・・健気だねぇフラウちゃんは、もたもたしてるとフラウちゃんがどっか行っちまうかあんたの種が枯れちまうよ！」

「種が枯れるって・・・・」

「事実じゃない。」

「否定は・・・・しません。」

「次私が来るまでに決着付けとけよ～じゃあね～。」

「あっお送りしますよ！」

「要らね。さっさとフラウちゃんのとこに行って少しでも関係を発展させろ。」

ルシャナはそう言うと人差し指を立てブロードに指を指した。

「わ・・・わかりました。」

「うん。じゃ！またね～」

ルシャナは手を上にひらひらさせながら気球船ドックの方向へと向かって行った。

「ジュノさんのあの性格はあの人に似たのか・・・納得だな。フラウに何か買ってくか。」

ブロードはそう言うとレジェンドラスタ専用のマイハウスへと歩いて行った。

67節　灯し唄（後書き）

じゃあまた土曜日位に会いましょー。

68節　群と暴（前書き）

大学の同級生の課題を手伝ってあげたらお礼にとひだまりスイッチって言うアニメのポスターとやたらデカイクリアシートを貰った。
押しつけられたのか・・・・？

68節　群と暴

？？？

仄暗い場所そこには大勢のモノが綺麗に整列していた。みな装備している防具はモンスターの素材からはぎ取って作られた物からここに整列しているモノ達はハンターと見る事が出来る。整列しているハンター達を見降ろせる位置に赤い衣の男と赤い衣の男を挟むように太刀を背負った金の髪の女性と巨大な大剣を背負った男が立っていた。

「大陸に散らばらせておいたレギオンラスタはこれで全部ですか、ゴート？」

「いえ、若干数召集しきれなかったレギオンが数体おります。」

「ふむ・・・まぁ良いでしょう。これだけ有れば十分です、足りない分は補充すればいいのですから。」

「・・・・・・・」

「どうしました、ゴート？」

「いえ、なんでもありません。」

ゴートと呼ばれた男の返答を聞くと赤い衣の男一歩前へとで手を上げると下で静かに整列していたハンター達の様子が一変し始めた。モンスターの素材で作られた防具が徐々に盛り上がり血飛沫（ちしぶき）と共に防具は壊れそこから膨れ上がった大量の肉腫が辺りに広がり始めた、

ハンター達から漏れ出した肉腫は混ざり合い徐々に巨大な肉腫へと膨れ上がる、そしてその巨大な肉腫の形は徐々にある生物の形へと変化していく巨大な大蛇ラヴィエンテに通じるものがあるがラヴィエンテとは違い牙無く頭部に二本の折れまがった角が生えている。

「フフフ、素晴らしい!!私の年月をかけて世界中をかけずり回りながら古代文明の研究の成果の一つが今この時を持って成就(じょうじゅ)した!!!彼らもこの姿になれて本望でしょう、彼らの象徴である者の姿になれたのですから!!!さぁ、始めましょう!!!私が王となる最高の舞台を!!!」

メゼポルタ　ギルドナイト本部

ギルドナイト本部の事務室では他の職員と共にエビィーとシンが大陸各地から送られてくるモンスターの狩猟依頼等の処理をしていた。

「珍しくプレゼントがあると言われて来てみたら、やっぱりこれか・・・・」

「あはは・・・後でなんか奢るから手伝ってよシン君。」

「今日は非番なのに・・・・まぁ良いけど・・・・・」

「さすがシン君!!ほんと神様だわ~。」

「神様も安くなったもんだ・・・・」

エビィーとシンが狩猟依頼の処理を行っているとブロードがユーノを連れて事務室の中へと入って来た。ユーノの顔つきは前の様に暗

くは無く明るさを取り戻している、それを見たエビィーは関心した表情でユーノ達を迎えた。

「やぁ、ユーノ。見た感じだと、少しは良くなったみたいね。」

「はい・・・・・」

「ほら、ユーノ。エビィーさんに言う事があるだろ？」

ブロードはそう言うとユーノを後押しする様に肩を軽く叩きユーノをエビィーの元へと向かわせた。

「すいませんでした。向こう見ずな行動ばかり取ってしまって・・・・」

「うん、それで？これからはどうするつもり？ギルドナイトを続ける？それとも辞める？一応もう二つの書類はもう用意してあるんだよね～後はユーノがサインするだけ。」

エビィーはそう言うと二つの紙をユーノに手渡した、このままメゼポルタの民を守るためにギルドナイトを続けるか、それとも辞め普通のハンターとしてひっそりと暮らしてゆくか。

「今回のユーノみたいな向こう見ずな行動ばっか取られるとギルドナイトとして品位も落ちるし、同じ職務に就くギルドナイトにも迷惑がかかる。私としては辞めた方がいいんじゃないかな～。」

「エビィーさんそれ誘導に」

「シン君は黙ってて。」

「書く物・・・・貸してもらえますか？」

「はい。」

ユーノはエビィーから羽ペンを貸してもらうと渡された二つの紙のうちの一つを手に取り、その紙に自分の名前をサインしエビィーに手渡した。エビィーはユーノから紙を受け取るとその紙のユーノのサインした所に重なるようにギルドの印を押し紙を机の上へと置いた。

「はい、手続き終わり。一応今ならまだ取り消せるよ、どうする？」

「取り消す必要はありません、私の下した今の決断に迷いはありません。これからも私は人々を守ってゆくこのギルドナイトの職務を全うします。なのでよろしくお願いします先輩方。」

ユーノはそう言うとエビィーに向け頭を下げた。

「わかりました、しかし次このような真似したら次は無いと思え。ユーノ隊員。」

「はい！」

「では、早速ブロード隊員と共に職務に当たってもらう。ブロード隊員後は頼むよ。」

「了解しました。行くぞユーノ！」

「はい！！」

ブロードはユーノを呼ぶと事務室から出て行った。

「はぁ、よかった・・・ここでユーノが辞めるって言い出したらまた重要な戦力が居なくなって非常時が大変な事になるところだったよ・・・・」

「じゃあ、あんな意地悪しなきゃ良いじゃないかエビィーさん。」

「なに言ってるの、ギルドナイトは普通のハンター達が集うお遊びギルドじゃないんだよ。このメゼポルタの治安から各地域の緊急依頼の派遣まで幅広くやっていく組織なんだ。正直もっと厳しく律しても良いくらいだよ。」

「エビィーさんがそこまで考えてるとは・・・あっ伝書鳥だ、やけに羽がかけてる鳥だな・・・・」

シンはそう呟きながら伝書鳥の足に括りつけられている手紙を取り暗号解読を始めた、暗号解読書を開きながら徐々に暗号を解読していくとシンの顔がどんどん険しくなっていった。

「どうしたのシン君、やけに顔が険しいけど鼻が痛むの?」

「エビィーさん、絶島のラヴィエンテの動向は?」

「え、キャラバンの報告だと活動し始めた様だから今朝いつも通りハンター達を募って鎮圧作業に向かって行ったけど・・・・どうしたの?」

「これを見てくれ。」

「んー・・・何だこれ、アクラ地方面の大陸にラヴィエンテと思われる巨大生物の出現を確認現在の生物の進路上メゼポルタに重なる恐れ有り・・・・」

「本当だと思う？」

「こんなのあり得な・・・・」

エビィーはそう口にしようとしたが少し黙り込んでしまった。昨今（さっこん）のイレスデウスの出現そして他大陸のモンスターイビルジョーによるメゼポルタへの襲撃そしてイレスデウスの活動停止に準じての古龍種の出現率の減少そして謎の生物の出現、どれも今回の件には全く関係ないが近年この大陸で起きている異常の多さを考えるとこの報告も一方的に蔑ろにするにはできなかった。

「・・・ともかくこの件は大長老に報告及びアクラ地方方面に気球船を飛ばして情報の確認をシン君は行って。私はギルドナイトの召集及び調査に同行してくれるハンターの募集を募り民間区の住民の避難勧告を出すから。」

「わかった。」

シンはそう言うと急いで事務室を後にし大老殿へと向かった。

「全員話は聞いたでしょ！！非常事態宣言、各自準備して！！！」

気球船　操舵室

「まったく、なんだってアクラ地方に気球船飛ばさなきゃなんないんだ。観測気球の爺サボってんのか？気球船は観測気球じゃないんだぞ・・・・」

「まぁそうぶつくさ言わずにちゃちゃと観測して、メゼポルタに帰りましょうロイド船長。」

「今日はせっかくダルカンさんの娘さんと会う約束してたのに・・・・」

ロイドと呼ばれた男は文句を口にしながらアクラ地方へと進路を進めて行くと突如紫色の雲が前方に現れ始めた。

「なんだ？あの雲やけにどくどくしい色してるな・・・・一応窓閉めとけ。」

「了解ニャ！！！」

ロイドは計器をチェックしていたアイルーに命令した時だった紫色の雲の中から突如大蛇が口を開きながら気球船目掛けて突っ込んできた。

「うおっ！！！」

咄嗟（とっさ）に横に大きく舵を切るロイド、大蛇は気球船の横をすれすれに通りすぎ地中へと潜って行った。

「直ぐ伝書鳥をメゼポルタへ飛ばせ！！」

「はいニャ！！！」

「少々荒っぽい運転になるが踏ん張れよ全員！！これより高速巡航に入り全速で離脱する！！」

メゼポルタ　ギルドナイト本部　講堂

講堂内は突然召集命令を出され召集されたギルドナイト達が集められていた。なんの情報も無く突如集められた彼らはさわめいている。

「何が起きたんでしょう先輩、ギルドナイトの他にもレジェンドラスタの方達も数名います・・・・・」

「定例会議でもないのにこれほどの数のギルド関係者が集められる事態が起きたと言う事だ覚悟しておいた方が良い・・・・」

「・・・・・」

ユーノとブロードが会話をしていると講堂の中に険しい顔をしたエビィーと大長老補佐官達数名が入って来た。見た目が若い竜人族の補佐官が壇上の上に立つと講堂へ集まったギルドナイト達は静まり返った。

「諸君、忌々しき事態が起こった。現在ラヴィエンテの変異種と思われる巨大生物が我が大陸の北部に現れ現在メゼポルタへ向け進行中だ。これよりメゼポルタハンターズギルドはパローネキャラバンの大討伐方式に則りこのモンスターを討伐する事とする事を決定した。」

補佐官の言葉がギルドナイト達の耳に入ると講堂内再びざわめきに

包まれた。

「静まれ！！！」

補佐官の飛竜の咆哮にも劣らない声が講堂内に響き渡り再び講堂内は静寂に包まれる。

「諸君達も信じられないのも当然だ、当の私でさえも信じがたい状況だしかし事実だ。現在絶島方面でのラヴィエンテの大討伐をキャラバンとギルドで連携して行っている今人出が不足している。だからこそ落ち着き例え少人数でもギルドナイトとハンターそしてレジェンドラスタの諸君達で連携の取れるよう対処していかなくてはならない。」

「いかなる時も対象のモンスターを掌中入れ討伐し弱き民を守るのが我々ハンターズギルドだ。今こそ君達ギルドナイトの制服の背中に掲げた紋章に誓い敵を葬りこの街を守る時！！！武器を取り如何なる苦難があろうとも怒りや憎しみに打ちひしがれようとも、その感情は胸に沈めてはならない！！その感情を両足に込め君達を支える礎（いしずえ）とせよ！！健闘を祈る！！私からは以上だ、引き続き作戦の概要（がいよう）をエビィー隊員より説明してもらう。」

補佐官はそう言うと壇上から降り引き続きエビィーが壇上へと上がり今回の作戦の概要を説明し始めた。

「本作戦は補佐官が先程おっしゃっていた通りパローネキャラバンの大討伐方式に則り突如現れたラヴィエンテ変異種を討伐及び撃退を行って行きます。部隊は主に三つに分ける事とします、一つは討伐部隊二つ目は気球支援部隊三つ目は防衛部隊四つ目はメゼポルタの住民を守る擁護部隊です。」

エビィーはそう言うと先ほど壇上に上がっていた補佐官とは違う補佐官達に目配せをし補佐官達は大陸地図を広げ講堂に備え付けてあるボードにそれを張り付けた。大陸地図には現在のラヴィエンテ変異種の位置と進行予定ルートそして本作戦内容の部隊の配置位置が記されていた。

「討伐部隊と気球支援部隊はラヴィエンテ大討伐時となんら変わりは有りません、そして擁護部隊も古龍襲撃時と同じ行動を取ってもらいます。が三つ目の防衛部隊はメゼポルタ近郊に三つの防衛線を張る事とします。この防衛線はもし討伐に失敗及び遅れが生じた場合ラヴィエンテ変異種の足止めとなります。なお現時点で絶島にて大討伐を行っている為パローネ及びギルド内は人出が足りない為一般のハンターからも募集を募る事とします。皆さん十分連携を取り作戦に挑んでください、ではこれより編隊を行います。」

エビィーはそう言うとギルドナイトの名前を読み上げ編隊作業へと取り掛かった。

68節　群と暴（後書き）

本当は予約投稿して寝るつもりがガチ寝して今の微妙な時間に起きてしまった・・・こういう時二度寝するのもなんかあれですよね。

69節　蟒蛇　うわばみ（前書き）

昨日はよつばとの最新刊の発売日でしたね。ああいうほのぼの漫画が大好きなんですよね。そのよつばとに出てくるキャラクターの中にジャンボって言う人がいるのですがそれがなんとなく友達に似てるんですよね～。

69節　蟒蛇　うわばみ

気球艇　討伐部隊準備室

準備室内ではハンター、ギルドナイトが狩猟武器の手入れとアイテムの確認準備を行っていた。今回相手するのはまだ誰も見た事の無いラヴィエンテ変異種準備を怠る事それは死に繋がる、準備は入念に行わなければならない。

「まだ着かないのでしょうか？ギルドナイトさん？」

剛種（ごうしゅ）ボウガン天狼砲（てんろうほう）【北斗（ほくと）】を装備した男性ハンターが隣に居たギルドナイトに気球艇の現在位置を聞いてくるとギルドナイトは懐にしまってある大陸地図を取り出しおおよその現在位置を指さしながら隣のハンターに言葉を返した。

「気球艇を出た時点で目標の現在位置のおおよその位置はここだ、もうそろそろ見えてくるころだ。」

「なるほど、解りました。」

男はそう言うと再びライトボウガンの手入れを始めた。ギルドナイトもしばらく双剣の手入れをしていると準備室の扉が開かれ気球艇の搭乗員が目標を目視で確認との連絡が伝わった。搭乗員がそう言うとハンター達を乗せた気球艇は高度徐々に下げて行き飛び降りれる程の高度を保つと準備室後ろのハッチが開け放たれ準備室内に風を切る音が響いた。

「良いか！！敵はもう眼前だ！！俺達は選ばれた、それはなぜか！

？俺達が適任であるとギルドが認めたからだ！！自分の技量そして力を武器に今こそメゼポルタを守る時！！行くぞ！！」

一人のハンターがそう叫ぶとハンター達は剛鉄（ごうてつ）でできた武器を握りしめ次々と狩猟場へ降下して行った。

メゼポルタ　北部　第3防衛線

防衛線内では様々なモンスター対策の拠点兵器が軒を連ねハンター達はその拠点兵器の点検及び自身の武器の手入れとアイテムポーチ内の確認作業そして兵糧（ひょうろう）の運搬を急ピッチで進めていた。既に討伐部隊はラヴィエンテ変異種との交戦へと入っているとの通達が入った為第3防衛線を担当するハンター達の作業を更に急がせた。

「ラヴィエンテ変異種・・・今まで絶島以外で確認されていなかったラヴィエンテが何故アクラ地方に面する北部から現れたんですかね、ブロードさん？」

「近年この大陸で起こった事を考えてみろ。」

「やっぱりイレスデウスの出現が何かのきっかけに・・・・。」

「それも考えられるが俺はそれが原因じゃないと思うな、この大陸で何かが狂いだしたきっかけは多分黒龍騒動からだと考えられる。」

「黒龍騒動・・・ヨハネス司令の謀反（むほん）がきっかけになった事件ですね。でもその事件で放たれた改造変種モンスターはもうすべて駆逐済みのはずでは・・・・」

「確かにあの改造変種モンスターはもうこの大陸には存在しない。

だが肝心の首謀者の司令がまだ捕まっていない、二年も大陸中を探し回っても尻尾の一つも掴めてない。」

「それに司令は二年前俺の目の前でこう言って去って行った。」

【今度は私が作り出した新世界で会おう。もっとも君達はその世界で生きる事は許されてはいないだろうがね。】

「新世界ですか?そんな事言って去って行ったんですか司令は、意外とヨハネス司令はロマンチストなんですね。」

「まぁ、新世界を作り出すと言っている時点でリアリストではないだろうな。それに俺もその時司令の手下の女と戦っててあまり覚えてないがアンサラーを作り出すとも言ってたな・・・・」

ユーノはブロードが口にしたアンサラーと言う言葉を聞き少し驚いてしまった、まさか自分とナターシャ以外でアンサラーと言う言葉を知っている人物がましてや身近にいた事に。

「どうした?ユーノ?」

「いえ・・・なんでもありません。」

「そうか、まぁ憶測だがまた司令が動き出したんだと思うな。前回はジュノさんが黒龍を始末してくれたけど、もうジュノさんは居ない・・・・俺達でなんとかするしかないな。」

「・・・・そう言えばその黒龍ですけど突如現れたんですよね?」

「あぁそうだが・・・・」

「その黒龍って本当に黒龍だったのでしょうか？」

「何を言ってるんだ？俺は見てないがその時旧ドンドルマで黒龍を目にしたハンターは沢山いるしレジェンドラスタのフローラさんも目撃してるしその時陣頭指揮を取っていた大長老も実際目の前で目にしてるんだぞ。」

「ブロードさん、黒龍に関してこんな伝説があるのをご存知ですか？キョダイリュウノゼツメイニヨリ、デンセツハヨミガエル　数多の飛竜を駆逐せし時　伝説はよみがえらん　数多の肉を裂き　骨を砕き　血を啜った時　彼の者はあらわれん」

「それ位俺も知ってる現に司令が謀反を起こす前にジュノさんを使って様々な飛竜と古龍の宝玉を集めてたから、黒龍が蘇ってもおかしくは無い状況だろ。」

「なるほど・・・・では黒龍が出現する前にラオシャンロンが出現した記録はありましたか？」

「ん～二年前の記憶だからあやふやだが出現は確認されてないな。」

「そうですか。まぁこれはとある古龍学者の説なんですけど黒龍が蘇る前ってラオシャンロンの目撃数が増えるんだそうです。それにラオシャンロンは自分の縄張りを定期的回っているとされてますけど実は何かの存在から逃げる為に突如現れるとも言われてます。」

「・・・・ユーノ雑誌の読みすぎだ、話が段々オカルト染みてきて

るぞ。」

「あっ・・・すいません。あくまで仮説ですからね、それに今はそんな話はしてる事態じゃないですしね。」

「そうよ～喋ってる暇があったらあんた達も兵糧運ぶの手伝いなさいよ！！」

そう声がし後ろを振り返るとブロードとユーノの後ろには兵糧を抱えたナターシャが立っていた。

「全く、なんで私がこんな力作業しなくちゃならないのよ・・・・ほらブロード！アナタ持ちなさいよ！！」

そう言うとナターシャは両手に抱えている兵糧をブロードを放りなげた。

「うおっ！！いきなり投げつけないでくださいよ！！」

「アナタさっきから拠点兵器の手入れしかしてないじゃない、少しは力仕事しなさいよ！」

「はい・・・」

ブロードはナターシャにそう言われるとしぶしぶと兵糧を運びだした。ユーノはナターシャと二人きりになると前線の方の情報を聞きだした。

「ところで討伐部隊の状況は今どうなってるんですか？」

「以前交戦中みたいよ・・・・支援部隊からの話によるとどうもラヴィエンテ変異種の姿は通常のラヴィエンテの様に二本の牙は生えてない代わりに二本の角が生えているそうよ。それと竜と言うより蛇みたいな外見みたい。」

「蛇ですか・・・・わかりました。」

ユーノはナターシャから情報を聞き出すとまた拠点兵器の調整に入った。

討伐部隊　前線

前線では依然ハンター達とラヴィエンテ変異種との闘いが繰り広げられていた。

「はっ！！　未知の生物狩りだ、楽しませてもらうとするか！！」

男性ハンターはそう言うと太刀での一線をラヴィエンテ変異種に喰らわすがあまり効果的なダメージは与えられなかった。ラヴィエンテ変異種は自身の体をくねらせると体表面から紫色のガスを噴出し辺りを曇らせた。それを吸ったハンター達は体に異変を感じ思うように力が入らなくなる。

「クソ、毒霧か・・・こりゃあ狩りを楽しむ余裕はねぇぞ。」

「・・・・こりゃあ報酬上乗せだな。」

ハンター達はあらかじめ用意しておいた状態異常回復薬を口に含むと紫色に染まった空間へと走って行きラヴィエンテ変異種の体表目

掛け攻撃を続けた。しかし

「おい、奴に囲い込まれてるぞ俺達！！！」

一人のハンターがそう叫ぶとハンター達は霧の晴れた空間を見渡すとラヴィエンテ変異種がハンター達を囲い込むように体を曲げハンター達を見降ろしていた。

「くそ、このまま締めあげられたら終わりだぞ！！！」

「締め上げられる前に押し返すまでよ！！」

一人のハンターがそう叫び体表目掛け攻撃をしていくがここで彼らのハンター人生は幕を退く事になる通常のラヴィエンテと戦っていたのならこのまま攻撃していれば怯ませそして押し返す事ができただろう。だが彼らは気づいていなかったこのラヴィエンテ変異種は今までかなりの攻撃をしてきても一切(ひる)怯んでいない事を。そしてもう一つ驚愕の事実を知ることになる、ラヴィエンテ変異種は通常のラヴィエンテとは違い動きが緩慢(かんまん)で無くその巨体に似合わず素早い事に。ラヴィエンテ変異種は一瞬で囲んだハンター達を締め上げハンター達は人の体から一瞬にして違う物へと変えられてしまったもう彼らの頼もしい声を聞く事は出来ない。彼らはもの言わぬ只の肉片になり果ててしまったのだから。

気球艇　操舵室

ハンター達を運んでいた操舵首はその一瞬の光景を見て茫然としていた、メゼポルタを誇る精鋭たちが一瞬にしてやられてしまったのである。

「と・・・ともかく伝書鳥を防衛線へ討伐部隊は全滅したとほ」

ラヴィエンテ変異種は上空を迂回していた気球艇目掛け尻尾による攻撃を放ったその攻撃は見事気球艇に当たり気球艇は直ぐ近くを同じく飛行していた支援部隊の気球艇へと直撃し二つの気球艇は爆発しながら地へと落ちて行った。ラヴィエンテ変異種は共に落ちて行った気球艇を踏みつぶすようメゼポルタへ向け恐ろしい速度で蛇行して行った。

メゼポルタ　北部　第3防衛線

「うそでしょ！！」

一人の女性ギルドナイトがそう声を上げると周りが声を上げたギルドナイトに注目した。彼女の顔を見る限り信じられない事態が起こった事は間違いない。

「どうしたんです？」

ブロードが女性ギルドナイトに声をかけると女性ギルドナイトは震えた声で伝書鳥による伝令を読み上げた。

「討伐は失敗、現在目標は第二防衛線に突入。」

「・・・・っ！！」

ブロードはその報告を聞くと急いで周りを大声を上げながら防衛線を駆け巡った。

「目標はもうすぐそこまで来てる!!みんな狩猟の準備を!!!」

しかし時すでに遅しかろくな準備もできていないままラヴィエンテ変異種は第三防衛線の張られている場所へと現れた。ハンター達は拠点兵器での攻撃を試みるがラヴィエンテ変異種はその攻撃を物ともせず拠点兵器が張られている箇所目掛け尻尾でのなぎ払いを行い拠点兵器を次々と破壊して行く。

「そんな・・・・早すぎる・・・・・」

「ユーノ早く構えろ来るぞ!!!」

「来たわ!!行くわよ!!!」

残されたハンター達はラヴィエンテ変異種に向け駆けて行くたとえ相手が強大な相手であろうとハンターは剛鉄でできた武器を掲げ駆けて行く、人々の生活を脅かす者がこの世に存在する限り。ラヴィエンテ変異種は口を開け紫色の煙を出しながら首を大きく掲げブレスを放つ態勢へと入る。あんな物をまともに喰らえばハンターとしていや人としての人生が終わる事がわかっていても残されたハンター達は臆することなく駆けて行った。ラヴィエンテ変異種は紫色のブレスは先に駆けて行ったハンター達に着弾しそれに当たったハンター達は黒い液状になってしまった。身に纏っていた防具ごと解かされてしまったのである。

「はっははは・・・・」

ブロードはその光景を目に口から乾いた笑い声が漏れだす、ナターシャもその光景を見て絶句している。圧倒的すぎるのだ彼等が今回

相手をしているモンスターは。残された少数のハンター達はその光景を見て武器を手放しその場で錯乱する者や茫然と眺めている者何かをぶつぶつ言っている者が出てきた戦意が喪失してしまい理性が壊れてしまったのである。ユーノは茫然と空を眺めていたすると一隻の飛空艇がラヴィエンテ変異種の辺りを飛んでいるのが目に入った。その飛空艇は徐々に高度落とすと飛空艇から赤い衣を纏った男と大剣を背負った男性そして太刀を背負った女性が出てきた。

「どうかねハンター諸君、これが私の提唱した新世界に賛同しなかった君達の運命だよ。」

「あなたは・・・・ヨハネス司令・・・・」

ナターシャがそう呟くと赤い衣の男は顔を覆っているフードを取り払い顔を露わにした。フードから現れた顔は慢心(まんしん)に満ちた顔をした男だった。

「ナターシャ君かどうかね?私が王となる舞台は素晴らしいとは思わないかね?かつて君達5人が下した決断がこのような結果を招くとは想像できたかね?」

「・・・・・」

「ふっ、どうやら私の演出に見惚れて声も出ないようだ。」

ヨハネスはそう言うと次はユーノの方へと向きユーノに声をかけた。

「これはこれは、今回の私の王となる舞台の最高の貢献者様ではないか。ありがとう!君のおかげで私の舞台の邪魔になる者を簡単に消せる事ができたよ。」

「邪魔に・・・なる者・・・？」

「君の師であり大陸を震撼させたモンスターの正体でもある彼だよ。」

ヨハネスのその言葉を聞くとユーノの頭の中に一人の人物が思い浮かんだかつて共に笑い様々な事を教えてもらった彼の顔が。

「・・・・・」

「ふっ、さぁ舞台の続きを始めようじゃないか！！」

ヨハネスはそう言うと飛空艇は高度を上げラヴィエンテ変異種は首を大きく上へと掲げユーノ達残りのハンター目掛けてブレスを放つ動作をした。

「（これが私の決断した運命の答えか・・・・）」

ユーノそう思いながらラヴィエンテ変異種の放ったブレスがゆっくりと自分の元へと向かってくるのを見ていた。

「やっぱり間違えだったんだね・・・・」

ユーノはそう呟くと目を瞑ろうとしたが突如目の前に何かが放たれラヴィエンテ変異種の放ったブレスかき消されラヴィエンテ変異種は咆哮を上げた。ユーノは瞑りかけた目を開き辺りを見るとラヴィエンテ変異種の体には無数の蒼い炎で形成された槍が突き刺さり体を拘束されている状態であった。

「これは・・・・・」

「ユーノ・・・あれ・・・・」

横にいるナターシャは口を手に当て目を潤ませながら何かを指さしている、ユーノもナターシャが指を指している方向に目をやるとそこにはとても懐かしい人物が立っていた。彼女が二年間追い求めた者が。

「待ったかお前達、道が混んでてね。」

69節　蟒蛇　うわばみ（後書き）

蟒蛇（うわばみ）って言うのは昔の言葉で蛇って意味です。関係ない話になりますけどＧａｃｋｔがスノーボードギアとウェアをキスマーク（だったかな）というスノボー関連を多く販売してる会社と共同開発したそうです。ボードは去年新しいの買ったからウェアだけほしいな～

□（前書き）

【0】

???

誰かが体を強く揺さぶりながら自分に声をかけて来る。しかし体全体が熱を帯び痺れているのか聞こえてくる声も途絶え途絶えである。

【・・・き・・・て・・・・】

『（ん～?）』

【お・・・よ】

『（およ?）』

【起きてってば!!!】

少女の声が耳元で明確に聞こえ男は眠りから覚醒した。

【やっと起きた!君いくらなんでも寝すぎ～君が寝てる間君の仲間が大変な事になってるよ!!】

『・・・あのアンサラーが死ぬ作用が入った弾を喰らったのになんで死んで無い・・・・あっなるほど意識だけの存在になったのか。』

【ん～?意識だけの存在?もともとここはあたしの意識の中に君の意識の存在認めてるからもともと意識だけの存在だよ君は。それに君の体はまだあたしの体に覆われて失われてないるから意識だけの

存在って訳じゃないよ。】

『えっ？どういうこと？』

【そのままの通りだよ私の体に覆われてるから君の体はまだ健在だよ。】

『いやそれはわかってるけど。あの時喰らった弾丸で俺の体もお前の体も間違いなく細胞死したはずだろ？その筈なのになんで俺の体は健在なんだよ？』

【あ～その事か・・・・あたしもよくわからないけどＰＣＤ弾を受けた時に君自身の体が保有してるエントロピーが変化して染色体構造が変わってね途中まであたしの体と同じように細胞が破壊され体が壊死（えし）仕掛けたんだけども途中でそれが～】

『・・・・頼む、多少古代文明の知識は多少分かるようにはなったがもっと簡単にわかりやすく説明してくれ。』

【え～・・・・う～ん・・・・・】

蒼い髪の少女が顎（あご）の先端をつまみ左手でつまみ右手を腰に当てしばらく黙り込んだ。どうやらこの格好が彼女の考えるスタイルらしい。

『（なんでこいつこんなにいろいろ知ってんだ？）』

【すっごく簡単に言うとあのＰＣＤ弾をあたし達が喰らった時に君の体の中の情報が急速に書き換えられた。それであのアンサラー細胞を破壊するＰＣＤ弾を喰らっても死ななかったってわけ。まぁ多少の時間行動できなくなったけどね。わかった～？】

『まぁさっきよりかは・・・・』

【うむ。ってそんな場合じゃないんだよ！君が寝過ぎたおかげで君の仲間が窮地（きゅうち）に立たされようとしてるんだよ！！】

『・・・・どういうことだ？』

【言った通り今この大陸に私たちとはまた別な異質な存在が現れたんだよ。君もわかるでしょ感覚と研ぎ澄ましてごらんよ。】

少女の言った通りに男は感覚を研ぎ澄ますと少し遠くではあるが確かに妙な存在を探知することができた。それは大勢でもあり一つの生命体として感じることができる不思議なものだった。

『確かにこれはまずいな・・・普通のモンスターの気配じゃない。』

【うん。でどうする？君は助けに行く？】

『そりゃあもちろん！せっかくあいつらと共に生きていくって決めたんだからな！！』

【よかった。君のことだからまた迷うのかな～って思ったけど、これなら一人でも大丈夫そうだしあたしの神獣としての全能力を受け渡しても大丈夫だね。】

『全能力？』

【そう、全能力。今までは君が危険な目に会った時とかはあたしが

勝手に出て能力を行使したこともあった。そして君が2年前能力の最適化を行った際君は自分で能力を行使する事が出来るようになったけど、能力を使う事をやっぱり心の何処かで恐れた。ちがう？】

『・・・確かに他の人に見られたら更に怖がられると思ってた。』

【でしょ。その思いのせいで君は自分では全力で能力を使ってるつもりでも心何処かでそれを押しとどめて不安定だった。そしてその負荷によってできた欠損ができやすくなって強く頭をぶつけただけで障害が起きてた。それを見かねてあたしは欠損の除去と記憶の再構成時に目覚めて君の代わりに能力の制御を行ってた。まぁ・・・ちょっと失敗したこともあったけど。】

【今の君にはもうその恐れは無いし、強い意志もある。この状態なら君に私を託せる。】

蒼い髪の少女はそう言うと少女の体が光だした。

【さぁ！時間が無い！！行こうＪ－１０１。君の仲間を助けるために！！】

『違う、俺はＪ－１０１じゃない。俺の名前はジュノだ！！』

【あはは！！そうだったね。じゃあ行こう！！ジュノ！！】

少女の輝いている体は丸い球体になりジュノの胸のへと吸い込まれて行った。

【うむ、以上は見られないね！！】

少女の声がジュノの頭の中で響くしかし前より正確ではなく少し籠って聞き取りずらい。

『おい、お前の声が聞き取りずらいんだが。』

【そりゃ、そうさ。君に全制御権を譲ったんだから、それとも何あたしの声が聞こえなくなると心細いのかなぁ～？】

『確かに心細いな、今まで俺の知らない所でお世話になってたし。最後に名前くらい教えてくれよ、お前にも有るんだろ？』

【えーいまさら～？まぁ・・・・良いか。あたしは神獣の時はアシャ・ワヒシュタって人間に呼ばれてた。】

『そうか・・・・ありがとうアシャ。』

【いいって事さ～あとさい・・・・】

『ん？アシャ！？』

少女は自分の名前をジュノに告げるとジュノの頭の中で何度も呼びかけてもとうとう彼女の声が響く事は無かった。

≪大丈夫だよ、君にはあたしがついてるから。無くした思いを取り戻すために一緒に行こう！≫

アシャがジュノに前言った言葉が頭のをめぐるとジュノは前を向き歩みだした。自分を人間だと肯定してくれた仲間を助けるために。

『・・・・行くか。』

メゼポルタ　求人区　郊外

求人区郊外の広場では活動を停止したイレスデウスの体が光りだしイレスデウスの体が置かれている広場の警備を行っていた衛兵が慌てふためいていた。

「な・・・・なんだ!?何が起きてるんだよ!?」

イレスデウスの体は徐々に輝きを増すとイレスデウスの体はひび割れイレスデウスの体は粉々になり粉々になった破片の中心に男が立っていた。

「だ・・・・誰だ!!」

衛兵は装備していた片手剣を手に取り男に向けて刃を向ける、しかし男はそれに動じず衛兵に向かって話しかけた。

「止めとけ、給料安いんだろ?それより今メゼポルタはどうなってるんだ?変なモンスターが現れたんだろ?」

「うっうるさい!!質問に答えろ!?」

「・・・・こりゃ時間の無駄だな。」

男はそう言うと男の体が輝きだし背中に蒼く光った紋様が浮かび上がりその場を飛び去って行った。

「・・・とっともかく隊長達に連絡しないと!!」

70節　Returner

メゼポルタ　北部　第3防衛線

第3防衛線上には拘束されたラヴィエンテ変異種と突如現れた男に驚いているユーノ達が居た。

「な、なんだ?どうしたんだ、これは!?」

飛空艇から下の様子を見ていたヨハネスが狼狽している。

「どうした舞台は終わりか?」

「貴様!ジュノ!何故!!貴様は死んだはずだ!!!」

「どうも、俺は特別製でね。」

ジュノはそう言うと辺りに散らばっていた武器の中から丁度地面に突き刺さっていた氷双剣ヴァイスヴィントを引き抜いて片方を背中にしまいもう片方を手に取り周りを歩きだした。

「しかし、なんだこの舞台は?演出は酷いわ変な臭いのする蛇は居るわ、舞台の主演男優の顔はいまいちで最悪だな。せめて舞台主役

男優は俺位のランクの顔にしないと。」

ジュノはそう言うと手に持った双剣の刀身を自分の顔が映る位手で磨き刀身に映った自身の顔を見つめた。

「おまけに人の問題に勝手にクビ突っ込みやがって・・・もうちょっとマシな趣味を持つのをお勧めするね。」

「・・・今更貴様が来た所でとて同じ事だ!!さぁ続きだ!!」

ヨハネスが声を上げるとジュノの放った炎槍によって拘束されていたラヴィエンテ変異種はその拘束を無理やり取り払いジュノに向けて口を広げ食いかかりジュノを飲み込んでしまった。

「ははははは!!所詮は口だけの存在に過ぎなかったと言う事だな。」

ヨハネスがそう言い高笑いを浮かべているとラヴィエンテ変異種は突如もがき苦し体内が蒼く輝きだし蒼い火柱と共に燃え上がり灰と化した。

「なっ・・・・・。」

「お前も進歩ないね全く。」

「クッ・・・・ここは退くぞ!!セレイン!!」

ヨハネスは隣に居た金色の髪の女に命令を下すと金色の髪の女は飛空艇から飛び降り目にも止まらぬ速度でジュノに向かって太刀を抜き切りかかって来た、ジュノもそれに反応しもう片方の双剣を抜き攻撃に移り二人の間では目にも止まらぬ剣戟がしばらくの間繰り広

げられジュノの双剣とセレイン太刀が同時にぶつかった時セレインはジュノに対し口を開いた。

「これがお前の答えか？Ｊ－１０１」

「そうさ、これが俺の悩んだ末の答えだ。それに俺の名前はＪ－１０１じゃない、俺の名前はジュノだ！！」

「・・・・そうか。」

セレインは太刀に力を込めジュノを突き放すと能力を発現させヨハネスの乗っている飛空艇へと飛び立ってしまった。

「はぁ・・・・せっかく美人の女優が舞台に出てきたと思ったらもう終わりか。つまんねぇな」

ジュノはそう言い双剣をしまうとユーノ達の元へとゆっくり向かいへたり込んでいるユーノのすぐ前へと止まった。

「ほら、ちゃんと預けてたもの取りに帰って来ただろ？」

「取りに来るのが遅すぎですよ・・・・・」

「ハッハー！！悪かった悪かった。」

ジュノはそう言うとユーノの頭をなで始めた。

「色々俺の事で悩んでくれてありがとうなユーノ。そしてごめん」

「・・・・」

「ん？ユーノ？」

「何カッコつけてるのよアンタ！！」

ナターシャの声と共に弓矢がジュノの元へと飛んできたがジュノはその弓を難なく掴み取った。

「フフフ、今の俺にお前の弓の攻撃等効か」

シュ！！！

「ぬぅ！！！」

ナターシャはジュノの喋っている隙を見て更に弓矢を放ち弓矢はジュノの額に刺さった。

「おいおい、たまげたね！！助けたお礼に射抜くとはな！！一応刺さると痛いんだぞ！！！」

「うるさい！！！これは罰よ！！！大人しく受けなさい！！！」

「（―どうも女運は良くないらしい。）」

ジュノが頭で思った事を感じ取ったのかナターシャがジュノに対し龍の睨みにも劣らない睨みをジュノに向けた。

「ヒィッ！！」

ナターシャは連続してジュノに向け弓矢を放ちジュノはその攻撃か

ら必死に逃げ惑う。

「助けてブロードおじちゃん！！！」

「えっ！！ちょっと！！！」

「卑怯よジュノ！！ブロードの後ろから出てきなさい！！！」

「ヤダね！！！」

「ちッ！！！昔のあんたの恥ずかしい過去みんなにばらすわよ！！！」

「てめっ！！それこそ卑怯だ！！！」

ジュノはブロードの後ろから顔を出しながらナターシャと口論を始めている、でもその口論はけんか腰では無くただ仲の良い者同士の口論にユーノは見る事は出来た。

「（私の決断した運命は・・・・間違って無かった。間違って無かったよお母さん。）」

ユーノの顔には笑みがこぼれていた。

【】（後書き）

簡単な化学用語説明

ＰＣＤ
これはプログラム細胞死って意味で詳しい事は登場人物紹介４　その他を参照してください。

エントロピー
物理化学で主にお目にかかる用語。エントロピーって言うのは変化の具合と考えてください。例えば水にインクを垂らすとインクが広がりますよね。これがエントロピーが増えてるって物理化学の世界では言います。エントロピーはいったん変化したら元に戻ることは無いです。物質の拡散度合いとも考える事が出来ますね。生物で例えると生物が成長するという事はエントロピーが増大するってことです。でも生物は成長する際に排泄物等を出しますよねこの場合生物は環境にエントロピーの大きなものを吐き出して生きてるんですね。排泄物（主に二酸化炭素とか）って環境に対してあまり良いものではないですから。だから環境にあまり負担のかからないＥＣＯカーとかが出回ったりＣｏ２削減案とかがあるわけです。

染色体
染色体っていうのは細胞分裂時にＤＮＡが分裂の際に生まれる細胞にＤＮＡ情報をスムーズに渡すために染色体と言う形になるんです。イメージとしては自分の布団を圧縮布団袋に入れて掃除機で圧縮して出来上がった布団が染色体ってイメージすると良いかも。

＊ＤＮＡってつなぎ合わせると全長２メートルにもなるんですよ。すごいですよね～生物って。

71節　帰郷（前書き）

12月ー。色々と寒くなりますよね～でも人によっては暖かくもある季節ですね。

71節　帰郷

メゼポルタ　ギルドナイト本部　拘置所

ジュノを含めた第3防衛線を生き残ったハンター達はメゼポルタへと帰って来た途端、メゼポルタに残っていたギルドナイト達に身柄を拘束される事となった。拘束された理由は恐らくジュノの事に関してだろう。2年前に死んだとされた人が突然現れ人とは違う力を発揮し戦ったのだ、当然目撃者は拘束されるだろう。

「ブロードさん、ジュノさんはどうなっちゃうんでしょうか・・・・」

「わからない。あんな奴の事よりも自分の身を心配したらどうだ?」

「あんな奴って・・・・そんな言い方しなくても良いじゃないですか!あの人は私達を助けてくれたんですよ!」

「うるさい!!あんな奴俺の知ってるジュノさんじゃない!!なんだあの力は?今日戦ったモンスターだってラヴィエンテ変異種とは説明を受けてたがあんなのラヴィエンテじゃないもっと別の次元の物だ!!そんな物を一瞬で倒すなんてもっと化け物だろう!!!」

メゼポルタ　大老殿

ジュノは他のハンター達とは違い拘置所ではなく大老殿へと連れてこられていた。大老殿には大長老や補佐官を始め古生物書士隊の面々も集まっている。

「爺さん。感動の再会にしては手荒な扱いだな！！」

「フォフォ、すまぬのうジュノ。このメゼポルタでお前さんの事情を知っているのはワシと補佐官を含めた二人しかいないのでの、このような扱いをしなくてはならなかったのじゃよ。」

「ふーん、それで普段目に見ない奴とその仲間達も居る訳か。」

ジュノはそう言うと古生物書士隊達の要る所へと歩いて行ったが途中で衛兵達に体を押さえつけられた。

「止まれ！」

「ハッハー！！久しぶりに戻って来たと思ったらずいぶんと嫌われ者になってるみたいだな俺は、まぁお前達が俺を押さえつけた所でどうにもならないよ。」

ジュノはそう言うと押さえつけている衛兵達を難なく引きずりながら古生物書士隊のある人物の元へと歩いて行った。

「よぉ、今日は珍しくお部屋でお勉強じゃないんだなメガネのロン君。」

「君はとんでもない事をしてくれたね・・・・」

「とんでも無い事？」

「衛兵をこちらへ。」

ロンはそう言うと一人の衛兵を呼びつけジュノの顔を見させた。

「この男か？」

「はい！この顔間違いありません！！こいつがイレスデウスの亡骸を粉々にした犯人です。」

「あぁ、その事か・・・・それなら俺を調べれば問題ないじゃねえか。」

「君はほんとにわかって無いね・・・・僕はイレスデウスの亡骸についての研究をしようとしてたんだ。人間の君を調べて何になるって言うんだよ・・・・」

「お前・・・・」

「今日僕が研究を中断して出てきたのはその事の文句を君に言いたかったからだ。まぁ君には昔部下達がよくお世話になったし素材提供もよくしてもらったから許すけど、次からはこういう事はしないでくれよ頼むから。それでは大長老私達はこれで失礼する事にします。」

ロンはそう言うと古生物書士隊を引き連れて大老殿から出て行こうとしジュノに引きとめられた。

「おい！なんで俺に聞かないんだよ？今俺を取り押さえれば古代文明の知識やこの世界の有り様そして俺の生態について知る事が出来るんだぞ。」

「君は回答書を見ながら謎かけを解く人かい？」

「いや・・・違う・・・かな？」

「じゃあそう言う事だよ。僕達古生物学者は謎を解くのが仕事だ、君みたいな回答書が現れたら僕達古生物学者は職が無くなっちゃうからね。はぁ・・・イレスデウス・・・解明したかったな・・・・」

ロンはそう呟きながら古生物書士隊と衛兵の面々と共に大老殿を後にし大老殿には大長老と補佐官とジュノが残される事になった。

「やっぱあいつは変な奴だな。俺の知ってる情報を聞けば今の技術力が飛躍的に上がるのに。」

「学者とはああいう者だよ、ジュノ君。」

「・・・まぁでもあんた達二人には話しておこうと思う。今までいろいろと庇ってくれたしお世話にもなってるしな。」

ジュノはそう言うと自分の知りうるすべての情報を二人に話し始めた。この世界が昔どのような物で有ったか、何故モンスターが世界に居るのか、自分の存在、二年間自分はどのような状態で何をしようとしたのかを。

「とまあ、こんな所だ。」

「・・・・・」

「・・・・・」

「まぁ、最初はやっぱり信じられないよな。」

「うむ、じゃがお主が存在しておると言う事は、お主の話した内容は事実に相違ないと言う事になるのう補佐官。」

「そうですね・・・まさかそのような経由を通して今の世界が存在するとは。それでさっきの君の話によると君の様な存在はもう一人要るのだろう」

「そう、それが問題なんだしかもそいつはヨハネスの側のアンサラーなんだ。」

「なるほど・・・なら彼の技術力もうなずける。」

「あのバカの事だ、どうせあのアンサラーを利用して更にめんどうな事を起こすに違いないだから早く捕まえて豚箱に入れないと。」

「そうじゃのう・・・・ところでジュノお主の力を見たハンター達にはどう説明するつもりなのじゃ。」

「別にそのまま真実を話すさ、俺は普通の人間じゃなくて化け物だよって。」

「それでいいのか?お主の風当たりが前より更に強くなるかも知れんのだぞ。」

「ハッハー!!構わないさ人間達に嫌われようと俺は人間達を守る、俺を人間って言ってくれた人達の為にもね。さっ、気球船ドックで拘束されたハンター達を集めてくれ。俺自身からあいつらに説明したいしな。」

メゼポルタ　ギルドナイト本部　講堂

講堂内には先ほどまで拘置されていたハンター達が集められていた。ハンター達の顔は不安の色を隠せないでいる。しばらくすると講堂の奥の扉が開かれそこからジュノが入って来たジュノが入って来た瞬間ハンター達の目線はジュノに集中した。死んだ存在で異能力を行使しラヴィエンテ変異種をいとも簡単に葬ってしまった彼を。ジュノは無言で壇上に向かい壇上の上へと立った。

「久しぶりだな、みんな。まぁ知らない人は初めましてだな。俺の名前はジュノ人間じゃない古代人によって作られた古代人造兵器アンサラーって奴だ。」

ジュノが講堂に集められた皆にそう言うと辺りが少しざわめき始める。

「まぁ何言ってんだコイツってなるよなでもお前達は見ただろあのデカイモンスターを一瞬で焼き払った俺の姿をあれがアンサラーである俺の能力の一つだ。でもこの能力を使って俺はお前達を守る事にした。お前達がそれを望まなくても拒んでも俺はお前達を守るのを止めない。」

「あと別に俺の存在を他の人に伝えても構わない。それで俺に不利益な事が起きても俺はお前達・・・・いやこの大陸すべての人を守り続ける。俺と共生してくれとも望まないでも不思議な事にこんな俺でも人間と思ってくれる人達が居るその人達の事は非難しないでくれ。俺から言いたい事はこれ位か後何か質問ある奴がいたら質問してくれ。答えるから。」

ジュノが講堂内に居るハンター達に対して質問を投げかけると少しの間ハンター達は黙っていたが一人の男が手を上げた、それはジュノがよく知る人物の内の一人だった。

「あんたが人間じゃない事はわかった。でもあんたが俺達人間を守るってどういう意味だ?俺達はハンターだ自分の身を守る事なんて当たり前にできるし、力のない民を守る事もできる!あんたは俺達の職を奪うつもりか!?それにあんたは本当に俺達に危害を加えない保証があるのか!?」

「おぉ、言うようになったなブロード。確かにお前の言う通りだなハンターって言うのは民を守るものだったのを忘れてた。言い方が悪かったな、俺はお前達の職を奪うつもりはないよ。後は保証か～じゃあもし俺がお前達に危害を加えたら俺を倒せば良いんじゃない?俺はお前達から見たらモンスターだしお前達はモンスターハンターだろ?まぁ倒すのにちょっと苦労すると思うけどな。」

「・・・あんた俺達に人間の姿をした者を殺せっていうのか?できるはず無いだろう!!」

「うーん。じゃあどう保証すればいいんだよブロード?紙にでもサインするか?」

「・・・貴方はそう言う書類関係は昔からめんどくさがってたじゃないですか。」

「ふむ、確かにめんどくさいな。だから倒せばって・・・・あぁ嫌なのか、うーん話が進まねぇ・・・・おいユーノ!!」

「はっはい！？」

突然ジュノに呼ばれたユーノはびっくりして体をびくつかせた。

「なんだ寝てたのか？お前俺の事詳しいだろ、だからなんかいい案出せよ。」

「そうなのか、ユーノ？」

「いや詳しいって言ってもそんなちょっとしか知らないですよ。それに良い案って言われても・・・・」

「うーん、他の奴はなんか良い案ないの？」

ジュノはブロードとユーノ以外のハンター達に質問を投げかけるがハンター達は顔を見合わせて黙っているだけだったがしばらくすると一人の男性ハンターが手を上げ喋りだした。

「良い案って訳じゃないですけど・・・貴方は私達をラヴィエンテ変異種の脅威から守ってくれた恩人です。もし貴方が私達に危害を加える存在ならあの時貴方は私達を助けないはず、私達を助けてくれた事でもうそれは保証したって意味なんじゃないでしょうか？」

「だから私は貴方を信じますよジュノさん。皆さんもそうは思いませんか？」

男性ハンターが講堂内に集まったハンター達に問いかけると別のハンターが立ち上がり口を開いた。

「ジュノさんが居なくなる前僕はよくジュノさんにラージャンの尻

尾を切りを手伝ってもらってました。それにジュノさんは居なくなる前はメゼポルタに襲撃しに来た古龍達を撃退したりあの黒龍騒動の時だってジュノさんが居なかったら黒龍は倒される事は無かった、今回の件だってそうです。だからジュノさんは絶対僕達に危害を加える事ないです。」

ハンターが他のハンター達にそう言うとハンター達は立ち上がり今までのジュノが行ってきた事を話し始めた、その結果ジュノは居なくなる前の通りメゼポルタに居続けてほしいと言う声が続々と上がってきた、普通の人間じゃなくてもジュノはジュノである皆そういう意見で固まった。

「良いのか?前の通り生活しても?」

「もちろんですよ!だって貴方は人間の心を持ってるじゃないですか!!」

「・・・・」

【受け入れなさい、周りをすべてをあなた自身を・・・・勇気を持って、ね?】

ジュノは前アシャが自分に対して言った言葉を思い出した。

「(勇気を持って全てを話した結果がこれか・・・・確かにお前の言う通りだったよ。)」

「わかった。じゃあ今まで通り暮らす事にするで良いんだな?」

「はい、だって貴方もモンスターハンターじゃないですか！」

「・・・・そうだな。」

ジュノとハンター達が盛り上がっている所より少し離れたところでブロードとユーノはその光景を見ていた。

「なぁ、ユーノ。」

「なんですかブロードさん？」

「俺は莫迦（ばか）だな・・・・ちょっと変な所があっただけであんな大騒ぎするなんて。」

「仕方ないですよ、ブロードさんの反応は普通ですよ。私もこの事実知った時もブロードさんみたいな反応でしたし。」

「俺は今まで通りあの人とやっていけるのだろうか？あんな態度を取った俺と・・・・」

「そんなに心配する必要ないですよ、だってジュノさんは優しい人ですから。」

ユーノはそう言うとブロードと共にハンター達に担ぎ上げられているジュノを眺めていた。

71節　帰郷（後書き）

駅に張られてるリクナビのポスターがなんか気味悪い。でも嫌でも目につくから広告としては成功してるな～と思う今日この頃。

72節　線引き（前書き）

ロングコートほすぃ。風にたなびくロングコート姿の人を見るとかっこいいと思う今日この頃。

72節　線引き

メゼポルタ　共同墓地

ラヴィエンテ変異種の襲撃から二日が立った、メゼポルタの街には大きな被害は無かった物の代わりに多くの優秀なハンターとギルドナイト達がヨハネスの作り出したモンスターによってその命を散らした。その事実は無かった事にしてはいけない、生き残ったハンター達は共同墓地へと集まると献花台に花を添え黙祷を捧げた。黙祷が終わるとハンター達は共同墓地から一人一人と出て行った。

メゼポルタ　ジュノマイハウス

あの後ジュノは自身のマイハウスに送り届けられる形となった。ギルドとしては2年半前に死んだとされる人間が突然メゼポルタに現れると色々と騒ぎになるとのことで情報統制等が終わるまでマイハウス内に軟禁される事となった。

「まぁ俺が戻ってきたらある程度はこうなる事は覚悟してたけど、やっぱりなって見ると結構答えるな。」

「ご主人様の名前は大陸中で知れ渡ってますから仕方ないのニャ。」

サブローはそう言い床の掃き掃除を続けた、ジュノはベットに寝転がりながらユーノに預けておいた首飾りをいじって戻って来てから起きた様々な事を思い返していた。まず一番は自身のマイハウスが約2年半もの間撤去されずに維持されていた事だ、この件はサブローに聞くとジュノの葬儀が行われて数日後サブローは雇い主の居な

くなった事でギルドのハンター給仕アイルーの登録を変更しに行ったところ大長老と補佐官に呼び出され変更登録はせずこのままジュノのマイハウスの給仕アイルーとして働くようにと密約を交わしたためジュノのマイハウスは撤去されずに2年半の月日の間サブローは雇い主の居ないマイハウスの部屋の掃除をし続けたと言う。サブロー自身もその行為に疑問を抱きつつも実はジュノは何処かで生きているからこのような事をさせられているのかもしれないと言う考えに至りいつでも帰ってきても良いように掃除をし続けたそうだ。

「ニャーでも二日前にご主人様が部屋に帰って来た時は驚きましたけどやっぱり嬉しかったのニャ。」

「部屋をみた感じ毎日ちゃんと掃除してたんだなお前。」

「もちろんですニャ。マタタビ６００個分の報酬が有ってもおかしくないですニャ！」

「ははっ、部屋から出れるようになったら何個でも買って来てやるよ。」

「ニャ！約束ですニャ！！」

サブローはそう言うと掃き掃除を止め今度は床を拭き始めた。自身のマイハウスが居なくなった時のまま維持されているのも驚きだったがジュノのギルドナイトの同僚であるエビィーとシンに会った時の二人の反応も驚いたものだった。

―二日前

メゼポルタ　ギルドナイト本部　事務室

事務室にはジュノとエビィーそしてシンの三人が何やら話しあっていた、話の内容はもちろんジュノの事である。彼は世間では死んだ身として扱われているそして彼がメゼポルタに戻って来た事も知るのはごく一部のギルドナイトとハンターだけだ。三人は今後のジュノの扱いをどうしようか頭を悩ませていた。

「しかし・・・・イレスデウスの正体がジュノさんだとはね～」

「うむ・・・・」

「やっぱり驚いた？二人とも？」

「いやイレスデウスの正体がジュノさんだってのは別に驚かなかったけど。」

「なんだそれ？どういう意味だよ！？」

「だってねぇ・・・・シン君。」

「うん、だってジュノさん昔から僕達ギルドナイトから見ても規格外の強さだし別に驚かないよ。でも古代人が作り出した物のなれの果てがこの世界に巣くっているモンスターってのは驚いたね。」

「そうだね～でもどうしてノルン島の調査の際にジュノさんその事報告しなかったの？」

「そりゃあ、突然こんな事言っても信じてもらえないだろ、それに仮に信じてもらったとするとノルン島に居るアイリスに迷惑がかか

るし。」

「まぁ・・・そうだね。でもいいのジュノさん僕達にこんな重要な話ししちゃって？」

「良いに決まってる。俺に取って二人はギルドナイト内で信用できる数少ない人物だしそれに友達だしこれから俺の処遇を決めてもらう立場だしな！」

「いや～そう言ってもらえるとなんだか嬉しいね～シン君」

「そうだね、じゃあとりあえず今後のジュノさんをどうするか決めようか。と言ってもほとんど前と変わらないと思うけど。」

「どゆこと？」

「ジュノさんはアンサラーって言う古代兵器だからギルドナイト内で管理されると思うよ。でもジュノさんは僕達みたいに意思の疎通ができるから物としての扱いにならない様に僕達二人が働きかけるから安心して。」

「そんなことできるのか二人とも？だってまだギルドナイト隊員のはずだろ？」

ジュノがそう言うとエビィーは人差し指を左右に振りながら口を鳴らした。

「フフフ、甘いね～ジュノさん。ジュノさんが居なくなってから大体二年半の歳月が流れた事をお忘れかなぁ～ん。もう私の役職は上がって今は作戦参謀次席（さくせんさんぼうじせき）　兼　情報参謀（じょうほうさんぼう）で会議での発言権も大きい。

そしてシン君も同じように役職が上がって情報参謀次席　兼　人務
参謀だからね～。それに大長老や補佐官も話を聞いた通りだとする
と多分私達側の人だからジュノさんの人権を守るのはお安いご用さ。
」

「まじかよ・・・三人で猟団入ってた時は俺が上の方だったのに。
しかも俺の紹介で俺の後に入った後の二人がもうそんな出世してる
なんて・・・でもシン君って内勤じゃなくて主に外勤じゃなかっ
たっけ？」

「あぁそれはエビィーさんの仕事をいつも無理やり手伝わされてた
らそれが評価されて役職に就く事になったんだよ。まぁ今でも外勤
してるけどね。」

「あはは・・・にしても猟団か～よく覚えてたねジュノさん。てっ
きり忘れてる物だと思ってたよ。」

「初めて入った猟団だから忘れるわけがないだろ。」

「僕もジュノさんと同じ時期に入ったから忘れてないよ。じゃあ後
は世間的に死んだジュノさんをどう復活させるかだね。」

「報道はまかせろー！！」

「やめて！！エビィーちゃん！！」

「懐かしいな～そのやり取り。」

メゼポルタ　ジュノマイハウス

二日前のエビィーとシンとの事を思い返すとあの時の自分の選択はやはりこれで良かったのだと、この何気ないやり取りを以前の自分は破壊しようと思っていたのが莫迦(ばか)らしく思えた。

「（でも、これで終わりって訳じゃない。まだあいつが残ってるあの女アンサラーがヨハネス側に居る限り。でもなんであいつはあっち側に居るんだ・・・そもそも俺に人間達の恐ろしさを植え付けて人間に対し不信感を抱かせた本人が人間の元に着いてるなんて。）」

ジュノはそう思うとベットで寝がえりをうち更にあの女アンサラーについて考え始めた。

「（たしかアンサラーは人間の命令に忠実に従うよう生成時に脳内の脳幹部にある特殊な神経データを組み込まれて完成となる。その神経データって言うのは人類に抵抗や命令違反することは一切ないデータだ。そうするとあの女があの時見せた物はヨハネスの命令で見せた事になるのか？）」

「（でもテロス密林で会った際あいつはこの世界に再び根付いたすべての人類を滅ぼすと言っていた。だったらヨハネス側何かに付かず自分の手でさっさと実行する事が出来る筈だ、でもそれをやらずにいる。やっぱりまだ神経データが残ってるのか？だからヨハネスの命令に従ってるのか？）」

「（いや待て。人類を滅ぼすって言っているんだから人間のヨハネスに従ってるのはおかしくないか？とっくにあいつに殺されてなきゃおかしい、それにヨハネスの元に付いてる大剣の男も殺されて・・

・・ん？大剣の男は人間なのか？そもそもヨハネス自体も人間なのか？）」

「ニャーご主人様ベットのシーツを交換するからベットから退いてほしいのニャ。」

「あぁ、悪い今退くから。」

ジュノはそう言うとベットから起き上がりベットから離れベットの近くにある椅子に腰かけた。

「（ともかくあいつ等に関しての情報が少ない、まずは情報を集めたい所だけど・・・まだ軟禁状態なんだよな～早く軟禁解けないかな。）」

メゼポルタ　大老殿

大老殿内では今後のジュノの扱いについての会議が行われていた、ジュノ自身が発言した事を聞きジュノを今後は古龍に対しての戦略兵器として活用すべきとの提案をする者も居たがエビィーの猛抗議によってその提案は封殺され議論の結果ジュノは依然と同じようにギルドの監視下のもとを条件にギルドナイト兼ハンターとして活動する事となった。

「では次の議案に移らせてもらいます。エビィー情報参謀お願いします。」

会議の議長がそう言うとエビィーは手を上げ新しい議案を提言した。

「謀反者（むほんしゃ）ヨハネスの追跡捜査に対しての改正案を提言します。今まで通りの追跡捜査では次に今回のラヴィエンテ変異体の襲撃様な事が起きた際また多くの人命が犠牲になります。早急に更に徹底した追跡捜査が必要だと私は提言します。」

エビィーがそう言うと初老のギルドナイトの男性がエビィーに対して意見をした。

「まぁエビィー君の言う事はわかるが今このメゼポルタにはジュノと言う再び大きな力を得た。私の部下から聞いた話だが、ジュノは単独飛行が可能であのラヴィエンテ変異種を一瞬で討伐したらしいじゃないか。それほどの力を有しているんだまた今回の様な事が起きたらジュノを筆頭に隊を組み討伐に向かわせれば良い、そうすれば拠点兵器等の消耗品節制にもなるしさまざまな費用削減にもなる。だから私としてはヨハネスの追跡調査の徹底するのも大事だが人件費の費用面から考えてエビィー君の議案は早急に議論すべきことではないと思うがね。それより減ったハンターの数を補充するために新たな制度を実施しそれに予算をつぎ込んだ方が良い。」

中年の少し太った男性ギルドナイトがそうエビィーに言い返すと中年の男性ギルドナイトをはじめとした他のギルドナイトもその意見に賛同した、ある一人の若いギルドナイトの男性を除いては。若いギルドナイトはゆっくりと手を上げ中年のギルドナイトとその意見に賛同した者達に意見を述べた。

「兵站参謀（へいたんさんぼう）殿の意見をお聞きしますとどうも貴方は保守派の様ですね。ですがいつまでそのまま保守のつもりなのでしょうか？気付かないのですか？我々の足場が崩れ始めている事に。それとまだジュノの事を道具として認知している節（ふし）がお在りのようですね。先程議決した事をもうお忘れですか？ジュノは戦略兵器として扱うのでは

なくギルドナイト兼ハンターとして人間としてこれから接して行くと言う事を。」

「それと貴方の発言減ったハンターの数を戻すと仰いましたが貴方はハンターを何だとお思いなんでしょうか？ハンターは物ではなく人間です、あなたの発言は人務参謀（じんむさんぼう）の私としては見過ごせませんね。人間をなんだと思いなのですか？お答えください。」

「・・・・・」

「お答えできませんか？健忘されたのですか？まぁ良いでしょうともかく私もエビィー情報参謀と同意見です早急にヨハネスの追跡捜査を徹底すべきです。メゼポルタに住む人々やハンター達の生活を脅かす彼を二年間捕まえられなかった結果が今回のラヴィエンテ変異体襲撃です。その事を踏まえて兵站参謀殿（へいたんさんぼうどの）にはよく考えて頂きたい。議長、私はこの議案は早急に議論し大長老補佐官殿及び大長老の決定権のもとに議論すべきだと私は提言します。」

「シン人務参謀に意見に反論のある者が有れば挙手の方お願いします。無い者は賛成としご起立願います。」

議長が会議に集まった者達にそう言うが誰も挙手する者は居なく兵站参謀とそれに同意したギルドナイトを除いて多数がその場に起立した。

「ではこの議案は大長老及び大長老補佐官の決定権の元早急に議論すべき議案とします。大長老及び大長老補佐官殿なにかご意見はございますか。」

「うむ、特にないぞ。」

「私も意見述べる気はありません。」

「ではこれにて本日のでメゼポルタギルドナイト緊急議会を閉会いたします。」

議長がそう言うとギルドナイト達は席を立ち大老殿から出て行った、大老殿からでたエビィーは先を歩いているシンを追いかけ肩を叩いた。

「ねぇねぇ。シン君」

「なにエビィーさん?ジュノさんの生存報道をどうするかの件?」

「いや、それはもうほとんど決めたから大丈夫だけど。さっきの会議の時シン君もしかして兵站参謀(へいたんさんぼう)の発言に怒ってた?」

「まぁかなりムッとしたかな。」

「やっぱり・・・隣に居たけどめっちゃ怖かったわ。」

「えぇそうかな~あっ!エビィーさんこの前の立て替えた昼ごはん代まだ?」

二人はギルドナイト本部内を話しながら歩いて行った。

72節　線引き（後書き）

用語説明

人務参謀　組織における人権を担当する人の事

兵站参謀　物資の配給や整備　兵の展開　施設の構築とかを担当する人の事

ちょっとこの話内で出てきたギルドナイトを参謀とか言う言葉を使って軍隊ぽくしてますけと参謀ってもう死語みたいです。でもギルドナイトってモンハンの世界観設定ではギルドナイツとかいう１２人位の幹部が存在する用でじゃあって事でこの話では軍隊ぽく書きました。てへぺろ（・ω＜）☆

７３節　時計合わせ（前書き）

昨日はちょっと遠出をしたんですけどね、なんとふらっと立ち寄った靴屋で僕の好きなタイプのエンジニアブーツがなんと２４８０円で売られてたんですよ！たまに遠出をすると良い事があるもんですね～。

73節　時計合わせ

73節　時計合わせ

メゼポルタ　ジュノ　マイハウス

ベットではジュノがサブローを抱き上げては真上に放り投げては受け止めそしてまた放り投げて遊んでいた。

「ニャ！止めてくだニャー！！」

「暇だ、外からの情報は一切入ってこないしもう暇でたまらん。」

ジュノが軟禁状態に入ってからかれこれ1週間が立とうとしていたその間に膨らむあの女性アンサラーやヨハネス達の謎、居てもたっても居られずジュノは何度か部屋から勝手に出ようとしたがシンとエビィーが自分の為に色々とギルド内でやってくれている事を考えるとその行動をするのは彼らに取って申し訳ないので勝手に出るのを止めおとなしくマイハウス内でじっとしていた。その間給仕アイルー達やサブローに外の様子を見てきてくれと頼んだが給仕アイルー達も外出禁止令がギルドから下されていて徹底的にジュノのマイハウスは大海原の孤島状態となっていた。

「ボックスに入ってる武器の手入れも全部終わっちまったし後やる事って行ったら・・・・なんだろうな？」

「ご主人様の居ない間に体験した事をハンター日誌に書いたらどうですかニャ？」

「あー却下だ、めんどくせぇ。」

ジュノはそう言うとまたサブローを真上に放りなげて遊び出した。

「そ・・・そろそろ吐きそうですニャ・・・・」

「うっ、やべぇ。ベットの上で吐くなよな。」

「げぇ。」

「うぉ！！！」

メゼポルタ　マイハウス棟

マイハウス棟内ではシンとエビィーがジュノのマイハウスを目指し歩いていた。ジュノに対しての大方の大陸内での情報統制及びジュノの人権が確保された事を等を報告する為に二人はジュノのマイハウスの扉の前に着くとジュノのマイハウスの扉をノックしたがマイハウスからはアイルー達が騒いでいる声が漏れ出していた。

「・・・何か会ったのかな？」

「とりあえず開けてみたら～ジュノさんのマイハウスの鍵持ってるんだし。」

エビィーがシンに鍵を開け部屋に入る事を促すとシンはジュノのマイハウスの鍵を開け二人はマイハウス内へと入って行った。異臭漂うマイハウス内へ。

メゼポルタ　ジュノ　マイハウス

「いやー助かったわ、二人とも。まさかあんなにまき散らすとは思わなかったからさ～」

「・・・・臭いで貰いゲロしそうになったけどね。」

「まだ、部屋内ゲロ臭いような・・・・」

「よっし!!消臭玉の出番だ!!」

「あっ!!ちょっと!!!」

エビィーの制止もむなしく終わりジュノは部屋内のあらゆる所に消臭玉を投げ始めた、あっと言う間に部屋内は白い煙に包まれ部屋からは煙が漏れその煙を見たハンターが火事だと勘違いしマイハウス内は軽い騒ぎとなったがシンとエビィーの働きかけによって騒ぎは直ぐに収まり二人はまたジュノのマイハウス内へと戻った。ジュノのマイハウス内は床に直に座らされたジュノとそれを取り囲むようにシンとエビィーが目の前に立ちジュノを見降ろしていた。

「反省してますかジュノさん?」

「はい・・・・すいません。」

「こりゃあ罰として軟禁延長かな～。」

「それだけは勘弁してください、エビィーさん。外に出たいです。」

「ははは！冗談冗談。さてジュノさんが外に出る前に今の外のジュノさんに対しての情報を教えておくかね～。」

「やっと外にでれるのか！？」

「うん、まぁ数日間はちょっと制限みたいなのが着いてるけどね。」

「制限？」

「まぁこれを見てよ。」

エビィーはそう言うと手に持っていた資料の中から一枚の記事を取りだした。その記事はこの大陸中で発刊されている記事の一部だった。ジュノは立ちあがりそこに記されている読んだ、記されている記事の内容はこういったものだった。

【速報！！帰って来た男！！！　昨日大陸上に突如現れたラヴィエンテ変異種、メゼポルタギルドは総力を上げそれを討伐すべく多くのハンター達を連れラヴィエンテ変異種との激しい攻防を繰り広げている最中劣勢に劣勢に陥ったその時颯爽と現れた男が居た。読者は覚えているだろうか二年前不慮の事故で亡くなったと報道されたジュノと言う男の存在を、そう彼は生きていたのである彼はラヴィエンテ変異種の前へと立つとハンター達を瞬時にまとめ上げそしてラヴィエンテ変異種はジュノ氏と優秀なハンター達の手によって倒されたのであった。】

「・・・この記事の内容やけにドラマチック過ぎない？考えたの誰よ？」

「はいはーい！私。」

「・・・・・」

「おや？何か不満かなジュノ君？」

「いえ、良いと思います。んで制限はどこに書いてあるのさ？」

「まぁまぁ、続きを読みなはれ。」

【しかしジュノ氏は衰弱しきっており即メゼポルタハンター病院へと搬送される事となった。メゼポルタ報道部は独自に訪問許可を取り容体が少し回復したジュノ氏との面会に成功し彼が今までどこに居たのかを聞き出すことに成功した。ジュノ氏の発言によるとジュノ氏は2年前の謎の生物襲撃時に討伐こそ成功したものその後流砂に巻き込まれ地下世界を彷徨い他大陸へと出そして船を使いこの大陸へと戻って来たそうだ。「大変だったでしょう？」との取材班の質問に対しジュノ氏は「確かに大変でした。でもメゼポルタは俺に取って家ですから何としても帰ってやるって気持ちで帰ってきました。」次に取材班は「どうしてラヴィエンテ変異種とメゼポルタギルドが交戦中地帯に現れたのですか？」と質問するとジュノ氏は「最初メゼポルタに着く筈が間違ってキャラバン区に着いてしまってそしたらキャラバン区の人が今非常事態って事を教えてくれて交戦地帯まで送って貰ったんです。本当に彼らには感謝してます。」と笑顔交じりで答えた。死んだはずの彼が生きて帰って来た事にハンターズギルドの回答は「本当に信じられない、彼には昔から助けてもらって申し訳ない。」との事だ。現在ジュノ氏は病院での治療を終え自宅療養中だ。】

「俺こんな良い子ちゃんじゃねー、てか地下世界って・・・俺のあの時の行動を見たハンター達はこの記事見てどう言ってるのさ？しかもキャラバン区の連中まで巻き込んでるぞこの記事。」

「その点は大丈夫、ばっちり根回ししてその場に居たハンターとジュノさんが講堂に集めたハンター達全員と口裏を合わせてるから。でもキエルさんはキャラバン区の連中にはこの通り話して口裏合わしとくが後で私のとこに来てちゃんと説明しろよって言ってたよ。」

「やっぱあいつはそういうよなぁ・・・それでメゼポルタの人達の反応はどうなの？こんな内容で納得してるの？」

「商業区や住民区の人達はジュノさん帰還祝いでお祭りセールやってたから、信じてるんじゃない？あと王都ヴェルドとマタメ村の村長とか色々便りが着てたよ。」

「・・・まぁ後で商業区や自由区に行って確かめてみるか。二人ともありがとう、色々やってくれて。でも改めて思うけどよく俺の人権が確保できたな。」

「まぁ人権についてはあれだね時代のおかげじゃないかな？もし今の時代じゃなかったら僕達二人がすっごくがんばってもジュノさんの人権を確保するのはもう少し時間がかかったと思うよ。」

「どうしてだ？」

「今僕達が生きてる時代は人間の他に竜人族等の亜人種達が居るでしょ、もしジュノさんの人権を無しにするとじゃあ亜人種の人達の人権はどうなるんだって事になる。」

「言われてみればそうだな・・・・もし古代人達の世界だったら俺は只の兵器だし・・・・」

「ジュノさんが人権を獲得した事によってこれからメゼポルタに働きにきているアイルーやメラルー達の扱いも少しづつ変わって行くと思うよ、今は彼らは色々難しい立場にあるからね。今回の事で人権って言うのは僕が思っているよりずっと厄介な物だって勉強になったよ。」

部屋内の重たい空気をかき消すようにエビィーが手を叩き二人の目線を自分へと向けさした。

「ささっ！！重たい話はこれで終わりにして次の話に移ろう！！！」

エビィーはそう言うと再び手に持った資料の中からある資料を取り出しジュノにそれを手渡した。

「とりあえずジュノさんのこれからの扱いは前と変わらずギルドの監視下の元ギルドナイト兼ハンターとして生活できるよ。ギルドのお目付け役は今厳しく選考中。」

「ハンターランクの方はどうなるんだ？また１からか？」

「いや、ジュノさんの実力で１は無いから前と同じ９９９だよ。その方が色々動きやすいでしょ？それにジュノさん無しでは解決できない問題もあるしね。」

「ヨハネスの事か？」

「そう、ヨハネスの事。あっち側にはジュノさんと同じ存在もいる、これは私達だけじゃ解決できない。ジュノさんにはヨハネスの件で主に動いてもらえるとこっちとしても助かるんだけど・・・・」

「もちろん動くさ。あの馬鹿が提唱する世界で生きて行くのはゴメンだからな。」

「そっか・・・・じゃあ決まりだね。とりあえずギルドナイト証とハンターライセンスを渡しとくよ、でもあれだよ一応世間的にはジュノさんはまだ自宅療養中って事にしてるからヨハネスの件で動いてもらうのはもう少し立ってからにしてね。その間は私達ギルドナイトが動いて少しでもヨハネスについての情報を集めるから。」

エビィーはそう言うとジュノにギルドナイト証とハンターライセンスを手渡した

「さっ、これで終わりかな。ではギルドナイトジュノ隊員の軟禁状態は今を持って解除とする。」

「おぉ・・・・偉い人ぽいな、エビィーちゃん。」

「いや本当に偉いんだよジュノさん・・・・」

「よッし、じゃあ商業区に早速行ってみるか。じゃあ二人とも仕事がんばって。」

ジュノはそう言うと二人の間を通り抜けマイハウスを出てメゼポルタの商業区へと足を運んだ。

「やっと仕事が一山終わった。」

「さぁまだまだ仕事が沢山あるし本部に戻ろ～！！！」

「今日はエビィーの仕事は手伝わないからね。」

「チッ！！」

メゼポルタ　商業区

商業区に着いたジュノに待っていたのは商業区で店を営む人や道行く人達の黄色い声だった。

「（英雄帰還セールって・・・・大げさな。）」

ジュノは声をかけて来る人達に愛想笑いをしながらとある店へと向かっていた、この様々な店が軒を並べる商業区で一番なじみ深い店へと。

「あったあった、ショップカイト。店に息子の名前を付ける位愛されてるんだなぁカイト君は。」

ジュノはそう呟くと店の中へと入って行った。店の内装は二年前と変わらず雑誌や雑貨、衣服や娯楽品が店の中に陳列してあった。陳列してある品物を眺めていると店の奥から少し小さな男の子が店のカウンターへと出てきた。

「いらっしゃいませ！あっ！！！」

「おっす！！」

男の子はジュノの顔を見ると驚き店の奥に居る両親の名前を呼びながら店の奥へと駆けて行った。

73節　時計合わせ（後書き）

喫茶店って言ったらやっぱり思いつくのはスタバとかドトールですよね。でも私この二つの店のアイスコーヒーはあんまりおいしくないと思うんですよ、「ははっ、若造めが！ぬかしおる。」って笑ってもらって結構です。でもあんまり都内じゃあんまり見かけないですけどコメダ珈琲って言う喫茶店のアイスコーヒーはすっごく美味しいんですよ。苦いからコーヒーはちょっと・・・って言う人はコメダ珈琲ではちみつアイスコーヒー頼んでみてください。おいしいっすよ～

また土曜日に会いましょ～。

７４節　影踏み（前書き）

時間だ！投稿を始める。

74節　影踏み

メゼポルタ　ギルドナイト本部

「メルチッタ？」

「そうメルチッタ、聞いたことあるジュノさん？」

ジュノはメゼポルタギルドナイト本部のエビィーの元に来ていた。
エビィーの座っている机の上にはやはり様々な書類が山ずみである。

「あれだろ、昔隕石の落下でできた湖の近くにある集落でロマンあふれる方にお勧めのデートスポットとしてひそかに有名。」

「・・・それどこから得た情報？」

「昔読んだ週刊狩りフェミに載ってた。」

「なんで女性誌読んでるのさ・・・・」

「かわいい子が載ってるからに決まってるじゃないか。」

「・・・まぁいいや、でも今はそのメルチッタは集落じゃなくて学者達やハンターが多くいる村になってるよ。」

「へぇ、知らない間に人気スポットになってるわけだ。それで誰かとデートでもするのエビィーちゃん？」

「情報参謀にそんな暇ねぇから！！」

「ハッハー!!暇ってのは作るもんだぜ。それで?呼んだって事は色話よりも面白い話があるってことだろ?」

「そう、ヨハネス達らしき3人組みがメルチッタに居たみたいなんだ。」

「さすが「新世界を作る!」って言ってるだけロマンチストだなヨハネスは、連れの女とデートって訳だ、良い身分だぜ全く。」

「まぁジュノさんにはこれからメルチッタに向かってもらうよ。少しでもヨハネスに関する情報を集めたいでしょ?」

「だな!よしちょっくら行ってくる。」

「あぁ今気球船はみんな出払ってるから、キャラバン区の高速気球機を使って。」

「あぁ?飛んでけるんだからそんなの要らねえよ。」

「・・・私とシン君の苦労を水の泡にするつもり?」

「ん?・・・あぁそうか飛んでちゃまずいな。でも高速気球機ってなんだ?」

「ジュノさんが黒龍騒動の時に旧ドンドルマに乗ってったキャラバンの高速気球船を更に改良したものだよ。キャラバンにはもう伝達してあるから、キャラバンに着いたらネリスって子を探して、その子しか今の所その高速気球機を動かせないみたいだから。」

「あぁネリスね、分かったじゃあ早速行ってくるわ。」

エビィーからのヨハネスについての情報を聞くとジュノは直ぐにエビィーの元を離れキャラバン区に向かう為ギルドナイト本部を後にした。

「・・・ジュノさんのお目付け役まだ決めてなかったな・・・なるべくジュノさんが恐れる人物にしないとな～」

キャラバン区　気球船ドック

ジュノはキャラバン区に着くと早速気球船ドックに向かった。気球船ドックに着くとドック内に「ッス！！～ッス！！」と言う特徴的な語尾聞こえ、他は違う形状の気球船の近くに筋肉ダルマとキャラバンの民の着る服を纏った女性が何やら話しあっているのを見つけた。ジュノはその二人がオリオールとネリスだと確認するとその二人の元に歩いて行き、二人も自分達の元に近づいてくるジュノに気づくと軽く挨拶をしてきた。

「これか？高速気球機ってやつは。前のとどう違うんだ？」

「そうっすね～前回ジュノさんが乗って貰った時との違いはアイルー達が漕いでたプロペラ部分を燃料で動かせるようにしたのと飛竜みたいに翼を付けてみたッス。」

「翼？なんだ羽ばたくのか飛竜みたいに？」

「違いますよ、これは前からオリオールさんと考えてた事なんですけどね、なんで飛竜は翼をはばたかせ飛んでるのか？でもこれ実際

には飛んでるんじゃなくて微妙に落ちながら飛行してて落ちないように羽ばたいてるんですよ」

「そこで飛竜の翼の構造に俺達は注目したッス。ネリスちょっとこれの翼を開いて見てほしいッス。」

「は～い。」

オリオールはネリスに指示を出すとネリスは高速気球機に乗り込み気球機の翼を展開させた。気球機の翼はリオレウスの翼に似た形をしており翼の骨格は飛竜の物ではなく人工的な物であったが翼膜の部分には飛竜種の翼膜が取り付けられていた。

「何だ、もっとぴっちり取りつけなくていいのかこの翼膜部分？」

「おっ！！翼膜部分に注目するとはさすがジュノさんッス。飛竜種や鳥が空を飛んでる時なんで翼を開いて飛んでいるか、それについて色々研究しているうちにわかった事があったんです。飛竜種は翼膜の間に空を飛んでる際に翼で切った空気をこの翼膜部分に溜めこんでいるおかげで少しの間空を漂う事が出来るって事にきずいたッス。だから飛んでる際翼膜部分に少しでも空気の塊が溜まりやすいようにちょっと緩めに取りつけてあるッスよ。」

「へぇ～、お前すげえな筋肉だけがお前の凄いとこだけだと思ってたわ。」

「筋肉も取り柄っすよ！！！」

「そうかい。」

「これに気付いたおかげで今まで燃料として使ってた獄炎石や爆炎

袋等のコストもかなり削減できて、今までより長い距離を早く飛べるようになったんだよジュノさん。今までは獄炎石や爆炎袋等の爆発力を使って無理矢理飛ばしてる感じでしたからね～」

ネリスは操舵室から顔を出すとジュノにそう言った、その時のネリスの顔は何となく慢心に満ちた表情であった。

「かわいそうに、この気球機に関しては気球ネコの出番は無いわけだ。」

「いやこの気球機における気球ネコは分担はありますよ、右翼と左翼を展開と飛行中に翼を傾けて旋回する時の補助の仕事です。」

「それはネリスの手元で完全にはできない訳だ。」

「まぁ・・・そこはこれからの課題ッスね！！」

「そう言えばキエルは？ドックに向かう途中いつもの場所に居なかったけど。」

「姉貴は商船用の気球船に乗って他の大陸に行ってるッス。」

「帰りはいつ頃よ？」

「帰りは商談の進行具合で決まるッス。俺はそれまでこのパローネを仕切るカシラっス！！」

「ん？お前とこの一番上の奴がカシラじゃないのか？」

「兄貴は自室で研究中ッス！！！」

「・・・たまには外出ろよって言っとけ。じゃあ早速行くか！」

高速気球機は煙を上げると翼を広げメゼポルタの空を飛竜の如く舞い上がった。

メルチッタ

「あっすいません！」

学者達が様々な書物や鉱物を持ち村内を往来してしている中ジュノはエビィーからもらった情報を便りにメルチッタを往来している学者達にヨハネスについての聞きこみを行っている。メルチッタに向かう飛行途中にジュノはネリスから様々な質問攻めにあったがそれとなく適当な受け答えをして質問を返した。そのネリス達は今村の端に定着してある高速気球機の点検を行っている。

「なにかようですか？ギルドナイトさん」

「少し前に赤い衣を纏った中年位の男がこの村に居たって聞いてこの村に来たんだけど、なにか知ってるか？赤い衣の男について。」

「いえ、知らないですね・・・・」

「そうか、じゃあ、大剣を背負った男のハンターぽい奴と太刀を背負った金髪の女ハンターぽい奴について何か知ってる？そいつらもその赤い布を纏った男の仲間なんだけど。」

「その二人についても・・・・あっ。」

「何か思いだしましたか？」

「太刀を背負った女のハンターらしき人はですけど、私この村にある書物庫の倉庫番をしていた時に見かけましたね。なんなら書物庫まで案内しましょうか？今日は私が書物庫の倉庫番ですから丁度向かう所でしたし。」

「そりゃあぜひ！」

ジュノは科学者の案内の元その村の書物庫なる所へと向かった、書物庫前に着くとさすが書物庫だけあってか他の建物よりも大きく作られていた。ジュノと科学者は書物庫内に入ると書物庫内は間接照明だけで照らされていた薄暗い空間だった。

「薄暗いな・・・・」

「本の日焼けや痛み防止の為ですから。それに本を読む際の机の上にはちゃんと手元が明るくなるように照明がついてます。」

「そうか、それでその女はここでどんな本を読んでたんだ？」

「それはちょっとわからないですね。あの方なんだか近寄りがたい雰囲気でしたから、でもその方が居た場所なら覚えてますよ。」

男はそう言うと書物庫内を歩いて行きジュノもそれに続いた。

「この欄の所ですね、あの女性が居たのは。」

男はそう言い様々な書物が並べられている欄を指さした。ジュノは

その欄に入り一つの本を取り出しめくると一般では見る事の無い文字が書かれていた。

「古文書か」

「翻訳本持ってきましょうか？」

「いや大丈夫。それよりその女はこの欄のどの位置に居たか覚えているか？何となくでいいから。」

「たしか・・・・」

男はそう言うととジュノの後ろを通って行き少し離れた場所で立ち止まった。

「この位置だったと思いますね、丁度上の照明が当たる位置でした。」

ジュノは男の立ち止まった位置に行くとまた一つ本を取って読みだした。ジュノの隣に居た男もジュノに釣られて書籍欄に並べられている本を読みだした。

「この欄の書物は主に黒龍伝説についての書籍が並んでますね。」

「黒龍伝説・・・半分おとき話とされてるあれだよな。」

「そうです。でも科学者達の間ではおとぎ話じゃないんじゃないかって言われてます、現に数年前シュレイドの地に黒龍らしき物が降り立ってますしね。あっ！」

「どうした?」

「本の一部が破かれてますね・・・・最近たまに要るんですよ。重要なとこをメモしないで破って持ってく人が。」

男はそう言うと呆れた顔をしてうなだれた。

「その本も黒龍伝説についての本なのか?」

「えぇでも一部矛盾してる事が書いてあったり、解読不能な言語や同じ文章が何回にも渡ってつづられてるちょっとおかしな本なんですけどね。」

「ちょっと貸してくれる?」

ジュノは男の持っている本を借りるとその本の内容を読みだした。確かに黒龍伝説についての内容は書かれていたが、男の言う通りよくわからない内容が書かれていた。

「あっ」

「なんだ?」

「貴方が本を読んでる時の横顔を見てて思いだしたんですけど。貴方とその女性、顔が何となく似てましたね。髪の色と口調と雰囲気がまるで違いますけど。」

「そうかい。それとこの本は貸出できるのか?破けてる部分もあるからもう廃棄だろ?」

「例え一部破けていてもその本はこの書物庫の財産ですから貸す事はできませんよ。」

「・・・・残念だねぇ、まぁ良いか。ありがとな案内してくれて」

「いえいえ。」

ジュノは呼んでいた本を欄にしまうと書物庫から出て村の端に止めてある、高速気球機の元へと歩いて行った。高速気球機の元にたどり着くとネリスが操舵室の窓を開け顔を出した。

「調査は終わったんですか?」

「まぁね、さっ早いとこメゼポルタへ帰ろうぜ。変な本読んで何か疲れちまったよ。」

ジュノはそう言い高速気球機に乗り込むと高速気球機は煙を上げメルチッタ上空へと飛び上がりメゼポルタへ向けて翼を広げ飛び立った。

７４節　影踏み（後書き）

うわぁぁぁ目が！！目がぁぁ！！！！

75節　ウォッチャー（前書き）

皆さんエディット・ピアフって昔のフランスの女性歌手を知ってますか?まぁ私事態もあんま知らないんですけど。今日、日本橋三井ホールで友人がそのエディット・ピアフの生涯をテーマにした舞台に出るので見に行ってきまーす。

75節　ウォッチャー

メゼポルタ　ジュノ　マイハウス

「おぁ～すっきり～！！！」

時刻は夕刻、昼間のメゼポルタの人々の雑踏は消えマイハウス内は暖炉の焚き木の木がはじける音が部屋内に響いていた。メルチッタでの調査でヨハネスに対する良い情報が得られないままジュノはメゼポルタに戻り次の目撃情報が有ったミナガルデに行くもヨハネスらしき人物が出入りしていた家は発見できたが家には家具しか置いてなくその調査は空振りに終わりジュノはその苛立ちを少しでも解消しようとマイハウスに付いている風呂に入り苛立ちを解消していた。

「ニャ！ご主人様、お風呂に入った後は頭を掻かないでほしいですニャ！！水滴が床に飛び散って濡れてしまいますニャ！！」

「水滴くらい直ぐに乾くだろ。そう思うよなエビィーちゃん？」

「・・・そう思うけどパンイチはどうかと思うよ。」

声をかけた先にはエビィーが食事用の座席に座りジュノを少し呆れ気味に見ていた。

「あら？あんまり恥ずかしがってないな。残念だ猟団に入ってた頃のエビィーちゃんはどこに行ったのか・・・・」

「・・・あぁボーングリーヴ事件ね、あれはシン君がかわいそう

だったな・・・シン君あの後ちょっと泣いてたよ。それよりジュノさんのお目付け役がやっと決まったよ。」

「おっ！ブロードか！？」

「彼も候補に入ってたけど彼じゃないよ、それに彼だったらジュノさんに振り回されるのが目に見えてるからね。」

「ちくしょう・・・じゃあ誰だ？できれば美人でモデルみたいにナイスでグッとくるスタイルの優しい女性が良いな！」

「おっ！ジュノさんもしかして透視能力とかあるの？」

「いや、そんな能力は付いてないな。なんで？」

「今回お目付け役で選んだ人の特徴を全部掴んでたからだよ。」

「まじか！！いいね～仕事する気がガンガン上がるわ！！！」

「フフフ、そうでしょ。しかもその人には今日来てもらってます！！」

「うわぁ～さすがエビィーさんできる人だわぁ～ちょっと待って今何か下にもう一枚履くから。」

「上は着ないの？」

「上はもう着てるよ肉体美と言う服を！！」

「・・・・・」

「肉体美と言う服を！！」

「二回言わなくても聞こえてるから、早くしてよ。」

「はい・・・・」

ジュノはいそいそとパンツの上に普段着がしまってある棚に近づき棚の中の下の衣服を着るとベットに腰かけた。

「うむ、じゃあもうジュノさんのマイハウスの前で待機させてあるからジュノさん彼女を部屋に招き入れてあげて。」

「ハッハー！！紳士的な振る舞いで最初の好感度アップ間違い無しだぜ。イヤッホウ！！！」

ジュノはマイハウスの扉に手をかけ扉を開けるとそこには黒い狩猟装備を纏った女性ハンターが立っていた、ジュノはその女性ハンターの顔を確認すると静かにマイハウスの扉を閉じた。

「・・・・今外に居た人がお目付け役？」

「そう、その人がジュノさんの今後のお目付け役、ほら早く部屋に招き入れないと。どうぞ～」

「あっちょ！」

エビィーはジュノのマイハウスの扉に手をかけ扉を開くと先ほどの

黒い狩猟装備を纏った女性ハンターがジュノのマイハウス内に入って来た。女性ハンターは胸にかかった自身の銀色の髪の長い髪を手で後ろへとやるとジュノとエビィーの前に立った。

「人選ミスじゃね？」

「そんなことないよ、彼女はジュノさんの事をよく知ってるし。」

「知りすぎてるな。」

「ギルド内の関係者でもあるし、他のハンターやギルドナイトよりも強いし。」

「・・・まぁそうだな。」

「ジュノさんがさっき言った通り美人でモデルみたいにナイスでグッとくるスタイルの優しい女性でしょ。」

「優しくは無いな。」

ジュノがその言葉を口にした瞬間黒い狩猟防具を身に纏った女性はジュノに対し睨みつけた。その睨みはラヴィエンテに勝るほど睨みであった。

「ヒィッ！！ねぇねぇエビィー様ユーノ様と言う選択肢は無かったのでしょうか？」

「ユーノ？だめだめ。彼女は確かにジュノさんの事情を知る人物の一人でギルドの関係者だけどまだブロードの下で業務をこなしてるから、ユーノって言う選択肢は無いね。」

「じ・・・じゃあシン君は!?」

「シン君はもうギルドの幹部で仕事がいっぱいだから無理だね。」

「・・・そんなに私が嫌な訳アナタ?」

「お前はレジェンドラスタでハンター達の狩りのサポートをするのが仕事だろ?お目付け役なんて役割を担ったらお前の業務に差し違えて他のハンター達が迷惑するだろ。」

「あっその点は大丈夫だよ。ナターシャさんはヨハネスの件が片付くまでジュノさんと同行契約交わす事にしてあるから。」

「はい?そんな事他のハンターから苦情来るだろ!一応人気のレジェンドラスタだぞコイツ!」

「大丈夫ナターシャさんは諸事情によりレジェンドラスタ業務を一時休止します的な事をみんなに説明するから。」

「そんなんで大丈夫なのかよ。」

「大丈夫レジェンドラスタはまだ１０人要るから一人減っても問題ないさ。じゃあ私はこれで!!後は二人で今後の事話し合ってね～」

エビィーそう言うと机に広げていた資料を手に持ちジュノのマイハウスから出て行った。ジュノのマイハウスには微妙な空気が漂う。

「・・・そう言えば、お前を雇うって事にしてあるってさっきエビーちゃんが言ってたけどそのさい発生するお前の給料はどうなる

んだ？」

「さぁ？ギルドが払うんじゃない？それよりも。」

ナターシャはそう言うとジュノの元に近づき自身の顔をジュノに近づけた。

「な・・・なんだよ。」

「アナタ、キエルの所には行ったの？」

「まだ行ってねぇな。」

「じゃあ明日行くわよ！私が居た方がキエルに説明しやすいでしょ？」

「確かに・・・・」

「決まりね、じゃあ私もこれで失礼するわ。明日の朝またマイハウスに来るからちゃんと起きてなさいよ。さもないと」

「尻に矢を射られるのは勘弁だね・・・・」

「わかってるならよし。じゃあまた明日オヤスミジュノ。」

ナターシャはそう言うと銀色の髪をたなびかせジュノのマイハウスから出て行った。

「よし、これは夢だベットに入って目をつむれば覚めるはずだ！」

ジュノはそう言うとベットに横になりシーツと被り寝る体勢に入った。

「ニャーご主人様夜ごはんは？」

「夢から覚めたら食べるわ！」

「夢じゃないと思うけどニャ～・・・・」

メゼポルタ　ジュノマイハウス

空には太陽が昇りメゼポルタの民の雑踏が聞こえ始める中、ジュノはサブローの作る朝食の音と食欲をそそる臭いが鼻をくすぐり目が覚めベットから起き上がると普段見慣れぬ者が目の前の食事用の机の椅子に腰掛けていたのでジュノは静かにまたベットに入り目を閉じた。

「（あれ？まだ要るよ～おかしいな～）」

「ニャ！！朝ご飯ですニャ！！！」

「ありがとう。」

食器とナイフとフォークが食事用の机に置かれる音が静かに部屋内に響き部屋内にはまた街の雑踏が微かに聞こえてくる。ジュノはもう一度眼を開けベットから起き上がるとやはり普段見慣れない者が自分のマイハウスで朝食を取っていた。食器の音を立てずに食事をしている分テーブルマナーがしっかりとした人物とみられる。

「（えぇ～普通に人の家で食事してるよ～あっこれ前にアイリスと居た精神）」

「早く朝ご飯食べなさいいつまで寝たふりしてるつもり？」

「夢であってほしかった・・・・」

「なんか言った！？」

「まっこういう展開も悪くないか。サブロー朝ご飯まだ～？」

メゼポルタ　キャラバン区

キャラバン区の早朝ではメゼポルタの民やハンター達の為の医療品や雑貨食材等を乗せた気球船が往来していた。往来する気球船同士がぶつからない様にキャラバン区の民達が着岸する気球船に合図を送っている者や気球船に積んである商品のチェックを入念に行うネリスやその他の人達、そしてその積み荷を運び出すオリオール達の姿が有った。

「なぁなぁこの時間に着たのは色々まずいんじゃないか？」

「大丈夫、昨日キエルに朝ジュノが例の事説明するから時間空けといてって行ってあるから。ほら、珍しくアシエルさんが指揮取ってるでしょ。」

ナターシャが指さした先には恰幅のいい体型の髭面の見た目が怪し

い男がキエルに変わりキャラバンの民を統率していた。

「おぉ、久しぶりに見たなあのおっさん。」

「さっ、もたもたしてないで早く行くわよ。」

キャラバン区　キエル宅

ジュノとナターシャはキエルの家に着き家の扉をノックすると扉の向こうからキエルが現れた、今日は仕事に出ていない為かいつも後ろに結ってある髪は結っておらずいつも髪を結う為に付けてあるあの独特な髪飾りをしていないためか別人のようにも見えた。

「あぁ、あんた達か入りな。」

キエルはぶっきらぼうにそう言うと家の中に入ってしまった、どうやら勝手に入れと言う意味らしい。ジュノ達はそう解釈してキエルの家の中に入ると居間でキエルが机に肩肘を付けながら椅子に座って待っていた。

「それで、話を聞こうじゃないか。死んだ筈の男がいきなり帰って来るとか言う小説じみた話の内容の本当の真実をさ。」

キエルがそう言うとジュノは今までの事をすべて話した。自分が何であるか、自分が世間から消えた後何を見てそして何をしようとしたのか。そして自分と同じような存在がヨハネスの側に一人要る事とこれから自分はどういった立場で暮らしていくのかお。

「わかった。」

「おっ、驚かないんだな。」

「まぁね、でも信じたわけじゃないよ。アタシは実際目にした物しか信じないから何か証拠を見してみな。」

「証拠か～・・・・・」

ジュノはキエルに証拠を見せろと言われ黙り込んでしまった。能力を発現してそれを見せれば簡単に済む事だがいかんせんここは部屋内、完全に能力をコントロールできるようになっては居るがもしもの場合がある。

「ん～・・・あっそうだ。ちょっと俺の目を見ててくれる？」

ジュノはそう言うとジュノの少し茶色がかった目の虹彩(こうさい)が次第に蒼くなり瞳孔(どうこう)が普通の人間のように丸くなくなり縦に細くなりまるで龍を思わせるような眼になった。ジュノ以外の二人は実際の龍に睨まれた時の様に体がすくみ上がり緊張感が体を襲い心臓をじかにわしずかみされたような気分に陥った。

「これで信じてもらえるか？ちなみに夜これやると眼が蒼白く光って面白いんだぜ。」

「わかったよ・・・早く元の状態に戻ってくれ生きた心地がしないから。」

キエルがそう言うとジュノは目の虹彩(こうさい)を蒼から少し茶色がかった虹彩(こうさい)へと戻した。するとキエルの緊張が解れたのか座っている椅子の背にもたれ掛り溜息(ためいき)をついた。

「しかし、本当なんだな・・・・アンタが普通の人間じゃないって事は・・・・」

「そんなにショックか？」

「そりゃあショックに決まってるだろ。アンタとは小さい時からの仲なんだアンタはどうなんだい？自分が古代兵器だって言う今の心境は？」

「元から何か皆と違うって感じたけどノルン島で真実を告げられた時はやっぱショックだった。でもどっかの誰かが「心が人間ならコイツは人間よ！」って言ってくれたから別に依然よりもずっと人間らしいって感じるようになったね。」

「そうかい・・・アタシも色々世界を渡って来たけどやっぱりアンタみたいな男はどこの大陸に行っても居なかったね。」

「ハッハー！！！そりゃこんな良い男は世界の各地探しても居ないぜ。」

「調子に乗るな！！」

後ろで待機していたナターシャがジュノに対し容赦なく蹴りを放った。その蹴りはジュノの足の関節に当たりジュノの体に痛みが走る。

「痛てぇ！！！なにするんだよ！！！」

「なんで普通に手から火出さずにあんな事するのよ、怖かったじゃない！！」

「もし火が家具に燃え移ったら大変だろうが、オバサン！！」

「お・・・オバ・・・・・キー！！許さない！！！」

「ちょっと！！アタシの家で暴れないでくれ！！」

キエルはナターシャとジュノを宥(なだ)めながら思った、例えジュノが古代兵器であっても昔から変わらない私の大事な友人達だと言う事を。

75節　ウォッチャー（後書き）

レコードに収録された昔の曲ってなんか良いですよね。前知識としてエディット・ピアフさんの生前の声を収録した音源をＹＯＵ　ＴＵＢＥ　で聞いたんですけど。もし私に恋人がいたら～相手をこんな思いにさせてみたいですね。興味が湧いた方はぜひ聞いてみてください。後、上田遥演出の舞台も機会があったらぜひ見てみてください。

76節　招待状（前書き）

昨日、日本橋三井ホールで友人の出演する舞台の講演を見に行った後三越デパート本店に行ったんですけどやっぱり老舗だけあって凄かったです。デパート内でちょうどテディベアの販売をしてたんですけど、いろんなクマのぬいぐるみがあってかわいかったですね。なんか着物を着たテディベアとかも売ってて驚きました。

76節　招待状

？？？

その部屋は仄暗くまるで生活感の無い部屋に一人男が椅子に座り燭台に照らされた机の資料を眺めていた。その資料には一人の男の活躍が書かれていた、彼の舞台を台無しにした男、人間ではない男。その記事を眺めている男は身体の奥底で岩漿（がんしょう）が煮えたつ思いでその記事を眺めていた。その男の要る部屋に一人の金髪の女が入って来た。

「セレインか？何の様です？」

「ゴートが消息が不明になった様です。」

「放って起きなさい。」

「よろしいので？」

「彼も馬鹿では無い、私に長く仕えてきた身だ何か考えがあるのでしょう。それに不適合者が何を起こそうが大した障壁にもならない事は明白。」

「了解しました。」

金髪の女性はそう言うと部屋から出ようとしたが椅子に座る男に呼び止められた。

「例の計画は順調なのですかセレイン？」

「順調です、何もかも。」

セレインはそう男に口にすると男のいる部屋から出て、男の部屋に通じる長い廊下を歩き始めた。

「（やはり不毛な時間を何百日間、長く生きた所で得られた物は何も変わらないのか・・・・）」

メゼポルタ　ジュノマイハウス

マイハウスではジュノに送られてきた便りの返事を書いているジュノの姿が有った。彼自身は「別に返事なんて書かなくていいだろ？」と言うがお目付け役曰く「ちゃんと返事書かなくちゃ駄目よ！！書かなきゃ矢で射るわよ!!」と脅迫じみた事を言うのでジュノはナターシャの監視の元しぶしぶと返事を書いていた。

「・・・・」

「・・・・さっきより書く速度が速くなってるけどちゃんと読んで書いてるのでしょうね？」

「！」

「やっぱり」

「別に良いだろ～内容はほとんど「無事で良かったです。」とか「ぜひまた一緒に狩猟しましょう!!」とかなんだしさ～」

「駄目よ、皆アナタの無事を祝って心をこめて書いて来ているんだからアナタもちゃんと読んでそしてちゃんとした返事を書かなきゃ失礼よ！！」

「うっさいくそババぁ！！！」

「くそババァって・・・アナタの方が生まれた時代を考えると私よりよっぽど年上じゃないくそジジィ！！！」

「俺は一回若返ってるからくそジジィじゃないもーん」

「クッ・・・でも私と代替同い年じゃないの！」

「さあ？自分でもよくわからなくてね～ババぁより年下かもな！！！ハッハハハ！！！あっ」

ジュノの目の前には矢を取り出し既にジュノに対し矢切りの体勢をし矢を振るっているナターシャの姿があったがジュノはタイミングを計り矢を受け止めそれをへし折った。

「さすがレジェンドラスタだねぇ～でも今の俺に」

額に衝撃が走り脳内で痛みを伝達する神経伝達物質が額に強い持続的な灼(や)けつく痛みを感じる。ナターシャはジュノの額に拳を振るったのだ。

「早くやれ」

「はい・・・・」

ジュノは額を摩りながらジュノに当てられた便りの返事を返していると一つ他とは少し違和感がある便りが届いていた。

「王都ヴェルドからだ!!!お食事パーティ開いてくれるってよ!!!」

「あら、よかったわね」

「ん?でもアンナ王妃からになってるな」

「変ね普通なら一国の代表としてであるゼバスティアン王の名前で便りが来るはずなのに」

「だよな・・・・まっ良いか!さてお食事パーティは何時なのかしら・・・明後日か急だな、ギルドに気球船の使用許可の承認取れるかな」

「行くの?」

「そりゃあただ飯食えるからな!」

「その動機を王族の人が聞いたらどんな顔するでしょうね・・・・」

ジュノはそう言うと心を躍らせながら他にジュノ当てに届いた便りに返事を書いて行った。

メゼポルタ　気球船ドック

空は曇天雲越しからうっすらと光る太陽が真上に位置した昼下が

り王都ヴェルドで開かれる食事会の前日で、二日前にジュノが懸念していた王都ヴェルドに向けての気球船使用許可は以外にも簡単に下りる事ができ、ジュノは気球船ドックでお目付役として同行するナターシャの到着を待っていた。

「珍しい事もあるもんだ、いつもは任務とかに向かう時は俺が一番最後に到着してるのにな・・・」

ジュノは気球船ドックの手すりに凭(もた)れながらぼやいているとドックの入口から一人のギルドナイトが入ってきた。

「待たせたわね。」

「ん？お前いつもの狩猟防具じゃなくてなんでギルドナイトスーツ着てるんだ？」

「あの服装だと失礼でしょ、王族の方達に会うんだから。」

「・・・メランスーツは胸の谷間丸出しでスカートも短いしな～確かに王族に会いに行くにしてはまずいな」

「だからギルドに頼んで女性用のギルドナイトスーツを貸してもらったの」

「ふーん、それでその後ろのネコちゃんが抱えてる荷物は何だ？おしゃれ道具でも入ってるのか？」

ナターシャの後ろには大きな木箱を４人がかりで抱えているギルドに所属するアイルーとメラルーの姿があった、顔を見る限り木箱の中身は相当重い様だ。

「おしゃれ道具って・・・まぁその類の物も入っているから否定はしないわでも主にこの中に入っているのは狩猟道具一式よ何かが起きたら困るでしょ」

「まるでヴェルドに向かうと何か起きると思ってるみたいだな」

「そう言う貴方だって横に狩猟道具が入った木箱があるじゃないの」

「まぁそうだな、特に意味は無いが持ってた方が良いだろ。お前の言う通り何が起きるかわからないからな。さっ早く乗り込もうぜ」

ジュノはそう言うと横にある木箱を運びながら気球船の中へと入って行き、ナターシャもそれに続き気球船の中へと入って行くと気球船は王都ヴェルドに向け出発した。

気球船　ハンター控室

控室では特にする事も無く控室の窓越しから見える風景を眺めるナターシャと雑誌を読んでいるジュノの姿があった。お互い沈黙が続く、しかしその沈黙は嫌な沈黙ではなかった。しばらくすると窓越しの風景を眺めるのが飽きたのかナターシャがジュノに話しかけてきた。

「ねぇアナタっていつもどんな雑誌読んでるの？」

「ん、いろいろだな。月刊オトモアイルーとか週刊狩り通あと狩りフェミとかも読むな」

「女性誌も読んでる男なんて珍しいわね、なんで女性誌を読んでるの？」

「そりゃあかわいい子が載ってるからに決まってるからだろ。」

「だと思ったわ・・・・」

会話が途切れナターシャはまた気球船の窓越しから風景を眺めて始めた。地上ではアプトノス達が水源を求め集団で大移動をしている、そして群れから少し離れたアプトノスを狙う体表の青い鳥竜種のランポス。地上では今生物同士の命の駆け引きが行われている。

「ねぇ、覚えてる？」

ナターシャが外の風景を見ながらジュノにまた話しかけてきた。

「何がだよ？俺が昔泣き虫だった事か？」

「違うわよ、初めて二人で狩猟しに行った時の事よ。アナタはハンターとして私はレジェンドラスタとしての訓練の一環でアナタに同行して狩猟しに行った時の話よ」

「あぁあの時ね、１０年前位だっけ？」

「そうね、私がまだ１４歳の時ね。アナタと二人でテロス密林付近の村に現れたイャンクックの狩猟をした時の話、それまでは父と一緒にレジェンドラスタとしての訓練をしてたから。危なくなった時は父の判断でなんとかなってたけど、アナタと狩猟に行った時はまだサポートに慣れてなくてアナタも私も大変な思いしたわよね。」

「そうだったか？」

「そうよ、アナタはあの時他のハンターに比べて既に頭一つ出た存在だったから私は心の中でもし私が危なくなっても結局はアナタが守ってくれるって甘い考えで狩猟してた。でもその考えがイャンクックに見透かされたのかイャンクックは執拗に私を攻撃してきたわ。」

「父と狩猟を行ってた時はモンスターの攻撃なんてほとんど回避できてモンスターなんて大したことないじゃないって思ってた。でもそれは違ってた父が私をサポートしながら狩猟をしていてくれてたからこそ回避できてたんだって思い知ったわ。」

「お前の父ちゃんもレジェンドラスタだったからな～」

「結局あの時もアナタは私をサポートしながら狩猟してくれたおかげでイャンクックを討伐する事が出来た、本当は私がサポートしなきゃいけないのにね。」

「そうだったか？」

「そうよ。あの時アナタは平然としてたけど、防具とか焼けてる部分があったり防具に覆われてない体の部分がうっ血してたのをよく覚えてる。」

「でも俺はそんな事よりも討伐した後ギルドの迎えが来るまで少し密林を散歩して地図無くして迷った事の方が印象に残ってるね。」

ジュノの言葉を聞くとナターシャは忍び笑いをしながら会話を続けた。

「そうね、あの時アナタ三日も密林で迷子になったんだっけ。あの時は私も「どうしよう・・・・」って思ったわ、でもアイルーとメラルーの巣でアイルー達と一緒に遊んでた所をギルドの人に発見されたんだっけ?なんで野生のアイルー達と遊んでたわけ?」

「んー確か泣きべそ掻きながら密林の中で佇んでたらさアイルー達が目の前に集まって来てさマタタビの実やらサシミウオをくれたわけよ、たぶん「これ食って元気出せよ」的な意味でくれたんだと思う。それでニャーニャー言われながら手招きされてあいつ等の巣に行ってなんか色々拾ってきた物見せられてそれ使ってアイルー達と遊んでた所をギルドの人に発見された訳だ。いやーあの時あのアイルー達に出会わなかったらどうなってたんだろうな俺。」

「ふーん、だからアナタあんなにアイルーやメラルーが好きなのね。」

「だな。あいつ等にはほんと感謝してるよ。」

「・・・所であなたアイルー達にマタタビの実を貰ったって言ったわよね。」

「あぁ、言ったよ。」

「食べたの?」

「そりゃあもちろん、あの時肉焼き機なんかもって無くてこんがり肉作れなくて腹へってたし」

「マタタビの実ってどんな味だったか覚えてる?興味あるわ」

「んーたしか緑色の奴は辛くて黄色ぽいやつは甘かった気がする・・・」

「へぇ・・・機会があったら食べてみたいわね、もちろん黄色ぽいやつだけだけど。」

気球船は二人を乗せ曇天の中王都ヴェルドに向け進むのであった。

76節　招待状（後書き）

モンハンの世界でマタタビってアイテムありますけどあれは実の事を指してるのかまたは葉っぱの事を指してるのかどっちでしょうね。たぶんアイテムの説明文では盗まずにはいられない的な事が書いてあるので、現実世界の猫の場合マタタビは葉っぱとか木の枝に反応するので葉っぱなんでしょうね。ちなみに今回書いてあるマタタビの実の味については調べた通りに書いたので事実です。

語句説明

うっ血
体の一部が強くぶつけ怪我したときに腫れた際に肌の色が青色になってる状態の事。宮城弁だと青たんって言うんです。

岩漿（がんしょう）
活火山で見られるマグマの事です。

忍び笑い
クスクスと笑うって意味です、他にも違う意味としても使われます。

また土曜日にあいましょ～

77節　タンドール（前書き）

あ～冬休み近いですね～

77節　タンドール

王都ヴェルド　外門前

王都ヴェルドに着いた頃にはもうすっかり夜になっていた外門の前では数年前と同じように王の使いの者と馬車がジュノ達の到着を待っていた。使いの者はジュノに一通りの挨拶をすますとジュノの後ろに立っていたナターシャの事について尋ねてきた。

「そちらのお方は？」

「ん？俺の連れだけど、手紙の返事を書いたはずだぜ二人で行くってな。」

「これは失礼いたしました。貴女様はメゼポルタのレジェンドラスタ、確かお名前はナターシャ様ですね。申し訳ありません。そのようなお姿でしたので気づくのが遅くなりました。王が城でお待ちです、馬車を用意いたしましたのでどうぞお乗りください。」

王の使いの者が乗車をジュノ達に促すとジュノ達は馬車へと乗り込み馬車は城へと進みだした。馬車内では椅子に深く腰を掛けるジュノと窓越しから王都ヴェルドの街並みを見ているナターシャの姿があった。

「なぁなぁ！今俺達が乗ってる車をけん引してる生き物の名前知ってるか？」

「馬でしょ」

「何だ知ってるのかよ・・・・つまんね」

窓越しから徐々に見えてくるパルティータ城、思えば2年ぶりだろうか王都ヴェルドにやってきたのは。ジュノにとっての王都ヴェルドでの思い出はあまり良い物ではなかった、城に着くなりいきなりの実力測定、そして第一王女の護衛を任されるとばかり思っていたに王の考えによって女装を命じられ第二王子の護衛。そして女性の礼儀作法を学ぶために講師として呼ばれた人物がかつての師で任務の為とはいえ自分が女装をしている事を知られてしまったり。第三王女が連れ去られ救い出したのは良いが助けた人物は女性剣士として報じられたりと思い返すと前に王都ヴェルドに来た時はと面倒な事ばかり起きていた。

「（今回は女装させられることは無いだろうな絶対に。そりゃそうさ今回はお食事パーティ！！女装する必要性など皆無だ！）」

ジュノは頭の中で思い込んでいると、ナターシャに話しかけられていた。

「・・・っと！なにさっきから一人で首振ってるの？」

「ん！あぁ首の骨をね鳴らそうとね」

「あんまり首の骨鳴らすと良くないって聞くわよ」

「でもあの鳴らした時の快感がたまらないだろう！」

「まぁ、わからなくはないけど・・・・あっ城門が見えてきたわ、そろそろ到着ね」

「おっ、やっとか～朝飯抜いてきたから思いっきり食べるぞ～フフフ～ン♪」

王都ヴェルド　パルティータ城

馬車が城門内に入ると馬車が城の入口の前で止まり馬車の扉が開かれジュノ達は王の使いの者の共に城の中へと入るとそこには侍女達が頭を下げジュノ達を待っていた。侍女達は頭を上げると侍女の中の一人がナターシャに近づいてきた。

「お客人用のドレスを用意しております、ナターシャ様はドレスをお召しになられますか？」

ナターシャは侍女の一人にそう言われると少し考え込んでしまった。どうやらギルドの礼儀として着てきたギルドナイトスーツを着通すか、それとも女性の憧れでもあるドレスを着るかの間の心境に揺れているようだった。

「せっかくドレスを用意してもらってんだ。お言葉に甘えさせて貰えよナターシャ、仕事できた訳じゃないんだからさ」

「・・・そうね、じゃあお言葉に甘えて」

「かしこまりました、では私共の後について来てくださいまし」

侍女の一人がそう言うとナターシャは数人の侍女に衣装室のある所へと案内されていった、残されたジュノは残りの侍女達に城内を案内され食事会が催される大部屋へと通された、部屋内に通されると大きな丸い机を囲むように椅子が並べられそこにはアンナ王妃と第三王女のソフィーがジュノを待っていた。アンナ王妃は2年前と変

わらず優しそうな顔をしていたがソフィー王女は成長したのか少し背も伸び顔つきも少し大人びて凛々しくなっていた。ジュノは席に着く前にアンナ王妃とソフィー第三王女に礼をした。

「皇后陛下におかれましては、本日の御心使いを奉じ奉り謹んでお礼申し上げます。」

「そんな硬い言葉を使わなくてもいいのですよジュノ、ねぇソフィー？」

「はい、お母様。本日は貴方の無事を祝ってのお食事会です、楽になさってください。」

「それじゃあお言葉に甘えて、お久しぶりですアンナ王妃様、ソフィー王女様。」

「はい、お久しぶりです。ジュノ、貴方は私の娘のせいで色々と大変な思いをなさった様で申し訳ありません」

「いえいえ、めっそうもございません。ソフィー王女もあの後なにごとも無く無事に王都ヴェルドに帰れてた様で私も安心いたしました。」

ジュノはそう言うとソフィー王女の座っている方を眺めた。

「お美しく成長されましたねソフィー王女。」

「ありがとう、ジュノ。貴方も元気そうでなによりです。さぁ席におかけになってください。」

「（ん～豆の言葉づかいが変わっている、一国の王女としての自覚に目覚めたのか・・・）」

ジュノはソフィー王女に座るよう促され席に座った。少しの間両者の間に沈黙が続く、ジュノに取ってこの沈黙は嫌な沈黙であった。一番の原因はやはりソフィー王女の言動の変化振りだろう、あの天真爛漫な性格をしていた第三王女が立った二年でこうも大人びてしまうとはジュノは少し寂しい気持ちになった。

「（まぁ、あの砂漠での出来事と俺の事があればこうも変わるか。）」

「あの、皇后陛下。」

「はい、どうしましたジュノ？」

「国王陛下と第一王女様と第二王子様は今回の食事会にはご出席なさらないのですか？」

「はい、夫と共和国リーヴェルへ公務に娘も息子も夫の公務の付き添いに出ています。」

「そうですか、御三方も元気そうでなによりです。」

「お気遣いありがとうジュノ。そうだソフィー、ジュノに食前酒を入れて差し上げなさい。」

「はい、お母様」

アンナ王妃がソフィー王女にそう命じると王女は食前酒が入ったガ

ラスでできたポットを手に持ちジュノの元へと歩いてきた。

「お気を使わせて申し訳ないです、アンナ王妃ソフィー王女」

ジュノはそう言うとテーブルの手前にあったグラスを手に取りソフィー王女に食前酒を注いでもらった。

「さっお飲みになってください、ジュノ」

「それじゃあお言葉に甘えて。」

ジュノはそう言うとグラスに入った食前酒を口に持って行き食前酒を飲んでいた最中ジュノの目の前に無数の何かが降ってきジュノの目の前は真っ暗になった、その原因は突如部屋の上から無数の男達が下りてきジュノの体に向けてありったけの剣を突き刺したからである。その衝撃で食前酒が入っていたグラスを床に落としグラスは割れ、ジュノの体からは血が止め度めなく流れジュノは机に突っ伏した状態で倒れた。その光景を見て皇后は口に手を当て戦慄していたがソフィー王女は顔色一つ変えず机に突っ伏した状態のジュノを眺め口を開いた。

「・・・出血量からしてこれはもう機能停止したと判断して良いな。」

ソフィー王女はそう言うとジュノの周りを囲んでいた男達に合図を送ると男達は二手に分かれ一方は皇后を何処かへ連れ去りそしてもう一方は動かなくなったジュノを外へと運び出した。ジュノが外に運び出されたのと同時に一人の侍女がソフィー王女の方へと近づきソフィー王女に耳打ちをした。

「ふむ、そうか。その女は生かしておけ、メゼポルタへの有効なカードになるかもしないからな。」

王都ヴェルド　貧民区

動かなくなったジュノは無数の男達に運ばれて貧民区の一角にゴミの様に投げ捨てられた。男達が居なくなると貧民区の者達が投げ捨てられたジュノの元へと近づいてきた。

「こりゃひでぇな・・・・体中刺されまくってるぜ、こいつ。」

「あぁそうだな・・・こいつといい最近ここに殺されて捨てられてく上流階級の奴が多いよな・・・・まぁ俺達にとっては天からお恵みで有りがたいけどな。」

「だな、さっさと金目の物剥ぎっとっちまおうぜ。」

貧民区の者達はそう言うとジュノの服を脱がし始め金になりそうな物をすべて奪って行く、この街は一見、賑やかに見えるが光のある所には必ず影があるよう経済力がない彼らにとってはこうやってここに訳あって捨てられていく物を糧にしなければこの王都ヴェルドでは生きて行けないのだ。彼らにとって外でモンスターにおびえて暮らすよりもこの要塞都市の中で生きて行く事、例えどんなに無様な姿で生活することになってもモンスターに襲われるよりかはましなのである。貧民区の者達はジュノの着ていたギルドナイトスーツ一式とレイピアそしてポケットの中に入っていた貨幣を奪い取ると先ほどよりもっと無残な姿でジュノは打ち捨てられていった。しばらくするとその捨てられたジュノの元に一人の帽子を深く被った小さなみすぼらしい貧相な格好の者が近づいて行った、小さな貧相な

格好の者はジュノに近づくとジュノの首から下がっているアイリスから貰った首飾りを見ていた。先程の者達は心に隅に残った良心が働いたのかこの首飾りだけは取って行かなかった様だ、小さな貧相な格好をした者はジュノの首から下がっている首飾りに手をかけジュノからその首飾りを奪いその場から去ろうとしたその時後ろから手が伸び貧相な格好をした小さな者の肩を掴んだ。

「悪いがそれだけは勘弁してくれ。俺の大事な物なんだ。」

「ヒャッ！！！」

後ろから声をかけられ肩を掴まれた小さな者は声を上げて掴まれた肩の手を振り払いその場にへたり込んだ。

「しっかし城での件もびっくりしたがここの奴らも容赦ねえな～丸裸じゃないか、いくらなんでもこれじゃあ街中歩けねえぜ・・・・」

ジュノは周りを見渡し何か腰に巻けるような物を探すとくすんだ色の大きな布を発見しそれを腰に巻いた。

「まぁこれで大事な部分は隠せたなスースーするけど・・・まぁいい早くそれ返してくれよ。」

ジュノの目の前には帽子を被った腰を抜かしているのかその場にへたり込んでいる。背格好やさっきの上げた声から予想して老人ではなく子供の様だ。

「モッ・・・・モンスター？」

「さぁどうでしょう？それ返してくれないと君の事食べちゃうかも

な！さっ返してくれ。」

ジュノは帽子を被った子供にそう言うが子供はジュノの首飾りを返そうとはしなかった。相手が大人であれば能力を発動させ少し怖がらせて奪い返す事も出来たが相手はいかんせん子供であったので只でさえ死んだと思いこまれていた人間が生き返り話しかけてきている時点でも恐怖なのにさらなる恐怖を子供に与えるのはさすがにかわいそうだ思いジュノはその場で悩みこんでしまった。

「・・・・それ返してくれたらもっと良い物買ってあげるよ・・・・って金も取られちまったしな～・・・・うーん・・・・」

ジュノが悩みこんでいる中帽子を被った子供はなんとかその場から立ちあがりジュノの元から逃げようとしていた。

「あっ！！コラッ！！ちょっとまて！！」

咄嗟にジュノは帽子を被った子供の腕を掴むが子供はそれに反抗してかジュノの腕に噛みついたり体を蹴ったりしてその場から逃れようと必死に抵抗する。

「あ～もうめんどくせぇ！！！」

ジュノはそう言い子供を担ぎ上げるととある場所へ向かって走り出した

77節　タンドール（後書き）

先週三越デパート本店に行ってきたんですけど、やっぱり老舗デパートだけあって凄いですね色々と。あれこの話先週も書いたっけなぁ？まぁいいか。

78節　告白（前書き）

髪の毛伸びてきたな～って思ってこの際思いっきり切ってしまおうと美容院で髪切りに行ったんですけど失敗した！まぁでも伸びるから良いか～

78節　告白

王都ヴェルド　ルシャナ邸前

ジュノは移動する際担ぎ上げた帽子を被った子供が大声を上げたり暴れまわったりしたが二人ともみすぼらしい格好の為か特に注目されず、子供を落とさず抱えながらなんとかかつての師であるルシャナの住む家へとたどり着いた。子供の方はと言うともう逃げる事は出来ないと観念したのかほとんど抵抗する気は失ったようだ。

「なぁ、いい加減首飾り返してくれよ。」

ジュノは子供にそう言うが子供は帽子を手で深く被りなおし首を大きく横に振った。どうやらまだ首飾りを返す気は無いらしい。

「はぁ・・・そうですか。まだ返してくれないのね・・・・・」

ジュノはそう呟くとルシャナの住む家の扉に向かい家の扉を叩いた。しばらく叩くと家の向こうから燭台を片手に持ちもう片方にはかつてルシャナが使っていたと思われる双剣の片方を手に持ちとてつもなく不機嫌なルシャナが出てきた。

「師匠お久ぶりで・・・・」

「フン！！！」

ジュノが言葉を言いきる前にもっていた双剣の片方をジュノに向けて振りかざす、現役をもう何十年も前に引退したとはいえその振るった剣さばきは寸分の狂いも無くジュノに襲いかかったが寸でで後

ろへと飛び下がりその攻撃をなんとか回避した。

「何時だと思ってるんだい!!夜だよ夜!!親子で物乞いしにきたなら昼間に来な!!」

「違います!!俺です!!ジュノです!!」

「あぁ?ジュノォだぁ?」

ルシャナは怪訝そうな顔をしながらジュノに近づき手に持っていた燭台ジュノの顔に近づけた。

「・・・ホントだ、そんな格好でなにしてるんだいアンタ?それにその抱えてる子供はなんだ?隠し子か?」

「隠し子じゃないですよ!!後こんな格好をしているのはちょっと訳があってですね・・・・」

「訳ありか・・・まぁ良いとりあえず家の中に入んな!」

「助かります、師匠」

ジュノはルシャナにそう言われると帽子を被った子供と共にルシャナの家の中へと入って行った。

ルシャナ邸

ルシャナ宅に入るとルシャナにそこで待っていろ言われ佇んでいると奥から鉄製でできた大きな桶を持った使用人とタオルを数枚持っ

たルシャナがジュノの元へと戻って来た。

「裸足で歩いて来たんだからまずその中に入って足の泥を落としな！ここにタオル置いとくからそれで足をしっかり拭くんだよ！それとあんた下着は着てるの？」

「いや、着て無いです。」

「はぁ～わかった。適当に着替え持ってくるからそこで待ってろ、それとその抱えてる子供の足も洗ってやれよ。」

ルシャナとそう言うと使用人と共に再び家の奥へと入って行った、その間ジュノは帽子を被った子供を抱えながら自身の足を洗うと今度は抱えていた子供の足を湯船へと付けようとしたが子供の足を見ると長い間素足で過ごしてきたのか足は真っ黒で所々切り傷が出来ていた。ジュノはその足を見ているとふと上から視線を感じ上を見ると帽子を被った子供がジュノを見ていた。黒くくすんだ子供顔についている目は死んだような目でジュノの顔の変化を窺(うかが)っていた。

「・・・今からお前の足を洗う、少し痛むかもしれないが我慢してくれよ。」

ゆっくりと子供の足を湯船の中に浸していく、湯船に浸した瞬間帽子を被った子供の体がビクンと波打つ。

「大丈夫か？」

子供は無反応だったが目が少し潤んでいるのを見ると傷に染みる様だった、ジュノはさっと子供の足を洗い終えると子供の足に着いた水滴をふき取りルシャナと使用人が来るのを子供と二人で待ってい

た。

「なぁ・・・まだ返してくれないのか？俺の首飾り、もう怒って無いし返してもらっても酷い事しないからさ。」

ジュノは子供にそう尋ねると子供は首を横に振った、まだ返す気にはなって無いらしい。ジュノは子供の返事に途方に暮れているとルシャナと使用人が家の奥からジュノの仮の衣類を持ってやって来た。

「悪い、下着は旦那のがあったが服は女性用しかなかった。これで我慢してくれ。」

ルシャナはそう言うとジュノに下着と服を手渡しジュノの隣にいた帽子を被った子の手を取った。

「ジュノ、あんたはそれを着たらとりあえず応接間で待ってな。私はこの子を風呂に連れてくいつまでもそんな格好じゃかわいそうだからな！」

ルシャナはそう言うと使用人を引き連れて子供と共に家の風呂場へと向かって行った。残されたジュノはルシャナの用意した下着を穿くと次に女性物の衣服を手に取りその場で広げた。

「・・・どうもこの街に来ると女装する運命にあるらしいな。まぁ多少は男物ぽいからましか。」

ジュノはそう言うとしぶしぶ女性用の衣服を身につけ始めた。

ルシャナ邸　応接間

応接間でしばらく待っていると応接間の扉が開かれルシャナが部屋の中へと入ってジュノに何かを投げて来た。ジュノはそれを手で受け取るとそれはさっきの子供が返そうとしなかったアイリスから貰った首飾りであった。

「その首飾り、ジュノのだろ？あの子供が持ってたから取り上げといた。」

「助かります、師匠。」

ジュノの返事を聞くとルシャナはゆっくりと歩き出しジュノの目の前のソファーへと腰掛けた。

「それで？お前がこうなった訳を聞こうじゃないか、何があったんだ？」

ルシャナがそう言うとジュノは王都ヴェルドについてから起きた事を話し始めた。ジュノが無数の人物に体を刺された事は睡眠薬を盛られたと言う事にしてルシャナ話し終えるとルシャナは少し押し黙っていた。

「・・・ジュノ」

「はい」

「お前少し嘘ついたろ？」

「嘘なんてついてませんよ。」

「いや、ついてるな。忘れたのか?私はお前の元師匠だって事を私はお前に稽古を付ける前にお前の境遇を全部大長老達から聞いている。」

「・・・・」

「お前が普通の人間じゃない事も大長老を通じて聞いている。そんなお前がたかだか睡眠薬ごときでこのざまになるとは私は到底思えないね。さぁもう一回本当の事を話してみな。」

「・・・本当の事を話すとかなり掘り下げて話さないといけなくなりますがそれでも良いですか?それにこれから俺が話す内容は師匠の俺に対する見方が変わるかも知れないしはたから聞けばかなり非現実的な内容も帯びてきます。それでも聞いてくれますか?」

「いいから言ってみな、こっちはもうお前の素姓は大体わかってるんだ、だから今更驚きやしないよ。」

「わかりました・・・・」

ジュノは自分の存在を簡単にルシャナに説明してから今度は城で起きた事を嘘偽りなくすべて話した。その間ルシャナは先ほどと変わらず黙ってジュノの話を聞いていた。

「なるほどね・・・・要は第三王女の様子がおかしい訳だな。」

「驚かないんですか?俺が体中を一気に刺されて刺された傷もふさがり生きてる事に」

「驚くも何もアンタ昔から稽古付けてる最中モンスターから傷を傷

を負わされても治りが以上に早かったじゃない。それに今は完全に安定した状態なんだろ？そのアンサラーとしての機能ってやつはさ。」

「まぁそうですけど、俺に対する見方とか変わったりしないんですか師匠は？さっきの話をもし信じたとして」

「だからお前の素姓は昔から大体知ってるってさっきも言ったろ？それに見方も変わらないね。アンタは私の狩猟技術をすべて叩きこんだ最初の弟子だ。人間のな」

ジュノがルシャナの言葉に感慨を受けていると応接間の扉が叩かれ扉の向こう側からルシャナに使える初老の使用人の一人が部屋に入って来た。

「奥様、ジュノ様のお連れになった子供のお召し変えが終了いたしました。」

「御苦労さま、それで子供は？」

「はい、応接室の外に連れてきておりますが。いかがなさいますか？」

「この部屋に連れてきなさい。」

ルシャナは使用人にそう告げると使用人は応接間から出て行き今度は真っ白い人物と共に応接間の中へと入ってきた。その真っ白い人物がさっきまで抱えていた子供だと判断するのにジュノは少し時間がかかった。さっきの子供は先ほどとは打って変わり髪は長く肌も髪も白く夜なのにもかかわらずうっすらと光っているようにも見え

た。

「ほぉ～綺麗になったもんだ。お前、親は居るのかい？」

ルシャナがそう言うと神秘的な印象になった子供は小さくルシャナに対しての質問に答えた。

「・・・・いましたが・・・・」

「そうかい、わかった。悪い事聞いちまったねごめんよ。じゃあ名前はあるのかい？」

「・・・・テクラ・・・です。」

「テクラか～名前からして女の子かい？」

「・・・はい。」

「わかった、もう今日は遅い私の娘が使ってた部屋を使っていいから今日はそこで寝なさい。」

ルシャナはそう言い使用人に指示を出すと先ほどの子供は使用人と共にジュノ達の居る応接間から出て行った。

「あの子、女の子だったのか・・・・じゃあなんで男の子の格好してたんだ？」

「あのなジュノ、あの子とは貧民区であったんだろ？」

「はい。」

「この街の貧民区に住む女って言うのはな大抵は貧民区の男や中流階級や上流階級の男達に欲望のはけ口にされちまうんだよ。中にはそれを受け入れてそれで稼いでる女も居るけどな、大抵は強制的にやられちまうんだ本人の意思に関係なくな、それにこの子は他の女とは違いかなり言っちゃ悪いがかなり特殊だしおまけに端正な顔立ちだ。だから男の服を身に纏って髪の毛を纏めて深く帽子を被って男どもに自分が女だと気付かれないよう今までずっと生きて来たんだろう。狙われないようにな」

「そんな酷い事が起こってるんですかこの街は・・・・」

「光の部分だけじゃないって事さこの街も、さっアンタも明日に備えてもう寝な。」

「明日に備えてって・・・・まさか城に行くつもりじゃ！？」

「若いころの私ならそうしてたかもな、でも城には行かない。明日はお前を連れて食材も売ってるパン屋に行く。」

「え？パン屋？」

「そうパン屋だ、だからもう寝ろ。ちなみにお前の寝床はここかあたしと一緒に寝るか二択だが・・・・・」

「ここで寝ます。」

「なんだつまらん、じゃあ後で使用人に枕とシーツを持って来させるから少し待ってろじゃあ、おやすみジュノ。」

ルシャナはそう言うと応接間から出て行き応接間には再びジュノ一人が残された。

「なんでパン屋に行くんだ?まぁ良いともかく寝よう色々と起き過ぎて疲れた・・・・・」

ジュノはそう言うとソファーに体を横にして寝ころび始めた。

「・・・・・ナターシャの奴大丈夫かな?まぁあいつなら大丈夫か・・・・な?うーん・・・・・・」

78節　告白（後書き）

私は外に出るときは割とアンティークぽい丸眼鏡をかけて出てるんですが今の髪型だとのび太君みたいです。そして家の猫は毛並がキジトラなんですけど実は腹の一部分の毛が半円状に真っ白なんです、しかもドラえもんのポケットみたいな形でなんですよね。なんか道具出してよドラえもん！

79節　Ｂｒｏｋｅｒ（ブローカー）（前書き）

今朝なんですけど今年初めて家の前に出来てた水たまりが氷に変わってました。本格的に冬ですね～

79節　Ｂｒｏｋｅｒ（ブローカー）

ルシャナ邸　応接間

「起きなジュノ！！朝だ！！！」

ルシャナの大声と共に手を叩く音が部屋内に響き渡る、ジュノは不愉快そうな顔をしながらソファーから起きあがった。昨日の深夜帯からルシャナの家に入り事情を数時間に渡って話してから寝たのでまだ少ししか寝てないようで眠り足りない気分であった。

「なに、しけた顔してるんだい。早く顔洗ってきな！！」

「ルシャナ師匠・・・昨日風呂に入って無いので朝ご飯の前に風呂に入りたいです・・・・」

「綺麗好きなのは結構だが水はお湯にするのにどれだけ時間がかかると思ってるんだい？」

「あぁその点は大丈夫です、あれでなんとかしますから。」

「あれ？・・・あぁ昨日話してくれたヤツの事か、そんな事も出来るのか？」

「まぁちょっと加減をすれば直ぐにお湯にできますね。」

「ほーう、お前みたいな存在が一家に一人いれば家事がかなり楽になるな！なら良いぞ入ってきなその間に朝ご飯作って来るからな。」

そう言うとルシャナは応接間から出て行った、例え使用人を雇っていても料理や家事など自分でできる事はすべてやるのが彼女だ。ジュノは前にここに訪れた時に「じゃあなんで使用人を数人雇ってるんですか？」と聞いた所「賑やかな方が良いから。」と簡単に答えを返されてしまった。そんな彼女に雇われている使用人達はとても幸せだろうなと思いながらジュノはルシャナ邸の風呂場へと行き能力を使って風呂に溜めた水をお湯へと変え風呂へと入った。

ルシャナ邸　食事室

風呂からあがりジュノはルシャナが待つ食事室へと向かうと既に食事の準備が出来上がり席に座り待っているルシャナと落ち着きの無い様子で座っている全身真っ白な少女が座って待っていた。

「遅い！いつまで私とテクラを待たせるつもりだい？テクラなんて待ちくたびれてさっきから何度もお腹鳴らしてるよ！！」

「そうなの？じゃあ待たせて悪い事しちゃったねテクラちゃん。」

「いえ・・・・」

「早く座りな！私も腹減ってきちまったよ。」

ルシャナに早く席に着くよう促されるとジュノはテクラの隣に座るとルシャナは食事の挨拶をすますと食事を取り始めた。ジュノも挨拶をすますと食事を取り始めたがテクラ一方に食事に手をつけようとしなかった。

「どうしたんだい？テクラ、食べないのかい？」

「あの・・・・」

テクラはそう言うとルシャナに対して質問を投げかけた。

「私も食べていいんですかこれ。」

「なにいってんだい、食べていいに決まってるだろう。」

ルシャナはそう言うとテクラに食事をするよう促したがテクラは食事をしようとしなかった。

「ははーん、この食事に毒が入ってると思ってるんだろうテクラ?」

ルシャナがテクラにそう言うとテクラの体がビクついた、どうやらルシャナの言った事は図星だったようだ。

「毒なんて入れてしないよ!ほら!」

ルシャナはそう言うとテクラの前に並べてある食事を一口ずつ食べ毒が入っていない事を証明したがテクラはそれでも食べようとしなかった。

「なんだい・・・・食べたくないのかい?」

「・・・・どうしてこんな事するんですか?」

「ん?どういう意味だい?」

「私のこの姿が珍しいからですか?小さなころから乞食の私の食べ方を見て笑う為ですか?乞食の私にこんな格好させて楽しんでるん

ですか？」

テクラはそう言うと席を立ち着ている服を脱ぎ出そうとしたがルシャナはそれを止めさせようとテクラの腕を掴んだがテクラは掴まれた腕を振り払おうとその場で暴れ出した。

「放して！！！放せ！！！ここから出せ！！！」

テクラはそう言いながらその場で暴れる、ジュノもさすがにこれはまずいと思いテクラを羽交い絞めし身動きを封じた。

「放せよ！！糞野郎！！！どうせお前も他の男と同じで私の体目当てなんだろ！！！私は他の奴らと違って珍しいから昨日私の事捕まえたんだろ！！」

「なに言ってんだ！？お前が俺のお守り返してくれないから捕まえたんだ。」

「そうだ！！！あれは私が見つけた金目の物だ！！！返せ！！！」

食事室での騒ぎを聞きつけたのか徐々に使用人達が食事室へと集まってルシャナに何が起きているのかを尋ねる。ルシャナは使用人達に何か指示を出すと使用人達はジュノが羽交い絞めしているテクラの元へと集まり暴れるテクラを食事室から連れ出した。食事室の向こう側からテクラの暴言と暴れる音が遠ざかって行った。

「大丈夫ですか、師匠？」

「モンスターの攻撃に比べれば痛くもかゆくも無いね・・・・まぁ悪い予想が的中したな、ありゃ相当毒されてるな。」

「昨日の夜言ってた事ですか？」

「そうだね、貧民区で相当酷い目に会ってる人達を見て育ってきたって感じだなあの反応は。」

「あの子は今どこへ連れてかれたのですか？」

「昨日止まらせた部屋に連れて行かせたよ監視を外に一人中に一人付けさしてな。さっ少し運動した事だしご飯の続きだ。」

ルシャナはそう言うと椅子に再び腰掛け何事も無かった様に食事を取り始めた。ジュノもテクラによって倒された椅子を立てなおすと再び椅子に座り食事を始めた。

王都ヴェルド　マズルカ通り

一騒動があった物の朝の食事を済ませた二人は昨日ルシャナが言っていたパン屋を目指し歩いていた。ジュノは一つの疑問を思い浮かべながらルシャナの言っていたパン屋を目指していた、それはここマズルカ通りに来る前のルシャナ邸の衣装室での出来事に遡る。

ルシャナ邸　衣装室

「師匠。」

「なんだ？」

「どうして俺まで貴婦人用のドレス着なくちゃいけないんですか、しかもこのドレス前にここに来た時に舞踏会の時に身につけてた奴とそっくりですよ」

「お前は昨日、第三王女達に串刺しにされて死んだと見なされて貧民区に捨てられたんだろ?そんなお前がゆうゆうと街中歩いてるのはおかしいだろ?それにこのドレスを着る意味は意味はパン屋で必要になるからだ。」

「パン屋で必要・・・・パン屋の店主と踊るんですか?」

「んな訳無いだろ、ともかく黙って着てろ。」

王都ヴェルド　マズルカ通り

マズルカ通りでは背の高さが明らかに違う二人の女性が歩いていた、もちろん背の高い方の女性はジュノである、ジュノは不思議に思っていたこれだけアンバランスな二人が歩いているのなら自分が男だとばれても可笑しくないと思っているにもかかわらず周りからわは「なんてきれいなお方何でしょう。」や「おい、お前あの背の高い方の女性に声かけてみろよ」等と言った声が聞こえてくるから不思議である。

「（目ん玉おかしんじゃねえか、この街の奴らは・・・・）」

「ほら、ジュノあのパン屋だ、行くよ!!」

ルシャナの指さした先には店先がにぎわっているパン屋があった。パン屋の中に入ると恰幅のいい優しそうな顔をした店主が店に来て

いるお客に笑顔を振りまいていた。店主はルシャナの顔を見つけるとルシャナに近づいてきた。

「ルシャナさん久しぶりだねぇ。おやそちらの綺麗な貴婦人はルシャナさんの知り合いかい？」

「いや、昔の弟子だな。」

「そうかいそうかい！今日はどんなパンを買ってくんだい？」

「そうね～普通のブレッドとそれに挟む食材を買いに来たわ。」

「はっは！食材かい？ちょっと待ってくれ。」

店主はそう言うと店の奥に引きこもり他の従業員を店内へと連れて戻ってくるとその従業員にしばらく店番を頼むと告げると再びルシャナの元に近づいてきた。

「よし！じゃあ付いて来てくれ！！」

店主はそう言うと店の奥の方へと入って行った、ルシャナもそれに続き店の奥へと入って行こうとするがジュノに腕を掴まれその場で制止した。

「ちょっと師匠、店の奥に入って良いんですか？」

「いいんだよ、ほら行くよ。」

ルシャナはそう言うと逆にジュノの手を掴み店の奥へと入って行った。店の奥に入ると店主が笑顔で手招きをしながら店の奥にある扉

を開け待っていた。ルシャナ達はその部屋に先に入ると店主は部屋の周りに誰も居ない事を確認すると部屋に入り部屋の扉を閉めた、部屋内は質素な机と椅子が四脚あり窓が一つ付けられ窓からは太陽の光が射し部屋内は明るかった。

「ちょっとそこの椅子に腰かけて待っててくれ～今食材を出すから。」

ルシャナ達が椅子に腰かけたのを見ると店主は部屋の中にある大きな金庫の扉を開けるとそこから数冊の分厚い本を持ってそれを机に置くと男も椅子に腰をかけた

「さっ！今日はどんな食材をお求めだい？」

「・・・これが食材ですか？師匠。」

「そうさ、これが食材だ。情報って言う名のな」

「はっは！びっくりしたかい？ジュノ君？」

ジュノは突然店主に自分の名前を呼ばれびっくりした、この優しそうな顔をしたパン屋の店主とは今日初めて会う筈なのになぜ自分の名前を知ってるのかに。

「・・・あんた、なんで俺の名を知ってる？」

「君は昔その筋では有名だったからね～」

店主はジュノに笑いかけながらそう言うとジュノはますます混乱し始めた、この男はどこまで俺の事を知ってるんだと言う事に。そん

な不安そうなジュノの顔を見てかルシャナはジュノにこのパン屋の店主の事についての説明をしだした。

「ジュノこの男はな、情報屋だ。この世界中の色々な情報を取り扱ってる。昔はドンドルマで色々なモンスターについての情報やギルド関係者そして犯罪者の情報を取り扱ってたんだよ。顧客は主に要人向けに出してたんだっけか？」

「そう！ルシャナさんの言う通りです。」

「・・・そんな事をしていた人がなぜ王都ヴェルドに？」

「いやぁ、君に関しての情報を手に入れたらね。大長老が血相変えて僕の事捜索しだしてね、ルシャナさんとその夫に追いかけ回されて捕まえられて厳しく処罰されそうになったんだけどルシャナさんに救われてね。大長老に君に関しての情報を漏えいさせない事を誓わされてドンドルマを追放されちゃったんだよ、ルシャナさんと言う監視役付きでね。」

「師匠は結婚なさって、ドンドルマから去ったのではないのですか？」

ジュノはルシャナにそう質問するとルシャナは大げさなそぶりをしながらジュノに説明し始めた。

「一般的にはそういう風に伝わってるが、裏ではこういった事も兼ねてドンドルマから離れたんだ。あっ！先に言っとくが今の旦那とは偽装結婚じゃないぞ！ちゃんと愛し合って結婚した仲だ。」

「それで僕も一緒に王都ヴェルドに連れてこられた訳。でもまぁ近

いうちにドンドルマがメゼポルタに変わるって聞いてたしそれに準じてモンスター関係の情報やギルド関係の情報も仕入れるのが難しくなりそうだったから別によかったけどね。」

パン屋の亭主はそう言うと豪快に笑いだした。笑っている男をしり目にルシャナはジュノに対して更に詳しくこの男に関しての説明をした。

「それで今はこの街で王都ヴェルド等の人間が沢山集まる街を統治してる奴や要人の情報を主に仕入れたり手に入れたりしてそれを売って生活してるんだこの男は。」

「パン屋も兼業でね！それでどんな食材が欲しいんだい？」

「最近の王都ヴェルドの城の内部情報や王族についての情報を知りたい。特に第三王女について何かないか？」

「うーん、王族関係か～あるっちゃあるけど。ルシャナさん何か対価になりそうな物は持ってきているのかい？」

「もちろんだ、2年前のエレノア第一王女の生誕パーティの会場を沸かせた異国の貴婦人についてだ、まだ旬な食材だろう？」

「あぁ！あの凄く美人だったて言うあの人の情報か～いいねぇ！まだ僕の所にもその情報を求めて来る人が後を絶たないね、まだ鮮度もあってお釣りがくる食材だ！」

「だろう、それが今回私が持ってきた物だ、交渉は合意の方向でいいか？」

「もちろん！じゃあ僕の方から話して行くとしようか。」

パン屋の亭主はそう言うと机に積んでいた数冊の分厚い本の中から一つを取り出しそれをめくり始めた。ジュノは本の中のページに情報が書いてあるとてっきり思っていたがページには何も書いておらず代わりにおびただしい数の小さいメモ用紙がびっしりと張られメモ用紙の隅々まで何かが書かれていた。

「うーん、城の内部関係だと城の見張りを担当していたのは今まで騎士団の連中だったんだけどどうも騎士団の連中ではなくなった。王族関係だと王と王位第一継承者と第二継承者の長期による謎の不在が多くなってるね。それと第三王女についてはちょっと不気味だけど第三王女は二人いるみたいだね。」

「二人？」

「そう二人、しかも見た目姿形もまるで鏡を見ているように瓜二つって話だ。しかも今話した情報はある男が城に入り始めてから始まってる。」

「その男はどんな特徴なんだ？」

ルシャナがそう尋ねるとパン屋の亭主は本を閉じ首を横に振り始めた。

「それは別の食材になるから言えないよ、さっ僕の食材はもう提供したよ。ルシャナさんのその舞踏会での貴婦人についての情報を聞こうか。」

ルシャナは舌打ちをすると2年前の舞踏会に出席していた人達を沸

かせた貴婦人についての情報を話し始めた。貴婦人の正体はジュノが女装した結果生まれた物だと言う事をパン屋の亭主はそれを聞いて驚いた顔も見せずに真剣にルシャナの話をメモに書き留めていた。ルシャナがすべて説明し終わるとパン屋の亭主は羽ペンを置き最後にルシャナに対して情報の信憑性を高めるための何かが無いかと尋ねて来た。

「パン屋、その舞踏会に出ていた貴婦人の特徴を全部言ってみろ。」

「黒髪で体のラインはスラっとしている彫刻の様に整った顔立ちで目が眩むほど美しい。」

「ジュノ、席を立ってパン屋の横に行け。」

ルシャナがジュノにそう言うとジュノは席を立ちあがりパン屋の亭主の横に立った。亭主はジュノの顔や体のラインをまじまじと見始めた、全身を舐めまわすように見られてジュノは何だか嫌な感じだった。

「・・・確かにすべての特徴に一致してるね。」

「パン屋、パーティが始まる少し前メゼポルタからギルドナイトが二人この街に来ただろ。」

「あぁ、たしかジュノ君とブロードって奴だっけ確か護衛任務で来たんだよね。」

「そう、その時私は第二王子の護衛を担当する事になった奴に・・・・」

ルシャナが話を続けているとパン屋の亭主はルシャナの前に待ったと言う意味で片手を顔の前に突き出しあいた片手で目を覆って上を向いていた。どうやら彼の頭の中にある貴婦人に関しての情報のかけらを照らし合わせてこの話が真実かどうか決めているようだ。

「・・・なるほど、わかった。確かにこの食材はとんでもない食材だ、含めば含む程色んな味に派生する可能性があって少し危険だけど、まぁその危険な部分はこっちで調整して出すとしようか。」

パン屋の亭主はそう言うと腕を組み長い溜息をつき窓の外の風景を眺めた。

79節　Ｂｒｏｋｅｒ（ブローカー）（後書き）

よーく、犯罪者小説とか読むと情報屋って職業の危ない人がたまに出てきますよね。モンハンフロンティアの世界でも１００～２００になる為に毎度ハンターランク試験てのがあるんですけど、試験突破方法がギルドに一定金額の金を納金を渡すか、指定されたモンスターを倒すか、なんか危ない人達の間で貨幣として使われている【黒貨】って言うのを何十枚かその危なそうな人に渡してギルドのお偉いさんに口を効かせてランクアップする方法の三つがあるんです。しかもこの黒貨ってアイテムはギルドに所属する猟団のショップで売られてるですよね。ハンターズギルドも明るい部分だけじゃないって事なんですかね。ちなみにランク９００の試験の対象モンスターはミラルーツを一人で倒せなんですよ～しかもフロンティアのミラ系モンスターって制限時間【５０分間】目いっぱいいますからね、自分が死ぬか相手が死ぬかの勝負って訳なんですよ。いろいろ試行錯誤して普段あんまり使わないガンランス装備で硬化中も拡散砲撃の固定ダメージや爆弾を利用して相手の体力をじょじょに削っていって時間ぎりぎりで倒せたのはいい思い出です。

じゃあまた土曜日位に会いましょ～

８０節　ドッペルゲンガー（前書き）

２４日の時に投稿した話に手を加えたものです。最初はあんまり手を加えてませんが後半部分は新しく書いて付け足したものです。
そしてこれが今年最後の投稿になるんですね。

80節　ドッペルゲンガー

王都ヴェルド　マズルカ通り

ジュノとルシャナはパン屋から食材を得るとマズルカ通りを歩いていた。マズルカ通りの雑踏の中ジュノはまさか2年前のあの舞踏会に出席した自分が世の男達に二年の月日が経っていてもまだ話題になっているとは思ってもみなかった。

「良いのかい？あれだけの情報で一応もしも余分に食材を買うため用にお金を持ってきてたんだけどね。」

「えぇ、いいんです。あのパン屋のおじさんは予想以上にいい食材を提供してくれましたよ。しかもその中でもとびっきりの食材を。」

「とびっきり？あんな少ない食材の中で何かいいものがあったのかい？」

「はい、その食材のおかげでなぜ第三王女があのようなことを俺にしたのかそして今城がどうなっているかが大体検討がつきました。」

「へぇ～聞かせてもらおうじゃないか、お前の検討を。」

ルシャナがジュノにそう言うとジュノはルシャナに歩調を合わせながら自分の考えをルシャナに伝え始めた。

「まず二人の姿形も見た目もそっくりな第三王女、これはおそらく二人のうち一人はラスタだと思います。」

「ラスタ？」

「今メゼポルタのハンターズギルドがハンターに対してやっている制度です。このラスタと言うのは現在解明されてる古代文明の技術を使って作られた自分の分身で、その分身を他のハンターに貸してクエストに行く際にその自分の分身を貸したハンターのパーティに人数が足りない時にギルドがそのパーティに派遣する制度なんです。」

「ほーう、ギルドの技術力はそこまで進化したのか・・・」

「でも、見た目が瓜二つでも言葉を発することはできないし狩猟技術もそれなりで知能もそんなに高くないんですけどね。」

「フーン、じゃあ仮に王女がそのメゼポルタで作られた、ラスタだとしてもお前に対しても喋らないし、お前を他の奴らに襲わせるように命令することもできないじゃないか。」

「まぁメゼポルタで作られたラスタならそうですよね。でもラスタを作ることのできる技術を持ってる人物を俺はメゼポルタ以外でも知ってるんです。」

「・・・ヨハネスか。」

「はい、あいつがギルドに対して謀反を起こしたのはラスタ制度実装後でしたし、それにあいつは元ギルドナイト司令の位置にいましたしラスタの製造技術を持ち出して独自にラスタを作り出す事も可能です。それにあいつ仲間の一人は・・・・」

「お前と同じ存在の女か？」

ルシャナは立ち止まりジュノにそう尋ねるとジュノも立ち止まり静かに首を縦に振った。

「それともう一人ヨハネスの側には男のハンターが居るんです。さっきパン屋のおっさんが言ってたなかにある男が城に入り始めてから城に異変が起きてるって情報の中の男はおそらくヨハネス側に付いてる男のハンターだと思いますね。」

「お前の言ってる筋が正しければあいつはこの街で何をしようとしているんだ・・・・」

「・・・ともかく俺は今日の夜城に忍び込みます、王族の方や仲間も心配ですし。」

「できるのかい?城の周りの見張りの兵は騎士団の連中じゃないのに?」

「能力を使えば簡単ですよ。」

「ハッハ!!便利な能力だねぇ!!それじゃあ私は新しい我が子の為に何か買って家に帰るかね。」

「新しい我が子?師匠、身重だったのですか?」

ジュノがルシャナにそう言うとルシャナはジュノに近づきジュノの鼻を指ではじいた。

「バカ言ってんじゃないよ!テクラの事に決まってるだろう!!」

「テクラって・・・育てるんですか!?彼女を!?」

「当り前だろう、私はあの子をまたあの貧民区に投げ捨てるほど非情な奴じゃないよ!」

「しかし、俺が成り行きで連れて来た子ですよ。」

「じゃあ、あんたが面倒みるのかい?それともまたあの貧民区に連れてくかい?」

ジュノはその場で思案した、ルシャナ師匠にあの子の面倒を見てもらうのかそれともまた貧民区にあの子を連れていくのかを、今ヨハネスの件を追っている自身が彼女の面倒を見た場合は恐らく何らかの被害が彼女に被る可能性があって危険だ、かと言ってまた元の貧民区に連れて行った場合あの子は今以上に人を信じなくなり悲惨な運命を辿るのは容易に想像がつく。ジュノが思案しているとルシャナがジュノの肩を叩きジュノの注意を自分に向けた。

「良いかいジュノ、私があんたに稽古を付けていた時あんたに教えた大事な事があるだろう。」

「死ぬな、あぶないと思ったら逃げろ、助けてもらったらその恩は忘れるな・・・ですか?」

「それもそうだが、もう一つあっただろう狩猟においても人生においても大事な事だ。忘れちまったのかい?」

「・・・運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ。」

「そうそれだ。私は今朝のテクラの様子を見てこの子はこのまま放

っておいたらろくな事にならない、なら私が育ててやろうじゃないかって決めたんだ。ジュノがテクラを私の元に連れて来たのも運命の巡り合わせだったのかも知れないね！」

「彼女の意思はどうするんです？多分今のあの子なら拒否しかねますよ。」

「そしたら、頭を床に擦り付けてでもお願いするさ！テクラの面倒を見させてくれってな！」

ルシャナのその言葉にジュノはルシャナが床に頭を擦りつけながら少女に懇願している姿を想像した、師匠には失礼だが少し滑稽な風景でジュノは少しにやついてしまった。

「なに、にやにやしてるんだい、気持ち悪い。」

「いえ、何でもないです。師匠、テクラの事お願いしますね。」

「まかせな！ジュノあんたは夜城に忍び込むとしてこれからどうするんだい？まだ時間は昼ぐらいだよ。」

「俺はこれから城の外に止めてある乗って来た気球船が今どうなってるのを確認と城の周りの確認してきます。あっ師匠お願いがあるんですけれども・・・・」

「なんだい？」

「お金少し貸してください。」

ルシャナ邸　ユーノの部屋

外は日が暮れ空は黒に染まり月が空に現れ、街の明かりが街全体を照らしていた。ユーノの昔使っていた部屋には月明かりが部屋の中に少し入り部屋内を薄く照らしていた。その部屋の中にテクラは月明かりに照らされながら窓越しに外を眺めていた。昼間の様に錯乱している様子は無く窓を破って家から出ると言った気配も無い、テクラは困惑していた。朝食の時に居た女が先程の帰って来て夕食の時に自身に対して言った言葉に。

【テクラ！お前今日から家の子な！それと今テクラが居るあの部屋も今日からテクラの物だから自由に使いな！】

「訳がわからない・・・・何なのあの女・・・・」

テクラはそう呟くと窓に片手に当て窓に映る自身の姿を見た。

「何が目的なの・・・・」

テクラが様々な事を考えていると突如部屋の扉が叩かれ部屋にみた事の無い銀色の防具を首から下のみ身に纏った男が入って来た。テクラはその男の姿に一瞬身構えたが顔を見ると今朝食事室にあの女と一緒に食事を取っていた男だと言う事に気付いた。

「よっ！テクラちゃん！」

男は自分に対して軽く挨拶をしてきたがテクラは男に返事を返さず男に対して身構えた。この男が自分に襲いかかって来た際いつでも逃げられるように、男は自分のその姿を見ると少し笑い部屋の中に入り部屋にあった椅子を手に持つとテクラの居る場所に椅子を向けてその椅子に腰かけ自分に話しかけて来た。

「師・・・ルシャナさんに引き取られるそうだね、テクラちゃん」

「・・・・」

「ルシャナさんは良い人だから、安心して良いよ」

「・・・なんの根拠がある」

「え？」

「なんの根拠があってあのババアが良い人だって言ってるんだ！！引き取られるって言ってもどうせ私が物珍しいから人間としてじゃなく家畜として飼うに決まってる！！それで飽きたらまた捨てるつもりなんだろうあのババアは！！」

テクラの怒号が部屋内に響き渡る、急に怒鳴ったせいか頬が火照っているのを感じる。しかし男はテクラのいきなりの反応に対して別に驚いたりもせずじっとテクラを見ていた。

「な・・・なんだよ？なにじっと見てんだよ！？」

「元気な奴だなと思ってね。テクラちゃん、ルシャナさんはそんな家畜を飼うような感覚で君を引き取るような人じゃないよ。あの人は君を普通の人間の子供として君を引き取るよ、それも我が子も同

然にね。」

「・・・どこにそんな保証があるってんだよ!私の姿が特別だから飼うんだろ?所有したいんだろ?私と言う珍しい物を、そりゃそうだろうな、私は肌の色もお前と違って白いし髪も真っ白だから・・・お前に何がわかるんだよ!」

「わかるさ、俺も普通じゃないから・・・昨日の夜テクラちゃん見ただろ?死んだと思っていた俺が生き返った所。」

テクラは男にそう言われると昨日の夜の事を思い出した、確かにあの時目の前に転がっていたこの男はあの場所で目を半開きに開け口を少し開け表情一つ変えずに横たわっていた姿をどう見ても死んでいる人にしか見えなかった、テクラは黙り込んでいると男は話を続けた。

「俺はね、人間じゃないんだ。かといってテクラちゃんが昨日俺に対して言ったモンスターでもない、俺は昔の人達が作った兵器なんだ。」

「・・・兵器?」

「そう、兵器。この街を覆っている壁に備え付けられている対モンスター用バリスタと大砲と同じ存在、昔の人達が生きてる時代にね今のモンスターと同じような存在が昔の人達を襲ってそのモンスターを倒すために昔の人達は俺みたいな存在をいっぱい作ったんだ、俺はその残り物。」

「そんな子供騙しの嘘言って私を騙す気なんでしょ?私はそんな嘘で騙される程馬鹿じゃない!!」

「まぁ、普通そんな事言われても信じられないよな・・・・」

男はそう言うと椅子から立ち上がりテクラ自身との距離を少し縮めるとその場に立ち止まった。

「今俺が人間じゃない証拠を見せるよ・・・・ちょっと恐いけど許してね。」

男はそう言うと顔を下に向けた、すると男の纏っている銀色の防具の隙間から薄らと蒼白い光が漏れ出し露出している頭部も薄らと蒼白く光り出し男は下に向けていた顔を再びテクラに向けた。再び見た男の顔は普通の人間とは違った、顔の形は先程の男と変わらないが眼が蒼白く光りテクラの知っている人間の眼ではなかった。その目を見た瞬間体がすくみ上がり震えが止まらなくなった、その場から逃げようと頭では考えていても体を動かす事が出来なかった。男は少しの間その状態でテクラの顔を見ると瞼を閉じた、男が瞼を閉じると男の体から薄く発していた蒼白い光が消え男は再び眼を開けると男の眼は普通の人間の眼に戻っていた。

「信じてもらえたかな?」

「・・・・・」

「黙んまりか・・・・まぁ信じてもらっている方向で話を進めるよ、俺も昔ルシャナさんにお世話になってねルシャナさんは俺みたいな人間でもモンスターでもない存在と知りながらも普通の人間の子供として接してくれて人間のモンスターハンターとして育ててくれた。テクラちゃんも聞いたことあるだろ?この王都の外でモンスターを狩る存在と知られているモンスターハンターって人達の事」

男はテクラにそう尋ねるとテクラは首を縦に振った。

「俺みたいな得体の知れない存在でもルシャナさんは普通の人間の子の様に俺の面倒を見てくれた、ルシャナさんは君の思っているような人じゃないよ。」

男はそう言うと腰元辺りについている袋の中に手を入れ中から首飾りを取りだした。

「テクラちゃんは俺の持ってる首飾りを凄く欲しがってるみたいだけど、あれは俺の大事な人から貰った物だからあげる事はできないから代わりにこの首飾りをあげるよ。」

男はそう言い首飾りを手に持ちながらテクラへと近づきテクラの手を取りテクラに首飾りを握らせた。テクラは男に手を開き握らされた首飾りを見るとそれは鏡のようにツヤツヤな黒い石に純白レースで乙女が祈りを捧げている姿をモチーフとしてあしらってあった。

「じゃあ、俺はこれからちょっと仕事があるからもう行くけど最後に一つ言っておくね。運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ、今テクラちゃんは自分の今後の運命の分岐点に立ってる、幸い君は決断する為の時間がある環境下に居る。よく考える事だね。」

男はそう言うと部屋から出て行き部屋にはテクラ一人が残された、テクラは男から貰った首飾りを手に持ちながら部屋に置いてあるベットに座り込んだ。

「今後の運命・・・・」

テクラはそう呟くと男から貰った首飾りに視線を落とした。

８０節　ドッペルゲンガー（後書き）

皆さんはチャリティーサンタって知ってますか？サンタになって親の代わりに子供達にプレゼントを渡す活動をしている団体なんですけど、今年は２４日のイブはそれに参加してサンタになって子供達にプレゼント配ってました。プレゼントのお返しに子供から手紙を貰ったりもして嬉しかったですね。先週忙しかったのはそのサンタになる為の眉毛やヒゲやかつらや帽子を作ってたからです。後学校のテストとかもありましたけど。

81節　侵入（前書き）

新年あけましておめでとうございます。今年もこんなペースで更新していきますのでよろしくお願いします。

81節　侵入

ルシャナ邸　扉前

「旦那の狩猟防具の具合はどうだい？」

ルシャナは笑いながら銀レウス装備とおもしき装備を全身に纏ったジュノに声をかけていた、ジュノはその場で屈伸や伸びをしている。

「ピッタリとまではいきませんけど、まぁ活動するのに支障はなさそうです。でもこの装備、装飾からして銀レウスの装備みたいですけど、メゼポルタの銀レウス装備とはデザインがかなり違いますね。むしろこっちの方がカッコいいな。」

「あぁ、うちの旦那はロックラック地方からこの大陸に来てね、聞いたことあるだろ？ロックラック」

「えぇギルドナイトの仕事で何回か行った事があります。スラッシュアックスって言う独自の武器がある所ですよね？」

「そう、スラッシュアックスがある地方だ。この装備は旦那がロックラック地方でハンターとして活動していた時に作った物なんだ。」

「そんな思いである品を勝手に使っちゃって大丈夫なんですか？能力使ってぼろぼろになっちゃうかも知れませんよ。」

「じゃああれかい？ドレスでも着て行くかい？」

「いや、それは・・・・・」

「それに、もしぼろぼろになったらお前がロックラック地方に行って銀レウス装備作ってくれれば良いだけの話だ。」

「・・・なるべく壊さない様にしよう。」

ジュノはそう呟くとルシャナに背を向け能力を発現させ城へと飛び立とうとしたがルシャナに呼び止められた。

「まちな、あんた丸腰で城に行くつもりかい？」

「はい、多分城には俺がこの街に持ってきた狩猟武器がどこかに保管されてると思うので」

「その武器を取り返すまではどう戦うのさ？」

「ん～・・・素手ですかね。」

「そんな事だろうと思ったよ、ちょっと待ってな。」

ルシャナはそう言い家の中へと入って行くと双剣を持って再びジュノの元へと戻って来た。

「あっ、その双剣は！！」

「ないよりマシだろ？ほら！」

ルシャナはそう言うと丸い円形上の双剣を片方ずつジュノに投げ渡した、その双剣はルシャナの現役時代よく使っていた双剣でもありジュノ自身もルシャナのその双剣を扱う姿に見惚れてよく好んで使

っている双剣でもあった。

「ローゼンエーアガイツ・・・・」

「はは、それもぶっ壊したら弁償な！」

「良いんですか？これ師匠の一番のお気に入りの双剣じゃ？」

「良いんだよ！ほら！さっさと行ってきな！！」

ルシャナはジュノにそう急かすとジュノは双剣を装備しルシャナに一礼すると異変が起きているパルティータ城へと飛び立った。

パルティータ城　排水路

ジュノの考えた作戦は城の汚水が流れている汚水路に入り汚水路を辿り地下から城内へと侵入すると行ったものだった。何故地下から侵入すると事にしたかと言うと能力を使って上空から侵入するのも考えたがいかんせん飛行中は背後の紋様が蒼く輝く為敵に察知されやすいし、もしも降下の際に見張りに見つかってしまった場合のリスク面を考えると地下から侵入した際がリスク的に考えて只一つの事を我慢すればこっちの方が安全だと考えたからだ、そう只一つの事を我慢すれば・・・・

「やっぱりくさい・・・・」

ある程度覚悟はして排水路に入ったものの、城の生活排水が長年にわたって流れて来たこの排水路の臭いは尋常ではなかった。

「絶対この臭い人の排泄物とか食事を作る時に出る廃油とかの臭いじゃないよ・・・・あっ」

ジュノはある事を思い出したそれはこの酷い臭いの原因の一つでもある事だ。

「あの豆王女確かモンスターをペットにしてやがったな・・・・って事はモンスターの排泄物もここに流れてるって事か・・・・はぁ・・・・消臭玉が欲しい・・・・」

そんな事を呟きながら排水路を歩いて行くと城から流れ出る汚水が集まっている広い場所へと辿りついた、ジュノは広場を見まわし何か上へと通じる梯子や階段の様な物が無いか探したがそれらしき物は見つける事は出来ずにいた。

「早くここから出たい・・・・ん?」

梯子や階段らしき物は見つける事は出来なかったがその代わり奇妙な物を見つける事が出来た周りのそれは排水路の壁の石材と違い現代の技術とは違う物でできた扉の様な物だった。ジュノはその扉のある方へ壁伝いに歩いて行き扉の前へと立った。

「この扉・・・ノルン島のアイリスが居るあの施設の扉に何となく似てるな・・・なんでこんな物がこの城の地下に・・・・」

ジュノはそう呟くと扉の周りを確認し始めたもしこの扉がノルン島と同じ古代文明時代につくられた物なら何か扉を開けるための仕掛けがあると思ったからだ、ジュノの考え通り扉の横部分にノルン島にある扉と同じ覗き穴を見つける事が出来た。

「あった・・・あったけど開くかな?そもそもこの装置生きてるのか?まぁ物は試しだ!とりあえず覗いてみよう。」

ジュノはそう言い除き穴に顔を押し当て中をのぞいてみると微かに赤い光が見えたどうやらこの装置はまだ生きてるようだ、赤い光がジュノの眼の周りを移動すると装置からディオネ遺跡の時と同じように音声が流れて来た。

「Ｒｅｔｉｎａ　ｐａｔｔｅｒｎ・・・Ａｔｔｅｓｔａｔｉｏｎ・・・Ｓｅｒｉａｌ　Ｉ－０８４　Ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ・・・Ｐｌｅａｓｅ　ｅｎｔｅｒ.（網膜パターン認証シリアルＩ－０８４確認どうぞお入りください）」

音声が終わると共に扉が少しずつ開かれて行き扉の奥は今まで歩いてきた排水路とは違う材質で作られている通路が奥へと広がっていた。

「今シリアルＩ－０８４って言ったよな、俺のシリアルは確かＪ－１０１の筈なのに・・・まぁ良いか次に行く道が開いたんだし。」

そう言うとジュノは開かれた扉の奥へと入って行った、細長く続く通路しかし先程の様に排水路の臭いは無かったが耳を澄ますとディオネ遺跡と同じように壁の裏で何かが動いているような音が聞こえた。

「ここもやっぱりディオネ遺跡みたいにアンサラーを作る施設だったのかな?」

そう呟(つぶや)きながらジュノは進んでいくと通路伝いに扉が現れ始めた、

きっと古代人の研究員の仮眠室的な物か何かだろうと思いジュノは気にもせずに進んで行くと通り過ぎた後ろからドン！と壁を叩く様な音が響きジュノは前へと咄嗟（とっさ）に回避し双剣を抜き出しながら後ろを振り返ったが後ろには誰も居なかった。

「なんだよ・・・びっくりさせやがって・・・・」

ジュノはホッと胸を撫で下ろし双剣を仕舞おうとすると今度は横の扉からドン！！ドン！！ドン！！と内側から誰かが叩いている音が聞こえて来た。

「うおッ！！なんだよ！？誰か中にいるのか！？」

「〈アタシよ！ジュノ！！ナターシャよ！！〉」

「え！なんで食材屋のおばちゃんがここに居るんだよ！？」

「〈違う！！！ナターシャ！！　ナ！！タァ！！シャ！！〉」

「えっ！？オッタマケーキがなんだって！？」

「〈キー！！！〉」

扉の奥からナターシャらしきくぐ籠った声が聞こえてくると今度は扉の奥がドタバタとうるさくなった、どうやらナターシャは無事らしい。

「ハッハー！！どうやら無事な様だなナターシャ！！扉から離れてろ今なんとかして開けるから」

ジュノはそう言い腕の防具が消し炭になるのを恐れ防具を外し能力を発現させ腕に蒼炎を纏う、ジュノは蒼炎を斧状へと変化させるとナターシャが居る扉に向け斧のを振りかざした。扉に振りかざした斧は見事切れ目が入りジュノは次々と扉に切れ目を入れて行き扉に人が一人通れるほどの穴を開けると中からドレスを着たナターシャが出て来た。

「わかってるなら、さっさと開けなさいよバカ！！うわっ！！なんかアナタ臭いわよ！！」

「排水路を通ってここまで来たんだから仕方ないだろ！」

「近寄らないで、臭いが移るわ！」

「ひでぇ！！」

ナターシャとやり取りをしていると他の扉の方からも扉を叩く音が聞こえて来た、どうやらまだこの扉内に閉じ込められている者達が居るようだ。

「まだ誰かいるのか？」

「私がこの中に入れられた時に一緒に王妃様もこの場所に連れて来られてたからきっと王族の方達よ」

「ハハッ！！王族が入ってるとはさぞかし洒落た部屋なんだろうな！」

ジュノは軽口を言うと再び扉に蒼炎で練った斧を振りかざし音のする扉を次々と開けて行った、扉からはナターシャの言った通り王族

の面々が出て来た、王族の４人は再び再会出来たことに歓喜しお互いの身の確認をしあっていた。

「どうやら、王族の方々は大丈夫みたいね。」

「そうだな、一人を除いてはだけどな。」

ジュノはナターシャにそう言うと王族４人の中でこの場所に一番詳しいと思われる人物に向かって歩いて行った。

「お互いの無事を喜んでる中悪いけどな、国王ここはなんだ?それと第三王女は今どうなってる?」

「むっ、そなたか我々を助けてくれたのは感謝するぞ!」

「感謝なんて今はいい、ともかく質問に答えてくれ。まずここはなんなんだ?」

「そなたの声どこかで聞いた事がある・・・すまぬが頭の防具を取って素顔を見せてくれるか?」

「なんで人の話聞かないかねぇ・・・防具取ったらちゃんと質問に答えろよ!」

ジュノは国王にそう言うとシルバーソルヘルムを脱ぎ王族たちに素顔を露わにすると王族達は驚いた顔をした。

「そなた・・・ジュノではないか!!何故ここに!?」

「助けに来た以外にこんなとこに居るかよ・・・」

ジュノは呆れ顔で国王を見ていると次に王妃がジュノに対して話しかけて来た。

「でも、ジュノ貴方はあの時刺されて・・・・・」

「あぁ・・・・それはですね・・・・・」

ジュノが王妃に対しての回答に困っていると次は国王がジュノに問いかけて来た。

「そうじゃ、ジュノお主どこからこの場所へと入って来た?」

「あ・・・あぁ、排水路を進んだ所の広い場所にあったちょっと不思議な扉から。」

「あの扉を開けて入って来たのかお主!どうやってだ!?」

「えっ・・・・いや普通に蹴破って。」

「そんな事ではあの扉は開かぬ、あの扉はどんな衝撃を加えても傷一つ付かなかった物だ。」

「(国王がこんなに躍起(やっき)になって聞いてくるって事はかなり重要な古代文明の施設ぽいなこの場所は、でもどう答えた物か、網膜パターン認証システムなんてこの時代の人はまだ知らないし、かと言って俺の存在を王族の人達にばらすのもどうかと思うしなぁ・・・・)」

ジュノは悩んでナターシャに助け舟を出してくれと目くばせするが

ナターシャ自身もどうしたらいいかわからないといったジェスチャーをジュノに出してきた。

「（・・・ここはもうありのままの事を話すしかないか、こいつらが囚われてた扉をどう切り開いたかや王妃の目の前で串刺しにされて死んだとされた俺がなんで無事に今ここに居るのかの説明にもなるしな・・・・）」

「これから王族の方々に私の存在について話します。私がこれから話す内容はとても非現実的な事に聞こえるかもしれませんがすべて事実です。それにこの場所に関係する事柄かも知れません。」

ジュノはそう言うと王族４人に自分がどういう存在なのかについて話し始めた。

81節　侵入（後書き）

あげぽよ～ってどんな意味なの？ってバイト先の女の子に聞いてみたんですけどテンションを上げる時の掛け声的な物だって言ってました。てっきり私は【あけましておめでとう】の若者言葉番だと思ってましたね。

82節　囲（かこい）（前書き）

今日はスノボに行ってきまーす！
そう言えばモンハンの世界でも雪が降る場所では村の中で子供たちは雪合戦とかするんですかね？

82節　囲（かこい）

パルティータ城　地下施設

「そんなでたらめな！」

ジュノは王族の面々に自身の存在を説明していた、国王と王妃は今まで様々な事態を目にし聞いて来た経験からジュノの説明を黙って聞いていたが第一王女と第二王子はやはり信じられないといった気持ちの様だ。

「この人が人間じゃないなんて信じられますか！？だってこの人はどう見ても人間じゃないですか！！」

「ルートヴィヒの言う通りです、私はジュノ様とあまり面識はありませんがソフィーからとても強くて優しく素敵な方だと伺ってます。あの子をここまで言わせる殿方が人間じゃないなんて・・・・」

「姉上の言う通りです！この方は過去にこの都に来ていただいた時に王としてどのような姿で有るべきかに迷い、そして強さを国民に誇示（こじ）し国民の信頼を得ようとしていた私の間違いを指摘なさってくれた。そのような人間的な考えが出来る方が人間じゃなくてモンスターだなんて・・・・」

二人は興奮した面持ちでジュノの説明してきた事を否定してきた、ジュノに取ってそれはとてもうれしい事だった。自分をこの世界に生きている人達と同じように見てくれる人がここにもいた事に、でも言いだしたからにはこの真実をこの二人にはちゃんと伝えなくてはならない。

「二人とも俺の事をバカにせずに俺の事を人間だと思ってくれて嬉しいよ、でも事実なんだ俺は人間でもモンスターでもない古代人が作った古代兵器の残り物なんだ。」

ジュノはそう言うと王族四人とナターシャにその場から動かない様に指示し五人から離れた。

「今からその証拠を見せるよ、この狭い場所だとちょっと熱く感じるかもしれない、それと恐いと感じるかもしれないけど見ててくれ。」

ジュノはそう言うと能力を発現し始め体は蒼く光はじめ眼が蒼く白く光り始め人の物ではなくなり龍を思わせるような眼になり腕に蒼炎を纏い始めた。ジュノは腕に纏った蒼炎を扉を破った時に使った斧状に変えると離れた所に居る5人にそれを見せ始めた。

『さっきあんた達が囚われてた扉を切り開いた蒼い物の正体はこれだ、これは俺の周りの蒼炎を練って作ったものだ。』

ジュノはそう言うと能力を解除しまた5人の元へと歩いて行った。

「これで信じてくれた?俺が人間じゃないって事を」

「・・・・」

「急にこんなの見せられても困るよな、ごめんな。俺はアンサラーって言う昔の兵器でここみたいな古代人達に作られた様な施設にもある程度詳しいんだ、だからさっき国王が言ってた開かない扉も開く事が出来たんだ。どのようにして開いたかを説明すると色々説明

しないといけないから今は説明しないけど。」

ナターシャ以外の四人はジュノの見せた証明を見ておもおも自分の中でジュノと言う存在を再び整理しているようだ。この都の者達が最も恐れ敵と見なしているモンスターを更に上回る力をもった存在の物が目の前に居る、それは彼らに取ってすさまじい恐怖になっているのかも知れないとジュノは彼らを心配した。

「ま・・・まぁ、お前達を取って食ったりとかはしないし襲ったりもしないから安心してくれ！それより早く第三王女の今の状況とここが何なのかを教えてくれ。」

「そなたが・・・私達王族の間で語り継がれてきた人の似非者と言う事か・・・・」

「ん？」

「あなたには伝えなければなりません、私達王族の間で語り継がれ来た事そしてこの都が何故このように周りを過剰なまでに囲まれているのかを」

「あなたその話はルートヴィヒが・・・・」

「今はそのような状況ではない、今私の目の前に伝承として語り継がれてきた物が居るのだ。そしてこの者はこの国で起きている事態を変えようとしてらっしゃる。」

国王は王妃にそう言うとジュノに向き直り真剣な面持ちでジュノに語り始めた。

「まずこの王都ヴェルドを全方位に囲む外壁についてお話しましょう、この外壁は我々人間がここを王都ヴェルドとする前からあったとされています。そしてその外壁の中央には過去に遺跡がありその地下にある施設は現代の文明の技術力では生産が不可能な物ばかりで作られていました。」

「私達王族の祖先はかつてその遺跡を守る者としてこの地に暮らしてきたと伝えられています。しかしモンスター達は決まって遺跡を襲い祖先達はその事に悩み遺跡の周りを覆っている外壁を強化し始めモンスターによる襲撃は徐々に減って行きました。そしてこの遺跡を守って行くにつれ人々の人口が増えこの王都ヴェルドが誕生したのです。」

「つまりもともとあった遺跡の上にこのパルティータ城を作ったってことか？」

「はい、祖先は遺跡自体を覆い隠すようにこの城を建設しました。そしてこの事実を知る者は今では王族家系の者のみとなります。」

「さっき言ってた人の似非物がうんぬんってのはなんなんだ？」

「それは・・・亡念（ぼうねん）の間に行けばわかるかと・・・・」

「亡念の間？なんだそりゃ？言葉で説明できない内容なのか？」

「あなたに直で見て頂いた方が言葉で説明するよりもわかりやすいと思います、ここが何なのかなぜ古来から外壁に覆われているのかも見れば分るでしょう。」

「ふーん、まぁその亡念の間ってのは後回しにしてまずは本物の第

三王女が今どうなっているかだな、あっ後なんで王族のあんた達がこんな状態になったのかも教えてくれると助かるな。」

ジュノが王族達四人にそう言うと王族達を代表して国王が話し始めた。まず少し前から防衛大臣の紹介で異国から来たと言う赤い衣纏ったハンターらしき男が異国の防衛兵器をただでこの国に譲渡したいとの事で国に入って来たがその防衛兵器は王自身が想像していたバリスタ等の兵器ではなく全員同じ顔をした人で男が兵器を達に指示を出した途端この城全体は鎮圧されソフィー王女を除いて他の王族四人はこの遺跡の扉に閉じ込められたとの事だった。

「（パン屋のおっさんが言ってたある男ってのはやっぱりヨハネス関係か、やるなあのおっさん。）」

「まぁ俺が王妃様に会った時に居たソフィー王女は偽物だよな？アンナ王妃」

「もちろんです！！あの子があんなひどい事を貴方にするはずありません！」

「となると、やっぱりあれはソフィー王女のラスタか・・・どう思うよナターシャ？」

「ヨハネスの技術力はもはや現代のメゼポルタの技術力を逸している。あいつならソフィー王女のラスタを作る事なんて簡単でしょうね。」

「ふーむ、じゃあ今城に居るソフィー王女は偽物って言う可能性が高い訳だ・・・となると本物はどこに居るんだ？」

「メゼポルタ製のラスタなら完全に独立して活動する事はまだ出来ないから狩猟が行われてる時を除いてはギルドで調整をするため一時活動を停止しなくちゃならないわ。」

「ヨハネス製のラスタは喋ったり高度な狩猟技術を有してるけど元はメゼポルタの技術を盗んで作った物だからもしかしたらソフィー王女はこの城の中に居るのかも知れないな・・・・城内で二人の第三王女を見たって情報もあるし。」

「その情報はどこで手に入れたのジュノ?」

「ん?パン屋。」

「はっ?」

「まぁ、ここでうだうだしていても仕方ないともかくここを出るとしよう。国王はここの施設に関して詳しいのか?」

「えぇそれなりに。」

「じゃあ出口まで案内してくれ、出口を出たら俺は適当に暴れて敵の注意を俺の方に向けるからその間に王族四人はナターシャと共に城を脱出って簡単に行く訳ないよな・・・・騎士団の連中はどうなってるんだ?」

ジュノは国王にそう尋ねると国王はジュノに対し口を開いた。

「彼らは大半は殺されたが騎士団長と副団長の数名は恐らくこの場所に居るかと。」

「なるほどね、じゃあ全員助けてからこの場を脱出するとしよう。今のナターシャは狩猟装備を装備してない只の女の子だからな。」

そう言うとジュノは国王を筆頭に施設内の案内をさせて行った、しばらく施設内を歩いていると再び扉が並んでいる通路にたどり着き国王が騎士団達の面々の名前を静かに上げると扉の向こうからそれにこたえる様に扉を叩く音が聞こえジュノは先ほどと同じように扉を切り開き囚われていた騎士団達を助け出した、騎士団達は少しばかり衰弱していたためジュノはアイテムポーチ内あらかじめ持ってきていたパンと水を騎士団達に分け与えた。「なんか臭いパンですね」と騎士団の一人に言われたが「嫌なら食うな」とジュノは言い放ち文句を言ってきた騎士団の一人を黙らせた。

「よし、これで人数が増えた所だしお前達を2班に分ける。まずは武器の奪還これまでは二班とも一緒に行動してもらう武器が保管されている場所はおおよそ把握出来てるよな騎士団長？副団長？」

「演習場の近くに我々の武器庫がありますので、おそらくそこにあるかと。」

「俺達が王都に来た際に持ってきた狩猟武器もその武器庫にあるか？」

「はい、前ジュノ様が王都に訪れた際に持ち込まれた狩猟武器も我々の武器庫に保管してましたのであると思います。」

「よし、なら武器を所持後一班の騎士団長と数名は王族四人を護衛しつつ城から脱出、二班の副団長と数名はそこに居る銀髪の女とともに一班の護衛の援護に回れ。ちなみにそこの銀髪の女はメゼポルタでトッププクラスの実力を持ったハンターだ。だからこいつの狩猟

防具を見つけたらもうお前達は安心しても良い。そして俺はあんた達が行動しやすいように城内で暴れまわる。」

「国王陛下達を外に連れ出すことに成功したらなにか合図を出した方がいいか？」

騎士団の一人がジュノに訪ねて来るとジュノは少し考えアイテムポーチ内からあるアイテムを騎士団の一人に渡した。

「これは閃光玉って行ってハンター達の間で使われているアイテムだ。本来は目くらまし用だがこれを空に向けて思いっきり投げてくれ。」

「でもそんなことしたら王族達の脱走もばれるし居場所の特定にも繋がるんじゃないの？」

ナターシャはジュノにそう疑問を問いかけるとジュノは笑いながらナターシャの質問に答えた。

「大丈夫、王族達が脱走完了するまえに全部の敵を殲滅するから♪」

「あ・・・あっそう。そうねアンタならそんなこと可能よね・・・・」

「よし決まりだな！じゃあ俺は先にこの場所から出るからある程度時間が立ったらここから出て各自行動開始て事で。」

ジュノはそう言うと国王に説明された出入り口に向かって走り出した。

パルティータ城　調理室

国王に指示された場所に向かいその場所の上の方にあった扉をゆっくりと開けるとそこは食材などを調理する調理室だった。ジュノは誰も居ない事を確認するとゆっくりと扉から出て調理室へと立った。様々な食材が並び食材の香りが鼻をくすぐる。

「そう言えば、ルシャナ師匠の所で夕食食べずに来ちまったな・・・・」

お腹の中の虫が空腹だと鳴き出す、しかし今は作戦行動中食事などをしている暇は無いはずだが。

「まぁ少しつまんで行っても良いか！これから暴れる訳だし！」

ジュノは食欲に負けてしまい装備していたシルバーソルヘルムを脱ぎ調理室にあった食材を次々と口の中に放り込んで行った。食材のあまりの美味しさに手が止まらない。

「すっごく上手いなこれ、流石に良いもん食べてるな～あっ女王エビだ！」

食材として置いてあった女王エビに手を出そうとして女王エビの方にふと顔を向けると調理室に人影らしき物が目線内に入った気がしたのでその場所に振り返ると場内を徘徊していた兵士の一人がジュノの姿を「なんだコイツは?」と言った感じで見ていた。

「・・・・・」

「あっ・・・・」

「て・・・・・て」

兵士が何かを言い終える前にジュノは足音も無く、すっと敵兵に近づき敵兵の顎を鋭く揺すり、脳を震わせ敵兵は白目をむきながら意識を失いジュノの方へと倒れて来た。

「これで意識を失うって事はこいつは普通の人間って事か、悪い夢でも見たって事で勘弁してくれ。」

ジュノはそう言い兵士を床へ寝かせると能力を発現させ背中に紋様を浮かび上がらせ場内中空を飛んで行った。

82節　囲（かこい）（後書き）

一年ぶりなので体が覚えてるか心配ですがまぁ大丈夫でしょう！怪我しないよう気をつけて滑ってきまーす。
後今年もこんな風に土日月と更新してきますのでよろしくお願いします。

83節　女王蜂（前書き）

ここ数年友人からは年越しメールとかは着ていたのですが、今年久しぶりに友人から手書きの年賀状が届きました。とはいってもインクジェットの年賀はがきですがやっぱり嬉しいですね電子メールで来るあけおめメールよりも手に取る事が出来るはがきで来る方が。

83節　女王蜂

パルティータ城　地下施設

城の地下遺跡内ではジュノを除き残りのメンバーがその場に待機していた、ジュノの言い残した言葉通りジュノが城内で騒ぎを起こし始めたらこの場を出て城内の武器庫へと向かう為に。

「しかし、ジュノ殿は城内で暴れて大きな音がしたらそれが合図だと言っていたが、どれほど暴れるのだろうか・・・・」

残された騎士団達に囲まれていた国王がぽつりとつぶやくと副騎士団長の顔つきが少し歪んだ。

「どうかなさいました？」

副団長の顔つきの変化を気付き心配したナターシャが声をかけて来た。

「い・・・いえ、なんでもありません。お気遣い感謝します、ナターシャ殿。」

苦笑いを見せながら副団長はナターシャに言葉を返された、ナターシャはその事に疑念を抱いたが王都ヴェルドにくる前に前回ジュノと共に来ていたブロードに王都ヴェルドに居た時のジュノの行動を聞いていたので副団長の苦笑いの意味を汲み取る事が出来た。

「（そう言えば前回来た時アイツ騎士団の人達と演習場をボロボロにしたんだっけ・・・・流石に城をボロボロにするほど暴れまわっ

たりしないわよ・・・・多分・・・・）」

パルティータ城　庭園部

ジュノは城内で出会った城の警備する兵をあらかた気絶状態にさせ庭園の方まで来ていた。出会った兵士達は皆全員城の専属の警備兵達でパン屋の亭主が言っていた騎士団とは違う存在の連中達とはいまだに出会えずにいた。

「おかしいな・・・・こんだけ探しても一人も見つからないなんて不思議だよなぁ・・・・・」

ジュノはそう呟きながら城の庭園内を飛び回っていた、すると庭園の端の方に前に城に来た時には無かった建物がある事に気づきジュノはその建物に近づいて行った。

「なんだこりゃ・・・・」

ジュノは能力を解除し中空から地上へと降り立つと建物のドアノブに手をかけドノブをひねり中へと入って行った。

パルティータ城　???

夜のせいもあって建物の中に入ると目の前は何も見えず暗闇に染まっていた。

「真っ暗だな・・・・灯り・・・・灯りっと・・・・あぁ自分が灯り代わりになればいいのか。」

ジュノは能力を発現しシルバーソルの籠手の上から焼け焦げない程度に蒼い炎を纏わせ辺りを照らすと目の前に大きな檻が現れ、檻の中にはリオレウス亜種が寝ていた。

「第三王女のペット達か・・・・」

ジュノはてっきりこの建物はパン屋の亭主が言っていた王城の見張りをしていた騎士団とは違う者達の手がかりになる場所だと思って意気揚々と入って行ったのにも関わらず、建物の中に居たのは檻の中で寝ているリオレウス亜種、拍子抜けとはこの事である。ジュノは溜息をつき部屋から出ようとすると檻の中に居たリオレウス亜種が膨れ上がり中から数十もの人らしき者がリオレウス亜種の甲殻を突き破り、檻を破壊し手に持った剣をジュノに向け突き刺してきた。その剣はリオレウス希少種の堅牢な甲殻で出来た防具を突き破りジュノはまた昨日の食事会と同じように串刺しにされてしまった。突き破った防具の剣から滴り落ちる赤い滴、その滴は徐々にジュノの足元に赤い小さな池を作り始めた。ジュノが刺され動かなくなってしばらく経つとジュノの周りに居る者達とは別に二人の人物が串刺しにされたジュノの元へと歩いて来た。一人は極長の大剣を背負ったハンターらしき男ともう一人はその男とは不釣り合いの貴族の服を装った少女であった。

「ヒャハハハ!!!見ろよ!!古代に名を馳せた古代兵器様がこのざまだ!!!」

「所詮は骨董品、私達レギオンには敵わないと言う事でございますね、ゴート様」

「ギャハハ!!!その骨董品の似非物のお前がそんな事を言うとはなぁ、だが貴様何故昨日の晩にこいつを捕えず街に捨てたんだ?」

「ＰＣＤ作用を起こさせる細工をした剣で今日と同様突き刺し、出血量からして機能を完全停止したものと判断いたしましたので。」

「ふ～ん、でも今日この場所にまた現れたのはなんでだろうなぁ～？」

ゴートと呼ばれた男はそう言うと肩に背負っていた大剣を一瞬で抜き隣に居た少女の首に刃を突き立てた。

「お前、こいつを甘く見てたんじゃねえか？」

「はい、このような結果になった以上、少々この者を甘く見ていました。しかしメゼポルタへ向けての有効なカードとなりうるあの女の存在がこの者にも効果あると判断し」

「あーうるさい、そう言う説明口調はあの糞女一人で十分だ。それに剣を向けても顔色一つ変えやしなくてつまんねぇしよぉ。」

「じゃあ俺が楽しませてやろうか？」

ゴートと少女が会話をしていると串刺しにされた男が口を開き辺りは凄まじい熱さと共に蒼白い光に包まれた。

パルティータ城　演習場付近

地下に響き渡るほどの轟音が地上から聞こえ国王と騎士団達は先程ジュノの言っていた合図だと判断しジュノとは違う地下施設の入口から出て演習場付近に在るとされる武器庫へと向かっていた。

「庭園のソフィーが飼ってるペット専用の建物が燃えている・・・・」

第一王女が指さした方を見るとその場所は蒼い火柱が上がっていた、その光景を茫然と見ている王族と騎士団の面々にナターシャは手を叩き早く皆に武器庫に向かう様に諭す。いくらジュノが一人で城中の衛兵を倒したとしたとしても残存している衛兵がもしかしたら存在する可能性がある。ナターシャはその事を頭に置きながら周りの者と共に武器庫へと向かって行った。

パルティータ城　庭園付近

もともと建物があった場所はジュノの能力によって建物は爆散し空からは建物の一部が燃えながら地上へと落ちて来ていた。ジュノの体を突き刺していた者達は爆心地の近くであった為跡形も無く吹き飛びジュノの体に刺さっていた剣だけがジュノの体に残っている形となった。ゴートと呼ばれた男の隣に居た少女はあの短時間の中ジュノとの間に距離を取り難を逃れていた。少女は何が起こっているのか分析しようと頭を中を回転させていた。

「（何故・・・何故、機能停止しない、あいつはアンサラーのはず。）」

ジュノは体中の防具に突き刺さった剣を乱暴に引き抜きながら少女の居る方に近づいて行った。

「全く昨日に続き大したもてなし方だぜ。おかげで借りて来た防具がボロボロの焦げ焦げになっちまったじゃねえか・・・もって来

た武器もさっきのでどっか行っちまったし。」

少女と男の目の前まで近づいてきたジュノに少女は大声で食って掛かって来た。

「お前っ！！！何故壊れない！！」

「俺は特別製なんだよ、ソフィー王女のラスタちゃん♪おっと、ラスタじゃなくてレギオンって言うのか？」

ジュノはソフィー王女のラスタに話しかけていると後方から極長の大剣をジュノに振るうゴートの姿があった、ゴートの掛け声と共に極長の大剣が横に振るわれ風を切る音が周囲に響く、しかしゴートは何かを切った感覚はせず振るわれた大剣を再び手元に戻し構えると大剣の剣先にジュノが張り付いてゴートの顔を除いていた。

「おっ、やっぱり城を出入りしていた大剣を背負ったハンターは笑い声のうるさいあんちゃんだったか！いいねぇ！！お前には聞きたい事が沢山ある！！」

「チッ！！糞野郎がぁ！！レギオン！！！」

ゴートがレギオンと呼ばれた第三王女のラスタに呼び掛けると第三王女のラスタは手を空にかざすと先程ジュノを刺した刺客達と同じ格好をした刺客が現れ、第三王女の元へ現れたその数はぱっと見１０人以下、第三王女がジュノを指さすと現れた者達はジュノに切りかかって来たがジュノは体を傾けジュノは最初に斬りかかって来た二人の持っていた剣に手を掛けると相手の体を突き飛ばした。

「ハッハー！！イカれた食事会の始まりだぜ！！！ほら来いよ！！

全員まとめて料理してやるよ！！」

ジュノの声に反応したのか第三王女の近くに居た者もジュノに吹き飛ばされた相手も体を揺らしながらジュノに向かってきた。迫りくる刺客達の右手には光るものがあった。赤黒い刀身の片手剣、恐らくＰＣＤを起こす作用が施されている物だ。最初に向かってきた相手は俊敏な速さでジュノに向けて片手剣を振るう。さてどうしたものかとジュノは自身に問いかけ、アイテムポーチ内にあった回復薬を相手に向けて投げる。相手は何事かと一瞬ではあるが、ジュノではなく目の前に投げつけられている物に目をやった。ジュノはそれを見逃さず相手の右側に回り込み相手を蹴りつけ、次に切って掛かろうとしていた相手にぶつけると二人同時に手に持っていた剣を横に振るい二人の胴体は分断され、地面には二人の持っていた武器が散らばった。残りの者達は後ろからはジュノ目掛けて飛びかかって来ているジュノはすかさず後ろに向けて両手に持っていた片手剣を相手に向け投げる、投げた片手剣は一つは飛びかかって来ている相手の一人を突き抜けたがもう片方は後方でジュノに向かって来ていた相手の眉間に深々と突き刺さりその場に倒れた。残りのジュノに飛びかかって来た者はジュノに切りつけるがジュノは体を反転させ飛びかかって来ている相手の一太刀を体を少しずらしよけて行き、次の動作に移ろうとしている者達3人の背後に回り、散らばっていた片手剣を手に取り真横に回転しながら飛びかかって来た相手の首元を手に持っていた片手剣で刎ねた。

「ハッハ！！まだポポノタンを切った位しかしてないぜ！！もっと仲間を呼んだらどうだ？ソフィー王女のレギオンちゃん？」

「クッ・・・！！」

「レギオン一端退くぞ！！」

「承知。」

ゴートの掛け声と共に第三王女のラスタは残りの刺客を連れてパルティータ城へと退いて行った。ジュノの周りにはジュノの攻撃によって動かぬ者となった刺客達が散らばっている、刺客達は全員マスクで顔を覆っていて素顔がわからない状態であった。アンサラーのジュノの動きに順応こそはしていなかったがジュノを襲ってきた刺客達全員は統率のとれた動きをし人間離れした動きをしていた点からこの者達は人ではなくヨハネス側で作り出したラスタに間違いなかった。

「はぁ・・・防具もボロボロの焦げ焦げ、おまけに師匠の双剣も無くしちまうし散々だ。」

ジュノはボロボロになった防具に眼をやりながらある事を思い出した、城に出発する前にルシャナに言われたあの言葉を。

【もしぼろぼろになったらお前がロックラック地方に行って銀レウス装備作ってくれれば良いだけの話だ】

「こりゃロックラック地方に向けて出張決定だな・・・後」

【それもぶっ壊したら弁償な！】

「師匠の双剣も弁償か・・・最悪だな・・・装備の事はさておき

逃げてったあいつらを追わないと。」

ジュノは先程倒した刺客達の剣を二つ奪い取ると能力を発現しゴートとソフィーレギオンが逃げて行った城内部へと飛び立っていった。

パルティータ城　王座の間

王座の間では先程ジュノから逃げて来たソフィーレギオンとゴートの姿があった。

「ゴート様、何故あの時退いたのですか?」

「てめぇが考えもせずに俺のラスタをポンポン呼び出すからだ。見ろ!!俺のラスタはもう一体しかいねぇ。」

「私が出れば戦況は変わっていたかも」

「黙れ!!道具は道具らしく俺の命令に従ってればいいんだよ!!俺に考えがある、地下の施設に閉じ込めてるあいつを連れてこい!!レギオン!!」

「御意に」

ゴートに命令されたソフィーレギオンは王座の間を出て行き王座の間にはゴート一人が残った、ゴートは一息つくと王座に深く腰を掛け不敵な笑みを零していた。

83節　女王蜂（後書き）

どっかで若者のスキースノボー離れが深刻だとか耳にしましたけど前回スノボーに行った時普通にスキー場に若者が溢れてて家族連れも沢山いました。これがいわゆるステマってやつなんですかね？

８４節　天秤（前書き）

ごめんなさい、この話は１月８日の０時に予約投下してたんですけど月を間違えて２月８日の０時になってました。

８４節　天秤

パルティータ城　武器庫

ナターシャ達王族一向は敵と遭遇することなく演習場から武器庫に到着する事が出来た。武器庫には騎士団専用の甲冑（かっちゅう）や武器、対モンスター用の拘束用バリスタや大砲等も武器庫内に置かれており、騎士たちは各々の武器や甲冑を装備し始めた。

「（私の装備は・・・・）」

ナターシャも王都ヴェルドに持ってきた自身の狩猟武器を探すべく武器庫内を騎士団と共に探すと、武器庫の隅にメゼポルタから運び込まれたジュノとナターシャの装備が入った木箱が二つ並べて置いてあった。ナターシャは木箱の中身を開け持ってきた装備が全て入っている事を確認するとすぐさま装備を着る為武器や甲冑の装備の終えた騎士団の面々に人の壁になって貰い着替えを始めた。

パルティータ城　王座の間

王座の間に逃げて行ったゴートとソフィーレギオンを追って来たジュノは王座の間に入るとそこには王座に腰かけてこちらを見てにやにやしているゴートとそのゴートを挟むように姿　格好　も全く一緒のソフィー王女が二人並んで立っていた。二人に一人は先程ジュノの前に居たソフィーレギオンである事は確かだが現在は本物のソフィー王女と同じようにすっかりおびえている表情を見せていてどちらが本物か判断がつかない状況だった。

「アヒャヒャヒャ！！！やっと来たかぁ～骨董品！！！」

「ここがパーティ会場かい？」

「パーティ？ギャハハ！！！確かにパーティだなぁ～これから始まるのは簡単なゲームパーティだからなぁ！！」

ゴートはそう言うと両脇に居た第三王女をジュノの方へと押しやった。ジュノの前には二人の第三王女が転がりこみジュノの方を見た二人ともこれから何が起こるかわからないと言った表情で眼が少し潤んでいた。二人の王女を見ているとゴートがジュノの足元に何かを投げて来た、単発用の拳銃だ。

「今からやるゲームの内容を説明してやるよぉ！！」

「説明？どうせこの単発式の拳銃で偽物だと思う王女を撃てって言うんだろ？何とも小説でよくある展開だね～もっと頭を使ったらどうだ？」

「うるせぇ！！道具の分際で口答えすんじゃねえ！！」

「はぁ、参ったな、この手のゲームはあんまり好きじゃない。」

「ギャハハ！！！てめぇみてえな骨董品の選択で第三王女の運命は終わるんだ。傑作だと思わねえか？」

「へっ・・・・酷い奴だねぇ。」

ジュノはそう言うと足元に転がっている銃を手に持つと銃の動作の確認を行った、どうやら撃ったら暴発するような仕掛けは無いよう

だ。

「ヒャヒャヒャ！！！じっくり考えるだなぁ人間の似非物（えせもの）お！！！」

銃を持ったジュノの正面に二人の少女、まだ少し幼さが抜けない顔は銃を持ったジュノを見て強張り並んだ二人のソフィー王女の体は恐怖に震えている。この状況でこんな事を思うのはおかしなことだがソフィー王女の見ているとルシャナの元に居るテクラはソフィー王女と同い年位なのではないかとジュノは思った。

「わ・・・私こそが現国王ゼバスティアン　ルネサンスと王妃アンナ　ルネサンスとの間に生まれた第三王位継承者ソフィー　ルネサンスです。に・・・2年ほど前にジ・・・ジュノ様から聞かせてもらった大切なお話は忘れもしません。」

そうジュノの左に居たソフィー王女はジュノの顔を真剣に捉え私こそが本物だと訴えて来る、それに負けじと右に居るソフィー王女もジュノに対し自分こそが本物だと信じてもらえるよう話しかけて来る。

「二年前のあの時・・・わ・・・私はジュノ様に言われた言葉通り私は民思いの優しい王女になるよう努力してまいりました。」

「二年前ねぇ・・・ここ数年色々ありすぎてあんまり覚えてないんだよねぇ。」

「ギャハハハ！！！流石骨董品！！！二年も前の事もすっかり覚えてないってよ！！！」

ゴートはジュノの受け答えのどこがおかしいのか腹を抱えて笑って

いる。

「おら!!お前らもっとそこに居る骨董品に懇願しろよ!!「私こそが第三王女ソフィーです!!信じてください!!!」ってなぁ!!!ヒャヒャヒャ!!!」

ゴートの言葉を聞いた二人は我こそが本物と言わんばかり必死になってジュノに訴えて来る、ジュノはソフィー王女に関しての記憶が眠る山を、ピッケルで必死に削り、中から重要な情報を掘り出している。掘り出すにつれてソフィー王女とは関係の無い記憶がジュノの頭の中を廻る。

「（遥か古代に実際起きた魔女狩りって奴の時と同じ判断方法を取って見るか・・・・いや駄目だ、ゴートに焚きつけられたこんな状況じゃ二人とも私がソフィーだと言うに決まってる。）」

「（姿、形、声色も一緒だしどうした物か何か彼女だと特定できる物は・・・・・）」

「二年前・・・俺が消える前、ソフィー王女に頼まれた依頼は何だ？」

「「リオレイアの捕獲」」

二人は寸分狂わず同時にジュノの問いかけに答えた、そう二年前のあの時ジュノはソフィー王女にリオレイアをペットにする為の捕獲を依頼した。

「じゃあそのレイア捕獲時の時何が起きた？」

「「黒いリオレイアが現れた。」」

またも二人の王女は二年前起きた事実を的確にジュノに説明した、確かに捕獲寸前までいったリオレイアの所へ行った途端、黒いリオレイアが現れ通常種のリオレイアを焼き払った。二人の王女はまた私こそがソフィー王女だと証明する為に昔ジュノと取ったやり取りを的確に説明してくる。右と左から少女達が必死にジュノに懇願（こんがん）する姿をゴートは遠巻きで見て笑い転げていた。

「ほら！どうした骨董品？早く選べよ？それとも引き金を引く指が錆び付いちまって動かねえのか？それともオンボロの頭が回らなくて困ってるのか？ギャハハハ！！！！」

ジュノを更に迷い戸惑う姿がみたいのかゴートはジュノを煽（あお）る、ジュノの頭の中にある二人の王女が乗った天秤が激しく上下しジュノはさらに困惑する。

「（何か・・・何か無いのか・・・・二人とも口調まで一緒なんてもうわかんねぇよ・・・・ん・・・・口調・・・・）」

二人の王女は必死にジュノに自分が本物だと訴えかけてくる、ジュノを説得しようと二人の額には汗が浮かぶ。そんな二人を見てジュノはぶっきらぼうに振舞い始めた。

「ア〝ーうるさい！豆王女！！！ったく背と顔つきだけ成長しただけで二年前とまるで変わってないじゃないか！！！この豆粒王女！！！」

「豆粒王女じゃないわ！！わらわの名はソフィーじゃ！！！あっ・・・・」

ジュノの右側に居た王女がジュノの問いかけに瞬時に答えた、二年前の最後にあった時と同じ口調で。左の王女はジュノの右のソフィー王女の受け答えに驚き何も言えずにジュノの方を見ている、ゴートも同じように右のソフィー王女の口調の変化に驚き言葉が出ないでいる。

「ハッハー！！！決まりだ！！！」

ジュノは右側に居たソフィー王女の手を取り自分の方へと抱き寄せると左側に間の向けた顔をしているソフィー王女の眉間目掛け鉛玉を打ち込んだ。左側に居た鉛玉を打ち込まれたソフィー王女は撃たれた衝撃で後ろへと倒れ込んだ。

「姿、形、顔つき、仕草、口調までも完全に複製できても記憶は完全には複製できなかったみたいだな！！ゴート！！」

「クッ！！レギオン！！！」

ゴートが撃たれたソフィーレギオンに声を掛けるとソフィーレギオンは起き上がりジュノに撃たれた眉間から肉腫が溢れだし始めた。そのおぞましい光景を見せまいとジュノは抱き寄せたソフィー王女を抱き上げ王座の間に壁に付いているステンドグラスに向かって走り王女を庇いながらステンドグラスへと頭から飛び込み外へと飛び出した、ジュノとソフィーは王座の間が有る最上階から下まで頭から真っ逆さまに落下している。

「バカ者！！！窓から落ちる奴がおるか！！！」

「ハッハー！！元の口調に戻ったな！！！豆！！！」

「豆じゃない！！ソフィーじゃ！！！嫌じゃー！！せっかく助かったのにー！！！キャーーッ！！！！」

ソフィーは落ちる恐怖から顔を手で覆いジュノの胸元で絶叫している、ジュノはすぐさま能力を発現させ背中に蒼い紋様を浮かばせ城の壁を蹴りパルティータ城を抜けソフィーを安全な場所に避難させるべくある所へと向かった、この街で最も信頼でき安心して彼女を預ける事のできる人の元へ。

ルシャナ邸　扉前

ジュノはルシャナの家の扉前へと軟着陸すると突如扉が開き中からルシャナが出て来た。

「なんだい、今更忘れ物かい？・・・・あっ！！旦那の防具が！！！それに私の双剣どうしたんだい！？」

「弁明は後でじっくりします！！師匠今はソフィー王女の事を頼みます！！」

ジュノはそう言うと腕に抱いているソフィー王女を地面へと下ろしルシャナの元へと追いやった。

「ジュノ、さっきのわしの偽物がなにかに・・・・それにお主・・・・」

「全部終わったら話してやる、だから今はここで待ってろ。」

そう言うとジュノは再び能力を発現させ背中に紋様を浮かび上がら

せパルティータ城へと向かっていった。

「はぁ、勝手に頼みこんで勝手に行っちまった・・・・昔は良い子だったのにどうしてああなっちまったんだが、まぁ弟子の頼みだ聞いてやるけどさ。」

「あの・・・ルシャナさん、ジュノは一体・・・・」

「ソフィー王女様、申し訳ありませんが私の口からはジュノに関しては何も言いません。彼がさっき言った通りに直接彼からお聞きください。」

「・・・・」

「さぁ、いつまでも外に居ては体が冷えてしまいます、どうぞ中へ。」

ルシャナ邸　ユーノの部屋

真夜中にも関わらずテクラは窓越しに外を眺めていた、貧民区での生活が長いせいかこうした安全な場所に居るにも関わらず彼女はまともに寝る事が出来なくなっている体へとなっている、特に夜の時間帯は安心して寝る事は出来なくなってしまった。貧民区の者にとって夜とは明日生きる為の糧を探す時間にも当たり、テクラの様な顔立ちの整った子達は寝たら最後男共の色欲（しきよく）の捌（は）け口にされる。テクラ自身実際に、貧民区の男共に食い物にされている女性を目の前で見た事があるのでなおさら夜は寝ずに自己防衛しつつ明日の糧を探す時間となっていた。

【運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ】

「・・・・・」

あの男の言葉がテクラの頭の中を廻る、人間でもモンスターでもどちらでもない者の言った言葉が。

「（運命の分岐点・・・・）」

テクラは昨日まではみすぼらしい格好をし帽子で長く伸びた髪を結って隠し、人の注目を浴びないよう顔に泥を被り続けていた。しかし今窓越しに映っている自分は街中で見て一度はあこがれた綺麗な衣服を着て、結った髪は綺麗に櫛（くし）でとかされ腰元まで伸び透き通るような白い肌と真珠の如く白い髪を除けば普通の女の子としてここにいる。

【テクラ！お前今日から家の子な！】

全くの赤の他人であるルシャナと言う女が言ったあの言葉、あの男が言った通り信頼しても良いのだろうか、只の人ではない事を知りながらアイツの面倒を見たと言うあの女を本当に信用していいのか。そんな自問自答を繰り返していると家の扉辺りに蒼く光るものが降り立ったテクラはアイツが帰って来たと思うと窓を開け外を見ようとしたが、再びその蒼い光は空へと飛び立ってしまった。

「また行っちゃった・・・・」

テクラはポツリとその場で呟くと今度はテクラの居る部屋に何者かが近づく足音が聞こえて来た、次第とその足音はテクラの居る部屋へと近づき、次第に足音共に声も聞こえてくる。一人はルシャナと言った女の声、そしてもう一人は少女の声だろうか、テクラは手に持っていた首飾りを握りしめ部屋の隅へと身を移動させたと同時に扉が開かれ、部屋の中にルシャナととても高貴な装いを身に纏った少女が部屋の中へと入って来た。

「なんだい、まだ寝て無かったのかいテクラ？まぁ丁度いいか、ジュノが帰って来るまでソフィー王女様の相手頼んだよ。」

「ルシャナさん、この子は一体誰ですか？」

「昨日から私の娘になった女の子です、名はテクラと言います。人見知りでとんだ粗相を起こすかも知れませんが仲良くしてあげてください、王女様。」

「えッ？娘？ルシャナさん、貴女には」

「じゃあテクラ後は頼んだ！」

ソフィーが何かを言い終わる前にルシャナはそう言うと部屋から出て行き部屋にはテクラとソフィー王女が残された。見つめあう二人、隅には貧民区で不自由な暮らしを送って来たテクラ、そしてドアの付近にはこの都の王族で今まで何の不自由もなく暮らしてきたソフィー、今この部屋では普段相見える事の無い身分の二人が同じ部屋にいた。

【運命が決まるのは自身の決断の瞬間だ】

テクラの頭の中にあの男の言葉がよぎる、テクラは勇気を持ってこの国の最高位の身分であるソフィーに声を掛けた。

「こ・・・こんばんは」

「ご・・・ごきげんよう」

彼女にとってこの挨拶は何かが大きく動き始めた瞬間であった。

８４節　天秤（後書き）

月曜の投下分になってしまったので次は金土日と投下出来るよう頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1311w/

蒼炎の狩人

2012年1月9日01時51分発行